Daniel Crosby Greene

Theological magazine

NOS. 80 – 87, ~~December~~ January,

1902, to August, 1903

Keiseisha, Tokyo

1903

Ethics and Law

The certainty of Christian Faith

The Sinlessness of Jesus

The Deep Note in Human Life

Religion and Science

The Teaching of Christ

Christianity and Judaism

Can Righteousness be imputed

福音叢誌第八拾號目次

FUKUIN SŌSHI.

NUMBER ~~79.~~ 80

January ~~DECEMBER,~~ 1902.

CONTENTS.

福音叢誌第八拾號　明治三十六年一月十日

論説

倫理と法律

（一）

教授　ジョージ、ハーバート、パーマー

前回に論じたる所に由れば、ペルソン即ち品行を有し得べき存在物とは、その行動が過去の事實に由らず將來の理想に由つて指導さるゝものをいふ。而して此の理想や常に、價値上他の行路に勝るべき一の行路を描きつゝあるなり。吾人は又た、ペルソンの行動を指導する原因は、その量にあらずその質にありと言ひ得べし。故に品行上の法則は、人が法則を無視し得ることや、又た彼が高價のものゝ代りに低價のものを撰取し得ることを預想す。實に彼は全く價値問題を度外視し、諸種の勢力をして物質を左右する如くに自己を左右せしむることあるなり。斯く觀じ來れば、ペルソンは法律殊に刑法に由つて取扱はるべきものと見ゆるならん。されば法律上のペルソン觀と倫理上のペルソン觀との異同を研究するは、品行の何物なるやを知るに一條の光明を與ふべし。是れ本回

に於て此の問題を講ずる所以なりとす。

倫理が物理學哲學歴史等に對するよりも、法律に對して一層親密なる關係を有するは、明白なる事實なり。研究の方法に於ても目的物に於ても將たその事柄に於ても、兩者は全く相一致す。先づ方法に於て同一なり。法律は倫理と同じく記述的科學に非ず、故に單に過去の事實を研究するを以て足れりとせず。法典なるものは、一定の標準を揭げて以て社會民人の服從を促がすものなり。その法則や命令的にして、倫理のそれと同じく威嚴ある動詞『あらねばならぬ』を用ゆ。曰く、汝は此の事をなさゞるべからず、而して汝が過去に於て之をなせしや否やは問ふ所に非ずと。故にそが關する所は、過去若くは現在に非ずして將來にあり。法律も倫理も共に理想を眼中に置き、且つ之に實現を與へんことを力む。斯くの如く、その方法や規範的なり命令的なり。

之に加ふるに、その目的物に於ても兩者同一なり。その命令の加はる所は、ペルソン――即ち品行の善き方と惡しき方とを認識し、且つ善き方の理想を實現し得べしと見做さるゝ自由動物――にあるなり。法典なるものは、ペルソンに對する理想の提綱に外ならず。又た取扱ふべき事柄に於ても、兩者殆んど區別あるなし。放火殺人背約等は、倫理も之に關係し法律も又之に關係す。斯くて

法律の取扱ふ所は倫理の取扱ふ所、倫理の取扱ふ所は法律の取扱ふ所たるなり。

（二）

故に古來の倫理研究者にして、倫理と法律とを殆んど同一視するものなきに非ず。倫理學が始めて英國に起りし時、二者の同一はホッブスに由つて道破せられぬ。彼の言に由れば、凡ての政治は、その法律的なると道徳的なるとを問はず、皆な君主の權力中にありて、君主の善と見做す所は即ち善、彼の惡と見做す所は即ち惡なるなり。此の説や世人が思惟する程しかく不道理なるものに非ず。たとひ吾人はホッブスの如く君主を以て完全なる立法者なりとは思はざれども、吾人が終極の權威を立法部に與へ、且つそが正邪の差別を確定し得べしとなす間は、形式に於てこそ多少の差あれ、畢竟彼の説を實行し居るものなり。彼は唯だ極端に馳せたるのみ。彼の君主は吾人の立法部と等しく、昨日の正を今日の邪となし得るなり。ホッブスは曰く、何事もそれ自身に善若くは惡なるはなく、法律を離れては道徳の存するなしと。余は英國の學者にして、他に彼の如く兩者の同一を主張したる者を知らずと雖も、十九世紀の初に方りて著名なりしベンザムは、おのが大著を名けて『道徳及び法律』といへり。彼に取りては『道徳即ち法律』といふ方、寧ろ適當なりしならん。如何となれば、彼は

時としては、倫理と法律と二者その見地を異にする如く說くこともあれど、更にその區別を重要視したることなし。彼の眼中にありしものは、畢竟道德の法律的方面なりしなり。

されば、吾人が倫理と法律の區別を判然たらしめんと欲するは、容易の業に非ず。而かも余は信ず、兩者が必らず區別され得べき事を。否な、之を區別するは、實に吾人の研究問題を了解するに甚だ肝要の事たるなり。兩者が取扱ふべき事柄は固より同一なりと雖も、此同一の事柄を、法律家は法律の見地より之を見、倫理學者は倫理の見地より之を見る。而して後者が取るべき見地の何なるやは、余が今回發見せんと欲する要點に屬す。且つ之をなすに方りて、余は法律そのものゝ性質を研究せざるべし。如何となれば、そは不必要なるのみならず、又た余に取つて不適當の事なればなり。余は唯だ法律が倫理の研究に幾何の光明を與ふるかを見んと欲するのみ。しかのみならず、倫理が民法に於ける關係は、そが刑法に於ける關係に比して緣遠く且つ込入り居るが故に、余は重に後者にのみ論及することゝし、且つ便利の爲に、法律に背くを犯罪といひ、宗敎に背くを不虔といひ、道德に背くを不義といはんと欲す。

先づ第一に、その理論は姑く之を置き、或る種類の品行が法律の範圍に落ち、他の種類の品行が道德の眼界に入ることあるは、明白なる事實なり。不道德の行爲必しも不法に非ず。不法の行爲必しも不道德に非ず。請ふ、吾人をして先づ前者の塲合を確めしめよ。

如何なる不道德が、最も多く個人の發達を止め社會の公益を害するやと問はば、人或はそは怠惰なりと答ふることならん。道德は吾人が出來るだけ活動せんことを要求す。然るに怠惰は此の活動を妨止するものなり。されば又た怠惰は萬惡の根本なりと言び得べし。品格が急速に潰敗し行く點に於て、怠惰なる人と積極的に不義を好む人と少しも異なる所なし。故に吾人は、若し怠惰にしてしかく道德を侵害するものならば、法典の第一頁は先づ怠惰を禁ずる條項を以て滿さる筈なりと思ふべし。然れども、吾人は法典の隅より隅まで探求すればとて、怠惰を禁ずる條項には見當らざるなり。余は固より單に怠惰そのものに就て言ふのみ、之より流出する諸種の結果に就て言ふに非ず。人若し怠惰の爲にその隣人を害さば法律は無論彼を罰すべし。然れども、その罰せらるゝ所以は、社會の損害にありて心中の不義にあらず。人如何に怠惰なるも、若し他人を害することなくば、法律は彼がなす儘に放任し置くなり。

人或は謂はん、怠惰の罪や漠然なるが故に法律は之を看過するなりと。さらば吾人をして數層明白なる罪――虚言の罪――を一考せしめよ。吾人は虚言者を賤しむ。如何となれば、社會の成立は信用を本とす、然るに虚言者は非社會的動物なればなり。彼は人と人との橋梁を破壞し、又たおのが行爲に由つておのが身を狹くす。虚言は大膽なるが如くに見へて、其實多くは臆病より出づ。虚言者は又た眞理を恐る。宜なるかな、ハーヴード大學の創立者が、學生の警語として『眞實』の語を撰みたること。現代の如き實業時代に於ては、世界歷史の何れの時代にも增して、信實は中心的道德にてあるなり。されば吾人は自然に、現今の法律を以て重く虚言者を處罰する者と豫期するならん。然れども事實上、虚言を罰する法律の存するなし。虚言者若し契約を破りて他人に迷惑を及ぼす時は、被害者は勿論そが損害賠償を請求し得べし。然れども、法律は最も不義なる分子――虚言そのもの――を看過して顧みざるなり。

（四）

以上の二例は、不道德必しも不法に非ざるを示すものなり。然らば不法は常に不道德なるか、是れ第二の問題なり。倫理と法律と屢合致することあると同時に、又た時としては背馳することあるを証せんが爲に、余は爰にその一例を擧

げんと欲す。

今尙ほ余の記憶に歴然たるものあり。余の少年なりし頃、ボストンの裁判所町を通行したるに、多數の群集は裁判所及びその近傍の街路を合圍し、正服を着けたる兵士は頻に彼等を防止し居れり。余は好奇心に驅られて廣き石段の前まで進み行きけるに、法廷の大戸開けて一人の黑人は二列の兵士に護衞されつゝ出で來れり。これなん一たび逃亡して後ち捕獲されたる奴隷アンソニー、バーンスなりき。余の血液は沸騰せり、否なボストン全市民の血液は沸騰せり、我等は異口同音に言へり、是れ法律上正當なる事ならんも、而かも道德上寬假すべき事に非ずと。我等は法律に服從すべきことを承知せり。我等は戰慄せる奴隸を引立て行く執行官を非難せざりき。彼等はおのが義務を實行しつゝありしなり。彼等とても斯かる義務を實行するを好まざりしならん。故に我等の非難せしものは法律なり惡しき法律なり。法律には服從せざるべからず、而かもその存在や道德に反す。必しも一致せざる道德と法律とは、爰に公然たる衝突を示せるなり。

兩者が斯くも衝突するは稀有の事なるべし。法律を制定する社會そのものが甚しく墮落するに非ずんば、法律に入るものは大抵不道德なるものに非ず。正し

き社會は不道德なる法律を排斥す。而かもこは常に容易の業に非ず。吾人は皆な余が前に擧げたる事件の如何にして生ぜしかを知る。合衆國の憲法により、南部諸州に於ける經濟事情によりて、寬假すべからざる不義は全國に行はれ居りしなり。世間斯かる場合少からざれば、吾人は法律の道德的性質を撿覈して之に一層高等なる判決を下すの必要あるなり。然れども、普通法律に入るものには、法律先づ之を命ずるによりて、始めて道德的義務となるもの多し。吾人の荷物税關を通過する時、吾人は納税するの義務を有す。然れども、如何に吾人の心碑に刻さるゝ道德的法典を調べたりとて、吾人は斯かる義務を發見する能はざるべし。之を發見せんが爲には、吾人は是非共國家的法典に行かざるべからず。國家にして之を要求せざる限は、斯の税を納めざるも決して不道德には非ず。而かも既に國家の法律となりし後ち之を怠るものあらば、是れ取も直さず不義の人たるなり。法律の大半は凡そ此の種類に屬す。

想ふに如上の考察は、倫理と法律との範圍が同一に非ざるを證するに十分ならん。然れども、何故に異なるか、何れの邊に於て異なるか、又た一方の幾何が他方の範圍外に出づるものなるか、之を示すには尙數層の研究を要するなり。

（五）

然れども、余は是等の困難なる問題に對して余の意見を述ぶるに方り、先づ兩者を區別する世間普通の方法を擧げて、そが全く正當ならざるを批評すべし。人屡曰く、法律の倫理と異なるは、その命令が常に消極的なるにあり。道德は善を勸め、法律は惡を禁ず。後者の特色ともいふべきは『……なす勿れ』にあり。故に吾人は、犯罪する迄は法律の存在に氣付かざるべし。警官の注目する所は、罪人にありて聖者にあらず。犯罪者は多く法官と關係あれども、その他の人民は更に彼等と關係あることなし。短言すれば、法律は勸善の分子を含まず、唯だ懲惡の方面を有するのみと。

然れども、余は此の言を眞實なりと思はざるなり。法律必しも常に消極的なるに非ず。又た倫理必しも常に積極的なるに非ず。孰れにも積極的分子はあるなり。民法に於て、契約を結ぶに必須なる條件は、精密なる積極的文字を以て明示せらる。曰く、契約者は心狀健全の人たるべし、證書の署名は自署なるべしと。是れ實に積極的命令なり。市役所の布令すらも、積極的なるは屡なり。曰く、街頭を清潔にすべしと。人或は曰はん、斯かる命令はその實消極的にして、街頭を不潔にすべからずといふに同じと。然り、論者の言の如し。而かも同一の事が積極消極兩樣に言はれ得る事實は、豈に意味ある事に非ずや。其實吾人

の言語にして、全く積極的なるはなく、又た全く消極的なるはなし。積極的法律にも何事か禁ずる所あり、消極的法律にも何事か勸むる所あるなり。故に余は法律が常に消極的なりとの理由を見出し能はざるなり。是れ實に不可能の事に屬す。又た假に然らずとするも、之に由つて倫理と法律とは區別さるゝを得ず。如何となれば、道徳的命令も亦た多く消極的言語に由りて示さるればなり。信實と勤勉とが奬勵さるゝよりは、虛言と怠惰とが禁止さるゝ方、寧ろ屢なり。此の點に於て人々の經驗は相違するならんも、余は信ず、吾人が道徳的動物たるを自覺するは、適當なる行動をなしつゝある時よりも、寧ろ誘惑の時即ち克己を要する時にあるを。吾人が道徳的命令を感ずるは、日々の食事に就く時にあるか、但しは又た不適當なる食物を排する時にあるか。余はその後者にあらんことを思ふ。心理學的に觀察するも、吾人の道徳性は、積極的に顯れず却て消極的に顯るゝものゝ如し。若し誘惑てふものなかりせば、吾人は十分におのが道徳性を感ぜざりしならん。

爰に神が人を造れる方法を辯護するの必要なし。唯だ十中の九迄道徳が禁止的形式を以て顯るゝの事實を示せば足る。それ人間の行動は悉く道徳則に由つてのみ指導さるゝ者に非ず。若し然らずんば、本能性や無意識なる衝動や過去の

習慣等は、凡て無用に歸することとならん。然れども事實上、是等のものは人間生活の重なる主動者たるなり。彼等は吾人を導きて、安全に敏速に且つ少量の勞力を以て、意識的理性が指導すると同樣の歸趣に至る。唯だ本能的指導の誤まる時にのみ、吾人は道德的判斷を用ゆるを要す。正義を離れざる限り本能性に十分の行動を許すものは、最も活動ある人物なり。然れども、そが邪徑を取りつゝあるに非ずやとの嫌疑起る時は、彼は立止まりてその正邪を判斷せざる可からず。故に良心の消極的作用は、積極的作用よりも尙更ら必要なり。且つ積極的活動は之を本能の作用に任せ、而して良心は之を監督し牽制するの任務に當る方、却て健全なることもあるなり。一々道德的義務として三度の食事に就く者は、食慾の指導に從て食するものよりも、善き消化を遂げ能はざるべし。勿論良心が積極的命令を下だす場合なきに非ざれども、斯かる場合は、法律に於けると同じく道德に於ても、屢起るべきものに非ざるなり。

法律と倫理とを區別するに、普通提出さるゝ倘一の方法は、更に多大の興味あるものなり。曰く、法律は外を觀、道德は內を觀る。法律の關する所は結果にして、道德の關する所は動機なり。故に我が目的とする所同胞の爲ならば、不幸にして種々の災害我に由つて起り來るとも、我は法律的に責任あるのみにて、

道德的に責任あることとなし。法律と倫理と。一は內部の生活を取扱ひ、他は外部の生活を取扱ふ點に於て、相互に輔車の關係をなすものなりと。

此の說や頗る明快なりと雖も、余は又た此の方法が事實に適せざるを認むるなり。法律も屢內心に立ち入りて、行爲の動機を探索することあり。余若し人を殺さば、法律は彼が余の手に由りて死せしか否やを調ぶるのみならで、尙ほ一步を進めて余に彼を殺すの意志ありしや否やを問ふ。而して余の力むる所は、余が少しも彼を殺すの意を有せざりしに拘らず、圖らざる出來事の爲に、彼が余の手に由りて死に至りしことを證するにあり。若し余の證言にして聽かれんか、余は殺人罪に處せられざるべし。斯くの如く、法律も殺人罪を定むるに方りて、單に行爲の結果を見るのみならず、又た罪人の心事をも見るなり。

又た他方に於て、道德は結果の如何を問はずといふも誤謬なり。如何となれば、結果に於てのみ行爲の意義は十分に顯はるゝものなればなり。人あり余に害を加へんに、彼が單に『余は少しも君を害するの意なかりしに』といへばとて、そは適當なる辭柄となるを得ず。勿論彼に余を害するの意なかりしならん、而かも彼は到底罪を免かる能はず。彼は自己の行爲が如何なる意義を有するやを、十分に考慮せざりしなり。然るに今やその意義は十分に結果に顯はれたれば、

彼に遁るべき途あるなし。それベルソンの行爲は、外界の事物に變化を來たすを目的とす、而して彼はその對象たるべき事物を豫め知るを要す。道德的動機は、空想世界にその影響を及ぼすものに非ず。故に余は、動機は之を道德廷に持出し、結果は之を法律廷に持出すが如き區別をなす能はず。實在の世界豈にしかく單純に分解され得べけんや。

されば道德が法律と分るゝ所以は、そが命令の積極的なるが爲にも非ず、又たそが內部の動機にのみ關係するが爲にも非ざるなり。斯かる區別の方法は、多少意味なきに非ずと雖も、要するに科學的正確を欠くを免れず。吾人は之に由りて品行に就て一層明白なる了解をなす能はず。余は之より引續きて、非行を觀るに法律と倫理とが見地を異にする四個條を列擧すべし。此の四個條や、相互に密接なる關係を有し、又た複雜の度に於て多少の差を呈す。而して余はその最も複雜にして根本的なるを、最も後に論せんと思ふなり。

（六）

倫理と法律とが相分るゝ第一點は、法律が刑罰を一定し置く事なりとす。刑罰なき所には法律なきなり。或る罪に對する法令を草せよ、その罪の性質と範圍とを明白に定義せよ、立法部をして之を法律となさしめよ。而かも之に罰則の

附するなくば、そは一片の注意たるに止まりて、法廷は別段之に關することなかるべし。故に法律に於ては、雜貨店の物價表に於ける如く、各の罪に對して一定の刑罰を附せざるべからず。犯罪も貨物と同じく一定の値段を有す。掏摸は幾日の拘留を價し、土藏破は幾年の懲役を價し、殺人は尙一層重き刑罰を價す。若し定價の明白に揭げられざる罪あらば、そは矢張貨物と同じく、その性質に差等あるが爲にして、斯かる塲合には、そが最高度と最低度とを一定し置くを要す。

刑法に於て罰則の確定せる、斯の如くそれ組織的なり機械的なり。然れども、倫理律にも亦た刑罰なきに非ず、又たその刑罰も決して比較的輕しとはいふべからず。吾人の中ち誰れか、人知れぬ罪を犯して人知れぬ苦を感ぜざるものやある。吾人は時に、始め一小瑣事と思ひて或る事をなすも、後ち非常にその事の爲に苦められ、之を脫せんと欲して脫する能はず、途にある時も室にある時も、一大罪人の常に我傍に立てるを感じ、若し肉体の苦痛を以て此の苦痛を贖ふを得ば、喜んで前者を甘受せんと思ふ程のことあるなり。されば、刑罰の有無を以て倫理と法律の區別を立つるは、固より正當に非らず。區別の在る所は、一定の刑罰にあるなり、殊に大切なるは、『刑罰』てふ名詞にあらずして、『一定』

てふ形容詞にあるなり。道德界の一大事實は、吾人が一の非行をなすに方り、豫めそが幾何の刑罰を價ひするやを知らぬ事なりとす。始め一瑣事と思はれて、後に大苦痛を來たすことあり、又たその苦痛が何時迄も繼續することあり。非行の性質と刑罰の程度との間に、一定の關係とてはあらざるなり。二個の人が同一の罪に對して、同等なる良心の苛責を經驗するに非ず。同一の人にありてすら、同樣の罪に對する刑罰が、或る時は重く或る時は輕きなり。若し夫れ法律の見地より之を見れば、斯かる刑罰の不定は到底不公平の觀を免れ能はざるべし。

（七）

吾人をして倫理と法律とが相異する第二點に移らしめよ。此の不公平の觀は益甚しきを加へんなり。法官が犯罪者の刑罰を定めんとするや、彼は先づその第一犯なるや否やを調ぶべし。若し初犯ならば刑罰は比較的輕かるべく、若し再犯ならば重きに從て處せらるべし。初犯に輕く再犯に重きは、法律の貴重なる趣意に外ならず。然れども、斯かる現象は道德界に見らるべくもあらず、否な却て之に反對の觀を呈す。罪の爲に最も烈しく苦痛を感ずるものは、最も鋭敏なる道德的性情を具ふる人なり。此の事實や一見奇なるが如しと雖も、一般人

民の既に承認する所にして、別段證據を擧ぐるの必要もなき程なり。唯だ吾人に必要なるは、倫理と法律との間に於ける相異如何を見ることなりとす。余に一友人あり、極端迄誠實の徳を重んじ、彼が交際する社會に稀なる程の正直人なり。然るに昨日彼は、特殊の事情に迫られて、圖らず虚言らしきことを言へり。今彼は之を思出でゝ苦しむこと甚しく、おのが常に惡み居れる不徳に陷りたるを耻づること深し。彼れ若し余の許に來り、倫理學者たるの故を以て余に問ふに、斯かる些細の罪に對しては重に過ぐと思はるゝ程の良心の苛責を免るゝの道あるやを以てせば、余は誠實を以て答へん。曰く、余はその道あるを知る。君行て尚ほ多く虚言せよ。君が虚言を屢する程、君の苦痛は薄らぐべし。且つ君にして愈金箔付の虚言家たるに至らば、君が虚言をなすに平氣なる、恰も是迄君が眞實を語るに平氣なりし如くならんと。何種の罪に於ても、苦痛を感ずるは其初歩にして、之を屢する者は遂に何をも感せざるに至る。是れ世に所謂無耻漢なり。今一の罪を犯せる者あり。判事曰く、六ヶ月の禁錮に處せよ。撿事曰く、これ彼の初犯に非ず。判事曰く、三ヶ月の禁錮にて足れり。撿事曰く、彼が此の罪によりて捕縛さるゝ既に五次に及べり。判事曰く、然らば之に一ヶ月の禁錮を與へよと。若し斯の如き事法廷内に起らば、そは一の滑稽

劇たるを免れず。然れども、是れ道德界に於て吾人が日々見聞する所に非ずや。吾人の上に加はる刑罰は、吾人が正義に近きだけ重く、吾人の不義が增すだけ輕くなるなり。

人若し好んで罪惡の中に一身を投じなば、彼は未來の世に於て刑罰を受くべしとは、普通一般の信仰なり。而して古來良心の苛責てふ事實を以て此の刑罰を解釋するもの少からず。且つ此の良心の苛責を描出するの恐しき、近時の人道主義家をして此の說を受容するに困難を感ぜしめぬ。然れども、余は尙一層恐しき陰府を想像し得るなり。假に陰府には何等の悔恨あるなく、罪人は平氣に犯罪し得るものと想像せよ。そは尙一層恐るべき處ならずや。吾人をして我身に道德的苦痛あることを祝さしめよ。若し曾て吾人を苦しめたる事柄にして、今日吾人の心を煩はすことなくば、そは實に恐るべき事に屬す。余曾て耳にせることあり、曰く、男女間の腐敗は、英國人に於ける如く、佛國人の品格を害することなしと。余はそが果して事實なるや否やを知らず。然かも若し事實ならんには、そは佛國に於ける道德の低度なるを示す者なり。凡そ一個人にもせよ一國民にもせよ、そが道德的品位の高低を測る便法は、不道德が如何程その品位を破壞するかを見るにあり。若し人不道德の行をなすも、之が爲に格別の

變化を彼の上に來たすことなくば、以てその人の道德的組織の極めて粗雜なるを見るべく、之に反して、若し些細の不道德も尙ほ、一心の調和を破壞する程ならば、以てその人の道念の大に精緻なるを見るべきなり。大罪人は非常の苦痛を感ずるもの、非行をなすも左程の苦痛を感ぜざるものを幸福の人と想像するは、愚の至りなりと謂つべし。

前にも言へる如く、余には今神が人を處する方法を辯解するの必要なし。余が目下要する所は、唯だ吾人の道德性を解剖してその眞相を明にするにあるのみ。然れども、犯罪が增すと共に刑罰が減ずるの一事に關しては、爰に一言なき能はず。若し法律界に此事あらば、公益維持の爲に騷動を惹起すことならん、而かも道德上の趣意よりすれば、此の方法は極めて恰好なるを失はず。方法の善惡はその目的の如何に由る。道德の目的は、單に惡しき行爲を防遏するのみにあらず、又た正しき人物——自ら正義を慕ひ、强られずに之を我身に体せんと欲するもの——を生ずるにあり。斯かる目的に對して、强迫的方法は不適當なり。道德的動物は自ら發展せざるべからず、即ち自らおのが理想を撰定し、おのが品格を形成せざるべからず。道德的刑罰の組織や、實に此の目的に相應するものなり。

假に正しき人たらんと欲しながらも、二條の路ある分岐點に達したるものありと想像せよ。その一路は固より惡の方に通ずるものなり。此の時に際して、標柱の文字太く彼が邪路に入らんとするを警戒するあらば、何の幸福か之に如かんや。苟も眞面目に正道を取らんと思ふものは、『否な／＼、そは邪路なり、之に入る勿れ』と呌ぶを聞きて、誰れか喜ばざるものやある。然れども、若し彼にして『余はその邪路なるを知る、而かも試に之を取らんと欲す』と言はば、警戒の聲が彼に對してその勢力を減ずるは、蓋し當然の事ならずや。又た彼にして一歩を進めて、『惡よ、汝は我が善なり』といふに至ては、警戒の聲彼に於て復た何の用をかなさん。吾人は先づ刑罰の趣意を考ふるを要す。若し刑罰の目的が本人以外の利益を保護するにあらば、刑法に於ける如き處罰の方法は固より必要なり。之に反して、若しそが道德的訓錬の一方法として、本人に何が善にして何が惡なるかを知らしむる者ならば、彼が愈意を決して惡に投身したる上は、刑罰は既にその効用を失ひたるなり。是れ吾人が實際見る所の事實にして、天の攝理に適當の道理あるを信ずる、亦た宜ならずや。

以上の理由あるを以て、余は道德的處罰法に於て何等の不都合あるを認むる能はず。法律的處罰法が國家の安寧に効用ある如く、道德的處罰法は個人の道德

的訓錬に効用あるなり。二者ともその分野内に於ては正當なり。唯だ吾人の誤り易きは、甲の分野にて得たる公平てふ觀念を、事情全く異なれる乙の分野に移すことにあるのみ。

（八）

第三の相異點とは何ぞや、曰く、法律が單に容易く規定され得べき事件のみを取扱ふこと是なり。余は先に法律に於て刑罰が明瞭に規定さるべき事をいへり。然れども、罪そのものも亦た明瞭に規定さるゝを要す。斯く罪の性質と範圍とを明瞭に規定するの必要は、想ふに法律に缺陷ある一大理由なるべし。吾人は或る種類の非行が法律に由つて禁止されざるを見て、屢憤慨に堪へざることあり。賭博は一大敗德にして、人間の品格を害する之より大なるはなし。その恐るべき結果は、阿片を喫すると同等ならん。阿片喫煙家は直に人事に對して無感覺となり了る。彼は阿片を喫するの外復た他を顧みることなく、諸の能力は悉く不用に歸し去るなり。而して此の惡習を破却すべき望殆んどあるなし。賭博者も亦た斯の如し。飲酒家は尙ほ多少の元氣を存し、その醒時に於ては通常人と少しも異なるなしと雖も、賭博者は則ち然らず。二六時中斷えず熱病に罹り居る如き彼の心は、萬事に對して何等の興味を感ずることなく、益眞面目な

る人事を忘却して、唯だ機變定りなき僥倖を夢想しつゝあるのみ。

斯く人間の品格を腐蝕する行爲が、最も嚴重なる法律を以て禁止せらるべく、且つ賭博者が關係する事件の大なるだけ、それだけ嚴しき刑罰を加へらるべしとは、吾人が常に希望する所なれども、事實は全く之に反するを如何せん。賭博に關する法律のなきには非ず、又たそが屢〻行されざるには非ず、若し日曜日に賽を振つて數圓の勝負をなすものあらば、彼等は憶に巡査に捕へられ且つ相當の處分を受くることならん。然れども、これ一小些事に過ぎず、關係の人物よりするも、勝負の金額よりするも、法律が左程著しく着目すべき事に非ず。然かも法律の禁止する所は、斯の如き事に止まるのみ。若し夫れ大仕掛の賭博に至つては、法律は少しも之を問はざるなり。株劵や米穀の相塲に手を出して、之れが爲に時としては全大陸の恐慌を來たすものあるも、法律は彼を罪人とは見做さゞるなり。何れの市邑に於ても、斯かる大賭博に使用する家屋は堂々として聳へ立ち、何々取引所てふ看板は麗々しく揭げられ、土地の有力者はその役員として任命せられ、法律は敎會を保護すると同樣に之を保護す。小賭博は之を禁止し、大賭博は之を奬勵す。何たる國家の耻辱ぞや。

此の矛盾に對する理由は、余が既に述べたる如く、その有害なる分子を打擊し

得る樣に、明白に賭博の罪を規定するの難きとなり。賭博の中には、社會に無害なるのみか、非常に大切なる分子もなきに非ず。先見の明の如き其一なり。上手なる賭博者たるには、遠く見又た敏く見るの明なかるべからず。斯かる才能は社會に取りて必要なり。故に社會は之を禁止せざるのみか、大に之を奬勵するを要す。而して賭博の罪を定義するには、斯かる有益の分子を除きて、唯だ他の有害なる分子のみを含む樣にせざるべからず。是れ一大難事なり。或る程度迄は出來得べし。運に任する分子多く、先見を要する分子少なきものは、禁止せらるべく、之に用ゆる器具を所持するは不法と見認めらるべし。然れども、如何にしてか所謂大仕掛の賭博を分拆して、單にその有害なる分子をのみ禁止し得べき。社會一般の道德尙ほ低度なるや、斯かる法律を制定するが爲に角を矯めて牛を殺すの愚を見るに至るべし。吾人が投機事業の存在を默許し居るは、蓋し此の困難あるが故に外ならざるなり。

數年以來、米國の到る所トラストなる者の流行を見る。此のトラストや。一種危險なる資本の合同にして、利益を獨占するの恐ある者なり。故に之を禁止すべき理由なきに非ず。然れども、愈法律を以て之を禁止せんと欲する時は、吾人は爰に躊躇せざる能はず。若し資本の合同にして絕對的に禁止せられんには、

社會の運轉は直に中止すべし。トラストの害は、資本の合同にあらずして、利益の獨占にあり。而して單に此の分子のみを定義するは甚だ難事にして、之を試みたる諸州は何れも失敗に終らざるはなし。此の罪の性質と範圍とを明白に規定し得る迄は、トラストを禁止する法律の制定は、暫く望なしといはざる可からず。

然らば則ち、道德界に於ては如何。此處にも義と不義とを明白に規定するの必要はなきか。否な、之を規定するは却てその意義を沒却する所以なり。如何なる德も如何なる不德も、一定義の中に制限さるべくもあらず。吾人は吾人に對して罪を犯せるものを赦さざるべからず。借問す、如何なる罪をか赦すべき、如何の程度迄が赦すべき。是れ甚だ肝要なる事なれども、何人も未だ之に答へたるはあらじ。嘗て法律的頭腦を有せる人あり、道德的敎師の最大なるものに問ふに、此の問題を以てせり、曰く『主よ、幾次まで我が兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか、七次まで乎』と。是れ罪を赦すべき度數の最高度を定めんと欲したるものなり。然るに主の返答は殆んど輕蔑的に近かし、曰く『七次とは言はじ、七次を七十倍せよ』と。是れ恰も『赦罪の度數は無限なり。斯かる事は法律の關する所にして我が關すべき所に非ず。我が務は品性の陶冶にありて法

律の制定にあらず。道德的見地よりすれば、赦罪の度數は定限し得べからず』といふに同じからんなり。

倫理學者は屢、完全なる義務不完全なる義務てふ語を用ゆ。是等の語や穩當を欠くと雖も、固と古來よりの名稱にして、而かも余が今論じつゝある點を說明するに足る。余昨日友人より一圓の金を借りたる爲め、今日行て之を返濟するに方り、彼が幾許の金を要求するかを問ふの必要を有せず。拂ふべき金額は正に一圓と定まり居るなり。余若し彼に一圓十錢を與へなば、余はおのが義務を果し居るにあらで、彼に恩惠を加へ居るなり。之に反して若し彼に九十錢を與へなば、余は彼に對して尙ほ負ふ所あるなり。如何となれば、余が彼に與ふべきは正に一圓にして、それ以上にもそれ以下にもあらざればなり。斯かる義務を稱して、古來完全なる義務―別語を以て言へば精密なる義務――といへり。吾人は個人に對し國家に對して、此種の義務を負ふこと少なからず。然れども要するに此種の義務は一般に劣等の義務たるを免れず。尙數層高等なる義務は寧ろ不完全なる義務――即ち不正確なる義務――に屬す。元來道德なるものは、無限なる者に對して無限の要求をなすものなり。たとへば、余は眞實を語るの義務を有す。何程迄眞實を語るべきか。然りとか否とか答ふべき問を受くる時

は、固より然りとか否とか答へざるべからず。眞實を語るの義務は之にて盡きたるか。否な、吾人は啻に言語に由りて虛言するのみならず、又た身振に由りて虛言することあり。故に此の義務は此の方面にも及ばざるべからず。然らば之にて十分なるか。否な否な、吾人は他人を欺かざる如く自身をも欺かざるを要す。げにや、余が益眞實の人たらんと希ふ程、眞實なるべき新版圖は愈余が前に擴張し來るなり。然り、此の義務に永久際限あることなし。凡ての道德的義務は無限の性質を帶ぶ。正義の義務に際限ありや、仁愛の義務に際限ありや、否な、決してあることなし。

故に正確に示され得べき義務に對して、吾人は常に多少輕蔑の念を感ずるなり。曰く、善く行せり、然れども道德的と稱するに足らずと。頭髮を梳る、室内を掃除する、障子を半開にせざる、固より道德的行爲に相違なかるべし。然れども、そが道德的てふ名稱を價するは、個々の行爲そのものにあらで、是等を包含する根本主義にあるなり。正確に示され得べき道德的義務は、要するに確定され得べからざる根本的義務の發現たるに外ならず。

別言すれば、凡そ高等なる道德は、吾人に要求するに不完全なる義務を以てし、之に反して法律は、吾人に命令するに完全なる義務を以てするものなり。前に

も言へる如く、義務を區別して完全といひ不完全といふは、人の誤解を招くの恐あり。故に余は寧ろ之を區別して、有限なる義務と無限なる義務、規定され得べき義務と規定され得ざる義務、容易く計算さるゝ義務と非常に込入りたる義務といはんと欲す。而して前者は法律の範圍に屬し、後者は道德の區域に屬するなり。

（九）

倫理と法律とが相異する第四點は、如上の三點を說明し且つ總括するものなり。何ぞや、曰く、既に確定せる秩序を維持するは法律の目的にして、將來に向つて生長發達するは道德の目的なりてふこと、即ち是なり。何人と雖も、今こそ我はおのが可能性の極度迄達したりと言ひ得るものはあらじ。倫理的見地よりすれば、人は決して『出來上りたるもの』と見做さるべきに非ず。何れの瞬間に於ても、彼が現在の地位は次の地位に進むべき一の階段たるに過ぎず。彼の力にて達し得らるべく、而かも未だ實現せられざるものこそ、倫理が殊更に着目すべき所なれ。然れども、法律の人を見るや全く之と異なり。法律は人を既に出來上りたるものと見做し、現在彼が有の儘を標準として、必しも將來に於ける彼の發展を問ふことなく、人間相互の關係が既に成立せる現社會の秩序を

維持せんことを是れ力む。されば法律は勿論萬人を平等視す。人豈に悉く一様ならんや、彼等の間には雲泥の差別なきに非ず。或る者は他の者に比して、遙に進歩の上階にあり。然れども、法律は斯かる差別を眼中に置くことなく、一定の水平的標準に達すれば、太郎も次郎もお松もお梅も、皆な平等に取扱はるるなり。故に法律の見る所は、種々の特色を帶ぶる具体的の人に非ずして、個々の特色を除却せる抽象的の人なるなり。法律の眼中には、男女老幼賢愚强弱の差別なく、寛宏の人も詩的の人も剛勇の人も何等の特典に預かることなく、卑吝の人も無風流の人も臆病の人も何等の憐憫を蒙ることなし。勿論實際の世界に於ては、才あるものは立身し、德あるものは成功し、必しも法律の爲に個人の運命を左右さるゝに非ず。然れども、立法の精神は、個人に飛躍の機會を與ふるにあらず、寧ろ萬人に平等の立場を與ふるにあるなり。

人々の現狀を保護するが旣に法律の趣意ならば、『損害』てふ語が法律に於て殆んど神聖視せられ、各人の權利が他人に由りて侵蝕せられざる樣殊に注意するは、又た故なきに非ず。余は前に、不道德の最大なるものは、怠惰と虛言なるべしと雖も、法律は少しも之を眼中に置くとなしと言ふや、直に『そが他人の權利を損害せざる限は』と附言せざるを得ざりき。法律の問ふ所は、某が善人

なりや否や、如何に彼が善人となり得べきかにあらずして、彼が隣人に對して何等かの害を加へざるや否やにあり。法律上の善惡は、全く外に對する關係上の語にして、その度は社會の現狀を維持するか若くは破壞するに由て量らるゝなり。されば、何れの時代に於ても法律家が保守的に陷るは、決して不思議の現象に非ず。是れ此の職業に於ける一大危險なり。法律家も固より人間なれば、又た屢道德家なれば、彼等とても社會の進步に對し道德の進步に對して同情を表すべしと雖も、法律家としての彼等は、現狀維持に力むるがその本分にして之れ以上に出づるは、時として社會の害となることなきに非ざるなり。

（十）

世人が如何に抽象的人間觀と固定的社會觀とを不適當と見認め始めたるか、又た彼等が如何に法律を改良して倫理的方面に向はしめつゝあるかを研究するは興味ある事なり。斯かる傾向の盛なる、現代の如きは未曾有の事なりとす。余が前に陳述せる道法二界の經界線の如きも、今や實に鼎の輕重を問はれ始めぬ。若し余にして、法律は社會的害毒を禁ずるのみにて、個人的害毒を禁ずることなしと言はゞ、隨分世人の攻擊を免れざるべし。今日吾人は自由に、長屋裏屋をして浴室及びその他の衛生的設備を具へしむべき法案を可決し得るなり。是

れ一面に於ては、熱病の發生を豫防し以て公衆の安寧を維持する爲なれども、又た斯かる運動の裏面には半分以上道德的熱心のあるありて、貧民をして成るべく高尙なる生活をなし得る境遇に預らしめんと欲する動機より出づ。余は二個の目的が漸次に合致し來るを喜ぶものなり。

婦人や小兒の勞働時間を制限する工場法案の如きも、亦た道德的立法の著しき一例なり。殊に敎育上の法律に至つては、最も多く道德的分子を含むものなり。吾人は何の權利に由つてか、各父兄をしてその子女を學校に入れしむるぞ。斯かる法律は、不完全なる個人の靈性を發達せしむるを目的とするが故に、之を保護的維持的といはんより、寧ろ理想的膨脹的といふを可とす。此の場合に於て吾人は、隣人に對する關係より個人の價値を量らで、却てその人自身の爲に考へつゝあるに非ずや。人或は曰はん、人民の無智なるは社會に取りて危險なり、彼等も一般に投票權を有す、されば社會の秩序を維持するが爲に、彼等をして讀書習字算術等を學ばしむるなりと。然かも、斯かる理由を以て敎育法案を辯護する人も、誰れかその心中に於て竊に一般人民の發達を祝せざるものあらんや。

以上の數例は、如何に道德法二界の經界線が動搖し始めたるかを示すものなり。

斯くて余は余自身が樹立せる經界を破壞しつゝあるなり。余の擧げたる經界の如きは、その實單に二者を區別する一般の傾向を示したるに過ぎず。最近二十年間に於ける社會的要求は、幾多の道德的分子を法律界に持込みぬ。社會を保護する目的と、個人を擴張する目的とは、漸次接近し來りぬ。それ法律とても全く他の人事と關係せざるには非ず、されば、知らず識らずの間に、一社會を支配する理想の感化を受けて、その精神をおのが中に攝取せざるを得ず。然れども、たとひ法律は今や全く損害の豫防にのみ拘泥し居らぬとはいへ、尙ほ之をおのが特殊の任務となすを止めたるには非ず。法律は文明の結果を保護するものなり。道德的經驗により智識的研究によりその他百般の批評によりて、吾人は進步發達の或る階段に迄達せり。而して此の階段を維持するに必要なる權利義務は、法典の中に規定せらる。之と同時に道德的生活は、益廣く益深く益精しくそが發展を繼續す。斯く一社會が是認しつゝある道德的理想を攝取すると共に、法律は是非共余が前に擧げたる三個の條件を具へざるべからず、即ち罪を規定すること、罰を規定すること、罪の正比例に罰を加ふべきこと是なり。而して以上の三件は、法律と道德とを混和せんと欲する社會的運動を沮害するものなり。

（十一）

余は是迄、倫理の範圍を確定せんが爲に、之れと法律との區別を研究せり。二者多くの點に於て相類似すと雖も、而かも共通の材料なる品行を取扱ふ方法に於て根本的の相異を示す。是迄の精細なる研究の結果、吾人は此の差異を一言にて道破し得べし。曰く、法律は餘りに客觀的なりと。法律は主觀的なる人を見ずして客觀的なる人を見、彼の行爲が彼自身の生長發達に及ぼす結果を見ずして、そが他人の權利幸福を侵害するや否やを見る。法律が斯く客觀的なることは、吾人をして道德的生命の十分なる發現を他に求めしむ。吾人は法律の缺陷を補はんが爲に、人が如何に主觀的にも善なるかを見ざるべからず。人若し主觀的に善ならんと欲せば、又た客觀的にも善なるを要す、即ち他人の善を妨害すべからず。然れども、吾人は他人に對する善のみを以て、彼が善なるの唯一の證據となす能はず。故に完全の善を求めんが爲に、吾人は法律の範圍を超へて、同じく『あらねばならぬ』てふ動詞の用ゐらるべき境域、同じく理想の實現を旨とする法則の行はるゝ境域、而かも研究の對象が自身の中に主觀的價値を有すと見做さるゝ境域に移らざるべからず。別言すれば、吾人は審美界即ち美の世界に着眼せざるべからず。如何となれば、余が解する所に由れば、美

なるものは凡て價値あるものと見らるべければなり。そが他物に對する關係は少しも注意を引くことなく、唯だ自身以内に於ける關係のみ重要視せらる。故に美の世界は優に法律の世界を補充して餘あり、且つ吾人が道德的動物の性格及び品行の何たるやを研究するに資する所あるべきなり。

(十二)

終に臨んで余は、普通に呈出さるゝ道法二界の區別法として、余が本回の始に擧げたる二方法の一に關して、一言すべきことあり。余は前に論者が『法律は外部の行爲を見、道德は内部の動機を見る』と言ふに反對したれども、此の言の中に大切なる眞理なきに非ず。それ法律は憶に行爲の趣意を問ふものなり。法廷に持出さるゝ何れの犯罪か、その趣意を問はれざらんや。此の點に於ては論者の言や誤れり。然れども法律が犯罪の趣意を研究するや、常にそが他人に對する關係のみに於てし、決してその趣意が本人自身に如何に有害なるやを問はざるなり。斯くて法律は、行爲に於ても動機に於ても、兩ながら客觀的に他人に對する關係のみに着眼するものなり。(今泉眞幸君譯)

第四福音書の思想と自然の神學

校長　エー、エム、フエアベルン

（約翰傳一〇十八、十四〇八、九）

前回に於て予輩が解說したる聖書の文章に聯關して起り來る數個の問題あり。其の問題とは、見るべからざる神が子となりて顯彰したりとの思想は人に取りて幾何の眞價と効力を有するか。此の思想と人心は兩々相照應すべきものなるか。此の思想は元來理性の產物にあらずと雖も能く理性に訴へて之に滿足を與ふるに足るものなりや。天啓と自然及び人心の關係につきての大體の問題に光明を注ぐ所あるべきや。予輩は更にこの點につきて論ずる所あらんとす。

（一）

（一）本論の首に提擧したる二の聖句の中にて、『未だ神を見し人あらず』との言は自然の經驗の力の及ばざる所を言ひ、次の『我等に父を示し給へ』との言は、遂げざるが爲に益々熱切銳敏なる自然の需要を道破せり。この二を較べて茲に自然と經驗の齟齬ありと云ふも可なれども、この兩の法則は又相逆行するが如く見へても相互に矛盾するものにあらず。人間神を尋ね求むるの念の强烈

能はず。アウガスチンの言は人の普く知る如し曰く『神よ爾は爾の爲にとて我等を造り給ひたれば我等の心は爾に倚りて息ふまで安定せず』と。この心の不安定てふとは神を求むの情を不言の形式を以て發表したるに外ならず。人は元來神によりて神の爲に造られたれば、神無くして在る能はず。無神論は人工の作品にして天然のものにあらず。人は自ら力め學んで後初めて之を信仰するを得るのみ。古來如何なる種族、如何なる時代と雖とも期せずして一般に無神論を信じたる例を見ず。此種の議論は畢竟一個の否定に過ぎず、否定は人生の秘密に觸るゝの力なし、唯破壞するのみ建設するの力なし。僅に他人の信仰の誤れるを信ずるのみにして、我が主張する眞理の確乎として拔く可からず、宇宙は之に由りて立ち我が生命も亦之に由りて支へらるべき信念に進むに足らず。然るに神を信ずるの信念は是に到らずんば已まず、人の心は是の如き信仰を渇望して已まざる也。ミルの自傳の著されてより以來既に代を改めたれども書中の敎訓は陳腐に歸せざるもの多し。ミルの記する所によれば、彼の父は二元說を以て一神論よりも合理的のものと考へ、又不可識論を以て二者よりも更に合理的のものと考へ、万物の起原に就きては之を知るの道無しとの結論に到着したり。然してミルの

父は素より基督教外に生長して曾て之を信じ又行ひしことなきが故に、社交上又知識上獨立の見地に立ちて公平に基督教を評し得たりと云へり。然れどもミルが斯く記するに當りて彼が當に忘る可からずして忘れたる數件あり。(1) ミルの父は決して初より斯く考へたるにあらず、彼は基督教の教職に就くべく教育せられ、又進んで教職の志願者となりしとありて、教會に受けられたらば教職に就きたりしならん、(2) されば彼の達したる立場は己が始めに教養せられたる神學の見解に對する反動に驅られて達したる處にして、彼が斥けたる神は『主耶蘇基督の父』なる神にあらずして、人の爲に地獄を造り地獄のために人を造る如き實際有るべからざる神なり。チェームス、ミルにして今少しく條理正しく考へたらんには、以上の如き神を否斥したりとて無神論者たるを要せず更に完全なる有神論者となるべかりしなり。(3) 子のミルも亦基督教の感化以外に生長したりと云ふも之れ亦自己を知らず時代を知らず基督教を知らざるものと謂はざるべからず。基督教の感化以外に立つと云ふことは彼の時代と場處より見て有り得べからざる事なり。空氣に充つる所の物は人之を呼吸せざるを得ず、言語に包含せらるゝ者は之を口にせざるを得ず、文學に浸染せるもの之を讀まざるを得ず、其制度に含蓄せられ總て慈善事業の母となり今代をして古

代に異ならしむる此の物の感化の外に誰か立つことを得んや。況んやヂョン、スチユアルト、ミルの如く受容力同化力に富める人物に於てをや。(4) 彼は又基督敎を誤解せしが故に之を判斷するや公平ならず又公平なる能はず、中立ならずして自ら中立なりと考へ、玩味する能はざるが故に又批評する能はざりしなり。(5) 然れどもミルは當時の人に優りて、人神を求むる念の確實活潑にして、神を見る能はざるに關せず依然として拔くべからざるを觀取し得たり。彼は宇宙に造化あり主治者あることを信ずる能はざることを告白すれども、又最高の善に向つて自ら規し且進行するの義務を負へることを告白したり。然して一個の生命は之を全体より分離すべからず。一人の爲の善ならば又万人の爲の善ならざるべからず、一個人の負ふべき義務は、人の宇宙と稱ふる大系統の批認する所の者たるを要すべし。さてミルはこの主活力をば如何なる風に考へしか。曰く『人良心の指導者として常に歸向し得べき完全なる存在者の理想なり』と。然れども詮し來ればこれ一度思想としての神を棄て丶更に實行の理想としての神を覓めたるに過ぎず。即ち神を否定して之に代るべきものを發明すべく餘儀なくせられたり。然らば何を以て之に代用せしや。彼は婦人を戀ひたり。彼の戀愛は「パッション」となり遂に平和にあり得べき他の家庭をも破るに至らし

めたる其の成行の道德上の性質如何に關しては余は確に觀る所あれども爰に之を言ふの要なし。但見よ彼は戀ひて戀人を喪ひ喪ひし婦人と遠くなるに隨ひて其の記憶は彼の生涯を支配するものとなり、この婦人を喜ばすべき思想を考へ、彼女が賞賛すべき事を爲すを愛し、亡き人に對する關係は一種の崇拜となり、其の記憶は『宗敎の一種』となれり。至善の神を信ずること能はざりし人今や之に代へて一婦人（自己の想像によりて完全なる理想となせる）を神の如くなしたり。若し夫れ人間無能力の論理の犧牲となりし人の中ミルを以て最も有名なる人とせば、人の神を求むるの念をば最も明に證明するものは同じくミルの戀愛の末路にあらずとせんや。

（二）人神を見るの力なきことが、神を索むる念を滅せずして却て之を活潑鋭敏ならしむることと事實ならば、自ら索めつゝある其神の如何なる神なるかを明にすべき方法標準あるか。玆に明なる一事は、其神は人の最高の思想を代表するものにして、この思想は又人自身の裡に於て最も善く且つ眞醇なる所のものを反映し道破するものにてあるべき事實なり。然らば人の本職なるものは何より成るかと考ふれば、理性（リーズン）と良心（コンシエンス）と情（ハート）の外に出でず、即ち思想と道德的判斷と自由の動機より發せる意志なり。以上の要素は又至高の理想なる神の中にも之

を求めざるべからず。

(1)人は皆思想家なり。思想は人の眞髓なるが故に多く考ふるに隨ひて彼の人格は一層高尙に進むなり。自然を說明するは即ち亦自己を解釋する所以にして、自然の道理に合へることを觀ることと明なるに伴ひて已れも亦合理的のものとなるなり。然れども思想は物質にあらずして精神の事なり。形体なく、量るべからず又分つべからず。語り書き通すべけれども之を計り又手に取るべからず。世には思想を以て腦の作用となし機關の產物となす人もなきにあらず。鮮活の句を造り出だせば直に重大なる問題を解し了れりと思へる一人は云へり『燐素なくば思想あらず』と。然れども物質の一種に過ぎざる燐素よりして如何でか物質ならざる思想を抽出し得可きぞ。量るべき物を量るべからざる物に換ゆるに如何なる煉金術（アルケミー）あるか。共通の尺度を以て計り難し、事物の兩極に離れたる兩個の事物は、實驗によりて相互に換算する能はず。分拆によりても共通の要素の產物たるを證する能はず。機關と意識との關係を說くは容易なり、然れども如何にして、思想は腦の機關の產物にして機關は思想の原因たることを證明せんとするか。獨逸の或る有名なる生物學者――其人は時代後れの神學者を冷嘲するを以て得意となし自ら任じて戰爭と云ふ戰爭を神學者の本營に試むると揚言

せる——は眞理の試驗法を提出したり。曰く『試に人の頭腦を取りて其灰白質や不思議なる回轉の儘にて之を一の桶に容れ、第二の桶には好く發達したる猿猴の頭腦を容れ、而して他の世界の住民を呼び下して鑑識者たらしめ二の頭腦の間に果して超え難き差別、渡り難き淵あるかを見せしめよ』と。斯の如き說き方は論爭の上には利益もあるべけれども、要するに既に問題の範圍を定めて、豫め定めたる結論に合せしむる嫌あり。吾人は別世界の賓客をして姑く判斷を下すを控へしめ、前の如く輕卒に問はれ輕卒に解かれたる問題と異なる問題を掲げしめよ。即ち既に言へる二の桶の外に猶二個の桶を携へ來り之を前のものに並べ置かしめよ。然して猿の頭腦の桶の傍に立てる桶の中に猿族の歷史（若し歷史ありとせば）を容れ、彼等が森の中に棲みて木に登り胡桃を食ひなどして大初以來些の變化無くして今日に至りたる始末を載せしめよ。而して人の頭腦の桶の傍に立てる桶には人の歷史を容れしめよ。其の文明の歷史、技藝の物語、彼が建てたる帝國、設けたる政治、興したる都市、著したる文學、作りたる音樂、告白したる宗敎、彼の生涯を嚴にしたる悲劇、快活ならしめたる喜劇、彼が追求したる理想、彼を慰めたる希望、弱き中より强からしめたる愛の歷史を容れしめよ。然る後其の珍客に對して問ふべし『君は人生の如何に眞面目なる

事にして正しく之に處せんとせば彼等を指導すべき眞理を要するを知れるならん、されば乞ふ我等の爲にこの問題を解け、即ち此の二種の腦髓は質と重量と組織に於て甚しく異なる所無し、然るに彼等の行路と功業は莫大の相違ある其原因は一に腦髓に存するか。頭蓋の異同や劣等なる腦髓が高等なるものとなり得べきや等の事は我等の深く關心する所にあらず、唯切に知らんと欲する事は兩者の歷史の行程斯く相離るゝ所以の理由は之を腦の搆造の差違に求むべきか』と。我等の質問の急迫は或は天來の判識者の怛懷を乱ることとあらん然れども彼の宏量なる蓋し大凡下の如く答ふるならん『されば問題は甚だ異りたる方面に進まざるを得ず。頭腦は自然の歷史中の一問題なれども文明は心の歷史に於ける一問題なり。結果の差斯の如く大なるを見れば全樣の原因より發する者と思はれず』と。我等は之に應じて云はんとす、『然り猿の本性は猿の歷史に發揮せられ人の本性は又人の歷史に發揮せらる、然してかく發揮せられたる本性は君が撿したる腦髓に蓄積せられたるを發見せしか』と。彼は答ふならん、『如何にして之を發見し得べきぞ。人間の文明は理性、思想、精神の產物なり、此等なくば文明は在らざりしならん。而して理性思想等は腦髓の作爲する能はざる所にして、又其機關を撿するも如何にして此等の物の存するに至りしやを尋ぬる

能はず。人は心なり、心は之を形に表すに機關を要すと雖ども、機關ありて後心あるものと考ふることは能はず』と。然らば汝は如何にして心の存在を說明せんとするか。曰く心は人よりも前に存す、これ實に万物の父なればなり。神なる理性は自然界を存立せしめ又人と成り出でしめたり。創造の根は花咲きて最も美はしき菓を結ぶ。宇宙の大建築者は自己に肖たる靈なる存在者を有らしめて初めて自己の宇宙を實現す。文明を建てし思想は自然界を創造したる思想を反復し反映するに過ぎず。

(2) 然れども人は思想を有するのみならず又良心を有す。バウロの云ふ所によれば、異邦人は律法を有せずと雖も、良心は彼等の爲に律法となり其の命令は心の碑石に銘刻せらる。この內部の律法の現在することを證する所のもの二あり。一は良心の聲なり。一は人生相互に褒貶する所の道德的判斷なり。バウロは又云へり、神を知るの知識は本來人の中に明なれども、人は多くこの知識を存留するを良しとせず。神は人をして眞理に從はしめんとすれども彼等は不義に遵へり、苟くも神に從ひて永遠の生命に達せんことを求むる人には榮光と尊貴と不朽とを與ふべけれども、不從順なる者は怒を以て之に報ゆべしと。此等の所說の歸する所三の重要なる條目あり。(イ)人に良心あり神の指は彼より要求す

る義務を其上に記せること　（ロ）又は義務に從ふことを得べく又背くことを得べきこと　（ハ）神は人々に對して如何に彼が律法に從ひしか又如何に自由を用ひしかの決算を要求することなり。以上は自然と天啓と等しく傳ふる所の眞理なり。中心にこの律法あればこそ如何なる異教國にせよ著明なる惡を以て德となしたるものあらず。自然は常に德の味方なり。之に從ふによりて人は初めて自己を超越して又能く自己を實得し、須臾の身を以て永久普通なるものゝ器となすことを得るなり。上に神あればこそこの世に於て爲したる行爲は永遠に至り、一時的の我を以て永遠なる存在の萠芽となり、人類の聚りて作る所の世界が分子の集合体にあらずして融合したる一体となり、一個人之に從ふべく全体となりて初めて之を實現し得べき法則に支配せらるるを得るなり。故に我等の達したる結局は下の如し、人の衷に存する良心は神の正義を要求す、道德的の人間ある以上は道德的の神なかるべからず。

（三）理性あり良心ある神は又情を有す。愛無き處に人はあらず。愛なき智力は神にも人にもあらずして惡魔なり。人を惡魔となし其の境涯を地獄となす者は愛の欠乏なり。愛無き處には唯飽くなきの私欲と、人を頼まざる疑念と安ずる能はざる恐怖あるのみ。愛無き人は唯自己の幸福を愛するのみにて人の幸福

を愛すること能はず。凡そ世に他愛の心去りて自己の爲の恐怖之に代りたる人ほど不幸なる人あらず。何人の顏にも危險を讀み、人を見れば敵と想ひ、吹く風も不幸の消息を傳へざることなからん。さて愛がかくまで人に必要ならば、まして神に必要ならざらんや。愛なき造物主は人の尊敬崇拜する能はざる存在者に過ぎず。人は全能の惡魔を拜すること能はず。愛すに足るものを愛す。この愛ありて後初めて善を行ふの意志と之を成し遂ぐる力を發起し得べし。果して然らば神若し拜し得らるべき神ならんには、其神は其行爲道理に合し正義にして恩惠ある神ならざるべからず。然らずは吾人は到底之に服從するの念を起すこと能はず。

（二）

神は人間の高尙善良なる性質に滿足を與ふるを要することは旣に云へる如し。唯茲に不思議なることはこの性質は高尙善良に進むだけ益々滿足を得難くなることなり。宗教の事に關しては自然は自然に依りて滿足を得ず、天啓の必要は是に於て生ず。神自己を知らしむるにあらずば人は眞に神を知ること能はず、即ち完全なる宗教に格る能はずこれ天啓のある所以なり。且神を高尙に考ふるほど神に言語の力と權利あることを許さゞるべからず。啞の人民は必ず亦知覺

なき人民なるべし。發表すること能はざる思想は活動なき思想なり。其の如く神若し合理的の神ならば必ず語るべく正義の神ならば必ず統治すべく、愛の神ならば必ず恩惠を施すべし。伊太利人にて他日有名なる彫刻家となりし一人の小兒の話あり。一日その小兒は其の師の名作の前にて靜坐良久しく之を賞鑑嘆美しつゝあり、師は其小兒の樣を見て其の熱心を末頼もしく感じてありしに、其の小兒は突然起つて悲しげに去らんとして囁くやう『惜い夫完全と云ふには唯一事の足らざるものあり』と。師は其言を聽きて驚き怪しみしが、或日其の弟子を呼んで問ふて曰く『ミカエルよ我が作りし像に何の欠くる所ありて未だ完全ならざるか』と。答へて曰く『唯言語を欠くのみ』と。自然は言語なき彫刻なり。人は之に對して驚き立つのみ。其答は其面と貌を以てスフィンクスの如く答ふるに過ぎず。神は斯かる無言の教師にのみ人類の教育を委ねざるべし。彼が愛せん爲に造りし人類の事は强く彼の胸に訴ふるものを。是に於て『其の生み給へる獨子即ち父の懷に在る者父を彰したり』。子を見る者は父を見るなり。

（二）　神の啓示にして人を經て來るとせば、其人を歷史上に求むるに耶蘇基督の如く仲媒として適當なる人あるべきか。彼の人格を觀れば神に關する我等の觀念は轉た崇高を加へしむ。解釋者の品性は解釋に精美の性質を添ふ。天啓の

媒として彼は地球を包圍して浮動せる空氣の海の如し。之なくば重力も其の神秘なる力を及ぼす能はず、之なくば地球がこの無邊の大洋を舵なく羅針なくして航する能はず、之なくば太陽より發射し來る光も熱もこの地上に傳はりて冷なる地を生類の棲息する地となす能はず。彼は何が故に斯く透明なる仲媒たり得るか、其名の示す如く『子』なればなり『チヂャム』の讃美に歌ふ如く『父の永遠の子』なればなり。父の在る所には子も亦在らざる可らず。この觀念は相離すべからず。永遠の子あらずんば又永遠の父あるべからず。子に顯れたる柔和、恩惠、嚴格、忍耐、正義の特質は亦父の特質なり。人或は神の父たる性を以て優柔なる善性と誤り自ら人を苦しめ又人の苦みを見るに忍びざる如く考ふるはこれ大なる誤なり。斯かる人は耶蘇の柔和なると同じく又猛烈、恩惠あるとともに怒り得ることを忘れたる人と云はざるべからず。公の政治に於ても私の道德に於ても、苦痛を加ふるを恐れて惡をも罰する能はざる如き善性ほど害を及ぼすものあらず。之に反して人民の父なる德を具へざる王も亦正しき王者にあらず唯だ器物の所有者に過ぎず。この二の方面は神に於て高尙なる和合を保てり。父として彼の働きは又王者的なり、王者としての所爲は又父的なり。不義に對して燒き盡す火の如く怒る能はざる神はこの邪惡にして罪深き世界を

制御し得る神にあらず。又罪人の運命の哀れを見て不便と思はざる神も墮落せる人類の王者たるに足らず。この兩面の職分は相調和して美妙なる平均を得、神は是を以て世を治め猶は且つ人を罪より救ふの道を得ざるべからず。

(三) 此の二の職分は相合して一となれども又差別を存す。夫れ神は一なれども無限の屬性を具へ、各屬性は神の性質に於て相異なる性格を表はし特殊の關係を示せり。王者たる性質は權威と法則に關し、父たる性質は子と從順に關せり。純然たる法治的王者の第一の思想は秩序と秩序の維持にあり王者たる親の第一思想は家族と其の扶養にあり。王者の關係行動は非人格的なり審判的なり、然れども父のそれは人格的なり倫理的なり。王は法律の尊嚴を維持せんがために犯罪者を罰し之が爲に監獄を建つ、父は罰するよりも之を懲らし法律の畏れを生せしむるよりは寧ろ不孝の子を立ち回らし落ちたる者を引き上げんとす。一は全体を總括し一は一個一個の人に注目す。斯く神の職分に差別あるが爲に益々其の一致和合して神の行爲を美はしからしむる必要あり。律法を蔑視して人を救ふは神に適しからず、神の恩惠を除外して其の尊嚴を思ふも亦偏せり。王の權も正道なり父の心も同じく正道なり。この兩者の完全なる和合を示すが爲に基督敎の救贖の敎理は神を榮むることの至れる者なり。神若し王にあ

らずんば人は之に和合するを要せざるならん。神若し父にあらずんば和合の道を見出だし得ざるならん。父なる神としては救主と苦んで人を救ふ道を立てざるべからず。兒子の罪は父母の悲みなればなり。

（四）以上說き來りて今達し得たる地位は根本的のものにして福音の根本敎義を撿するの標準を供するものなり。(1)父と子は反對の地位に立つものにあらず職分は異なれども意志は一致す。子は父の競爭者にあらずして使なり、王者の目的を消すにあらずして之を成就す。(2)父子共同の意志を表す事業は父の事業にして又た子の事業なり。子の血が父の愛を買ひたりと云ふは當を得ず、血によりて買はれ得べき愛は神らしからざればなり。これは寧ろ與へたる父、與へられたる子の苦惱、兩者によりてなされたる犧牲を表彰す。(3)王としては背法者の爲めを思へども自ら法を破りてまで之を救ふべからず。これ秩序を犧牲として憐憫の情を滿足する所爲なればなり。父としては權威の体面に妨げられ刑罰の耻を厭へども、權威刑罰の正當を認めざる心からず。然らずば自ら惡しき者の奴隸となり爲せし惡を賞賛するに當ればなり。父と子と共に苦むとは共に大權を重ずることを表はし、共に犧牲に與かることを表す。(4)『父の懷にある獨子』なる言を用ひて表されたる永遠の一体は、基督が一面父の意を成

就して人を神に和がしめ、一面人の心を導きて神に喜ばるることを爲さしめし時、歴史的に實現せられたり。(5) 子は基督教者の行爲の標準となり又基督教者の思想の標準となれり。この原理は希臘教會に於ては教會の正統となり、羅馬教會には法王の無謬に子形を以て原理の無謬を表し、ルウテル派の教會にては信仰によりて義とせらるゝ教徒となり、カルビン派の教會は一層根本的にして眞理に近く、主として神の恩惠ある意志及び品性を唱ふ。我等の起點は自然の神にあらず哲學の神にあらずして啓示せられたる神と神の子なり。彼が立てし處に我は立ち、神の子の目を透して神を見、彼が清め且大にしたる眼光を以て人を見る。然して人罪を犯したる時に神は苦まざるを得ず、彼の苦は罪人を至善者に歸らしむる犧牲となることを解し得るなり。パウロの言如何に深奥にして眞なるよ曰く『耶蘇は神に立てられて爾曹の智慧また義また聖また贖となりたまへり錄して誇る者は主に因りて誇るべしとあるが如し』。(柏井園君譯)



説教

人々は人の子を誰と言ふ乎

（太十六〇十三—十五）

神學博士　ジョン、クリッフォード

社會は如何に我を見るやと、基督が娜かたりとも掛念がましく見えし一事を讀では吾人異様の感なき能はず。蓋し人の首領たる者が自己及び其事業に關する世人の批評を氣にかくるは、畢竟するに虚榮の心よりか若くは我が弱點あるを洩露するものなればなり。一般の稱贊を博するに足る高貴なる人物になれば是の如き心情愈々少なきものなりと云ふ其証據には、先づ施洗者ヨハネを見るべし。彼れ耶蘇の人物を洞察し遥かに己よりも秀出する材能をこれに認め、將來是等の材能が其事業及び名聲に如何ばかり影響するに至らんかと預想し、『彼は盛んに我は衰ふべし』と言ひ得たる這般の謙遜と躊躇なき勇氣とは直にヨハネの人物を想見せしむるに足る。若くはパウロが哥林多教會と面抗し、雨の如く批評、非難、攻撃を一身に受けつゝも殆んど一笑に附し去て意に介せず、平然として『われ爾曹に審判かれ或は人に審判るゝことを尤も小事となす我を審判く者は主なり』と言ひ放てる事にも勝りて此異邦人の大使徒の歴史に美はしきものあらんや。

マコレー其ミルトン論にピユリタン主義の殊長を論じ、最も深く嚴かに神の審判を敬重したる自然の結果として世人の批判を毫も恐れざるにありとなせしが、是れ法官ジェフェリースの苦苦しき嘲弄及び皮肉なる諷刺をも、チャルス二世の宮庭より來る罵詈誹謗をも、柳に風と受け流して人評不介意笑而心自閑の樂天地を得たる基ひなれ。大人物は常に獨立獨行なり。只管わが行くべき道如何と顧る而已、世人の批評如何の如きは彼等の問ふところに非ず。唯我が責任

の實覺より一切を神に信賴して進むなり。

然るに見よ、高きうちの最も高き者、聖中の至聖、其品性に於て古今絶倫なる耶蘇基督、今わが弟子に世評を問ふ『人々は人の子を誰と言ふや』如何なる風評われに關して此地方に傳播しおるやと。想ふに是には深き理由なくんばあらざるなり。

（二）劈頭第一に吾人は基督が其弟子に此問を提出せられたる當時の心情を研究するの至當なるを見る。福音記者マコ及びルカは殊別なる此時期に於る基督の擧止に關して實況を髣髴せしむるものありて吾人は是に由り、此問ひの發せられたる動機を窮ひ得るなり。先づルカ傳を見れば、先是基督は父なる神の現前に在して親交を之となされし後に此質問を其弟子に發せられしものなるを知るべし。基督は平素の習ひとして我が生涯及び事業の危機急點に際しては必ず父なる神との深き親交をなして後、始めて之と接するなり。見るべし十二使徒選立に當ては、一夜を祈禱に明したるを。今玆に此質問を弟子になすや亦これに先ち父なる神と交り給へるを見る。基督は今や其事業の新發程をなさんとす。今や神の王國擴張の爲に新步足を着けんとす。吾人が然かく考定する所以のものは、軍士その兵をして更に敵軍の攻圍を開始せしめ、若くは敎師その學生の進級をなさんとする塲合と一般に、基督は其父なる神との親交の後、世人が如何に我れに就て考へおるか我が品性は如何なる印象を世人に與へたるかと質問する必至の目的ありしものなりとす。今しも基督は是れよりの「プログラム」の爲に新たに材料を蒐集せられおるなり。その取らんとする行程の果して是なるか否やを見極め、可出來丈けの成効を我が事業に收めんと、沈重に其証據物件を輕重しつゝありしものと知るべし。

若し是を否とせば吾人は地理上より更らに說明

を試むべし。時として地理にも天啓あり。事の起りし場所は該事件を解釋するの方法となることあり。玆にマタイは基督の一行が此際宛かも異教世界の邊境なるカイザリヤピリピに到れることを吾人が注意せんことを求む。一行の今や面せんとするところのものは異教世界の唯物主義なり、唯理主義なり、神に關する卑陋迷信の思想なり。然れば先決の疑問は基督に從へる是等の弟子が其新事業の極意を解しおるや否やに在り。彼等が果して基督を神の子とし基督に對する信念益々進めるや否やに在り。彼等が果して狐疑躊躇せず新しき經驗より新しき打擊の來らんとき斷乎として節を全うし得るや否やに在り。彼等は果して基督の上に臨む新しき攻擊に堪え得るや否やに在り。於是乎基督は如何なる印象の傳播するかを問ひ、重ねて又弟子らが基督に就て如何に考へおるやを問へり。其答の如如により、事業をガリラヤに於て繼續すべきか將た北方パレスチナの更に異教の部分に着手せんかを定めんとし給へるなり。

福音記者は尙これに一目的の存するを示せり。此問答ありし後なり、基督は之までなされざりし我が將來の秘密を我が弟子に示さんとし給へり。基督は我が最も信賴する其歸依者に我が身の上に將さに起らんとする事を自ら進で示さんとしたり。記者錄して曰く『此時より耶蘇その弟子に己のエルサレムに往て長老祭司の長學者たちより多の苦みを受け且つ殺され第三日目に甦るなど作すべき事を示し始む』と。基督は其弟子に對ひ己れと己れの事業、及び、其事業完成の方法と基礎に關して弟子だに若し之を納るるべくんば今あらためて之を啓示せんとするなり。然れば決すべき疑問は、彼等が果して我が示さんとする此最高の教理を納るゝを得るや否やに在り。弟子たちは基督の品性及び其內容につきて基督の殊別なる一事業、即ち弟子らの教

育に累を及ぼさゞる丈けの實覺あるや否や。基督は我が將來の命運を指擧して之を知らんと試みたまへるなり。新社會建設の事も亦告げられんとす。即ち敎會の創設是れなり。抑も此敎會たるや、陰府のうちより來る一切の力とても到底如何ともなし得ざるほどの强固なる大磐石の上に立つべきものなり、何となれば之れ絶對無二の巖上に確立すべければなり。而して基督は是等の事業を完成し、世界救濟の任を完ふする唯一の途は獻身の大義なることを告げんとするなり。かくの如くなるが故に、吾人は基督をば、今しも神との親交より來れる者として見るとも、若くは福音を異邦に傳へんとしてカイザリヤピリピの邊境に立てる者として見るとも、若くは今後の事業の爲に十二使徒敎養の點より見るとも、達する所の結論は一なり。即ち基督の此質問は、輕卒に出でたるにあらず、虛榮の心より發したるにあらず、神の王國の擴張に一歩を進めんとする準備と見るべきのみ。基督は今後の事業に就て最良の方策を立てんと欲して材料を聚めたるなり。蓋し事業の成敗は、一に其考案の是非に存すればなり。

夫れ世界を支配するものは思想なり。自然界の事も、乃至政治、制度、人物皆然り。ベーコン以前に於ては世人は自然運行の法を正しく解しおらざりしばかりに、其法則を悟り其勢力を利用するを得ざりしなり。然るにベーコンは自然界に對する新思想を世に示し、今世紀の進步發達を招くに至りたる諸般の發明の門戶を開放したり。當今の文化、平和、交通、商業等の興進の爲に吾人が使用する所の器具を我等の手に予へたるものは自然界に關する此新思想に外ならざるなり。又人若し政治は基督敎の範圍外にありとなすに於ては世は滔々として神の市を去りて惡魔の都に移らざるを得ず。然れども政治は基督の主義の上に立ち、國家は凡て基督と其榮

光の爲に治められ、一切の罪惡悉く國家より絕滅驅逐せざるべからずと考へなば、此る政事家は祈禱會より飲酒店に、飲酒店より復た乱酔の狂人の手を取りて祈禱會に歸るべし。國家なり市町なり事業なり世界なりに對して有する謬見は、取りも直さず其當人に誤謬ある事を意味するものにあらずや。社會改良は眞正なる社會觀を有せざるものゝ作し能はざるものなり。萬事皆かくの如し。特に人に關するものに於て然りとなす。人々若し自省せば我が生涯は、父母妻子教師等に關する我が思想によりて形られ、支配せられおるを見るべし。試みに何か我が心靈上の一大變化の發端を回顧せよ。『かれ我が目に觸りて我れ見ることを得たり』といふ此のパーソナルタッチは新生涯の發端なるを知るに至らんか。人物の感應力は無限なり。『人間は此驚くべき天地の中の最も驚くべき者なり』と曰ひたる一文學者あるが、こは吾人平素の經驗により

て明白に証明せらるゝ所にして、靈魂にも勝りて力あるもの世に存せず。基督は世人が己れに關して如何に批評するかと其弟子に質問し給へり。其質問されしものは基督の事業にもあらず、教の言にもあらず、奇跡にもあらずして我れに係る世評なり。基督は彼等弟子が基督の性格につき如何に考へて其思想が如何に其性行に影響したるや、今や開かれんとする新事業、新時代の準備の爲に、わが性格に關する彼等の說如何と只管知らんと欲し給へるなり。

(二)基督は永へなり。故に常に斯く其弟子に問ひたまふなり。今日も亦基督は己れに關する世評如何を知らんと欲す。基督は其王國を以て朝生暮死の果敢なきものと考へず、その事業は一夕のものと思はざるなり。曰く『われ擧げられなば万民を引ひて我に就らせん』と。エルサレムに始まり、此くて弟子はサマリヤに往き、次に地の四極に發せんとす。迷へる者を尋ぬるの

聖業に中止といふことなし。人類最後の一人が基督の足下に詭くまで、基督の弟子もアポストロも此事業の爲に進みゆかざるべからず。

吾人は新世紀の初項にあり、今新年の劈頭に立つ。基督は此際全じ質問を繰返へし『人々は我につきて如何に言ふや』と尋ね給ふ。新しき世紀若くは新しき年とは豈に唯に年暦上の數字ならんや。新時代は實に吾人に臨めるなり。基督敎會は幾世紀の困難を背め盡し、其組織を完ふしつゝ、基督みづから備へ給へる軍備豐かに、必勝を期して堂々たる姿勢を以て進軍せんとす。今日基督に對する世評如何。『人々は基督につきて如何に曰ふや』。之を問ふは宛かも時勢に適中したる至言なり。

（イ）吾人は先づ第一に基督に報告せんとす、耶蘇基督の歴史的實在、若くは基督の性格等に關しては今日ほど明了に、今日ほど完全に理解せられたるの時代なしと。五六十年の以前と今日とは思想の風全く其趣を異にす。以前に於ては基督なる人物の歴史上存在せしものなる事よりして立證するの必要ありしなり。今日に於ては批評的研究の進歩せる結果として、基督の歴史的存在の疑惑悉く一掃せられ了んぬ。故に吾人は人中の至聖至大至高なるものとして光明赫々たる歴史的基督の前に禮拜するを得。歴史的研究なるものは一たび一大驚慌を與へて敎會を振動したるものなり。ストロースの基督傳出るや、皇帝は一神學者に敕命して基督傳を更に起草せしめて是れに應答せしむ。ネヤンダルの基督傳は其一なり。歴史家の筆によりて吾人は我が父祖の知らざりし委曲を知るを得るに至れり。ハルナック曰く『從來排斥せられたる者の多くは今や精細の研究に由て再び確立せらるゝに至れり』と。『人々は基督につきて如何に言ふや』。吾人は此く質問されたる基督に對ひて告げんとす、曰く世に出でたる大首領者のうち主は

最も實在なるもの也。主の歷史的存在の証明は今や眞に完全にして主が人類の歷史に占むる位置を疑はしむるの餘地なしと。

(ロ)第二には基督は人間生涯の圓熟完全なる師表として目さるゝ事なり。吾人若し賢明誠實なる者たらんとせば『主の歩み（インヒステップ）し如く』に歩まざるべからず。ペテロの言ひし如く基督は『己の跡に隨はしめんとて式を我儕に遺し給へるなり』。基督の品性は則るべき者、則らざるべからざるものなりとの思想は今や天下の人心を支配す。基督の思想の高貴無比なる。迷へる者を獲んとする熱涙。可憐なる者、貧しき者、罪に墮落せる者に對する深き同情。克己献身の大義。父なる神に對する美しき信念。世人の反對、習慣、傳説を秋毫も介意せざる。十字架に導きて之を其上に架けしむるに至りたる正義公善に對する忠信。是等を模範とするものは當今の世の最も高尚なる人物なり。是等の事に於て基督の人物は完全なる一大模範となり秀然として聳ゆるは、實に歷史上の大觀なり。人各その説を異にすることあり。然れども此一事につきては萬人言を一にす。『イン、ヒス、ステップ』の著者シエルドンも、ジヨン、スチユアルド、ミル も意見の衝突なし。此論理家哲學者は、人間言行最高の模範を得て我が生涯を律せんと欲する者は須らく基督に則らざるべからずと言ひしものなり。然り、誠に之れ人間至大の義務なり。小説に同じ趣向を寫せるものはシエルドンなり。吾人は敎會の信條に關し其他の事に於て他と意見を異にする事あるべけれども、此點に於ては萬人説を一にして毫も違はずと謂ふべし。

『我に從へ』との基督の語が、敎會の歷史上に一時たりとも其反響の聲を止めたること無し。固より不幸にして『われに從へ』と基督の言ひ給へるに『爾ら我に就て論せよ、我につきて爭へよ』と聞き違へて、基督の性格につき敎會に於て議

論紛々たりし時の無かりしにもあらず、然れども此は不幸の極なり。一書あり、中世紀の暗黒の中より傳はりて今日に至れり。ケムピスの『イミテーション、オフ、クライスト』これ也。此書は一山の高く空に聳へて連山を壓するが如く、獨り中世の諸文學を凌駕す。幾多の人々の敬念を修養し、暗中の光となり、其光明輝きて今日に至り人尙ほ多く之を愛讀す。中世紀に於て獨り兀立せし此の書の大思想は、今や基督敎會を通じての理想となれり。若し夫れ墮落せる男女を救濟し、酔狂者をして悔悟せしめ、誘惑に超然たらしめ、罪惡と不幸に勝たしめんと欲せば、吾人は唯に基督敎徒たるばかりにては充分ならず。基督のものとならざるべからず。唯に敎會員たるばかりにては滿足ならず、全く基督に同化したるものとならざるべからず。ステッドが『基督若しシカゴに臨らば如何』と題する一書を公にしたる爲めにシカゴに墮落者救濟の會設立せらるゝに至り、此書も廣く行はれたるが、之をシエルドンの作に比すれば到底其比にあらず。シエルドンの『イン、ヒス、ステップ』が斯くも人心を動かしたる所以のものは何ぞや。その文章にあらず。時に流暢を欠くものあればなり。引用すべき警句あるにもあらず。而かも讀書界を振動したる此の如きは他なし、吾人をして言はしめば、之れ著者が時代の心理を洞察し、人心の歸向を窺得して、基督をば最高の摸範、人類の大師表として、敎會の面前に標置したる此着筆の機智に在りと。

（八）第三に吾人は基督の質問に答へて基督に呈し得る報告は、基督は個人及び社會の救主たる一事の一般に承認せられたることなり。迷へる者を救はんとせば自ら献身せざるべからず、人を贖ふには價を拂はずしては出來ず、墮落者を引き上げんとせば、宜しく之に近づき之が下になりて其者を高めざるべからずといふ事が、

人心に悟得せられたる事未だ當今の如きは曾て有らざる所なり。『人の子は迷へるものを求めて救はん爲に來れり』。基督問ふて曰く『人々は我を誰と言ふや』と。『罪を赦すの權威』なるものは基督なり。基督は人類の理想なり。救主なり。人を救ふの方法は十字架によりて示されたり。世人はカルバリーを以て小山の如く思へども、旅行家の說くところは全く違へり。然れども十字架に至りては基督飛躍の絕頂なり。此十字架によりて基督は、我等の罪禍を神が赦し給ふとを啓示し給へるのみならず、かく赦されたる者は、世界救濟の爲に講せらるゝ神の此方法に協賛し、日々十字架を負ひ、神の此目的完成のため必要とならば己れも亦其上に身を献ぐるの覺悟なかるべからざることをも吾人に啓示し給へり。曩日にありては如是は全く道理に反し科學に反せるものと考へられしこともありしが、今日となりては哲學者が明言する通りに、十字架は健全なる道理なり。生きんとせば死せざるべからずとは科學の證言するところにあらずや。生物學上に於ける動かすべからざる事實を見よ。十數年以前までは、自然は徹頭徹尾殘忍無情なるものなりと考へられ、生存競爭は利己の競爭に外ならずと信せられしも、此說今日に於ては不完全なりとせられ、生物は自己の爲よりは寧ろ多く他の生命の爲に苦鬪するの事實自明せり。生物生命の神秘的事實は母たる事にあり、身を苦めて生產するに在り。之れぞ十字架の原理の說明せられたるものにあらずや。然れば得失に關する基督敎の大哲理は、學問および哲學の共に等しく絕叫する福音なり。是故に吾人は基督の前に至り、今や主の大敎訓は深く人の思想に根を下し、達識具眼の士は世界救濟の道は、自我の威力より脫却し、人類に對する主の熱誠と主の献身の大精神を體するにあらざれば到底出來難きものなる事を次第に悟るに至れりと報

告するを得る也。

（二）最後に吾人は基督に告げんとす、基督は宗教終局の權威たる事世に公認せらると。權威の至上は法王に非ず、敎會に非ず、聖書に非ず、聖書、敎會、良心に存する基督なり。旅行家および宣敎師は世界諸宗敎の內容を世に紹介して基督至上說を堅ふし敎會を强めたり。吾人は回回敎、佛敎、儒敎、その他諸民諸宗敎を知る。その經典は翻譯せられ、その內容は自由に批判せられたる結果として、論結されたる一事實は、基督敎の創立者は、之等の諸宗敎より其善きものを採りて之を基督敎に編入し其一をも逸せず、且つ我が眞理をも之に附加したりといふことなり。是故に基督敎と是等諸宗敎との戰は、破壞を期するにあらずして、基督敎を以て是等諸宗敎中の明玉を選別し基督によりて之を最上の高地位に雄飛せしめんとするの戰なり。回回敎にして神の唯一を說くか、見よ基督敎に於ては一層の精力を以て之を主張するなり。佛敎は克己妙法の示現なりと云ふか、見よ基督敎に於ても此德なくんば基督敎なしとせらるゝほどまでに此德は基督敎の一大殊質なり。儒敎に於ては過去を敬すと云ふか、見よ上古アブラハムより下今日に至るまでの人類の發達全路の榮冠たるものは即ち基督敎にして基督は過去に於ける神の全事業の燒點なり。未來に於ける進步の確證なり。之れ福音に示されたる事實なりとす。

或はエレミヤの優情と勇氣を備へたるものといひ、成は預言者エリヤの再來を想はしむる豪壯の氣ありと風評する等の事を聞けるナザレの木匠は如何の感をなしたる。彼れの言行は少なくとも一時はユダヤ人民をして預言者時代に生存するの感あらしめ、神は過去の預言者の一人を我儕の間に起して我儕を忘れ給はずと彼等をして考へしめたる程なりき。之を聞ける基督は多少の慰藉を得たるならん。然れども其求むると

ころは此以上なり。故に更に問ふところありしなり。基督の求むるところは報告者にあらずしてアポストロなり。世評の反響者を得て滿足するが如きものにあらず。基督は、わが靈の奧底よりして基督の人物と其感化力とを斷言し得る生ける實覺を有する人物を求む。乃ち問ふて曰く『爾曹は我れを誰とするや』と。わが愛し、わが教へ、わが勞し、わが苦めるところの爾曹、わが友たる爾曹は我を言ひて誰と言ふや。基督は個々の告白を求め給ふ。風聞世評の上に豈に堅固なる建築をなし得んや。吾人は『われ先きに見えざりしが今明らかに見ることを得たる唯この一事を知る』と言ひ得る人物を要す。『今汝の言ひし事によりて信ずるにあらず』、法王の言によるにあらず教會の教へによるにあらず教職にもあらず『われら自ら聞て此は誠に世の救主と知れるなり』と言ひ得る人物にあらずんば何ぞ之に遺業を托するを得んや。

基督教進歩の由來は個々の改信に在り。眞正の宗教は常に創作的なり。初めに於て或は摸倣あらん、然れども此時期は間も無く去り、人々は銘々自個の心に基督につける經驗を作らざるべからず。今これを聞きてだに尚ほ吾人の心を聳動するに足るほどの熱昂を以てペテロが、大膽に而かも恭々しく充二分の信仰を以て『爾は基督活ける神の子なり』と告白するや、基督は滿腔の喜に溢れ、祝福の言を以てペテロの告白を嘉稱し給へる理由も畢竟これに外ならず。是れ實にペテロに於ける基督經驗の端緒なり。此基督經驗の始めは即ち基督が建築せんとする教會第一の礎石なり。此建物や今なほ工を終らず、基督を告白する凡てのペテロの上に愈々高く、愈々廣く建てられつゝあるなり。基督は報告者、反響者の大教會を建てんとするに非ず、アポストロ、宣教師、福音の使者の大教會を建設せんとし給ふなり。

吾人にして若し基督は絶對唯一の權威なり、個人及び教會の救主なり、宗教終局のォソリテーなりと世評既に一定せるを見るに於ては、喜悦自から我が心に生じ、又世界傳道の爲に驚くべき助となるべきなり。然れども吾人は更に基督が我等の顔を直指し、『爾曹は我を言ひて誰とするや』と尋ねつゝ我等に來るを以て、一層大なる喜となす。而して之に對する吾人の答如何ん。吾人は即時に此く答へ得るや、曰く、主よ爾は我れを贖ひ給へば主は我が救主なり、爾は我が教師なり、われ其言に耳を傾けん、爾の命じ給ふまゝに我れ之に從はん、主よ爾は我が王なり、我れ一切を主に献げ奉らんと。若し能く此の如くんば吾人は又之れ一のペテロなり。基督は其教會を我れによりて繼續し給ふべし。(小林彦五郎君謹譯)

基督に由れる勝利

博士　コルチリオス、ウォルカー

我儕をして我主イエス、キリストに由て勝を得しむる神に謝す(哥林多前書十五章五十七節)

此れ使徒保羅が人間の復活を論じたる結尾に於て絶叫したる凱歌と感謝との聲なるなり。此れ罪と死の勢力より救はれたるを祝する凱歌にして又此救ひを與へし恩人に向ての感謝なり。更に又神の約束に賴りて得られたる勝利の讃歌なり。保羅曰く『錄して死は勝に呑れんとあるに應へ……我儕をして我主イエス、キリストに由て勝を得しむる神に謝す』と。去らば神の眞理の光明に照して此勝利とは果して何なるか。抑敵は誰なるか。吾人にして明に此大なる救ひ、此大なる勝利を瞭解せんには吾人が其れより救ひ出さる可き禍惡は何物なるか、吾人が當に戰ふ可き敵は誰人なるかを確知するの必要あるなり。此本文を一讀して其前後の關係を按ずれば此等の疑問に答ふるは敢て困難なることに非ず。

此れ死即ち肉体の死に對しての勝利にして人の死後に於ける其生命の恢復を云ふものなるや其文辭の中に明かなり。然れども眞實なる祝福の結果として之を考へ來れば更に他に意義あるものに似たり。啻に死に於ける勝利なるのみならず、死をして禍害、苦痛、恐怖の源たらしむる死に於ける萬事に打勝たしむるなり。死は此處にては擬人して大破壞者と見做されたり。彼が揮て以て人類を破壞する所の刺若しくば投槍は罪にして特に其をして致命的たらしむるものは神の律法なり。去れば人類の破壞には三個の要素の互に相結ばるあり。即ち罪、律法、死是れなり。罪は人性の道義的及び心靈的の腐敗の中に人間自身と共に始り、其結果は實際の犯罪となつて現る。此の如きの消極（當に爲す可きを爲さゞること）及び積極（當に爲す可からざることを爲すこと）の犯罪は神の律法に背叛せしものにて遂に其犯人の上に刑罰の宣告來るなり。去れば死は即ち刑の執行者なり。敵とは即ち其等を云ふなり。然らば如何にして其等の敵より救はる可きか。如何にして其等に打勝つ可きか『我儕をして我主イエス、キリストに由て勝を得しむる神に謝す』と。神は如何にして基督に由て此勝利を與へ玉ふか。其確証は如何にして明にさる可きか。罪は纒綿し、汚染し、墮落し、而して奴隷たらしむ。律法は罪に定め、死は破壞す。去らば耶蘇基督に由て如何にして其等に對して終極の勝利が得らる可きか。

（一）此問に答へんには破壞の一動作力たる律法は單に他の動作力たる罪と相聯結してのみ始て力あるものなることに注目せざる可からず。『律法は活かす爲に立てられたる』ものにして殺す爲に作られたるものに非るなり。律法は万物生命の源泉たる彼自身即ち生命たる神より來りしなり。律法は聖、義且つ善なり。人若し能く從順に其指導に從はゞ神に嘉納せられて其祝

福を享受するなり。此の如く律法其自身に善良なるものなれども他の或る者の爲に『我儕を死なしむる』ものとなるなり。保羅曰く『罪は我れを欺き誡（律法）に由て我を殺せり』と。此の如く人を活す可く立てられし神の律法は罪に由て死の器械となりたり。併し此れ單に道義法のみに非るなり。凡ての神の律法、勢力亦皆然り。自然界に於ける神の統理は亦心靈界の其れに同じ。自然界の律法、勢力亦人間の生命、幸福、利益の爲に存するものたり。故に之に從順なるものには生命を與ふ可しと雖ども苟しくも之を藐視し、之に逆ひ之に反く者には害と苦痛と死を齎らすなり。此の如きの例は枚擧に遑あらず。『神は万事を其位地其時期に於て美麗に造り玉へり』。重力、親和力、生活力、本能、理性、道義的確信、心靈的感情、其他有らゆる物質的、智力的、道德的、心靈的の力は皆人類の利益と幸福との爲にあるものなり。凡ての事は皆善なり。神の計圖は本と善なり。人能く適當に之を用れば亦善なり。唯之を誤用し逆施倒行するが故に害となり死となるなり。其一方に於ける破壞力は正しく他の方面に於ては人類をして幸福ならしむるの勢力なるなり。人間の行爲を統制して其品格を形造し成熟する心靈的律法に至ては其特に然るを見るなり。之を重ずれば生を得之を輕ずれば死を來らす、其神聖なる律法を犯す者に呪咀の來るや的面にして其犯罪の行爲と共に直ちに其罪案の宣告あり又別に迂廻なる審理の必要なきなり。判士は既に十分に其事柄、其動機、其成行の如何を熟知し犯者は唯審理を待つに非ずして刑の執行を待つのみ。凡ての者皆罪を犯したれば此宣罪も亦凡ての者の上に下さるるなり。去れば『全世界』は其律法の目より見れば皆死す可き者たるなり。『我儕をして我主イエス、キリストに由て勝を得しむる神に謝す』なる本文は即ち此死罪の宣告に關して言はれたる

者にして救ひとは即ち此宣告よりの救なり。『基督は自ら我儕の爲に咀れて律法の咀いより我儕を救ひ玉ふたるなり。神は嘗て罪を知らざる彼をして我儕の爲に罪人となり、罪の献物となり、罪人として取扱はれしめ玉ひ、我儕は之に由て正しき者の如くせらるゝを得たり』『神はイエスを信ずる者を義とし尙ほ自ら義たらんが爲に其血に由りてイエスを立てゝ信ずる者の挽回の祭物とし玉へり』。キリスト、イエスに在る者は罪せらるゝことなきなり。我儕の神にして人なる仲保者なる基督は我儕に代て律法の下に在り凡て其が要求する所に應じ玉ひ、斯くて其身と行爲とに由て全く我儕の罪案を撤去し玉ふたり。イエスは罪と其刑罰とに於て全く人類と一となり之に由て天父に容受せられ罪に打勝つことに於ても亦人類をして己れと一ならしめ玉ふたり。此の如く人類はイエスに由て第一の敵、即ち罪に定むる勢力なる律法に對して全く救ひ……勝利を得たり。曰く『爾の罪は赦れたり安全にして往け』、『キリスト、イエスに在る者は罪せらるゝことなし』。斯くて死の宣告は生命の宣告に繼襲されたり。

（三）更に人類には律法と相關聯して人を罪に定むる源ともなる可き他の敵あり罪即ち是れなり。律法が罪に定むるの外罪が破壞的の勢力を揮ふ他の狀態あり。人は之と爭ひ戰ひ之に打勝たざる可らず。之より救はれざる可らず。即ち其道義上、心靈上の墮落に沈淪せしめんとするの勢力より救はれざる可らざるなり。恰も罪の行爲が外部より律法に由て刑の宣告を齎らすが如く内部よりも亦其宣告の一部として道義上の衰弱と墮落とあるなり。

『人は其胸に火を懷て其衣をして燒けざらしむるを得るか』、『熱炭の上を步して其足焦げざるを得るか』誘惑に負けて罪に手出しする者亦此の如く、遂に其傷痕を靈魂に印し其道義を失墮

せしめざるを得ざる也。保羅は罪の羈絆に由て人性の益々墮落する力を叙して曰く『我れ善を行はんと欲ふ時に我衷に一の力ありて之に抗するを見たり。即ち惡の我に居る此一の法あるを覺ゆ。蓋我れ內なる人に就ては神の律法を樂めども我が肢体に他の法ありて我心の法と戰ひ我を擄にして我が肢体の中に在る罪の法に從はするを悟れり。我れ願ふ所の善は之を行はず反て願はざるの惡は之を行へり』と。此れ人間の善き良心と墮落したる性質との爭闘なり。而して此爭闘は大に罪の習慣に由て增大せられて益々惡に克つの希望薄くなる者也。我衷なる善に抗するの力は之を肆にするに由て益々強烈なる者なりと雖も此力より救ふて之に打勝たしむる亦なきに非る也。『噫我れ困苦める人なる哉此死の躰より我を救はん者は誰ぞや』。惡習に纏綿せられたる此死の体よ！能く其等の肉慾を制服し其等の慾情を統御し其等の慾望を規制し其等の惡習を破壞して遂に善なる者として其主宰權を得せしむる者は誰ぞや。此の如く道義上衰弱し心靈上墮落したる性情中には最早自ら救ふの力なきなり。旣に神の律法に背て罪に定められ、自ら放肆其品性を毀ちたる罪の奴隷は只其暗獄に繫縛せられ其呼出されて刑の執行を受くる迄絕望して待つの外なきなり。律法の下に死せし者、罪の中に死せし者、噫我れ困苦る人なる哉。然れども人間には此の如き狀態より救出す可き力とては一もあらざるなり。唯此に一の力あり。『此の死の体より我を救はん者は誰ぞや是れ我儕の主イエス、キリストなるが故に神に感謝す』。即ち是れ神の救ひなり。『基督我れを強むるが故に我れは萬事を爲し得る』と。此の如く救主に由て啻に罪に定むる力のみならず亦其我儕を擄にする力にも克ち得るなり。斯くて彼に由て救ひと聖めとの恩寵を均しく享け得るなり。基督を信受して自由を得るや心に神の子の

精神を得啻に其力を得るのみならず亦眞に天意に從順に愛と喜樂とを以て善事に盡くすを得るなり。此の如く基督に在て人は腐敗の羈絆、罪の奴隸より免れて神の諸子の喜ばしき自由に入ることを得、第一の敵なる律法に對しての如く亦第二の敵なる罪に關しても人類は我儕の主イエス、キリストに由て全く勝利を博するなり。

(三)然れども尚ほ此に更に他の大敵あり。然ども此敵も一時恐怖す可き王として其勢威を逞くすと雖とも終に基督に由て克服せられざるを得ざる也。先つ蛇に由て其踵を碎かるゝも遂に其頭を碎かざるを得ず。活ける者と死せる者との主は均しく兩者に勝を得しむるの主なるなり。先づ第一に此勝利は其大敵と相合せし時其れに伴ふ恐怖より救はるゝことに由て始るなり『人は肉と血とより成れば基督も亦血肉を受け玉へり。これ自ら死することに由て死の權力を有する惡魔を破滅し死を怖るゝことに由て生涯繫がれ居る者を救はんが爲めなり』と。死の刺即ち死をして恐怖す可きものとならしむるものは罪即ち罪の感念と其結果を恐るゝの情なるなり。此の如き罪の感念及び其結果の恐るゝの情の外に人間身体の解体なる死に就て別に自然の恐怖あり。生活とは即ち是れ死を避くることなり。食すること、衣ること、衛生、醫療是れ果して何の爲めぞ。是れ時には意識的に時には無意識的に死を避け生に就くの目的を以て斯く爲さるゝものに非ずや。此れ即ち人性中に深く植付けられたる本能なるなり。此本能や勿論強くして人性中に少なからず働らきつゝありと雖ども然れども是れ死をして恐怖す可きものとならしむる重もなる要素には非るなり。此恐怖は自然の負債に非ずして寧ろ罪の價なるなり。罪を意識する者、神なく希望なく神の審判を恐れつゝ死する者には死は罪の價なり。噫死!、罪人には如何に恐ろしきもの!、此世の外に何物をも有

せざる者には如何に恐ろしきもの！『我儕をして我主イエス、キリストに由りて死の恐怖に勝たしむる神に謝す』、『キリスト、イエスに在るものは罪に定めらるゝことなし』此死の刺を拔き去て罪の感念を消滅せしめよ。神の赦罪を得て平安を得よ。去らば死に何の恐る可きことかある。我儕をして我儕が死して相逢ふ所の神は我が愛する天父なるを確認せしめよ。我を審判く主は我救主、我に同情ある友、我長兄なるを記憶せしめよ。彼は凡ての試みに於て我を助け得ん爲に自ら苦んで試みられ玉ふたり。彼は我が平和に安全に死し得ん爲に自ら慘痛の中に死し玉ふたり。我にして凡て此等の事を知らんか肉体の解体に於て何の恐る可き事かある。固とより死に關しては未だ經驗せざる身体の變化あり隨てまた味ひ知らざる苦痛ある可れば其を恐るゝ本能的の恐れはあらん。地上に於ける愛する者に永訣するの悲痛はあらん。有限より無限に移るに關して心靈上深き嚴肅なる心配はあらん。然れども死の最惡の部分は既に取り去られたり。其本能的畏縮さへも臨終に期せずして附與せらるゝ恩寵に由て往々忘れらるゝものなり。此れ此の如き時には神の恩寵の價値が最も現はるゝものなるが故に期せずして主は靈魂の最も必要なる時に與へ玉ふなり。イエス、キリストに由て玉はる神の賜物は生命なり。死の中に在る生命なり。永訣の時に於ける平和なり。恐怖は去り、罪の羈絆より救はれ、永遠に自由を得るなり。然れども此等の勝利は單に最後の終局の勝利の序幕たるに過ぎざるなり。勝利は單に律法、小罪、死の恐怖に對しての勝利のみならず亦死其物に對しての勝利なり。死、最後の敵は他の敵が悉く克服せられたる後に終に自らも壞滅せられざるを得ざるなり。『此の壞る者は必ず壞ちざる者を衣死ぬる者は必ず死ざる者を衣る可し。此壞る者壞ちざる者を衣此死る者死

なさる者を衣ん時聖書に錄して死は勝に呑れんと有るに應ふ可し』と。此の如く救主基督の死と墓より人性を回復するの事業は完成したり。斯くて遂に終の日には縱令ひ死と腐敗とが如何に惡害を逞くするも主の民は主に見へ主に嘉納せられて欣喜す可きなり。人は其体も其魂も其靈も皆基督の力に由て贖はれ、基督の靈に由て聖められ、基督の聖像に同化し、天國に於て基督と相交るに堪ゆる者とせらるゝなり。罪とサタンとは此世を汚し、害し、破壞したり。而して基督は之を淸め、之を高め、之を祝し、之を回復し玉ふたるなり。保羅が『我儕をして我主イエス、キリストに由て勝を得しむる神に謝す』と勝利の歡聲を揚げたる實に大なる結果を目擊したるに由るなり。我儕は神が此勝利を與へ玉ふたる方法を忘る可らず。果して誰に由り如何なる方法に由て此勝利が來りしか。『我儕の主イエス、キリストに由てなり』『彼は神に立てられて我儕の智慧又義又聖又贖となり玉へり』。此中に罪に於ける彼の犧牲、彼の復活、聖靈の分與、彼の昇天及び天父に對しての彼の執成は含れたり。彼は律法の下に全く自らを犧牲にして我儕をして律法の上に勝利を得せしめ玉ふたり。彼は自ら罪の爲に死し其靈に由て均しく罪に死したる我儕の中に働き我儕をして罪の上に勝利を得せしめ玉ふたり。彼は此の如く罪と律法と死との恐怖を取り去り我儕をして其實際の經驗に於て死に勝たしめ玉ふたり。而して彼は最後に彼れ自身と其聖像に似たる彼の民との復活に由て死其物を取り去り、生命—完全にして盡きざる生命を與へ玉ふなり。此の如く人類の敵なる律法、罪、死の上に彼に由て最後の全勝あるなり。然れども此の如く基督に由て其信徒に保証せられたる此勝利は未だ地上の經驗に於ては十分に到達せられざるなり。其要意の或る物に對しては尙は戰鬪中に在り。我儕は今は敵前

に在て戰ふ兵士なり。奬勵の語は先導者は來れり。曰く『我愛する兄弟よ定固にして動かざれ而して常に主の工を勵め、蓋は爾の働は決して主に在て無益に屬せざればなり』と。如何なる反對あるも貞固にして動かざれ。『常に主の工に勵め』。單に惡の攻擊に耐へて靜に立つのみならず宜しく進んで攻勢的の態度を取る可し。主は旣に其事業を成し玉ふたり。繼で之を完成するは其徒の任なり。宜しく『爾の働は決して主に在て無益に屬せざるを知るが如く』に行ふ可きなり。彼は誠實なる主にて在すなり。主に事へて盡くせし事は決して空しくならざるなり。決して顧みられずして終らざるなり。主は善く之を知て之を嘉納し玉ふなり。期の至るに及んで必ず豐かなる應酬あるなり。而して曰く『アヽ善且つ忠なる僕ぞ爾の主の歡樂に入れよ』と。アーメン（柏木義圓君演）

雜　錄

福音書以外に見ゆる基督の語

スペクテートル

不思議にも福音書以外に於ては、新約聖書中基督の語を引用すること少し。使徒書翰には基督の精神透通すれども、基督の用ゐられたる語を錄すること甚だ稀れなり。若し夫れ引用は使徒たちの習慣なりしを思へば此事更らに奇を增さゞるを得ず。解する者あり曰く(一)之れ記者が儀文は殺すといふ一念に制せられ、單獨の言語は又その反對に引用せられて無益の議論に終らんことを恐れし爲めなりと。又曰く(二)世間の熟知するところを避けんとしたるなりと。更らに解する者あり(三)記者は我等が思ふよりも意外に多く引用したるならんも其當時人々が餘りに能く熟知しゐたれば一々此は基督の語なりと注意する必要なかりし也と。最後の說は勿論全くの臆

説に過ぎざることなるが、さりとて注意して使徒書翰を讀むものは、時々記者自身の語とは考へられぬ短句に接することあらん。これを例へば『世の憂は死に至らしむる也』といふが如きを見よ。又ヤコブの如きは『爾ら誓ふ勿れ是を是とし否を否とすべし』と記したるも之れが主基督の語なりと格別注意をなさゞるなり。

それで其説明の如何は兎もあれ、是等の記者が基督の口より出でたるものと明言するところのものに就きては、格別に趣味あるものとす。四福音書中に見えざるものに至りては殊に然りとす。是等の語たる多からず、且つ大概は天來の幻のうちに記者の心念に反響して保存せられたるものなるが、何れも甚だ興味に富めり。

先づ聖パウロの心念に起れる言より見ん。かれは問罪使としてダマスコに赴かんとする途にて現れ給へる基督自身によりて改信せるものと自ら信ずる者なり。その時主の語に『汝何故われを窘むるや、汝刺ある鞭を蹴るは難し』とあり。パウロは是等の語に就て直接説明するところなけれども彼れの生涯及び思想を見れば自から説明をなして餘りありとす。彼れは基督教徒ならざりし以前に於て其人物宗教的なりしものなり。確かに其天性殘忍酷薄なるものにあらず。却て深き同情心を有したる人物の如し。假令その改信のころに於ては情頗る激し、男女に係らず基督教徒を獄に送り、意見を異にするばかりに彼等を用捨なく迫害したり。而かも其沈靜なる際に至りては我が爲すところを見てパウロは甚だ好ましからずとなし、自然の人情は彼れを促がして我が事業を中絶せしめんとし、彼れの所謂異端者なるものを其儘に放任しおかんとせしめたることならんか。殉教者ステパノの顔は時おりには『天の使の顔の如く』パウロの眼底に映じ來りしとなるべし。然れども之れが神の刺ある鞭なりとは氣もつかず、自然の良心と爭ふ

て依然迫害を繼續したり。此の間際に迫害者たるバウロの事業は天來の幻によりて突然抑へられけるが基督の語は此の際全く温和にして嚴きところ無し。宛かも、誤れる宗教を根絶するは正當の義務なりと絶叫する殘酷なる論理と、之れを一方に他方に於ては、憐憫を促かす道念の一大衝突を胸底に伏せたる此の可憐なる犧牲の苦痛に對して同情止まんとして止む能はざるが如き風情あり。又たバウロの改信は突劇なるものにあらずして久しき苦悶を經たるのちに始じめて得たる勝利たるを示すものなるに似たり。バウロは乃ち天の示に從ひ、一旦わが宗敎的義務なりと考へたりしものを放擲し、基督の命令に從ひ、異邦傳道の準備に入れり。天來の聲の語によれば『彼等の目を啓き暗を離れて光に就きサタンの權を離れて神に歸せしむ』るに在り。細々しき信仰の告白はバウロにも求められず亦た異邦人にも勸められざりしなり。共に等しく、基督敎律法の活力のうちに入るにあり。諸てにゆきわたる神の求引力のうちに引き寄せらるるにあり。バウロは更に主より直接に聞きたるもの一を世に傳へたり。これ彼れが健康を望みたる祈禱の許されざりし時の事なり。ルカはまた其大なる友より聞けるものを記す。この最後の超自然の出來事はバウロが甚しき逆境に立ちて殆んど失望したりし時に起れり。羅馬の有司は彼れを獄に投ぜんとし、人民は狂怒して彼を寸裂せんと欲す。四圍の不遇を回顧して何ぞ寂然たらざるを得んや。その夜主はバウロの傍らに立ち給ひ、『バウロよ勇め』と言ひ給へりとあり。又『受くるよりも予ふるは福なり』とは之も主の語として使徒行傳中に記さるゝものにして、宛ながら山上垂訓中の一節たるの觀あり。吾人は是語によりて一の事實を見る。基督は材能あるものが人を統御し、指揮し需要に供給する地位に立んとする希望を抱くを敢て非と

し給はざる事なり。人に其責任を感ずるの念慮を增加せしむるは基督の教訓の一大目的なり。基督は權威の妄用を酷しく加責したりと雖ども、其信托を忠實に果たす報酬として、其人の責任と力量とを益々增加せしめて、其保有する權威の使用を許し給ふ。主人の留守に當りて家の取締に立てられし者が奴僕らを打ちたゝき、飮食して興じたる人物は僞善者と伍せらるゝ人物に過ぎざるも、その下どもの事を心にかけて己れ却て『凡てのものに僕』となり『その目を醒まし』おりしものは『福なり』と言はれしにあらずや。

更らに基督の語として一般に認めらるゝもの一つ默示錄中に在り。曰く『視よ我れ戶の外に立ちて叩く若し我が聲を聞て戶を開くものあらば我その人の所に就ん』と。此語は聖靈が諸教會に告げたるものゝうちに存ずる一語なるが、記者は寧ろ之を一層直接に基督に歸し、世人も亦

之を前後文章の關係より裂き離して彫り上げたり。吾人此句を讀むに於ては羅馬人が、上なる高き所、下なる深き所に基督を求むること無く、『道は汝に近く汝の口にあり汝の心にあり』と注意せられたる一警語に想ひ至らずんばあらず。

以上摘記せる諸語を讀むに於ては、吾人は基督教なるものは「バーズエーション」の宗教にあらずして、「バーセプション」の宗教なるを知るに至らん。基督教は是を解得せんと欲せば人何物をか犧牲にせざるべからずといふが如き、人間の性質に緣遠き宗教にあらずして、之れ健全なる人間に對する「インスピレーション」なり。

基督教は人間の最高なる天性の要點なり。人間最愛の希望なり。文明の冠なり。人間に於ける『人己れの爲め』といふ卑しき獸慾死刑の宣告なり。ドグマ神學は次第に其力を喪ひつゝあるを見て或者は衷心悄々たり。以爲、信經の誤謬可能をゆるすに至れば基督の教訓は其權威墜落せ

んと。即ち此るものは神の禮拜は諸人の此る行爲を新たに是認するに及で忽ち衰ふべしとなすなり。何ぞ知らんや、基督教ドクマは基督教倫理の勢力益々發揚せらるゝに從ひて其活力を復興する者なる事を。近代に至り、基督の教訓が人間情念の潮流を指方し、慾念の暴風を鎭壓する一の活方たること認識せらるゝや、基督の語は『神の活ける言』たること自ら現れ來り、基督一言の命令により暴風狂雨忽ちにして其勢を收めたるを見て驚きたるアポストロたちの如く『こは如何なる人ぞや』と問はざるを得ざるに至れるなり。

新約聖書中未知の預言者

スペクテートル

希伯來書に關しては未だ一の定説なし。或は之を以てアポロなりとし、或は之を以てルカなりとし、或はアキラ及びプリスキラとなし、其他聖書學者の臆説一にして足らず。蓋し基督教に對する初代の信仰は豐かに此書中に露洩しおりて、我觀の基督教を此書中に發表したる記者の何人たるかは不明なれども、兎に角興味轉た多しと謂ふべし。希伯來書記者の基督教は良心の宗教なり。望の宗教なり。記者は朽瘢すべき儀文主義より一轉して、大なる慰藉を基督教の中に得たるものなり。説明および文飾の爲めに、時に議論の糸の弛めらるゝことあれども、ては別として、ともかく第一世紀の終末以前、學問の素養ある一學者（パウロに非ず）が、基督教を如何に見たるかを知らんと欲するものにとりては、希伯來書の興味は永へに失はれざるなり。

按ずるに希伯來書の特色は、そのオプチユミズム（樂天主義）に存す。望は希伯來書記者の觀たる此新宗教の一大要素なり。基督の家眷は、

信仰と望の喜びを終まで堅く保つべきものなり。信仰と望の間に記者は差別を立てず。故に『信仰は望むところを失はず』と曰ふ。而して記者は、わが稱揚せんとするところの望の力につき、『雲の如き證人』のうちよりして、故らに此新宗教を毫も知らざりしところのものを採り來りて幾多の説明をなせり。『信仰と伴添(つれそ)ふ理想』とは、所謂望なるものゝ定義なるが、こは記者の觀たる信仰の説に善くも合へり。試みに記者の語るところを聽け。説いて曰く、『信仰に由りてモーセは成長せし時パロの女の子と稱るゝを辭みたり。暫らく罪の樂を享んよりは寧ろ神の民と共に苦難を受んことを善とし、キリストの爲に受る詬誶はエジプトの貨財よりも寶貴と意へり。信仰によりて彼はエジプトを離れ、王の怒を畏れざりき。これ見えざるものを見るが如く耐忍へばなり』と。記者は望の活力ある例證を此上なほも多く附加し、『信仰によりて諸國を服し、義を行ひ、約束のものを獲、荏弱よりして剛くせられ、戰爭に於て勇ましく異邦人の陣を退かせ』たるユダヤ諸英雄を我が記臆より呼び起せり。是等の諸英雄のうちには、或は其所期を果さず、落魄不遇にして非命に斃れたるものなきにあらず。然れども所謂望なるものは現世かぎりのものにあらずして『幔のうちに入る』ものなり。勇壯なる是等の人々と對比せらるゝものは『不信仰なる惡しき心なり』。想ふに記者の此語を作すや、その心中には、懷疑家および臆病未練なる人物を描ける者なるや明かなり。其警戒するところは、知識上にはあらで道德上の懷疑家なり。良心を無視する徒なり。善に對して不虔なる輩なり。如是(かく)解するとも、記者の原意を害する氣違はあるまじけれ。何となれば、前後文章の關係によれば記者は『常に心惑へる者』『罪の誘惑によりて剛愎になれる者』に就て論じおるものにして、其目的『信仰の誤れる』

者につきて論じおるものにあらざればなり。『諸ての事を省察す』るは、敢て記者の難ぜんとするところのものにあらず。『神は己れを求むるものに報を賜ふ』なりとは、希伯來書の記者が基督敎の中樞と目するものなりとす。

凡ての樂天主義家の如く、記者も亦重きを內裡の光明に置きて、人間の尊嚴を認識す。以爲、人間は常時神の心に注めらる。かくして神は『かれに榮光と尊きをかむらせたまへり』。神の靈と人の靈との間に不變の關係存すとは希伯來記者の抱く哲學の根底に橫る一思想なり。而して記者の主張するところに據れば、此一事は宗敎思想發達の歷史に注意するものは、明かに見るを得べきなり。希伯來書記者は、先づ往昔の律法戒規のシムボリズム(表形主義)に讀者の注意を惹き、次第に『愈れる望』となり、『愈れる約束の信仰』となり、更に進で犧牲の意義の靈化となり、終にカルバリー山頭終局の献牲となる。即ち自己を犧牲とする事これなり。神は『多くの區別をなし多くの方を以て』人の心に語り、材能の士は天の使命を蒙り、機に臨みて輩出したり。彼等は神の事の爲に人々のうちより召されたる者なるが、その召されたりしは、彼等が人間の性質を知り、之に同情を表し得るがためなり。故に彼等は『愚昧なる迷へる者を憫むとを得るなり』。基督敎の創立者も亦、無論遙かに高き程度に於てなれども、等しく此同情の力を具ふる者なり。基督は『われらの荏弱をおもひやること能はざる祭司の長にあらず』。基督は『諸ての事に於て我儕の如く誘はれたるものなり』。『それ潔むる者と潔めらるゝ者とは凡て一より出るなり』。基督は、信徒の生涯の各狀態に伴ひ、死の試錬の際にも我等に伴ひ得るなり。見よ、基督は『神の恩により凡ての人に代り死を甞ひ』、『死を畏れて生涯つながるゝものを放たんため』に死に給ひしものにあらずや。

基督の倫理教訓に關して希伯來書記者が、一も其筆を着くるところ無きは、其讀者が既に此點に於て知りおると解したればなり。抑も基督の教訓は直接人間の良心に訴ふ。良心は『聖きところに役ふ、即ち人の建る所にあらず、主の建てたまへる所の眞の幕屋』なり。信ずるものは平和の安息を得るなり。基督は人間の良心を照らすものなり。其教をうけしものを指して、希伯來書の記者は「イルミネーテッド」されし即ち『光照されし』(希十〇卅二)ものと言へり。基督は『愈れる契約の中保』なり。希伯來書記者が、ユダヤ預言者のうち、儀式律法が世界の宗教的飢渴を治するに足らざるの期あるを預想したる者の言を籍り來れるは、此點を説明せんと試みし者なり。曰く『また主いひ給ひけるは其日の後われイスラエルの家に立んとする契約は此れなり我れは我が律法を其念に置きまた其心に銘さん』と。但し希伯來書記者の所謂心の照らさるゝといふとは、宗教思辨によるよりは寧ろ德行の修養によりて徐々と臨る者と知らる。何故なりやと曰はゞ記者は『心を勞かせ練りて善惡を辨別し得る成人』、即ち道德的側面より見たる成熟に關して語りおる者なればなり。

讀者は記者が、恐怖の弱點を絶えず警戒するを見ん。其指摘さるゝ如く基督教には一點の恐怖元素なし。記者が新舊約の下に於ける宗教的空氣を描寫する一段は、(十二〇十八以下)殆んど一篇の詩を朗吟するが如くに感ぜらる。普通の讀者は記者の眞意を汲むこと覺束なけれども、記者が言語の文のうちに示めす靈的對照法は、まことに壯大にして人の心を感動すること音樂にも勝れり。

希伯來書記者は、或る儀式若くは形表を以て、基督の新社會に加はる者の守らざるべからざるものとはなさず。然れども是等のもの丶本意に至りては必ずしも癈せられざるものと考へ、人々

當然の義務として、罪と汚れと失望を捨てざるべからずと勸めらる。曰く『我儕は誠實心と疑を懷かざる信仰を保ち心の惡念を灑がん淸き水を以て身を洗れて近くべし』と。

「グッドネス」の天啓『ホープ』の神感、これ『約束の地に寓り』『信仰によりて死に』たりとばかりにて其何人なるか皆無知られざる希伯來書記者の基督敎なり。

聖書の徑路

スペクテートル

吾人は當今の世へブライ人の聖書に通ずるもの果して幾許ありやを疑ふものなり。成程主日每に赴く人々は、敎會にて朗讀さるゝ丈けは知れるならん、然れども夫れ丈けに過ぎず。今の人は信仰及び道德の事に關する舊約聖書の權威は到底新約の比にあらずと考ふるは可なれども、さればとて文學として快樂を之に取るを未だ知らざるなり。若し舊約に在る神感の詩歌、壯快なる記錄を輕視する者あらば、吾人は其人の爲に不幸を吊せざるを得ず。舊約聖書には到底新約聖書の取りて代るべからざるもの存す。固より基督敎の至上啓示、神人の正しき關係の如きは、文字以外に求むべきものなればこそパウロは『神の國は言にあらず』と曰ひしなれ。宗敎詩が鼓吹する宗敎的熱情は、浮雲のごときものにあらず、一の實在なり。音樂にも勝りて禮拜心を振興するものなり。豐かに宗敎の天性を稟けたる一國民の歷史は豈に等閑に附すべきものならんや。

聖書のうち亡はれたるものありて世に遺れるヘブライ人の文學は然まで多からず。『ヤシャルの書』も失はれたる者の一なり。『神の戰の書』も失はれたるもの丶一にして凡て吾人の想像を溢漲する壯景一も遺らず、遺れるものは僅かに壯

嚴なる其書名而已。

然り然れども今その遺れるものに就て言ふとも、その詩文の明玉の如何に多くが忘却せられ、耳を傾くるに於ては尙ほ滿々たる詩情を誘起するに足る如何に多くのものが默々に附せられつつあるか。人類思想開發の跡に意を注ぐものにとりては、是等の材料を逸し去るは、甚しき損害と謂はざるべからず。今玆に辛き運命の手に落ちて惱まされつゝ悲哀の苦き經驗を嘗めて我が想念を告白せるものあり。その語に曰く、

エホバの語われに臨みて言ふ、人の子よ我れ頓死をもて汝の目の喜ぶものを取去らん汝哀かず泣ず涙を流すべからず聲をたてずして哀け死人のために哀哭をなす勿れ冠物を戴き足に鞋を穿べし鬚を掩ふ勿れ人の贈れる食物を食ふべからず朝に我れ人々に語りしが夕に我が妻死ねり明朝に、およびて我れ命ぜられし如くなせり。

零々たる片言隻辭の裡に是くも深痛に人生の悲哀を寫し得たるもの文學史上多からんや。又誰れか舊約の先知預言を以て既に研究の價値なしと謂ふや。論ずるものあり曰く、聖書の預言は最早廢語に屬す、ダニエル書は古書にあらず、他書の詩的預言は理想家の夢幻にぞくす、聖書註解の新學者は之に一の奇を見ざるなりと。然らば吾人は曰はん『その日には諸々の國語の民十人にてユダヤ人一箇の裾を拉へん即ち之を拉へて言はん我儕汝等と共に往くべし其は我ら神の汝らと偕に在すを聞きたればなり』(亞八〇廿三)といふが如き語、若くは『かれの地の時期いたるまで萬國民は彼れと其子と其孫につかへん其時いたらば衆くの國と大なる王は彼を己に事へしむべし』。(耶廿七〇七)といふが如き語を見て誰か其語意の驚奇を失へりといふものあらんやと。是等の語は往昔の預言者が『一時と二時と半時』と言ひし不明陰微なる數字より或

る學者が說き出すところの預言よりも幾倍も顯著なるものとす。

吾人は到底言語神感說を信ずる能はずと雖ども、基督敎が舊約聖書中に預言せらるゝ一事は疑ふを得ず。同情は文明の力なりといふ事は出埃及記中の一祭司の深く感じたるところなり(出廿三〇九)。又イスラエルの詩人は儀文は非根本的なるを活破したるのみにあらず、歷代志略記者はヘゼキヤの祈禱を記したるが此祈禱たるや基督敎國に於て往々忘却し去らるゝ自由の理想を發揚せるものなり(歷下卅〇十八―)。ユダヤ歷史中の比較的大なる光景に至りては、想像に深く印せられて忘らるべくもあらず。然れども舊約聖書紙面に其跡を留むる小なる者と雖ども捨つべきにあらず。『賢にして顏容美くしき婦』なるアビガルが我が夫の『剛愎』の罪を赦されんことをダビデに求むる一段の如きは誠に達人の筆と謂はざるを得ず。或はアハブがスリヤの王および之を援けたる三十二人の王を說き落したる一段の如き何ぞ敢て他に一歩を讓らんや。又イスラエルの軍勢がアムモン人の大軍目がけて兵を進發するときヨシヤパテが歌人を立てゝ軍勢の前に歌ひ進めたる一段の如き、若くは、ネヘミヤの生涯性行の如き再讀の興味あるものにあらずや。

基督敎が世と共に進むに從ひ、之等の古英雄と益々遠くなるは止むを得ざる次第なり。又かれらの行爲とて十より百悉く摸範とすべきものにあらず、彼等の道德的直覺とても必ずしも常に正しからず、其手血によりて腥きものもなきにあらず、然り然れども、吾人は彼等の獨得にして他國民に其類を見ざる者あるを知る、即靈界の實在を確認せる一事之れなり。『何處より』又、『何處へ』、との疑問は、常に彼等の前後を擁して立てり。吾人は古人が彼等に對せし如くに彼等に對する能はずと雖ども希伯來書記者が、『之

等は皆信仰を懷きて死ねり未だ約束のものを受ざりしが遙かに之を望みて喜び地に在りては自ら賓旅なり寄寓者なりと言へり彼等は更に愈れる所すなはち天にあるところを慕へり是故に神は其神と稱ふることを耻とせざりき』と曰ひけるは、誠に彼等に適はしき讃語なりと謂はざるを得ず。







福音叢誌第八拾壹號目次

論説

説教

FUKUIN SŌSHI.

NUMBER 81.

FEBRUARY, 1903.

CONTENTS.

論説

基督教的信仰の根據

神學博士　ジエームス、ストーカー

本篇はス氏が昨年十月十五日を以てアバルヂーンの合同自由大學に於ける教會歴史の講座就任式にてなせる講演なり

宗教的信仰の確實なる根據は何なりやとは、近來大陸の思想家が特別の注意を寄する所なるが、此國に於ても、此の問題を解釋せんが爲に、價値ある二三の著書は現れたり。獨佛諸國の如く新教と羅馬教と相對立する所に於ては、羅馬教會の挑戰あるが爲に、此の問題は常に誘起さるゝと雖も、而かも此の問題の必要は、尚一層深き邊にその原因を有するなり。苟くも思慮あり誠心ある人士は、是非共『如何にして吾人はおのが信ずる宗教の眞實なるを確め得るや』てふ問を起さざるを得ず。斯かる問題を何時迄も不問に付し得るは、取も直さず淺薄なるか若くは無頓着なるの証に外ならず。吾人は宗教的事柄に干係すること、

益多ければ多き程、吾人が果して岩の上に建てつつあるか若くは砂の上に建てつつあるかを確めんと欲するの念、愈切ならざるを得ず。

(一)

古來新敎徒は此の問に答へて曰く『聖書は動すべからざる岩にして、吾人がその信ずる所を確實なりとするは、そが神の言葉に記載さるるを以てなり』と、彼等は先づ預言に由れる證據や奇跡に由れる證據などによりて、聖書が神出の書なることを證明す。既に此の大前提あり、次に某の敎理某の信條が聖書中にあることを示しさへすれば、爰にその敎理その信條の確實なることは直に決定さるるなり。一時到る所新敎社會を風靡せしホッヂ博士の『組織神學』の如き近年の著書すら、尙ほ斯かる立場を取りたるなり。聖書のインスピレーションてふことは、一躍してその無謬てふことと同一視せられ、何等の誤謬にもせよ若しその中に誤謬の存するあらば、その全部の信用迄も破壞さるべきものと明言せられたり。

然れども、近年に至りて諸敎會――ホッヂ博士の名が尙ほ尊崇さるる敎會すらも――の立場は一變せり。神學者輩は聖書中に何等の誤謬もなきことを證明するの必要あるや否やを疑ひ、一般人士の中にも曾て思惟せし如く聖書を無謬なり

と思惟し能はざる傾向あり。或る神學者等は尙ほ一歩を進めて、聖書中に誤謬あり矛盾あるを論辯すると同時に、之れが爲にそが信仰と行爲の完全なる標準たることを少しも損せずと明言するなり。彼等は主張して曰く『吾人は聖書中に幾多の欠點あるを發見すると共に、之に對する吾人の尊崇愛慕の情は益加はりつつあり。實に吾人は聖書中に人間的分子あるを認むることが、却て人をして土器中に永遠の眞理を盛れる聖靈の智慧を讃歎せしむるを見るなり』と。斯かる信仰は未だ一般に受容されざるなり。眞理の或る方面に關して不注意なる書が、如何にして他の方面に於て絕對的に無謬なるを得べきか、之を了解するに非常の困難を感ずる人少からず。新神學は未だ、事實や歷史に關して眞實を失へる書が、生命や敎理に關しては無謬なることを證するの、如何に困難なるかを十分に覺知せざるものの如し。之と同時に、敎會が眞理を證する舊來の方法を棄却したるが爲に、眞理に對する確信が益深くなりつつあるとも、不可消の事實なり。神學の中ち辯證學ほど常なきものはあらじ。敎會がその信仰を辯證する論法は、常に敎會の內外に於ける事情に伴ふて變遷す。曾て强固なりと思はれたる辯證上の城郭も、少しも牙城に損害を與ふることなくして放棄せられたり。聖書に於ける信仰の如き即ちその一例なり。敬虔なる批評家が言ふ如

く、曾て聖書の神出を証すべく用ゐられたる辯証法が放棄されたりとて、此書を救に必要なる天來の福音とし神聖なる生活に至る無比の案內者として、之を尊崇するの念は寧ろ加はるとも決して減ずることなしとは、蓋し眞實なるべし。」

論者は好んで曰く、聖書は批評以上に獨立するものなり。批評は或は聖書中に幾多の誤謬や矛盾あるを發見し得べく、或はその中に含まるる諸書の年代や著者は勝手に定め得べし。而かも斯かる事柄は少しも默示の中心に影響を及ぼすものに非ず。此の中心は學說のあらゆる變化の中に屹立してその純粹と神聖とを保持するものなりと。然れども、斯かる言は屢唱道さるるに拘らず、その意味曖昧なるが爲に、頗る誤解を惹起し易きものなり。

或る意味に於て、慥に論者の言や誤れり。世には、神的贖罪者が斯の世界に現れたることを信ずるに、肝要なる理由ともなるべき凡の事實を除き去るが爲に、基督教的信仰の重大なる根據を破壞する批評なきに非ず、否な實際絶えず起りつつあるなり。如何なる意味に於てか、吾人は聖書をストラウスやルナンがなせし如き批評以上に獨立する者なりと言ひ得るや。慥に聖書の讀者が悉く福音歴史に關して斯かる批評家の說を採用するも、尙は基督教會は依然として存在し得べきを意味するには非ざるべし。余は狂熱チエニーの如き輕薄ダームの如

き批評家が、教會の門前に雀羅を張ることなしに講壇に立ち得るを信ずる能はず。如何となれば、教會の信徒は、斯かる輕薄を以て取扱はるべき文書が神の默示を包藏し得べきを主張するものと、席を同ふするを拒絶すべければなり。疑もなく聖書を批評以上に獨立するものなりと唱道する多數の人士は、單に之によりて、聖書が穩健なる科學的批評を恐るゝものに非ざることゝ、そが自身に含める眞理の力に由りて遂に事實と道理に合致せざる凡の批評說を打破すべきことを、言明せんと欲するに過ぎざるべし。彼等は實際聖書と交れる結果、そが凡そ眞實なるもの高貴なるもの永久なるものと同類なるが故に、決して光明を恐るゝの理由なきことを、信じつゝあるなり。

斯かる意味よりすれば、此の言や價値あるものなり、且つ聖書に對する信仰の力が何の邊より出づるかを示すなり。聖書はおのが光によりて輝く。而して教會が執るべき眞正の政略は、多數の人々をして實際聖書に接觸せしむるにあり。如何となれば、人は益多く聖書に接觸する程、益多く彼の靈性は覺醒せられ、益多くその靈性が覺醒さるゝ程、益多く聖書に依賴するに至らん。人は益善良となり神聖となるに從て、聖書を愛するの念愈切となり、聖書を愛するの念益切なるに從て、愈善良となり神聖となるなり。聖靈をして靈魂の中に働かしめ

よ。さらば神の聲は直に『言葉』に於て聞かるべし。男にもせよ女にもせよ、彼れ若し一身を處し公事を處するに方り、眞面目に神の指導を望まんには、彼は危機に際する毎に、聖書中に『これ道なり、汝等之に歩め』といふ確なる聲を聞かんなり。覺醒せる靈性一たび聖書に行きて基督の傍に立たば、現に熱あり光ある眞理に圍繞さるるを感じ、此處におのが故郷を見出したるを信じて、復た批評的問題を呈出するの愚を學ばざるべし。

我が教會の信經を以て聖書の權威の根據となすものが、宗教改革以後の正統派人士に倣ふて、ホッヂ博士が取りたるものと異なるは、須らく注意すべき事に非ずや。大信條中『如何にして聖書が神の言葉なることを明なるや』てふ問に對する答は左の如し、曰く『聖書が神の言葉たることを明なるは、その威嚴と純潔とにより、神に凡ての榮を歸せんとする全体及び各部の趣向により、罪人をして罪を悟り罪を悔改めしめ、信徒を慰めその德を建てて以て救に至らしむる光と力とによる。然れども、聖書に由り聖書と共に人の心中に証をなす聖靈のみ、そが神の言葉たることを十分に人に納得せしめ得るなり』と。再建さるべき新教の聖書說は、當に斯の如き積極的基礎の上にあるべきなり。且つ單に消極的議論のみが提出さるる今日、寸時も之を等閑に付すべからず。若し聖書に對す

る舊來の辯証法が放棄されたらんには、新辯証法を改造するは實に吾人焦眉の急務に屬す。如何となれば、普通人がおのが心中に抱ける希望に對して明白なる理由を與へ得ざるは、一種の危機に外ならざれば也。

（二）

宗教的信仰の第二の根據は過去時代の經驗にあり。常に到る所凡ての人によりて信ぜられたるものは、眞實ならざるべからず。古來如何に多くの基督信徒は、之を自家信仰の根據として滿足せしぞ。八百萬以上の信徒を有する希臘敎會は、實際古來の信仰を基礎とし、且つ之に何等の增減をもなすの必要なきを誇り居れり。彼の眼には、變遷極りなき新敎社會の運動は、恰も狂氣沙汰の如く見ゆ。數百年以前に、師父等は既に眞理を確定し且つ之を成文とせり。何ぞ此の完全なるものより離るるの必要あらんや。英國々敎會に於ても、『不可分なる敎會』てふもの、即ち師父等の敎說及び敎會が東西に分離せざりし以前の大會の決議に、根本的權威を與へんとする强き傾向あり。その極端なるものに至つては、彼等が信仰の根據とする最初六七世紀間の敎說と習慣とを批評するに、聖書に訴ふるものある時は、却て聖書に對して輕侮の口調を洩すことすらあるなり。殊に羅馬敎會に於ては、此の傾向は十分に實現せられたり。聖書の權威と同等

なる權威が師父や大會の決議に歸せらるるのみならず、近時に於てはモーレル、ニウマン等の著者によりて敎會に於ける信仰及習慣の變遷は凡て聖靈の働なりてふ、敎理發達說すら現れ出でぬ。而して此の說は、法皇はその時〳〵の熟するに從ひ、此の發達の各段階に際して、眞理の何たるやを謬なく確定する力を有すとの、法皇宮大會の決議によりて、九鼎大呂の重味を有するに至れり。斯かる說が公こは傳說尊崇主義を極端まで押詰めたる一例なり。而して人は、斯かる說が公布されし時代を以て、之に不相應なる時代なりと思ふならん。曾て法皇は九天の高に座し、羅馬の威光赫々たりし時代には、敎界の多數人民が敎會を殆んど神視するに至るは容易なりしと雖も、今や伊太利に於ても、交通の便大に開け、敎育ある人士は自由に新智識を呼吸し得る爲め、烈しき光は法皇の身邊を圍める雲霧を拂ひ去るに至れり。此の說が公布されたる時代の法皇ピオ、ノ丶が如何なる人物なりしか、人皆な之を知る。而して斯かる平凡なる人物を無謬なりとするは、此の實際主義の社會に於て頗る難事たるを免れず。之に加ふるに、歷史的研究の光は容赦なく以前の法皇等をも照し來りて、法皇の位と法皇の人物とを區別する說明法も、到底彼等が謬なく眞理を透見し得べしと想像することの不道理を和らげ能はざるなり。實に法皇無謬說は、時勢の益進步するに從

ひ、羅馬敎會によりて代表さるる基督敎と全世界の智識的分子との間に、超ゆべからざる墻壁を建つるものなり。

之と同時に、羅馬敎會によりて斯く極端なる形式を與へられたる此の主義は、決して虛僞なる者に非ず。幾百年間多數の人々が之を信じ之に由て生き來りし事實より見れば、之に正當なる理由あるは當然の事なり。又た近頃吾人が屢耳にする、かの千八百年來の基督敎を排斥して全くそが原始の形式に復歸すべしとの說は、多少の斟酌なしには吾人の賛成し能はざる所たるなり。爰に一例として、故マルチノー博士が此の問題に關して著せる有名なる書中に、彼が基督敎の歷史觀を擧げたるものを引用せん。曰く、

> 以上の議論を詮し來れば、余はいや〳〵ながらも左の結論に達せざるを得ず。即ち、凡ての敎會が了解し定義したる基督敎は、重にその起源に於て一時的なるもの死すべきもの、その傳說に於て歷史的ならざるもの、その預想に於て神話的なるもの預言者の宣託を誤解せる者より進化し來れりとの事、是なり。エデンの物語より最後の喇叭の移轉に至る迄、神が此の世界を攝理し給ふ全体の說話は、首尾顚倒し四肢その所を失ひ居れり。無意識なる墮落より來る罪の起源、身代りに由れる救贖の企畫、神人間の關係を低く見たる化身

說、一ペルソンに二個の性ありてふ教理、聖餐に於て物質を通じ來る恩寵の降下、死者を招集して正邪を審判せん爲の基督の再來、凡て是れ神話的文學、メシヤ的夢思、パリサイ的神學、禮典的迷信、俗間的神說の發展に外ならず。『罪の赦』の外、倫理的精神的分子が入り能はざりし程、是等の空しき想像は殆んど信條の全部を占領す云々。

取も直さず、此の有名なる著者の結論は、耶蘇基督が當初より徹頭徹尾誤認され來りしてふ事、基督教が始よりその教祖に對する謬見の上に基礎を有せしてふ事、師父等や大會等によりて制定せられ幾百年の間幾百萬の人によりて受容されたる信條の中、唯だ一個條のみが正當にして他は悉く迷信の混合なりてふ事にてあるなり。若し之にして眞ならんには、現代に於て正當に基督教を了解する道果してあり得べきか。現代の人と雖も矢張人間たるに相違なし。前代に於て熱心基督教を了解せんと力めたる人々にも勝りて、吾人は銳利なる智力と眞摯なる心事を有し居るにも非ず。若し前代の人々にして斯くも全く失敗したらんには、吾人が成功すべき希望果して何くにか在る。若し二千年の間基督とその教訓にして全く誤解され居りしならんには、寧ろ全く基督を棄て、斯くも誤解され易き歷史に關係せずに新宗教を創始する方、却て人類に取りて數層益

あることならん。

吾輩は羅馬敎會の如くに、何等の誤謬もなかりしことを信ぜんと欲するに非ず。之に反して幾多の誤謬は屢人間の弱點を通じて侵入し來り、驚くべき腐敗は時として人間の罪惡に由りて歴史を損傷せり。眞理が常に發見せられざりしは不思議に非ず、如何となれば、人々は屢眞理の爲に眞理を求めず、自家を高めんが爲めに之を求めたればなり。法皇や大會が屢誤謬に陷りしは不思議に非ず、法皇や大會が時として如何なるものなりしかを思ひ見よ。然れども、人々が全心全靈全力を盡して眞理を求めつつありしに、彼等が單に多少謬りしのみならず、全部に於て謬りしとは、果して信ぜらるべきか。吾輩は敢て斷言す、神は一度も『汝等我を求むるは無益なり』と言ひ給ひしことなく、基督は常に正直者謙遜者に近づき給ひたり。敎會はその創立より全く基督を誤認したるに非ず、そが數百年間宣傳し來れるメシャは僞のメシャに非ざるなり。實に敎理の發達なる者はありしなり、然れども、羅馬敎會が公言する如くに、そは無缺なる進路を辿りしに非ず。實に使徒の繼承なるものはありしなり、然れども、そは法皇や監督や僧侶制度の傳燈に依るものに非ず。實に神の現住なるものはありしなり、然れども、そは神が或る僧侶の中に若くは多數の輿論の中に化身し給ひ

し事に非ず。基督は此世を去り給ひし後も、その同志者を見棄て給はざりし。何れの時代に於ても、彼は二三人彼の名に由りて集れる所に居り給ひたり。聖靈は彼の救助を仰ぎ求むる者を勵まし慰め導き給ひたり。而して耶蘇の宗教は、以前に了解されたるよりも一層明に今や了解さるるなり。殆んど二千年の間基督教は歷史の活力にてありしなり。斯教は人類を異教の低地より現今の高原に引上げたり。斯教は普通人をして神の子たるの尊貴を感せしめ、婦人及小兒に與ふるに高尚の位地を以てせり。斯教に由りて陶冶せられたる國民は、人類進步の陣頭に立てり。現代の最も聰明なる人心はその合理的なることを承認し、最も立派なる品格はその精神に鼓吹せられたり。現任總理大臣が數年前に著せる此の問題に關する著書に於て、吾輩は以上の如き事實が政事家の腦中に印せられ居るを見る。自家の爲に考へ若くは信ずべき職責を他の外部的權威に讓るは卑劣の所爲なると同時に、自家を以て基督教問題に研究の心を寄せたる最初の人となすが如く振舞ふは、れのが見識の廣きを示さずして寧ろその狹きを示すものなり。

（三）

宗教的信仰の第三の根據は基督教的實驗にあり。宗教改革時代に於て、人々は

傳說の壓制を免れたるの自由を深く覺へ、宗敎そのものに直接觸着したるの喜悅を鋭く感じたるが爲め、彼等は新運動が何處迄自家を運び去り得べきかを測知る能はず。故に熱烈なる精神の昂騰が人性の制限以上に超脫せしは少しも怪むに足らず、或ものは聖書すらも凌駕する程の光明を受けたりと信ずるに至れり。彼等は曰く、我等は聖靈時代に生く。若し聖靈にして預言者や使徒を皷吹して聖書を書かしめ給ひしならんには、何故に彼が一層進步せる默示を以て我等を皷吹し給はざるの理あるや。默示を聖書時代にて完結せりと信ずるの理由なし。斯かる制限を置くは畢竟不信仰の所爲たるに過ぎず。我等に若し信仰あらば神の手は短きことあるべからずと。之と同樣に今日に於ても、何故に奇跡の時代を既に經過せりと見做すべきやと問ふものあり。若し基督敎の初代に於て使徒等の手によりて、斯敎の新領土を擴めんが爲に奇跡休徵行はれたりとせば、斯敎が一大發展をなさんと力むる今日、何故に同樣の証明は之に伴はざるや。若し耶蘇にして在世の日到る所に疾病を癒し給ひたりとせば、何故今日も尙ほ天より同樣の力を下し給はざるや。主は此世を去り給ふ前に方り、『我を信ずる者は我が行す所の事を行さん、且つ之より大なる事を行すべし、そは我れ我父へ行けば也』と言ひ給ひしに非ずやと。斯かる問を起すは易く、之に答ふ

るは難し。然れども、此の世界を攝理する神の經濟に於て、默示の時期は使徒時代を以て終結を告げしものの如し。天父に關し基督に由れる救の道に關する默示には、既に終極のあるありて、最早何物をも添加するの必要なきなり。故に聖書が永久吾人の經驗以上にありといふは、決して無意味の事に非ず。聖書は限なき泉にして如何に之を汲むも盡くることなく、吾人の救は此書の完全に近づくに從つて全ふせらるるなり。

使徒以後の時代の經驗以上に超脫せんとするは、比較的恕し得べき所あり。何故に吾人はオーガスチンやアクイナスやカルヴヰン等に與へられたるよりも、一層十分なる恩寵と一層明白なる光明とを望み能はざるか。殊に使徒時代と宗敎改革時代との間に亘れる時期の重要を無視せんとするは、新敎徒に於ける一の强き傾向なり。中間の時期が產出せし耶蘇に關する凡ての思想を脫却して、基督自身に復歸せよとは、今日吾人が屢耳にする所の一大運動なり。然れども、斯く他を輕蔑する精神に於て、眞理の追究が成功すべき筈もなし。基督敎は綜合力にして分解力に非ず。こは自家一流の解釋を許さず、寧ろ個人をして他人と共通の經驗を自覺せしむ。單に個人の生命が四圍の社會より出で來るのみならず、社會の生命は個人の生命よりも遙に豐富なり、而して後者が未だ達し得

ざる所に達したる標準を示し得るなり。自家の經驗のみを尊みて他の達したる所を輕視するものは、その生意氣の罰として淺薄空乏に陷らざるを得ず。哲學に於ては、屢個人を以て眞理の標準となさんと試みたる者あり。然れども心理學に於ては、個人の意識以外に他の意識の存在を認めざるものは、自惚の極にして智識上何等の果を結ぶことなし。殊に此の原理は宗教界に於て數層有力に行はれ、斯界に重要なる警語は要するに同情なり同心なり。

斯く幾多の弊害あるにも拘らず、個人は宗教に於て相當の權利を有し、個人的經驗は一種無類の價値を有す。智識のあらゆる方面に於て、最下等なる物質的智識より最上等なる精神的智識に至る迄、自ら見且つ味ひたる智識には、他より傳聞せし智識に勝る術なきに非ず。單に技術の理論を學べる人と、多年その技術に熟練せる人との間に徑庭あるは、何人も能く之を知る。小説を讀んで愛の何たるやを知ると、愛し愛せられて之を知るとは、全く別事に屬す。宗教の實体に自ら觸れたる宗教的智識は、他の證言によりて得たるものと異なり。而して宗教上凡そ證言なるものの眞正なる目的は、吾人を導きて自らその實体に觸れしむるにあり。聖書も教會も屢個人に對して過大の要求をなすものと見做されたり。然れども、その實兩者とも『人若し神を求めなば彼は之を見出し得

べし』との約束を以て、個人に近づくものなり。預言者や使徒や師父や學者は、吾人に証するに、彼等が罪惡や不幸の中にその手を延ばせし時、空に觸れずして活ける神と救主とに觸れたることを以てす。而して此の証言の目的は、彼等が信せし所を强て吾人をして信せしめんが爲に非ず、却て一生涯の危機に際し或はおのが不幸を切に感じたる時に、若し吾人にして山に向つておのが目を擧げなば、吾人も亦た彼等が見出せしものを見出し得べき希望を鼓吹せんが爲なり。且つ吾人にして愈之を見出さんには、そが實在と幸福を感ずるの念は彼等のものと同性質なるべし。彼等の証言は、吾人を導きて宗教の實体に至らしむべし。而かも神と人、救主と罪人とは直接に觸着せざるべからず。而して吾人が現に精神界の實体と合致するの幸福を經驗するに至れば、あらゆる証者（聖書すらも含めて）に對して、吾人は『今汝の言ひし事によりて信ずるに非ず、我儕自ら聞きて此は誠に世の救主と知りたるなり』と言ひ得るなり。

單に外部的權威を受容するのみならず、靈界の實物に個人的に以心傳心的に接觸するは、宗教の秘義にして又た神學の精髓なり。而して此の實驗は斷へず生長しつつあらざるべからず、如何となれば、神は常に吾人に經驗さるるよりも大にして、基督の測るべからざる富は到底盡さるべくもあらざればなり。此の

基督教的經驗や、聖書の記事及び信條の文句に相當するものなりと雖も、今や旣に食物と飲物とに變じたる聖書及び信條にして、吾人の骨の骨、肉の肉となり得べきものなり。此の確信こそルーテルが常に『天使ガブリエル來りて我が宗教を眞なりと斷言するも未だ十分ならず、三と二を合して五となり一尺は半尺よりも長きことを確信する如く我が宗教を確信し、たとひ全世界の人之を僞なりといふも我は安心して我が信ずる所を把持せざる可からず』と言ひし所の確信なれ。

個人的實驗より生ずる確信の强き、或ものは之を以て凡て他の權威より超脫する者と考へたり。彼等は論じて曰く、我が罪惡と不幸の中に超自然的救拯のあるを聞き、此の證言を受容してそが導く所に從ひしに、神及救主の實在とそが無限の價値を見出して、日々他より聞きしに勝る幸福を實驗しつゝあるに至れば、斯かる發見をなし得べきことを我に證せしものの權威如何は、我に取りて今や何等の要なきなり。實体を發見したる以上は、他の證明は凡て無用の長物たるに過ぎず。僞りの證言すら秘密の寶藏を指示することもあらん。然れども、若し寶藏にして發見されんには、證言のいかがはしきことが證明されたりとて、そは幸なる發見者に何の影響をか及ぼし得ん。之と同樣に、若し吾人にして大

なる救を享け貴き救主を見たらんには、聖書と敎會の權威を破壞する議論も、亦た何の痛痒をか吾人に與へ得んやと。

斯かる議論は一見有力なるが如しと雖も、余は何處にか之に破綻あるを想ふ。

余も個人的實驗と之より生ずる直接の確信とを尊重すと雖も、而かも余は福音史の事實が悉く破壞さるゝとも――たとへば、主の奇跡的誕生や肉体の復活が作話なりと證明さるゝも――尙ほ此の確信が保存され得べきを信ずる能はず。

此問題に對する故デール博士の著書が『活ける基督と四福音書』と題されしは、注意すべき事實なり。博士の目的は、吾人の心中に於ける活ける基督の證據的價値を闡明するにありたれど、尙ほ彼は男らしく、こは單に眞理の一方面のみにして、他の一方面は福音史の眞實にあることを明言せり。

されど又た、個人的經驗の確實は、一方には吾人が靈的生命の誕生地なる敎會の權威に、他方には吾人を更生せしめたる諸の勢力を始に證したる聖書の權威に、最も强固なる證據を與ふ。而して此の證據の强固なる、人をして敎會の權威と聖書の信ずべきことゝを破壞せんとするものに對して、一種の敵愾心を抱かしむるに至る。

世には幾萬の人士ありて、彼等の宗敎的經驗は、彼等が有する智識中最も確實

なるものなり。而して益年を重ぬるに從て、この經驗は愈確實となるなり。彼等は聖書や信條にある甲の約束より乙の約束に進み、而してその誤りなきを見出すが故に――そが論理的に辯證的に誤なしとの意味に非ず、基督が實際そが證する所に違はずとの意味に於て――此の救主が架空のものなるべく、聖書及教會の證言に誤謬あるべしとは到底思ひ能はざるに至る。我が生涯の凡ての事實凡ての幸福凡ての光榮は、要するに聖書が傳へ教會が教へし所を實現したるものに外ならず。基督の實在を否認するは、我が存在を否認するに同じ。如何となれば、『我生くるに非ず、基督我に在て生くる』を以てなり。

以上論せし所が如何なる結論に達するやは、聰慧なる讀者の既に承知する所ならん。聖書は新教徒の宗教にして、傳說は羅馬教徒の宗教なり。而して近時の傾向は個人的實驗に於て信仰の根據を見認むるにあり。然れども、三者何れも一方に偏するの弊なき能はず。宗教が憑れる根據は三本の絲より成れる紐にして、その中の一本にのみ全重量を托するは誤れり。余は三個の根據を一樣に安全なりと言はじ。聖書の權威を最高なりといふにも一理あり、教會の權威を以て個人的實驗の上にありとなすにも一理あり、而かも又た個人的實驗には外部的權威よりも數層確實なる根據のあるなり。三者は相互に抱合すべきものにし

て、宗教的眞理は聖書に示され、教會によりて証せられ、個人的實驗に於て實現さるるものなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

是等三個の根據は又た、神學の三大別に相當す。聖書の証言を解明するは註釋的神學の任、二千年來の傳說を研究するは歷史的神學の題目、基督教的意識の內容を學術的に發表するは組織神學の問題にてあるなり。

余が講座の任務は要するに、此の三重なる連鎖の中間に位するものにして、而かもその中にて最も勞多きものなり。如何となれば、歷史的神學に關する文書が甚だ浩澣なるのみならず、教會歷史の全範圍は、教會の外部的組織的變遷と共にその內部的思想的發展を含むが故に、歷史的神學者は、凡ての時代に於て神學の凡ての部面に關して書かれたるものを悉く知るの必要あればなり。斯かる事は勿論望むべからずと雖も、尙ほ出來るだけを力むるは眞に此の講座の任務を盡さんとするものの心懸くべき所なるなり。

是迄此國に於ては、此の方面の研鑽に同情を以て身を委ねたる學者少なし。獨逸に於ては每月、バーテルかメランクソンか若くは他の新教派の人物に關する

著書や、或る市若くは或る地方の敎會歷史に關する論文の出版を見ざることなしと雖も、此國に於て斯かる出版を見ること極めて稀なり。我が宗敎上や敎會政治上の爭論に於て、論者が曾て此國の著書中に十分に論じ盡されたる問題なるを知らずして論じつつあるを見るは、珍しき事に非ず。又た今日有數の學者にして、絕へず大陸の著書より引用しつつあるに拘らず、自國の神學者に關して一と通りの智識をすら缺くものあり。之に加ふるに一般に歷史的研究なるものは現代精神の特質にして、精錬したる頭腦を有する人士は、現在の事物を究むるのみならず又たそが歷史的由來を究むるの必要を感ずるなり。神學が益科學的精神を皷吹さるるに從つて、人は益おのが歷史的位地を知らんと欲するに至るべし。然れども、余が特に此の講座に對して學生諸子の同情と熱心とを獲んと欲するは、歷史的証言が實に宗敎の根據を成立する三要素の一なるが爲なるなり。

敎會歷史は是迄屢、そが取扱ふべき進步發展が單に外界の事情や人間の努力の結果に過ぎざるかの如く思はれたり。即ち大人は彼等の信仰と決心とにより、小人は彼等の野心と隱謀とによりて、之を成就せるかの如く思はれたり。然れども、歷史を造るものは、神にして人に非ず。敎會が進步發展する道行を定め

たるものは、その源頭に於ける基督にして、教會は『道』の種子より生長せるものなり。故に教會は人の智慧に由らず攝理の光に由れる聖書の活註釋なり。人は歷史を造らず、却て歷史は人を利用して、その源始に置かれれる理想を漸次に開展す。

斯く教會歷史は、一方に於て聖書と關係ある如く、他方に於て基督教的實驗と關係あるなり。基督は聖書より直接に吾人の心中に入り給ふといふにも一理あり。然れども、聖書よりのみならず又た歷史よりして心中に入り來る基督は、一層偉大なる基督に非ずや。若し有力健全なる基督教實驗が、單に救主に對する內心的活動によるのみならず、又た彼が實際有すと信ぜらるる救主なるものの性質に由るとせば、基督の智識は彼が是迄の人々に如何に信ぜられしかを知るによりて、益擴張され豐富にされざるべからず。

然れども、基督は單に人の心中に入り給ふのみならず、又たそれを通じて他の心中に入り給ふ。基督は進行の途上にありて、途すがら吾人の門戶を叩き給ふ、故に歷史の全程は幾世に亘れる基督の進軍に外ならず。而して彼が吾人の門戶を叩き給ふや、吾人も亦た彼の行列に加はりて前へ前へと進み行くなり。教會歷史は吾人をして神の王國の擴張に對する熱心を勃起せしめざるべからず。こ

は明に理想的基督教と實現的基督教との間に驚くべき異同あるを示すと共に、又た是迄に斯教の理想が如何程實現されしかを示す。こは又た幾多の人傑が彼等の證言と辛苦と殉教とによりて、人類社會の種々なる方面に基督の肖像を印せしかを描寫し、過去の誤謬と失敗とを見て如何に將來の道を造るべきかを暗示す。我が教會に關係ある諸學校の中、此のアバルヂーン校の如きは、是迄そが宗教界に送り出せる手腕あり熱誠ある人士の多きが爲に有名なるものなり。而して若し此の講座の任務が此の名譽ある歷史を繼續するに寄與する所あらんには、余の光榮復た何ぞ之に加へんや。吾人は教會歷史の課業に於ける如く、常に過去の大人物と彼等が從事せる傳道的改革的運動とに密接なる關係を有せざるべからず。而して彼等の摸範が幾分にても吾人の摸倣を皷吹したらんには、過去の歷史の研究は實に將來の歷史を產出するものと謂つべし。(今泉眞幸君譯)

奇跡の効用

牧師　アルフレッド、ガアビー

(一)耶蘇はユダヤを去りサマリヤを經てガリラヤに歸るやガリラヤ人は之を歡迎

せり、其故は彼等の中にエルサレムにて耶蘇の傳道を目撃し殊に彼が行ひたる奇跡に感動したる者ありし爲なりと記せらる。信仰の動機玆にありたりとせば此れ未だ信を措くに足らず、されば耶蘇は南方に於て『自己を人に任せざりし』如く北方に來りし後も頗る制抑の態度を執れるが如し。或る貴人のカペナウンよりカナまで耶蘇を尋ね來りて病める子を癒さんことを乞へるに對する答を見れば、彼が奇跡を行ふ爲に却て本來の職分を誤解せられ、信仰の本義は彼の個人の感化に服するに存せずして奇跡的行爲に服するにあるかの如く思はしむることを恐れたること明なり。曰く『汝休徵と異能を見ずば信せじ』と。然れども父の重ねての懇願を聽き深き心痛より發せる言なるを領するに及んで、憐憫の情は初の疑怖に克ちて即座に其の子の病癒ゆべきことを保證せり。然るも又耶蘇が其人に期望する信念を喚起せんが爲に、『汝の子は活くるなり』との一言に信依して家に歸ることを命じたり。然して此人は能く耶蘇の試驗に堪えぬ。さて約翰六〇四三―五四に載せられたる此の記事は馬太八〇五―一三、路加七〇一至十に見ゆる百人長の僕の癒されたる話と同事異文にあらずやと云ふ批評上の問題あれども、余輩は今此の問題に入るの必要を見ず、余輩の本意は此の言に原きて、耶蘇の生涯と事業に於ける奇跡の効用を考ふるにあれば。

（一）誘惑の時に於て耶蘇は、受洗の時初めて自覺したる超自然的の力を用ゆる道に於て試驗を受けたるが、傳道の間に於ても奇跡力の助を受けんことを求め來る人多かりき。其の需め眞意より出で苦惱の實なるに逢ふては彼は未だ曾て人の哀訴を空くせずして快く之を救ひたるが、其間にも此等の事の爲め本來の事業を爲すには多少妨害を受くることを感せられし痕跡なきにあらず。カペナウンにて安息日の夕多く病者を癒やし其翌朝は人無き處を索めて祈禱し給へり、弟子來りて群衆の待てる處に歸らんことを求めたる時彼は答へて曰く『我は敎を宣べ傳ふる爲に汝等と偕に附近の鄉村に往かん我之が爲に來ればなり』と（馬可一〇三十八）。知るべし彼の召命は病を癒やすにあらずして說敎にありと思ひしことを。又傳道の後期に移りて耶蘇が漸く多數の人に說敎することを止め專ら十二使徒の敎育に力を注がんと欲せし時、奇跡の渴望は復もや此の目的を妨げぬ。弟子等が第一の傳道より歸り來るや群衆は透き間もなく襲ひ來りしが、耶蘇は慈心に動かされて病者を癒やせしのみならず飢えたる大衆に麵包を供したり。されども翌朝になりては人民の徒に奇跡を需むるを戒め肉体の糧よりも靈の糧を需むべきことを敎えたり。其外心を用ひて福音書の記事を讀み下す人は知り得るならん、耶蘇の同情と神の力を信ずる念は彼を動かして奇跡を行は

しめたりと雖も、彼は又之よりも心靈的の利益を與へんと欲する願切なるが故に奇跡力を使用するにありては躊躇の情ありしことを。

（三）耶蘇の奇跡に依りて癒やされたる人或は其の目撃者は一種の信仰を發こしたり。然れども是の如き種類の信仰は耶蘇の求むる所又欣受する所にあらず。是の如き信仰は必ずしも道德上の悔改、宗敎的向上心を伴はず、或は迷信的精神、腐敗せる良心のままにて之を抱き保べき信仰の種類に屬せり。夫れ耶蘇は眞理を以て人の理性に訴へ、聖德を以て良心に訴へ、恩惠を以て愛心に訴へたり。然れども奇跡を行ふて人を驚かし或は畏れしめ由て以て自らの名分を承服せしめ或は忠義心を起さしむことを欲せざりき。此の類の信仰は到底薄弱輕佻にして、其の塲を過ぐれば疑惑に陷り易く、況して神の國の爲に俗界の勢力と戰ふ際に無かるべからざる忠義、獻身、犧牲の精神を發起するに足らざることは耶蘇の知了せる所なりき。此の類のものは其れ自身眞價なきのみならず又眞醇强烈なる信仰を害するの恐れあり耶蘇が傳道に際して之に警戒を加へしは此の故なり。

（四）耶蘇は自己の使命の證券、權威の證據として奇跡を行ふことを否みたり。彼が神殿の掃淸を行ひし時祭司は權威の休徵を要求せしが、彼は祭司等の俗なる

政略により破壞しつゝある宗教を回復すべき靈的の力の外來すべき休徵あらざることを答へたり。ガリラヤ傳道中にも學者もパリサイ人同樣の要求を提出せしに、耶蘇は彼等を尤めて『奸惡なる世』の人となし、唯與ふべき休徵は『ヨナの休徵』即ち悔改の招きと審判の警告に外ならずと答へたり（馬太十二〇三十九、四十節の言を以て復活の奇跡を指すと解する人あれども前後の文意と一致せず且つ本來實らしからざる解釋なり。路加傳十一〇二十九―三十二、には此の一句見えず）。彼はエルサレムの猶太人の信仰せざる者に訴へて『若し我を信せずは我が行を信せよ』と云ひしことはこれあり。然れども爰に行と云へるは奇跡的行爲を指すか、或は又其行爲の神より出づるを表せる道德的性質を指すか疑ふべしとす。假に奇跡的行爲を指すと解するとも、前後の連絡に照らして考ふれば彼の眞意は、人格に代えて行爲を信せよとにあらざること明なり。此れ耶蘇が所望したる最上のものにあらずして、此れだけにてもと云ふ讓與に過ぎず。

(五)既に觀來りし如く、奇跡の渴望は動もすれば耶蘇の本來の事業を妨げたること、奇跡に由りて生ずる信仰は賴むに足らざること、奇跡を行ひて名分を正せしめんとする要求を邪惡不純のものとして斥けたることは、福音書の記事に照ら

して明瞭なり。然れども我等は古風の辨證論即ち奇跡を以て基督教の眞なる證據の第一位に立てたる議論に反動して他の極端に馳せてガードナーの如く『耶蘇は明白に奇跡を行ふ人々の地位に立つことを拒絶せり』（新約書の歴史的見解一五五頁）と云ふに同意すると能はず。奇跡の記事は福音書の地に織り込まれたれば、奇跡の記事の精確を否定せんとせば之とともに耶蘇の教訓と事業に關する記傳の全体を疑はざるを得ず。耶蘇の言の中に、奇跡の意義を深からしめ兼ねて又彼の人格の解釋の價値を大ならしむる言あり。今稍精細に此等の言を研究せんとす。先づ耶蘇の傳道に於ける奇跡の効用の中に外部的方面に屬する事より始めしめよ。耶蘇が病を癒やすとの風聞は多くの男女を牽きて教を聽く機會を得せしめ、此れなくば相接する緣故なかるべき人々を彼の勢力範圍の内に入らしめたり。然して彼の奇跡を求め又見る目的を以て來りし人も皆盡く此の不十分なる信仰の程度に停止せしにあらず、或人は更に進んで彼に宿れる眞理と恩惠を識りて之に依るものとなり、即ち不十分なる信仰を皮殼となして其の内に醇粹の信仰は成長せるものなりき。故に耶蘇は奇跡を用ひて不信仰に勝つことはせざりしと雖も、必要あらば奇跡を以て眞醇なる信仰を確保することは之を否まざりしことを見る。四人の友に運ばれて彼の許に來りたる癱瘋を病

める人の癒やされし話（馬可二〇一—十二）は之を證するに足れり。其處に『耶蘇其の信仰を見て』とある信仰は病者と之を助け來りたる其の友が病者の良心の重荷の輕めらるるを願ひたる願を指すにあらずや。何となれば耶蘇が『子よ汝の罪赦さる』と云ひし時、先方の欲する者を與ふるに先たちて必ずしも欲せざる所の者を與へし道理無ければなり。通常說明する如く此人は赦罪を欲せざりしにせよ眞に之を要したる故耶蘇が先づ之を與へたりとは許し難き說明なり。道德上無條件にて罪の赦さるることあるべき道理無し。赦されんことを望む心なく、罪の懺悔なく、正義の目的なくして罪を赦されんか、此は精神の害となるも決して益となることはなかるべし。且耶蘇の嘉したる信仰は唯奇跡力を信ずる信仰に止まる筈なく、併せて又彼の傳道の道德的精神的の資質を認めたる信仰なりしならん。即ち彼等は耶蘇を以て單に療病者となさず救主となしたればこそ其の信仰嘉納せられたるなれ。然して彼が罪を赦す權威ありやと云ふことにつきて反對の起りし時、明に權威を主張せしは蓋し反對者の爲にあらずして、今罪を赦されたる人の爲にあらずや。此人は今も宗教界に勢力を揮へる人の反對論を唱ふるを聞きて其信仰は動搖せざるを得ず。此人の爲に是非とも權威の實證を示して心を安ずる必要あり。乃ち『癱瘋の人に爾の罪は赦されたりと

云ふと起きて汝の床を取りて行けと言ふと孰れか易きや、それ人の子地にて罪を赦す權威あることを汝等に知らせんとて、遂に癱瘋の人に、我汝に告ぐ起きて床を取り汝の家に歸れと曰へり』この奇跡は縱し反對者の抗論なくとも行はれたるべければ、耶蘇が自己の名分を證する爲に奇跡を行はずとの法則は損せざるなり。切に求め、憐んで應じ茲に奇跡は行はれたり。然して反對者を折伏し、病みし者の信仰を固めたるは其時に應じて併せたる意義に外ならず。

(六)奇跡は一種の畫文字(ピクチユアー、ランゲージ)なり、又た實行したる譬喩なり。耶蘇が不可見界に行て働かしたる力を見る可き形にて表章し人の心を導きて可見物より不可見物に臻らしむる資料となる効用あり。病に種々の狀態あるは人をして罪の狀態と結果の種々なるを念はしむべく、耶蘇が種々の病症に勝つの力は亦恩惠の力限り無きを見せしむるに足れり。耶蘇が病を癒やされたるものに對するや其思想を牽きて肉体の事より心靈の事に進ましめ、苦を救ひたる行爲より轉じて救ひたる其人に移らしむるを力めたり。然して羅馬の百夫長或はサイロフヰニシヤの婦の如く彼の品性と目的を洞察し得たる信仰を發見し得たる場合には、賞賛の辭を吝まざりき。癩病の患者が耶蘇の力は信ずれども、この力を我が爲に用ゆる意なるやを疑ひて『爾若し聖意にかなふ時は我を淨くなし得べし』と云ひし

時答へて『我が意にかなへり、淨くなれ』とて、其汚なき身躰に手を觸れて更に明に慈愛を表したり（馬可一〇四十、四十一）。又癲癇の小兒の父は之と場合を異にして耶蘇の慈悲心に訴へて、猶ほ彼の力に就きては確信なかりし故、耶蘇は狐疑を迎ふるに確信を以てし『汝若し信ずることを得ば信ずる者に於て爲し能はざる事なし』（馬可九〇二十三）と云へり。上に擧げたる二人の信仰は各補足を要したり、前者は耶蘇の慈心を疑ひ後者は其力を疑ひたれば。又彼の背後に來りて衣の裙に觸れたる婦人は、魔術的の効能を信ずる信仰を進めて、耶蘇自身との面接によりて起さるべき信仰に引き上げらるべかりしなり。若し然らずして耶蘇の療す力を竊取せし如き狀にて去りしならば、疑惑恐怖其心を襲ひて斯く卒然掠め得たる賜物は又卒然逸し去らざるかを危ぶまざらんや。但『女よ心安かれ汝の信仰汝を救へり安全にして行け』と云へる彼の眼色に接し音調を聞きて、單に奇跡の力のみならず其の動機たる愛を確認し得たりし時初めて心を安ずることを得たり。信仰を喚起する能はざる時耶蘇は奇跡を行ふ力を現し得ざりき。不信は彼の爲に一の制限となりぬ。ナザレに於て其村民が彼の肉体的の緣故を熟知せるが故に却て天の職命を輕じたるが爲に『彼處にて患者に手を接け唯數人を醫しし外奇跡を行すこと能はざりき、又彼等の信ぜざるを異み』

とあり。又耶蘇が時々言語以外の方法を用ひしとは蓋し先づ信仰を喚起する爲にあらざりしや。例へば馬可七〇三十二以下にある聾にて訥る者は言語を以て其志願と信依の念を喚起するに由なければ、言語に代ゆるに耳と舌に指を觸れて意を通じたりと見ゆ。然して耶蘇が天を仰ぎて嘆じたるは其の病者の冷淡若しくは薄信の爲に之を療すに或る故障ありしを示すにあらざるか。又馬可八〇二十三―二十五にある瞽者の始め快復の不完全なりしは其時信仰不十分なりし爲にして、信仰の上るに伴ひて全治せりと見るを得ん。何故に彼は飽くまで信仰の有無を條件と爲せしかと問はば、第一の答は耶蘇が個人的に人と交渉せる事を以てすべし。彼は出來得べき限り身躰の快癒に伴ふて心靈的更新あらしむるを力めたり。而して自から助けたる人は盡く眞意と感謝を以て我が物となすを求めたり。彼の奇跡的の活動は心靈的感化と有機的一致を有したり。

（七）以上の理由に加へて他の理由（此ほど明ならざれども）あり。癒されたる人自身は自ら信仰を發すこと能はざる地位に在り他の人の信仰が代贖的の働を爲す場合あり。癲癇の小兒は自ら病より救はるるを願ふこと能はず又耶蘇を救ふ者と仰ぐ能はず、この場合に於て其の父子に代りて求めしが、求むる父も信仰と不信と中に戰ひて力なきことを感じたれば、『我れ信ず我が信なきを助け給

へ』と願へり。耶蘇は父の信仰に助けらるゝにあらず却て不信仰の妨げに勝たざるべからず、周圍に立てる學者は冷眼を以て之を視つゝあり、衆人も亦弟子の失敗を觀て不信に傾き、弟子自身も信仰の力を出だす能はず。『此の類は祈禱と斷食にあらずは出だす能はず』との意味深長なる一言は此時に發せられたり。サイロ、フヰニシヤの婦人の場合に於ても其の信仰は子の爲に代求的の力を有したり。以上の例を見れば耶蘇の奇跡的活動を支配したる法則の一を窺ふに足る。即ち神は祈禱に應じて恩惠の賜を附與し祈なき所にはこの賜を受くることを得ずと雖も神は又人類の一体を重ずるが故に自ら祈る能はざる人の爲に祈る他の人の祈禱を受くると同じく、耶蘇も他人の代求的祈禱を容れて奇跡を行ひたり。彼の奇跡力は物質力にあらず正義にして合理的の力又た意志なる故に神の世界を治むる道と同じく道德的心靈的の手續を要したり。

（八）我等は猶更に一歩を進め耶蘇の奇跡は當人の信仰或は當人に代りたる他人の信仰を條件として行はれたるのみならず、耶蘇自身の信仰、即ち父の意志と力を賴む精神によりて行はれたることを言ふも誤なかるべし。癲癇の小兒の場合に於て癒されたる祈願は病人より出でず父より出でず又弟子より出でず、唯耶蘇自己の勇ましき信仰によりて疑惑の故障に勝ち得たり。上に引きし場合に

於て耶蘇が天を仰ぎて嘆じたるは祈りつゝありしことと疑ふべきやラザロの墓に於て彼は『心の中に憤り』（約翰十一〇三十三、英譯を見るべし）即ち不信を憤りながらも、遂に祈て確信を得しことは『父よ爾既に我に聽けり之を爾に謝す』との言によりて證すべく、又之に次いで『我爾が恒に我に聽くことを知る』と言へるは、彼が超自然の力を用ゆる時には祈るを常とせしことを證するに足る。必ずしも常に言に出だす祈禱なりしと想像するを要せざれども、父なる神に對する依賴、服從、信任の念、一言にして云へば祈禱の態度なりき。たゞ不信に克つ必要ありしとき言を以て祈禱したり。

（九）以上研究し來りたる部分を結ぶとともに我等は更に新しき部分に移らんとす。即ち奇跡と耶蘇の身位との關係此れなり。此等の事は輕しく臆測を逞くするは不可なれども福音書の案內に追隨して謹んで學ぶ所あり得べし。路加八〇四十六にある『我に捫る者あり能力の我が身より出づるを覺ゆればなり』との言を見れば、或は彼の超自然力は其の自体に宿りて接觸すれば直に之に感ずるが如く思ひ易し。然れども是は奇跡に付與するに魔力的性質を以てして其の道德的主義と宗教的價値を奪ふ解釋にあらずや。福音書の記事には多少不完全なる點ありて其の原因道理たる內部の實狀を說明せずして外形のみ叙することあ

り。此處も耶蘇の同情の感覺至て鋭敏なるが故に、群集の偶然に推し通ると病婦の信仰より發する接觸とは、識別することを得ざるならんと解する方、耶蘇の道徳的心靈的の方法に致合すと云ふべし。又耶蘇自身を信ずるを不要とせしことによりて、推し得べき事は父なる神が基督に宿り又彼に緣りて奇跡を行ひしことと此れなり。蓋し耶蘇は人を救ふの願と、神此の願を成すべしと云ふ信任と、神との父子的親愛によりて神の活動する器となれり。斯くて奇跡は耶蘇の肉体に超自然力の宿れる證據とはならずして、神との間に存する恒久完全なる父子的合致の證據となれり。斯く考ふれば耶蘇が遠方に在る人を癒ししことも信じ得べきこととなる。何となれば父は絶對的の神なれば空間に制限せられず、その點に於いて肉体を取れる耶蘇が空間の制限を受けざるを得ざると異なる所あり。自然界に行ひたる奇跡の如き遠き自然力を支配するは不思議なるに似たれども父なる神が子の訴へに應へて此の事ありしと考ふれば解し易からしむ。斯く解釋したりとて奇跡を耶蘇の身より引き離すにあらず又彼れの恩惠と光榮を減ずるにあらず。耶蘇が奇跡力を有すてふ思想と、神が超自然的に彼の裡に働きたりとの思想は兩々矛盾するにあらずして却て相補足す。耶蘇は能力を有し又之を用ひたり。然れども神より離れて孤立せる個身としてにあらず、父子

神の力を受け神の心に應ずるが爲に只時々にあらず永久に神の力と知慧と恩惠の人に加はる器となれり斯くて奇跡は父と子の結合の證據となる。

(十)奇跡は人の子と同胞兄弟の關係を彰せり。奇跡の記事の中道德的完全と相容れざる所は毫しも此れなく福音書の表寫する聖淸無罪なる面目と全く相符合す。神の同情は如何に鋭敏なるか。彼は人の悲哀と苦痛とを慰めて之を醫したり。群集の中に紛れて一婦人の微なる觸れさへも直に耶蘇をして其求むる所を知らしめぬ。時には彼方より求めらるるに先ちて助けを申し出だせしことあり。ベテスダの池に於ける病人、生來の盲(約翰傳五章及び九章)の如き是れなり。斯かる行には一種の犧牲あり。奇跡を行ふに當りては肉体の勞苦のみならず心靈的の苦勞を要したりと見ゆ。『能力の我が身より出づ』と云ひし言を斯かる意に解するも亦附會にあらざるべし。何となれば最高の奉公は最高の犧牲を含み、神が何人にても其の人格の裡に自由に働く時は又其人に於て大なる虚心なかるべからず。奇跡を行ふには、人に對する同情勁く神に對して絶對の信依を要し、精神的の氣力を費すこと多く、其の價として疲勞と無力を感ぜしむるならん。奇跡の上にすら十字架の印章は印せられたり。(柏井園君譯)

倫理と審美（一）

教授　ジー、エチ、パーマー

（一）

審美學も倫理學と同じく價値の學なり。美術鑑定家は單に美術を記述せず、又た倫理學者と同じく之を批評以上の動すべからざる事實と見做さず。彼はその物の『あらねばならぬ』如くなるや否やを批判し、そが理想を實現するの程度に從つてその優劣を斷定す。要するに、彼の關する所は美理想の形成と實現とに外ならず。猶ほ倫理學者が如何なる善理想に由りて一種の品行が陶冶さるるかを判定するが如し。斯く兩者に於ける方法の同一なるや、人は自然に結果迄も同一なるものと思ひ、善なるものと美なるものとは同一物の別名なるかの如く考ふるに至る。普通吾人が美てふ名稱を用ゆるは、外部に顯るるものに對してなり、ペルソンに於てもその形体的容貌的方面に對してなり。然れども、斯かる區別は獨斷的なり不必要なり。吾人は品行上の事柄に關しても美といふを得べし。若し果して然らば、美と善とは同一物には非ざるか。而して二者同一

なりとは是迄屢倫理學者に由つて唱へられたる一説なりき。此の説や古代より存在したるものにて、倫理學が始めて希臘人の中に起りし時に顯はれぬ。希臘人は理想の人物を形容するに『善且つ美』てふ語を以てせり。此句すら尚ほ多少の區別を存し居れども、その實二者は『且つ』てふ接續詞に由つて聯結さるべきに非ず、寧ろ『即ち』てふ接續詞に由つて聯結せらるるか、若くは『善美』と融和さるべきものなり。此の思想や固と凡ての希臘人が自然に感得せし所なれども、殊に希臘の哲學者中最も深遠なる倫理的識見を有せるプレトーに由りて發揮せられぬ。何人も彼程に善と美とを融和したるはなし。彼は一方を離れて他方を考ふる能はず。美の顯はるる所には善も亦た必らず顯はれ、善の出づる所には美も亦た必らず出づ。プレトーは實に此の思想の鼓吹者に相違なしと雖も、その實彼は希臘人の全生活を形成せる根本思想を明白に喝破したる迄なるのみ。

此の美と善とを同一視する説は、必しも希臘人に限れるに非ず。倫理學が始めて英國に起るや、此の説も直に唱へ出されぬ。シャフツベリーはホッブスを攻擊して曰く、ホッブスにして若し善と美との密接なる關係を認めたらんには、おのが説の誤れるを悟りたるならんと。彼は信ずらく、若し道德家といはず美

術家といはば、吾人は人をして容易に善の何たるやを解せしめ得べし。美術家が、その道理を知らざるに先づ甲の畫の乙の畫より勝れることを直覺する程に、美に對して鋭敏なる鑑識を有するが如く、道德家も亦た、道德に對して同樣の鑑識を有し、直覺的に正義を饑渇すべき筈なりと。

獨逸に於ても亦た、善美一致説は有力なる鼓吹者を見出せり。カントが智識論及び道義學に對して偉大なる感化を與へたる後ち間もなく、シルレルは彼の『審美論』に於て、審美的教育を欠きては、智育も德育も施すべからざるを論じたり。

善と美との密接なる關係を知らんが爲に、吾人は必しも哲學者流の説を聞くに及ばず。吾人が日常用ゆる道德上の語は、重に審美上の語を借り來れるものなり。吾人は善なるものを形容して、美といひ完全といひ清潔といひ方正といひほどよしといふ、而して是等は皆な審美上の語に非ずや、又た惡なるものを形容して、醜といひ粗大といひ不具といひ不釣合といひいやらしといふ、是等も固と美の欠乏を示す語たるに外ならず。各國の國語は悉く同樣の證據を與ふ。何れの國語に於ても、同一の語が善にも美にも流用さるるものなり。

之に加ふるに、此の證據は吾人各自の經驗によりて確めらる。吾人は皆な美の前に立つて道德的に高めらるるの思なき能はず。誰れか、ベートーベンの樂譜

を聞き、ワッツの繪畫を觀、若くはシェレーの雲雀の歌やキーツの鶯の歌を讀んで、尙ほ劣等なる情を起し嫉妬の念を燃やすものあらんや。惡を排斥する一種の力は吾人の前にある美の中に住み、吾人を引上げて萬惡の本なる私心より遠からしむ。美なるものは、吾人に借すに一種の威儼を以てす。余假に一個の父として、その子を他鄕に送るに方り、若し彼が美に對して無頓着なるを知らば、余は實に戰慄せざるを得ず。美に對して何等の感情をも起さざる如き少年は、道德上の危機に際して重要なる防備を欠くものなり。余は幾度か、おのが將に非行を犯さんとするに方り、單に他人の眼より見るのみならず、又た自身の眼より見て、そが如何に見苦しく如何にいやらしく見ゆるかを考へたる爲に、墮落より免かれたることあり。實に道德的感情が最早力及ばざる時にも、美醜の感は尙ほ能く余をして惡より引返へらしめ得るものなり。

（二）

余は是迄善と美との間に密接なる關係あることを明にせんと力めたり。吾人は是非共此の事實を承認せざるべからず。何れの證據も皆な、人心に善の世界と美の世界とを同一視するの傾向あることを示す。然れども、單に事實を明にするのみにては不十分なり。倫理の研究者として、吾人はその理由を探究せざる

問はんと欲す。されば余は進んで、何故に二者の間に斯くも密接なる關係あるやを
べからず。十分に之に答へんが爲には、吾人は美の全意義を解剖せざるべからず、美なる
ものを形成する諸分子を悉く研究せざるべからず。是れ取も直さず、吾人を複
雜極りなき審美問題の渦中に投ずる者にて、余には之を解釋するの力なし。元
來美の世界は未定の世界なり。審美學者と雖も、美に關する議論に於て更に統
一する所なく、美の道を追跡せんと試みたるものは、大抵そが遂に不可思議の
中に沒し去るを經驗せずんばあらず、美は全く道理にて捕捉され難き分子を含
み、不可思議はその肝要なる部分を占むるものの如し。凡て美なるものが具有
する一般性質を見出すは易し、而かも之を精細に叙述するは難し。余は斯かる
大膽なることを試みるに非ず。法律の場合に於ける如く、余が研究の中心は、倫
理にありて審美にあらざるなり。若し余に他の方面に注意を寄することあらば、
そはそが倫理問題に光明を與へ得べしと思はるる時のみに限るなり。故に余が
執るべき方法は、一の有名なる美術を撰擇して、その殊に大切なる要點を觀察
し、如何程迄そが他の美なるものの中にも發見さるるか、又た如何程迄そが善
なるものの中にも發見さるるかを探究するにあるなり。こは固より美の諸要素

を悉く發揮し能はざるべし、而かも又た以て善と美との間に存する一定の關係を知るに足らん。

（三）

さて美なる物の一例として諸君の中に廣く知らるる製作物を擇ぶに方り、余は州廳に反對してボストン公園内に屹立する、ショウ大佐の紀念銅像に如くものなきを信ずるなり。吾人は皆な之を知り、且つその趣意の崇高なるを感ぜざるはなし。こは合衆國の臣民たる一種族が、おのが奮發努力により、而かもおのれよりも一層文明なる國民に導かれて、自由を獲んとて進軍しつつあるを示すものなり。此の複雑にして高尙なる趣意は、美術家によりて眼に訴ふべく造られぬ。美術として此の製作物は、吾人に訴ふるに、單にその意味を以てするのみならず、又た一種の視覺的經驗を以てす。而して此の一種の視覺的快樂は、吾人の愛國心を發揮して餘あり。さらば、此の視覺的快樂とは如何なるものぞ、又た如何にして此の快樂は吾人をして崇高の念を起さしむるや。

第一に之にリヅム（律）あり。前面に十二三人より成れる一隊の行列ありて、尙は吾人をしてその後に無數の隊伍あるを想はしむ。此の多數の人は、單に多數の人たるに止まらず。彼等は一定の劃線的調和によりて緊束せられ、かくて

韻律に合へる詩歌が耳に與ふると、同様なる整齊一致を目に與ふるなり。次に之に模型的性格あり。彼等は皆な黒人なり。奇妙にして不恰好なる顔、大にして見惡き足、是れ一定の人種にのみ限れる特徴なり。之に此の人種の特徴ならざる表現はなく、又た此の人種に屬するものは悉く此處に代表せらる。戰鬪に渇し冒險を好める年少の鼓手もあり、自己を忘れて熱心におのが職分を實行する剛健の壯者もあり、又た忍耐幾年の後好機漸く來れる老人もあるなり。

されば、此の製作物や頗る複雜なりと雖も、吾人は之に統一あるを感せざるを得ず。たとへば、その運動の方向は如何に統一されつゝあるよ。此の人種が追求する目的は未だ達せられざるにもせよ、此の目的や慥に前途にありて、之に向つて凡ての線は集中し居るなり。斯かる進行に對して、シェークスピアの語ほど適切なるはなし。『曰く間斷なき勞苦の中に萬人は前へ前へとその戰鬪を進む』と。然り、此處に見ゆるものは、凡て前方へと戰鬪をなしつゝあり。小銃の傾斜は、定規的平行を許さずと雖も、凡て同一の感覺――前進的運動の感覺――を與ふ。之れが一部分として、美術家が此の考を以て苦心するを價せざりし程不必要なるはあらじ。各兵卒の足といひ爪先といひ、皆な此の感想を與へずんばあらず。皆な自然らしく見ゆると同時に、一の踵と雖も調子に外づれた

るはなく、一の部分として他の部分の調和を破るが如きことなし。若し此の中に一見全体の調子に反するに似るものあるも、尙は綿密に之を研究する時は、是等と雖も却て全体の調子を强むるものなるを發見す。不恰好なる黑人の一隊と少しく離れて、白人の中にても最も優等なりと思はるゝ一將校の馬上に坐するあり。馬の手綱は弛み、その頸と軀幹との曲線は他の部分との調和を破り、此の部分をして全体と一致せざらしむるの樣あり。然らば、此の分離は全く不必要なるか。そは却て全体の趣向と視覺的快樂とを增すとなきか。二者の差異は元來此の趣向の中に含まれ居りて、その反對は却てその結果を强むるものなり。斯くて全体は今一度美しく統一せられ、その共通なる目的は、上に舞へる『勝利』の女神像に顯はる。此の像や他の隊伍の視線外に在りと雖も、彼女の衣服は長く曳きて彼等の上に亘り、彼等の全体を支配するものの如し。

(四)

吾人が此の紀念像の美に對する一般の感覺を約說せんに、余は先づ之に著しき調和あるを認むるなり。その中に一の餘れるものなく、又た一の足らざるものなし、是れその著しき特徴なり。若しその完全美に對して疑心を抱くものあら

ば、試にその中に他と調和を欠く所あるや否やを點撿せよ。『勝利』の女神像は長きに過ぐることなきか。こはそが果して周圍に比例するや否や、そが人の注意を自身のみに引くか但しは全体の上に引くか、を問ふものなり。又たショウ大佐の馬は餘り自然過ぎて、實際の馬の如く餘り後に退き過ぎることなきか。若し果して然らば、吾人は馬を組成する諸線が餘り著しく他の部分と離れ過ぎて、人間の動作に一致せざるを非難するものなり。此の製作物を批評して、そが無缺の傑作なるや否やを定めんには、吾人はその整齊一致を研究して、そが如何に完全なる一体をなし居るか、如何に各部分がその他の部分に要せらるるかを見ざるべからず。若し少しも餘れる所なく、如何に極微の分子と雖も全体の規則に外づることなくば、吾人は勿論之を美と稱し得べし。若し如何なる部分にもせよ、他の部分と離れて自身のみに人の注意を引かんには、吾人は此の點に於てそを失敗なりと謂はざるべからず。

然れども、何人も以上の如き美の解剖をなさざれば、ショウ紀念像の美を樂む能はざるか。否な決して然らず。斯かる解剖は、美を樂むことを助くるよりも寧ろ妨げ易きものなり。吾人は今美術の研究者として此の製作物に接し、その各要素を明白に吾人の意識に攝取せんと試みたり。然れども、美術をして最も

美ならしむる所以は、そが明白なる意識を呼起さゞるとにあるなり。各部分は特別に観察さるるとなく、全体が一時に一個の感覺を與ふべきものなり。若し一部毎に之を視察して『一の部分は他の部分に和合す、此の部分は彼の部分に照應す』などといふを必要とせば、吾人は之を軟弱なりと稱することならん。若し之にして眞に首尾貫徹し居らんには、そは一見の下に看取せらるべきなり。今や此の銅像の前を通過してその美に感ずる人々は、彼等が相抱合せる諸要素——律に合へる人物、殆んど平行なる小銃、爪立ちせる足並、一方に集中せる曲線——に由りて印せらるることを覺へざるなり。彼等は少しも斯かる事柄に關することなく、斯くするは却て全体の美を下ぐるに至る。美術家は美を産出する前に、是等の事柄を研究すと雖も、見物者は美に對する感與の較醒めたる後に漸く之に注目し始むるなり。されば、吾人は他の附屬的要素を探究することなく、直に此の統一的調和こそ美術の精髓なれと思ふことならん。而してこは又たあらゆる美の特徴には非ざるか。美しき音樂には、唯だ必然的分子のみありて、少しも偶然的分子あるなし。全体はその中に響く各部分を要し、如何なる部分と雖も變更せらるるを許さず。美しき文章に於ても同じことなり。吾人の論文や物語にして若し拙なら

ば、そは不必要なる事柄を挿入したるか、又は讀者が知らんと欲する所を省略したるが爲なるなり。各部分は散漫に流れて同一の步調を欠き、その結果として作物は軟弱不統一の觀を呈す。以上の例は凡て人工美より引用されたりと雖も、而かも天然美の塲合に於ても、根本原理は同一なり。美しき人体に於ては、頭と足との適當なる釣合を要し、美しき風景に於ては、人工に由れると同様なる線の調和と色彩の配合なかるべからず。此の自然なる統一的調和は、畢竟美術家が產出せんとて苦心慘憺する所ならずや。

（五）

假に此の統一的調和を以て美術の精髓なりとするも、こは又た善き品行の中にも見出さるるなり。善美なる道德の中心には、必ずや統一的調和を目的とする所なかるべからず。吾人は善の絕頂を稱して神聖といふ。而して道德上の語も審美上の語も、その語源に於ては同一なり。ホーリー、マン（神聖なる人）は、即ちホール、マン、（完全なる人）なり。罪人は之に反して破片的の人なり。罪人は先づ自身との調和一致を欠きて、今日行ふ所を明日は耻ぢ、昨年の事業を今年は破壞す。神聖なる人は今日行ふ所を明日も次週も來年も否な永遠迄も賛成す。彼は常に自身と分離することなき完全体なり。吾人が彼を呼んで、方正の

人といひ圓滿の人といひ一致の人といふは、必しも故なきにあらず。而して斯かる語は、前にも言へる如く、凡てその語源を審美界に有するなり。斯かる審美的判斷は、倫理の不明なる點を明瞭ならしむるに益あり。吾人は罪人を稱して『くづれたる人』といふ。即ち品行の崩潰して支離滅裂なるを意味するなり。諺に曰はずや、『彼は次の氷解に遇はん日に潰敗して見るべき形なきに至らん』と。シャフツベリーは之を以て一般不道德の特徵なりと考へ、之を定義してソルショー、コンテヌイ（全体の潰敗）と言へり。若し世にありふれたる一の不道德を取りて、仔細に之を點撿せば、又た以て彼の說の至當なるを知るに足らん。余が今日食事に就ける時、余は非常の食慾を感じたるが、食卓の上には余が殊に好める食物の横れるあり。余はそが余の身体に宜からざるを善く知れり、而かも余は之に頓着することなく余の食慾を滿たしぬ。是れ食慾上の不道德なり。而して此の罪の罪たる所以は何れの邊にあるや。食すると惡しきか。否な決して然らず。人は生きん爲には食せざるべからず。食を樂むと惡しきか。唯だ厭世家のみしか言ふならん。健全なる思想を有する男女は、憚ることなく食事の快樂を人生の祝福中に數ふるなり。然らば、食事の快樂と食慾の罪とを分つ經界線は、何處にあるや。こは食事の快樂を獨立の事柄と見做し、

之を他の何事とも關係なきかの如く思ふことにあるなり。神聖なる人も罪人の食ふ如くに食ひ、暴食家が食を樂む如くに食を樂む。然れども神聖なる人は、食を樂むと同時に、散歩を樂み執務を樂み他人の爲に盡すことを樂む。而して彼は是等の事を全体の一部として樂み、彼等は又た互に相助けて彼の生活を成立す。彼はその一をして全体を破壞せしめず、不相應なる注意を單に此の事若くは彼の事にのみ與へず、何れの瞬時も何れの慾情も何れの嗜好も、そが他に關係せずして孤立するを許さず。彼は全体の比例を計りて一時の衝動を制止し、おのが生活の各分子をして他の諸分子と相補足するの勢をなさしむ。何事にもあれ全体に障害を及ぼさざる限は、彼は之を容ることを耻ぢざるなり。善人とは蓋しその一言一行悉く全生活の一部をなすものをいふ。斯く一小事の中にも全体の精神の顯はれてこそ、始めて善人たるものに赫々たる威光も生ずるなれ」。さらば、何故に吾人は善き人を呼んで美しき人といはざるか。吾人は不道德なる人を厭ふべき筈ならずや。繪畵や衣服の調和を喜び、德利や道具の釣合よきを賛しながら、支離滅裂なるおのが品行の醜を認めざるは、豈に笑ふべきの至りならずや。吾人は眞に善人を地上に於ける最美のものと數へざるべからず。如何なる美術家と雖も、斯くも精巧に斯くも複雜に斯くも調和せる作物を産出

し得ざるなり。善人は吾人に示すに、善と美とは一にして二にあらざることを以てし、且つ善に就くに最も近く最も確なる道は吾人の審美眼を訓練するにありといへる、ブレトウやシヤフツベリーやシルレルの説を明證するものの如し。

（六）

斯く善と美との間に密接の關係あるを認むると同時に、余は又た之に反對の事實あるを看過する能はず。美術家は必しも嚴格なる道德家に非ず。然れども。余が是迄論じ來れる所にして全く正しからんには、美に對する熱心者は又た善に對する熱心者なるべき筈なり。然るに、吾人普通の經驗は却て之に反對す。世人は美術的天才を有するものに許すに多少の道德的瑕瑾を以てし、彼等に對して他の人々に對する如く嚴しき道德的要求をなさず。故に古來世界の歴史に於て、道德的改革者は大抵白眼を以て美を冷視したりき。希臘人の中に於てすらストイック一派の如きはその一例なり。エピキユリアン派の人士が美を謳歌したるに反して、ストイック派の人士は之を尊重することなかりし。ブレトウすらも、彼の理想國より詩人を除きたり。基督教の時代に至りては、眞面目なる反對は屢美に對して起りぬ。中世の庵室主義は美術を遠ざけたり。ピウリタン派は繪畵や肖像やその他人生の粧飾物を破壞せり。クエーカー派は質素を旨と

して、家庭よりも教會よりも諸種の美術を排斥せり。若し斯く善に對する熱心者にして美に對する公然の敵ならんには、いかで吾人は善と美とは同一なりと言ひ得んや。余は又爰に自身の經驗に訴へんと欲す。余は前に、余が道德上の危機に際し、屢賞美性によりて保護されたることあるを言へり、然れども、吾人は又た此の賞美性の爲に幾多の誘惑に遭遇したることあるなり。宜なるかな、テニソンが『詩人の多情多感は痴愚と不道德の渦中に入る』といへると。吾人の多數は固より詩人に非ずと雖も、而かも如何なる邊に於て詩人的性情が誘惑に陷り易きかを、實驗し能ふなり。

されば、美の世界と善の世界とは全く同一にあらざることは明白なり。二者密接の關係を有し且つ相互に依賴する所ありと雖も、一方の境界線は他方の境界線と全く合するものに非ず。倫理と法律とを區別するは、倫理と記述的科學とを區別するよりも困難なりしが、今や倫理と審美とを區別するは尙一層困難なり。一條の明白なる境界線を劃するが如きは、到底出來得べき事に非ず。然れども、余はたとひ全く兩界を截別し得ざるにもせよ、少くとも人が美といふ時と善といふ時と、如何に異なれる見地を有するかを示し得るなり。兩者共に同一事件を取扱ふにもせよ、各特殊の方面より之を見る。而して此の見地の異同は、余

が之より論せんと欲する所なりとす。（未完）

萬物は爾曹の物也

牧師　アーサー、カー

（哥林多前書三〇二十一）

使徒バウロは哥林多人に贈れる前書中の一節に於て、一見互に何の關係もなきが如き二個の題目を、其獨得の才を以て如何にも興味ある樣に相連絡す。題に揭げたる語は即ち其節を結ぶものなり。二個の題目とはコリント敎會に起れる黨派と、希臘哲學の誘惑とを指すものなるが、バウロは此二者に適用するに一個の原理を以てして、さて題の如く『萬物は汝のものなり』とは言へるなり。蓋し苟くも此原則を守るときは、敎會に黨派の跡自ら絕つべきは言ふ迄もなく、基督敎徒の賜なる天來の智慧に哲學を臣事せしめ、克く之を使役するに至るべければなり。

熟々思ふに此新設の敎會に黨派を生じたるは全く該使徒の心を痛ましめしところなるべし。然れども又考ふるに、彼は熱心に彼等に、心を一にし言を一にせ

んことを勸めたる以上は、其れにて充分と思惟せるものの如く、現に此點について呶々することなく、直に進んで、教會の神學に對して大關係を有せる他の題目即ち希臘哲學の虚妄、傲慢に說き及びたり。今其思想の轉じ行く順路を辿るに左の如し。

彼れ先づ黨派の事を考へつつあるうち、自己がコリントに於ては、洗禮を授けて信者を作りしことなき事に思ひ至り、さて思ふ樣、若し自分にして洗禮を授けて信者を作りたらんには、自分より受洗せるものと、否らざる者との間に不祥の區別を生じたらんも知るべからず、さらば數人の外斯くせざりしこそ幸なりけれと、此く考へ來れる彼は轉た神に感謝するの情に禁へざるものの如し。

次に洗禮の事よりして自分が教へし福音の事に移り、終に一轉して其道の單純を說き、嘗てアテンスに於て自ら接觸し、辯論を以て之を說伏せんとして失敗したる、かの希臘哲學の纎巧に比すべくもあらぬことを明にせり。

然れども此く異教哲學を論じ、其危險を說くうちにも、彼は片時も其發端に言及せし分派の事を忘れず、人間の編出せる哲學に對して議論の矢を放ち行く途すがら、絶へず之を論破するを怠らざりき。

然れば彼は第三章の初に於て、『我靈の者に語るが如く爾曹に語ること能はず』

といへり、即ち神の靈を有する人として語ることと能はずといふに外ならず。蓋し神の靈は希臘哲學者至高の造詣に優れる賜にして、固より又た哥林多教會を離分、汚辱したる彼の黨派心の若きものを生ぜしめ得ざる賜なればなり。若し夫れ次の語に至りては一層剴切なるものあり。曰く、『汝等は神の殿にして、神の靈汝等の裡に在るを知らざるか』と、（哥林多前書三章十六）。イエス、キリストの從者若し斯くも至貴至重なる所得を有する者とせば、全世界も之に比しては塵垢の如きに非ずや。『何人も人を誇る勿れ、萬物は汝のものなり、パウロも、アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、現在の者も、未來のものも、是れ皆汝のものなり。しかして彼等はキリストのもの、キリストは神のものなり』（三章廿三）とは、實にパウロの語なり。即ち是れ一種の特色を有する基督教哲學の基礎を構成する原則にして、此理を希臘哲學に適用して考へんに、此新哲學たる、一方に於ては、從來人心の力が克く到達し得たる最良の結果（希臘哲學）を自由に採用して躊躇することなかるべく、他方に於いては、神の光明に照らされて、希臘哲學よりも更に深く人生の秘義に悟入するものたらずんばあらず。爾來若し此原則にして固守され、妄りに人間の思辨を肆にして基督教國の信仰箇條及教義を左右せず、唯だ其推測を正當の度に於て用

ひたらんには、基督敎の思想、敎義の爲め實に幸なりしものを、しかあらざりしこそ惜むべきなれ。

若し夫れ此原則を黨派心に適用するに至りては、基督敎の將來に對して更に重要のことならずんばあらず。

固より哥林多敎會の結黨分爭は危險の源となり、該使徒の警告を喚起するまで重大のものなりしには相違なきも、思ふに我等其性質範圍を誇大するの恐も之れ有るならん歟。諍論ありしは疑なきことながら、異端邪說の起りしといふにはあらず。若し此言の誤なきを知らんと欲せば、請ふ基督敎根本敎理の死活問題が勃興せし當時草せし加拉太書又は哥羅西書と讀み比べよ、蓋し思半に過ぎん。加拉太人に向つて彼は曰く、『キリストの恩を以て汝等を召したる者を汝等が此く速かに離れて異なる福音に遷りしことを我怪む、此は福音にあらず、或人ただ汝等を擾し、キリストの福音を更へんとする也』(加拉太書一章六、七)と。又哥羅西書に對しては曰へり、『汝等愼むべし、恐くはキリストに循はず人の傳と世の小學にしたがひ空言なる理學を以て彼等の心を奪ん』(二章八)と。然るに哥林多前書に至りては、右の如き嚴しき詰責の語もなく、又危險を恐るるの口吻もあらず。吾人只一考の勞を取らんには、固より此かることあるべき

筈なきを知らん。何となればコリント人等愚にも誤つて名士の旗下に黨を樹てたりとはいへ、パウロ、ペテロ、ケパの事及アポロといふ如きキリストの高弟は何れも異端邪説を唱へたりとの咎を嫁すべき人にあらず。パウロはアポロについて實に左の如く言へり。『兄弟アポロについては兄弟等と偕に彼が汝等に行かんことを我大に勸むれど彼れさらに今往ことを欲せず、然れど便時あらば往くべし』（十六章十二）と、彼等の中キリストの教會に邪説を導入したるの責を負ふべきもの一人もあるなし。

然るに此等黨派の中キリストの名を獨占するもの權を主張する派あり。如何なる意味にて此く主張せしか、其主張の眼目は如何、そは今必しも問ふを須ひず。ともかく故らにキリストの本性品格について誤謬を唱道せざりしは殆ど確なるが如し。もしさることあらんにはパウロ明白に之を訂正せざる筈なければなり。之を概言せんにパウロは己がコリントに新設せし教會の心靈上の狀態については寧ろ感謝すべき理由を有せり。彼は其贈れる書簡の劈頭に於て左の如く言へり。『イエス、キリストに於て汝等が賜はりし神の恩について我恒に汝等の爲に我神に感謝す蓋汝等彼に在りて諸の事すなはち凡の教訓と凡の知識に富ことを得たればなり、是キリストの證汝等の中に堅せられしに因る斯て汝等は賜れる所

の恩かくることなし』（一章四以下）と。是れ豈にキリストの福音を傷け若くは重大なる誤謬を傳ふる者に與ふべき讃辭ならんや。蓋し使徒パウロの語たる、何れの世、何れの教派に對しても有用なる戒飭譴責にして、『萬物みな汝等のものなり』てふ語の中に含まされたる大原則は、獨り古代のコリント教會に起れる紛爭に關するのみならず、實に今日吾人の生涯、行爲に適用し得べきものにして、又之を以て今日幾多の問題を解釋し得べきものならずんばあらず。

抑もパウロは玆にキリスト教徒が非常絶大の特權を有し、キリストと合一するによりて測り難きの恩賜を享くること（一章三十）を說き、此かる賜を有するものは、實に希臘哲學の人的智慧の上に位するは言ふも更なり、教會に於て結黨分爭の如き卑事に齷齪するを屑とせざるべしと論す。今最初の三章を讀むに此二樣の議論相並行して進み、而して此兩者を解决するには常に同一の原則を以てせり。然らば其原則とは何ぞといふに、神が人心に植へ給ひし聖靈の賜に外ならず。曰く神に立られし智慧として我等に來り、曰く万事を究め知り玉ふ靈（二章十）、曰く我の裡に宿り玉ふ神の靈、信者各人を神の聖殿となし、神の住み玉ふ奥殿となし玉ふ者（三章十六）、是れ即ち其原則にして、使徒パウロをして其幼稚なる信者に向ひ、大胆にも『萬物は汝等のもの也』と言はしむる所

以のもの實に玆に存す。抑も此事たるキリストに於て示されたる偉大の新眞理にして、終には世界を革命し了するの運命を具へたるものにてありき。眞に是れ隱れたるマナ（天の食物）、秘密なる名にして、之を有し、之れを知るはいとも貴し。之をかのパウロ及其信者が生活せし優麗典雅なる希臘世界の名聲、榮華、智慧其ものに比せんに、之を基督の爲めに使用し得る限りの外は、優劣高下同日の談にあらず。基督教徒は萬物を自己のものと見做し、自己を基督の有と認むべく、隨て此高大なる財產を基督に奉事する爲に用ふべく、勢ひ最後に神に事ふる爲に使用すべしと敎へらる。

社會上數ふるにも足らぬ卑賤の地位を占め、其中財產所有の權利さへなき奴隸も少からぬ小團体に向つての語としては、如何にも驚くべき意味ある敎にあらずや、パウロが此所有の秘義を說き示すに用ふる語を考ふるに、其影響の及ぶ所實に廣く且遠きものあり。曰く『今在るもの、後あらんもの凡て汝の有なり』と。即ち是れ基督敎徒たる奴隸は世界歷史の將來を其掌裡に握るといふに外ならず。此原理の適用涯限なきを視るべし。

先づ初に、パウロは此原理を敎會の分裂に應用し、其信者が自分等の敎師を用ふるの道を誤れるを尤めたり。彼等は此等敎師より敎を受け、其弟子門人とな

り、而して此等教師を基督に事へんが爲めの自己の所有と考ふることをなさずして、之を嚮導、先達とはなせり。然り而して基督教會に於て、實に之と同一の誤謬は幾度となく繰返されぬ。信者は其賜の絶大なることを忘れ、實際基督に於て自分の奴僕と爲すべき人を自己の主人とはなしぬ。パウロ、ケパ、アポロ皆各説くべき一の福音を有せり、實に唯一の福音を有せしなり。然れども各特有の實驗、才能を以て各自獨得の說き方を爲せしにして、一は一の眞理を高調し、他は他の眞理を切言せり。此かる差は言ふ迄もなく新約全書に其痕跡歴然たり。福音は同じと雖も之を教ふるの方法と方面は異なり。パウロは信仰を主張し、ヤコブは行爲を說く、マコは救主の行蹟を眼に睹る如く書き列ね、ヨハネは救主の靈的教示の深意を傳ふ。異なる心意の摸型は眞理の異方面に注意を惹かるれば也。

然り而して各聖書記者、吾等の主の生涯、教示を記錄せる各著者は何れ一人として欠くべからざるにあらずや。若し人「予はマコに屬す」「予はヨハネに屬す」「予はパウロに屬す」「予はヤコブに屬す」といはば如何、實に誤らずや。然るに哥林多教會の信者は其教師を尊信するの餘、恰も此誤を爲せしものの如し。且つや使徒の警戒ありし甲斐もなく、幾度か基督教會が此愚の繰返されたるぞ憾

なれ。大なる敎師は起れり。オウガステンも起れり、フランシスもドミニツクも現はれぬ、ルーテル、カルヴイン、ウエスレー、ピユゼーの如き人士も輩出せり。人は熱心渇仰して旗下に集れり。之が爲め固より其場合々々に應じて一種心靈上の利益を得ずとは謂はじ。然れども大躰より視れば、基督敎會に害を及ぼせしこと疑ひなし。是れ實に使徒パウロが神感の智慧を以て夙に先見せし所なり。

然らばパウロは吾人が如何にせんとを欲するならんか。吾人が世々代々暗黑裡の嚮導者となり、基督の敎會の燈臺として輝き出でたる右の如き大光明を避けて之を顧みざるを欲するか。決して然らず。パウロは言はんとす。『萬物は汝の有なり』、基督の名により、基督に事ふる爲め彼等を用ひよと。諸子の心靈の益の爲め請ふ此等種々の敎役者を用ひよ。然れど恐るる勿れ、諸子は基督の有なることを。如何に有名なる說敎者出づとも諸子は之に屬せず。いかに基督敎會に於て有力なる人傑たりとも、諸子は彼れの有にあらず。諸子は基督の僕なりしかして如何なる敎師たりとも、諸子を助けて一層よく基督に事へしめ、神の奥義を悟る力を添へ、敬神修德の道を或は敎へ、或は行ひて諸子を勵ますあらば固より靈性の健全の爲め其人を用ひよ。然れど夢め之に盲從し、其奴隷と爲

る勿れ。何となれば『萬物は汝の者なればなり』。

聖パウロが邪說と自ら趣を異にせる黨派心に對して斯くも夙に警むるところありしは、其眼識眞に凡常に非ず。而して基督教會に起りし事實に徵するに、彼が適用せる原理は實に言ひ難きの價値を有す。苟くも人一たび黨を樹つるや、勢ひ其反對者を貶し、唯一部分の眞理より離るるの故を以て、其說の全躰を非認するの弊に陷り易し。然るに『萬物我有』なりとせば、吾人は萬物を悉く基督に事ふる爲め用ひざるべからず、而して吾人は己れの屬せざる敎師、敎會、組織よりして學ぶところあるに非ずや。信者は今や宗敎生涯に於ける此幸福なる規則を發見寧ろ發掘し初めつつあり。今や古に比して嫉視反目の風諸敎派間に減じ、加々互に相了解せんと力め、他の組織に存する善き、聖き分子を喜んで吸收するの雅量を具ふるに至りぬ。即ち所謂優れる道にして、かの使徒パウロが吾人の眼前に掲げたる合一に進み行く一步たらずとせんや。然り而して此れ實に使徒が基督によりて『萬物は我等の有なり』との高大なる自任を吾人の爲めに爲せるを實際に適用したるものに外ならず。（小林彥五郎君繙譯）

說教

慰藉

モレビヤン教會監督
神學博士　エドワード、ロンザラー

母の其子を慰むる如く我もなんぢらを慰むべし（賽六十六〇十三）

（一）慰藉の必要　勞苦に充ち、競爭に充ち、苦痛に充ち、患難に充ち、失望に充つる此世に於て、一瞬たりとも無かるべからざる物は慰藉也。僅々一日のうちたりとも、如何に多くの慰藉を兒童が要するかは、家庭に兒童を有するものの經驗して熟知するところなり。彼等は何かな些細なる不安、不平、怨言をならべつつ兩親の許に馳せ來る。此の際その求むるとほりに之れを撫し、之れを慰めやれば、兒童は元氣を直して直ちに復もや遊戲に餘念なし。其の成長するや此の慰藉を求むる内心の願望、さらに以前に比して寧ろ切なるものあり。唯これを兒童たりし際の如くに搆はず露出せざるのみ。若し其の欲するところ求むるところを確むるに先ち、能く其の事情を研究して審にすれば、畢竟するに兒童の經驗が繰返されおるを見るならん。課業なり、事務なり、世渡りの前途なりに我が心苦めるなり。何ものよりも吾人の必要とするところは慰藉なり。

こは老ひの最後に至るまで、一生續くものにて始終少しも變らず。他のそれ〴〵の求めは何時しか消滅し不用に歸せんも、慰藉の必要だけは終始かはらざるなり。心に於て慰藉を燃ゆるばかりに熱望しおるものは外形却て、慰藉などを求めておらぬが如く吾人の眼に見ゆることあり。予が教職となりて未だ久しからざりしときなり、一教會にて說教をなしたることありしが、右教會の牧師といふは、其の職に在て夙に重望あり、それに又學者なり、文才あり、且つ說教

者としても雄辨の聞え高く、人より深く畏敬せられ、大抵の人は此人の前に出れば多少憚るところありし位なり。說敎の後われら相携へて敎職控室に入りしに、何ぞ料らん、其老牧師は、隻手、顏を蔽ふて小兒の如くに嗚咽せんとは。而して苦悶していはく『アヽ牧會の重任に堪え難し』と。予は斯く我が前に端しなく洩らさるるまでは此の老牧師が其の內心に、かくも切なる慰藉奬勵の必要を感じゐたりしことを、夢にも知らざりき。予は今尙ほ記憶す、予が常づね畏敬しゐたる此の年長牧師の前に、予は如何に靑年未經驗の心亂れて茫然立ちゐたりしかを。嗚呼世の何處にか慰藉の不用なる人あらんや。慰めらるべき理由それ〴〵異るとも、何人も慰藉の必要なるだけは異らず。或者は慰藉を得ることあたはざるばかりに其の心碎けたる者もあらん。

(一)　母の慰藉　　世に在る慰藉者のうち、母にも勝りて善き慰藉者なし。子を知るものは母なり。母の心は其の兒童の感觸する一微音だに逸せず。斯く注意深き母の最も心がくるものは我が子女の喜憂なり。わが子に悲哀あれば、母は宛然自己の悲哀の如くに心を刺し通さるるなり。よし學問も無く、わが子の學藝の深達には、迚も及びもつかぬ者にてもあれ、母は、母の愛に於ては不思議なるほどに雄辨なり。明白にして柔和なる母の奬勵慰藉の如くに子女の心を動かし其の道念を感ぜしむるものあらんや。こは幼かりしときより、老ひの最後に至るまで秋毫も異るなし。或は今は旣に倔強なる丈夫となりおるにもせよ、或は旣に團欒の家族を有する婦人となれるあかつきにもせよ、餘儀なき事情の妨ぐるにあらざるよりは、男女共に我が母に到りて語るを樂しむ。

　わが生涯の動亂、慄然たる恐怖、
心痛、憂愁、血淚の洪水の裡に、

如何に美はしく慰藉の温言、
　わが耳に響くらん、
友垣の言も、さりながら、
優しく語る母の語には、
　なにものも及ばじな。

（三）　母の如き神の慰藉　されば神が慰藉を其子女に與へんとし給ふや、題詞の如く『母の其子を慰むる如く我も爾曹を慰むべし』とあるなり。神は其の目的に於て儼然不動、その智識に於て無限無窮、天と地との全能なる支配者、大なる神にましませり。然れども其の心に至りては母の心の優しきが如くに優しく、其の手は我が母が、曾て我が幼き時に、わが頬に觸れ、もつれたる我が髮毛を撫でし時の手の如くに温かなり。『母の其子を慰むる如く我も爾曹を慰めん』。これ人生の勞苦に心悶ゆる吾人に贈られたる神の語なり。吾人日々の遭遇に際し、吾人をして神の恩を求めしめんとして招き給ふ、これ神の慰藉の語也。

（四）　聖靈は神の慰藉を通ずるもの也　神その慰藉を人に與へんとし給ふや、その聖靈を用ゐ給ふ。弟子たちに聖靈のことを語りたまふとき、キリストは是れを『なぐさむる者』と稱し。又その告別の談話中にも『われ父に求めん父必らず別に慰むる者を爾曹に賜ひて窮りなく爾曹と偕に在らしむべし此は即ち眞理の靈なり』とあり。使徒行傳中ユダヤの基督教徒の和氣洋々たる態を描寫せるところには『聖靈の勸（英語直譯は慰藉）に因りて事を行ひ』とあり。吾人が屬する教會が、この聖靈に關して告白するところを見れば、

　我は、父より出で、我儕の主耶蘇基督この世を去れる後我儕と窮りなく在らしめんとして遣り給へる聖靈を信ず。我は、母が其子を慰むる如くに我儕を慰め、我儕の荏弱を助けて言ひがたきの慨歎を以て我儕の爲に仲保し、

我儕が神の子たることを我儕の靈に證し敎へてアバ父よと呼ばしめ、神の慈愛を我儕の心にそゝぎて我儕の躰を聖き殿となすところの聖靈を信ず。

とあり。人多くは聖靈を畏れ、耳を之れに傾くるを厭ふもの少なからず。かかる本能的畏懼は、聖靈の敎理を全く誤り、之れを以て狂暴粗野、見ききするからに不快の感を懷かしむる心意狀態と連結するに因るなり。然れども神の聖き慰むる者が吾人に臨む決して此の如きものにあらず。勝りたる善きものを慕はしむる和氣春の如き優々たる氣息わが心に臨むか。不安なりし心に平和臨るか。困難及び試錬の眞最中に之れと相面して我れ尙ほ泰然たる滿足あるか、是れ聖靈なり。聖靈のきたるや、母の我を慰むるが如くに柔和に、母の我れを奬勵するが如くに恬靜なり。されば聖靈に關する聖書の敎を畏るる勿れ。遠ざくる勿れ。これらの敎に就て考ふるを等閑にする勿れ。これを祈ることを怠る勿れ。題詞に『母の其子を慰むる如く我も爾曹を慰むべし』とある此の約束の言を實行せんとして、神の多く用ゐたまふものは、即ち此の慰藉者なる聖靈なり。

(五)　聖書の慰藉　　失望喪心せるもの、或は苦み悶ゆるものに奬勵慰藉を與ふるに神は又聖書を用ゐたまふ。此の聖書は、仝じ聖靈に感じて聖書記者の記せしものなり。吾人が日々聖書を讀むの必要と價値茲に存すと謂ふべし。吾人にして是れを讀むも、その章句、別段吾人の感を動かすこと無き折もあるなり。然れども何時か其の必要に際しては、それ〳〵心に浮びきたるべし。イエスが聖靈わが爾曹に語りしことを想ひ起さしむべしと弟子等に仰せられたるとほりに、聖靈は吾人にも亦わが讀みたる聖書の約束の言を、それぞれ適當なる時に想ひ起さしむべし。

（十八）著るしく慰藉の臨る場合　聖書の眞理を介して吾人の靈魂に臨む聖靈の慰藉は、時としては吾人の忘れんとして一生忘る能はざるがごときほどの場合もあるべし。諸君の改信したるは、聖書中の慰藉に充つる或る句が、聖靈によりて諸君の靈魂に響きたるに因らざりしか。『凡て勞れたる者また重荷を負へるものは我れに來れ我れ爾曹を休ましめん』と語れるキリストの聲にあらざりしか。或はキリスト其の靈を以て『道は爾に近く爾の　にあり爾の心にあり是れ即ち我儕が宣るところの信仰の道なり蓋は爾もし口にて主イエス、キリストを認はし又なんぢ心にて神の彼れを死より甦らししを信せば救はるべし』と語れるにてもあらん。異日また聖書の語は、壯快なる慰藉の力を以て諸君の心に臨み、その慰藉の言のために日を逐ふて幸福を感ずると深きに至るが如き場合もありしならん。『わが恩なんぢに足れり蓋は我が能は弱に於て全くなればなり』といふ言が其の靈に臨むや、一アポストロの感ずるところ、實に此の如くなりき。

予は一夜、苦悶者の傍らに座したり。その求むるに應じて讀みたる聖書の句は左のところなり。其の語に曰く『なんぢ水の中をすぐるときは我れ偕に在らん、河のなかを過ぐるときは水なんぢの上にあふれじ、なんぢ火の中をゆくとき焚るることなく火焔もまた燃つかじ、我はエホバなんぢの神イスラエルの聖者なんぢの救主なり』（賽四十三〇二、三）云々。翌朝この人は安々と此の世を去れり。蓋し此の言は、天の家路に向ふ途すがらにある此の可憐なる人に神の與へたまひし最後の慰藉なりしなり。神は是の語により、宛かも題詞にある如くに『母の其子を慰むる如くに』此の人を慰め給ひしなり。然れば人その心を神に開けよ、神は常に慰藉を與へんとし給ふなり。神は惱めるものの事情に相

當して、それ〴〵慰藉に充てる聖書の語を以て人々の靈魂に臨み給ふべし。その臨み給ふや、母が其の優しき手を以て子を撫するに似たり。

(七)　慰藉を得るの途如何　　他なし、わが罪過、わが怠慢を悔改むるは其の最良の途なることあり。これを悲しみて以後復たせざらんと神に告げよ。これ多福なる日光を導きいるるために、戸陰を明け放すなり。犯せる罪過を告白するを恐る勿れ。これ過失を我が母に告ぐると同じことにして憚るところあるべからず。若し其の間に相違ありと謂はば、母にも告げ得ざることにても、神には告げ得る一事也。

病めるものに臨む工合も一應おなじきところあり、キリストの名をいひあらはすものにして其の言行にわが心一點の慰藉あることを示さず、過をなし、爭をなし、敎會の義務を怠りがちなりしに今之れを神に告げんとはせず、その告白せざるは心恐るるにてもあらんか、ただ其ればかりに心に一の平和も無く安慰もなくして今病苦の床に臥せるなり。病人の心に愉快ありて心爽快なるときには、藥の効能も倍になることは妙らしからず。神が人を慰めんとするや、母が其の子を遇するが如くにせんと望み給ふなり。神をして是くの如くなすを得ざらしむるは、苦惱する當人に悔改の心なきに因ること知るべし。

病にあれ、健かにもあれ、或は長壽なるにあれ、既に人生の旅路の終まさに近かるにもせよ、誰れか母の如き神の慰藉を要せざるものならんや。

神は其の愛子を、完き救主として此の世に遣りたまへり。又福音の傳へらるるところ神は何處にも其の聖靈を注ぎ給ふ。更らに又神は聖書を與へ、聖書の語を以て變に應じ機に臨み、母の優しき慰めある聲を以て人々に語りたまふ。如何なるものにもあれ、如何なることをなしたる

にもあれ、神の前に謙りて跪きだにせば、必ず神は母のごとき慰藉を與へたまふべし。

をさな兒の、安き心なく、
泣きつ苦しみつ悶ゆるときこそ、
優しき母は抱きしめて、
深き愛を我兒に、こむるなれ。
　罪の重荷に壓へられ、
　靈魂砕けて悩むとき、
忍びこらへし我神は、
かたく我を抱〆めて、
無上の愛をこむる也。（小林彦五郎君翻譯）

耶蘇基督の德性

神學博士　牧師アレキサンドル、ホワイト

その子やや成長して精神强健に智慧みち神の恩寵その上に臨れり（路二〇四十）

題詞の語は、或る點より見れば、此の世に於ける我儕の主の生涯中、最も大切至要なる時期を蔽ふものなり。蓋し其の然る所以は、この時期は之れ主の智德及び心靈上の品質、漸やく形成せらるる際なればなり。如何なる兒童にもあれ、その生涯の初年を等閑にして徒勞するか、或は誤るに於ては其の前途の不幸言ふを俟たざるなり。我儕の主の此の世に於ける全生涯が、吾人の間に往々にして見る不活潑を免かれ、破船を見るなかりし所以のものは、舵を能く其の青春の潮流に操りしに因る。

先づ注意して考ふべきは、『その子成長し』云々とある始めの文字なり。同じ福音記者は復た他のところに『齡も彌や增し』と記す。正確無比なりと稱すべき記者が、主の青春時代のことに關し、二度までも繰返へし此く言ふを以て見れば、今記者は其の威風と云ひ、その健康といひ、躰力といひ、同輩青年の間に特に目立ちたる一青年の姿を己れの眼の前に描き出せるものなるを知るべし。かく想像するも吾人は決して其の

不可を見ざるなり。此の聖書記者は我儕の主の極く初めのころのことに就ても、已れの記するところ誤りなしと自から信ずる所以は、記者は福音傳起草の目的ありたれば、主キリストの幼少時代、兒童時代、靑年時代に關し、それ〳〵最も信用すべき見證者に親しく就きて見聞したりしものなるに因るとなせり。吾人も亦この題詞に冒頭に見ゆるところなり。此は其福音書の於て、主の全生涯、その品性、その事業は一に其の基礎を此に据ゑたるものなるを見るなり。これらの初めの土臺石は、神性の器として聖靈が我儕の主のために備へたる躰に於て、凡て置かれたるなり。若し我儕の主の躰にして使徒パウロの如く、多少虛弱なるところにてもありしことならんには、ルカの如き正確なる記者が、主の躰の成長發達に關して繰返へしいふが如くに繰返すことなかりしならん。さてジョン、フオスターの有名なる『品性審定論』を見れば、其中に宛かも吾人が今論じつゝあることに恰好なる一節あり。此の有力なる論文家、說ひて曰く、品性の審定に、身躰の强弱は大關係あることは更に疑を容れざるなり。人々の決斷心、決行の活力、持久の精神などは、人々の躰の壯健によりて造り出さるゝものにあらずとするも、その如何によりて大影響さるゝものなるは明白なり。オリンパスの格鬪者が力瘤をいれるために其の腕脚を結束したる帶紐の如く、人の心念の活力を確く結束するものは人の身躰そのものにありといふべきか。巨大なる機關は之れを支ゆる丈けの强固なる基礎を必要とするが如く、健全なる德性を有する人物は亦必然的にそれ相當なる健康躰を要するものなり。著者曰く『されば其の同輩に拔んでて決然たる品性を有し、成効を事業に収むるの士は、必ずや其の躰力に於て傑出するものなるを見るべし、身躰は心意の分つべからざる友なり共勞者なり』と。健全

なる心意と健全なる身躰とは相俟つものなりとは古よりの諺なり。立派なる心意と强健なる品性とは又それ相當の躰質を備へざるべからず。『かくて小童成長し精神やゝに强健』。凡そ家族のうちなり、學校なり、事務所なり、仕事場なり、商店なり、その之れに在る一青年が、成長し精神やゝに强健になりぬといはば、之を聞くものは其の心中に如何なる事を描き出すや。言ふまでもなく、直ぐ活氣勢力に滿ち、感に滿ち、情に滿ちたる好青年を眼前に髣髴せしむるならん。之を聞くものは敏捷熱誠にして勇氣あり、情念温かにして眼孔涼しき一青年を心に想像して我が眼前に躍り立たしむるならん。福音記者が其の讀者の面前にイエスなる一箇の雄健なる人物を躍飛せしめんとするや、凡てこれらの品質は記者の意中に存したらんこと疑ひなし。吾人は聖書記者の今記したるところのもののうちに、一も吾人の及びがたき超自然のもの無きとを明らかに解しおかざるべからず。ルカが吾儕の主の生涯の初めに就きて玆に記すところは、いづれ一として吾人の子弟が則り之れに達するを得るものにあらざるなし。又いづれとして才氣あり、情念温かき世人の子弟に關して等しく言ふを得るものにあらざるなし。乞ふ見よ、同じ事は、言までも同じくエリザベスの子に就て言はれてあるにあらずや。ルカは年わかき施洗者のことを記していはく『かくて嬰兒は漸々成長し精神ます〳〵强健にして、イスラエルに顯はるるの日まで野に居れり』と。唯マリヤの子にありし程の强健なる精神、鋭敏なる感情、正義、純潔、至愛、高貴、淑德に對する感應の迅速は、迚も同一の度に於てはエリザベスの子にも、又世間の最も勝れたる子弟にも有せずといふまでのことに過ぎず。かくあるは之れ父の心にして、神は其の他の諸點に於ける如く、亦その身躰に於ても、その精神の强健に於ても、聖

子をして再び第一のアダムたらしめんと欲し給ひしものなり。是故にマリヤおよび其の初子とが、めぐまれたるナザレの邑に居住せし間は、其處に再びパラダイスを見るを得たりしなり。アダムにして其の立つべきところに立ちてありしならんには、此る精神の健全なる子弟に充つる全世界の父となるべかりしに、不幸にして其の然らざりしより、今や第二のアダムは、唯に律法のみならず、健全なる身體、强壯なる精神をも恢復し成就せんとして來り給へるものなり。」『や、』といふ言は、如何にも好く記者の選びたる語なるかな。我儕の主は年を加へ、その風貌の氣品を增加すると共に、精神も亦『や、』に其の强健を增加し來れるなり。其の心意の材能に於ても、心情の優美に於ても益々發達しゆけるなり。早熟或は晩成の非を打つべき點は一微秋毫たりともなし。八日めには第八日丈けの發達なり。十二才の時には十二才の小童なり。其の生涯の何時にもせよ、その時を見れば、そのあるべき年輩より若くもなく、また老ひたるところもなし。兒童の時には其の語るところ兒童の如く、其の考ふるところ兒童の如く、其の理解力に於ても兒童の如かりき。兒童のことを捨てたるは成人したる後なり。初に芽、次に穗、最後に實を結ぶ、鎌は其實熟して收穫の期至るまでは入れられざるなり。

『知慧に充ち』。之れも注意を逸すべからず。我儕の主は其の年齡の進むに從ひ、智識にみちたりとも、學問にみちたりとも、材能にみちたりとも、辨舌にみちたりとも記されず。固より悉く是等は眞實なりしならんも、ここに此くは記されざるなり。之れ理由なきにあらず。智慧は是等一切を合せたるよりも勝れたるものなればなり。智者曰く智慧は第一なるものなり故に智慧を獲よと。智識あしきにあらず、然れど知識は人を誇らしむ。智慧に至ては此の如きものに

あらず。智慧はいつも人の德を建つるなり。固よりキリストは、日に〳〵其の智識を加へたるならん。昨日知らざりし事を、今日學びずして其の一日を徒費するが如きこと無し。先進の語にも耳を傾けたり。毎日の學校および安息日學校に於ては我が全力を以て日課を修業したるならん。手に入る凡ての善き書は悉く讀みたるならん。安息日毎には常に會堂に詣でたるならん。かくの如くにして得たる一切の智識は如何に豐富なるものなりしならん。但しキリストにありては是等一切の智識は、水が酒に化成せしが如くに『智慧』に化成したるなり。頭腦に學びたるものは一も殘り無く、直ぐ其の心に降下し、心よりして此くも聖き天の如き智慧に充つる生涯を生みいだせるなり。人々奇しみ曰ひけるは、『此の人の智慧は何處より來るや』と。これと略ぼ等しきことを舊約の最も大なる智者に問ふものありしとき答へて曰へる其の言に、若しわが爲すとほりに爾曹の心を全く智慧に與へ了らば、智慧わが心に宿る如く爾曹の心にも宿るべしとあり。ソロモンよりも大なる者も亦殆んど相似たる答をなせり、曰く、『わが敎ゆる所は我が敎に非ず我れをつかはせし者の敎なり。人もし我れを遣はしし者の旨に從はば此敎の神より出でしを知るべし』と。キリストは其の心常時おのづから父の旨を知りて之れを行ふといふ幸福中の最も大なる幸福を有てり。眞實なるもの、正善なるもの、公義なるもの、純潔なるもの、愛すべきもの、よき譽あるものは大小悉く其の心に存したり。之れ即ちキリストの智慧なり。その幼き時と其の成長せる時とによりて變らざるなり、この智慧を日日加へて無限に握り得たるものキリストの如きはあらず。此の世に在る一切のものを照らす智慧の光は、この一靑年の內部の全生命を充二分に照らし輝きて終に之れを『世の光』となすまでになれり。

その報として神は之れを吾人々類の智慧、又義、又潔めとなし給ひたり。

吾人一方にキリストの滿ち足れる智慧のことを考へ、一方に己れの愚を思ふては實に赧然たらざるを得ず。吾人は愚に生れて其の愚治すべからず、日々語るところ行ふところの愚を試みに想ひ見よ、智慧が自然にキリストの心に附着しゐたる如くに、愚は吾人幼少のときより一生わが心に纏綿す。人によりては充分の材能あり。智識あり、學問あり、雄辨あり。然れども到底破産を其品性に見るは、不幸にして『智慧』の欠けたるに因る。他の材能も之れを指導する智慧なきばかりに悉く破産の不幸に陷るなり。人は全心を學問に用ゐ。しかれども一切の學問の終局なる眞理の此の智慧に到着せざるなり。學問も其れだけにては至極危險なり。智慧の導く手に引かるるにあらざれば、吾人は生命の通路を安全に步行すること能はず。學問だけにては吾人は何時しか泥濘の溝中に墜つべし。學問も、智識も、雄辨も、到るところに見るを得。ひとり悲むべし、之等を指導する智慧は其の隻影をだに認めず。世人が大人物と稱するもののうちに、眞に智慧あるもの幾許ありや。わが血緣のうち、わが朋友のうち、もし眞に智慧を備へたるもの一人にてもあるを見ば、人は高金の釣針を以て之を我が心に釣入れよ。

最後に『神の恩その上に臨れり』といふ一句なり。クレメントの言に、聖書外に於ても然るが、『聖書に於ても名及び事物を明白に分別するは心に大光明を予ふるなり』とあり。恰かも好し、玆に吾人は其の一例に接す。此處に記せる『恩寵』なる言は、普通宗教上に用ゐらるるやうに解すべからず。こは言ふまでも無きことならん。人は罪人の首なる自己の上に與へらるる神の恩寵につきて時々刻々考へおるならん。我儕の主も亦その上に臨る神の『恩寵』を絶えず思

ひつつありしならん。然れども其の『めぐみ』たるや吾人の上にきたるものとは同じ種類のものにあらず。吾人の上に臨る、ゆたかにして無比なる『めぐみ』とは救なり。然れども人類の救主には救の必要なきなり。キリストの上に臨れる神の『めぐみ』は固より千百にして足らざれども、そのうちには吾人の上に降るが如き種類の『めぐみ』は一もあるなし。此の章の四十節より轉じて五十二節を見れば、聖子の上に臨れる『めぐみの性質を説明するに便宜あり。しるして『神と人とに益々愛せられたり』とあり。『愛せられたり』といふ此の文字は、ヨルダンおよび其の他に於て、『なんぢは我が愛子わが喜ぶところのものなり』といふ天よりの聲と意味を同じくす。されば『神の喜び愛しみ其の上に在り』と讀めば題詞の眞意を傳ふるを得べきなり。但し此の聖子の上には神のめぐみ、愛しみ、喜びが前古無比に宿りたるのみならず、三十年の間凡ての人々にも亦此くなされたるなり。ガリラヤ全地に於てナザレのイエスの如く其の三十年の間、かくも人々に喜ばれ、めぐまれ、愛しまれたる小嬰も無く、兒童もなく青年もなかりしなり。然れども之れ驚くべきにあらず、かくあらざるを得ざりしなり。聖靈も、四福音書記者も、我儕の主の少さきおりの生涯につきては、別段長々しく書き記さず。然れども吾人は此の省略のために然まで損失を感ぜざるなり。苟くも一點の想像力あり愛心あるものならんにはルカ傳記者が記したるところの題詞の語に更らに一言一字を増加せずして、之れにて充分わが心を熱し、わが想像を盛んならしむるを得るなり。主は其の生涯の間、日々善をなしたり。パウロが、われ律法につきては欠けたるところあるを覺えずと言へるは過大の語ならんも、これをイエスに當つれば文字通りに眞なり。神に對しても、人に對しても罪なし。父の心も、母

の心も、乃至わが心も傷ましむる青春の過失は、イエスの雪の如き潔白なる生涯にあるなし。即ち福音記者は、此世に於ける主の青年時代を美はしき言を以て一結して曰く『神と人とに愛せられたり』と。

走る者の模範

神學博士　アレキサンドル、マックラレン

彼は其前に置くところの喜樂によりて其耻をも厭はず十字架を忍びて神の寶座の右に座しぬ

（希十二〇二）

『彼は其前に置くところの喜樂に因りて』これ刺激力なり。『其耻をも厭はず十字架を忍びて』、これ苦痛を甘んずるなり。『神の寶座の右に座しぬ』、これ勝利なり。以上の三者は凡て吾人の則（のり）とすべきもの、キリストは受苦の好例なり。榮光の預言なり、先驅をなせし者なり。

（一）刺激力　曰く『その前に置くところの喜樂に因りて』と。抑も此の喜樂はキリストの信仰の眼には鮮かなるものなりき。信仰とは神の約束を頼みて未だ見ざる將來を確く預期するとなり。これ以外の意味なしとにはあらねども、大抵は此の意味に用ゐらるるなり。希伯來書の十一章を披らき、かのノアが安全なる方舟を造營して、臨まんとする洪水に對したる生涯の準備を見よ。イスラエルの族長らが『都をのぞみ』たるばかりに、わが居住する其の周圍の文明を、よそにして幕屋に住みて滿足したる有樣を見よ。ヤコブがイスラエルの支族終に約束の地に入るべきを信じ、之が爲に告別の祝福をなしたるを見よ。或はモーセが目見えざるものを見て忍びたるを見よ。彼等が高貴なる生涯をなしたる所以のものは他なし、己れを導く星に導かれたればなり。導く星とは唯信仰の眼にのみ映じ得る燦爛たる希望これなり。いま茲に希伯來書記者が、イエス、キリストの生涯の指導力

刺激力と稱したるところのものは即ち此の種の信仰なり。

『彼は其前に置くところの喜樂』ありしといふ此の喜樂は、言ふまでも無く、人類救贖の喜樂なり。この喜樂はキリストをして、日々苦しみ、死を預期しながらも、甘じつつ羊腸の嶮路を前へ前へと進みゆかしめたる動機なり。時には幾度か其足鮮血を濡らすも敢て意を飜へさず。父なる神の旨に從ふ事と、人類の救贖を熱望する、二ッにして實は一ッの此事に、人として見たるイエス、キリストの生涯は盡きたり、彼れは是によりて生き、動き、また在ることを得たるなり、『かれは己が靈魂の煩勞をみて心飽足らん』とあるが如し。世を見わたして曰ひ給はく、『われは此牢にあらざる別の羊を有てり彼等をも引來らん彼等わが聲を聽かん遂に一の群一の牧者となるべし』と。又主は確固たる信仰と、之を現實するに要するところのものとを結びつけて曰ひ給く、『われ若し擧げられなば萬民を引て我れに來らしめん』と。僅々たる幾人の漁夫と、少數の健氣なる婦人のみに知られたるばかりのガリラヤの一匹夫にして、其手をひろげて世界の上に置き、而して曰く、之れ我が有なりと。彼れ心慢して狂せるか。焉ぞ然らん、これ父なる神の約束の上に建てられたる信仰を有するものの態度なり。この大胆なる夢想は、今日に至りては、いよ〳〵、實になり來らんとして世は終に、擧りてキリストを其救主と仰ぎ其王として奉戴するに至らん。而して之れ、その前に置かれたる喜樂なり。

題詞の大意右の如し。吾人基督教徒と稱するものは、この主の御跡を踐み、現在に生涯せずして未來に生涯せざるべからず。わが生涯の指導力にして、強固、純潔、高貴なるものならんことを冀はば、遠き未來に洞徹し、わが靈、確く之れと面々相對すべし、期せずして其の間より

生せん。目的の遠大になるに比例して、大抵その人の生涯は高貴壯大になるを見るものなり。毎週末に賃銀を受取る人物と、年末一度に受取る者と比較すれば勤儉節制その他の德に於て優劣の程は固より知らるるなり。百中の九十九まで、目的の遠大になれば其れ丈け、その人の行程は高尙になるを見る。言行ただ卑き現在にのみ閉塞せられて齷齪たるが如き者流は淺劣顧みるに足らざる人物のみ。こは誰れしも認むべし。曰く記臆、曰く希望、これ吾人の靈魂をして現在の泥濘中より飛躍昇騰せしむる兩翼にして、恐らく此二者は反對の兩方面に反射する同一の鏡面ならん。何にもせよ、現在より超然飛揚せしむるものは、又同時に其人格を高貴ならしむるものなりとす。而して此の未來に横はる最高の希望は、燦然として光明赫々たる『われらの前に置かれたる喜樂』なり。

文章前後の關係を見れば、この前段に記さるるところは、競走の伎なり。蓋し競走なるものは、自分の前に置かれたる競走だけを見るに於ては、至極難澁大儀なるものとしも見えなん。前程に横はれる喜樂の鼓吹力なく、その大求引力なく、唯だ無理に我が爲すべき事丈けを考へおる人は、言はば奴隸に過ぎず。然れども輕く愉快に事を完ふする爲めに我が足に翼を得んとならば是を得るの途あり。唯わが前に在る事業のみ、競走のみ、汗のみ、塵芥のみに目を注ぐ勿れ。これらの中間物に因りて『われらの前に横れる喜樂』を一層大きくし、一層赫々たらしめて前進せよ。高貴なる生涯を現在になさんとせば、それ丈け未來に生涯せざるべからず、若し今日活力と成効を以て事業を完ふせんと欲せば大なる明日の絶頂より飛び下りざるべからず。瀑の墜つる絶壁の高き丈け、瀑壺を撃つ力は偉大なり。或る者は基督教徒の態度を評して『他界主義』なりと愚弄す。然れども考へ見よ、

この他界主義こそ、現世主義を淨化し高貴ならしむる唯一の方法にあらずや。キリストの生涯は、人生の聳動力に關する無比絶類の偉例なり。

（二）曰く『その耻をも厭はず十字架を忍び』と。これ苦痛を甘んずる信徒生涯の摸範ならずや。固より主の死は、或る意味に於て眞似得べきものとなし、復寫し得べき模範なりと目したりとて、是が爲め決して他の側面の意味を沒するものにあらざる事は、注意するの必要もあるまじ。若しありとするも一言然かいふのみにして足れり。受苦の深さに於て、或は其効力に於て比類なきイエス、キリストの犧牲的殉死は、此同じ書翰の他の部分に於て滔々論ぜられ、又題詞のうちにも含蓄せられて見ゆ。希伯來書記者が今差當り論ぜんとするは、その効力の點にあらず、その量にあらずして、其質にあり。その動機にあり。イエス、キリストの受苦をば、吾人基督教徒の無類なる好模範とするにあり。勿論吾人が既に言へる如く、キリストの死は無比獨立のものにして、繰返へすを得ず、又繰返へすを必要とせざるものなり。神は讃むべきかな、キリストは『一たび其身を獻物として、潔まる者を永遠に全うし』たればなり。高貴なる犧牲的の生涯と死をなしたるもの世に少なからず、然れども『罪の贖の爲めに己れを獻げたるもの』は古來唯一人のみ。人生の不幸の或るものを去り、若くは勝れたる善德に人を導く生涯と死をなしたるもの世また尠なからず。然れども世の罪をのぞき、天國の門を凡て信ずるものの爲に開きたるものは世唯一人のみにして他にあらざるなり。吾人はキリストの死を、人事平常の水平に引き下して宛がらキリストの死には、人類普通の死以外のもの一も無しとなすものに非ず。さればとて又吾人は、ひとり之れを無窮の高さに超然せしめてキリストの死には、人類の生涯し得るもの一も無しとするものにもあらざるなり。是故に

題詞は、十字架を指ざし、見よ、汝等若し基督教徒ならば是れ汝等の生涯なりと吾人に告ぐるところあるなり。イエス曰ひ給く『汝等日々その十字架を負ひて我れに從へ』と。こは聖書の全紙面を貫く教訓なり。吾人は今更ら人の熟知するところの句を引用して注意を求むるの必要を感ぜず。『われらにして彼と共に苦を受けなば、彼と共に治むるを得るなり』。故に又一使徒は、キリストの生涯の無比無類なる救贖的側面を論じて『かれ我儕の爲に死に』といふ句は一氣に、『これ我儕をして己れの跡に隨はしめんとて我儕に式を遺し給へる也』と記せり。

題詞の思想はキリストの此世に於ける生涯に如何なる光を予ふるか、曰く『彼は其前に置くところの喜樂によりて十字架を忍びたり』と。これカルバリー山上の斷末魔のみに引照さるるものなるべきか。吾人は然か想はざるなり。之れ明かに主の生涯の全般に亘るものならん。この二個の思想は相伴ふて分つべからず、相配する一對の星の如しと謂ふべし。一は光なき黒き星にして、一は光り輝ける星なり。この兩星は相結びて回轉す。又想ふに、日輪輝けば必ず陰影あり、陰影のあるところ必ず日光の輝けるを見るべし。イエス、キリストは、遙遠の未來、彼岸の淨土ばかりを、故らに勉めて眺めゐたるにはあらず、其靈眼おのづからにして未來と己れとの間に横はる深黒の峽路の向ふに飛躍しゐたるなり。於是キリストは苦を甘じ、死を甘んじぬ。その前に置くところの喜樂ありしに因てなり。吾人の生涯も亦是の如くならざるべからざるなり。既に言へる如く、主の受苦の量および効力に關しては吾人これを繰り返へすを得ず、また其要あらざる也。唯基督教徒たるものは、是非このキリスト受苦の精神を己れの生涯に渡り入らしめざるべからず。

キリストのごとくなされて立てば、

十字架、墓、天空は我儕の有にこそ。

信仰と受難とは裂くべからずして必ず伴ふて來る。此點は別に論ずるの必要もあらざらん。人若し完全なる信者生涯をなさんとし、わが生涯を其確信の最高度に達せんとならば『われらも彼れの詬辱を負ひて營外に出で彼れに往くべし』今日普通の信徒の爲すところに是れが合ふと合はざるとは敢えて問はずして可なり。珠玉の燦爛たる上靴は、信徒生涯の嶮路を行く恰好の具にあらざるなり。信仰を保全するには忍耐を必要とす、加之、信仰あるものは忍德を完からしむるを得るなり。大理想を未來に見るに於ては、吾人の前に橫はるもの、大ならず、小ならず、その至當の大さになるべし。小さき丘陵も、處によりては須彌山の如くに思ひおるものあらん、然れども雲消えてアルプスの雪景、地平線上に秀然として露出せば、先きの丘陵は宛ながら蟻の築ける山の如し。かくの如く吾人の前程に橫はる大なる憂苦も、大なる誘惑も、吾人にして若し見えざるものを見たりといふ古預言者の忍耐保全の秘義を學びたらば、その時には如何に小さく見ゆることならん。『暫時の輕き苦』も、吾人にして若し目を只管これのみに注ぎゐたらば、甚だ重きに過ぎ、且つ久しくにも感ぜられて到底堪え難きなり。之に反して、わが眼一旦永遠無窮の彼岸に轉じたらば、寸前に橫はる者は、その至當の形となり、暫時のものとなるが故に、吾人容易に之を學び得るなり。雲霧消散して燈臺より照らし來る光明、假令なほ遠くなりとも之を明滅の間に眺むるを得るに至らば、暴風如何に吹き荒むも、平氣なり、久しからずして船舶港灣に錨を下すを得べければなり、キリストは『その前に置くところの喜樂によりて十字架を忍びぬ』吾人の眼にして至上終局の善福に注がれたらんには、吾人も亦わが生涯の悲哀不幸を意に介せずして嚴然立つを待

べきなり。

(三)『神の寶座の右に座しぬ』。之れ生涯の勝利なり。吾人は此の高玄なる言を充分に論ずる時なきを憾む。唯わが心言はんとするところを僅かに一言して止まん。此の言はキリストに對して何を意味するや。言ふまでも無く安息なり、但し無爲徒然の安息にあらず。又これキリストの權威を意味す、その審判の權能を意味す。神性をとり且つ神の支配に與ることを意味す。而して此のキリストは我儕信ずるものの兄弟なり。今宇宙の統治權を掌握するものは、人なるイエス、キリストなり。『我儕の爲にイエス前驅して其處に入りぬ。』

次に吾人に對しては何を意味するや。キリストは此の如くして吾人永生の保證となれるなり。今その榮光を有ちて、吾人永生の保証となれるなり。イエス、キリストの復活――其昇天及び神の寶座の右に座し給ふは復活の連續と見るべし――は、靈魂不滅説の信仰如何によりて消長す。他に其證論の途あるや否やは吾人の今云々せんとするものにあらず、唯キリストの復活と靈魂不滅説とは大關係を有するものなることは何にしても明白なる事實なりとす。キリスト神の寶座の右に座し給へる事は、吾人來世の生命の存在を確立するのみならず、又その生命の性質をも吾人に啓示する預言と謂ふべし。信徒たる諸てのものの靈魂に『イエス、キリストに在る生命の靈』の交通せられて相互の生命同一となるといふとは、新約聖書の始尾を一貫する、キリストと信者との關係を示したる尊き教なり。此の生命によりて我が罪を赦され、神に納られ、神の子となる此の同じ理由により、また全く同じ工合に『わが在る處に』とキリストの言ひ給へる如く吾人また其處にキリストと偕に在るを得るに至る。キリストの生命我れに在り、而かも後の世に於てはキリストと離れ居るといふ

は、あり得べからざることなり。キリストは自己を我儕に予へ給へり、故に謙遜なる信仰を以て之れを受けだにせば誰れにてもキリストを受け得るなり。この大なる賜には、吾人の過去の赦あり、現在の力あり、來らんとする永遠に於てはキリストと全く合体し一致することを必至的に含蓄するものなり。然ればキリストの在したまふところに其の僕も在る如く、またキリストの如くに其の僕も成るなり。凡ての競走者、一人々々順々に其目的に達せしあかつきに、未知の向ふに往き見れば、自分は皇帝の傍らに、大圓戯場の席に腰掛くるを見ることならん。其處に在したまふ皇帝も亦自身その前に置かれたる馳場を走り、その前に置かれたる喜樂に入りしものなり。



福音叢誌第八拾二號目次

口繪

論說

雜錄

FUKUIN SŌSHI.

NUMBER 82.

MARCH, 1903.

CONTENTS.



フイリップスブルックス氏肖像

論説

聖フランシスと第二十世紀

（一）

バウロ、サバチエー

近世に至り、歴史的批評の世界、美術の世界、乃至宗教文學の世界は、それぞれ名譽尊敬を表したる千紫萬紅の花環を以て、アッシージの聖フランシスの身を埋むることとなるが、吾人は玆に彼等の顰に倣はんとするにあらず。又は讀者を聖フランシスに導き到り、其爲人、および其行跡を示さんとするにもあらざるなり。吾人の目的とするところは、聖フランシス在世の時に、天下の衆生を誘導せんと彼れが勉めたるものに讀者を導き到らんとするに在り。言ひかゆれば、自個の生涯を鼓吹したる聖フランシスの思想、及び其主義に論及するところあらんとするにあり。第十三世紀の此の偉人物の思想は、今日既に其活力を失ひしものなりや否や。彼れが其當時の社會に吹き込みたる主義は、今日既に其生命を失ひしものなりや否や。幾世紀の久しきに亘り、埃及バロ王の屍の傍

に埋れありし麥粒、圖らずも發見せられしが、今日に及んで尙ほ能く其萠芽力を保存せしといふ通りに、アッシージの一聖が唱道鼓吹したりし思想及び主義は、善く耕作したる地壤に移植するに於ては、芽を萠して果を結ぶ餘力を尙ほ今日に保存しおるや否や。

吾人は、今その目的とする論旨を開くに當り、謂はゞ、音樂者が全樂譜の調和せる美を我が十指の呼吸に發揚せんとするに先ちて彈ずる前奏にも比較すべきものとして、聖フランシスの『十全の歡喜』を記るしたる一節を聖フランシス文學中の一より抄錄すべし。蓋し之れ、本論に入るに先ちて必要なる準備なりとす。

寒風膚に浸む十一月の某日、忠信なる敎弟レオと偕に、アッシージの聖フランシスはペルギヤより、アッシージに歸りぬ。降りしきる雨は、氷の如く冷たく、全身も凍るばかりに覺えぬ。道路の泥濘は我が靴を沒し去らんばかりなり。二人の行步は思ふままならず。口を開かば、わが胸裡に滿つる悲哀悽愴の情、忽ちにして口を衝ひて出でんかと恐るれば、互に不言不語のうちに二人は相前後して步みぬ。夕霧ふかく立ちこめて暮色次第に深し。外界の暗黑と共に、聖フランシスの心の波うつ岸邊には、悲哀と憂慮の大波小波、高低常ならず打ち寄

せたり。嗚呼この日、この時、この外界の無明は、即ち聖フランシスが、わが理想を決行せんとして前途を眺望したる一瞬の實景にあらずや。彼れは此の時、あらゆる誘惑の魔力を感じたり。失望あり。苟安を偸まんとする心あり。生きて苦まんよりは死の寂滅爲樂あり。わが理想が糢糊の裡に消えんとゝするなり。彼れは我が一身、到底抵抗すべからざるほどの誘惑の力を感じたるなり。然れども流石は聖フランシス、大猛心を奮ひ起し、俄然として我れに復へれば、本性また瑩然として玉の如く明らかに、曩日その改信いまだ幾許ならずして、無賴漢の爲めに、溝渠のうちに突き落されしことありし時、やがて起き上りて我が袖の雪を拂ひのけし如く、今われを重圍のうちに逐ひ込みたる一切の誘惑を排し、一切の悲哀を振ひのくれば、復た一瞬前の人にあらざるなり。音吐朗々、彼れ心欣然として歌へり。歌ひ終れば彼れは、わが腦裡に今や鮮やかに回り來れる我が理想を説敎したり。詩人は其衣を更へて預言者となれり。この際聖フランシスが、敎弟レオに告げたりしものは、キリスト山上の垂訓と、聖パウロの愛德の歌との間に伍するを得るもの、即ち聖フランシスの『パーフエクト、ジョーイ（十全の歡喜）』これなり。

このときレオは數歩先きに是れも悄然首を俯して歩みゐたりしが、うしろより

呼び止めて聖フランシスの言ひけるには、

『その行狀一點の非難すべき所なく、有德の摸範、潔白生涯の鏡となりたり共、汝これを書き記るして心に留めよ、これ十全の歡喜と稱するに足らざるなり。』

レオは率直の人物なり、わが師を信ずること極めて深し。而かも是等の語が如何に彼れを驚かしたりしかを吾人は疑ふを得ず。我が心底に往き交ふ思想のために、益々その行步遲々となりし聖フラスシスは少時して復たレオを呼び止めて曰ひけるは、

『兄弟レオよ、我儕同志、盲人の目をひらき、癱瘋及び跛者を健かにし、惡鬼を逐ひ出し、聾者を治し、啞者をして物言はしめ得たりとするとも、否、死人を四日の後に甦らし得たりとするとも、汝これを書き記るすべし、これ十全の歡喜と稱するに足らざるなり』。

斯くと聞きたるレオは、重ねて如何なる驚きをなしたることとならんか。是れ實に當時の宗教團体の一切を非としたる言に非ずや。時に聖フランシスは復たレオを呼び止めて曰ひけるは、

『兄弟レオよ、われら一團の同志、假令全智を得て、各國の語、及び其一切の書を知り、未來を洞見し、人の良心を讀破するの明を得たりとするとも、汝

これを書き記るすべし、未だ十全の歡喜と稱するに足らざるなり』。

聖フランシスは我が語れる語によりて、わが忠信なる友の心に、一方ならぬ不安の波動くを察したり。宛かも道德生涯最高の眞理を啓示したるために不安の念を生じたる我が子の心に、母たる者が本能的に近きて尙ほも柔和愛情の滴らんばかりの温言を以て低語することある通りに、聖フランシスは其愛する門弟の心に我が愛の指を觸れたり。『兄弟レオ、神の小さき羊よ』といへる語は、書き記るしたる後には、さほどの意味も見えねども、かく語られたる當人にとりては無限の慰藉に滿つるものなりしや疑ひ無きなり。この一種の神秘力を包める冒頭を冠して、アッシージの一聖は我が愛する弟子にむかひて曰ひけるは、

『兄弟レオ、神の小さき羊よ。若し我儕一團の同志、天使の言をかたり、星辰の運行を知り、地中寶の埋もる所、禽獸蟲魚、人間、草木、石、水、これらの一切の性質本能を知り悉くして、天地間更に封せられたる一の秘密なきに至りたりとて、汝これを書き記るすべし、未だ十全の歡喜と稱するに足らざるなり』。

更らにまた曰ひけるは、

『假令、天下を教化改宗さするほどの能力と雄辯を以て說教し得る秘訣を得た

りとて、未だ十全なる歡喜と稱するに足らざるなり』。

吾人は玆に筆を擱き、而て問ふ、然らば聖フランシスの意中に『十全の歡喜』と稱せらるる者は何ぞや。是れ此の世に於ける我が使命を充分に實現するとなり。わが意志と召されたる我が不可思議なる命運との全き調和なり。爲すべき本分なり。本分と云ふといへども僧院の昧香臭き禮拜三昧の謂ひにあらず、人心の全力を發揮して新鮮なる空氣と充分なる日光に爛發するものを謂ふなり。十全の歡喜は、善行に非ず、奇跡に存せず、智識に非ず、著るしきアポストロの傳道的成効に存せざる也。然らば何處に在りと謂ふか。聖フランシスは其唯一の途を示せり。是れ勞苦なり。勞苦と云ふと雖ども、其犧牲を威壓する受動的勞苦にあらず。進んで行ふ任意の勞苦なり。昂然わが首を擧げ喜悅に充足する心を以て迎ふる活動的の勞苦を謂ふなり。十全なる歡喜の途唯此に存す。之れ聖パウロの所謂榮光に入るの途なり。この途の門口に立てらるるものは十字架なり。十字架は之れ任意に苦を受けて式を後世に遺したるキリストの榮光の玉座にあらずや。

聖フランシスが其敎弟レオに告げたる言は即ち吾人が論ぜんとする問題の四隅を照破するものなり。之れ實に聖フランシスを示す、率直にして眞情滴るが如

き歴史上の聖フランシスの心を示す、宗教及び社會維新の一大人物聖フランシスを示す、忠實に敎會の懷にありし者なれども、聖ペテロの椅子を占めたる前後幾多の法王中その最も雄偉壯麗なるインノセント第三世と面々相對して忌憚なかりし聖フランシスを示すものとして餘蘊なし。彼れは謙遜と、而かも法王すらも敢て其耳を傾けざるを得ざる權威と熱情を以て法王に語れり。此の有名なる會見は、歷史これを傳へて今日に保存す。茲に幾百年の間、一大沙漠の中央に捨て遺されたる一人の婦あり。この一婦人はキリストが其敎會に許婚せしものなりしが、無殘にも敎會は久しからずして之れを離別したり。フランシスは捨てられし此の憐むべき一婦人の嗚咽哀叫する聲に我が心を打れ、情に堪へずして之れを尋ねて其後を慕ひ、如何がなして之れを慰め、之れを其舊位に復し、以て敎會を淨化せんとしたるなり。眇たる一貧素漢の身を以てフランシスが堂々たる羅馬法王の面前に立ち、敎會の背敎を痛言し、キリストの爲めに心靈の家庭を維新せんとして、神の福音の根本思想を探求するため、進んで荒涼の一大原野に來り入らんとする我が決心のほどを說きたる時、何れか之れキリスト敎會を左右する帝王なりしか。

(二)

聖フランシスと第二十世紀。一見これ相反すること著るしき對照ならん。驕奢を肆にし、利得を專らとし、科學盛んに、實業榮え、さては大トラストまで起りつゝある現世紀と、自から神の貧者と稱したる者との間に存する相違反對ほど大なるものの世にあらざるべし。然れども前記の一段を讀過したる者は、此の間に存する分離の對照自然に消滅するを見るべし。その之れ在りと稱するは徒らに其人の幻想に過ぎず。

聖フランシスの思想と現世紀との調和を見んと欲せば、現世紀が其凡ての點に於て以前の世紀と相違する點を擧ぐるに如かず。而して其最も著るしく異りたるものは平和運動と社會問題の二點なるべし。此の二點に就ては、吾人の希望と必要と理想を一方に、他方に於ては聖フランシスを立てゝ相對するに、其間には相接觸する點の存するのみにあらざる也、亦著るしき一致の存するを見る。然らば聖フランシスを以て、最も新しき現象を具へたる近世社會の建設者の一人なりと稱揚するも甚だ不當の過言にあらざるべきなり。

論者曰く、現世紀は前古無比なる科學全盛の世紀なり。然れども科學を排斥したる者はフランシスにあらずや。ボログナに一學校を興したるスタシヤのジヤンの身に傾注したる不幸なる咒を徹回する事を拒みし者にあらずやと。且つ論

者は全智の虚しきを歌ふたる聖フランシスの一句を引き來らんとす。この反論に對しては吾人充分の辯解あり。公平に立論する者は、同じ語も今日にては全然異れる意味あるを許すべし。今日所謂科學とは何ぞ。その最も廣義より謂へば、科學的精神とは研究の精神なり。探究の精神なり。精確、實驗の精神なり。吾人の五官及び心意を眩惑せんとする虚飾を排し事の眞に達せんとする誠實の熱心これなり。此の精神を以て、神が吾人々類に啓示し給はざる第一原因若くは他の神秘を目的とせずして、普通言ふ我儕人類の領地に屬し、又或る點より我儕に托せられたりと稱すべき諸事物を研究する事なり。されば眞に科學的人物と稱する者は、キリストに從ふ最第一の條件を完ふするの人物ならざるべからず。即ち自己を犧牲にするの人物ならざるべからず。彼等は僅かに其一部分のみを窺ひ得る事業に献身するものにして、其終局若くは結果は預言し能はざるものなり。彼等は他人をして繼續せしむる事業に献身する者なり。自身が其目的に非ざる人物なり。手に旅行者の杖を携へて其むかし天上の星によりベツレヘムに導かれたる東方博士の心を聳動したる信仰と熱誠とを以て謙遜に其歩を發する者なり。科學的人物の如是行爲に比し之れにも勝れたる犧牲ありや。之れにも超りたるキリスト教徒らしきものありや。見よ、科學に献身する者は

殉敎者となること少しとせず。彼等はキリスト敎のドクマを知らざる者なるにもせよ、未だ明白とならざる眞理の爲に殉するものならずや。之れ眞に生命を捨るものなり。現世に於る一時の苦痛はパラダイスの大なる幸福を博し得べしとなして甦る宗敎信仰の徒と豈に莫大の相違にあらずや。若し如上の理想的科學者を意中に描き、これに相當する者を天下に求むれば其數極めて僅々なるは事實なり。福音書に照らして眞箇にキリスト敎徒と稱すべき者を世に求むるに於ても同樣の感あるべし。故にキリスト敎徒によりて福音を批判すべからざる通りに、科學的人物の似而非者を以て科學を批判すべからざるなり。然れども外皮を去りて奥底に潛み入り、その眞髓を叩けば、近世科學の精神よりも勝れて、宗敎的にしてキリストの精神と相好く一致したる者他に在らざるなり。聖フランシスが科學の名の下に咒ふたるものは、これ其當時に科學の名を以て稱せられたる者、何ぞ今日の所謂科學なるものならんや。之れ『スコラスチシズム』なり。病的智識なり。聖フランシスが一大淫婦と稱したるものは是れ也。眞理を凌辱すと稱したるものは此の淫婦なり。若しそれ近世の科學的精神に至りては、極めて謙遜なり。極めて犧牲的なり。『スコラスチシズム』の精神は正さに相反す。是れ聖フランシスの咒へる魔物なり。

（三）

聖フランシスが現世紀と相一致するものは單り科學的精神に關する者のみにあらざる也。政治進化の極粹に關しても然り。燦然たる近世文明の行步を吾人の眼界より遮り蔽ふ幾多の爭端及び衝突の尙ほ今日に存するものあるは事實なり。然れども一層高き見地より一望するに於ては、如何なる政治的大運動吾人の眼底に映じ來るや。國際の干係は次第に平和に進みゆくに非ずや。吾人は歐洲の各國が其軍備貧給の重荷に苦めるを知る。然れども一方を見れば、平和維持の爲めならずんば、國民は、兵を動かすを肯せざるの氣運を見るにあらずや。然れば世界の大勢は、大なる犧牲を戰の神の祭壇に捧ぐるにあらずして、平和の神の祭壇に供へんとするものなるを見るべし。戰爭なるものが地の全面より絕るべしと想ふは、預言者の空想なりと云ふか。平和協會の成立するありて此の理想の多少現實せられんとする第一步は、旣に第十九世紀に於て見られしにあらずや。去て聖フランシスの第三教班の規則を見れば、戰爭の血腥き全歐洲の上に、一大警鐘を撞くが如き巨聲を聞くべし。曰く『兄弟會の會員は何人に對ても刄を向くべからず又之れを受くべからず』と。此の單純なる平和の福音は頓て以太利全土に響き渡れり。兄弟の聲望は、專横なる主權者、わが臣民と目

したる者の大部分が、手に劍銃を取て命に從ふを拒むを見るに及で、終に退身するの止むを得ざるに至りしまでに隆々たるものとなれり。此の大勢にして天下を風靡するに至りしならんには、人類の命運は今日如何に變化したるならん、然れども一二八九年は不幸なる年なり、此の聲終に此の年に壓せられぬ。而かも之れを斷末したるもの、フランシス派の法王ならんとは。其年の八月十七日に出されたる法王敎書を以て、ニコラス第四世は、第三敎班の規則を變更して左の如くなせり、曰く、『羅馬敎會保護の爲めか、乃至キリスト敎或は國家擁護の爲か、若くは所屬敎班の長者の批准したる外、兄弟は武器を執るべからず』と。

過去二十年來、漸々進步し來れる平和會の運動は、運動者自身氣附かざりしも、實はアッシージの一聖が其久しき以前に於て開拓したる道路を步み來れるものなり。吾人は須らく先人の理想を慕ひ、又その何故に失敗するに至りしかを審かに研究して參考に資すべきなり。

（四）

吾人は更らに第二十世紀劈頭の大問題の一なる社會問題に於て、アッシージの一聖との一致を見んとす。蓋し『貧』の一字は、聖フランシス理想の根本なり、

その心源也。彼れが取りわけ高聲に説敎したるものは『貧』なり。而して説敎者自身も『貧』の人なりき。聖フランシスの生涯は此の文字の完全なる現實なり。『貧』なる文字は種々陰氣なる連想を人々に與へん、曰く不幸、曰く苦痛、曰く煩悶、曰く悲哀。然れども一たび聖フランシスを見よ。彼れ悲みの人なりしか、その眼常に淚ありしか。否、却て『悲みにおるは惡魔及び使たちの爲すことなり。われらは主にありて喜び樂しむべきなり』と言ひしものは聖フランシスにあらずや。聖フランシスをして飜然大悟するに至らしめたる一轉機は、彼れが『貧』の靈に接して其かくれたる美を認めたる際にあり。人間界の言語は此の理想婦人に對する彼れの恍惚たる愛戀を表情するに足らず、彼れは僅かに我が約婚者なる言を以て盡きぬ意味を包みぬ。聖フランシスが此の愛する者との戀情の詩美を見ては、公撰の傳記起草者ケラノのトマスも、唯筆を擲て嘆美せる而已。この事實の反面を觀れば、聖フランシスの所謂『貧』なるものと、古代の聖哲、東洋の賢人、若くはキリスト敎僧の稱する所の『貧』なるものと、其間渡るべからざる一大溝渠の存することを自から明らかなり。彼等の所謂『貧』なるものは、益々集中せんとし、益々自制を盛んにせんためにする主我の勞なり。聖フランシスの所謂『貧』は益々膨脹して益々與へんが爲めになす愛の勞

なり。文字は同じ。然れども文字の後に横れる思想に至ては正さに相反すと謂ふべし。

更に一歩を進め、フランシス教班の福音と見るべき此の『貧』なるものを研究するに其根底は動なり。フランシス兄弟會に入れる者は、何かな手工をなさざるべからず。なし得ざるものは商業を學ばざるべからず。兎も角、業――わざ、はたらきは、各人の義務なり。義務あり、即ち權利あり。業を爲す者は自己に必要なるものを遠慮なく要求するの權利あり。剩餘あらば、その剩餘は神の資本增加のうちに加へざるべからず。これ公衆の資本なるが故に神の資本たるものなり。さて此の同じ工人が、疾病若くは虛弱の爲に日々の食を得る能はざる場合に至らば、彼れは神の此の資本を必要なるだけ受るの權利あり。彼れは兄弟に行き同胞に到り、わが必要を遠慮なく訴ふべきなり。讀者は讀で此に至らば、慈善喜捨を受けんが爲め喜んで出で行くべしと聖フランシスが其弟子に敎誨したる所以の眞意を解するならん。之れ聖フランシスの社會觀自然の結論なり。飮食を乞ふは規定に非ずして、臨機の手段なり。兄弟小團の生涯は托鉢僧の生涯に非ずして、工人の生涯也。然れども工をなして尙ほ食を得る能ばずんば、快よく出でて托鉢せざるべからず。かくの如くにして兄弟小團の精神は益

々世間一般に了解さるべきなり。唯この臨機の處置のみを見て、この一事が聖フランシス福音の大思想と如何に關係するかを見ざるに於ては、大に彼れの心事を誤解するに至らん。彼れが業を爲さずして飲食を乞ふ者、若くは必要よりも多分を受納したる者を盜人と稱したるを知らば、此の間おのづから釋然たるべきなり。

論點今や進で、社會の基礎に關する近世思想の眞髓に達せざるべからず。所有物に對する吾人の觀念は、羅馬法律が吾人に傳へたるものなり。土地は全く神に屬す。然れども土地所有者は、自身の領分に在ては神の代理者とも目さるべく、わが欲するとほりに行ふを得るなり。能く其死後に於ても我が所有を一片の遺書によりて如何とも左右し得るなり。その屈强なる肉躰は墓に入りて土となるも、一紙の遺書は却て萬能なり。この所有物に對する觀念は、毫も薄らぐことも無く、又靈化さるることも無くして、益々明らかになり、日を逐ふて新しき牆壁は其處此處に龍宮城の如く建てられ、森と云ひ、林と云ひ、野と云ひ、池と云ひ、園と云ひ、道行く貧者の心目を慰樂したるものは、一日一日と彼等より奪ひ去られつつあるなり。玆にまた文學上の財產なる者あり。今日より二三代以前に於ては、著述家最大の幸福は、我が著書の幾ページが新聞紙面の數

欄を埋めおるを見ることとなりき。然れども今は是れ敬禮を作者先生に失するものと目せられ、著者の文學上の財産を私したるものと訴へらる。夫れ斯の如く社會の表面の傾向は、日一日に所有主の權利を正確になす方向を取りゆくなり、吾人は特に表面の傾向といふ。何となれば、此の潮流の傍には、また正反對の潮流あるを認ればなり。言ふまでも無く所有者の權利否定これなり。曰く土地は人民の有なり。之を占有し之を使用する間こそ其人に屬するものなれ、死と偕に權利も消滅す、人は自己の爲に十分の權利を有すれども、己れより後に來る者を左右するの權利なしと。是れ現代の活問題にあらずや。兩黨の戰士相面して立つ。其勝敗の如何は容易に預言すべからず。然れども勝つべき者は強き方なり。強しといふは善き者との意味にあらざるなり。數に於て多く、團結に於て強く、身を用ふること堅くして、他に害を與ふることの最も多き者を謂ふなり。此の勝敗にして何れが勝ち何れが敗れたるにせよ、之れ暴力の勝敗ならん。勝者は益々其心を傲慢にして愈々專橫を極め、敗者は其心に益々咒と復讐の念を熾んならしめん而已。

こは兎に角、此の際聖フランシスにして生存せば、彼れは其何れに與せんか。是れ言ひ更れば、彼れは社會主義者なりしかといふ幾度か繰返へされたる舊き

疑問なり。之れに對する吾人の答を明白になさんが爲には、先づ社會主義なる者の意義を分明にせざるべからず。若し夫れ社會主義にして、道德の基礎なく、唯富者の手より富を奪掠して貧者の懷に入るゝ的の革命に過ぎずんば、聖フランシスは社會主義者にあらざる也。又若し當今の富者にして右の答案を得たり賢しと之れを誇脹し之れを曲解し、フランシスは社會主義者にあらず、故に我黨の人物なりと唱ふるものあらば、吾人は其言を遮りて直ちに言はんとす、聖フランシスは彼の黨人にあらざる如くに亦此の黨人にあらざるなりと。聖フランシスは『貧』の精神を富者と貧者とに論なく說敎したるもの也。彼れは富者の懷を羨む貧者と、我が心貪婪の爲に融蝕されて愛も自由も辨知せざる富者との間に別を立てざりしなり。此の兩者の心狀は偕に一樣なり。共に囚人なり。一は其所有物の囚人なり。一は其嫉妬心の囚人なり。共に聖フランシスの心を有せざるものなり。

然らばアッシージの一聖をして今日の人たらしめなば、彼れは兩軍の戰線より遠く離れて局外中立を示さんか。吾人をして言はしめよ、彼れは一二一二年其故鄉アッシージに於てなせる通りに此の第二十世紀に於ても行ふべしと。當時アッシージに於てはマイナー及びメジョアーの二派ありて相敵視し事態穩かな

らざりき。後者は其數に於て少なかりしが、法王皇帝及び敎會の法律を備へて確立の權利を有したる者。前者は其數に於て多かりしも一定の制法なく情に走つて事を爲すの輩なり。フランシス此の黨爭を目撃し悵然として悲しみ、一方が時勢の氣運を洞察するの明なきを憐み、一方の狂愚迷妄を痛めり。兩黨の妬心益々募り、暴民端しなく城下に迫りて奪掠の狂態を演ずるに至れり。フランシスは之れを目撃したる者なり、而かも吾人は彼れが其設立したる兄弟會に命名したるは此の時なりしを知らざるべからず。彼れは我が兄弟會を稱するにマイナーの名を以てしたるなり。然らば彼れはマイナー派の蠻行を是としたるものなるか。誰れか之れを然りといふものあらんや。フランシスは其預言者の眼を以て、今にして我が隻手觸れずんば、マイナーの將來憂憤すべきものあるを洞見したるなり。彼れはマイナーの過失、誤謬、若くは罪惡は畢竟反動の餘勢に過ぎざるを見たるなり。彼れは一方老人黨の新しきを憎む固陋の濟度すべからざるを見、他の一方青年黨の假令過失を行ふとも又充分改革するを得る潛勢力の存すを見たるなり。聖フランシスが我が心靈上の兄弟會にマイナーの名を取りし所以のもの他意あるにあらざるなり。彼れをして再び今日に生れ來らしめよ。彼れは必ずやマイナーに與せんか。其方法を一變し、其心狀を一新する

滿々たる希望を以て、進んで此の青年黨に馳せ加はるべきを疑はず。

（五）

若し更らに、聖フランシスを知らんと欲せば、『完德の鏡（Speculum Perfectionis）』あり。『神秘的婚姻（Sacrum Commercium）』あり。前者は師の高風を欽して敎弟レオの草する所。後者は聖フランシス後その敎班第一の長者バレンチの記したるもの。アッシージ一聖の淸容、描かれて此の中に在り。（山縣雄杜三君抄譯）

一牧師の高等批評觀

牧師　ストリートフィルド

近頃余は、內國傳道敎役者同盟の席上にて高等批評に關する論文を朗讀するよう依賴されたれども、自らその筋の專門家に非ず、又た半知の門外漢が專門家の如く語るは甚だ眞理に害あるの故を以て、一旦之を辭退しぬ。而かも余に爲し得べき一事のなきに非ず、即ち高等批評に對する余自身の意見及態度を紹介することと是なり。故に余は余の論文に『一牧師の高等批評觀』と題して、余が時々個人的に問はるる、高等批評が如何に卿の信仰思想說敎等に影響せしかて

ふ質問に答へんと思ふなり。高等批評の問題や實に、思想ある學者も普通の讀者も共に遭遇する問題なれば、余は之に對する自身の經驗を紹介すると同時に、又た多數人士の意見を代表しつゝあるべきを信ず。此の點よりして、左に叙述する所は多少の價値を有することゝなるべし。

余が此の論文を草するに方りて二個の目的あり。第一は、勿論吾人が批評家の說に悉く盲從するの要なきと同時に、今日聖書を學ぶ者が大に彼等に負ふ所あるを示すことにして、第二は、吾人が批評家の說に從ふを適當と感ずる範圍内に於ては、一も基督に對する信仰を擾亂すべきもののなきを明にすることなり。勿論余は、基督教國の信條に全然反對するが如き破壞的批評に對して些少の同情をも有するものに非ず。基督信徒の信仰は常に變ることなくイエスのペルソンに基く。故に苟も教會の神的首長たる基督の尊嚴を傷くる批評は、たとひ偉大なるにもせよ無比なるにもせよ彼を以て單なる人と見做すが如きは、信仰の敵として戰ふべきものなり。基督教の信仰は基督の神性問題によりて立ちもし倒れもするものなり。

斯かる破壞的批評家に對しては、吾人はたとひ智識上學問上彼等と拮抗する能はずとするも、亦た實際的判斷（之を常識と稱するも可）の賜を有するなり。

極端なる批評家は屢此の實際的判斷を欠く。余は彼等の所論を讀む每に、鹿を見て山を見ざる獵師を思起さゝるを得ず。吾人は屢彼等を些細なる矛盾衝突を撿査する解剖臺や顯微鏡より引き離して、一目に全景を下瞰し得べき高處に連れ行きたく思ふことあり。さらば日夜に彼等の注意を傾盡しつゝある小問題は遠くその所に退きて、全局に亘るべき大問題は明白に彼等の眼孔に映じ來るべし。この常識的判斷こそ、たとひ專門的智識を欠くとも吾人をして彼等と對抗せしめ得るものなれ。

余をして一例を擧げしめよ。瑞西國の某敎授は曰く、基督の言として疑なきもの僅に九個あるのみと。四福音書を以て信仰の大黑柱となすものは、斯かる說を聞きて定めし喫驚するならん。而かも手に新約聖書を有し心に常識を有するものは、斯かる批評に對して少しも恐るゝ所なし。所謂九個の聖言と、福音書に見ゆる基督の敎訓と、孰れか善く使徒行傳や書翰中の內容を說明し得るものぞ。たとへば、權威者に貢を納るべき事（羅馬書第十三章七節）離婚問題（哥林多前書第七章十節）聖徒の足を濯ふ事（提摩多前第五章十節）に關する保羅の敎訓は何處より來れる。又た彼は何故に、使徒行傳中に二個所も信せざるものに對して足の塵を拂ひしか。又た彼が主の來り給ふや盜人の夜來るが如き事

（帖撒尼迦前書第五章二節）最後の箛の事（哥林多前書第十五章五十二節、帖撒尼迦前書第四章十六節）を言ひ、世の終局を以て主の重要なる敎訓の一となせし如き、之を初代敎會の構説に歸するよりも、基督自身の敎訓に歸する方、遙に道理ありと謂ふべし。又た彼得が基督を靈魂の牧者監督なりと言ひ（彼得前書第二章廿五節）基督の例に倣ふべきことを勸め（同上第二章廿一節）基督を隅の首石と見し（同上第二章七節、使徒行傳第四章十一節）は如何。又た雅各が『一切誓ふ勿れ或は天或は地或は他物を指して誓ふ勿れ、是を是とし否を否とすべし』と書きしは如何。その他福音書と新約聖書の他の部分と相照應する點少からず。

文字上の符合より一歩を進めて、思想上の符合に至る時は、書翰や使徒行傳中に、基督の敎訓に關する福音書記事の信ずべきを證するもの甚だ多し。雅各の書翰を讀むものは、誰れかその著者が馬太傳路加傳中にある山上の垂訓を知り居りしことを拒まんや。約翰の書翰とその福音書とを比較せよ、共に同一人の手に成りしことを證するに非ずや。神の父たる事や聖靈の働に關する保羅及びその他の新約記者の敎訓は、如何に説明せらるべきか。福音書中に見ゆる基督の言の純正なるを否定せよ、是れ取も直さず是等の問題に關する使徒の敎訓を

説明すべき唯一の適當なる鍵を抹殺する者なり。若し約翰に由りて傳へられたる基督の言、殊に第十五章の始を抹殺したらんには、信徒に對する基督の關係、基督に對する信徒の關係、信徒の肢たる事、基督の內住し給ふ事に關する保羅の意見は、何處にかその由來を求むべき。基督の神性に關する新約記者の信仰も、亦た之と同一の位地にあるなり。故に千九百年來、人が福音書を以て使徒行傳及書翰の原因基礎と信じ、使徒行傳及書翰を以て福音書の結果附屬と見做したるは、全く穩健なる判斷にして、使徒の言行は畢竟主の言行の歷史的なることと純正なることとを証するものなり。

僞經福音書の研究も亦た吾人をして同樣の結論に至らしむ。僞經福音書の多くは第五世紀以後に出來たれども、而かもその早き者に至りては第二世紀に出來たるもありて、若しイエスの傳記が全く小說的歷史にして、その中に唯だ主の少數の言のみが保存されたりとすれば、是等の僞經福音書は正經福音書の代りに世に行はれたるとならん。近頃僞經福音書を編輯し出版せるハリス、カウパー氏は、その序言に述べて曰く、余は此の事業に從事して、始めて正經福音書と僞經福音書との間に涉るべからざる淵あるを十分に覺知せりと。吾人の常識的判斷は實に、極端なる批評家が誤れる事を証せんが爲に、此の涉るべからざ

る淵に訴ふるなり。要するに、若し基督敎の基礎は唯だ迷信謬想の塊に過ぎずして、之に基督の化身もなく甦生もなく、殘る所は僅に九個の聖言のみなりとせよ、敎祖の人物は殆んど雲霧の裡に葬り去られて、此の歴史的實驗的大宗敎の宏壯なる建築物は砂上に立つことゝなるべし。是に至りて、普通人の常識は却て專門家の博識にも勝らずとせんや。

前述の如き極端なる批評說は姑く置き、爰に多くの批評家が唱道し一般の神學界が承認する批評にして、舊時の聖書觀を有する人士を惱ましつゝあるものあり。然れども、眞面目に是等の問題に接觸したる吾人の上に、斯かる說は如何なる影響を及ぼせしぞ。余は敢て斷言す、吾人の多數は最早聖書を讀むに少年時代と同樣に讀み能はざるを。高等批評は慥に吾人の上に多大の感化を與へたり、吾人は之に對して反對の態度を取らざるのみか、聖書の讀者として實に之に負ふ所深甚なるを告白せずんばあらず。如何となれば、之れが爲に前にインスピレーションの有無を疑ひし部分も今は之あるを確信し得るに至り、前に意味なく見へし所も今は意味深長なるを覺ゆるに至り、前に曖昧なりし所も今は明白なるに至れり。而してたとひ高等批評によりて吾人の意見が如何に變化したるにもせよ、そは少しも宗敎の死活點に觸るゝものには非ざるなり。

高等批評の與へたる大体の結果は、舊時のインスピレーション説を多少變更するに至れり。吾人は今や、先天的に聖書のインスピレーションを斷定するを止めて、聖書その者によりて歸納的に之を構成す。サーモン博士の言や善し。曰く、先づ神が教會を導き給ふ方法に關しておのが最も適當と思惟する所を斷定し、而して之に合致するよう事實を牽强附會するは、甚だ不安全の道なりと。それ吾人の服從すべきは、神の言葉にして、そが人間の解釋法に非ず。吾人はレベレーション（默示）とインスピレーションとの區別を知らざる可からず、舊約聖書は歴史にして神學的教理の結晶に非ざるを記憶せざる可からず。吾人は聖書中に少しも人間的誤謬を含むなしと斷言し、委細の點に至る迄その正確を保證するインスピレーション説を辯護するの要を見ざるなり。神はその言葉を默示するに方りて、豫め批評的科學的研究に備へ給はず。又たインスピレーションは全智と同一義に非ず。斯くて吾人は、一層明白に希伯來書の第一章第一節にある『多くの區別をなし多くの方法を以て』てふ語の意義を解し得、又た舊約書と新約書との間にインスピレーションの優劣あるを知り得るなり。吾人は聖書中の詩歌戯曲譬喩等にも散文的文章に於けると同じく聖靈の存在するを認む。吾人は神の靈が古代の神話や傳説を潔めて精神的教訓の料となせしを

許す。最後に吾人は保羅と同じくインスピレーションに程度の差あるを見る。敎會はインスピレーションの定義を與へず、從て吾人に要求するに一定の定義を以てせず。然れども、吾人は一方に於て神の祐導を全く否定する説を拒絶すると共に、他方に於て人間の誤謬を聖靈に歸せんとする不敬說に賛成する能はず。神は慥に聖徒に由りて語り給へり、而かも亦た語れる者は人なるを忘る可からず。若し舊約書中に矛盾衝突の個所あらば、吾人はその欠點を神に歸すべきか將た人に歸すべきか、是れ議論を俟つの要なきに非ずや。

請ふ余をして種々の點より余の立塲を說明せしめよ、而して重に之を舊約書の範圍内に限らしめよ。

一、余は先づ創世記に關して余の所見を述べん。高等批評は吾人に敎ゆるに、天地創造、人間の墮落、洪水に關する記事が歴史に非ずして傳說なることを以てす。一たび創世記最初の十一章が古代の傳說なることゝ、神が是等の詩歌や物語によりて高尚なる精神的敎訓を垂れ給ひしことゝを承認せよ。文字通に解釋したる爲に是迄非常の困難を感じたる聖書の部分は、一朝にして疑惑氷解するに至るべし。而かも創世記中の古譚とアシリヤ、バビロンの神話との間に雲泥の差違あるは、取も直さず前者にインスピレーションの存在する屈强の証據

に非ずや。批評家の說を採用して始めて、爰に默示と科學の衝突は除去せらる。創世記を科學的歷史と見做して、之と諸科學との調和を謀るは、到底不可能の事に屬す。公平に創世記の文字を了解し來る時は、天地創造譚は天文學地質學と衝突し、人類墮落譚は人類學と矛盾し、洪水譚は一方に於て諸國の傳說と合致する所あると同時に、他方に於てその記事中に矛盾あり難解あるを如何せん。科學誤れるか、默示誤れるか、此のヂレンマより吾人を救ふものは即ち高等批評の結果に非ずや。

聖靈が古代の傳說や物語を利用して精神的敎訓を與ふるの料となし給へることを信仰するの輕率ならず不道理ならざるは、保羅や彼得や猶太などの聖徒が彼等の高尙なる敎訓中に舊約書の古譚を引用したる事實を見ても知らるべし。是等の古譚がたとひ新約書中に引用されたりとて、そが歷史的事實なるを證するに足らず、彼等は唯だ眞理を說明するの具となりたるに過ぎざるのみ。新約書に於てすら古譚が吾人を敎育するの價値を有せんには、そが舊約書に於て然るべきは極めて自然に極めて適當なる事に非ずや。余は爰に創世記の第二第三章に關して最も余の心を獲たる某記者の言を擧ぐべし。曰く、曾て吾人の躓石となりたる創世記第二、第三の兩章は、再び新鮮なる生氣を帶びて吾人の前に現はる、

否な是迄になき程の光輝を放ちて吾人を照らしつゝあり。歷史前の社會に於ける幾多の出來事――戰乱、爭鬪、慘禍、腕力によれる國々の興廢存亡――の中より、記者が特に撰擇して人間の良心が醒覺し始めたる事、彼がその造主に對して責任の念を感じ始めたる事を詳細に叙述せしは、實に一大奇事なりと謂はざる可からず。世界歷史の初頭に於て到る所に看過されつゝある此の一事が、歷然消すべからざるの重要事件として吾人の前に現され、而して他日に於ける吾人救贖の基礎となりたるは、全く神業にして人間業には非ざるなり。是れ眞正のインスピレーションなり、是れ實に天上より來れる鼓吹なりと。

二、高等批評は、吾人に敎ゆるに舊約書と新約書との間に優劣あることを以てす。古代に行はれたる否な神によりてすら是認されたる道德的標準の比較的劣等なる事、舊約書に於ける神の觀念の粗なる事、希伯來の宗敎と他のセミチック族の宗敎との間に密接の關係ある事などによりて、高等批評は兩約書の眞正の位地と比較的價値とを明にせり。是れ敎會に取りて損失なるか、否な、寧ろ眞理を明にしたるが爲に利益なるなり。高等批評は、神が世界を攝理し給ふ方法に關する想像的搆說を排斥して、默示の進化的性質を確實なる歷史に訴ふるものなり。

新舊兩約書の比較より生ずる道德問題は、適當なる解釋法の發見されし迄は、常に教會の躓石たるを免れざりき。教會が曾て受けたる最も有力なる反對は、初代に於けるノスチック派の異端なるが、此の派の有力なりし所以は實にその舊約解釋法に由る。ノスチシズムの問題は、大半舊約問題にてあるなり。教會は猶太人より舊約書を取りて之に新約書と同等の位地を與へぬ。斯くてノスチック派の鋭利なる攻擊に遇へり。若し主の方法を採用したらんには、斯かる失策は避け得べかりしものを。主は明白に舊約書の初步的性質を認め、おのが教ゆる所に比して舊約道德の不完全なるを公言し給へり。曰く、古の人……と言ひしは爾曹の聞きし所なり、されど我れ爾曹に告げん云々と。蓋し現在の批評家は、畢竟新約書が與へたる例――即ち分別を以て舊約書を讀み、全体の趣旨によりて各部分を判斷すること――を蹈襲したるに過ぎざるなり。監督ウエストコット曰く、一たび歷史的精神を以て讀む時は、舊約書中に殆んど困難あるなしと。然り、此の精神を欠きて見る時は、舊約書は實に難問題の塊なりと謂つべし。高等批評は、此の精神の養成を皷吹し、且つ之を聖書の研究法に應用するものなり。吾人は今や士師記の中に基督的良心なく呪咀的詩篇の中に基督教的倫理なきを見て怪まず、却て神が各時代の良心に從て人々を教訓し漸次

に高尙の域に進め給ふを見るなり。オリゲンの言へる如く、神の賜ふ所は德に非ずして德に進むの力なり。神は世々代々此の力を助長し訓練して、以て他日基督に於ける榮光の發現を受容し得るの準備をなし給ひたるなり。

三、高等批評家は舊約書中に戲曲的分子あるを主張す。吾人も或る點に於ては彼等の說に從ふ能はずと雖も、今日に於て誰れか聖書中より全く斯の分子を除去し得るものあらんや。約百記の中に何程歷史的基礎のあるにもせよ、吾人は本書全体の趣向が神靈を呼吸したる詩人の作なるを承認せざる能はず。雅歌傳道の書に於ても亦た然り。是等の諸篇はソロモンの名に由りて著されたりと雖も、そが彼自身の手に成らざりしは明白なり。吾人は又たヨナ書が寓意的著作なるを聞きて驚くものに非ず。聖書中此の書ほど不信者の躓石となりたるはあらじ。批評的ならざる時代に於てこそ猶太人は此の寓意的文章を以て眞實の歷史と見做したれ、今日に於ては多數の讀者に取りてその戲曲的性質は明白となり了れり。吾人は又た批評家が本書解釋の鍵をエレミヤ書第五十一章三十四節四十四節に見出したるの功を沒する能はず。斯く詩的に解釋し來れば、本書は精神的意義實に深長なるものにして、デール博士の言へる如く、神靈の感化に由るに非ざれば何人も書く能はざるの著作たる也。

余は尙ほ戯曲家の手が舊約書の他の部分にも働けることを信じ得るなり。余は今爰に舊約諸書の時代著者編輯等の問題に關して定說を擧ぐる能はずと雖も、兎に角舊約書に神のインスピレーションあることは、基督の降生てふ事實に於て證明さるべきを信ずるが故に、是等の問題が如何に解決さるゝことも以て余の信仰を動かす能はざるなり。歷代志略や申命記の著述年代が後世に繰下げられたりとて、彼等が理想家の手になりし作爲的著述なることと定まれりとて、吾人の信仰は之れが爲に少しも動搖するものに非ず。猶太の戯曲的記者が當時の文學的風習に從つて、ヨブやソロモンの口を借りたる如く、モーゼやアビヤの口を借りたるは、いとも自然の事なりと謂つべし。

四、余が次に一言せんと欲するは、聖書中に矛盾の個所あることとなり。是迄此の矛盾を調和せんが爲に、頗る器械的不自然的なる註釋法を取りたるが、現今の批評家は斷言して曰く、此の矛盾や頗る多くして、之を調和せんとする努力は全く望なしと。然れども、斯かる結論は少しも吾人をして聖書のインスピレーションに對する信仰を失はしむるものに非ず、唯だインスピレーションに對して是迄と異なれる見解を有するに至らしむるのみ。吾人は最早、聖書の記者がインスピレーションを受けたるが故に、之に誤謬なしとの說を保守するの

要なし。たとひ創世記やヨシュア記やサムエル書や歷代志略中に矛盾あり衝突あればとて、之にインスピレーションあるを信ずる吾人の信仰を害さゞるは、尙ほステパノが議會の前に陳述せる演說中に歷史的誤謬あればとて、聖靈彼に由りて語り給ひしを信ずる信仰を妨げざるが如し。

又た希伯來語の原文と希臘語の飜譯とを比較し、或は前二者とそが新約書に引用されたる個所とを比較する時は、吾人は同じく批評家の說を採用せざるを得ず。若しインスピレーションにして文字的にも誤謬なきを意味せんには、原文と飜譯との間に、舊約書と新約書との間に、差異あるべき筈なきなり。

余は尙ほ進んで高等批評の諸方面に說き及ぼすの時を有せず。唯だ終に臨んで一言問はんと欲する所あり、他なし、公平なる批評に基督信徒たる信仰を覆へすべき分子幾何あるかてふことと是なり。監督ゴーア曰く、基督を信ずる信仰の主義よりすれば、舊約書にインスピレーションあることを疑を容る可からずと。然り、舊約書の光は取も直さず新約書の光なり。その差は單に程度の差に過ぎざるのみ。

余は前に、たとひその中に極端なる破壞說あるにもせよ、吾人は大に高等批評に負ふ所あるを言へり。若し此の說にして今日一般に受容されずんば、十年後

には慥に受容さるべきなり。余は重に舊約書に關して余の意見を述べぬ、而して余は新約書批評の歴史が同じく舊約書批評の歴史に於て繰返さるべきを信ず。五十餘年以前に新約書が經過せる試錬の火は、大体に於て信仰の歴史的文學的基礎を堅くするの結果を呈せり。(勿論英國に於てもエンサイクロペデア、ビブリカに由て代表さるゝ如き極端説なきにあらねど)現今に於てこそ最早世人の注意を引かざれ、半世紀前に起りし新約書批評の結果は、此の書を研究する態度の上に非常なる變化を與へぬ、即ち信仰の死活點に關せざる問題に就ては、自由なるインスピレーション觀寛大なる研究法を生じぬ。されば余は舊約書批評の結果も亦た同一の道を取るべきを信ずるなり。その結果や二重なり。即ち一方に於ては、吾人をして一層自由なる態度一層自然なる精神を以て舊約書を研究せしむると共に、他方に於ては、吾人をして此の古き記錄が神の祐導の下に生じ、以て救主發現の準備となりしことを確信せしむるなり。

余は又た批評家に對して感謝の念を抱くと共に、彼等をして自家の地歩內に留まらしむるの要を見る。余の見る所を以てすれば、世人は多くの地歩を彼等に讓り過ぎたるが如し。彼等は文學的解剖年代的研究の範圍內に於てこそ權威を有すれども、耶蘇基督に關する眞理の根本的基礎を動かし得べきものに非ず。

多くの人々は高等批評を以ておのが信仰の根據を轉覆し得べきものと誤解するが故に、信仰を動搖しつゝあるなり。彼等は批評家が呈出する困難の塵を見て、他の有力なる證據の梁木を見ざるなり。

吾人が自家の信仰を確く把持する所以は、幾多の方面より來る證據の合致するに由る。或るものは智識に訴へ、或るものは心情に訴へ、或るものは智識並びに感情に訴ふ。若し吾人にして是等の諸證據を羅列したらんには、高等批評より來る影響の如何に小なるやを知るべし。勿論全く超自然を否定する破壞的批評は此の限に非ず。高等批評の域を離れて、吾人はアブラハムより今日に至る迄の猶太國民の歷史を指し得べし、世界歷史を讀んで神が撰民以外にも基督の爲に準備し給へる攝理を見るを得べし、舊約書中の約束の歷史や預言の証據に訴へ得べし。又た誰れか基督や使徒の言が基督敎會の歷史に於て成就されたるを疑ひ得んや。聖書全体を取りて之を他宗敎の經典と比較するに、余は之を純粹に人の手に成りしものと思ふ能はず。且つ如何なる說を極端なる批評が提起するにもせよ、余は基督敎的證據の最大なるもの、即ち耶蘇基督の比類なき超絕的性格と、彼に於ける神性人性の完全なる合致に訴ふべし。余は又た奇跡中の奇跡なる主の復活てふ事實に訴ふべし。且つ主の復活より連續しては、保羅

の改信とその大事業とを思起し、保羅の生涯より連續しては、世界に於ける基督敎の勝利を聯想す。而して最後に余は余の心靈的經驗に訴へざるを得ず。今や自家の心靈を探り又た他の信徒の心靈を探り見るに、百世を通じて變せざる基督の大能や復た疑を容る可からず。されば高等批評の結果我に於て又た何かあらん。吾人は或は高等批評の問題により、或は哲學上の問題により、或は自家の心中より生ずる諸種の問題によりて、疑惑煩悶の裡に陷ることもあらん。而かも此の疑惑や煩悶は、遂に批人をして基督自身に復歸せしむべき神の攝理たる也（今泉眞幸君抄譯）

倫理と審美 （二）

敎授 ジー、エッチ、パーマー

（七）

凡そ物單獨にして完全なる時は美なるなり。風景畵を見て、吾人は屢斯くも些細なる作物が左程多くの苦心を價するかを疑ふことあり、即ち、畵工が自ら一畵景を構成せんよりは、何故に寧ろ之を直に自然より寫取せざるやを怪むことあるなり。如何なる窓も彼に之れが好材料を與ふることとならん。彼をして窓緣

を直に額縁とし、その中に含まるゝ景色をその儘に彼の畵となさしめよ。斯くて好風景畵は出來得ざるべきか。曰く、決して出來得べからず。繪具の不完全と筆力の不十分との爲に、全くその儘に寫取し能はざるは勿論なり。たとひ寸分誤りなく之を寫取し能ふにもせよ、その結果は頗る拙なるべし。如何となれば、是れ自然の一部を分割せる斷片にして、その中には各部の調和なく完全の統一なければなり。畵工が風景畵を描くに方りて力むる所は、その中に必要なる分子を網羅すると、その中より不必要なる分子を除去することゝ、且つ一旦それに採用されたる分子をして悉く相互に調和せしむることなりとす。固より吾人は屢その儘に畵となるべき實景を見出すことあり。斯かる塲合には、各部の調和完全にして別段吾人の取捨を要せざるなり。然れども、斯の如き自然の統一美は實に稀なるものなるべし。

之と同じく、若し余が余の友人の一生涯中より隨意に一時間だけを取りて、その間に起れる出來事を記さば如何。余は之によりて彼に關する面白き觀察の多少を與へ得るならん。然かもこは決して一の話即ち一個の美術を搆成せざるなり。一時間の出來事は、その前にありし事柄に關係し、又たその後に來るべき事柄と聯絡す。されば、此の斷片的生涯を見て、誰れか統一を感ずる者やある。

吾人が一の話をなすに方り種々の困難あり。吾人は屢或る事實を讀者が既に知れる者と見做して省略することあり。然れども、話がそれに含まるゝ者の外何物をも要せざるに至る迄は、そは未だ優等なりとは言ふ可らず。又た不必要なる者は、決して顯れざるを要す。如何となれば、讀者の興味は爰に頓挫を來すべければなり。或る佛國の戲曲批評家は曰く、何人をしても銃を以て登場せしむる勿れ、若し後に何人かその銃を以て何事をかなすに非ざるよりは、と。

短言すれば、何物にもあれ苟も美ならんが爲には、その限界内に凡てを含める統一的完全ならざるべからず。故に吾人は屢そが限界線を明白にするの必要を有す。畫工はおのが畫の額縁によりて全くその周圍より隔離さるゝ迄は、之を完成せりとは思はざるなり。額縁は人に注意するに、その中の事柄とその周圍の事柄とは全く別物なることゝ、之を見るものは決してそれ以外に思を馳すべからざることとを以てす。一區域内に隔離さるゝの必要あるやそれ斯くの如し。此の隔離の感の益增す程、美妙の感も亦た愈加はるなり。その中に含まるゝ材料の重大なるや否やは、必しも問ふ所に非ず。然れども、內部の調和と全部の統一とは、最も大切なる事柄なり。爰に海の圖あり。左に突出せる岩石あり、右に樹木あり、水の上には雲あり鳥あり白帆あり。是等の材料は實に些細のも

のなりと雖も、而かも色彩の配合と劃線の調和とは、斯かる些事を統一して吾人の目前に顯はす。斯かる粗畫と雖も、尙ほ最も精密なる斷片畫――自然より隨意に寫取せられ而かも內部の調和なきもの――に勝りて美なるものなり。然れども、善き行爲を觀る時に、吾人はその事情甚だ異なるもののあるを見る。美なる物は他物より隔離さるゝこと必要なれども、之に反して、善き行爲に必要なるはそれ以上のものに聯絡することなり。行爲はその影響を全宇宙に及ぼすものにて、此の宇宙に對する關係を知ることなくしては、十分に了解され得べきに非ず。その關係や四方八面に擴がる、而して吾人はその終極を見る能はず。吾人或は惡しき行爲を隔離的なりと思ふことあるべし。否な非行者は常におのが行爲を隔離せんことを望む。彼れはおのが行ふ所を他の事物と關係なく、一般法則以外に獨立せしめんと試むるなり。勿論彼の希望や無益なり。凡て道德的行爲は――その善なるものもその惡しきものも――その影響する所無限なり。殊に善き行爲は他に關係を有すること多く、その本人の一生に於ける他の諸勢力、彼を圍繞する社會に於ける他の諸要素、否な天上に於ける諸星の運行にまで密接なる聯絡を有す。善き行爲は、今宇宙の建設力が正に爲さんとする所を助成するものなり。此の點に於て、善き行爲と美なる物との間に著しき徑

庭あり。前者は決してそれ自身のみにて完全なる能はず。之に反して、完全なる統一を示さゞる限は、如何なる物と雖も到底美と稱せらるべからず。美なる物は隔離的なり完成的なり單一的なり。此の根本的異同ありて、始めて幾多の小異同も續々生起し來るなり。

（八）

美なる物に於ては、各部分の價値はそが全体に寄與する所によりて定められ、吾人はそがそれ以外に及ぼす影響を問ふことなし。吾人が美なる物を賞美する時、必しもそを組成する各要素を賞美するを要せず。唯だ彼等が引緊りたる統一を來すに必要なるを賞美すれば足る。人あり余が海の圖を見て、『こは短艇の圖なり、余は君が漕艇を好むを知らざりし』と言はんに、余は之に答へて、『否、余は止むを得ざるに非ざれば短艇に乘ることなし』と言ふべし。彼又た『さらば君の好む所は岩石にあらん、余は左方に一大岩石あるを見る』と言はゞ、余は又た之に答へて、『否、余は岩石を好まず、余の圃には岩石多し、余は岩石を見る毎にそが收獲の妨害物なるを感せずんばあらず』と言はん。彼又た『さらば君の好む所は雲にあらん』と言はゞ、余は又之に答へて、『否、余は雲に贊成せずして寧ろ日光に謳歌するものなり、余は一々是等のものを好むに非ず、余

が賞美する所は唯だその全体にあるなり、美なる物に於て、余はその各部分を全体の一部として観れども、全体を離れて之を観ることなし』と言ふべし。

尚ほ一歩を進めて論ぜんに、美なる物の一部分が如何に有害なればとて、そは少しも吾人の審美的判断を左右すべき者に非ず。余と余の友人と一株の立派なる樹木を見つゝあらんに、余はその美を稱して、『こは樹木として一も欠くる所なし、かの欝々たる枝葉、堅固なる幹、完全なる釣合、亭々たる姿、而かも機械的に陥らざる整齊を見よ』といふ。然るに友人は之に反對して、『余は此の中に何等の美をも見出すこと能はず、如何となれば、こは四方にマラリヤ熱を傳播するの媒介となり、四隣の人々をして健康を保持する能はざらしむればなり』と言はんに、余は之に答へて、『君は全く異なれる二個の事柄を混同しつゝあり、余は之を呼んで有益なる樹木と言はず、唯だ美しき樹木と言ひしのみ、即ちそが完全なる内部の調和を示せるを言へるなり、そが他に害を及ぼすや否やはその美観を傷くるものに非ず』と言はざらんや。美なる物を有益なりと思ふに至つては、却て吾人の美感を減殺するものなり。爰にショウ大佐の紀念像を美術以外に利用せんと欲する人ありと想像せよ。蝶番を之に付して門の如くに開閉され得る様にし、必要の時には浮浪者の公園内に入り來るを防ぎ得べし。然れ

ども、吾人は之に由りて却て美的價値の下落するを感ずることならん。そが開閉さるゝに至りたりとて、別段美たるを失はざるべし。然れども、之れが爲め何となくその威儼を失墜するに非ずや。その美的價値の偉大なるや、之に他の種類の價値を加ふる時は、却て之を輕蔑するの氣味あるなり。若し外部的價値を增さんが爲にその內部的價値を看過するならば、その威儼を失墜するや必然なり。ミロー嶋のヸナス像の大理石を以て上等の石灰を造り得べしといふものあらば、人は彼の無鉄砲なるに驚くならん。吾人は眼前の價値のみを以て、十分に滿足しつゝあるなり。

此の原理は文學上の美に於て、一層明白に說明され得べし。失樂園の性格中、何者が最も吾人の注意を引付くるにや。アダムに非ず、エバに非ず、寧ろかのサタンなり。彼は少くとも余の愛好者なり。余は少しも彼の性格を變更するを欲せず。若し人ありて、如何にして君は彼の如き惡しき性格を賞美し得るやと問はゞ、余は先づ彼に答へて、『惡しき』てふ語も『賞美』てふ語も共に曖昧なりと言ふべし。若し此の問にして、サタンの同類が實際社會に跋扈するを望むかの意味ならば、余は固より否と答へざるべからず。彼等は實に社會の厄介物なり、見付次第に之を撲滅するを要す。然れども、若し賞美てふことが道德的に

非ずして審美的なりとせば、余は英國の全詩界に於て、此のサタンの性格よりも賞美すべきものなきを信ず。彼の諸性情や相一致して强固なる一の個人性を形成し、少しも軟弱なる點を示すことなし。彼に於ては、惡を喜ぶの精神徹頭徹尾全体を支配し居れり。他の人ならば不統一を來すべき事柄を統一して、是等をして相容れ相助けしむる詩人の伎倆は、實に驚くべきものならずや。サタンの一言一行は、正に彼が言ふべく行ふべき所にして、他のものゝ言ふべく行ふべき所に非ざるなり。オセロの劇に於ても亦た斯の如し。重苦しきこと牛の如く、而かも一たび動けば止まること能はず、他物を看取すること鈍く、而かも誤て看取せる事の爲に痛く困しみ、斯くて一歩一歩破滅に瀕し行く彼は、慥に一大性格なりと謂ふべし。而かも尙一層賞美すべきは、柔軟なるアイアゴなり。彼は活氣盡くることなく、智識的に活動するを好み、而かも愛好なく憎惡なく又た責任を知らざる人物なり。彼が感情を欠ける爲に、シエークスピアの描ける性格中、最も劣等なるものゝ一なるは事實なり。然れども、彼は正にしかあるべき如くに描かれ、彼の性格や終始一貫し居れり。彼の言に彼の名を付するの必要なし。吾人は一見してそが彼の言なるを識る。されば彼は實に美なる性格なり。而してその美なるは、他人を益するが爲に非ずして、彼自身に矛

盾せざるが爲なり。

さらば、吾人は斯の如くに善を評價し得べきか、善き行爲を檢するに、その中に矛盾あるや否やを以てすべきか。善き行爲は、美ならざるべからず矛盾あるべからず、然かも吾人は之のみを以て滿足する能はず、尙一歩を進めてその結果如何その傾向如何を問ふを要す。斯くて吾人は、一の行爲が全局面に及ぼす影響、そが長日月の間に生ずべき結果、そが如何に他の善き行爲を助成し他の善き運動と聯絡するかを硏究するなり。斯くて又た美を評價する見地と善を評價する見地とは、甚だ趣を異にするに至る。善き行爲はその及ぼす所の關係極めて大なれども、吾人が之を稱して美といふ時は、唯だその一方面のみを見て、そが他に及ぼす所如何を問はざるなり。

(九)

凡そ物は美なるに至れば、之に生長發達てふことなく、如何に吾人の心中に無限の念を誘起するにもせよ、それ自身は有限的となり固定的となり完成的となるなり。それ人生の艱苦は、凡て是れ人間の有限性に基く者なり。假令ば、吾人が愉快なる行動に從事するに於ても、そが終極の目的を始より我が眼中に置き、而して最も嚴重なる規則に從てその目的に達せざるべからず。人は有限動物な

れば、我が智識も我が活動も四方に制限せらる。而かも我が願望は、是等の制限を超絶してあらゆる羈絆を脱却せんと欲す。而して吾人は、最も烈しく斯かゝる制限の苦痛を感ずる時に、最も十分に美術の慰籍を感ずるもの丶如し。吾人は無限の世界に於けると同じく、又た美術の中におのが安慰の境を見出して、爰に制限の感を免れ日常の苦悶を脱し得るなり。

一見すれば、此の事實や實に奇妙なり。美なる物は人生の何物よりも有限なるものなり。余が是迄說明せし所は之を闡明して餘あり。美なる物の前に出づれば、吾人は『之にて十分なり、余は之れ以上に要する所なし、余が求むる所は盡く之に在り』といふ。然れども、こは『余は全く有限なるものを以て滿足す』といふに同じからずや。美なる物の完全なるは、そが小なるが爲、制限さるゝが爲、隔離さるゝが爲に由るなり。吾人の如きペルソン的存在物が眞に美なる能はざる所以も、亦た此處にあり。吾人は無限者に對して因緣を有するが故に、到底完全の域に達するを得ず。若し吾人にして、完全ならんが爲に或る小成的完全の域に立止まることあらば、吾人は我が本來の理想を滅却して、爰に別種の不完全に陷るなり。されば、ペルソンが眞に美たるを得るは不可能の事にして、彼は斷えず生長しつゝあるものなり。それ生長はペルソンの本性にして、

而して美なる物には此の要素を欠く。何物にもあれ之を完全ならしめんと欲せば、吾人は是非共そが生長の道を杜絶せざるべからず。勿論吾人は屢生長しつゝあるものを美なりと稱することあり。而かも斯かる場合には、意味に多少の變化なき能はず。その實、その物が既に達したる點に於て之を觀、そが尙ほ生長しつゝあることを一時忘れて、吾人はその美を賞するなり。然れども、尙一層著しきは、吾人が屢發展の全程を通觀して美なりといふことなり。斯の場合に於ても、吾人は既に成就されたる部分のみを觀ず、之と共にそが將に走るべき部分迄も觀る。されば、生長物を美と稱する時に、吾人は現存の中に將存までも大觀するなり。嚴密に言へば、美なる物に於て進化は兎に角一旦停止するなり。故に美なる物は、その最上のものと雖も、常に『小』てふ分子を含まずんばあらず。要するに、そが道德的事物と異なる所は、小成に止まり有限に安んずることにあるなり。

余は前に、美なる物がその有限に由りて無限の念を誘起することを言へり。こは一見不思議なるが如しと雖も、想ふに此の事たるや、吾人の努力の他の方面に於ては、その終極甚だ遼遠にして急に完全の域に到達し能はざるに反して、美なる物は既に到達せる完全をもて、吾人に顯すに他の事物が正に到達すべき

完全の前兆を以てし、斯くて美なる物に於てのみ吾人は無限の小摸型を感覺し得るが爲ならん。余は十分に此の問題を説明する能はず。吾人は慥に、人生の諸方面中最も有限なるもの丶中に、却て最も著しく無限なるもの丶面影を認むることを預期せざるべし。然れども、こは一大事實なり。余の了解する所に由れば、凡そ物美ならんが爲には、制限を受け生長を止め發展を全ふせざるべからず。而かも此の中に於てのみ、吾人は制限の感を脱し完全の域に入り得るなり。

（十）

以上説明せし所は、倫理と審美とを區別する三個の經界線なるが如し。否な余は、寧ろ之を以て一の根本的區別が三方面に顯はれたるものと言はん。又た此の區別あればとて、一物が同時に美たり善たる能はざるに非ず。そが益完全に赴くと共に、又た斷へず益複雜なる關係に入るが爲に、吾人は之を善と稱し得べし。そが既に到達せる點に就て之を見る時は、吾人は又た之れが美を感じ得べし。是れ一物を見るに二樣の見地あるが爲なり。而かも神聖なる美を斯く小視するは、聊之を瀆がすの感なき能はざるが故に、余は終に臨んで、如何に倫理が審美に負ふ所あるや、如何に善が美に待つ所あるやを指示して、この罪を

贖はんとは欲するなり。

(十二)

第一に、吾人が旣に見たる如く、善は美より統一的調和てふ觀念を借り來る。而して道德界に於て此の觀念よりも重要なる觀念はあらじ。人始めて此の觀念に到達すれば、彼の生涯は爰に一時期を劃す。此の觀念は又た科學の基礎なり。吾人が世界を見るや、小兒の時には甲の物を見次に乙の物を見又た次に丙の物を見る、而かも此の物と彼の物との間に何等の關係を認むることなし。漸次に吾人は是等の物に密接の關係あるを認むに至ると雖も、而かも全世界の一事一物が悉くその他の事物に相關係し互に依賴することを發見するは、長き歲月の後に屬す。斯く此の思想を會得し、且つ一物を解せんが爲には凡て他の物をも解せざるべからざるを知るに至れば、吾人は旣に科學の列に入りたるなり。吾人は又た此の思想を會得せざる間は、道德家たる能はず。小兒は、甲の時には甲の衝動に驅られて甲の方向に赴き、乙の時には乙の衝動に驅られて乙の方向に赴く。彼や今は强く此の物を慾望すと雖も、次には又た强く他の物を慾望す。斯くて幾多の慾望は彼を捲去り捲來るなり。彼に對して働ける諸勢力は凡て是れ遠心力にして、中心なる主人公を飜弄して支離滅裂ならしむ。各勢力は

おのが儘に動きて、主人公の品格は少しも建設さるゝことなし。彼はその一を捉へて、善なりとも惡なりとも稱するを得ず。彼の問ふべき所は、如何程まで各衝動が彼の全体即ち自我を建設するの助となるやにあり。斯く建設されたる自我によりてこそ、各衝動の價値も爰に枰量せらるゝなれ。少年が一たび統一的有機体てふ觀念を把握するに至れば、彼は爰に新人物となり始めて道德界の一員とはなるなり、彼は尙ほ一步を進めて、一層大なる自我を發見し、此の自我に於て彼も幾多の他の人々と共に統一的調和を保つべきを悟るに至らん。而して此の統一的調和てふ觀念こそ、吾人が美なる物を觀て看取する完全圓滿なるものに非ずや。斯くて美は實に吾人に敎ゆるに組織、調和、統一、圓滿、完全等の觀念を以てするものなり。美は常に云ふ、『全局面を觀察せよ。生命をして解体せしむる勿れ。相互の關係に於て事物を見よ、而して如何に調和が全体を支配するかを見よ』と。

（十二）

次に美は道德的生活に與ふるに一種の實益を以てす。如何となれば、吾人は幾度となく律法と調和せんが爲に美の援助を要すればなり。人誰れか屢々義務の要求を煩はしと感せざらんや。一の義務來りて吾人の遂行を要求す。吾人之を

遂行して、爰に自由を獲たりと思ふ。然れども、次の義務の又た吾人の眼前に横はるあり、而して吾人は又た之れが要求に應せざるべからず。斯く義務の要求に際限あるなし、是に於てか吾人の生涯は奴隷的生涯となり了るなり。吾人が暫時休息して斯生より多少の快を取らんとするや、義務の聲は常に吾人を叱咤して、吾人をしておのが好む所を棄てゝ彼の命令に從はしむ。吾人は喜んで義務の膝下に我生の幾分を捧ぐるを覺悟すと雖も、又た斯くすればとて決して我生を寂寞たらしめざるを知ると雖も、吾人は永久奴隷的羈絆の下にあるを喜ばざるなり。吾人は多少の快を取らんことを欲し、而して苛酷なる賦課に應じて凡てを捧ぐるを欲せざるなり。

然るに余は、美の顯現ほど吾人をして義務の要求に調和せしむるものなきを信ず。如何となれば吾人は、凡て美の世界を快樂の世界と感ずればなり。美の前に於て吾人は最も多くの快樂を見出し、且つ吾人は本能的に美と義務とを全く反對なるが如くに思ふの傾向あり。然れども、此の本能的傾向は果して正當なるべきか。美を研究せよ。法則は何れの方面に於けるよりも完全に此の方面に於て行はるゝに非ずや。吾人の既に見たる如く、美術は一部分の氣儘を排斥するものなり。全体の法則に支配さるゝ者のみが美なる物たるを得るなり。而か

もその結果は吾人に快樂を與ふ。一方に於て、吾人は義務の長途を步みつゝある時に、快樂を法則以外にあるものと感じ、法則を脫却すれば快樂玆に至るかの如く思ふ。而かも他方に於て、美は之に反對の事實を敎ゆ。美に於ては法則の支配その最高度に達し居るに拘らず、吾人はその中に最も銳き快樂を感ずるなり。

されば、美なる物は凡て道德に關して光明ある顯現を與ふるものなり。法則と快樂とは、敵に非ずして却て味方たるなり。吾人が法則に從ふを以て快樂に遠かり窮屈に入るものと想ひしは誤なり。吾人は法則を脫却したるが爲に、快樂を失ひしことそれ幾次ぞ、而して美は吾人に此の敎訓を最も深く銘するものなり。單に言語を以て之に敎へよ、人は之を信ぜざるべし。而かも美が實物を以て之を示す時に、吾人は始めてその眞なるを知る。且つその應用や極めて大なり。たとへば、義務として秩序を保つに汲々たるは苦痛なるべし。然れども、一たび美感より出づる時は、吾人はしかく苦痛と思はざるなり。吾人は自然におのが生活を明白に整頓せんことを望む。室內生活と室外生活と混雜し、快樂的方面と事務的方面と區別なきが如き、文書机上に帽子あり外套あり、遊戲室內に鋸あり鉄槌あるが如きは、その調和を破るの甚しき、猶ほ美しき音樂中に

耳障りなる雜音を挾むが如くならん。されば、審美的に秩序の觀念を養成すること、審美的聽覺を養成するが如くならしめよ。然る時は、秩序は美的生活の一表現となり、秩序を欠く所には調和を欠き快樂を欠くに至るべし。道德的事物を審美的に考ふるものは福なり、彼は審美的眼孔を以て之を觀るが爲に、嚴格なる義務の要求に對しても尙ほ嬉々然たるを得るなり。

(十三)

倫理が審美に負ふ所尙一あり、何ぞや、倫理が追求する標的の審美に由て供せらるゝことと是なり。吾人が善を求めおのが生活を道德的ならしめんと力むるや、吾人は是非共その腦中に終極に到達すべき標的を描かざるべからず。たとへば、吾人が勉學を始めんとするや、必ずや智識の全体を得んことを理想す。然らば吾人は何事も知らざる所なき學者たるを預期するか。否な決して然らず、吾人は智識の階段を一段づゝ上る毎に、山上又た山あるの感を抱かずんばあらず。吾人は決してその終極に達することなし。而かも智識の終極を理想することなしに、吾人は勉學に從事し能はざるなり。而してこの完全なる智識は、要するに審美的標準に非ずや。余は善人たらんことを望む、即ち完全なる品格を有せんことを求む。而して此の完全なる品格の理想は、我が身を圓滿完全なる美体と

なすことに外ならず。實際上余は斯かる圓滿完全の域に達し難きを知る。而かも余はおのが努力の標的として之を我が腦中に描かざるべからず。而して道德的生活に斯くも必要なるこの標的は、その實審美界の產物に非ずや。

爰に人の陷り易き二個の相反對せる危險あり。吾人は前に美の謳歌者が必しも嚴格なる道德家に非ざるを言へり。世人は屢之れが原因を以て、美術家の肉感が活動に過ぐることゝ、彼等が實際を離れたる世界に住することにありとなす。余も是等の方面に於て危險あるを疑ふものに非ず。而かも他に深き理由のあるあり。美の謳歌者は取も直さず完成せる結果の愛好者なり。而して完成せる結果は到底道德界に見らるべくもあらず。故に若し完成てふ事が非常に珍重さるゝならば、吾人は之を大なるもの根本的なるものに求めず、是非共之を小なるもの皮相的なる者に求めざるべからず。此處に美術家氣質てふ危險のあるなり。之れに反して、他の危險は審美心の薄弱より來る。審美感の薄弱なる人は、義務に際限なく、品格に完成なく、社會に對する服役に終極なきを熟知す。斯かる人士は、奴隷の如くに人生を經過し、斷へず強迫的催促の下にあるなり。美は彼等に與ふるに安息を以てせざるべからず。然るに、容易く美を看取する人は、到る所に小なる完全を見出し、爰におのが斷へず求めつゝある理想の前兆

を捉へ得べしと雖も。美を看取するに鈍き人は、之なきが爲に到底艱苦多き人生に堪へ能はざるなり。

（十四）

吾人は今、美に關して旣に學びたる所を概括し、且つ之と法律を硏究せし結果とを比較し得べし。法律はペルソンを見ること餘り客觀的に過ぎ、單に彼が他人に關係する點のみを觀察し、重に彼が彼等を害せざらんことを目的とす、故に彼の價値を量るに、彼一身の關係を以てせず、却て彼が隣人に對する關係を以てす。斯くペルソンを觀るの法は、人生の或る方面に於ては必要なりと雖も、之を以て道德的ペルソンを量るは極めて不適當なり。されば余は之を客觀的に過ぐと言へり。斯くて吾人は、尙一層倫理的見地に近かんが爲に、主觀的なる美術に行きたるが、美術に於ける困難と法律に於ける困難とは正反對なり。美術の方面よりすれば、吾人がペルソンを量るや、單に彼一身の關係のみを以てして、彼がそれ以上に關係する所を顧みざるなり。故に審美的見地は、倫理界に應用するに餘り主觀的に過ぐ。如何となれば、倫理的ペルソンは、美術の如く自身に價値を有すべきものなると同時に、彼は又た法律が要求する如く他人に對する關係を全ふすべきものなればなり。

されば、吾人の要する所は、その中に法律的見地をも審美的見地をも含みながらも、而かも法律と異なり又た美術と異なる區域にあるなり。倫理のペルソンを判斷するや、主觀的なると共に客觀的なり、美術的なると同時に法律的なり。然らば人生何れの方面にか、人の價値を主觀的にも又た客觀的にも秤量するものありや。多分吾人は尚一の方面を擧げ得べし。吾人は前に、美は常に有限的なれども、善は有限的言辭に由りて現はされざるべきを見たり。吾人が將に擧ぐべき新方面は、單に主觀的に價値を有すると共に客觀的價値を有するのみならず、又た不斷の生長をなし永遠の域に向つて發展する、無限の價値を有するものを示さゞるべからず。

以上の諸條件が明白に了解さるゝ上は、そが唯一の世界即ち宗教界に於てのみ全ふさるべきこと、智者を待たずして知るべきなり。

（完）



雑録

フイリップス、ブルックスの不朽の感化

ボストン市三一教會牧師
神學博士　ウインチエスタ、ドナルド

フイリップス、ブルックスの說敎集第七卷、大齋第四主日の說敎中左の語あり。『諸子が自己の現生涯に對する不滿により。高き道念に對する渴仰により、諸子が神に負ふ責任により、キリストの言ひがたき愛により、予が耳より耳につきて一々諸子に語るが如く切に訴ふるところは、諸子が此大齋中必ず罪を懺悔して神の赦免を得、而してイエスキリストの恩を感謝する僕とならんこと也』。

思ふに會衆席を占むる個人に就き、一人一人に向ひて親しく奬勵をなすらしく聞ゆる語を用ひて說敎するが如きは、通常說敎者の敢てせざるところなり。克く之をなして而かも聽衆より、『足下は無禮なり、個人的に予に說かば必ず予を說伏すべしと獨斷するものにあらずや』との、無言の抗議を受けざるものは、唯だ一種の特別なる力を有しながら自分にては之を知らざる人に限る、監督ブルックスは實に此る抗議より安全なる人なりき。吾人は彼の說敎を聽きし者の中、眞に彼が腰掛より腰掛に來りて直接己れに敎へ、其內に燃ゆる靈火の幾分を頒ち與へんことを願ひしもの少からざるべきを疑はず。ブルックスの人格には自ら一種の力ありて、苟くも人之に接せば人必ず之を感じ、而かも本人は大概之を覺えざるなり。此力たるや解剖すべからず、吾人が之について言ひ得るところは、彼は此活力を有し之を揮ひたりと謂ふに止まるのみ。監督ブルックスの感化力を有せしは此例しなき人格に據る。出版されたる彼の說敎、書牘の詩情、見識、聖感に滿つるは言ふも愚かながら、

之を讀みたるのみにて、其說敎するを聞かぬ人には、其說敎を聽き其人を知りし人が受くる程の感銘は到底受け難きなり、該監督の思想の特質を知らず、個人及び敎會に關する見解に於て該監督と意相通せざるの徒はいふも更らなり、彼と意見を多く異にし、其二三の所行を慨するの人すらも、齊しく彼を預言者として仰ぎぬ。予は彼と神學說及び敎會論に於て正反對なりと熱心に主張しながら、同じ口を以て彼の爲に人生問題の解釋を得て、深く感謝すと告白する人あるを實際に見たり。之れ實に彼の人格の偉大なる所にして、反抗の情を融解して心靈上の歸服を得るの力ありき。已に此る人格を具へ、而して之に加ふるに想像、解剖の巧妙、偶然に似ながら實は注意深き觀察を以てし、尙ほ之に足すに豐美なる著作を以てす。其感化の不朽ならざらんとするも得んや。

監督ブルックスの感化は、實に不朽なる也。彼の生前少數の人ありて、單に彼の偉大なる能力の運轉を以て喜とし、彼の靈に燃えし心靈的大目的をば敬して遠ざけ、たゞ彼の詩に現れし火の如き熱心その文學の妙味、その眞正なる雄辨の燦爛を傍觀し、わが胸裏に一時湧き出でたる激しき感情を以て滿足せり。一旦この感情の去るや、其人依然として變ぜしところなし。監督ブルックスは其職事せし衆人のうちに此種の人あるを詳かに知れり、彼れは幻想家にあらざれば。

然れども幾多彼の說敎を聞かんとて群がり來れる人々の多數は、彼の聲を聞て、高尙なる生涯を萬事に認め、而して此幻を品性に現實せんとの望を起せしのみならず、之を成遂するの實力を自ら有すとの感を抱くに至らぬはなかりき。彼は永へに人の生涯を變化なしぬ。『行け、キリスト汝に、汝が爲り得べしと示し給へる尤も善き人となれ』と、或日曜日の午後彼はウエスト

ミンスターの聖マーガレツト教會の説教壇より叫べり。而して其時まで幾度か此る奨勵を聞きて心動かざりしオツクスフォルドの一上級生は、『その最もよき人』とならんと決心して、其日該教會よりロンドン市人馬絡繹の巷に出でぬ。十年の後彼は予に此一語實に我が生涯を一變せしことを告げぬ。彼は言へり、此種の語幾度か耳にしたり、されどブルツクスの唇より出るや、實に命令の如く響き渡り、敢て之に背き得ざりきと。

予は信ず、此英國青年の經驗は、又幾百米國青年の經驗なるべしと。兎も角、今日、中年の人にして眞面目に予に告ぐるに、彼等一たび監督ブルツクスと語を交へたることなきも、日曜日の午後三一教會の薄暗き隅に座して、監督の説教を聽くとき、彼の人格の不可思議力により、先づ義の生涯を送らんと立志し、次で然かせんとの決心を有するに至りたることを以てするもの、其數夥し、此る證言は、彼の訃音人心を激動したる當時に與へられずして、感謝、信服の情靜かに而かも強く流るゝ近時に發せられたるなり。彼の大なる所以は其美はしき行爲、宏量なる言辭よりも、寧ろ左の如き事業、感化の點に存すること多し。

彼が牧會事業に於て、其盡す勞力に無類なる結果を生ずるを得たるは、此非凡なる人格の力によれり。率爾に走りがきせし數行の文字も、克く勇氣、希望、喜樂を鼓吹し得たり。親愛の情温かに先方の事情を明察して與へたる簡單迅速の挨拶も、其を彼より受けし人は、此人に了解され、愛せられたりと感じたるのみにて心爽かに幾年となく之を思ひて樂とはなすなり。

彼が殆んど知りもせぬ人に贈りし短かき書牘を、過る十年間幾人か予に示せる其都度皆曰へり『予が失望するか、心憂に沈むかの時は、此手紙を取り出して之を讀むに、讀めば何時しか

勇氣回り來るなれ。全世界を得ても之には更へじ』と。かく言ふ時の感謝の口調は、實にも美はし。信者の宅に一度の訪問をなせしを、今に至るまで家族一同昨日の如く新たなる記憶を以て感謝するを見る。彼は一筆を以て、又は數語を添へたる一握手を以て、彼に劣れる人物が多年營々として纔に成し得るところを成し得たり。されば他の人が牧會上非常の注意と時間とを費して、而かも時には此くしながら冷淡なる牧師なりとの苦情を受くるに、彼は其半分の注意と時間とを費して、信者の大牧師となり仰せぬ。たゞ半時間、チャペル又は牧師舘にて彼と談話せしばかりの人も、自ら彼の親友を以て任じ、彼に對する隨喜の念一入なるものあり。其質の一種海の如く濶き心、直接にして温き同情、眞面目の心より彼に求むる人の心狀、その無言の感謝に對する非凡の洞察力、凡そ之等天禀の伎量は、人をして彼を訪問せしことを忘れざらしめ、又その感化を永へならしめたり。

十年の後、彼の教會員が彼に對する愛は、毫も減せず。その絶大なる心靈上の感化も、些かたりとも衰ふることなきのみならず、生前彼れが其信仰及び其思想を淨化形成せし人に對する感化は、年と共に增すものありといふも不可なけん。彼れ逝きてより新しき問題は起り來りぬ。而して彼の門弟が之を解釋せんとて、彼の說教中に豊かに現れたる處生の要義に一に信賴して疑ふことなきは、興味あることゝ謂ふべし。『今より後一世紀間、世は變りゆくべし、變りゆく其世にも、ブルックスがキリスト教について語りしとは、百年の間變るべくも覺えず。予はベーコンの論文を讀むと同じく、ブルックスの說教の早く世に出でしものを讀む。ブルックスも、ベーコンも、永く活きて世々の人に語る人物なり。何れも時世後れすることなし。二人ながら朽ちせぬ人なりけり』と言へる者あるが、此讚辭眞理な

しとせず。

三一敎會の扉は、日每に開かれ居れり。一年のうち之を訪ふもの幾人といふを知らず。而して是等の人々のうち、此大說敎家の半身像の下に覺えず知らず足運ばぬは稀れなり。されば堂內に入るとき、或一人、時としては一小群が、此像の下に佇みながら、感謝の念、敬愛の情、ともに面に形はれて『信仰と聖靈に滿ちたる』此偉人の俤を仰がぬを視たる例はなかりける。

フィリップス、ブルックスの主想

ボストン市エムマヌエル敎會牧師
神學博士　レートン、パークス

敎授アレンの紀念碑的傳紀の成りし上は、フィリップス、ブルックスの主想を述べんとするも詮なき業なり。該書の中に彼の心情、思想の秘義は殆んど啓示せられぬ。予の業は遙かに規模を小にす。予は嘗て聞きしことある彼の三說敎を執り、其中に彼の說敎の根本として存せりと思はるゝ二三の主想を示さんとは企つるなり。

予は一八七二年、始めてニッヨック聖三一敎會に於て彼の說敎を聞きたり。說敎の題は『汝等丈夫の如くなれ』といふ語にてありき。吾人々間は、いづれも自己を實現せんと欲し、現在の自己よりも異れるものとなしたしとの希願を有せざるもの無しと、會衆は注意されたり。小兒が『大人』となりたしとの希望は、死ぬまで亡びず。然れども所謂大人とは何ぞや。小兒は某の英雄を以て嚮導となし、之と肩を比べんと努む。恐くは此英雄、單に膂力の强大、活潑なる所のものなるべし。吾人は此れ以上の志を立てぬものを丈夫の如くなりたりと言ひ得べきか、市に青年は滿ち、其至願は富を積むに在り。富まんとし、私慾を滿さんと願ひ、品性なくして勢力を振はんことを思ひ、尊敬なくして感化を有せんと希ひ、責任なくして富貴を慕ふ、是れ果して人ら

しくあるとの意味なるべきか。説教者は此く説き來り別に團体的の例証を擧げざりしが、其必要は固より無かりしなり。蓋は此時は未だ公盗團体がニューヨーク市を暴らさゞる以前にして、ジェー、グールド及びジム、フスクなどいふ私盗全盛の時代なりければなり。

かくて説教者は、先づ主我、獨修、所謂『律法を知らぬ』を蔑視する單純なる學者を斥け、人民の僕なりと稱しながら、自利を營まんが爲めに之に利用する政治家を除き、唯人を惠むのみにて眞の救助は人をして自から人とならしむるに在るを知らぬ皮相の慈善家を咎め、さて問ひけるは、若し是等の事にして眞に人といふべきものを成すにあらずとせば、パウロの言は果して那邊に在りや。何人を人らしき眞の人の模標と考へしものなるや。言ふまでも無しイエス、キリスト是れなり。

當今、殊にボストン市に於ては、當時此く必然に達したる右の結論が如何に人心を刺擊したるかを想像するは難し。予は其當時まで、イエス、キリストを人と稱したるを聞きしことなかりき。是れ當時幾多正統神學に養はれたる者の實驗なりき。予は人の子といふことを耳にせぬにはあらざりき。然れども神學上の語を以て言はんに、識らず知らずドケテ説（キリスト人性假觀説）の暗蔭裡に徘徊し、イエスの生涯を空漠に感じたりしなり。彼は『人として』此く爲したり『神として』此く行へりなど言ひ馴れしに、今や予はキリスト、イエスといふ人につきて聞けり。其友情、其美質、其勇氣、其品位といふとを耳にせり。彼の本性の榮光は其惡を斥けて善を執る意志の中に現はされたり。人とは神に充ちたる者にして、其言動悉く神を啓示するものを言ふ。されば人となるとは、或は身躰、或は智力、或は實業、或は政治といふ如く、各一方面に偏したる者となるといふにあらずして、

各人は力量に率ひて、充分の人となるといふ義なりと說敎者は說き及ぼしたり。

集りし多數の聽衆は、肅然として敎會を出でたり。人生の嚴かなるを感じ、神の道（コトバ）おのれに肉を取りて人間界に生れ、我等其『父の獨生子の榮光にして恩と眞とにて滿てる』を見たれば、神は我等にも榮光を充たさんと欲し給ふ譯にして、各自その生涯を高ふせんとの希望勃々として湧出するを感じたりき。インカーネーションは人性の眞相を啓示したりとは、ブルックスの主想の一なりしと信ぜらる。

予が聞きたる第二の說敎は此も亦ニューヨーク市にして、彼の弟マーサ、ブルックスの牧する降生敎會に於てなりき。此は降臨節中の或日曜日の午後なりき。題は『されば心せよ、汝等何の日何の時人の子の來るかを知らざればなり』といふ一句にてありしなり。予は死に關して談ずるならんと思ひしに、其主意は、『人生興味の無盡藏』といふなりけり。

キリストの末日降臨は、愛すべき現生を全滅すべき大慘事にあらずして、無數の樂しき實驗の絕頂に達する者とこそ解すべきなれ。人生の興味は喫驚に存すればなり。人或は其過去の生涯を繰返へすに堪えずといふ。されど此は其生涯が厭ふべき實驗なりしといふにあらずして、案外の出來事といふもの全く絕無なる生涯を送らんとする意なしとの義なり。吉凶禍福何れにせよ、人の意想外の事件を悉く人生より除き去りて見よ。如何に味氣なき浮世なるらん。天に未知の事なしとせよ。豈に嘆息すべきにあらずや、人の子の降臨とは、地に於る妙へに豊かなる喫驚の絕頂にして、天に於る測りがたき新なる喫驚の端緒なり。かくてこそ永遠は興味盡きず津々たるなれ。

說敎者は夫より幾多の例証を擧げたり。學術、技藝、文學、商業、勉學、活動、一々指摘枚擧

され、而して之を樂しむ所以は、大なる預期にありと論ぜられぬ。三十年後の今日といへども予は左の一例證を昨日聽きたる如くに記臆す。『人は或は學術、或は技藝などゝ標札打つたる時間の廊架を逍遙すること宛ながら美術舘を徘徊するが如し。自ら廊架の極を見渡し得たりと思ひつゝ進むうち、不圖左右を見れば室の扉は開けて新しき美、珍らしき趣味ある事物現はれ來るなり』と。若し人生を沒趣味なりと觀ずる人あらんか。そは其人『心せ』ざればなり。大なる預期の精神を以て生活せざれば也。議論玆に盡きなば『人生の快樂』に關する絕類の講話として了るべく、聽衆は樂天論が常に與ふる一種の快感を起すだけにして止むのみならん。或は其反動をも實驗するに至りしならん。然れどブルックスのは講話にあらずして說敎なりしなり。以上は唯緖言にてありき。人生の興味果して吾人が新奇案外に事物を觀るに在りとせんか。今若し此世を神が自己を愈々加々人に啓示したまふ場所と解したらんには、人生の興味は果して如何ばかり添ふらん。多少神を知れる爲め、いかに生涯の高ふせらるゝかは吾人各自の悟れるところ、而してイエスの吾人に告ぐるところは正に是れなり。卽ち神は常に其力と惠とを彌增しに啓示して以て我等に近き給ふといふに在り。

此啓示が人生、殊に心靈的生涯に趣味を增すと幾許ぞや。請ふ、人をして神と心靈との親交は、盡くるところありと考ふるを休めしめよ。又未來は過去の繰返に過ぎずと觀ずるを休めしめよ。『心せよ』。熱心に待ち望みつゝ生涯せよ。『そは何の日、何の時、人の子來るかを知らざればなり』云々。

憸かに說敎者は、此語のうちに其偉大なる小兒らしき心靈の秘密を漏らしつゝありしものなり。

予の語らんとする最後の說敎は、大齋中彼の牧せし三一敎會にて聽きしところなり。題は『ペテロ答へて曰ひけるは主よ若し汝ならば我に命じて水を歩みて主の許に到らしめ給へ。主曰ひけるは來れ』なりき。題詞を讀むや、暫時彼は無言なりき。聽衆に語意を考へしめんとにや。やがて我等は此語を說敎者が解したる意味如何を發見せり。其意味とは『奮勵的生涯の快樂』といふにありき。

彼は事務といふ事に就きて語り、其平凡無味なるを說き、次に成し難きことを成さんと望みて之を成し得たる人のことを辨じたり。發見家、技師、大實業家にして凡常事の安全を滿足せずして、運命に呼つて曰く『我をして水を歩みて汝に到らしめよ』と。而して運命は曰へり『來れ』と。吾人日常の實驗に徵せよ。吾人病に罹る、無事の時知りたるイエスは今や此悲むべき實驗の海の上に偶然幽靈の如くに見ゆ。そも此際吾人は如何にすべきか。此實驗を以て不幸と見做さで、大なる機會とこそ認むべきなれ。若しイエスが影の如く漠然たる『幽靈』ならざることを確認せんと欲せば『主よ若し汝ならば我に命じて汝の許に行かしめ給へ』といふ冒險の大精神を發揮してこそ之を能くすべきなり。疾病、誘惑、艱難、辛苦に際して、彼が我等に一見成し難きを成せと命じ、而て我等の迚も踰ゆべからざる障碍と見えし水火を蹈みてこそ、始めて彼を知り得べけれ。吾人若し神力を用ることを忘れざらんには、神が啓示し給ひし至高の生涯と、吾人を隔て得るものあるべからず。ブルックスにとりては、奮勵の生涯とは、心靈上の實驗、即ち理想に達せんと企つることにてありしなり。

予が右の三箇の說敎を擇みしは、前にも述べし如く、其始めて聞きし彼の說敎なると、今一つには、後に至りて出版されし彼の說敎中に繰返されたる彼の主想の三ヶ條を例証するが故な

り。所謂三ヶ條の主想とは、曰く神の子として人の品位。曰く人生に興味を有するは啓示の媒介なる事。曰く人生の困難は信仰の深さと眞實を試驗するの機會なる事、之れなり。

然り而して此等の思想は、深遠なる神學上の原則に基を据ゑたり、彼の神學に於ける關係は畫家の解剖に於るが如し。ラファエル前の畫家は骨骼關節を時には間違ひながらに畫きたり。人体の組織を熟知するものにして始めて能く骨節の工合を畫くを得べし。ブルックスは眞の畫家なりき。されば其畫きし人物は何れも『生きて呼吸し思考する人間』なりしなり。神學と混合せる形而上學の問題につきて彼は知らぬにあらねど、智力上の概念は神學上單に一元素に過ぎざるを熟知せり。彼は又ヒステリーと宗教と混淆する一種の憂欝なる心理學と神學とを同一視するの愚をもなさゞりき。神學と論理を混ずるも彼の爲さぬところなりき。嘗てマシウ、アーノルドが『行爲は人生の四分の三』なりと云ひしを引き、評して曰く『然ありとも其を如何ん。殘り四分の一は何物なりや、機關車の四分の三は鋼鉄なるが、其れにて機關車の定義を完したるや』と。所謂殘りの四分の一こそ、イエスの啓示したまへるものなれ。即ち人は其本質に於て神性を享けたるものなりといふことなり。彼は自ら己に於て此事の眞なるを知れるが故に、吾人に此信仰につきて確認を與ふることを得たりしなり。吾人は聖靈、即ち、個人と交り給ふ神が吾人を鼓吹し給ふが故に、かく信じ難き啓示をも信じあたふなり。歷史上キリストに於て現はされたるところと、個人々々の實驗とよりして、吾人は進で、父として神を知るには至るなりけり。

ブルックスの神學の中心となりしものは三位一体說なりき。但し其は敎會の信仰としてにもあらず。又哲學上の思辨にもあらずして、各人

の心靈に於ける最深の實驗を表するもの、即ち救拯の福音としてなりしなり。正に彼が三位一体主日の說敎に曰へる如し。『三位一体の敎理は他の眞理と關係なく孤立せる者にあらず。然か考ふるほど不可なるはなし。吾人は日々三位一体を說きつゝあるに非ずや。神の父性を說くは神の神性を說くもの。キリストを完全なる贖主といふは神的敎贖主といふに外ならず。慰籍主なる聖靈の聲を聽き、その聲に從はんことを人に奬むるは、亦此く慰を予ふるものを神的のものとして說くならずや。父、子、聖靈の神性、これぞ吾人の福音なりける。此福音によりて吾人は救主を望むなり。三位一体の眞理は時として特別なる講話の題とするも可なり。たゞ忘るべからざるは、此眞理たる、講話せんが爲に予へられずして、よりて以て生涯せんが爲に授けられたる者たるとなり。譬へば望遠鏡の如し、其貴きは其構造の巧妙なるにあらずして、用ひて大空を觀測し、星雲を分解して億万大世界を現し來るにあり。敎理の齊整、內部の調和の故に之を貴び、其實用の爲に然かせざる風あるは、古今の習ひなるが、此は機關車を作りて硝子室の中に安置し、之を鐵道の上に運轉せざるに等し。機關車が鐵路の上に於て實用ありや否やこそ、吾人が玻璃室內に置たる其ものを尊重すべきや否やといふ問題を決する所以なれ。三位一体につきて語り且つ考ふるに方り、此一事は束の間も忘るべからざるものとす』。

フィリップス、ブルックスの品性に於ける模倣し得べき點

牧師　エフ、ビー、アレン

予は三一敎會の補助敎職として、フィリップス、ブルックスと九年間親密に交るの幸を得たり。彼は親しき者に偉人と見ゆる人なしといふ常則に

逸して、尤も彼に親しき者をして尤も其崇高なる智德に敬服せしめたりき。

然れども吾人は彼が單に非凡の辯才及心靈上の見識を具へたるが故に傑出せりとのみ思ふべからず。吾人は彼がたゞ絕代の天才を有したるを追想するを喜ばずして、其偉能を用ふるに比ひなく忠實なりしこと、其他吾人の摸範となり、鼓吹となり得べき性格ありしことを記臆するを樂しむものなり。

倣ひ得べき彼の性格中予は先づ彼の職責に忠なりしことを擧げんと欲す。世或は彼には努力苦慮するの要なかりしと思ふ人あらん。彼の天性發言の容易なる、說話するは寧ろ其樂むところなりき。輙く思想を吸收し、其心裡に運轉し、やがて斬新奇警なる結構をなして之を吐き出すの才あれば、他人の如く孜々汲々の勞なくして効を収め得たり。其豐富なる天賦は悠々閑散の生涯に誘ふこと切なりき。然るに彼は却て其絕倫の禀有を基として一層廣大複雜の事業に身を投じぬ。彼の如く絕間なく、骨惜みせず働きしものはなかりき。儼然として懶惰無爲を蔑視せる彼は、些事と雖も全力を傾けずんば安からぬ思をなせり。

此點は彼が筆を執りて知己、未知、名士、小兒、救助者及救助を乞ふ者に幾通となく書簡を贈りしにて偶然知らる。彼が山積せる書狀の征伐を行はんとするや。眼前に時計を置きながら迅速熱急、筆を飛ばすこと駿馬の走るが如し。彼の時計は拍車となりき。嘗て笑て予に語りしとあり『書簡を草するには三分間にて足れり』と。左ればとて此く草せし書簡にも絕ゑて草卒不注意の跡方なし。彼が通信を輕んじたる例とてはあらず。純然たる事務上の通信にも彼は必ず或る懇切友誼の辭を書き添へて、之を精神と精神との接觸點とはなせり。彼は生涯『はがき』を用ひたることなしと屢々語れり、本分を怠り、

謹愼を欠くと思へばなり。此くまでの勞苦も曾に喜んで之を負ひしのみならず、實に愉々快々樂事として之に服せり。彼は働くを喜べり。『職分の特權』とは數々彼の唇頭に上りし語なりき。予は記臆す、彼は日曜日に三度說教して其翌日の月曜日常務を執らんとて席に就きしかば、『君には疲れたりと感ずることはなきや』と問ひしに、彼は滑稽なる微笑を漏らしつゝ『予も時には慵く思ふことあり』と云へりしを。

次に倣ひ得べき彼の性格は其實直なり。彼は曖昧不明の陳述を忍ぶ能はざりき。人漠然たる言を以て彼に語り初むるや、彼は疑問を電發して以て其語の外皮を貫き、其求むる根底の眞理に達する迄休むことなかりき。嘗て大齋中彼は如何なる塲合にも、虛言は非なりと說敎せしに、端なく議論を惹起せり。或は生命を救ふか、非常無比の利害の關する塲合には虛言は小なる惡なりとの說を執るものもありしが、彼は頑として自說を固執して讓らざりき。彼が事實に忠にして、物の有の儘を重んじ、耳觸りよき獨斷自定を斥けしは何人も認むるところなり。

成程人が避けて實を語らざらんとの誘惑を感ずるやうの塲合に於て、ブルックスの銳敏にして辨別の才ある、他人に在りては人の感情を害せずしては言ひかねることをも、婉曲に語り得たるに相違なし。左れど此辨別こそは即ち其眞實なる所以なりき。彼の實直とは言語の精密以上のものにして、心意の正直にてありき。再言せば物の有の儘を知らでは滿足せぬといふ性質のものにてありしなり。

外國漫遊中予に贈りし書簡の中に彼は言へり『聖書に新しき光明の投射されたるを認めず、明確の証據にて幾たびか論破されたる說を頑然として繰返す者あり。此かる不正直の人の與ふる害は實に大なり。後年公會が顧みて非議し且つ殆んど唾棄するの人ありとせば、即ち此種の

人なり』と。

ブルックスの他の特質は貴賤上下の區別なく万人齊しく之を重んぜるに在りき。人は神の子なりとは抽象の思想にあらずして、實に彼が日常交際の元則なりしなり。其青年と交るに於ては殊に然り。彼は青年に囑望すること頗る深く、或は其中自分の希望せし丈け發達せざりしものありと白状せぬにはあらざりしかど、苟くも來りて其教訓を請ふ青年あらば、如何に微賤のものにも其豊富なる智識經驗を惜みなく費せり。

一事の彼が爲し肯んぜざるものありき。其は世の牧師の往々切望するものながら、彼は斷然之を拒めり。其を何ぞといふに、他人の良心上の問題の裁決者となることなり。幾度となく此種の疑問は彼に提供せられ、彼もし唯だ一言を發せば最後の判斷として之を遵奉せしならんに、彼は決して此く爲すを諾せず。『其は神と協議し玉へかし。神の許に提出あるべし。神の光明嚮導を仰ぎ玉へ』とは彼の答ふるところなりき。

蓋し此く他人の良心問題について命令者の位置に立つを忌みしは、畢竟人の心靈力を信ずるに基けり。人は皆神と直接に心靈上の交を爲し、神に教導せられ得べきものなれば、己れ其仲間に入りて心内の苦闘を妨げ、心靈が神と相對面し、聖靈の指導に從ふに至るを害し肯んぜざりしなり。

彼は他人の獨立を重んぜしかば、事を共にするには此上なき愉快の人にてありき。彼は其補助者にまで問題を如何に解釋すべきかにつきて明細の命令を下すことなし。或は大體の元則を授くることもありしが、之に加へて此く言へり、『予は寧ろ兄が自ら考ふる通りされんことを望む。監督教會には種々の特色あるを要す。兄が認めてよしとするあらば予は其れにて滿足なり』と。

ブルックスは感情的說敎家なりしと、或は誹謗の意味に於て言ふものあり。成程彼は胸裡に万斛の情潮を洶湧せしむるの力に於て當代に傑出せしは言迄もなし。然れども彼は堂々と男らしく丢かなせり。彼は自ら深く感じ、他人にも感ぜしめんと欲する大眞理を人心に突き込みしなり。しかして彼は人をして義務本分を感ぜしめんが爲めの刺擊としてしかなせり。彼れの感情汨々として奔馳せる際にも束の間も眞理と正義とに忠なるべきを忘れず。自制といふ鉄壁の內に感情の大流を制せざるはなかりき。

彼は忌憚なき人なりき。卑劣若くは不義と戰ふを樂しむに於ては軍人の本領を具へたりと謂ふべし。嘗て予に語るらく、剛毅の人に取りては世の風潮に漂はずして之に反抗し、主義の爲め奮闘しつゝありと自ら感ずるほど樂しきはなしと。旣に此勇敢、有識にして剛毅なる人物吾人の眼前に在り。誰かキリストの宗敎を卑怯といひ、男らしくなしといひ得るものぞ。

彼が基督敎の大原理を信ずるの深く且つ厚きも亦た注意すべき點なり。卑怯なる智力に限り或る可視的標號又は權威を渴望する者にして、或は不謬の書册、或は不謬敎會、不謬法王、不謬の多數などいひ、神靈が人心に語り玉ふ自明の證據以外の者のみを求むるが常なり。フィリップス、ブルックスが福音の眞理の本性上より之を信ずるの深く且つ强かりしは、類ひなき高尙の態度なりき。疑惑といふものが之を歡迎せぬ家の戶を叩き、臆病の靈が神的、超自然的を確信し得まじと氣遣ふ時代に於て、彼の神的事物に於ける大確信の凱旋の喇叭は、恐慌の產兒たる不信仰を一掃し去れり。彼の常に說きしところは基督敎の無上の證據はイエスの人格なりといふに在り。若し神の啓示を信ぜず、奇跡を疑ひ、靈魂不滅を承認し得ずといはば彼は言へり、此かる人は證論の力を解せざるものなり。彼等は

イエスの本性が供する大證據に目を閉づるものなり。彼こそは萬世の無上奇跡なり。萬口一談少くとも彼を心靈的大天才と告白するにあらずや。予は彼が自ら人に教へしことを確知せしと信ず。予は予の永遠の運命を彼の語に托するを肯んず。若し彼れ、我父の家には邸第多しといへば、予は靈魂不滅を信ずと。

心靈の暗示に快く從ひ、秋毫も疑はずして神に信頼せると斯くまで篤き彼に取りて、眞理の副署ともいふべき外部の權威を要せざりしは言迄もなし。成長しつゝある喬木に人爲の支柱を要せざるが如し。信仰によりて彼は神と倶に歩めり。神的世界は物質世界と同じく彼に實在と感ぜられぬ。彼は躬親ら永遠の事物を知り、義を悟り、不滅を確認し、以て人間に語りたり。

靈の人としてのフィリップスブルックス

ボストン市オールド、サウス教會
牧師　ジョージ、エ、ゴードン

偉人フィリップス、ブルックス逝きてより早くも十年の星霜は來去し了んぬ。誰一人彼を知らぬ者なく、彼の名の海より海に轟き渡りし國に於て、世移り、物變り、今や終に彼を描き示さゞるを得ざる時の來りしこそ不思議なれ。さればとて彼を描き出し得て遺憾なき人とてはあるまじ。吾人は彼の巍乎たる風丰、高尚なる頭、「默禱の家」たる大にして美しき眼、類ひ稀なる親切深き顏、其魁偉なる軀幹を鼓舞淨化せる崇高なる心靈を追想し、又彼が途上悠々自適するにも、行旅に感せる新興味にも、家庭に於ける談笑にも、說教壇より奔飛せる雄辯にも、永へに神につきて語りたることを回顧せざるを得ず。吾人は皆之を追懷す、然れども此驚嘆すべき偉人の

温和なる元氣、有力なる同情、豊かなる美、言ひがたきの魔力に至りては、到底何人と雖もよく描寫し得るところにあらず。

英國ケムブリッヂ三一大學の有名なる前の敎授博士タムソン、かのモリスの大學說敎を聽きたる後の所感を述べて曰く「彼の人には一種の神的感情若くは神憑といふべきものあり」と。予を以て觀れば、ブルックスの秘密は玆に在り。月日の移り行きて、いよ／＼公平に彼を判斷し得るに至りて考ふれば考ふる程、彼が傑出するところは此神的感情、超自然の天稟にありと覺ゆ、智力界に於ては彼に優りて考察の深遠なる思想家はありたり。名を竹帛に垂れたる世界の碩學を解するに於て、彼よりも識の廣く且豊かなるものは之れありたり。敎師として考へんに、人的側面より言へばチャニング彼に優り、神的側面より言へばビーチャー其右に出で、何れの方面よりしても彼はブシチルと比肩しがたし。然り而して具眼の士は何人たりとも、神學者として彼をモリス若くはマーチノーの列に置くものあらざるべし。然れども彼の特長より言はんか、彼は實に此等諸大家の上に位するものなり。モリスは神情を具へたり、されど滿々として溢るゝばかりに之を有することブルックスの若くにはあらざりき。心靈的の人として觀るときは彼の若き人あることなく、彼に近き得るもの一人もなし。

此心靈的なることこそ實に彼れの抱きし敎會觀の中心なりき。彼の眼を以てかの憐れむべき偏狹なる宗派論者を見れば、恰かも其人は「隣人の田畑よりも自己の方肥沃ならんことを欲して雨を祈る嫉妬深き農夫の如し。然れども天は廣大にして此かゝる祈の爲め其恩惠を狹むべくもあらず。成程天は雨を降らすべしと雖も、雨は或る疇の内にのみ降ることあらざれば、此人利己的の祈禱を献げたる爲め、彼が祈りもせぬ他人の

田畑も共に茲に雨の惠に浴すなり」。此語を讀むもの誰か、彼が忍びて教派論者の眞率なる、しかし偏狹なる心靈を洞察したると、及此會衆的監督教會員の濶大なる精神を想ひ起さゞるものあらんや。彼の諧謔にも此と同一の性質見はる。

彼は曰へり、「予嘗てロンドンの店頭の窓に『柔軟祈禱（リンププレーアーズ）』といふ標札を掛けあるを見たり。此は店にて販賣せる一種特別の表紙附の祈禱書を指せしかと覺ゆ。ともかく此にて想ひ出せしは、世に思想といふ脊髓骨の缺け、我願を托せがたく、共に聲を合せて祈ること能はざる一種の祈禱あることとなりき」と。此く言ふと共に彼は說きけらく、「祈禱は天に昇るに輕る過ぎることも、重も過ぎることもあるべし」と。

彼が他の教役者に對するにも此と同一の心靈力現れたり。彼は自己の全力を盡し、自己の達し得べき最上の人物とならんと務むるを以て、尤も其兄弟を助くることゝ信じぬ。「吾人は動もすれば互に相害せざらんとのみ心掛く。此は五里霧中に在りて、互に相衝突すまじと切りに滊笛を吹鳴らす滊船にさも似たり。安全なるには相違なきも、之が爲め貿易の進む譯なきのみならず、航海術に熟鍊せるの證ともならじ」。彼が自ら教役者の務を行ふに方りても、其根本の態度は亦た其心靈的の性質を示せり。彼が此莊大にして而かも傷心的なる人世の有爲轉變の事物を通じて永遠不朽の福音を說くところ、即ち彼れが所謂「世界意識」、「時間意識」といふものを有せることは取も直さず其證とこそ見るべけれ。

若し尙此他に例證を要すといはゞ、彼れの說教學の最後の講義に之れあり。彼は其中に、自己が人間に對する職事の大動機を明示せり。然らば「戰の力」となるべき其動機は何ぞといふに、其は「人靈の價値を確認する」に在り。此かる例證を擧ぐるは果てしなき業なれ。之を要するに、吾

人はフィリップス、ブルックスは十九世紀の大なる心靈的人道家なりと斷言して決して不可なしと信ず。

エドモンド、バークはチャーレス、ジエームス、フォックスにつきて「彼は愛せられんが爲に生れたり」といへり。今之をブルックスに適用せば一層切なるを覺ゆ。彼は愛せられん爲め生れたるなり。彼は不知不識の裡に不思議なる高潔の愛を他人より博したり。彼がかれ程の慟を爲し得たるは之が爲めなりとまでも謂ひ得べき歟。好意と喜悅の潮流は常に彼に尾したり。彼の名は家每に唱へられ、彼の行爲は語り盡きせぬ題目にして、此純潔に且つ麗しき心服は測りがたき程に深かりき。此心服や人の感情に其源を發し、智性は此情の湧き出づるを敢て咎めず又尤むるを欲せざりき。古來知名の士にして人の批評を受けぬものはなけれど、フィリップス、ブルックスは尤も之を免れたる人なり。何人も彼の長短を測度し、他の偉人と公平の比較を爲し、其能力を了解限定するを欲せざりき。彼等は純潔聖感の愛を以て彼を愛せり。彼等は愛せらるべく生れたる人、無双の愛を受くるに足るの人として彼を記臆す、又何時までも此く記臆すべし。

此義の大說敎者に取りて此は實に大機會なりき。而して未だ嘗て彼の如く眞面目に、彼の如く高尙に此機會を利用せしものはなく、心服せる人の胸底に彼は其心服を通じて聖き人格の潮流を注入したり。彼は人の隨喜心服の重荷の下に戰栗せり。彼は安息を求めんとて己に來る人をして、神に賴りて安息を得るまで休まざらしめたりき。左れば人ブルックスを愛すれば自ら高尙の人とはなりぬ。さながら宗敎上の新經驗を爲すが如し。彼は一個の理想の生活を有し、自ら之を人にも告白し、又息をも繼がず、樂んで之を追求せしが、彼は他人が己に對して有する愛

により、何時しか其人をして同じく此理想を慕ふに至らしめたり。世人が此く迄に彼を愛し、彼の爲せしことを讃めそやし、其非凡の奇才をすら誇張し、其有せざりし能力をすら彼に歸する所以の果して那邊に存するかを尋るに、畢竟彼の高貴なる人格、人をして陶然醉ふが如くならしむるに存す。

彼れの智性は其靈性によりて形くられ又其勢力を受く。彼の智力の主性は美なりき。其深さも、其大小高下も美に伴ふ深さと大小高下なりき。彼の眞理を視るの眼界は他の大説教家より大なることも深きこともなく、其智力界は充分に整頓し居らず、其大なる信仰ヶ條は道理に照らして、之を明確、堅固にしてはあらざりき。只彼に取りて天の一方に雲なき晴間あり、其は直接に彼が利害を感ずる點、彼が面を向けて直進しつつある方向なりき。而して其方向に於ては、彼の有力なる、實に全世界を率ひて永遠の日の出に逢はしめんとするの趣ありき。彼の特色ある事業には美の跡を存せぬはなし。ブルツクスが神を考へ、肉を取れる永遠の語なるイエス、キリストを解し、神國及人生を思念するや、一に大美術家の立塲よりせり。曰く聖德の美、曰く思想、云爲ともに完全なる生活の榮光、此れで彼れの靈の渇仰せしところにして、又其職事の主想にてありき。

彼の品性に於ても美は其無上の賜にてありしなり。ブルツクスの靈ほど美しきものは全國中なかりける。彼に親接せる程彼はいよ〱疵なく、いよ〱義しく見へたり。彼の生涯には一種の聖化力存せり。而して其聖化力は彼の友人及彼の説教を聽かんとて來れる幾多の人の上に落ちぬ。彼の心裡には神より生れし焦心と平安、即ち神を有するより生ずる深くして感謝に充ちたる平安、いや增しに神を得たしと絕へず切に之を求むる焦心、此二者不思議に同居せり。勝利の叫

と別離の歎とは、類ひなく哀れなる彼の言語の中に相混り居たり。

彼の勢力の秘密此に在り。彼は吾人の有せざりしものを有せしが、又吾人の要するところを要せし人なり。フィリップス、ブルックスの靈は秀美、高尙、强大に、頗る人間的にして又飽までも温和なりき。人が彼を愛し、彼を讃嘆せずて叶はぬは、さながら美の在る處には之を觀れば、之を愛し、之を讃嘆せざるを得ざるにひとし。彼は實に其躰と靈に於て、其外に形はれたる云爲行動に於て、其視へざる心情思念に於て、主なる神の美、主イエス、キリストの麗を寫し出すものと謂ふべし。此美しき偉大心靈の保こそ、吾人ブルックスを知れる者が、永へに吾國人の腦裡に銘したしと願ふものにぞありける。

フィリップス、ブルックスと年少教役者

マセチユセッツ監督
ウイリヤム、ローレンス

フィリップス、ブルックスは頗る人間的なりき。彼はかの萬人を一樣に愛重し、何人とも同しく情を籠めて握手し、誰に會ひても等しき機械的の微笑を酬ゆる人々の一人にてはあらざりき。彼は自己の癖を有し、一家特別の好不好を有し、强き愛着心を具へたり。彼より年少の敎役者も、たゞ年少の敎役者なりとの理由を以てはブルックス博士の興味を博すること能はず。「如何なる種類の年少役者なりや」といふ第二の疑問は先づ答へられざるべかりしなり。

一歩を溯りて言はんに、フィリップス、ブルックスの想像は常に人生の發達に對して燃へたり。彼が青年と相接するや、青年の潛勢力に感動するの深きこと青年彼れ自身と等しかりき。彼が大

學生を見るや、己の心裡に興味を以て、否實に小説觀を以て彼を包みし所以の者一に此想像の白熱による。彼は學生を以て現代と次世とを組成する要素とは爲しぬ。さて彼が此く興味を有する學生の一人教役者たらんと決心して神學校に入るや、ブルックス博士の態度は一變せり。彼が此青年の决心に興味を有し、教役社會に一人の援兵加はりたるを感謝せしは勿論なりしかど、今や彼は此青年が單に單純、公明、誠實なるのみを以て足れりとせず、進んで彼が果して他の切要なる特質即ち深厚なる確信、發達の餘地、謙遜、謹愼、高尙なる大望を具ふるや否やを問へり。人は玆に於てブルックス博士の批評眼が活動し、彼が辨別を爲しつゝあるを感ぜざるを得ざりき。

例せば、神學生にしてブルックス博士の面前にて自滿、不正の大望、虛飾、不實を漏らすことあらんか、ブルックス博士の同情の念は直に停止すべし。其顏色の變化、緘默、冷淡の態度によりて該青年は博士の己に對する興味の門戶頓に閉ぢられたるを感ずべし。

之に反して神學生若し單純、謙遜、眞率を示さんか、其智能、將來の見込等は深くブルックス博士の問ふところにあらず。其思想、教訓、聖感力の至富、至深なる倉庫を開いて彼に供せり。此と同一態度を、現に教役に從事せるものに對しても執れり。彼等の中彼の五月蠅く感ぜるもあり、肝癪に觸れたるものあり、又深く興味を感ぜし人も少なからず。然れども一點の切言すべきことあり。もし青年教役者にして智力上の困難か、一身上の憂苦に惱みて彼に助を求むるや、よし其人に對して偏情ありとも、不快の念を抱き居るとも、其は直に消へて跡なく、其人艱難に逢ひ居るといふの故を以て、只管其困難の解釋に從事せり。是れ實に彼の美質にして自己が興味を有せざるのみならず、五月蠅く思ふ

青年教役者にすら、其時間思想を惜氣なく與へて悔ひざりき。

余は滊車中にて自負多辯の癖ある青年教役者がブルックス博士と相談れるを記臆す。此青年が滊車を下るや、彼は問へり「彼は誰ぞ」と。予其名を告げてさて問へり「彼何を爲せしや、足下彼を好まざるに似たり」と。彼は言へり「然り、過日予は彼と饗應の席に在りしが、彼は喋舌りつゞけたり、席上には彼より年長にして賢き人のありしに」と。博士ブルックスは該饗應を忘れもせず、又此青年教役者に對する偏情をも伏せ能はざりしが、此青年が自負の惡癖ありしを思へば、彼の偏情も至當のことゝ謂ふべし。但しブルックス博士は右の教役者が説教を請ふか又は其他の依頼を爲すときは一々之に應じ、其務を果すや早々辭し去りて彼と談笑することをば避けにける。

博士ブルックスが青年役者の爲め常務外の勞を執りしの多大なるは驚くの外なし。幾年となく彼は三ヶ教會に毎日曜日二度説教し、他人に依頼されては五十哩を隔つるが如き遠地の教會に第三の説教を其日曜日に爲せり。彼が説教するを樂しみしは慥かなれど、此く斷へず勵みて盡せしは、啻に己が説教するを樂しむが故のみにあらず。彼は世人が自分の説教を聞くを喜ぶを知り、己れ説教せば其兄弟教役者の助力となるをも覺れり。左れば彼は人を益せんとの心よりして此くは非常の努力と爲せしなり。

博士ブルックスが監督となる久しき以前よりして、彼は附近幾哩の間は言も更なり、通信によりて全國青年教役者の顧問とはなりき。彼が提供されたる問題を解く樣を見るは興味あるとなり。教役者が彼の勉强室に入るや、直に洒落熱心の歡迎を受け、遠慮の念頓に消へ失せ、心中を開いて其實狀を明すを得たり。若し其困難にして智力上の事ならんには、彼は鋭き興味と同

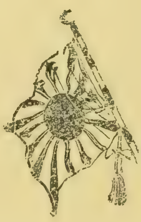
情とを以て始終を聞き了り、さて自己を問者の地位に置き、彼と共に問題の解釋に從事せり。しか言ふよりも寧ろ彼は問題に新鮮、積極の思想考察を注入し、漸次不知不識の裡に該問題の趣を一變せしむと言ふ方適當ならんか。

されば該青年は何時しか、某々の事を信ずべきや否やといふ問題を論ずるを止めて、之を信せざるの理由安くに在ると考ふるに至り、不圖中途にて心附き自ら驚くなり。彼は何處まで進みて尙ほ公會の忠良なる一會員たるを妨げざるやその不安の問を發せずして、自分の如き意見を持して果して公會內に愉快に留まり得るや否と泰然として考ふるに至る。彼は信じがたき點につきて苦慮せず、信じ得べき眞理に鼓吹されて心情燃へ、己の抱持する眞理のいかに豐富、深遠、根本的なるか、いかに之を固執するにより、其心靈上の眞意に悟入するによりて、他の問題は自ら縮小し來り、自己の立てる基礎はいかに堅牢なるかを發見するに至る。フィリップス、ブルックスの積極的智性、確信の深くして牢きこと、一切の眞理に對する心靈的態度は、よし其當座先方の承認を博し得ずとも、聖感を與ふる一種の空氣を創作せざりしことなし。

もし田舍牧師が其小教會の區々たる心配事に煩ひて來り訴ふることあらば、博士ブルックスは忍んで紛爭、偏見、懸念の一伍一什を聽き了り、さて徐ろに其人を導いて陰小なる彼の生涯より進んで教役事業の一層濶大なる思想に移らしむ。彼は教職事業の廣大なる範圍を示し、牧會生涯の中に伏在せる品性の美點を感せしむ、されば該牧師がブルックス博士の許を辭し、彼に謝して戶を出づるや、其足自ら自由にして輕く、其事業の榮光を感ずること深く且切にして歸宅するなり。一二週を經て彼は再び鎖細なる問題に心を惱ますが若きこともあらん。されど三一教會牧師館に於けるかの訪問を想ひ出で丶元氣

を回復すること、さながら砂漠の旅行者が冷泉に身心を新にせし時を懐ひ出でゝ自ら慰むるがごとし。

ブルックス博士が監督となるや其態度又一變せり。彼は自己の公會を愛し、其經歷を重んじ、其將來の希望を信じたるが故に、其監督として之が爲め自己の分を盡し、之を導いて其有する天職を成さしめんと努力しぬ。彼は監督の職を人の占め得べき最も高尚なる職と認めたり。彼は人間的なりしとはいへ公會の監督として、配下の教役者の神父としての自己の職責を充分認めたり。有り觸れたる意味に於て神父といふ尊號を重んぜりしかど、此尊號の意味をば鋭く感じ、其管內に在る教職に對して心靈上の父となり、兄とはなりぬ。如何に自負、傲慢、虛飾なる教役者たりとも、監督は之を導きて單純眞率の品性を形らしめ、一層高尚なる教職觀を抱かしむるの責任特權を其人に對して有す。左れば彼の教區內の教役者にして如何程監督ブルックスと教會上の意見を異にし、思想の性質範圍に於て相容れざるも、指導、同情、鼓吹を請へば必ず得べしと信じて彼の許に行き、之を求めて拒絶されし例とては更になし。（小林彥五郎君譯）





福音叢誌第八拾三號目次

論說

講演

雜錄

FUKUIN SŌSHI.

NUMBER 83.

APRIL, 1903.

CONTENTS.

論說

耶蘇の無罪

大博士　ロボルトソン、ニコル

ヂョン、モーレー氏は『超自然的宗敎（スーパーナチユラルヘレリヂヨン）』を評論せる一文の中に於て、耶蘇の高尙なる品性を損す可き事を擧げ得べけれども之を言ふことを好まず。との意を諷示したり。モーレー氏は何が爲に之を明言するを憚るや。氏は虞翁の傳を草するに當りて必ず翁の品性と行路に表れたる多少の不完全を摘出するに遲疑せざる可きに。モーレー氏は神（ゴッド）てふ文字の頭字にgを用ひて憚らざるほどの人なれば、人の微妙なる宗敎的情念を害すまじとの心配より此の如く控目になしたりとは思はれず。ルナンの如き絶對的冷心を重んじ之によりて眞理の微妙なる方面も又嚴刻なる方面も兩ながら觀取するを目的となすと公言したれども、基督傳を著すに當りては其中の淡泊なる語句、例へばラザロの復活の話は其の姉妹の虛搆したるものなるを基督は之を助成したりと記したる如き語句を删り去り、又

基督の妄信（フナチシズム）を說ける所をも省き去れり。彼の云ふ所によれば學者の爲には此の如き事を語るも適當なれども一般の讀者が崇拜せる人物の爲には若干の讓步を爲すは好ましきことなりと。斯くて自己の持論は依然之を變せずして且一般の嗜好に合はせ耶蘇の人物に狂妄、方便の痕跡を付することを避けたりき。然れども是の如きは畢竟眞理は神聖にして神聖は眞理なれば、如何なる風にせよ眞理を狂ぐるは終に一の害惡となることを忘れたる所爲と謂はざるべからず。然れども我等はモーレー、ルナンの諸人を責むるを好まず、我等の信ずる所によれば彼等が基督を非難するを避くる心事の根底に伏せる所のものは、若し耶蘇が凡人と等しく弱點あり汚點あることが表白せらるゝ曉には世界の光榮は消え去るべしとの杞憂に外ならざるべし。

基督に關する近代の批評を論ずるに當り多くストラウスとルナンに渉らざるを得ざる所以は、彼等が懷疑的批評家の忌避する問題をば兎に角眞面目に解釋せんと力むればなり。二人の出でてより以來批評の器に於て實際上加ふる所あらず少くとも重大なる增補なしと云ふも可なり。批評家の力量に於ても二人を凌ぐべき者出でざりき。二人以後の批評家は解剖の方法を用ひて歷史を溶解し以て信仰の根據を奪ひ去らんとするなり。彼等に向ふて『君は奪ひ去りたる所に

代えて何を與へんとするや』と問はば彼等は答ふる所あらざるなり。彼等は批評を加へて後に殘留すべき斷片を綴補して一種の基督傳を書き得べしとの意を暗示すれども、破碎したる者を再建し、褫ぎ去りたる者を再製するの事業を辭して執らざる也。然れども人類の信依を寄せたる大にして嚴肅なる目的を奪ひ去りたりとせば、之に代はるべきものを與ふる義務あるにあらずや。我等は固より彼の人々がルナン、ストラウス以外の答を與へ得べしとは信せず。此の底まで落つるまでは底止することを能はざるを信ずれども。

基督の親ら主張したる如く、使徒の證明したる如く、又教會の信じ來りたる如く、基督果して罪無きか。我等の手に現存する記錄に照らして何處に罪の痕跡を見出し得べきか。この方面より彼の品性を非難せんとする企ては全然破壞せられて今日となりては彼自身罪有ることを承認せる言を指摘せんと試むる者あり。其一例を擧ぐれば博士シュミーデルが基督の富める者に向つて『何故我を善と云ふや一人の外に善者なし即ち神なり』と言ひしを引きて基督の無罪を認めざる證據となせり。ブルッスは最も良く此の言を解說したれば之を其の儘に引用せんに、『善き師よと呼びかけて永生の道を問ひたる求道者に向ひて耶蘇は何故我を善と云ふやとの銳利なる反問を提出したる本意は、善てふ言葉を一片

の挨拶となす勿れ善の何たるを知り又この形容を冠らす人が果して之を受くる眞價あるかを吟味して後之を用ひよと云ふにあり。斯く善てふ形容を用ゆるの可否を判することは姑く後と廻しとせよと云はんが如く、直に彼に促すに直接の弟子となることを以てして曰く、往きて汝の持てる物を賣り而して來りて我に隨へと。蓋しこの招誘に應じたる上にて漸次に眞個の善の何たるを學ぶを得べく、自ら撰んで師となしたる此人こそ眞に善なることを發見し得べしとの教へなり』(ブルース辯證論三四〇頁)。又博士シュミーデルが科學的基督傳の支柱の一として擧ぐる所は『人の子を謗る者は赦さるべし』てふ重大なる言なるが思ひきや基督が自己の無罪を諷示せる言が却て無罪を否定する材料とせられんとは。請ふ再びブルース博士の有力なる答辯を假らしめよ。博士曰く是の如く耶蘇の欠點を摘發し得たりと稱する者詮し來れば憐むに堪へたる細工にして、彼等が批評を加ふる其の人が若し『人の子を謗るものは赦さるべし』と云ひ給ひしと同じき寛恕を受くるを要すべしと。

(一)基督の人格と其の事業に關して公正なる敎理を受くるを拒む學者にして基督の無罪を主張する人なきにあらず(其の數は減少しつゝあれども)。シュライエルマッヘルは神の「インカルネーション」を信せざりしも、人類の理想は

基督に於て初めて完成したることを說けり。ブルース博士はチャンニング以後にありてはマルチノーも亦全じ立場に在る人なりとせり（權威の所在論六五一頁）。然れどもマルチノーは（少くとも）晩年に於ては果して基督の無罪を認めたるか疑なき能はず。彼は實際基督に不完全なる點の存することを明言したる文字を書けり。基督の無罪てふ思想はマルチノーの抱ける如き思想の他の部分と密に聯關し得ざることそ却て喜ぶべきことなれ。一たび基督の無罪を認めたる上は奇跡に關して議論するの必要を餘さず。既に業に奇跡的の領分に踏み入りたればなり。苟も基督の無罪を信ずる人なれば必ずや早晚基督の名分の他の部分をも是認するに至るべしとは我等の保し得る所なり。基督の無罪直に彼の神性を證明する能はざるべしと雖も其の信じ得べきことを證明するに足れり。神に愛せられたる子として彼に聽く人は其の名分の意義と其の廣大なることを誤解すること能はざるべし。

（二）他の一派の批評家は基督が大抵の人より勝りて善き人なりしことを許せども其の罪無き事は之を否定す。彼等は一度無罪てふことを許せば自然主義より超自然主義に入ることを知ればなり。近世的批評に就きては我が英國にまで甚だ大なる感化を及ぼしたるバイゼッセルの如きは、基督の完全は、パウロ其

他の敬虔の念厚き人の完全も一樣なりと說けり。カイムも之と全じ考へを有し、エバルド、マシウ、アルノルド、博士アボットの諸人は基督に過失を付することを避くるが故に精確に其の立場を知ること能はざれども大体全一處に屬すべきものならん。玆に云ふべきことは基督の無罪を否むことは卽ち基督敎の救贖を破壞することゝなることこれ也。罪人は罪人を救ふこと能はざるは明白にあらずや。人類の爲の此の福音は當人を道德的弱點より回復するに止まらずして罪責（ギルト）より人を救ひ出だすに外ならず。されば罪と罪責の意識胸中に現存せざる中は基督の啓示の中了解し難き節多かるべし。ボールの友人にして又嘆美者なる一人はボールの死後彼を頌讃するの意を以て記して曰く『彼の性格は全然客觀的にして基督敎を研究するに當りても個人的の需用或は煩悶の痕跡を見るべからず。彼が少年時代より有したる積極的の信仰は之を其の儘に維持せしが科學的研究によりて其の維持し難きこと明なるに及びて之を棄て去りたり』と。ボールが自己の心靈の需用、救主の必要には全く感覺なき人たりしことは之によりて明なり。罪の感念なき人にはこの秘密は解かるべからず。

(三)　又今日多くの人は基督を以て完全なる人となさざれども人類の普通の水平以上に卓越したる善人にして其の敎は多く賞讃するに堪へたりと思惟せり。

トルストイの立場は蓋し之に屬すべし。この一派の人の說く所によれば人類の主として要する所のものは敎訓にして世界が救はれ得る限までは敎訓に依りて救はれ得べしと。此の立場は果して維持せられ得可きか。耶蘇の漠大なる名分を排斥して猶且つ彼の善人たることを許すことを得可きか。我等の信ずる所を以てすればこは到底有り得べからざることとなり。寧ろ基督は人の崇拜に値せざる以上は亦尊敬にも値せずと說く純然たる自然的批評家の說の首尾一貫せるを見る。

（イ）博士ナイトが博士マルチノーに與へたる書翰はマルチノーの著書『インター、アミユス』の中に採錄せらる。其の立論は最も單純なるクリスチヤンと雖も能く之を解し得べき議論にして然かも基督敎會が此の問題を所謂專門家に委ぬ可きものにあらずと信ずるが故に、余は喜んで其の論旨を爰に繰り返さんと欲す。基督の自ら主張したる名分は生涯に渡りて變せず之を反復したるものなれば、此の名分を否定すればこれ即ち名分者の品格を棄つるなり。例へば基督がナザレの會堂に於てイザヤの卷を誦して後『此の錄せられたる事は今日汝の前に成れり』と云ひし如き、若し尋常の一猶太人之を云ひしとせば彼を尊敬することを得べきか。又山上の說敎の結果に於て『其時彼等に告げ我れ嘗て汝等

を知らず惡を爲す者よ我を離れ去れよと云はん』と云ひし時、彼は人の靈魂の君主たり又審判者たるの地を占むるにあらずや。又神聖なる人情の絆にまで切り入りて『若し人我れに來りて其父母妻子をも惡む者にあらずば我が弟子となることを得ず』と云ふに至りては單に人として卽ち罪ある人として語る時に彼を尊敬し得べきか。ペテロが『爾は活ける神の子基督なり』と告白せし時耶蘇は之を祝福して、この秘義を啓示せしものは血肉にあらざることを告げしにあらずや。又『我を信ずる幼兒の一人をも躓かす者は海の深みに投げ入れらるるこそ其人の爲によかるべし』と云ひし時何人として語りつつありしや。又罪人の審判者たる地位を占めて悔ひ改めざる者に向ひ『詛はれたる者よ我を離れて盡きざる火に入れよ』と云ひし時、罪ある人として一個人間として之を語りつつありしや。意を用ひて福音書の一卷にても讀む者は覺り得るならん、基督に罪あるを許す以上其の罪は些細なる汚點たるに止まるべきものにあらずして常人の水平以下にも落つべきほど非常に虛誇にして自ら欺ける品性の人たることを認むるに歸着せざるを得ず。

（ロ）猶ほ云ふべき事あり、若し基督の無罪なることを拒み彼が世界の救主たることを拒むならば、ルナン、ストラウスと仝一の結論に達することを避け得

べきか。ルナンの描く所によれば基督は少年時代に於ては着實單純なる田舍預言者にして深く神の父たる眞理を感銘しメシャの夢想とヒレルの知慧に養はれたる人なりしと論じ、其の傳道初期の美を叙し來りて後、耶蘇が自己の名分を主張するに至りては最早初期の志を失ひて墮落せるものなりと斷じ、更に耶蘇の爲に惜んで曰く『彼にしてサマリヤの井の側にて唯一絕對の宗教を說きし後、死せしならば如何に幸なりしぞ』と。バイゼッヱルは二十年ほど前或る獨逸の雜誌に、ストラウスが自著の基督傳の第一卷の刊行後書きたる一文を公にせしが、この文章は一種の悲哀を帶ぶるものなり。其の文中にストラウスは依然ビルテムベルヒの教會の教職に在りても不都合なかるべきことを辨じ、又自己の唱ふる神話說は教會にて說教せらるべきものにあらざれども福音書の中には歷史の躰を假りて思想を表象せる部分なきにあらざることを說けり。この人終に基督教を全く迷妄となし基督を詐僞者となし人格的神の存在も靈魂の不滅をも排斥する人となれり。然かもこれ自然の勢なり。（柏井園君譯）

人生の深調

教授　ウイリヤム、エヌ、クラーク

近頃コングリゲーショナリスト雜誌中に見へたる一節の語は、深く予をして自ら省みしめたり。種々有益なる著述を爲せし一婦人、近頃吊に遭ひて深く憂に沈みしが、其悲を慰めんとて語りし幾多の人の言に、一として視へざる未來世界に對する信仰を起さしむべき調子聞えず。よりて彼の女は近世の信仰上の著述を涉獵せしに、是れ亦た全く此深調を缺けり。聖書を外にしては人の心を安んずべき堅實なる確信の態度あるもの殆ど是れなきを見て、驚けりと云ふ。是れ實に予をして三省せしめたるものなりき。予も此の婦人と同感なり。固より予は離苦の淵に沈みて切に慰藉を求めたることなく只普通の悲哀に際して普通の慰言を受けたることとなるが、視へざる善の實在を、嚴かに喜びて信ずるといふ「深調」は其言に太たく缺けたり。他人はさて措き予は自ら之を缺く。吾人もし各々自ら己を察せば、右の婦人の語は吾人をして大に自ら省みしむるものあらんか。ポーロ曰く、『讃むべきかな神、神は我等の患難のときに悉く我等を慰め給へり、是れ憂に在るものを慰めしめんが爲めなり』と。吾人の中自己

の確信に基きて、世の死別に悲める人の心裡に、神の盡きせぬ恩愛と、覩へざる未來の世界に對する確信とをよく喚起し得るもの幾何人かある。人は日常の憂苦患難に陷れる人に向ひて、『心を安せよ。此は父の世界なり。萬物は神を愛する人の爲に働きて用を爲す』と言ひ、しかして他人をして之を信せしむるの力あるものは誰ぞ。斯く自ら問ふときは、自分ながら飽かぬ心地す。全く力なきにはあらねど、力乏しきなり。嗚呼我が言に確信の深調もがな。

心靈的結果は智力的作用より來らず

自ら之を求めて得ざるときは、種々の策を施して此信仰を求む。演說家は辯舌を錬りてその音調を深くするといふことあり。說敎者も同じく確信の深調を假裝し、自ら信ずるよりも尙確實に人に聞えしめんとて、殊更に深く太き聲を發して之を說く。蓋し是れ自然の情に出づるものにして、說敎者に限りたることにあらず。誰にても時には他人に對して信仰の調子を維持するの要あるが如きことありて、自分の信仰以上の語り方を爲すこと往々之れあり。且つや之と異れる情に基きて、人は己の不完全なる信仰を强めんと力む。即ち證據調べをなして神と來世とを一層深く信ずるに至らんと企つるなり。嘗て最愛の人を喪ひたる人予に告げて、喪の直ぐ後書肆に注文して靈魂不滅に關する一切の書を送

らんことを求めたりといへり。證據を究めて其心を爽にし、以て其要むる靈的結果を生せんとの企圖なりき。左れど此は要なき業なり。予は此人に書物よりして利益を享くることを少なかるべしと告げしが、其人果して同意見なりき。議論はいかに慥かなりとも、信仰は之が爲に起らず。堅確正當の辯論を以て心靈にかの一種の深調を來し、他人我言を聽きて信仰を起すほどの妙力を生ずるはかたし。確信の語を發せんとて言語の修錬を爲したる人より神力を有する音調を聞かんことは望み難し。言語の外に何ものか之を助くることなくば一切力なき業なりけり。

誰か吾人の眞正の敎師たる者ぞ

他に之を助くるものは何ぞや。誰か吾人を助くべき有力の音調を以て吾人に語るものぞ。偉大なりと考へられたる偉大なる心意よりにもあらず。有識の士―神學の智識に深き人よりすらも之をきくことはかたし。思ふに吾人は皆、暗黑に坐する人が光明の携帶者として仰ぎ、みえざる神を認めしものとして、永への信仰を人に皷吹し得る男女あるを知らん。彼等は果して何人ぞ。彼等は單純、眞摯、朴訥なり。自ら物の數とも思はねど、ともかく主と倶に在りたる人なり。幼兒の如くなりて神より賜を受けたり。只ひとすじに敬虔なるところ、

是れ他に求めがたき力の存するところにぞある。奇なるかな。小兒の心よりして深き音調はひゞきいづ。これ事實なり、古來よりして事實なり、將來にも事實たらざるべからず。予は之を論ずるの要なし。古來心靈上の實驗之を確定して餘あればなり。

請ふ共に小兒とならん。救主は此く命じ玉ひ、而して吾人も亦た其要を認む。小兒の如くなり、小兒の心を有たんこと、これぞ吾人の目的標とすべきものなれ。

如何にせばよからん。予は救主が『汝等幼兒の如くならずば天國に入るを得じ』といひ給ひしを見て、其大胆に驚くこと屢々なり。幼兒の如くなる！何たる業ぞや。如くなる！何よりしてか？有の儘の吾人よりしてなり。吾人の獨立、傲慢、我意、小理屈好きなるにも關らず、固より且暢びたる罪惡あるにも關らず、此かる淺間敷狀態の吾人より變じて幼兒となるといふなり。豈に難からずや。若し吾人の現狀にして幼兒の如くあらば、幼兒として存するを想像し得ぬにはあらざれど、吾人の實際の有樣よりして、幼兒のごとき單純に立返るとのかたきを想へば、主イエスが幼兒の心の有りやなしやを以て、天國入門の撿討となしたるの大胆なるに驚かざらんとするも得じ。然らばいかにせば小兒の如くな

り得べきか。

或は救主が小兒を學ぶべしと敎へ玉ひし點を殊更執りて本題を論ずるの當れりやを疑ふ人もあらんが、決して然らず。固より小兒の具ふるもの一々賞すべしとにはあらず主イヱスは小兒に過失なしともいひ玉はず、又吾人生存の望ましき段階なりとも說き玉ひしことなし。或は又た其無智文盲を讃するにもあらず。此點に於ける古來基督敎國の解釋は當れり。幼兒の單純、謙遜、依賴、從順こそ人の目的とすべき品性の例なれ。成長したる——恐くは成長し過ぎたる、成長しそこないたる——慥かに自負、傲慢、若くは變じがたき癖を有して成長したる吾人が謙遜、從順、信賴の德を具へざるべからずとなり。我は自ら謙り、心を虛ふして神の滿々たる德の流れ入るようせざるべからず。力を得るの道此外になし。此くてこそ心靈的確信の深重なる音調を發し得て、他人の靈に力と信仰とを吹き込み得べし。左れば欠くべからざる唯一の物は、謙りて神の力を受くる精神にぞある。

一層强大なる性格に接して生活する事

然らば問はん、幼兒が信賴從順の性を具ふるは何によるやと。此は幼兒の性質なりと答ふるは固より容易なれど、其は問題の解釋にはあらず。蓋しもし幼兒

孤立せば何の性質をも發展し得べからず、直に死すべければなり。もし己と同等の幼兒の間に置かれなば、信任の念も、甘んじて依賴するの心も生せざるべし。左れど小兒は案外に早く社會的のものとなるなり。小兒は常に己より大なる者の前に立てり。依賴の念は依賴して立つの事實より生ず。貧民窟の小兒は幼より自活の途を求めて奔走し、父母の愛護を欠くがゆへに、自ら依賴の習慣を失ひ、信任の念に乏し。美しく眞率なる小兒の情は、母の愛の温暖、父の養護の周到より產れたるものなり。信賴の情は小兒が世に出づるとき、之を待ち受けたる愛と力とに對する應答とも謂つべし。もし小兒にして偉大なる、愛深き、威嚴ある或る人に接し、之が爲め自ら信任、從順、謙遜の位置を占むることなかりせば、所謂小兒らしき精神といふもの生ずることなかるべし。恰も之と同じく、吾人成長せる男女も、强大にして高尙なる人格の前に立つときは、自ら小兒らしくなるなり。小兒と同じく成人も社會的のものにして、思想に動かさるるよりも、夐かに多く人物に感化さるるものなり。人往々思想が吾人の心裡に小兒の氣象を起すべしと考ふれど、此は全く失敗に歸す。吾人々間は寧ろ個人的感化の授受を爲さんが爲めに造られ、個人的感化の下に尤も有力なる行動を爲す。神の滿德我に傾注し來り、我れ謙遜にされ、單純にされ、

敎を受くるを喜ぶ樣されんことを望むに方り、我切に願ふところは、我を小兒らしくする程我に著しく優りて偉大なる者の個人的印象を受けたしといふに在り。『主よ語り玉へ、僕は聽く』。『主よ我に何を爲さしめんとし玉ふや』。神の偉大こそ、實に我を小兒らしくするものなれ。

誰か此須要に應ずるものぞ

予は神の偉大といへり。然れど神の名を擧げたるのみにては、此に起り來る切なる疑問を解くべくもあらず。父母が其子女に鼓吹するが如く謙遜、從順、信賴、冀願の念を鼓吹し得るもの果して之れ有りや、いかん。廣く世の人を視、內自ら省みて、其自負、獨立の氣質、固まれる習慣を思ふときは、果して世に吾人を小兒らしくするの力ありやを疑ふこと切なり。予は果して小兒が母の面を視るが如くに仰ぎ視、之を賞嘆し、之を深く愛し、喜びて之を信じ、自ら省みて小兒と感ぜざる程ならしむる人を世に發見し得べきか。

然り、予が神の顯現なるイエスの前に立ち、イエスに現はれし神を仰ぎ視るや、予は自ら小兒の如く感じ、彼の愛護の下に小兒の生涯を送らんと考ふるに至るなり。自ら彼に比して畏縮せるが爲め然るにあらず。そも小兒らしき精神とは自己の小なることを自覺するの謂にあらず。我の小なるを感ぜず、神の大を感

じて此精神は起り來るなり。キリストの人に示し玉へる神の偉大は、吾人の必要を足し、万人の須要を充す性質のものにして、人を支持するの力、人を贖ふ愛といふ偉大なり。圓滿なる智慧目的の偉大なり。盡きず、變らず、永へなる無上の信實なり。母の大なるによりて兒が小にせられざる如く、予は神の優秀によりて縮小せらるゝことなし。

基督教徒信頼の性質

予が自己の貴重なるを感ずるは、母が己を貴重するに基くと同じく、神の愛に應へて始めて我は自己の眞價を認む。神偉大なるがゆへ我は高められて靈に平安を得、善を勵むの力を享く。キリストと其十字架とに、我は測りがたき贖の愛を視、此く深き愛の心に我心も安じて頼り縋りて強くなり得べし。善愛の攝理を萬物の上に行ひ給ふ父を認め、此かる攝理の下に我は正義を踏みて樂まん。キリストの示し玉ひし神の至情の厚ければ、此かる眞友の前に我は跪きて敎を受けざらんとするも得じ。キリストが此く喚起し玉へる信任は、視るべき現世の事物に關する束の間のものにあらず。予は神を限りなく朽ちせぬ者と信ずるなり。萬の世界は皆神のもの、諸の時代も亦た神のものなり。一旦深く神の實在を悟るや、視へぬ世界の實在を感ずるは、視ゆる現世に於けると毫も異なら

ず。されば此信仰によりて靈魂不死の確信一段の力を加へ、人の希望に欠くべからざる永遠の事物を覺るに至るなり。永遠、聖善、睿智にして、近く在まし、父の注意、母の恩愛を以て絕へず看護し給ふ神の前に立てる吾人、ア丶如何で謙りて神を愛し、之を信じ、之に敎を受け、之に順はざるを得べき。如何で此世界に生存することと家庭に於けるが如くし、子女が父母に就きて日用の糧を求むると均しく、天父の愛護を享けであるべき。

是れ小兒の如くなることと、天國に入ることとと相聯關されたる所以なり。神國とは外部の動作を以て入り得べき組織團体にはあらず。之に入るには神の望み玉ふ方法に應じて神の支配を受くることを要す。『汝其前に立たば小兒の感あるほどの人に會ひて、自ら謙遜、信頼、從順の念を發するにあらずんば、正當に其人の支配の下に來ることと能はず』。是れぞ神が天國を發見する者に授けんとし玉ふ恩惠に入るの道なり。神の國と神の家族とは同一なり。神の子女の上に神の國の榮光、勢力は降るなりけり。

何れより深調は來るか

以上述ぶるが如く、吾人果して偉大なる神の救の力に信頼して、以て神を語り、人生を說くとせば、何如ん。幽冥の世界、不死の生命につき、いかで深重なる

音調の響き出でざるべき。神の前に立ちて愛護されたる幼兒の如く、其心眞に謙りてしかも高くせられたらんには、其口より發する語に活ける信仰の氣滿ち、人を助け、人を皷舞するの力なき筈あるべからず。此かる聲は神の音なり。宇宙の響なり、永遠實在の聲なり。吾人の微けき聲は纔に之を反響し來り、徐ろに我有として、遂には永久の音樂として之を歌ひ出づるなり。

小兒らしき精神を以て大人の品位を損する小供らしき馬鹿氣たることと疑ふを休めよ。フィリップス、ブルックス嘗て言へることあり。もし人謙遜ならんと欲せば自ら萎縮して己を倭小にする勿れ。出來得る丈け大人らしくあれ、其天禀を全長に延べよ。而して己より幾層倍か大なる者と己を較べ視るべし、自ら自己の地位を悟るべしと。予が右に說きたる小兒らしき精神は妄りに己を卑屈するより生せず。神を視て己を省みるとき道理上然かあるべき謙遜なり。此謙遜たる偉人も凡庸も具ふべき者にして、花咲きては信賴の念となり、靈魂に休息を與へ、善を勵むべき力を授く、願くは吾人其人格の大小を問はず、齊しく神靈の賜を心に受け、其聲の音調を深くし、悲と疑に沈める人の前に立てば、自ら祝福を之に授くる者とならん哉。（小林彥五郎君飜譯）

新福音主義

神學博士　エチ、シー、キング

（一）必要と條件

劈頭に於て先づ言ふを要する事は、ドラモンドも言ひし如く新福音主義（ニウ、エバンゼリズム）とは新福音（ニウ、エバンゼル）の意味にあらざる事此れなり。我等は別に宣傳せんとする新しき福音を有せず。但如何にせば在來の福音を最も良く人に納得せしむべきかを講究せんと欲するのみ。此の點より見れば新福音主義は何時の世にも必要あらざるとなし。蓋し有力なる福音主義は亦新しき者たるべき第一の理由として、現時代を教化する必要を擧げざるべからず。最も有効に此の目的を果たさんとせば、永遠なる基督教の大眞理をば當今の人に適切なる言語に改譯するに如くはなし。我等は基督と基督教的生活を當今の最も現實なる事物よりも劣りて現實なる位置に置くを以て滿足する能はざれば也。殊に過ぐる七十年間に生じたる知識界の變化は莫大なるものにして、益々此の改譯の必要を急ならしむ。總べて說教の目的は之を聽く人をして基督に依りて活ける神と交通せしめ、又基督の品性と喜びに參せしむるに外ならざることなるが、此の歸着點に近かん爲には、全然不

切實の弊を脱し盡して、己にも聽衆にも切實なる言語を用ゆべきことは說教者の一樣に感ずる所ならん。

且つ青年を啓導して在來の議論より進んで彼等に適切なる信仰確信に移らしむるは各時代の急務なるが、この務を果たし得んためには淡泊に且つ思慮深く彼等に語らざるべからず。舊來の見解に於て誤謬たること明なる以上は之を排除し、主要にあらずして主要の地に置かれしものは之が輕重を正すに淡泊なれ。然して眞實なる建設的精神を以て、逝きし者よりも勝れて善き者を明にする爲に思慮深かれよ。淡泊ならずんば新しき眞理を標明すること能はず。思慮なくんば此の新しき眞理を梗くべき僻見を生じ易し。此の二面の性格は孰れも恒に缺くべからざるが、殊に今日の如き過渡の時代に於て此の時代を基督教に歸服せしめ教會內の學者と一般の會衆との間に空虛の廣まるを防ぐために最も必要なり。

然れども新福音主義なるべき最大なる又最も根本的なる道理はフェャベルンの含蓄深き數語の中に觀るを得べし。曰く『教會にして苟も創立者の神性を信ずる以上は、斷えず創立者に返らんと欲する累代の歷史を有せざるべからず。彼に返るべくして彼を超越すること能はず。然れども彼を解釋し其の宗教を實行

する力は發達せざるべからず』と。新福音主義は即ち此の發達する力に外ならず。この點に就きては現代の如く好機會に際せることあらざれば、縱へ困難なるにせよ、此の意味は喇叭の如く現代に響き渡るべきものなり。

豫件

現代の新福音主義の下に伏して其の調子と方法を定むる要件の大なるもの三あり。第一は宗教は生活なること也。即ち救はるるとは神の品性と生活に與かることなれば人は皆此の品性を得ん爲に戰ふべきこと此れなり。此の事は次第に明白を加へ來る事柄にして、品性の爲に戰ふの精神に勵まさるるときに、人生の嚴肅眞摯なるの感は語る人にも聽く人にも次第に深くなるなり。是に至りては單に手續の問題にあらずして、眞實の品性を以て眞實の勝利を收めざるべからず。此の死生の苦戰を目擊すれば初めて己が罪惡と神より遠きことと、救主の必要につき新なる感を生ずべし。

捷を奏するに第二の必要なる條件は、人が大なる現實の前に至善なるものの前に、耶蘇基督なる歷史上最大事實の前に自身を立つることなり。事に臨んで誘惑に勝ち得ると否とは、高等なる動機と思念に注意を集め得る力の有無に關し、其力は又平生至高至善なるものに注意するの習慣を養ふと否とに關す。されば

説教家の最大使命、其の天職の眞髓は人をして最大の現實と眞價を認めしむること、就中人をして基督を見せしむるに存す。然して此の現實と眞價を人心に納得せしめ之を以て人生の主要なる現實と思惟せしむるこそ最も大なる急務なり。

第三に説教者は自ら實見者立證者なるを要す。基督敎の立證者は親しく心靈界を見且つ實驗したる者にてあらざるべからず。單に議論の結果として之に到達すること能はず。況して神學の系統として甲より乙に傳授し得べき種類のものにもあらず。説教者先づ自身を最高の價値なるものの前に置き、其物の必然に與ふる感動を受け、其の現實に觸るるを要す。是の如くして初めて心靈界生命を我が有となすを得るなり。かくなれば他人の生命の外貌を摸倣するにあらず己の裡に宿れる生命は求めずして發露せん。然らば説教者の爲し得る最高の功績は人を助けて大なる實在と眞價の前に到らしめ、他人の助力の及ぶ限りに於ては、神の最高の自啓なる基督の内部的生活に面接せしむるにあり。

説教者は本來立證者たるべし。先づ靈の世界が我に現實たるに至りて初めて他人に語るべき權利を有するなり。此の現實を立證して我等の見たる所を他人に分つ、我等が他の爲に効し得るとは此に止まる、故に耶蘇の立てたる基督敎の

方針はボスウォルス教授の言を假りて云へば、立證の軍を張りて世界を征服するに外ならず。基督教は純然たる道德的心靈的の宗敎なれば、唯一に心中の確信と愛と忠義心によりて立てり。一も之を强ゆる能はず唯心を以て心に點火するにあり。其の餘はたゞ機關に過ぎず。我等の爲すべき所は立證の外に出でず。

（二）有力なる立證の要素

既に說ける如く基督敎は立證の陣を布きて世界を征服するを以て方針となすものにして、基督敎の說敎者は要するに證明者たるべきものならば、我等の問題は、有力なる立證とは何ぞやとの一義に歸着す。語を更へて云へば立證者をして力あり重みあらしむる所のものは何ぞや。余は此の問題の答へ得らるべきを信せんと欲す。

立證者の力の由て分るゝ箇條凡そ四つあり。第一は其人の深く眞面目なる信仰なり、第二は我等が其人の品性と判斷を信任することなり。第三は立證者が我等を愛することを確信することなり。第四は其人が自ら主張する本義を鮮明に我等の爲に說述するの力量なり。舊福音主義にあれ新福音主義にもあれ苟も此の四箇の條件に當らざるものあらば余は之に望を囑すること能はず。以下少しく各條件を說明すべし。

確信

説教者にして有力なる立證者たらんと欲せば自ら先づ基督に就きて明にして深く眞面目なる確信を有せざるべからず。彼の心は全く其の事柄に打ち込まれ、只職掌的の立證にあらざること明ならざるべからず。此の確信を辨明する道理すらも更に力あるは確信其のものなり。基督は人間に取りては何事にも代へられ難く、之が爲には如何なる言を以てしても猶ほ足らずとの感念のみ獨り燃ゆる熱心を發せしむ。我等が恩誼を受けたる人の事を語るに當りて『此人が余の爲に如何に盡す所ありしか之を語り盡すこと能はず』と云ふ如く、左樣に眞實に正直に心よりして基督の事を言はざるべからず。新福音主義は此處に力を加ふるものなり。新福音主義は基督に重きを置き、一層明に彼を推して生活と教訓に關する最上の權威となし、彼に縁りて萬事を視るを力めバンダイクが所謂『人格の福音』たることを歸趣とすればなり。

人は大にして深き確信あるにあらずんば説教者たる能はず。必要なるは現實、確信、權威の調子なり。力なき説教に於て欠くる所は專ら此にあらざるか。使命の感念嚴かならず、この使命に對して人を歸服せしめんと欲する決心固からざるは大なる患なり。使命の感念なくして所謂『説教的習慣（オミレチツクハビツト）』なる者に熟練す

るほど說敎者に取りて危險なることあらず。眞實心に懷抱せる使命なくんば說敎の出來ざる人は宜しく神に感謝して可なり。如何なる雄辨も修辭も說敎の不實てふ欠點を補ふに足らず。

新福音主義は此の點に於て特別の長處を有するものなり。其の立塲より云へば說敎者は人の旣に說ける所を反覆し或は之を摸するを要せず、唯其人に與へられたる所、彼に取りて現實なる所を有力に立證するを尙べばなり。若し今までの定格なりと云ふ故を以て一種の方式言語、敎義を說き或はあらゆる方面を殘りなく說かざるべからずとせば、其の事業說述ともに勢ひ職掌的とならざるを得ざるべし。之に反して明に觀得たる眞理の側面をば、自ら効力ありと信ずる言語を以て立證し、然かも又一層大なる光を得んとして祈り求むるならば、初めて得る人の理性と良心を捉ふることを得ん。說敎者なる者須くサンデーの言を記臆すべし、曰く『現今の人の心情は何事よりも先に現實（リヤリチイ）を要求す』と。

品性と判斷

說敎者の言ふ所に重みあらんと欲せば先づ說敎者の品性と判斷に就きて人の信任を得るを要す。說敎の中より個人的要素を去ることは望むべからず。甲の人の靜なる數言却て乙の人の千万言よりも力あることあり。彼人の一語壹磅の重

みありとか或は又彼人の言は腹に入ると云ふ如きは往々聽く所なり。說敎に於て殊に此事の必要なる所以は、說敎の終極の目的は人を導きて神の品性と生命に至らしむるにあるに、此の目的は辨舌によりて達せらるるよりも寧ろ傳染によりて得らるべければなり。

愛

又他人の說く事柄にして我と親密なる關係を有するものならんには、其の人が我を愛するの確信之れに加はるを要すべし。即ち語る人が語ることによりて我等聽く者の益を圖りつつあることを疑ふことなかるべし。されば說敎者は單に說敎するを以て足れりとせず、日常の他の行爲を以て人を愛する愛を表はすべし。然らば其の言も亦能く人の心を牽く力あるべし。說敎者は愛てふ第一資格なくして濟む道あらずと知るべし。

新福音主義は又品性と判斷と愛の資格に就きて長處を有す。これ畢竟基督を最上の地に置き、基督の現世的歷史的の生涯に出來得る限り周到親密に近接するを以て第一義務をなすが故なり。是の如く品性を改造し、判斷を確にし、愛の心を發起せしむるものあらず。凡そ何事にかけても健全なる判斷は其の事に當れる各人と倶に働くによりて最も良く養はる。左らば健全なる靈的判斷と洞察

力は基督の生涯教訓の空氣の內に安住するによりて最も良く得らるゝ也。

說述の力

同じく確信あり、同じく品性と判斷と愛の人に認識せられたる人にても其の立証の力に優劣ある所以は何ぞや。これ其の立証の力の長短に關係す。此の力は有力なる立証に必要なる資格中にては自ら第二位に位して他の深き資格と相待つを要すれども、此も亦重要なる資格たるを失はず。其の力とは之を約言すれば、人をして大なる基督教の事實と眞理は現實（リアル）なり合理的（ラシオナル）なり生命（バイタル）なりとの感を興さしめざるべからず。其の現實なることは彼等の日常の生活の如く彼等の業務の如く彼等の書籍の如く個人的關係の如く現實なるを感せしむべし。其の合理的なりと云ふは先づ基督教は人の全心に訴へ全事實に接し道理の言ふ所を避易する用なきこと、次に基督の教は獨斷的にあらず架空にあらず人の最上の思想と一致せることを明にすべし。生命なりと云ふは、基督教の根本の眞理は人生の衝動となり力となり人生を擴張にし豐富にすべきものたるを知らしむるにあり。

（三）　新福音主義と現時代との關係

以上論じ來りたる資格に含蓄せられたる一の事は深く基督を知るの必要なるが、

此の外併せて必要なることは現時代を知ることなり。我等は我等が訴へんとする人の意識に通せずしてはこの使命を現實に合理的に生命あるものとなす能はず。基督を知り又時代を知る此の二の必要は相互に貼合せるものにて、今日の時代に表れたる一種の特質は歴史的基督を我等に近からしめたり。

聖書の研究に於ける歴史的精神

歴史的批評の進歩によりて今日の時代は特別なる利益を享け得ることとなれり。今日の我等は前代の人の知るに由なかりし精確と該博を以て聖書の各卷の歴史的由來を知るを得るなり。舊約の預言書の如き其の著されてより以來眞の歴史的意義を以て之を讀み得ること今日を以て嚆矢とすと云ふも敢て誣言にあらず。ヂヨルヂ、アダム、スミスの『十二小預言者』、サンダー、ケント合著の『預言者の使命』の如き書は歴史的研究の結果をば普通の讀者にも曉り易からしむ、斯の如く昔の預言者を今日に活くるが如く解釋し得るに至るまで如何ばかりの苦心を要したるかを思へ。

又福音書以外讀むに足る基督傳は盡く一八三五年以後の作なるを思へ、今日の時代は世界に未だ曾て見ざる眞裁にして勢力多き歴史的研究の結果たる基督傳を貢献したり。其の恩澤によりて我等は基督の傳記を眞實なる歴史的光景――

政治的、知識的、道德的、宗教的の各方面に渉りて――に嵌入することを得ること前代の人の及ぶ所にあらず。隨て我等は基督の言行の精明なる意義を領知し得るの便利を與へらる。此の結果を重要視せざる人は即ち亦耶蘇基督の地上の生活が世界史上に於て最も意味深き事實なるを認めざる人の外にあるべからず。

聖書神學も亦未だ五十年の齡を累ねざるとも思想ある人の觀過し得ざる事實ならん。預言者をはじめ耶蘇及び使徒の教訓を歸納的、歷史的、組織的に研究するとは明に近代の現象にして、研究の結果は今可なりの勉强心ある學生の學び得べき範圍に置かる。例へばボスウォルス教授の『耶蘇と其の使徒の教訓の研究』の如き初步の書にても教會一体に讀まれて耶蘇と使徒の教訓が直接に且つ概括的に研究せらるゝに至らば其の効果擧げて言ふべからざる者あるべし。基督の傳記と教訓を明慧に且つ周到に知得するは基督の弟子たるものゝ責任なるが、教會も教役者も未だ此の責任を全くせりと謂ふを得ず。ホルトン博士の言へる如く『教會が良く耶蘇の教訓を知れりと思ひ居れるは悲むべき謬想なり』實に基督の弟子たるの名に愧ぢざらんとせばバンダイク博士の云へる如く『其の教訓の研究に如何に大なる勞を用ゆることも惜むべからず。之を圓熟し調和

して我等の心中に收め之を統合一貫せる形に復せん爲には如何なる盡力も過ぎたりと云ふべからず』。

學者の研究によりて歷史的基督に復りたる此の精神が十分に是認せらるゝに至らば、說敎と敎會の生命に及ぼす影響甚だ大なるべし。信仰の淵源に復すことは効果なくして終るべき者にあらず。想ふに最良の說敎と說敎に對する最良の感應は今後に竢つべきものにして、其の如き結果は唯聖書の一卷一卷に直接なる歸納的歷史的硏究を加ふることによりて得らるべし。知識的研究のみにて十分ならざることは勿論なれども、然かも之れなくんば基督を十分に覩得して之よりインスピレーションを受くることは望むべからず。

歷史的基督に復ること、聖書の研究に於て歷史的精神の明に認められたることの外、我等の時代の特色と稱すべきものにして新福音主義と關係あるは、今日の時代が疑問的非ドグマ的の時代たること、又科學的時代たることなり。

疑問的非ドグマ的時代

疑問的非ドグマ的時代に於て基督敎の立證者に必要なることは先づあらゆる眞理が一樣に緊要にあらず又一樣に確實にあらざることを認知し、樞要なるものと附屬的にして疑はしきものとを差別することなり。少き眞理を分外に重じて

却て重大なる事を忽にしたる弊なきにあらず。例へばアダムに關する古今の議論も基督に於ける神の啓示とは同格に置くべきことにあらず。又直接耶蘇の敎へたる言と、我等自身或は他人の附加したる推論思辨とは明に分劃するを要す。自己の知力を滿足さする爲には推論思辨も亦必要なれども、權威は此等に存せずして獨り耶蘇の敎に存せり。耶蘇の弟子たらしむるには必しも人を導きて神學哲學の系統の細目に入らしむるを要せず。大切なるものは多けれども第一に大切なるものは多からず。

科學的時代

然れども今日基督の爲に有力なる立證者たらんと欲する人に與ふるを要する最も直接なる諷示は現代の科學的氣風に外ならず。この氣風は今日多少意識的に總ての人に感染せるが故に、現今の人心に觸れんと欲するものは科學的精神の要請を無視するは賢き方法にあらず。余は說敎者たるものは皆科學に通達すべしとは云はざれども、自家の主題につきて科學的知識を有せざるべからず。由來心靈的の立證者は其の知識漠然として、又實際的方法を用ゆるを好まざる弊に陷り易ければ、此の一點は殊に意を用ゆる必要あり。科學の精神は法則の普遍なるを認め總ての結果を嚴密に其の根原の狀態に尋ぬるに歸着す。

基督教の立證者にして科學的氣風に應せんと欲せば、彼は須く先づ心靈界の大法則を知り且つ之を說き得るの心懸け肝要なり。彼は又靈界の實在する觀念の由て立てる條件（個人的にあれ倫理的にあれ心理的にあれ生理的にあれ）をば精確に觀得すべく、自制の道は常に積極的なることを忘れざるべし。彼は人生の複雜なることを商量し心靈的生活に於ては年月と生長の必要を記憶すべし。而して宗教的生活に於ては强制（ストレーン）は宜を得たるものにあらず、說教者の本務は人を挑發してヒステリア的の强制に至らしむるにあらずして、健固なる心を以て法則を認識し、此の法則に必要なる條件を忠實に實行せしめ、此の條件は知らるべく又說き得べく時を經て必ず實を結ぶべきことを傳ふるにあり。

宗教と科學

ノルサムバーランド侯

最近三四十年以來、思想家輩の取れる態度も幾多の變化を來たしたることなるが、而かも宗教と科學との關係に對する態度の變化ほど大なるはあらじ。思想界に於ける此の二大流派間に、曾て起りたる激しき爭論も、それが爲に釀し來

れる面白からぬ感情も、今や昔日の夢となりて、双方の上に惡影響を及ぼせる相互の不信任は、たとひ未だ全く消滅に至らざる迄も、非常に減少するに至りたるは事實なり。而して此の變化は果して何の爲なるか、宗敎家若くは科學者が自家の本分とその主張とに冷淡なるが爲か、兩者その一が全くおのが信仰を破壞され了りたるが爲か、一方が他方に對する勝利の歴然たる他をして全く緘默せしめたるが爲か、但しは又た、双方とも自家に固有なる位地と領分とを看取し得て、徒に他の批評に立入ることとなくして、おのが本分を盡さんとするに至りたるが爲か。

此の問題たるや、人間の思想と努力の二大方面なる、宗敎と科學とが如何に肝要なるかを知るものに取りては、實に重大緊急なる問題にして、たとひ吾人は今日に於てその十分なる意義を了解し能はずとするも、而かも之に對する答辯の如何によりて、人類最高の利害に關する吾人の希望が果して正當なる否やの定まるべきは、復た疑を容れざるなり。

近頃ベルファストに開かれたるブリテン協會の集會に於て、會長ジューワー敎授がなせる演説に、一種特別の價値あるは、他にも幾多の理由あるべきも、亦たそが此の問題に觸れたるが爲に外ならず。同敎授が是迄科學界に貢献したる

非常の功勞と、氏の指導の下に斯學が長足の進歩をなせしこと〻、氏の意見の寬宏なると見地の濶大なることとは、氏の發表する凡ての說に多大の重味と權威を與へずんばあらず。されば同教授が此の時に際して、今より二十八年前同じベルファスト市に於てチンダル教授がなせる演說、即ち同教授が所謂『時代を劃する演說』に論及し、殊にチンダル教授が科學者を代表して言へる『吾人科學者は宇宙論の全領分を神學より獲取すべきことを要求す』てふ言に、特別の力を籠めて論じたるは、實に注目すべき事ならずや。且つ同教授は語を添へて曰く、『此の要求や、たとひ屢無意識なるにもせよ、實際に於て容れられたり』と。即ち他語を以て言へば――余にして若し同教授の意を誤なく了解したりとせば――チンダルの宣戰的宣言は神學者の敗北によりて是認せられ、彼等が千八百七十四年以來撤退したる戰線はその後恢復されたることなきなり。是れ、科學的研究の結果に眞實なる同情を有し、斯學の爲に盡瘁せる天才等の功績に深厚なる尊敬を表すると同時に、堅く當代の神學を把持し、その領分の寸地だも他に讓りたるを覺知せざる人士に取りては、隨分驚くべき言なるべし。されば、チンダルの預言が果して成就されたるや否やを問ふに先だち、此の宣言を少しく綿密に研究して、以てその意義を精確に定めざるべからず。然れど

も、前後の關係を示さずして唯だ一文句のみを批評するは、不公平の嫌あるを以て、余は爰に全文章を引用するの適當なるを信ず。曰く、

科學の不動なる位地は二三言を以て道破し得べし。吾人は宇宙論の全領分を神學より獲取すべきことを要求す。如何なる學問の組織にもせよ思想の系統にもせよ、科學の領分に立ち入らんとするものは、その領分内に於ては是非共科學の支配に服せざるべからず、而して之を支配せんと欲する非望を放棄せざるべからず。之に反抗せしものの失敗せしとは、過去の事實に於て明白なり、今日に於て尙ほ之を保持するは畢竟迷妄たるに過ぎず。如何なる組織系統にもせよ、苟も頑固におのが境遇に同化せざる有機体の非命を免れんと思ふものは、須らく智識の發達が要求するだけの程度に迄軟化するを要す。

さて、吾人をしてヂューワー教授が引用せる文句――吾人は宇宙論の全領分を神學より獲取すべきことを要求す――に歸へらしめよ。夫れ『神學』とは神の性質屬性及びその行動を研究するの學にして、『宇宙論』（コズモロジー）とは物質世界の起源性質及びその變化を闡明するの學なり。而して『領分』（ドメーン）とは領地を支配する主權、若くは主權の下にある領地を意味す。故にチンダルの文句を別言する時は、左の如くなるべし。曰く、神の性質屬性行動を研究す

るの學は、物質世界の起源性質變化に關して何事をも吾人に敎ゆるものに非ず、且つ此の點に於て吾人の耳を借るの價値なきものなりと。

三者の中ちその一は必ず眞實ならざるべからず。第一、神なしとせよ、然る時は神に關する學問のあるべき筈もなく、又たありもせざる學問より何物かを獲取することも出來ざるなり。第二、神あるも吾人は彼に關して何事をも知る能はずとせよ、此の場合に於ても同じく神學は存在し能はざるなり。第三、爰に一大第一原因のありて、彼は或る程度まで自身を人に顯現し、斯くて人も亦た彼の屬性に關して多少の觀念を有し得べしとせよ、若し此の場合にして眞實ならば（吾人はチンダルの演說中より彼も亦た此の方向に信仰を有せしことを証し得べし）、如何なる科學者と雖も、此の物質世界を以てその創造主の最も顯著なる顯現の一と見做さゞるべからず。

斯く詮じ來れば、チンダルの宣言は左の如き意味を有することゝならん。曰く、物質世界の研究者は、神が人間に與へたる最も顯著なる顯現が神の性質を論ずる學問に何等の關係なきことを要求すと。是れ何たる非科學的なるぞ、何たる非論理的なるぞ。固より神學は此の方面の諸問題に對して、滿足なる解答を與へ得ることもあるべく、又た與へ得ざることもあるべし。神學は他の科學より、

指示を受くることもあるべく、制限を蒙ることもあるべし。而かも他の科學が神學より宇宙論を奪ふ能はざるは、尙ほ羅馬敎會撿定濟の書籍がガリレオの目より日月星辰を奪ふ能はざるが如けんなり。

神學と物質科學との間に存する關係は、又た歷史と考古學との間にも存するなり。久しき年月の間、歷史は殆んど考古學者の穿鑿や發見に倚ることなくして、自家の位地を保持し來れり。斯く孤立の位地を保持したるが爲に、歷史は屢獨斷的誤謬に陷りぬ。(而もその誤謬は理論的方面に少なく事實的方面に多し、且つそれも根本的部面にあらで枝葉的部面にあるなり)而して考古學者は常に斯界の物質的材料を研究するによりて、多少この誤謬を訂正せり。且つ歷史には尙ほ不分明に屬する問題の殘れるもの少からず。然れども、若し之れが爲に歷史より全く考古學の領分を獲取すとせば、果して如何あるべき。若しレーヤードやペトリーやセースやエヅンス等にしてヘロドタスを局外に驅逐し去らんには、考古學の損失は如何に大なるべき。この『歷史の父』がものせる著書は、その中に最も價値ある分子を含み居るにも拘らず、之に幾多の矛盾衝突あるが爲に、そが解釋さるべき時期の來るを待つ能はざる性急の徒によりて、『虛言の父』と迄綽名されぬ。然るに、近時智識の益擴張し行くに從つて、此の史家を

辯護するに足る材料の發見さるゝこと愈多し。かのクリート島に於ける發見が、ミノスや迷宮やミノトアの古譚の歷史的なるを証せしが如き、そが最近の一例なるべし。

されば、獨り考古學が歷史に助力を與ふるのみならず、歷史も亦た多くの場合に於て考古的發見を解釋する日の來りつゝある如く、幾多の人々は、科學が神學の上に思設けざる光明を與ふると共に、神學も亦た科學の諸問題を闡明する時の來らんことを、忍耐して待ちつゝあるなり。實際を言へば、世には二種の人物ありて、甲乙相互に他の態度に同情し能はざるのみか、之を了解することすら能はざるなり。一は實驗的に若くは論理的に証明されざることを信ずるに鈍く、他は容易く『有り得べからざることとなるが故に信ず』と言ひ、且つ有限なるものに對して斯かる態度を取るは、無限者の存在を許す以上は當然の事なりと思ふ。而して世人の多數は、是等二種の思想の間に共通の點あるを見出して、以て兩ながら同時に認容するの道を知らず、而かも一方が必らず他方を攻擊すべき理由などは少しも存せざるなり。中世に於て、神學者は軍隊を味方としたるが爲に、科學者を攻擊して大功を奏したるが、三十年前に至りては形勢全く一變して、科學者は神學者に對して殺戮を逞ふし、チンダルの宣言は恰も

ウルバン第八世の刀劍の如くなりき。斯く甲乙孰れも他の手より宇宙論の全領分を奪はんと欲したれども、而かも孰れも斯かる事を遂行するの權利を毫も有せざるなり。

之に加ふるに、互に相了解するを妨ぐる一大障害は言語の上にあり。人々の思想は大抵彼等の言語に勝る。我が心中に浮びつゝある思想を、我が言語を以て自由に言顯すことの如何に困難なるかは、何人も善く知る所なるべし。精密科學の場合に於ては、此の困難は新熟語の鑄造によりて多少輕減され得るなり。是れ現今に於て最も普通に行はるゝ所にして、或る部面に烈しき反對を喚起しつゝあるなり。然れども、神學は精密科學に非ず、而してそが論ずる主題は多く精密なる定義を附するを許さず。あらゆる宗派や異端の歷史は、之を証し得て餘あるに非ずや。斯界に於て用語は一般に漠然なる意味に於て用ゐらる、而して此の漠然てふことは、實驗的學風に薫育されたる人々の容るゝ能はざる所なりとす。

宗敎と科學との間に眞正の平和を來さんと欲する提議は、須らく是等の事實を承認し、且つ二者孰れも他領侵入罪に問はるゝことなくして人間思想の全界を横行し得ることゝ、而かも他の權能を尊重しそが行動に干渉すべからざること

を承認せざるべからず。たとひ此事にして十分に承認されたりとて、科學は之が爲に少しも損する所なく、却て深く宗敎的敎會的感化を受け、科學者の攻擊的態度によりて感情を傷けられ居る人々の中より、おのが贊成者を引着し得べきなり。

斯かる位地の性質と價値とを表すべき例としては、そが進化說に對して取れる態度より善きはなし。純粹に物質的方面よりすれば澤山の事實を最も善く說明し、且つ萬有に顯るゝ現象を分類組織するに最も適當なる基礎を與ふべき臆說として、此の說は殆んど識者の全体に許容せられたり。請ふ、吾人をしてヂューワー敎授が如何に適切に科學の態度を言明したるかを見せしめよ、曰く、科學者が比喩的言語を用ゐ『萬有の法則』などゝ言ふは、畢竟言語の欠乏より來る不得已る事に屬す。實を言へば、彼は萬有に對して何等の法則をも制定し得べきものに非ず。若ししかせんと欲せば、彼は斯かる法則の由て生ずる不可測的原因を知るの智識を有せざるべからず。彼が『萬有の法則』といふ時は、單に一定せる事件の連續的關係を意味するに過ぎず。而して此の連續的關係や、彼の經驗せる範圍内には不變にして、それが爲め或る程度迄は彼をして斯かる場合には斯くあるべしと預言せしめ得るなり。然れども、科

學者が熱心しつゝある理論が如何に大膽に見ゆるとはいへ、彼は之が爲に一時的効力あること以上を要求する能はず。彼は明日如何なる新事實を經驗するによりて、今日の假說を改鑄するの必要を見るやも知れず。未知世界の廣漠なることを承認するより來る科學的理論の不定が、人智の有限を歌ひつゝある人士によりて攻擊さるゝは、豈に奇怪の現象に非ずや。

而して神學者は全く異なれる立場より此の問題に近づくものなり。彼はおのが絕對的若くは抽象的眞理と思惟するものに從て萬事を決定するを常とす。彼はおのれのが經驗せる範圍內にて進化說が果して眞なるや否やを問はず、却て此の說が果して現實世界を說明し得るや否やを問ふ。而して科學は決して之が返答を與へ得ざるなり。今や二個の事柄は明白なり。境遇が生物の原形を變成すてふことは何人も疑はざる所なれども、凡ての生物が一の原形より發生し來れりてふとは到底確定し得ざる所たるなり。此の兩極端の間に、あり得べき場合（ポッシビリチー）の數何ぞ限らん。人各一部はおのが心性の傾向により、一部は自ら抽象的理論に付する價値の多少により、一部は自ら證據を蒐集し且つ之を撿査し得る伎倆によりて、それ〴〵の位地を定むべきなり。されば、何故に甲の人は乙の人も亦た自己と同一の位地を取るべしと主張せざるべからざるか。

何故にダルウィン説を以て眞正なる萬有の解釋と承認し能はざる人は、之を一時の假說として許容し能はざるか。何故にダルウ井ン派の人は、その說の爲に一時的効力あること以上を要求し能はざるに、尙ほ神學の手より宇宙論を獲取せざるべからざるか。

デューワー教授は、科學が謙遜にして敬虔なる態度を取るべきことを斷言せり。教授は又た科學を代表して、そが物質の眞性質、勢力の眞性質、兩者の起源及合致に關して無知なることを白狀せり。否な彼は物質の秘密を到底測る可からずと言へり。最大神學者の一人は千八百有餘年の昔に方り、同樣の謙遜を以て神學を代表して曰へり、『我儕今鏡をもて見る如く見る所昏然なり』と。神學者も科學者も共に、神と顏を對せて相見、彼等が知らるゝ如く彼等が知らん時までに、彼等の知識完全なるべき時ありや否やは、固より保證すべからずと雖も、而かも兩者各が奏しつゝある眞正の成功は、たとひ一時は衝突するが如く見ゆるとも、遂に同一の終點に歸着すべき筈なるなり。神學も科學と異なることなく（デューワー教授に倣ひてケルビン卿の語を引用すれば）永遠なる名譽律に由りて、畏るゝことなくおのが前に呈出さるゝ諸問題に面接し、且つ十分の自由を以てあらゆる思想界を橫行する權利を主張すべきなり。神學も科學も共に

自家の利益を增進するは、決してその姉妹を排斥するにあらず、却て忍耐と寬容とを以て此の廣漠なる原野を開拓し、兩々相並んで勝利に勝利を加へ、而して光輝赫灼たる完全の日の來らん時相共に握手するを期するにある也。（今泉眞幸君譯）





講演

基督教的經驗に依て解釋せる基督教的信仰

校長　チャールス、カッバート、ホール

第一回　宗教の性質

近時宗教の研究は新しき形式と内容を得、新しき方面に進入し新しき精神を有することゝなりしが其變遷の起因を尋ぬれば思慮ある人士が自ら信ずる所を重んずることの減じたるにはあらで他の所信を重んずることの增したればなり、則ち凡ての信仰が宇宙に於ける人類の宗教的生命の變遷上に有する勢力と價値とを較定せんとの希望に基けるなり、此種の宗教研究は極めて近來のとにして科學中の最新最美最聖なるものなり、地方的にあらず國家的にあらず、宗旨的にあらず人種的にあらず博大優美なる人類的なり、決して東西の區別あることなし、神は「一の血脈より出し凡ての民を悉く地の全面に住はせ其時と住ところの界とを定め給へり此は人をして神を求しめ彼等が或は揣摩うる事あらんためなり然ども神は我儕各人を離るゝこと遠からざるなり」と云へるが如し。

歐米に於ては斯くの如き新美なる宗教研究の起りてより從來の地方的固陋即ち他の信仰をば異教の無意味なる迷想として蔑如するが如きものを一掃したり、基督信徒の中に斯るものありとせば夫は最高なる新思想に放棄せられたる儕輩のみ、泰西の宗教思想は廣大なる基礎に再建せられ其先驅者は、より高き觀察點に昇りてより廣き地平を下瞰しつゝあるなり。

西洋に於て比較宗教學に對して興味を抱くに至れる理由

（第一）　西洋に於て比較宗教學の勃興せし原因を探ぬれば人類の統一、人類進化は各人種の協力に成れると、及宗教の起源に關する近世の見

識に基けるものなり乞ふ先づ右諸點に付述ぶる所あらん。

人類の同源

（一）「人類同源の觀念は前世紀に於て定說となりしのみならず殆んど凡ての文明人の先天的豫定說となりたり」（ケールド氏宗教之進化）所謂同源は外形にあらず言語や風俗に存せずして精神に存す、凡て政治、社會、學問、宗教、種族等の差別の底に人類を通じて相同じきものあつて存す、是は敢て以上列擧せし差別の實存を否定するにはあらず、又た古來諸種の風俗習慣を猥りに抹殺し去らんとするにもあらず…………予はナダラと共に「我等は近世の研究が相一致して人間種族の同源なることを雄辯を以て斷言しつゝあることを曲說し又は誤解することと能はず」と云はんと欲す、此觀念の確定して活勢力となりし結果總ての人生問題の範圍を擴大ならしめしこと如何ばかりぞや、就中宗教問題をして國家的宗旨的を脫して全人類に關係せる問題とならしめたり即ち宗教は人類同源の大根本に存して多種の信仰及形狀を取つて現はれたるものなり。

人類進化上各人種の貢献

（二）宗教の新科學は人類の同源を基礎とするのみならず人類の共同的進化の觀念に基けるなり人類は一家族に屬す人性は同一なり、人類精神の同一は凡ての差別の中に常に到る處に存せり、古來の歷史を一瞥すれば人類が一の目的に向つて進步しつゝあるは明かなり進化變遷の間に於て其競爭に加はるものは獨り個人のみならず各國も亦之に加はりて人類の進步を助成し或は之を妨害しつゝあるなり、其進步たるや單に物質的に止まらず美術、科學等の交換は勿論、人類が純全の眞理に向へる宗教的意識の發展の上にも亦同一の現象を認む、則ち凡ての宗教は眞理の圓滿の爲めに各自何物かを寄與するところあるなり。

宗教は無限を知覺するに在り

（三）　以上の外他の重大なる一原因は宗教の起源に就き近代の學者が新意見を得たることなり「宗教の起源」なる語に二樣の意義あり一は歷史上の起點を指し、他は人性に存する心理上の起源を指すものなるが予の用ゐるものは第二の意義なり。

彼の十八世紀に於ける英佛の學者等の如く宗教を以て僧侶が自ら利するがために造作せし迷信と昔話にすぎずとなすが如きは今日の思慮ある人士を滿足せしむるに足らざるは言ふまでもなし又哲學者が煩鎖主義又は宗旨主義に反抗して思想の獨立を主張するに至りしが如き例へば第十七紀の學者スピノザ、トーランド等が自ら宗教的人物たるに拘らず僧侶に反抗するの餘り其後輩をして非宗教的たらしめ彼のウォールテールの如きを生ずるに至りし事情も亦吾人之を解する難きに非ず、然れども吾人が宗旨主義に付する意見は兎も角もあれ吾人は人類心理の研究者として僧侶は宗教の創造者にあらずして其産物たるを知る「宗教は僧侶組織の凡てよりも舊し」（チャストコー氏宗教の研究）宗教の起源は吾人の衷にありて決して外に存せざるなり、今日の思想家はまた原始天啓說に依て滿足に宗教の起因を說くに足れりとせざるべし、何となれば斯る原始天啓の證據を擧ぐること難きのみならず、假りに人類の初代に於て天啓を與へられたりと假定するも之に先つて宗教性の人性に存するものなきを得ず、神が其旨を人類に啓示し玉へるに當りては之を受くるの能力なかるべからず其能力は即ち宗教に外ならず、予は言ふまでもなく神的啓示を信ずる者なり然れども之を以て人性に存する宗教の起原を說明するには足らず。

宗教を僧侶の發明に歸する說又は原始に天啓ありしとの說を排除したる近世思想は人類の衷に於て宗教の大事實を心理的に說明し得べきもの

を求めたり、則ち或者は宗教の起源は初代人類が木石河流其他風雨電雷の如き自然の現象と共に靈の存ずるを信ずるの傾向に基くとせり、或者は敬すべき偉人や愛するもの丶死に去りし時祖先を禮拜し又は靈界を慕ふの心情より遂に見ゑざるものを信ずるの心となり斯くて宗教的實驗に化せりと云ふ者あり、或は天地の勢力に對して自己の微弱なるを感じ其勢力を挽回めんとの希望に出づとなす者あり、或は一層高き見地に立ち宗教の起因を人類の初代最劣の情体に求めずして其成熟せる情体に求めんとするものあり、其說に依れば宗教の心理的原因は極めて高尙なるものなり、則ち其起因は有限の人靈が無限絕体を慕ふの念に出づとなす者なり尊敬すべき故マクス、ミユラー教授の所說實に然り其言に云く「人心に於ける凡ての宗教の起源は無限即ち神に對する靈魂の追慕にあり」と。

・歐洲の大學者阿蘭のチーレ曾て云へることあり「かの世界歴史上の大勢力たりし信仰又は恐しき辛苦の間に幾百萬人を慰籍したる希望又は死に臨んで其眼を輝かしたるもの夢より來り得べきか或は之に對して然りと答ふる者あらん然れども宗教の因て來るや決して斯る想像に基くに非ず寧ろ之に反す是れ人類の無限に對する本來的無意的固着的感覺より來るものにして屹々其感を發言せんとし、或は過去未來の美はしき夢想皆是より來らざるはなし其發言や夢想は既に過去に屬するも無限の知覺は固定實質として存在す是れ人の靈魂に固着せるものにて人の全性の靈生の根本に伏在するものなり」と。

此に於てか一歩を進んで問ふべきことあり所謂「本來的、新意的、固着的なる無限の知覺とは何ぞやこの人類に普遍なる吾人が神に對する追慕は何より來れりや」是疑問に對しては誰だ一の答あるのみ、吾人が無限の知覺は無限より來り、神に對する追慕は神より來るなり、神の靈

我衷に在り我等は神より來りし者なればなり。以上の如き見地よりして宗教を研究せんとする泰西學者は研究批評の興味に加ふるに敬虔の念と深厚なる同情とを以てせり、則ち從來相爭鬪せし他の諸信仰と交通して自他相補助する所あることを疑はざるに至れるなり。

東洋人の基督教に對する態度

(第二) 以上の如き基礎に立ちて予は諸君と共に新しき精神と新しき見地より宗教を研究するところあらんと欲す、若し予輩の立場をして斯く公平ならざらしめば基督教に對して東洋人士の冷談なるも亦敢て怪むに足らず、蓋し(一)東洋の諸宗教は之を基督教に比すれば孰れも古代に屬し永き過去を有するものなり、吾人之を福音史に見るキリスト十二歳の時エルサレムの聖殿に於て老巧なる學者等の中に立ちて宗教上の問答を爲せし時學者等はその智に驚きしと云へることあり、思ふに東洋の諸宗教は學者等の如く基督教は實に年少なるキリストの如きにあらずや少年は無垢の清潔と不可思議にも優美なる威嚴とを有す、假令へ長者の尊敬を博するに足らずとするも、尙ほ研究を誘起すべき興味を有することを疑はず。

(二) 他の一理由は基佛兩教の哲學的根本思想に於て兩立すべからずとなすこと是れなり、予は敢て之を否定せんとするにあらず例へば神、世界、自我の三觀念の如きは兩者大に相異なれり、然りと雖も予が此講演の目的を一言することを得ば予の精神は國家又は敎會を代表するにあらず全く眞理の研究者なるシカゴ大學の代表者として眞理を探究し各宗教に含める眞理を冷靜に比較せんとするにあり、即ち互に信用し智識上の朋友として公平に基督教を其功績に依て判斷せられんことを要求せんとするにあり。

宗教研究に必要なる心的態度

(第三) 故に宗教を公平に研究せんとする學者

には左の心的態度を要す。

先入の僻見を棄てよ

（一） 先入の僻見を棄て公平の判斷を下だすの要あり例へば基督教を以て政治上侵畧主義と關係ありとするが如き、或は宗派上の爭闘と基督教とを混視するが如き、基督教の代表者の不德行爲を指摘して其宗教を排斥するが如き先入の思想に依て之を判斷すべからざるなり、今日に於て基督教國と侵畧主義とを同一視するは一理なきにあらざるべしと雖も基督教の初代に溯れば基督教は實に歐州の政府に壓せられキリスト自らは遂に殺害せらるゝに至りき、政府の保護を得るに至りしは實に近代の事なり今日の所謂基督教國と云ふ者決して基督主義の實行せらるるものと云ふを得ず、宗派の弊害を喋々するが如きも亦然り凡そ偉大の宗教に諸種の異論異說を見るは怪むに足らず、論爭の生ぜざるが如きは蓋し其中に活氣の存せざればなり、宗派分立の利害如何は輕々しく斷定し難し且つ其國家に依て宗教の形式を異にするは自然の勢なり、基督教の日本に入り來るに及んでも亦思想上の論爭を發生し來らんこと明かなり、是れ其中に活力を有するの證據として見るべし、基督教代表者中に不德者ありとは實にその言の如しキリストは其弟子の爲に賣らるゝに至れり爾來信徒中にありて不德者の絕えしことあるなし然れども之を以て直ちに基督教を責むるは僞造金銀を以て金銀其ものをも棄てんとするに全じからずや哲學者の執るべき途は宗教の外面に存する弊害弱點等を顧みずして直ちに愛と光明とに輝ける靈山の頂上に達せんと期するに在り、基督教を判斷せんとする者は宜しく基督と基督の精神を有し宗派的名稱を有てるよりも遙に大なる者に依て判定せよ、基督教は歐州人にあらず、基督教は西洋の產物にあらず只西洋は之を理解せんことを務むる者に過ぎず。

歴史を重んぜよ

（二）　基督教はセミチック人種に屬し歐州的に見ゆれども元來亞細亞に屬し政治上に微弱にして宗教に强剛なる猶太に起れり……猶太人なるものはフイニシャ人の商業的智能なく埃及人の建築的天才なくアッシリャ人の國家的野心なく希臘人の詩的思索的天才なく羅馬人の軍畧的政治的能力なかりしも宗教上の能力に於ては是等の凡てに超越せり……吾人は神、世界、自我の觀念の起因に至りては遂にセミチック人種に之を求めざるを得ざるなり、その絶頂はキリストに至りて最高の表顯、解釋、證明、完備を得るに至りしなり。基督教は猶太より起りしも猶太教と同視すべからず人類の歴史的發達の成熟せる結果殊にイスラエル民族の發達の極點と云ふべきものなり、單純に猶太人の繼承としては基督教を說明することを能はず、基督教は猶太人より來る觀念とアリヤン人が神の性質に關する直覺に就ける最要の概要とを統一同化したればなり。

他人の哲學思想に同情せよ

（三）　他人の抱有する哲學思想に同情を表するの必要あり、敢て自說を棄るの要なしと雖も試みに其位置を轉じて研究するの要あり、猥りに他人を輕蔑する者は到底其說を充分に理解すること能はず、語る者聞く人互に此心掛なかるべからず、予は諸君が基督教徒の所說を理解せんとの至誠なる態度を以て傾耳せられんことを望む、斯の如きは實に人類統一の觀念に相應しき精神にあらずや、此の如き精神を抱持し予が喜んで包持し謙遜に語らんとする基督教の研究に近づき相互の信用と尊敬を以て彼即ち其名稱の如何を問はず吾人が依て生き動き存在せる實在者と交り其前に共に立たんことを望む。

第二回　基督教の神に就ける觀念及び此觀念と經驗との關係

西洋に於ける多數の哲學者が考ふる所によれば神の觀念は實に人類智識の終局なり、キリスト教も亦神の存在を以て根本的假定となす、キリスト曰く「永生とは唯獨りの眞の神と其遣し、イエス、キリストを識る之れなり」と、即ちキリスト教は先づ神の存在を假定し智識によりて之に達せんとするなり、智識は此神に達する最必要なる鍵なり、夫れキリスト教の眞理は其周圍に墻壁を築き人をして之に近くを得ざらしむるものにあらずして萬人をして此智識の方法によりて之に到達するを得せしむるものなり、而して余も亦今晩諸君と共に此萬人の等しく辿り得る道によりて神は如何なるものなるかを考へんと欲す、若し夫れ余輩の説の當否如何に至りては一に諸君の批評に任し、余はキリスト教の神とは果して如何なるものなるかを諸君の前に告白するを以て足れりとせん、夫れ人々の有する結論は如何に相異るも等しく眞理を慕ひて之を得んとするにあれば、互に相交はり論ずるに於て些の妨あるべからず。

キリスト教の神とは如何なる者か、一言にて之を曰へば無限絶對の神なり、然れども單に無限絶對の神と云ひしのみにては未だ充分其意味を明かにせざれば吾人は猶一歩を進めて其内容如何を研究せざるべからず、是れ等しく無限絶對の神と稱するも其内容に於て大にキリスト教の神の觀念と異なるものあればなり、今先づ自然神教の教ふる無限絶對の神とキリスト教の信ずる無限絶對との區別を論ぜん。

超越的神、其要素、一、無限の神、二有限の世界

自然神教の教ふる無限絶對の神は通常超越的神と稱す、抑も唯一神教を取る哲學者が最困難を感ずる點は一方に於ては神に對し完全なる解釋

を與へ他方に於ては此世界に滿足なる說明を附し以て兩々矛盾衝突なからしめんとすればなり、或學者は此兩者を全く同一視して或は有限の內に無限を沒し或は無限の內に有限を吸收せしむ、然れども此超越的神の觀念を取るものは之に反して神と世界とを全く區別す、即ち神は無限絕對にして有限なる世界に對しては何等の關係あることなく全く越ゆべからざる墻壁を以て相隔ち、神は犯すべからざる君主にして人は力なき奴隸なり。更に尙よき例を取らば機械師と機械の如し機械師が機械を造りたれば之を其運轉に任せて自ら干涉せざるが如く、神は此世界を造り其法則に從ひ運轉するに任せ給へり、神は是に對して少しの干涉をもなさゞるものとなす。

此の如き思想は最も單純なるものなり、王位、王冠、王宮の如きは人々の常に見る所にして之によりて神の觀念を現さんとせしは最容易なる事にして又實に信ぜられ易き說なり。

其結果、一、二元說　二、宿命說

以上說述したる超越的神の觀念は思想上に於ては純然たる二元說となり又倫理上に於ては宿命說となり終るなり、即ち此說は一方に於ては無限の神を肯定し他方に於ては有限の世界を認定し而して此の二箇の實在は相分離し互に交涉するなしとす故に到底其間に調和を見出すこと能はずして哲學上最困難なる說となるなり、又一方に力强き神をおき而して他方に人を全く力なしとなすが故に之れが人生觀、倫理問題に影響し其結果として人は全く無限の神に服從せざるべからずとなし遂に宿命說に陷らしむるなり、多くの人が人生の運命を悲しみ終に社會的生活を棄て厭世的生活をなすに至るものあるは多く此種の觀念によるなり。

基督敎は斯くの如き觀念を採用する者にあらず、神の無限なることと及世界の有限なることをば

決して否定せず、從つて其兩者の間に區別の存するとも亦之を承認するといへども超越的神の觀念を取る說の如く此間に何等の交涉なしとせざるのみか却てキリスト敎の思想によれば兩者の間には最も親しき關係存するなり、即ち萬物は皆神によりて存し神は又世界人類を通じて働き給ふといふにあり。

若し然らずして無限なる神は有限なる世界に働くことを得ずとせば神は無限の能力を有するものにあらずして或定限を有することとなり、故に神を無限なりとせば彼は又此有限なる世界にも働き給ふことを得るものとなさゞるべからざるなり。

キリスト敎は斯く超越的神の觀念即ち神は世界以外に存するものゝ如く敎ゆるものにあらず、然れど思想深き諸君は曰はんキリスト敎の聖書中多く此の超越的神の觀念に似たる思想の存する所あるにあらずやと、然り、聖書中にも神を王と呼び人を價値なき虫類の如きものとなす所なきにあらず且ユダヤ敎にはエルサレムに神殿あり其神殿には至聖所と云所ありて人は之に近くことを得ざりし又俗基督敎に於ては神を以て遠く天の一方に在ますものの如く感ずる思想なきにあらず或は祈禱に於て或は說敎に於て此の如く言ふこと屢々あり然れどもキリストは神人交通の可能なることを說き且之を其の最も重要なる事實として主張するなり、此神人交通可能說を取るキリスト敎は決して超越的神の觀念を取るものとは同じからざるなり、即ち天の一方に客觀的に存する超越的神は決して人と交通すること能はざるものなり、然れどもキリスト敎の神は或は天に在すといひ或は之に類する語を用ゆるも尙親しく人間に交通するの神なり、從つて有限なる世界にも關係を有する神なり、故にキリスト敎の神の觀念は決して超越的神の觀念にあらざるなり、其祈禱に於て天に在

すといふが如きも決して超越的神を云ふにあらずして更に他の意味を含めるものと解せざるべからず。

以上超越的神の觀念とキリスト教的神の觀念との差別を論述したり、次に汎神的神の觀念とキリスト教的神の觀念の關係を論述せん。

汎神的神

汎神的神の觀念は凡て否定によりて達せられたる觀念なり、先づ彼等は超越的神の觀念を取るものに反して世界と神との區別を否定せり、又彼等に反して有限なる世界の實在をも否定せり、凡て五官に觸るゝもの凡て有限なる意識内に現るものは皆迷妄なり、唯一の實在たるものは只神のみなり而して其神は凡ての屬性を有せざる「純有」（ピユアー、ビイング）なり在るといふことの外に何等の性質をも有せざるものなり故に此神即ち純有は如何樣にも定義すると能はざるものにして、之に關しては何も肯定すること能はず只否定によりてのみ達せらるゝ觀念なり、余の知れる印度の哲學者が「絕對とは何とも言ひ得ざるものなり」と云ひしは即ち汎神的神の觀念なり。

斯の如き觀念は吾人の殆んど了解すること能はざるもの、實に奇異なる思想と言はざるべからず、然れども實際此の如き思想が人類間に存在することは掩ふべからざる事實なり、從つて其理由の存することも明ならん、思ふに此世界は有爲轉變極りなきの世界なり、故に此の如き世界に心を留むる間は誠の平和を得ると難し、依て此煩悶苦惱を脫して解脫せんとするには先づ此有限生滅界を迷妄となし只絕對不變の實在に自己を埋沒せざるべからず、之れ實に實際的に汎神說の行はるゝ理由ならん、即ち彼等は此世界が餘りに價値なく餘りに汚しきに失望し更に一層高尙なる世界を求めんとする者なり、恰も滿目一莖の草木なき沙漠に於て蜜と乳の流るる地を望んで之に入らんとするものなり斯く考

へ來れば一切の有限世界を否定し無限絕對の神に達せんとする汎神教は人情の自然に發する要求といふべきなり。

否定法によりて達せられたる汎神的神の觀念の殊質一、神の廣大を感ずると二、現實世界を迷妄と見做すと、三、靜寂を欲すると

以上論述する如く汎神教的神は一切有限なる人間の意識內に現るゝ凡ての屬性を否定するものなり從つて彼等は神の非常に廣大にして無限なることを感ずるものなり、實に神は彼等のいふが如く廣大なるものたるに相違なからん、而して彼等は無限なる神の外に有限なる世界の實在を認定せばこれ神を限るものとなす、故に彼等は無限廣大なる神の實在を肯定せんとして全く有限なる世界の實在を迷妄となすものなり。

更に又彼等は倫理上實際上靜寂主義を取るものなり、此世界の俗塵を脫して無限の休息に入らんと望むものなり、之れ實に前にも云ひし如く人間として自然の要求なり人生如何にわずらわしく馬鹿らしく又汚れたることと出れることの多きかを思ふ時は人誰か斯の如き感想を起さゞるものなからん、故に此世を棄て神に一致せんとして、或は寺院に逃れ或は山谷に隱るゝもの古來甚多きなり、超越的神の觀念が宿命說に陷り又汎神的神の信仰が靜寂主義となり共に世に終るは同一なり。

基督教の汎神論と異なる點

一、肯定法によりて神に達すると

基督教は彼の超越的神の觀念を採用することをなさざる如く、又此の汎神的神の觀念をも否定するものなり、キリスト教に於ては有限の世界を實在となさずんば決して無限の實在を肯定することを能はずとなすなり、卽ち無限の神は有限の世界を通じて初めて顯れ得るものとなす、然れども基督教の神の觀念は凡神教のそれと相似

たる所なきにあらず即ちキリスト教も否定法を用ひて先づ神の觀念中より有限なる屬性を除去するものなり、然れどもキリスト教は其上にて更に肯定法を用ひて無限なる有らゆる屬性を之に附加するなり、之れ汎神教と大に異る所なり、故に汎神的神の觀念の內容は全く空乏なるもキリスト教的神の觀念の內容は甚富豐なるものなり、即ちキリスト教の神は純有にはあらざるなり。

茲に於て余は諸君の一考を煩さんとす、人は果して能く汎神教の敎ふるが如き何とも定義すべからざる神、屬性を有せざる非人格的の神、內容空しき純有、此の如き神を以て滿足し得るや、余は更に印度教の例を引き諸君に向はんとす、諸君の已に知らるゝ如く印度教は汎神教の一派なり、否定法によりて非人格的神に達せんとするものなり然るに實際に於て彼等は此の如き神によりて滿足せず遂に最卑しき人情的多神教となれるにあらずや、然らば哲學上に於ては或は此の如き神を立て得んも實際上に於ては人は到底之にて滿足すること能はざるなり。

二、人類の人格觀　一、無限者は自己を啓示するに有限者を要す、二、人は神より分化的に流出す

キリスト教の一大支柱とも稱すべきものは神と人とに關する觀念なり、凡神教がキリスト教に異なる第二の點は即ちこゝに存するなり。キリスト教は神と人との實在を共に承認す、然れども凡神教は人即ち小我の實在を否定して只大我即神のみの實在を肯定す、又キリスト教は神とは人と共に人格を有すとなす、然れども汎神論は之を否定するなり、即ちキリスト教は汎神教と異りて箇人の實在を許し、且つ其箇人は神と同じ人格を有するものとなすなり。

若し夫れ汎神教の如く箇人の實在を否定せば如何にして無限の神は顯はるゝことを得ん、故に

キリスト教の考へは箇人の實在を承認し之によりて無限の神が顯はるとなす、即ち箇人は神の顯現なり、語を換れば人は神より分出したるもの即ち神は人に於て再び己を產出したる（God reproduce himself in man）ものなり。

故に人の理性　良心は神の理性及良心と同一性質のものなり、古き傳へによれば人は神の氣息によりて作られたりと、實に意味深き眞理と云ふべし、斯くして神の存在及其性格を明かにし又人間の實在及其價値を確實たらしむるなり。

汎神論の如く箇人の實在を否定せば神の屬性空しくなるのみならず又其存在をも證すること能はざるなり。

基督敎的神の價値如何を判定するものは經驗なり經驗は（一）迷妄にあらずして（二）確實なり

吾人は超越說の長所あるを知れり、又凡神論の人類必然の要求に出でたることをも認むるものなり、而も尙之を棄つる所以は何ぞや、他なし經驗の證明に依りて其不完全たることを認むればなり、蓋し宗敎の價値は經驗によりて定まるものなればなり、今諸君に向ひ經驗の效力如何と問はゞ恐くは二樣の答を得ん、一は之を以て迷妄となし他は之を以て確實となさん、猶詳言せば一は絕對者の經驗は確實となすも箇別の人々の經驗は迷妄なりとなし、又他の者は箇別の人は絕對者の顯現なれば其經驗は確實なるものとなすものなり、而して其答は互に相反するも余は今此兩者の間に共通の點あることを信ず、即ち兩者共に自我なるものの存在をば認定するなり假令一は其の自我が箇別の人を超越して存するとなし他は其箇別の自我が絕對の自我と共に存ずるとなす而も共に自我なる者が必實在することを許す博士マックスミュラー曰く若し自我を否定せば何をも立言すると能はずと、故に諸君は經

驗を信ずるも信ぜざるも自我の存在は肯定せざるべからず。

而して又諸君は此の箇人的自我なるものが同一なること(Personal dentity.)を自覺せらるゝならん、昨日の我と今日の我とは同一なりと自覺せられん之れ心理的に言へば記憶の力によるも哲學的に云へば自我の存在する故なり。

キリスト教は自我の存在を信ずるものなり又其自我は神の發現となす故に其箇別の自我が經驗することをも眞實として信ずるものなり、經驗とはもと證明することなり、詳言せば自己の心的狀態を意識することなり、宗教的經驗とは人の感情良心理性行爲に關して我を高め我を慰め我を活かし我を改めたる意識の總計にして吾人は此の如き經驗を尊重せざるを得ざるなり。

是等の經驗に徵すれば今余が述べたる神の觀念の價値は如何、吾人の良心理性行爲を高むるにつきキリスト教的神の信仰の價値如何、之れは實に此の迷妄ならざる確實なる自我の經驗によりて判斷すべき問題なり。

第三回　神の最高示現たる主イエスキリスト

余は前回に於て基督教の所謂絕對無限の神の觀念に就て論ぜしが今夕は更に進んで此觀念の內容を一層精密に研究する所あらんとす余は便宜の爲之を左の四項に別ちて論ずべし即第一時間を超越したる最高絕對者、第二神の性格、第三神の示現第四イエス、キリストに顯はれたる神の品格是なり。

時間を超越したる最高絕對者

時間を超越したる神とは神は始めなく又終りなきものにして有限なる時間に制限せらるゝものにあらずとの意なり彼の雲に聳ゆる大廈高樓が必ず之に相當する基礎を有るが如く基督教も此

時間を超越したる絕對者を以て萬古不易の大基礎とするものなり思ふに此天地には一として永遠に亘りて不朽なるものなく皆有限なる時間の內に制限せらる國家の興亡、人物の起伏、事業の成敗、觀し來れば宇宙は是生滅變化の限りなき連續にして人生亦一瞬の生滅のみ吾人若し眼を此一點に注ぎて天地宇宙を觀察すれば萬物皆何等の意義をも有せざるものとなり其極遂に厭世觀に陷りて世を避け山に逃るゝか或は宿命說となりて自暴自棄するの外なかるべし然るに基督教に於ては此生滅變化極なき世界の中に生滅變化を超越して永遠變る事なき神を發見し茲に始めて安心立命の地盤を得るものなり聖書に曰く「主にありては一日は千年の如く千年は一日の如し」と又「なんぢの目前には千年もすでにすぐる昨日の如くまた夜のまの一時に同じ」と是吾人の所謂時間に超越したる神の觀念を最も明に表白せるものと云ふべきなり。

されど神が有限なる時間を超越すとは單に彼が有限なる制限を免ると云ふの意にあらずして更に一層深遠高尙なる意義を有するなり。

即ち神は無限の實在者たるのみならず又實に有限界に顯現するものなり、有限界は神が自己を啓示する狀態にして其變化生滅は不變不滅の無限者を表現せるものなり、故にキリスト教の思想によれば此の變化極りなき世界にも永化不滅の神在まして不完全不德義の社會にも之を善に導きつゝある無限の力あることを信ぜり、此信仰こそ吾人をして此有爲轉變の世にありて尙常に元氣に希望に充たしむるものなり、然らずんば吾人如何にして其の世に處し勇力を保ち己が意志を實行することを得んや故に無限の神は時間を超越して存在するのみならず又時間內にも發現するものなり、即ち神は無限に存在するのみならず有限の此世界にも現實存在せるなり。

神が此の世界に現實存在する事

神が時間を超越して永遠に存するも若し世界と人生とに相關するなくんば遂に吾人に何等の價値なきなり茫々たる荒原屹然たる岩石は蘇苔蒸生して風雨の間に千歳易る事なきも吾人に取りて何等の意味あらんや吾人は神が如何に永遠に存在するかに就きて一層深く考へざるべからず。

已に前回に於て論じたる如く基督教に於ては此世界を虚無迷妄なりとせずして無限絕對の神が自己を顯現するの方法なりとす故に神は宇宙と人生の中に普く現存して常に活動せるは吾人の堅く信ずる所なり。

神が現實此世界に存在する事に付倚三種の方面より之を考へんとす。

（一）　神の存在は此自然の存在に確實なる基礎を與へ又之を神聖たらしむるものなり此世界に神なくんば如何にして其存在を信じ得んや若し此の自然界に神なくんば是主なき家、精神なき人の如し、故に此世界を全く虚妄となさず何等か確實なる實在と意味の存するものとなさんとせば必此內に神の存在することを信ぜざるべからず、之れ吾人が此自然界を虚妄となさず、却て神此世界に實在するが故に此世界は實在せるもの神聖なるものとなすなり。

（二）　神の存在は又人の心を慰め其精神上の力たるものなり夫れ人は世に在りて孤獨寂寥を感じて止まざるものなり啻に未開蒙昧の時代に於てのみならず社會の交通頻繁なる文明の世に於ても猶絕へず此感は人を襲ひ來り情緒濃やかなれば濃なる丈け交る人の增せば增す丈け人は益々衷心の物淋しきを感ずるものなり況んや萬事意の如くならず剩へ世に一人の同情者だになきに至りては人は焉ぞ其寂寥孤獨の感に堪へ得んや而も神は吾人の間に現存し吾人に交り吾人に生命と元氣と慰籍とを與へて以て人世に安きを得せしむ實に吾人の神は人情の神にして吾人の

祈に耳を傾け吾人の求めを聽き給ふなり聖書に曰く「すべて勞れたるもの重きを負へるものは我に來れ我爾曹を息せん」

（三）　神の存在は自然界の基礎人類の力たるのみならず又凡て此宇宙に合理的意義を與るものなり宇宙は支離滅裂何等の組織統一なきものにあらず其間には一定の秩序と理法の存するあるなり人は之れ合理的存在物なり、又宇宙全体も又合理的存續なり、此合理的存續は常に一定の意義を有し一定の方向に向つて進む即ち宇宙自ら目的を有し遂に到達すべき歸趣を有す、若し夫れ神なくんば如何にして之等を說明し得ん、然らば自然界も人生も又其等が合理的道德的たることも皆神の存在に對して初めて意義を有するに至るなり。

神の品格　其一　神は光なり

余は之より進んで基督教々理の中心たる神の品格を論ぜんと欲す然れども神は固と無限絕對にして其全貌は有限なる人の悉く窺ひ知るべきにあらず唯鏡面が實物を反射して人をして間接に其眞相を知らしむるが如く神の品格も亦之を反射によりて其幾分を推知するを得るのみ今其反射とは即光と愛なりとす。

神を光と觀るは勿論基督教獨特の思想にあらず他の宗教に於ても多く之を見る蓋し基督敎は獨眞理を私するものにあらずして却而他の宗教と同一眞理を共有するを以て更に深き眞理の證明を得たるものとするものなり。

光は喜悅、榮光、美等の諸德を顯はすものにして最高絕對者の品格を光として觀ずるは最も當を得たるものなることを信ずるなり。

抑も光なるものは通常三箇の意義に於て用ひらる第一物質的光、第二智的光、第三倫理的光之なり故に今此三種の光に比較して神の性格を研究せん。

（一）　物質的光　物質的光の大なるものは太陽

なり太陽は萬物を照して之を生長せしむるものなり神の德恰かも之に似たり、よく萬民の心を照して之に平和喜樂を與ふ、又光線は實在せるものにあらずして吾人の視覺が此く感ずるものなり、然れども光線には必其中心たる光を發するもの存在するなり、此く滿足平和快樂等も其れ自身實在せるものにあらずして神なる中心より發し來る恩惠を人が感ずるによりて生ずるものなり、故に神なくんば光なき暗夜の如し平和喜樂あることなし神は實に平和喜樂の根源たるなり。

（二）　知識的光　光は又知識的の意義に用ひらる人は其各有する知識の光によりて眞實眞理を發見せんとす、然れども人は其知識に制限あるが故に此世界の實層を其あるがまゝに知り得ること能はず然れども神は宇宙の眞意義、眞事實、眞原理を知り給ふ即ち此世界は神の智識の通りに存在す。

（三）　倫理的光　光なる語は又倫理的に用ひらる即ち正義、公正潔白等は光なり、不義不正は暗黑の方面にして、神は實に正義至善の中心、八面玲瓏たる德の光なり。

即ち「神は光なり」と云ふ時は吾人が以上三ヶ條に付きて述べたるが如き意義を有するなり要言せば神は萬民の心を照し且之を活かすもの神は知性を有し凡て眞理の所有者、又正義道德の中心なり。

神の品格　其二　神は愛なり

神を以て愛なりとするは基督教に特有とする所にして玆に至つて基督教の眞髓に達せるものと云ふべきなり愛は主觀と客觀を豫想す、發して愛となるべき本質は如何に內に滿々たるものあるも主觀客觀の兩者相分れざる時は未だ愛たること能はず何となれば愛は一個の人格が他の人格を慕ふより生ずるものなればなり基督教の所謂父なる神は常に自ら働く所の神にして彼れは

同時に其働の目的を有せり愛は即此主客兩者の間に顯はれしものにしてかの三位一体の教理は實に此眞理に基きて生じたるものなり。

然れども神を愛とするの思想は甚單純にして到達し易きが如くにして實は然らず人類は永く之に達すること能はざりき其最も困難を感じたるは蓋し惡の實在なり天變、地異、戰亂、饑饉、災害、罪惡の如き人々の最も嫌惡する所のもの却て天地の間に充ち滿ちて何人も免ること能はず此事實は容易に人をして神は愛なりと觀ずるを許さゞりき彼の佛教の如きは蓋し此見地より出だせるものなるべし又彼の猶太教は世界の諸宗教中頗る發達せる者なるべきも其奉ずる所のエホバの神は唯々猶太國民の守護神にして世界萬民に幸する愛の神にはあらざりき然るに猶太教が漸次發達して遂にキリストに至るに及んでは此國民的守護神は一變して世界萬民の神となり天地宇宙を包容するの神となれりキリスト曰く「萬民を引きて我に來らせん」と神は實に善惡と時代と人種と國民とを超越して之を愛するなり即神は世の始めより愛にして亦未來永遠に然りとす且吾人が善德効績を有するが故に之を愛するにあらず神は人の知らざる先に之を愛せるなり更に吾人の注意を要するは神は單に國民として人類として之を愛するのみならず實に其中の個々の人に對して其生活の狀態に注意し其父となり其同情者となりて之を愛するなり是神が萬民の父たる所以にしてキリストに於て最も明に表現せらるゝ所とす。

神の示現　即倫理的目的の爲に己を顯現する事

神が自然及人類の間に自己を示現すとなすの思想は日本其他東洋諸國に於て敢へて珍らしき事にあらざるべし然れども基督教に於ける神の示現の觀念には亦自ら特有の點あるなり思ふに神の示現に對する思想は大略分て二種となすこと

を得べし其一は即神の示現は實にあらずして虛なりとなすの說にして他は神は生命を有するが故に自己を示現するは其本性の然らしむる所なりとなすものなり印度のクリスナの話に世が墮落して罪惡汚穢に滿つるに至りしかばクリスナは自己を世に顯現したしと云へり然れども印度哲學によればクリスナは純有にして何等の屬性を有するものにあらず從つて自己を示現するを得ざるものなりされば此示現たるや決して實にあらずして虛なり唯世が不都合なるものとなりしを以て方便として己を現はしたるものと俗にしか信ずるまでの事なり內密の事實は全く虛妄に過ぎざるものとなす。

然るに基督教に於ける神の顯現の思想は全く之と異なり神の本性は愛なれば必然主觀と客觀とを要す而して神は自ら意志力を有するものなれば自ら自己より發出して有限世界を造り自己を其內に示現するなり是基督教に於ける示現の思想にして其根據を形而上學的必然に歸せるものなり彼の神が方便の爲虛妄なる示現をなすとの說とは根蒂に於て相違するものと云はざるべからず斯く論じ來れば神の自己を示現するは全く倫理的目的によるものにして基督教の意義玆に至つて深遠を極むと云ふべきなり。

神の示現の方法

神の自己を示現するの方法凡左の三つあるが如し

（一）　自然界によりて自己を示現す、神が自然界を通じて自己を示現すとの思想は決して余が一家の私言にあらずキリストが山上の說敎に於て天空の鳥野の百合花を引きて神の働きを敎へられたるは正しく此思想を顯はされたるものにして神は實に天地の美の本源たるなり殊に近來の一大發見たる進化論は神の自然界に於ける働きに一層確證を與へたるものと云ふべきなり。

（二）　歷史によりて自己を示現す、古來東洋人

中には人類歴史に何か意義を含めることを發見したるもの少からず然れども其觀測キリスト教と大に其趣を異にし徒らに其暗黒の半面を認めて悲觀厭世に陷り或は微々たる人力の歴史の大勢に抗すべからざるを思ふて宿命説に至るに過ぎざりき然るに基督教にありては一面に於ては確かに害惡の此世に存在するを信ずと雖も歴史の指導者は正義と愛に富める全能の神にして最後の勝利は此神に歸すべきことを信じて疑はざるなり。

(三)　神は人を靈的に照明するによりて自己を示現す印度に於ては智に於て神を知らんことを務めたり、基督教に於ては神は靈なれば人も又靈に於て神を知り得るとなすなり、即ち神は人の靈に自己を啓示するなり、ポーロも神の靈と人の靈とは元と同体にして互に相照應する者なるを教へたり只神は人の悟性を通じて己を現す者にして悟性は萬人の共有する所なれば神の示現は一般人類に共通なる者とせざるべからず彼の神の示現を基督教會に限るが如きは決して公平なる思想と云ふべからざるなり又古來世界の聖賢と呼ばるゝ人々は皆神を知るを得たるの人にして神は彼等を通じて己を示現したるなり。

イエス、キリストによりて現はれたる神の品格

神はかくの如く種々の方法によりて己れを示現したるが遂に其最高示現としてセミチック人種中の一人たるイエス、キリストによりて最も完全に最も高尙に且最意味深く己を現はせり而も其目的は全く倫理的にして且人類一般に關係するものなれば決して一部の人の私すべきものにあらず其猶太人中の一人に顯はれたるは一種の偶然なり基督教は神を專有するものにあらずキリストは人類共通の人格にして神は之によりて己を人類に示現したるなり。

又基督教の思想によれば神の啓示は進歩的なり

基督教の聖書以外に啓示なしといふにあらず又過去にのみありしといふにあらず、却て啓示は人類の進歩に從ひて、愈進歩的に啓示せらるゝものとなすなり。

キリストは神の化身なり

以上論述する如く神の示現は決して虛妄にあらず方便說にあらず、キリスト教によれば之れ神の本質上必然の事たるなり、而して其方法は自然により、歷史により又人の靈によりて之を啓示せり然れども最高の示現はイエスキスリトによりて成就せられたるなりとなす。

蓋し神の性格は人格によらざれば完全に之を現すと能はず、又其人格は人の生涯によらざれば明かに發現すると能はず、故に神は玆に最完全なる人格、最高尚なる生涯によりて其性格を啓示せんとせられたるなり。

化身に關する說

一、化身とは人間の自我を普遍的自我若くは梵天と同一視するもの

二、神の愛の本性より必然的に發出せるものとなすもの

印度哲學に於ては宇宙には只梵天即ち大我なるもののみ實在にして小我は其のまゝにては非實在なれど其小我が大我に歸する時に於ては實在す此の如き小我は之れ普遍的大我と同一にして之れ實に梵天と同一身たるなり、此の如き時に之を梵天の化身といふ、即ち印度哲學の思想によれば化身とは大我が小我となりて發現せるもの而かも此兩者は全く區別なき同一實在なりとなすものなり。

基督教に於ける化身說は之に反し神の愛なる本性より必然的に發出したるものとなすなり前段已に陳ぶる如く愛は客觀及主觀を要する故に神は主觀より分出して客觀となり玆に愛の對象を得たり恰も吾人が意識に於て自己を主觀と客觀に分つを得るが如し基督教の化身は斯くの如く

にして生じたるものにして決して小我と大我とを同一視したるにはあらざるなりされば其基は形而上的幷に倫理的必然に出たるものと云ふべし。

然れども玆に注意を要するは化身の思想は彼の英雄崇拜と全く其撰を異にせる事なり古來東洋には英雄崇拜の行はれたるを聞く勿論人傑の人格と其美德とを驚歎し之を崇拜するは人情の自然にして決して非議すべきことにあらず吾人はキリストの德の之を仰げば天の如く高く之を探ぐれば淵の如く深きを知る然れどもキリストを神の化身となすの思想は決して此高德の歎美に出でたる者にはあらざるなり即神が形而上的及倫理的必然より自己を有限なる時間內有限なる人を通じて示現したるもの是即キリストなりとなすなり、フエヤーベルン曰くキリストの人格に關する觀念はキリスト教を作れるものなりさ、實に之れキリスト教の依て以て起つ所以のものなり、キリスト教存亡に關する問題なり、即ちキリスト教は其根本の思想として實にキリストを以て英雄的に崇拜する者にあらずして之を哲學的倫理的神の化身なりと主張するものなり之れ基督教が世界至る所强大なる勢を以て傳播し人心を引着する所以のものなり思ふに天下人心の斯くの如く翕然として集り來るは必ずや偉大なる眞理の其中に含有せらるゝを證すべく人心最深の饑渇之によりて醫さるゝことを得るを思へばキリストを以て神の化身となすことの決して一種の迷信にあらざることを信ずるに足るなり日本に於てはキリストの德高きことを思ふて之を神の子となすといふ說多しと聞く、實にキリストは完全なる道德を吾人に敎へしものなり、然れどもキリストは更に其れ以上の意味に於て吾人に信せらるべきものなり、即ち彼は神の化身、神の愛の發現なり、神は愛にして必然發現せらるべき筈の本性を有し給ふ、之れキ

リスト教の信仰なり、余は此信仰が全世界の人民を滿足し其悲痛をいやし得るものなるとを信ずるが故に之を全世界に傳道せんと望むものなり、之を宣傳せんが爲には全世界の大なるとをも敢へて意となさゞるなり、何れの所何れの地にても吾人の行き得る所あらば到りて以て之を傳ふるとを厭はざるものなり、余は決して空しき敎理を完立せんとするにあらず又祖先の宗敎たるが故に此く信ずるにあらず之れ實に萬民の敎と信ずればなり、眞理は世界共有のものなりキリスト敎も又決して西洋人の專有すべきものにあらずして之れ實に世界共有の眞理なり、余は諸君が此普遍的眞理に到達せられ萬民と等しき安心と喜悅を得られんとを切望す。（未完）

雜錄

山の力

大英週報

「山の巓もまた神のものなり」（詩九十五篇）と、信仰の喜悅に溢れて、イスラエルの詩人は詠みぬ。山の高さをも、山の力をも共に指してなるべし。彼は山の結構、岩の堅牢、石組みの確固なるに眼を注ぎしのみにはあらで、强大なる山岳は尙强大なる「永遠の心意」に基を据へたりと觀ぜり。「主の義は大山の如し」と他の詩に歌ふところ、正に此語を釋するものと謂ふべし。聖書は山岳丘陵の空氣を呼吸す。ノアの方舟はアララット山に止まり、ヘブルの國祖はモリアの地に在る一山に堅固なる祭壇を築けり。十語の聖法は「手もて觸るべき山」にて授けられ、「天使が土堀れり」といふなる墓は「灰色のベスピオル山」の蔭にて「大刀佩きし至勇の戰士」の爲めに鑿たれたり。此山々の峙つこと何ぞ其の優美なる。祭壇を載せたる岡は方舟の山と對し、淋しき墓の丘は律法の山の前に立てり。降つて福音書を繙くも亦た山に乏しからず。高山の頂よりキリストは世界の榮華を視て試誘を受け玉

へり。山よし亡ぶとも永へに盡きぬ垂訓は山の上にて授けられぬ。「人を離れて高山に」登り玉へるイエスは聖貌其處にて變りき。橄欖山より彼は家路に就き、而して現世の諸山の榮光に優れる「遙か彼方の翠の山」なるものも之れあり。此等の諸山は皆神のものなり。而して「人の視ることを得ざる神の永能と神性とは、其造られたるものにより、創世の始めより悟り得て明かに見ゆるべし」（羅一）。蓋し此かる山々は

神のときはの、いにしへの
もとひ搖かず、うるはしき、
高峰よりうつる影

に外ならず。

そも山の強きは、其隱れたる基礎の固ければなり。ラスキンいへり、大山といはんほどのものは、皆地下に潛める幾百の山岳の上に立つと。神を措きて誰か克く此く築き得んや。鉅萬の富者にして其邸第を此くまで強く建て得るものは安に在りや。威名赫々の王侯にして誰か此くまで固く其城を搆へ得るものぞ。「海は主の掌に在り」「神は自己のもの丶上に千尋の底の基より築き上げ玉ふなり。彼の外しかなし得るものはあらず。大海の水に幾百のアルプス山を沒し、麓は互に相結び、浪に打たる丶峰々は鉄色の暗流に、音も聞へず淋しく峙ち、唯一聯のアルプス山のみ、千古の白雪を戴きて、蒼空に其高峯を挿む。ア丶神の力は大なるかな「山の頂は主のものなり」。其基礎の強きなり。而して「神の義は高山の如し」。我視るところ、我知るところのものは、時を通じて永遠といふ底に達せるなり、十誡の強きは、其永久の「然り、否」を雄辨もて語り出てたればなり。山上の垂訓の天地と共に牢きは、其父の心より生じたるが爲めなり。十字架が「時間の海の難破船」の上に兀然と立つ所以のものは、其豫備たりし幾多の祭壇を無効ならしむるが故のみにあらずして、永遠の事

物に其根を据ゆるがためなり。

山の力は有爲轉變の世の中にも長へにながらふ。ロマの古城も其都邑も、荒れて空しく山の麓に横れり。殘石累々、傲然たる鷲旗空に翻らざること久し。左れど二千歳の風霜に打ち暴らされたる山のみは、獨り舊色依然たり。雲之を蔽ふこともあるべし。風之を幾日も鞭つともあらん。左れど風雨一夜の明くる朝、山亡びしやと危みて、山を眺むる人はよもあらじ。

此點に於ても神の義は大山にさも似たり。雲は低く垂れて神の義を蔽ふこと幾度か之れあり。此かる暗黒の時に、アブラハムは「世界の審判者は義を行はざるか」と叫びたり。苦しき實驗を幷たる後彼は、神は常に世に在ますことを學びしが、此敎訓を學ぶべき學校には、今も尙ほ敎を受くべき學生は多かり。神の愛も、天父の信も、贖主の大能なる恩惠も、皆疑ひたきほどの痛苦艱難に遭ふことは少からず。左れど神の信愛永へに在るを確信するものは福なる哉。もし尤も牢固なる山岳が尤も密なる雲を凌ぎ、尤も烈しき嵐に傷かずとせば、終には脆き時間の鏡(山岳)に寫れる「神の榮光と德」とは、更に確實充分の信用を皷吹せずや。愛と智と義と常に在りと信ずるは、やがて雲霧の晴れ渡り、暗黒の消へ行くを忍びて待つの信仰を抱き得たるに外ならず。

自然といふ家族中尤も束の間なるものに對して、山の力に「恩愛の情」とも謂ひ得べきものはあらはれずや。旭日さす夏の谿間に干かされ、潮風に逐はれて東西に漂ふ山霧ほど、世に果敢なきものはあらじ。左れど此霧や、和風暖日の午後の空には、峰に隱家を見出すなり。尤も脆き白き物は雪なり。此果敢なきものより尤も淤らぬ「千秋の雪」を作り出すものも亦た山ならずや。之を心靈界の事に移し考ふることは非か。我身ひとりの希望は、さながら乍ち日光

に觸れて輝き、又乍ち光を失ひて冷へかつ暗み行く漂然たる峯の霧に異らず。然るに此果敢なき望もキリストによりては「榮光の希望」となるなり。我尤も潔き願も、吾が最も白き望も消へ行く雪片と何の擇ぶところぞ。然れどキリストの中に在れば山ほど強き永への義は我有なり。キリストの朽ちぬ力に支へられたる潔白の生涯には、神愛の餘光燦として永へに輝き渡るべし。

且つや、山は其麓に在るものを祝福するを辭せず。雲を友として、屢々雲に蔽はるれど、又屢々渇ける谷間田畑に、雲より賜を求めて授く。草はあくまで生ひ茂り、流る河に水あふれぬる春の谿間ほど生氣あるものはあらじ。麗しき其裝、來るべき其豊饒、之に粗豪なる山側、佶倔なる山巓を比べなば、固より顏色あることなし。然るに河乾き、雨來らず、かくて「榮光ある谷」は「萎れたる花」とはなり了るなり。谷や今兀として雲を湊げるの岡々に呼はれば、過ぎ行く雲に訴へて、雨となし、泉となし、終に谷々に送るは山なり。神の造り玉ひし諸の强き物には、此かる温厚、慈愛の籠るなりける。「汝の義は大山の如し」。神の義は人の最初にして最も深き畏れなり。又最後にして唯一の慶福なり。キリストの福音に「神の義は啓示されて、信仰に至れり」。信仰はもし佑助を叫び求めば、其叫は徒勞に屬するとなし。「われ眼を上げて山を視る。我助は此より來るなり」。是れ即ち「聖愛」の山にして、義しき父の光其上をぞ照す。ラスキン曰く、「もし樂園(パラダイス)の姿を寫し出す最良の場所世にありとせば、そは紫色の岩と千古の雪を戴ける大アルプスの山腹に列れる果園、草野、穀田なるべし」と。蓋し是れ豊けき柔和が靜けき强さの中に隱家もち、强大といふものが授くる賜を以て祝福されたるを描けるものなり。そも情慾、能力、希望、恐怖、信仰、冀願を具へたる、變り易き

果敢なき人生が、徐ろに神の永遠の山を、或は恐れ、或は縋りつゝも攀ぢ行けば、終には神性を我心に享け、時間の地平線を打こえて、永遠の平和の露しげき白晝に聳ゆる山の力と、我も同じき力をもつに至るべし、一旦之に想ひ到らば、心に描く樂園の様はアルプス山側の及ぶところにあらざらん。

現世にても、來世にても、山の頂と其力とは、悉く神のものにぞありける。

吾人の屈辱

大英週報

英國教會祈禱書中埋葬式文ほど高尚にして其目的に恰當せる者はあらじ。而して埋骨文の壯嚴にして胸を刺すが如き語に至りて其頂に達す。其語聖パウロの豫言を以て結ぶ。曰く「主イエス万物を從はせ得る大能により我等の汚れたる躰を變へて其榮光の躰に像らせ玉ふべし」と文中唯一語の心靈的耳朶を害ふものあり、「我等の汚れたる躰」といふ句なり。使徒パウロは「汚れの躰」とはいはずして「我等の屈辱の躰」とはいへり。彼はストア主義の人の如く、血肉を賤しむことをせざりしかど、人の肉躰は生死ともに人間の下賤なる狀態の標號器械なりと考へぬ。躰あればこそ人性の煩惱、苦痛、恥辱なるもの我れを侵すに至り、此かる肉身の狀態必要こそ自ら「吾人の屈辱」とはなるなり。人間最初の墮落に比すべき物界最初の過失とも謂ふべきものあるやも知れざれど、パウロはマニケ主義の人ならねば、惡の本質が人の肉身に存せりとは夢にだも思はず。罪は意志に在りと飽まで信じぬ。是れ彼が「罪の躰」といはずして「屈辱の躰」と云いし所以なり。

扨此かる人世觀はキリスト教の特色にして、猶太教の福樂説にも類せず、固より希臘人が美を崇拜せしと全く趣を異にす。此理福音書の中に

明言せられずして暗示せられたり。新約書は人性哲學を敎ふる爲にあらずして、人を救ふが主眼なればなり、然はいへ、人の構造はさても不可思議なる哉。實に矛盾の混合、反對の交錯なり。然り有生の冠、塵土の粹なりけり。尤も崇き愛情も肉慾に根を結び、覺官は超感の世界に人を導く。されば古來靈が此く其根據、進歩の爲め、物質に依頼することを人生の深き奥義とは說きぬ。ともかく神が此く恐るべく不思議にも吾人の中に結び合ひ玉へるものを理論を以て細分つはよからず。左はいへ「肉の靈に對する關係は、常に多少奴隷の家たる性質を帶びざるを得ず。キリスト敎徒の眼には現生の狀態其物が屈辱と思はるゝことにして、抑も靈が神の胸に在りし其最初の高尙なる狀態を棄てゝ浮世に生れ出てたることの果敢なさなど切に感ずる信徒も少からず。新約全書は生前存在の說を唱へずとはいへ、神秘家の夢は時に古に迷ひ戻りて、

まだ時の尺度（はかり）を知らず
空間の轡もかけぬ

其時に到らざるを得ざるなり。パウロ其人も、人の肉體の須要は內なる人の重荷、十字架なりと感せし者の如くに語りつ。

吁誰れか古來人世の驚くべき逆說を說き得たるものぞ。此かる才能勢力を此かる限界の內に圍むことは、實に愚かしく見ゆることも往々之れあるにあらずや。長老不死なるべきもの眠食洗濯に半生を費さゞるを得ず。哲學者は齒痛に苦み、聖徒も祈るに吃ることあり。詩人は自ら無限空間の王と考へながらも、矢張り惡夢に惱まされ、不謬の法王一羽の蠅に窒息すべし。此く高卑大小一人に合し、人事の滑稽いかにも酷しきところ、即ちスウィフトの諷刺に毒あらしめ、シェキスピアーの測りがたき微笑を有力ならしめ、ニウマン、パスカルの如き基督敎界の大思想家を惑はしめしものにぞありける。吾人の冀

願と必要との言ひがたき矛盾こそ、永へに人生を亂調にするものなれ。世に諧謔といふものあるは之が爲めなり。諧謔とは現實と理想との深き衝突に基けばなり。人が互に相可笑しく見へ、時に馬鹿氣に思はるゝは、やがて其屈辱の徵の一なるらむ。此爭離某の點を過ぎなば嘆ずべく、厭ふべきものとはなるなり。吾人は褻瀆とか不淨とかいふ。此二語は人の靈肉兩性の一致矛盾の兩側面を表するものなり。蓋し此二罪は純然たる畜類にも、抽象の智性にも存し得べからず、惟り人類に於ては天使の靈と獸の躰と相混ず。是れ即ち吾人の屈辱なり。

時ありて人は殊に人生の此の點を感ずること切にして我心に敵し、我靈を憂へしむる奇異なる矛盾、屈辱を憤る。肉躰の須要慾望の外に日常の勞役なるものあり、生きんが爲め食ふべき人、却て食ふが爲めに働かざるを得ず。いかに社會の狀態を改良したりとて、浮世は畢竟强面なき塲所にして、生民の多數には屈辱の谷たらざるを得ず。勿論の事として人は日常の勞苦に服せざ、其は是非なければなり。幾百千年の長の年月人は勞して之を忍ぶ樣訓錬され、苦役を嘔歌する樣學びたるなり。されど人は時に、勤めず、紡かざる神の百合花を思ひ、倉に納めず、小屋に蓄へざる空の鳥を考へては、額に汗してパンを食ふは全能の主なる神の子女の長久の運命にはあらざるべしとの念轉た心頭に浮び來らざるを得ず。肉躰の痛苦といふ暗黒なる問題も亦た然り。人の過失と其疾病、痛苦との間には直接の關係を發見すること容易ならず。病朽の必ず至聖の徒を訪ふことと極惡非道の人と同じ。いかに「健全なる樂天的福音」たりとも、此世が呻き叫ぶ万有の一部たることを拒み得るものはよもあるまじ。吾人は我意志に反して空虛に歸せしめられ、而して早晩死といふ最後の屈辱は人各々を待ち搆ふ。

吾人の生ける間すら、下劣なる須要、度々の弱點を有する朽つべき肉躰は、其肉に寓する心靈を隱蔽すること、宛がら牢獄に似たり。肉躰は吾人相互の交通を遮斷す。たれか表情の不足を感せざるものぞ。情人は其戀情を通ずるに語足らぬを歎ち、美術家は其心眼に髣髴する幻想を描くに由なきを悔ゆ。心の有の儘を言ひ顯はして憚らぬ人も思ふ如く他人に自己の意を解せしめがたし。孤獨の窓隙より外を眺め、中央の空間を横つて互に相呼び、相信號しながらも、先方の人格の牆壁を透して、其体内に虜はれたる眞我に達することを能はず。人は其同類を遠く離れて寂然として獨り其至實の生涯を送らざるを得ず。而して吾人孤獨にて淋しく苦に遭ふといふも、互に相誤解、相離反すといふも、キリスト敎徒が互に相加ふる害の如何を覺らずといふも、亦た是れ吾人屈辱の一と認めざるを得ず。」人の本性と生涯との不規則は、悟り來れば實に身の置き處なき心地す。左ればとて之を忘却するは不幸にして、之を幻想と見做すも亦た理に合はず。制慾論者及び仙人の謬も、現世的肉慾的なる人の盲目に比ぶれば物の數にもあらじ。人の恐るべき非運は可死の包圍に征伏され「塵の世の虜となりて其柵内に畜ひ殺しさるゝ」に在り。固より肉の慾も必要も、其物自身が汚れたるにはあらず。其うちに固有の惡といふものあることなけれど、其性質に於て自ら塵世的なり。人の至上の本能は人をして此世に在りながらも旅人の心地せしむ。心茲に在らざれば、よし假の住居を浮世に定むるも、到底之に歸化しがたし」。

福音は人の屈辱の目的趣旨を闡明す。吾人を斯の如く造り、斯の如き世界に置き玉ひし神は、何事よりも謙遜を學ばんことを望み玉ふ。山上の垂訓の福哉は先づ心の貧しき者に授けらる。左れば肉躰の必要の効用は、神の大能を以て人

の傲慢を抑へ、自負を禦ぎ、頑硬を制するに在るならん歟。果して然らば屈辱をして全く働かしめよ。奇にして若しきものながら、是れぞ神が其子を最後に榮光に導き玉ふ途にぞある。永遠の「道」なるキリストが此世に在りて踏み玉ひし道は此に外ならず。人は皆血肉なりし故、彼も亦た血肉をとりて此世に生れ、其言いがたき屈辱を以て吾人の屈辱を照らし且つ贖ひ玉へり。キリストは吾人も亦た彼と同じく、不完全の標號と見ゆる肉の必要によりて完くせられざるべからざるを敎へ玉ふ。肉の必要の效用目的は吾人を皆キリストに像らしむるに在り。

「彼は我等の屈辱の躰を新にしてキリストの榮光の躰に像らしめ玉ふべし」。此かる偉大なる約束は其性質上よりして、其成就に對し吾人の思想豫期に超絶す。果敢なき人の心もて此朽る者は朽ちざるものを衣、此死ぬるもの死なざる者を衣るといふ大變化の狀を想像するだも叶ふまじ。然れど復活の敎理は時間と覺官の語をもつて言ひ表はしがたしとはいへ、人性の秘義に吻合する者といはざるを得ず。現世にて實と感ずるもの及び個人的のものを來世に導き入るゝものは此信仰にぞある。吾人の尤も親しく思ひしことも、現世にて會ひ見、物言かはせし友に再會せしむるも、吾人の感情、職業、否實に吾人の生涯に再會せしむるも皆此信仰に外ならず。そは畢竟肉躰は靈の家なり。苦勞して暮せし家の懐しきが如く慕はし。生涯といひ得べき價あることにして、躰と離れて送りたるもの一もなければなり」。神が己を愛する者の爲め如何なる躰を與へ給ふやは我思の外にあり。只完きもの來る時は完からざるもの亡ぶべきを知れば足れり。吾人の淨められたる勢力は其變貌せし外形と相比すべし。キリストの限りなき生命、靈に注ぎて贖主の榮光に適へる標號器械を受くるに至るべし。左はいへ其曉に至りても、頭を回し

て既往を顧み、聖徒は孰れも「我が屈辱に遭ひしは善かりき」と告白するなるべし。塵の世より贖ひ出されたるもの丶外學び得べくもあらぬ其歌には、古來此音調なきはあらじ。

潛める信仰

神學博士　エフ、エル、パットン

アグリッパ王よ爾預言者の書を信ずる乎われ爾の信ずるを知る　（使徒行傳二六〇二七）

基督教傳道を爲すに當りて機智を要す、而してパウロは特に此の天禀を有せり。アテンス人は其知りて禮拜せる神祇に殿堂を献せしのみならず、見落したる神あらんことを恐れて「知らざる神」にとて祭壇を設けしが、パウロは同市に於て說教するや、先づ彼等が敬神の念の厚きを讃めたり。是れ彼の機智の一例なり。今ユダヤ豫言者のことを幼少より敎へられたるアグリッパ王の心に潛める信仰に訴ふるパウロの態度を觀るに、また此の機智を示すのみならず、實に禮讓を具へたりと謂ふべし。凡そ議論を爲すに當りては、何れにか先方と說を共にするところなかるべからず。アグリッパ王は復活を信ずることはなかるべきも、豫言者を信ずるに至りてはパウロと同じければ、彼はすかさず之に訴へたるなり。

此は同時に一の原則を例証す。即ち人は自ら認め又は告白するよりも多く信じ居るものなりといふこと是れなり。乞ふ是より今日世に存する潛在の信仰を一瞥せん。

吾人は世に自分の實狀に優りて善良なりと澄ますものあるを知る。之を僞善者といふ。然るに茲に又名稱なき一種の人ありて、大學校在學者か又は卒業早々のものに其例多し。彼等は自分の實際よりも惡しき樣人に見せんと試るもの丶如く、老人舊知が特に敬重するところを誹謗嘲罵して之を驚かしめ、悲ましめて、以て快とな

す。

世に又議論に勝つを此の上なき樂とし、議論をせずしては夜の明けぬと云ふ人ありて、頻りに信仰の道に反對を試むるにも關らず、潜伏せる信仰を具ふる人あり。此の種の人自分より弱き人を見るや、其弱點を捕へ才力己に及ばぬものに勝つの容易きを喜ぶ。此かる人と相論ずるは益なき業なれば、彼をして彼と才學相匹敵せる他の反對家に面しめ、而して其反對家が彼の母の信仰、彼の幼時の神を容赦なく攻擊するを聞かしむるを上策とす。左らば此の不信者が果して何を信じ居るかを發見し得べし。

扨て又無識の裡にも潜める信仰あり。人は自分の思ふよりも多く信ずるものなり。大學を卒業して所謂擴張せる見識を具へて世に出て、舊時の如く單純なる信仰を以て宗教の事を考へ得ずと自ら思ふ。自ら世の質朴なる善男善女と信仰を共にし得ぬを悲み、或は自己を憐み、或は自己を解し得ぬ友人を憐む。人情を解する人あらば、此かる人の許に行き、彼と等しく才學ある人にして同じく此かる疑惑を抱きたるも、其が爲め信仰を捨てざるべからずとは思はざりしといふことを彼に告ぐべきものなり。彼を反對者、改宗を要する者としてあつかはず、彼の側面に歩を運び、調和の福音を說き、不信用は嫌惡に進み、嫌惡は棄却に終ることを示すが正當の道なり。

事實相互の關係の誤解に附隨せる潜伏信仰とも稱すべきものあり。宗教の骨髓と外皮とを混同し、煩雜なる信條を信じ得ざるが爲め、キリスト教徒ならずと思ふものなり。此かる人には宗教に欠くべからざるものと、神學に欠くべからざるものとの區別あることを說き示すべきことなり、學問否心意の鍛錬すらも救拯に欠くべからざる豫備にはあらず。聖書は眞に寬大なる書物なり、或人は強き肉を食ひ得べく、或人は乳

すら水を混ぜざれば飲むこと能はず。某の事を明々白々に知らずとて、自ら基督敎徒ならずと思ふを休めよ。眞理の組織は宇宙の如くに廣く永遠の如くに涯りなし。

某の承認されたる前提の必然の結果として存する潜在信仰あり。人或は幾何學の前提を信せずといふことありとするも、我は斯かる人に告げて將に曰はんとす。「足下は自ら信せずといへど、予は足下は之を信ずと考ふ」と。彼に此事を信じ居るを示し、又彼事を信じ居るを示し、而して此事も彼事も信じ居るを示さば、彼は皆之を明確疑ふべからずと信ずるに至るべし。若し某の事と某の事と共に眞ならば、其の結果も誠ならずや。ロマ敎會は道理ある規則を有す。例へば顯然信仰と隱然信仰との區別の如し。蓋し尤も有益なる業の一は、人に其思想の內容を悟らしめ、其思考の必然の結果を彼に知らしむるにあり。

終に述ぶべきは前提を餘義なく撰擇するの結果に基ける潜伏信仰なり。人の意志は此作用に大關係を有す。蓋し人は早晩撰擇の必要あり。「もし汝等神を信ぜば又我を信ぜよ」。是れ豈に撰擇を暗示するものに非ずや。そも基督の生涯の現象、事情にして超自然主義に由らずば說明しがたきもの夥し。若し一の証據にして滿足を與へずば、他の証據と合せて見よ、二者相合せば超自然の事實を支持するに充分にして、之を却くること能はざるに至らん。若し吾人必然的証據を欠くこと秋毫なるがため基督を捨てざるを得ずとせば、吾人はペテロの如き心狀を有するを至當とす。弟子の去らんとするや、イエス弟子を顧て「汝等も亦去らんとするか」と問へり。ペテロ思想の如く迅速に有名なる答をなして曰く、「主よ、我等たれに行かんや。かぎりなき命をもてるものは汝なり」と。

主を捨つるは不幸の極みなり。願くはペテロと

同じ道を辿らん。我が情、我が智、我が意悉く結晶せしめて一大綜合となし、「汝は基督、活ける神の子」なりと言はん哉。

名士の愛誦せる聖語

本篇は英國「サンデー、マガジン」の需に應じて、諸方の名士が各々その愛誦せる聖語を擧げしを集め、近刊の同誌上に公にせしものを更に抄譯せし也。

カンタバリーの大監督は書を寄せて曰く、余は「單に愛誦せる聖書の一句のみを擧ぐること能はず」と。カーデナル、バウハンも是と同一の理由に依りて、特に最も愛誦せる聖書の一句のみを擧ぐること能はざる旨を回答して曰く、「聖書に對する尊敬と愛とは、聖書の何處にも發見することを得るが故に」と。エルリ、ロバートは「刻下、業務頗る多忙なる」の故を以て之を拒み。ヨークの大監督は「雜誌に寄稿するは余が年來の規則に反す」との理由を以て之を否み。アンドリユー、ラングは答へて曰く、「諸の聖語は皆悉く善なるが故に、余は僅かに其の中の一句のみを撰ぶことを欲せず」と。尙ほアーゲ公爵、博士アレキサンダー、マクラレン、校長エー、エム、フエヤベルン、牧師トーマス、スポルジヨン其他の諸氏も略ぼ是と同一の理由を以て、それ〴〵拒みしもの少なからざりしとぞ。

故ヴイクトリヤ女王の愛誦せる聖語に就ては、ローチルド、ゴーワー公爵の新著「一千八百八十一年乃至九十一年の昔日記」の一節に依て知るを得ん、則ち其の一節に依れば一日彼が一卷の懷中聖書をローリン侯爵に送りて、此の聖書の卷頭に女王の愛誦せる聖語を手記せんことを求めしに、頃ありてローリン侯爵は、「余は陛下に扈從して會堂に詣づるの途次、汝が委托の旨を具さに物語せしに、陛下は會堂へと歩を移

させ給ひながら、朕が最も好める聖語は憐又は愛に就ての聖語なりと宣ひつ、余は陛下に侍して會堂に臨み、リポンの監督の説敎を聽きしに、這は抑も什麼に其の説敎の題は、前に陛下が余に告げられしと同一の聖語ならんとは、陛下も其の事の頗る偶然なるに驚かれ、直に汝の聖書を把りて卷頭に、其の聖語を手記し給ひし也」との書翰と共に、嚮に余が彼に秘せし所の懐中聖書を送り返せしかば、余は急ぎ聖書を披き看しに、陛下の御手の跡美はしく「愛は寛忍をなし、又人の益を圖る……愛は永久も墮ることなし、哥前十三章四節八節、一千八百九十一年八月二日午後、我が誕生日に於て、ヴイクトリヤ女王」とぞ記るされける。

サー、ジョン、ルボックは、「余は自己が愛誦せる僅少の聖語を擧げて答へとの請求ありしが故に、左に二三の聖語を撰びしと雖も、余は之に山上の説敎を加へん事を欲す」との書を寄せ、自ら愛誦せる聖語を擧げて曰く、「申命記三十章十一節乃至十四節、哥林多前書十三章」。

副監督ファーラーは、「余の最も愛誦せるは、神は愛也（約壹書四章八節）てふ聖語にして、余の永久の祈禱は余をして我が神を悦ばす所の行爲をなさしめ、聖靈の祐導に依りて正義の途を歩ましめ給へとの祈禱なり」との旨を答へつ。尙ほ彼の語る所に依れば、印度人の謀反の爲めに、英國人の一群が蠻賊の重圍に陷りて、飢餓と凍死とに瀕せる頃、彼等の唯一の慰籍たりしものは、彼等の一人が所持せし所の藥の包紙にして、其の一片の反古は聖書の一葉、而も以賽亞書十一章九節乃至十六節なりしとぞ。而して彼等は之が爲めに、驚愕憂悶交も至るの際に無限の慰籍を感じ、沮喪せる士氣を振起して健鬪勇奮、遂に萬死の境を脱する事を得し也。

トルストイ伯は答へて曰く、「余の愛誦せる聖語は（爾曹まづ神の國と其義とを求よ然ば此等

の者は皆なんぢらに加ふるべし――太六〇三十三)てふ一句なり」と。シイ、エチ、スポルジヨン夫人は書を寄せて曰く、「予が最も愛誦せる聖語を擧げよとの要求は、余に取りては非常の困難なりと謂ふべし、何となれば余が最も愛誦せる聖語は、啻に一二句にして止まらざれば也、然れども困憊と悲哀との長き予の生涯に對して、極めて力ありし所の聖語の或る部分に、自己の個人的評註を加へしものありしが故に、今その中の二三を抜粹して之を送る、若し之に依りて讀者を稗益するヿあらば余の幸甚し」と、而して其の聖語を擧ぐると共に、自己の個人的經驗を附記して曰く、「己の子を惜まずして我儕衆の爲めに之を付せる者は豈かれに併て萬物をも我儕に賜はざらん乎」(羅八〇三十二)、最大の賓を惜まずして汝の爲めに之を與へし所の彼れ、豈にそれ以下の物を汝に與ふるヿを惜まん乎、五圓の金を惜まずして汝の爲めに之を施せし所の彼れ、豈に二錢の金を汝に施すヿを惜まん乎、「われら神を愛するに非ず神われらを愛する也」(約壹書四〇十)、茲に「我儕、神を愛するに非ず」とあるは、是れ我儕が罪の生涯の秘密、我儕の最大の罪惡又は恥辱たる也、而して直ちに「併しながら神、我儕を愛す」とあるは、何等の對照ぞ乎、是れ罪の刄に對する消毒藥なりと謂ふべく、暗の後の光、失望の後の希望、死の後の生なりと謂ふべし、主よ溺死に瀕せる人々が其の一命を一個の浮帶に托せるが如く、我が靈が此の榮光ある事實、此の救の眞理に堅く縋りて離るるヿあらしむる勿れ、若し爾が吾を愛し吾を高め給はば、吾は永久に亡ぶるヿ莫けん、耶蘇の救を得しものは溺るるの憂なく、彼の愛を得しものは死する虞なし」と。

牧師エフ、ビー、マイヤーは答へて曰く、「或る特殊の聖句を撰ぶヿは頗る困難なれども、予は之が爲めに大なる稗益を得し」と、而して左に

其の聖語を擧ぐ、「我こたへけるは噫主ヱホバよ視よ我は幼少により語ることを知らず、ヱホバ我に語り給ひけるは汝われは幼少といふ勿れ凡て我汝を遣す所に往き我汝に命ずる諸のことを語るべし」(耶一〇六、七)、此の句は髫齔の幼時、予をして福音を宣傳すべく予を鼓舞せしもの。「是をもてヱホバ斯く宣まへり汝もし歸らば我また汝を歸らしめて我前に立しめん汝もし賤をすてゝ貴をいださば我口の如くならん……」(耶十五〇十九―二一)、此の句は屢ば予を慰籍せしもの、特に「我口の如くならん」との約束は、「爰にヱホバ、アブラハムに言たまひけるは汝の國を出で……我が汝に示さん其地に至れ、我汝を大なる國民と成し汝を祝み汝の名を大ならしめん汝は祉福の基となるべし云々」(創十二〇一―三)、此の句はアブラハムの如き信仰を持て生活せば、彼と倶に大なるもの又は福なるもの、となることを得との信仰を予に與へしもの。「彼等が事る所は天にある者の狀と影なりモーセ幕屋を造らんとせし時に爾愼で凡の事を爲すには山に於て我れ汝に示しし所の式に遵ふべしと示されたりし如し」(希八〇五)、此の句に依りて知る、諸の生涯は有効ならんが爲めに、神の理想に依りて建設せられざる可らざるは勿論、神が其の建設の企圖を與へし時には、彼は同時に其の材料をも給したまふことを。「凡そ祈禱の時その求る所の物は必ず得べしと信ぜば必ず得べし、又なんぢら立て祈禱する時もし人を憾ことあらば之を免せ蓋天に在す爾曹の父に爾曹も亦その過を免されん爲なり」(可十一〇二四、二五)、此の句は祈禱に對する規箴なるべきもの。「人もし渴ば我に來て飲め、我を信ずる者は其の腹より活る水川の如くに流出べし」(約七〇三七、三八)、此の句は五十歲後に至りて特に予を慰籍せしもの、何となれば予は神の河は決して狹まる事なく涸るる事なく、寧ろそが大

海に注ぐまでは益々深く愈々廣くなる事を親しく實驗せしが故に。

副都督サー、チャーレス、ワレンは書を寄せて曰く、「幼時予は我父の訓誨に依りて毎朝、エホバよ汝の帷幄のうちに宿らん者は誰ぞ、汝の聖山に住まはん者は誰ぞ、直ぐ歩み義を行ひ、その心に眞實を言ふ者ぞ其の人なる、斯る人は舌をもて讒らず、その友を賤はず、又その隣を恥おしむる言をあげもちゐず云々と、詩篇十五章を反覆誦讀するを以て例とせしかば、此の聖語は堅く我か肝に銘せられ、今に至るも尚ほ我が心に無限の力を與ふ、惟ふに此の聖語に依りて予の得たる利益は、實に枚擧に遑あらざるべし」と。

牧師チャーレス、エム、セルドンは答へて曰く、「予は躬ら聖書の中に愛誦せる句、又は章を有するや否やを知らざれども、(爾に何の與あらん乎、爾は我に從へ—約二十一〇二十二)との、ペテロに對する基督の命令は、予をして常に愛誦禁ずる能はざらしむ。按ずるに此の句は自己の利害得喪、若くは世人の毀譽褒貶の如何に頓着する事なく、一意專心その正義の個人的命令に服從せん事を、常に人々に要求する所の永久の誘引として存するならん、而して予は今日ほど正義に對する服從の必要なる事は、振古無比なる所以を切に感ず」と。

基督教青年會の創立者サー、ジョージ、ウイリヤムスは書を寄せて曰く、「予の最も愛誦せるは(我等は我聲を聽く我は彼等を識る彼等は我に從ひ、われ彼等に永生を賜ふ彼等永久に亡ぶる事なく亦これを我手より奪ふ者なし、我に彼等を賜し我父は萬有よりも大なり又わが父の手より之を奪る者なし、我と父とは一なり—約十〇二七—三〇)てふ聖語なり」と。

米國著名の女作家メリー、エー、ウイルキンス女史は答へて曰く、「予の最も愛誦せるは(我儕

をして皆同じく神の子を信じ之を知り全く、即ち基督の滿足るほどと成る迄に至り—弗四〇十三）てふ聖語なり」と。



福音叢誌第八拾四號目次

論説

講演

雜錄

FUKUIN SŌSHI.

NUMBER 84.

MAY, 1903.

CONTENTS.

論説

科學的素養が宗教的眞理の信仰に及ぼす影響

「アーチデーコン」ジエー、エム、ウヰルソン

余は先づ宗教的眞理に定義を下して、凡そ人の知り得べきことを、神と人との關係の説明に適用することなりと言はんとす。宗教的眞理は他の眞理と類を異にせず。只特別の目的に献られたる眞理なり。過ぐる世紀に歸納的科學の著しき進歩と、其方法の新適用よりして、宗教的眞理に對する人心の態度の異り來りしは、之を喜ぶものも、之を悲むものも、共に齊しく認むるところなり。且又科學的素養といふものが普く行はれ、益々完備し來ることも疑なきことなり。加之此變化は直接にも間接にも動くもの故、社會のいかなる階級にも影響を及ぼすは明かなり。左れば科學的素養が科學者のみならず、科學者を通じて直接科學の素養なきものに及ぼす影響も並せて考ふべき者とす。且つや此影響は堆積進歩するものなれば、三十年前の影響は今日のと同じからず。兎も角く

複雜にして變化多き感化なることを忘るべからず。

此かる感化は徐々に各階級を滲漉し行くものなれば、三十年前上流社會に聞きし難題をば、今日下層社會の人より耳にすることあり。然れど今日教育ある社會の人の困難と感ずる點は、全く之と性質を異にす。

科學的素養が人心に及ぼす一時の攪乱的結果

先づ便利上一時の結果と見るべきものより考へん。

思ふに、形而下學の結論と聖書の字句神感說若くは文字通りの解釋と矛盾するとて喋々する反對論者の如きは今之を度外に置きて可ならん。余の題は科學的素養（訓錬）の影響にして、此かる非難に直接の關係なけれど世に科學的素養の結果として、教育少なき下層社會には此種の難論は極めて有力なることを忘るべからず。普通に難せらるる點は突然創造の非理、モーセ記錄中の困難、舊約道德の疑點等なりとす。

然れど世には此よりも上等の反對家あることにして、其難論に當るには智識と同情とを要す。數年前予はペレトーの意匠論を立派に論破しつつある人の演說を聞きたることあり。彼は自己の想像に描ける反對論者に答へて大凡そ左の如

く言へり。『卿等は世界が其捿息者に適し、其捿息者が世界に適合すといひ、さて其が故に大技術者ありといふ。然れど世界が其捿息者に適するは勿論の事也。然らずば捿息すべき筈なし。海に生活し能ふ者は海に生じ、陸には陸のもの、砂漠、沼澤には其れ〳〵適當のもの產するなり。若し植物動物にして其包圍に適せずば枯死すべし海岸の彎曲傾斜が波を禦ぐに適すると、鷲の眼の構造の巧妙とを比して、一方に意匠多しと謂ふは非なり。甲は波浪が無心に成す所ろ、不知不識生存の競爭を爲し優勝劣敗したる結果に外ならざるにあらずや。……心意は如何にして物質に干涉し、之に影響を及ぼし得るや。物質には物質の外作用を及ぼし得るはかたし。此一大機關たる宇宙に於ては、万事其先行により て決せらる。一般普通に物質法及物質の前後聯絡のみにて支配さるる此宇宙には、意匠なるものを容るる餘地なし。因果の關係單純なりや、複雜なりやと問ふまでのことなり。人の思想は腦の分子の働の結果のみ。若人先行を悉く知り、若しくは之が計算の道さへ具へたらんには、一切の結果を預言し得べし』。不變、見るべし、此種の人に科學的素養の及ぼす感化如何を。彼は之が爲め、時々刻無意識の勢力が絕へず作用して以て自然に進化すといふ說を採らずば、時々刻々の必要に應じて、意匠を以て一事一物隅々まで超自然的に創造するといふ極

端の創造説を持するの外なしと考ふるに至る。

余は今此二者擇一の誤謬を論せんとせず、又神は一定不變の法則を通して物質界に働き玉ふものにして、科學は此法則の一部を啓示しつゝあるに過ぎずといふ中庸説を放擲するの誤をも説かんともせず。尙又學術をも神學をも共に殺すべき説即ち自然と超自然とは相反對すといふ論の非理をも議せんとすることなし。此は余の論題外なり。然れど二説中何れかを擇ぶの外なしといふ獨斷が、科學素養の結果として或種の人の心を支配し、其宗敎を信ずる妨となるは疑を容れず。何となれば此かる獨斷は、神及意志の自由、隨て道德といふ思想を排除せざるを得ざればなり。吾人は復た後に之を論ずべし。

以上余は特に普通以上の學識ありて、其才能のあらん限り思考を費し、其結果を明白に、しかも大膽に告白せし人を擧げて例証とはなせり。世に之と同種の人はあれど、多くは此く明瞭に考察したることなく、唯だ漠然と一種の唯物説を抱くまでなり。さて此傾向は敎育立法に對する世人一般の態度に現はれ、敎育に於ては殊に明かなり。眞に國民を形くるは技藝的敎育にして、他の實用的知識を以て之を補助せば足れりとは、世に流布せる感情なりとす。只だ世に保守の人ありて、啻に倫理敎育を主張するのみならず、思辨獨斷の説すら敎へず

ては不可なりなど説くものあるが爲め、平和を希ふ念より一時讓歩し居るのみ。蓋し此感情は慥かに科學的素養の結果の一にして、危險なる結果と謂ふべし。何となれば此念某の點を過ぎて、古來の敎育主義を悉く棄却するに至らば、人々互に相信じがたく、國民全く土崩瓦解すべきこそ、殷鑒の照々たるものあればなり。

科學的素養の結果にして右に類するものは、宗敎心を使用せざる爲め、之を弱むること是れなり。余は嘗て論じて言へり、『一種の証據のみを絶へず研究するときは、不知不識他種の証據を容るゝを肯んせず、否一時は實に之を容るゝの餘地を失ふに至る。此かる人は精微なる精神上、宗敎上の感情を無用と考へ、証據力絶へて無しと思ふの誘惑に陷り易し。蓋し此感情は純然たる事實には相違なきも、其性質空想と相去る一歩なるが爲め、科學的素養の弊に陷りたる人は、此かる感情を厭ふのみならず、他人が之を有するを見ても、之を輕蔑するの風あり。彼は外形世界の爛々たる眞理の研究を爲せし爲め、其眼眩し、一時心靈及心靈の關係といふ一層高尙なる、しかし薄暗き眞理を視るの明を失ひたるものの如し』。

此く言ふも、固より科學的素養必ずしも人の品性を傷ふといふにあらず。只だ

使用を欠く爲め人の想像、內省、情緒、宗教の力を萎微せしむといふのみ。以上よりも更に普通なる結果あり。其を何ぞといふに、此迄受け來りたる宗教々育の原理方法を太く不滿に感じ來ることなり。科學の素養によりて、人の能力判斷等の賴み少なく、一時事實と信ぜしことも、誤謬と斷定され來るを知り、幾多の說にして、只事實の統一を保つに便なるも、其事實を完全に代表せざるが爲め、只一時假りに之を抱持するといふことなど視馴るれば、眞理を確定するは、此くまで大なるかと感じ來るべし。此かる素養ある人は己が宗教を敎へられたる方法の如何にも粗糙曖昧なるを感じ、此く感じては其敎へられたることを悉く疑ひ、且つ宗敎の敎師をも信ぜぬ樣なりがちなり。余は或る有名の科學者が其少時に受けたる宗敎々育を以て、自己に犯されたる大罪と考へ、生涯其惡果を拭ひ能はずとて嘆じたるを聞けり。科學的素養ある人に此かる反動を來さざらしめんと欲せば、他の方なし。只此かる人に宗敎を眞實正直に敎へ、學術の方法、結論と相矛盾せぬやう心がくべきことにこそ。

之と密切の關係ある一種の人あり。其人は元來宗敎心深く、少時に敎へ込まれたる不完全なる宗敎の眞理を憤然として棄却することも叶はず。一方には智力上之を信じ得ず、他方には良心問題として、若くは動かしがたき偏情として之

を固執し、生涯此兩者に介まれて苦しむなり。此かる苦闘の結果は往々慘怛たる者あり。或人は宗敎の眞理は事實と相容れずと強ちに信じ、二者何れかを擇むの要ありと考へ來り、而かも老年に至りては、固より舊説を棄てがたければ、之を固持す。言迄もなく、此くて維持する信仰は誠心なくして弱きところあり。勢ひ宗敎の根理を離れて枝葉の問題に拘泥し、極端の獨斷を以て確信の欠けたるを補はんと欲す。自己の位置の不正なるを感ずるが故に、牧師にも、信徒にも其思想を打明けがたし。勿論此かる困難の實驗なき人よりも、又は己と同じく之を隱蔽し居る人よりも、助言を得ることなし。科學的素養が此種の人の心を攪亂するは言はずとも明かなり。

此種の人即ち宗敎心強くして、科學的素養を受くる人の中、思慮ある人は、其信仰の基礎を變ずるに至るべし。此は後に再論せん。

之を要するに、科學的素養は聖書の困難を大にし、信仰を保存せんとせば、舊來よりも聖書解釋の大原理に一層の思想を費すべしと要求す。此素養の爲め、當今敎育上に唯物的傾向を來し、宗敎的能力を用ひざらしめて之を弱め、一方には眞正ならざる宗敎の敎理に反抗せしめ、他方には、人をして失望の餘り獨斷に陷らしむ。然れども思想深き人にとりては、科學的素養の結果はいよ〳〵

舊基礎よりも確實なる根據の上に信仰を築くに至りつつあるは疑なし。

宗教思想の信受と科學的素養の關係は大凡そ右の如しと考ふ。此につきて著しき事實は、此かる結果の一時的なること是れなり。其結果中、或程度の教育ある人に對しては、已に力を失へるものすら無きにあらず。

科學的素養が一般教育ある社會に及ぼすべき恒久の影響

予は今進んで恒久の結果と思はるる明白の變化を擧げん。

學術は空間及時間に於ても、物質及エーテルと稱するものの測りがたき複雜に於ても、吾人の宇宙觀を無限に濶めたること疑なし。此く濶大にされたる宇宙思想に照せば、普通の宗教書に存する單純擬人的の神思想は消滅し去らざるを得ず。科學は創造の思想を變じて發達を語り、進化を以て創造を說明する樣なれり。科學は又權威に一任するの念を失はしめたり。學術の素養ある人に取りては、某說の基礎となる事實を知らで之を信ずることは叶はず。又此かる事實も說も、何時にても再考し得べきものなりと感ぜざるを得ざるに至る、引力法を信ずるは、何人にても之に異論を挿むの自由を與ふればなり。聖書の神感を信ずるにも、之と同一の基礎に據らずんば、學術的心意に容れらるることなし。

學術的素養は人をして其信條、言語に含蓄されたることを、明瞭に思考し了せずては止まぬ習慣を養成し、事を曖昧に附し、自己の説の根據如何を知らず、漠然或説を信ずるを忌ましむ。彼は明晰、正確を尙ぶ。是れ科學的素養の結果の一にして、將來宗敎の思想も方法も、一層明白にして秩序あるを要す。其他の結果は、宗敎に關する知識の標準を高むるに在り。學術上の論文を一見せば、如何に特殊の題目につきて、些細の點迄精細なる研究を遂ぐるかを知り得べし。宗敎に關する事物に於ても、解釋、學識、考古、歷史の點に於て、科學と同じく正確周密なるを要す。宗敎哲學に於ける信仰及義務の陳述も、其敎ふる道德に於ても、亦た然り。蓋し科學は不態采、多語にして不精密なるを厭ふやう人を馴致す。是れ亦た其恒久結果の一たることと明かなり。

科學的素養の他の結果は、物質と心意との間をいよ〳〵分離せしむるとなりとす。心物兩界とも知りがたく、其相互の關係は更に測りがたし。其關係は密なるに相違なけれど、吾人の思想にすら、其間に存する隔絶に架橋すべからざること、いよ〳〵明白となれり。然れども又一方には兩者の關係の密なることを益々明知し來り居るなり。其例の多きこと勝て數ふべからず。近世の說によれば、物質はエーテルの動に外ならずといふ。ともかく此く密切の關係ある兩者

間に涉るべからざる淵あるは明かなり。機關と自我意識とは同一物と認めがたく、教授レーノールヅのエーテル元子といふ如き無限の複雜を有する機關といふを假定するも、此の機關が思考し、自我意識を具ふる所以を解しがたし。機械にせよ、機關にせよ、之を使用する心意とは全く相異れり。半科學的の人は心物同一などいへど、深く其素養を積みたる人は、二者全然別物なりとの結論に達せぬはなし。

恒久の結果の一は、宇宙殊に人間は秘密不可思議なりとの念いよ／＼深くなり行くことなり。眞に科學的精神を具へたる人は、日に月に此念の深まり行きて、しかも此かる人の數は益々多し。普通の人は植物、地球、星辰につきて多少の智識を得たるを以て、万事を知れる心地にて得意なれど、學者は却ていよ／＼人の無智と宇宙の秘密なるを感ずるばかりなり。左れば唯物論者に全知全識の語氣あるを見て、ゆめ騷ぐの要は之れなしと悟るべし。

且つ夫れ眞實に學術を解し得たる人は、學術の高尙にして有用なるを認むると同時に、其人生の嚮導として不充分なるを感ぜざるを得ず。科學は眞正なる人間生涯にあらず。喞筒と電信機を作るの方を知り、星雲の何より成るかを知る位にて、普通の生活には充分なり。科學上の結論を知るは科學者に委して可な

り。唯だ宗教に至りては、萬人の利害に關係す。宗教は個人の責任及其生涯に心内の動機を供すればなり。科學は行爲倫理の結果につきて示すことは多しと雖も、其源泉には關係せず。吾人は學術の結果に實際上痛痒を感ずるといかにも薄けれど、慾情、意志、良心、宗教心に至りては則ち吾人の本我にして容易に之を棄つること能はざるなり。學術の結果が品性陶冶に於て効力少なしといふことを知るに至るは、科學的素養の恒久の結果の一なりと謂ひ得べし。

右の傾向よりして勢ひ起り來る恒久なるべき一の結果は、科學的素養の爲め、宗教の領域いよ／＼高尙の世界即ち人心と神心と相交叉する世界に移り行くことなりとす。學術の爲め人の批評眼はいよ／＼鋭く、其宗教的信仰の基礎を精探細査するとはいへ、之が爲め學術の證明の力及ばず、直覺即ち多少理性の裁可を得たる信仰が主るべき領域ありと認むるを肯んせぬ様なるにはあらず。恰も吾人の感覺に對する物質に實在ありといふとは、證明しがたきも固く信ずるが如く、吾人の道德理想に對する實在の存すといふの念は、日と共に增し行くものの如し。少くとも西洋人の間には、かかる結果が恒久なるべきは確かなるが如く、哲學上の證據は、此かる自然宗教をいよ／＼證明するものの如し。

但し學術の素養ある者が眞面目に宗教を考ふるや、宗教に人間思想の及びがた

き秘密あるを認むとはいへ、可成單純にして原則のみを要求するに至るは、止を得ざるものの如し。究極の眞理を忌憚なく撿覈し、眞を眞とし、僞を僞とす。故に學術の素養は宗教の眞理を破壞せんとはせずして、單純にせんと欲せしむ。眞理の順序輕重を明かにし、主要の眞理を先にして、附庸の敎義を後にす。左れば科學的訓錬は煩鎖の弊より神學を濟ふ良劑とこそ見るべけれ。

科學的素養が神學上の方法に及ぼすべしと思はるる恒久結果

學術の素養が神學的方法に及ぼす影響は更に大なり。此素養あるものに限り、吾人の神を信じ、人間の責任を信ずるは、果して何の根據に基くかといふ疑問を、曖昧の裡に葬り肯んぜず。此信仰たる果して聖書の記述に對する歷史上の證據に基くか、將た敎會の權威ある宣言によるか、約言せば、神學は不確實の假定より歸納せしものか。宗敎を有益と認めながら、學術上價値なしと思ふ人が、此かる疑問を發しつつあるは疑もなし。

扨學術の素養が此點に於て尤も重要恒久なる結果を人に及ぼすところ如何と問ふに、神學を科學として扱ひ、可成歸納の方法を採り、人類に共通し、宗敎の基礎となれる宗敎的信仰の根據を實驗と事物の本性に求むることなりとす。此

傾向の結果として確かなることは、宗教的實驗の對象たる現象の實在を信じ、之を信仰の基礎とせざるを得ざらしむるに在り。科學的方法の盛に行はるるよりして、神學は至大至重の事實を論ずるものとして、深き注意を要求すべく、神學の歸納的結論は一々之を確實に証明せざるを得ざることとなるべし。此くて宗教も普通法則の域内に入り來ることとなるべし。

此點を考ふるは歸納に深く物を考ふる習慣ある信者の心狀を解するに重要也。彼の宗教は眞實にして空にあらず。左れど其信仰は個人の實驗、良心、神の直覺的智識に基けり。然るに吾人が彼に說くところは自ら基礎を異にするが故に、彼は之を聞きて、充分腑に落ちぬ思あるなり。吾人の神學を悉皆棄却せんとはせざれど、其心裡に存する他の知識と相調和せず。衣の如く之を着ることはなし得るも、其四肢五体の一部とならずして、あかぬ心地するなりけり。

科學的素養の結果は、物の繼續を求むるの念を切ならしむ。物質と勢力、植物と動物、自然と超自然、人的と神的と相對照せしむると同時に、甲より乙に移り行く變遷的形式と狀態あるべしと信じて之を求む。左れば神の啓示に於ても神靈人の心に働き、種々の形狀に於て歷史上に進化しつつ行はるといふ思想は自ら勢力を有し來るなり。吾人は此際注意して、或自然學者が、自然に於ける

通常の感化力が、能く物を變化進化せしむるが故に、特に一種の現出なるものあるべからずと論せしを繰返し、神靈万人を動かすが故、受肉降生などいふことあるべからずと言はぬ様すべきとなり。却て神の靈進歩的に人に降るが故に、降生の事は更に信じ易しとてこそ說くべけれ。

更に他の結果は、神學を進歩的のものと考へしむることとなり。道德は進歩すとは、今や認められ、之が爲め舊約書は解釋し易くなれり。神學といふ如き古學に說くところ、自ら古代のものあるは言迄もなけれど、恰も珊瑚島の如く、新なる枝は斷へず之に加はりつつあるなり。神學を現時の事實に直接關係せしめて考ふるときは、必ず新規なる活けるものと見ゆ。

進歩と神學とを結合するは、神學に新生命を注入するものなり。社會的、倫理的、學術的、神學的其何れたるにもせよ、之に存する不完全は、完全に進み行く中途と思へば之を恕し得べきも、不完全を完全として信せしめんと言はば、直に之に反抗せざるを得ず。科學の各部門皆進歩するものとせば、科學の女王たる神學に進歩なき筈はなかるべし。之れあるは却て神學を活かしむる所以ならずや。學術的素養の恒久の結果として、人は過去の神學に存せしよりも一層の辨別撰擇を爲し、一層道理深き、一層深遠なる歸納を求むるに至るべし。

神學の進歩するといふことは容易に承認されぬことなれど、そも之を拒むは無神敎育風のことなりと知らずや。監督サールウォール嘗て曰く。『もし聖靈實に衆理に人を導くものとせば、後に授けらるる眞理は其前のものに優るべし』と。誠に然り。進歩を拒むは此大信仰の欠けたる證據ならずや。

予が特に此く進歩の事を呶々する所以のものは、世に神學とは其時代々々の最高思想の約要に外ならずといふことを認むるに遲疑するもの多く、信仰安住の基礎を覆すとまで考へて、之を厭ふによる。彼等はいふ、マホメット敎及ロマ敎に於ては、其信條の默從すべくして、一點の疑を挿むべからざる確實の眞理たることを說くが爲め、其信仰は堅確なるにあらずやと。誠に其言の如し。ただ確實を以て無智に對せば信徒を作れど、確實を以て智識に臨まば、懷疑家を生ずるを奈何にせん。

明白ながら一言の價値ある科學的素養の一の結果は、或種の神學的敎理と他の敎義との間に區別を立て、甲を乙よりも堅く信ずるといふことになることなり。フヒテ嘗て曰へりと覺ゆ。『科學には信仰を洞察に化す』と。蓋し學術的歸納推理の習慣よりして、ただ漠然と攝理の世を支配し行くを信ずる單純の信仰を變じて、神の法則を推理洞看して之を信ずるに至らしむるをいへるならん歟。此

く生涯及思想の根本的眞理を道理に照らして、然る後に信ずといふことになれば、自ら教理を簡單にし、又教理を信ずる信仰の程度にも、彼此深淺の差を生じ來らざるを得ず。

予は此く神學の簡單になり行くことこそ、教會及神學の前途を多望ならしむるものなりと思ふ。然れども論者の袂を分つは正に此追分路に在り。或氣質の人は、近世の如く宗教思想の狀態浮動して定りなき時代には、いよ〳〵明白强硬に獨斷的教示を施すの必要ありとぞ謂ふなる。此も一理あることにして、一種の人には可なるべし。然れども此かる方法にて指導され得べき人の數は日に減じ行きつつあり。成程神學が斯く浮足になりたるは、畢竟其が國民の生涯にも、家庭の生活にも直接の關係少きが爲めなれども、何故此く生涯に感化少くなりしやと尋ぬれば、其は人が宗教の眞理を重んずるの心薄くなり行きし爲めなりとす。然るに若し神學と人生と相關係する部分即ち神の大道德法にして、歸納によりて絕へず證定され行き、人をして之を確信せざらんとするも得ざらしむるとせば、其國民に及ぼす感化蓋し測るべからざるものあらんとす。此くありてこそ、道德なるものは、引力と同じく尤も確實のものとなるべし。左れば學術素養の結果は、人をして或少數の明白中心の神學的眞理のみを確信

せしめ、今日迄疑を挿めば不信仰と考へられたる種々の教理を未確定の説として觀るを許すに至らしむ。

此く確信の分化し行くを憂慮して措く能はざる人は、宜しく我等の主の教授法を觀るべし。彼は弟子の前に自己を示し、己を觀察せしめて以て、歸納を爲さしめ玉へり。彼は信仰を強ることなく、己の實驗よりして徐ろに解釋せしめ玉へり。余は基督教の神學はキリストが獨斷的教理を明々白々一點の加ふべきなき様に授け玉へるに始まりしといふよりも、教會がキリストの靈に導かれて眞理を悟りつつ、キリストを解釋せしに起れりと考へざるを得ず。此意味に於て、神學のキリストは、歴史上のキリストよりも寧ろ活ける現存のキリストなりと謂ひ得べし。歴史的キリストの歴史上の者たりしことは、基督教神學の起原を此く考ふるが爲め決して疑はれずして、却て証定さるるなり。

化學及神學を正當に研究して其調和を求めんと欲せば、兩者に取りて何れにも不滿足ながら、人間能力の限あることを認めざるべからず。吾人は物質界に住し、物質以外に非物質の原因ありて、之に干渉すると思ひ得ざるを感ず。之に反して又吾人は自己が心靈的存在者にして、物質と密切に關係しながらも之と別にして、之を支配し行くものなるを認む。而して吾人の心意心靈は、吾人以外の

或者に關係するもの、吾人は心靈界の住民にして、其道德法の下に在ることをも、直接に感じ、且つ信ぜざるを得ず。吾人は物界も靈界も共に其存在を拒むまじく、兩者互に相排除すとも考ふまじきなり。心靈的人格は依然として存在し、以て物質以外に世界の存する證明者とはなるなり。

科學的素養の宗教々理の信仰に及ぼす間接の影響

前條述べ來りしよりも少しく性質を異にせる科學的素養の結果あり。信徒の學術的素養は勢ひ一方には神學者をして充分、熱心、公平、に宗教の眞理を調査せしむるに至れり。此調査は固より一朝一夕の業にあらず。思ふに今日歸納的學術の基督教思想に於けるは、古昔希臘哲學の基督教に對せしが如歟。アレキザンドリアに於ける基督教の思想家は希臘哲學と東洋神秘教とを相手として奮戰したりしが、其結果古今尤も不朽なる神學即ニケア信經は成りぬ。今日自由に討論研究する樣は頗るニケア時代に髣髴たるものあり。今や歸納哲學及び去世紀中初めて西洋に知られたる東洋の古代諸宗教が証明する自然宗教の主張、此二者は正に基督教に對抗し居ることなるが、今後一層有力なる敵の現はれ來ぬとも謂ひがたし。

アレキサンドリア時代と今日との類似は惟り此に止まらず。當時二種の神の思想相對峙せり。超絕と內存となり。此二者實は反對せぬものながら、普通敎會の持せるところは超絕說にして、哲學は內存說を採れり。今日も之と同じく、敎會は甲を執り、學術は乙に傾く。左れば科學的素養の一の恒久の結果は、神學を希臘的、即ち東方的即ちアタナシアス風に立返らしめ、信條を其意味にて解釋し直すに在り。希臘の正統神學は長く人に忘られしが、今吾人が此正統的迎ちヨハ子流の單純に立返るとせんに、之を妨ぐべきもの世にあらじ。學術は『永遠の道(コトバ)、人間の敎師、完成者』といふ敎理に反對せず。又此道と眞に心靈の交通を爲して以て吾人の心靈を聖化し、神像を回復すと說く敎拯の敎理を妨ぐるものあるべからず。

所謂進化說とは右の如く神の普く內存し玉ふことを信ずる者なり。必ずしも此く考へなば悉く困難を除き得べしとは言はず。然れども若し進化論者の信じ得べき神ありとせば、其は內存的神ならざるべからず。但し困難は正に玆に存す。進化は神の人格を破壞すればなり。學術の啓示する法則の漠として無限なる其中に、神は自ら消滅し行くの樣ありて、我が神に於て愛慕するところは失せ、個人的に之と交はり得べきところなからしむ。進化論者の神は萬有神敎者の神

と異なるところなきにはあらざるか。

人は此思想の岸邊に立ち、其下に流るる冷たき水に足を浸して股栗するなり。左れど人は之を渉らずては叶はじ。教會も渉らずては止みがたし。まだ説明者はなけれど、彼岸に必ず一の眞正なる信仰あるべし。

此は次の時代の解釋すべき問題なり。余は今之に對して採るべき吾人の態度につき數條の思想を陳べんとするのみ。

先づ吾人は不完全極まる解釋を忍ばざるべからず。科學は吾人に不完全なる智識を與ふるのみ。もし有神的進化論が說く如く、自然界は神の自啓を不完全に爲したるものとせば、神の自啓は尙ほ其原始時代にありと爲さざるべからず。人の心意が其身躰に超絕し、又之に貫徹するが如く、神は更に大に自然界に超へ、又之に貫徹するに相違なし。而して人の躰內の細胞を以て全人格を解釋し得ざる如く、全自然界を視て固より神の人格、愛、父性を悉し得たりとは爲しがたからん。

左れど人に道理と義とある以上は、吾人人間の中に自己を發展しつつある合理にして義なる實在者あるべく、又人間の最上のものは愛なれば、神にも愛なかるべからずと悟る。吾人の不完全なる心意もて、一方には神の父たること、他

方には内存及其自然界の法則の不變行動、此二者を調和するに若めど、さもかく父なる神は存せりと信ぜざるを得ず。そも個人的、主觀的より普遍的、客觀的に轉移するといふことは哲學上の問題にして、之を證明すること或は到底難からんかなれど、慥かに此轉移なくば物を知るといふことは叶はじ。

今一の思想あり。科學者は倫理をも一の科學として研究することにして、倫理學と宗教との關係、是れ研究の價値あることなりとす。余が僅かながら究め得たる限りを以て言はば、此かる研究の結果人は道義的理想の客觀的に存するを一層深く信ずるに至る。種々の倫理説は皆人以外に或實在あり、人間を悉く包括する客觀者ありとの説に傾くものの如く、功利説も、快樂説も、直覺説も、將た之を結合しても説明しがたき或者あるは確かなるが如し。若し此事にして眞ならば、吾人の倫理的理想は理想已上のものにして、眞實に人間の中に人間の爲め働きつつある勢力なりとせざるべからず。蓋し人をして意を強ふせしむるもの此信仰ほどの者はあらじ。此の如くんば科學は宗教の同盟なり。余の問題外の事ながら、余を以て觀れば、一切の宗教の通性として、個人は或は家族、或は國家、或は人類といふが如き一層廣大なる社會に關係を有すと感じ、殊に人格的の或る大なる者に關係し、之に事るは自然の本分なりと感ずることなる

が、倫理を研究せば、必ず此宗教の特質を解釋するに至るべしと信ず。今日哲學者は斯く人格化するを嘲りて理想化すといへど余は信ず、終には却て此の人格の實在こそ、此く吾人々間が彼に密接するの感を生ずる所以なるを認むるに至るべしと。

最後に一言せん。今や宗教的實驗の性質、價値を學術的に研究する新科學起り來れり。教授ジエームスのギッフォード講演は其尤も新規なるものなり。思ふに宗教家が之に對する態度は、夫のアガシズの有名なる語の如くなるべからず。彼は學術の發明が一般に信ぜらるゝまでに、三段階を經たるを述べて曰く、『初めに「其は眞ならず」と人は言ふ。中ごろ「其は宗教に反す」といふ。終に「其は何人も前より知れるところなり」といふ』と。願くは科學の素養を受け、此かる精神を以て此新科學に接せざらん哉。もし吾人の信ずるところ眞ならば、新しき眞理の光明は歡迎すべきものならずや。研究を忌むは固より眞理の益にあらず。

科學的素養も、科學の結論も、人が義を要することゝ、道德法の無上とを確信するを妨げ得べからず。而して若し學術的素養が、此大法を人生無上のものとして其位置を高めなば、宗教的眞理の信仰に對する人心教育の大機械として、

之を歡迎すべきことにあらずや。（小林彦五郎君抄譯）

イスラエルに於ける來世的信念の起原及び發達

神學博士　アール、エチ、チャーレス

イスラエルに於て來世的信念の發達し來りたる知識上の歷程を叙述せんとするに當りて、先づ諸君に望む所は、諸君が此の發達は純然たる自然的の仮說（ハイポセシス）を以ては滿足に說明し得べからざることを記憶せられんことこれなり。孰れの時代を問はず凡そ宗敎の生長は活ける神と人との交通より發するものにして、此の交通に由りて人は神意を學び、身を以て神の器となし、己に比して神の靈化に浴すると尙ほ少き人の爲に神聖なる眞理の啓示者となる。是の如く啓示せられたる眞理は人を經て來ると雖も其の實神の權威を帶ぶる也。舊約書は是の如き啓示の連鎖より成れり。出埃及の時代に於てイスラエル人は猶ほ大

体に於ては異教的セミ種族の域を脱せざりしに、神は此の民族を選抜し、其の程度に應じて彼等を敎育し、初には先づ國民的の神として自己を表現し、イスラエルを神の人民として遇したり。神が最初より宇宙の創造者として又道德的の主治者として自身を表現せざりし所以は、イスラエルの宗敎歴史上の幼稚なる時期に於ては是の如き思想を敎ふるも未だ之を理解するに足る力あらざればなり。是に於てかヤーベー（エホバと同じ）はイスラエルの神にしてイスラエルはヤーベーの民なりと敎へられたり。ヤーベーは正義なる神にして、其の人民に要求するに正義を以てせり。之を階梯として神の敎育は漸次に歩を進め、遂にエレミヤ書及び第二イザヤ書に於ては、神は至高至愛の神、全人類の神としてイスラエルに知らるるに至りぬ。

是の如く紀元前八世紀以前に於てはイスラエルに於ける神の觀念は未だ國民的の區域を超脱し得ずしてヤーベーを見るに自國の神たるを以てせり。之と同時に彼等は鄰國の神も亦實在することをも許したり、固より此等の神に仕ふべき理なきことを認めたれどもヤーベーの主權の範圍はイスラエル人民の範圍と相一致せる者と考へたるはこれ即ちイスラエルの初代に於ける信念なるが、神の觀念に於ける此の種の制限と缺點は、八世紀に出でたる大預言者の攻擊により

漸く消滅して純然たる一神教的の時期に到着せり。前時期の教は『汝等は我の外の神を拜むこと勿れ』と云ふにありしが、此の時期の根本的教義は『我の外神在ることなし』と云ふまでに進み來れり。

ヤーベーに關する宗教思想の發達をば以上の略説に止め今は之より進んでイスラエルに於ける未來の思想の發達を考究すべき時なり。

猶太人の未來の觀念は原來別なる二個の主題に關係す。一は個人に關する希望にして、一は國民に關する希望なり。個人の希望は發達して個人的不滅の觀念となり、國民の希望は終に救主的王國の教理を生み出だしたり。我等をして請ふ先づ個人の希望に關する方面を觀察せしめよ。

個人に關する希望と其來世觀は初代に於ては甚だ暗淡たりき。何人を問はず最後に行くべき處は冥府にして、冥府に於ける生活はただ朧に現世生活を寫せる影の如き生活に過ぎず。且つ冥府に於ける上下の差等は道德的にあらずして社會的なり、即ち現世に於て占めたる社會上の地位に準する地位を占むべき者と思はれたり。且つ既にヤーベーは單に國民的の神と思惟せられ其の統治の範圍全く其の國民其の國土に限られたる以上は其の主權は冥界にまで及ばぬも亦怪むに足らず。冥界既に神の領域の外なる以上は未來觀が異教的性質を帶びたり

とて、必ずしも彼等の神に關する信仰と衝突する筈なし。紀元前八世紀前には神學と未來觀の間には些の衝突あらざりし所以は、兩者各々其の領域を異にしたれば也。

然に一神思想の發生以來、神學と未來觀の關係は一變せざるを得ず。ヤーベーにして全地の創造者又全地の神なる以上は人生の全範圍は其の政治に服せざるを得ず。こは今日の我等の思想には明瞭避け難き結論と思はるれど、實際の事實に照せば、イスラエル國民が一神的の信念に達したるは紀元前八世紀よりの事なれども、次に來世に關して必然到達せざるべからざる結論に到達する迄には猶ほ幾世紀を費したり。我等は何を以て此の不思議なる事實を說明せんとするか。適當なる說明は唯これなり。即ち神は希臘人を撰んで現世的の智慧を敎へしめし如く、羅馬人を撰で法律と秩序を世界に敎へしめし如く、イスラエルを撰んで宗敎上萬民の敎師たらしめんとす。然して此の國民をして來世の敎理を發見せしむるや、論理的の步趨に依らずして宗敎上の實驗に依らしめたり。是れ他なし彼等と同一の實驗に入る人は何人も同一の眞理を覺得し得る者たらしめんが爲なり。眞實永存し得べき來世的信念は信仰の生活を經て然る後達し得る信念なり。イスラエルの神に關する思想頗る進步して後も來世的觀念は依

として異教的臭味を蟬脫するに至らざりしは此の歷程を經つつありしなり。當時彼等の宗教的生活は未だ幼稚の域を脫すること能はず（少數の靈的先覺者の外は）直接神に近くこと能はず祭司預言者の媒介によりて僅に神に近くことを得たり。斯くては未だ未來の問題を學ぶべき時期に達せざる也。預言者の教導と訓練を受くること數百年の後、漸く個人は面のあたり神に近接し、神と交通するの道を知るに及びて、國民は初めて來世の難問題と力を角し遂に不朽の幸福の確信を捉ふることを許されたり。

未來觀に關する進步の端緖は如何なる邊より開けたりと云ふに、玆に現世的の問題なれども先づ來世に屬する眞理を認め之に照らさずんば結局の解決を望み難き一個の問題あり。此の問題を解決するの必要は導火線となりて未來思想の進步を促したり。其の問題とは何ぞや。

其の問題と云ふは、新に開けたる一神思想の立場より來りたる問題にして、義人に苦みあり惡人却て榮ふるは何故なるやてふ疑問なり。ヤーベーが單に國民的の神と觀られし中は此の疑問は起らざりき。何となれば神は義なる神なれども未だ全能にあらず、彼の力を制限する他の神あらば、義なる神も十分に其義なる政治を行ふこと能はざれば也。然るにヤーベーのみ神なり彼を掣肘する神

なしとの信仰明なるに及びては、即ちヤーベーは全く正義にして且無限に力あるものとして禮拜せらるるに及んでは、當初の解釋は最早維持せらるべきものにあらず。是に於てか第七世紀の猶太の先覺者は、義人は必ず榮へざるべからず惡人は必ず苦まざるべからずとの教理を構ふるの已むを得ざるに至れり。果して此の世界が正義の神の造る所又支配する所ならば、義しき人には早晩幸慶あるべしとの信仰に對して異存あるべき理無し。然るに一方に於てはイスラエル人の未來觀はまだ異教的なりし故に、義人榮へ惡人苦むてふ教理の應効をば來世に待つ能はず。信仰ある徒が神と交通し得るは唯現世に止まり死後は全く神の攝理の範圍を離るる故、義人は榮ふるは現世に於て榮へざるべからずと信ずるは當然の事なり。

反復して之を言へば眞醇なる神學と眞醇ならざる異教的未來觀の抱合よりして、義人の義、惡人の惡ともに此の世に於て應報を受くべきものなりとの結論は出て來らざるを得ず。此の教理は申命記及び其他の流竄前又其の後の文學に著しく見ることを得べし。此の教理にも固より少からぬ眞理の要素を含有することなれば、一般に承受せられ、且つ之を大体より觀るに止め個別的に通用せられざる間に其中に含まれたる誤謬も能く批摘を免かるるを得たりしなり。然るに

個人主義の發達によりて此の敎理の批評を受くべき時代は漸く近づきぬ。紀元前八世紀までは個人的の應報は未だ人の注意せざる所にして、惡人榮ふるも善人災を受るも敢て怪まざりき。何となればヤーベーの關する所は國民全体としての休戚にして其の一員の運命に非らず。宗敎上の單位は個人にあらずして一家族若しくは一民族なりき。しかして個人は家族の中に一致せられ、隨て神は祖先の功罪を子孫に報ひ（出埃及二十〇五、利未二十〇五等）、一個人の功罪を其の團体或は種族に報ひ（創世記十二〇十七、二十〇廿八、）其の恩惠によりて罪人の刑罰を其の子に移す（列王上十一〇十二、二十一〇二十九）ことを信じたり。

一神的思想に原づきて一個人の靈魂の價値及びヤーベーとの直接の關係を敎へらるるまでは、義人の現在將來の運命に就きて正しき見解に達することは望むべからず。此の進歩はエレミヤ及びエゼキエルの預言によりて初めて端を發きたり。

『父酸き葡萄を食ひしにより兒子の齒うく』（エレミヤ三十一〇二十九）とは近世の所謂遺傳の說を通俗に言ひ表したる俚諺なりと知るべし。父祖罪を犯したるが爲めに子孫は其の結果に束縛せられて、復た之を脫すべき路あらず。斯の如

き思想は、自然に正義に向ひて努力する氣力を委靡せしめ、人をして失望の犧牲たらしむ。何となれば一個人義なりとも到底國民の上に落ち來る運命より拯ひ出ださるべき道有らざればなり。

エレミヤはこの凡俗の思想に反對して新に個人主義を唱道したり。エレミヤの議論は神が自己と個人の間に新に開かんとする新しき關係に原づけり。此の新しき關係は神と國民全体の間に存立し來りし舊き關係に代らんとす。今まで一個人は單に國家の一員として神に關係せるのみにして個人としての價値はこれあらざりしが、エレミヤの敎ふる所を聽けば今より後一個人は國民に代りて、宗敎上の單位とならんとす。即ち國家滅びて國民は異鄕に流離するの日を眼前に控えて、エレミヤは宗敎は一個人と神との交通に外ならざることを考へ初めたり。今まで一個人は祭司預言者の仲媒に依りて神に近くことを得たるが、之より後個人は各自祭司の特權を享くるものとならんとす。

エゼキエルはエレミヤの敎を祖述して更に之を發達せしめたり。流謫前の時代に於て個人の靈魂は家族國民の所有と考へられしに、エゼキエルは敎へて曰く人の靈魂はこれ皆神の所有にして神と直接の關係ありと（十八の四）。これ即ち最も高尚深奥なる言葉を以て個人主義を說破したるものにして、『凡ての靈魂は

我がものなり』と云ふ如く言簡にして意深く一個人の靈魂の價値を主張したることは未だ曾つて有らざりし所なり。エゼキエルは又人の行爲と其の應報の間を繋ぐに遺傳法の助けを假ることなく、個人各々其の應報を受くべきことを説きたり。然るにエゼキエルと雖も死後の事に關しては、凡俗の思想に隨ひ冥府を以て幸福なる住居と考へず影の如き世界と思惟せし故、善惡の應報は現世に於て完成すべく考へざるを得ず。人の外部的運命は其人の品性及神の前に立てる實狀を檢する尺度と見るべく、幸運は神の寵賞を證し、不幸は神の怒りを證するものと信じたり。エゼキエルが此の法則を誤りなきと信ずるの篤きや、エルサレムの陷る日に於ても義人は一人も滅ぶることなかるべしと云へり（九〇三—六）。但二個の塲合に於て（十六〇二十一、二十二、二十一〇三、四）實際の事實と預言者的の見識によりて此の一概なる見解の羈軛を脱することを得たるのみ。

エゼキエルの應報論を嘲ることは容易なり。然れども當時の神學の依て立てる前提を基礎とせる以上他の説の有り得べからざる道理なり。エゼキエルと同じく神は義なる神にして萬人の靈魂は神のものなることを認むれば、亦彼と同じく應報の誤りなきことを信ぜざるを得ざるべし。又彼の如く人は現世に於てのみ

神の政治の下に在ることを信ずれば（我等は之を信せずと雖も斯く假定すれば）エゼキエルと同じく人の禍福を觀て其の心靈上狀態をトする尺度とするの外あるべからず。論理上他の結論あるべからず。エゼキエルはこの意見を操守して搖かず實際上の事と矛盾するも猶且つ顧みざりき。

エゼキエルの意見は固く國民的意識に根ざし、詩篇と箴言なる二卷の國民の讀本に於て種々の方面に適用せられたり。但此等の書に於ては多少、エゼキエルの本義に潤色を加へて實驗上の事實との齟齬を過大ならざらしめたるのみ。乃ち敎へて曰く艱難辛苦は必ずしも應報的の者にあらず、時としては義人を練磨するが爲に下さるることなり、然れば此種の禍の後には必ず現世的の祝福回り來り（詩三十四〇十九―二十二）義人の結局は平安にて終るべしと（詩三十七〇二五、三七、約百八〇六、七、五十三〇十二、箴言二十三〇十八）。之に反して惡人は一時榮ふることありとも、其榮耀は須臾にして、唯益々其の零落を急ならしめ不面目ならしむるに過ぎずと（詩三十七〇二十、三五、三六、七十三〇八―二十）。

若し夫れ義人にして平安なれば則ち可なり。然れども一朝非運の身に墜ち來ることあらば其人は必ず惑はざるを得ず、何となれば不幸は即ち罪の證據なれば

なり。親しく彼を識れる友人は或は此の艱難を以て神の下せる鍛煉なりと思ふことあらん、然れども一般の良心は直に之を以て罪惡の罰なりと速斷するを辞せざりき。

斯く國民が現世的應報の信念を固執せる間、未來の問題につきて高尚なる解釋を試むるの機會なく、冥府に於ける死者の生活につきて流俗の見解以外に出づるの道なかりき。この普通の敎理が合理的宗敎的の實驗に照らして批判せられ破棄せらるるまで進歩の路は杜絶せられたりと謂はざるべからず。此のエゼキエルの敎理に向つて試みられたる長き年月の攻擊の間より今日に傳はれる二個の著名なる紀念あり、一は約百記にして一は傳道書たり。

傳道書は紀元前二百年よりは餘り早からぬ時代の產物なれども、余が約百記よりも先に之を擧ぐる所以は、約百記の目的の破壞的にして又且つ建設的なるに反して、傳道書は破壞一方なればなり。斯世に於ける應報は其人の功罪と相符合するとの提言に對して傳道書の著者は全然反對の地に立ち、現世にも又來世にも應報あらざることを主張す。偶々全篇の意と聯絡無くして賞罰の有るべきことを言へる句なきにあらざれども、多數の批評家はこれは後人の挿入にかかりて著者の本意にあらずと判定す。然して著者の論旨は、義人の義を行ひて亡ぶ

るあり惡人の惡を行ひて長壽を保つあり（七〇十五）、智者も愚者も遇ふ所は同一なり（二〇十四）、義しきものも惡しき者も一様なり（九〇二）と云ふに歸宿す。

傳道書の著者の稍や極端なる攻擊を去りて、我等は世界の最大書籍の一（其の文學上の天才より云ふも又人類の運命に及ぼしたる感化の力よりも云ふも）に移らんとす。約百記は紀元前四百年以前に書かれたるものにして、其の本旨は徹頭徹尾、世間に流布したる應報說を批評して、一個人の價値の敎理と嚴密なる個人的應報說は到底兩立せざることを表白するにあり。ヨブは人生の禍福得喪は皆神の賞罰なりとの敎を承認しながらも世間を觀れば實際の事實は此の敎に符合せずして、惡人の時を得て安全に其天壽を全くするを見たり。之に加ふるに自己の苦しき經驗は飽くまでこの信仰と實驗との衝突を感せざるを得ざらしめたり。

人間は其の信仰の確實なることを自ら安せん爲に神の手より外部的の證明を得んと欲す（十七〇三、四）、然るに斯の如き外部的の證明に接する能はざるより、ヨブは結論を下して曰く此の世界は道德上より云へば混沌たる狀態にあり神の義を此處に見出すことを得ずと、乃ち世界の治者たる神、攝理の神、境遇の神

より眼を轉じて信仰の神に訴へたり。然して此の訴に對する答を斯の世に得る能はずんば之を次の世に得んとせり（十九〇二十五―二十七）。此の數節は實に記憶すべき言にして、猶太の文學が初めて死後の幸福なる生命の思想に近きたる第一着歩なり。然り不朽なる幸福の思想に近きたれども未だ之を捉ふるに及ばざりき。若し能く此の水平にまで上るを得ば、万般の問題は忽ち氷釋せしならん。

然れどもヨブの大体の見解と結論は既に業に此の方角に向ひつつあり。彼は一個人の眞價を重んじ、之を重ずるより義なる神に要め、此の要求は神の手より目前の滿足を得ず。是に於てか彼は希望を將來に置き此の不正の正さるべき日あるを待てり。十四章一―十五節に於て此の希望のほの見ゆるあり。木は伐らるるとも復た芽をふき枝を出だすに、人は木の如く復活すること能はざるか。冥府はただ此れ一時の宿りにして、人の現世の禍を避くる處なれば期到らば神人を此處より呼び出ださざるかとの意隱約たり。更に進んで十九章二十五―二十七節に至らばその熱望は再び回り來りて一時ながら確實なる信念となるを見る。曰く

我れ知る我を贖ふ者は活く後の日に彼必ず地の上に立たん。我が此の皮膚此

の身の朽ち果てん後我れ肉を離れて神を見ん。我れ親ら彼を見たてまつらん。我が目彼を見んに識らぬ者の如くならじ。我が心之を望みて焦がる。

ヨブの希望は。彼が面のあたり神に接して、神より我が言の誤らざる證明を得んことなりき。然れども彼が待ち望む所は此の希望を果たし得る一時に止まりて、死後永遠の幸福を享け高尙なる生活に入るべしと云ふ迄には達し得ざりしが如し、若し彼の議論の條系を追ふて進めば遂に其處に達すべしと雖も、然れども是に至りて一步を進めたる心靈的進步の重要なることは言ひ盡くすこと能はず。爰には唯主要なる二點を擧げんに、（一）來世に關する此の新見解は心靈的の根より發芽したるものにして、當時流傳したる靈魂に關する生物的思想に負ふ所なきこと也、（二）靈魂は死によりて其力と存在を失はず（詩篇八十八及び舊時代の信仰を表せる文章に見ゆる如く）して、肉体を離れて後も神及び其の至高なる靈的活動と交通するを得るとの新教理茲に發りたること此れなり。約百記は未だ條目を立てて來世の敎理を說くに至らずと雖之を諷示せることだけは明なり。假令以上引きたる如き言語無しとするも、書中現在の世界の矛盾を描し出づると斯くまで鮮明なるを見れば、その矛盾を調和すべき一層高等なる又新しき神學に向はざるを得ざる地位は十分に明なるにあらずや。この地位

よりして或は約百記の著者の如く信仰上の飛躍を試むる者あれば、傳道書の著者の如く靈の招誘に應ぜずして唯物主義と不信仰とに退却したる者もあり。此れ實に路の岐るゝ點なり。約百記より進んで詩篇十六章十七章四十九章五十三章に至れば、殊に後の二篇に於ては幸福なる永生の信念甚だ明白なるを見る。余は今之を詳述するの時を有せず。唯七十三篇に顯れたる詩人の希望に諸君の注意を乞ふに滿足せんとす。正義なる人の最高の祝福は神との斷えざる交通にあり、天地のあらゆる物を以てするも之に代ゆべき者あらず。神に比ぶれば全宇宙も言ふに足らず。此の生の終らん日には義人の魂の永久に有する嗣業は神の外に有るなしと。これ即ち詩人の意なり。（此の詩の解釋につきてはヅゥムの註解を參考すべし、近世の批評家の中には此等の詩篇に來世の信念あるを認めざる人もあり）

舊約書に現れたる個人の靈魂の不滅に關する問題は既に略ぼ述べ終れり。然れども未だ復活の教理に說き及ぼさざりし故に、今少しく之に及ばずば題意を盡さざる遺憾あるべし。諸君の記憶せらるべき如く、余は冒頭に於てイスラエル人が懷抱したる二個の希望ありしとを說き、其一は一個人に對する希望にして、其一は國民に關する希望なることを云へり。前者は既に之を詳述せり。國民に關する希望は發達してメシヤ的王國の希望となりしが、當初の思想に據れば、

此の王國建設せらるる曉には其の時代に生存したる義人のみ其の慶福に與かり他の人は之に與るの機會なしと信ぜられたり。斯くて個人の希望と國民の希望は兩々相平行して發達し來りしが、紀元前四世紀の末或は三世紀の始となりては、此の二の希望は次第に抱合して一の宗教的眞理の兩側面となるに至れり。其の次第はメシヤ王國の建設せらるる日之に與る者は當生存せる義人のみならず、既に世に亡きイスラエルの義人も亦復活して之に與るととなるべしと云ふにあり。斯くて義なる個人と義なる國民と共に幸福を受くべく、換言すれば義なる個人は單に孤立せる永生を以て報はるるに止まらずして、其の同胞と共に甦りて將來のメシヤ王國に與からん。『汝の死者は活き我が民の屍は起きん。塵に臥す者よ醒めて歌ふべし、汝の露は草木をうるほす露の如く地は亡き魂を出ださん』（イザヤ書二十六〇十九）。

復活てふことより、其の偶然の分子を取り去り其の精分を質せば死後一個人が神聖なる團体的の生活に加入することに外ならず。更に言を換へて云へば個人と共同的の善（グッド）との總合なり。パレスチナの信者は未來の幸福を望むにも、聖き國の一市民として同胞とともに之を享受せんことを望みたり。其の宗教の發展の歷史の裡に神の指痕を認め得べき所是に存す。希臘人の有したる靈魂不滅の

敎理に表れたる自己中心主義即ち利己主義はイスラエル人の宗敎思想には見るべからざる所なり。眞正の宗敎に於て無制限の個人主義は到底有り得べからず。現在未來ともに個人は社會の生活に一致して初めて至高の生命に達することを得べし。

イスラエルの國民が不朽の幸福の信念に達することを得たるは、苦心慘憺たる信仰の生活を經て是に達したり。然して宗敎的の信念に由りて得たる所のものは宗敎的の信念によりて初めて保持せれるべし。傳說により哲學上の議論によりてこの嗣業を受くることを得ず。親しく生命の泉と交通して以て永遠の生命に昇り行くことを得ん。是の如き交通あらば種々の疑念は自から消散して未來の祝福に與り得るの確信は神に於ける生命の生長とともに彌や增し深くなり行くべし。（柏井園君譯）

此の一篇はダブリン大學にて爲せる說敎にして希伯來書十章三十四『汝等己が爲に天に於て愈りたる常にたもつべき業あるを知れり』の語を題とせるものなり。

基督の教訓（一）

神學博士　エチ、ビー、スヰート

耶蘇基督が無上なる人類の教師たることを屢〻高調したるは、初代神學に於ける長所の一にして、此の事たるや、半ば主が『永遠の道』として、世界に負ひ給へる關係に基し、半ば主が在世間に說き給へる教訓の記錄に基す。イグナシアスは曰く、爰に一『教師』あり、彼れ言を出せば即ちその如く成る。眞に彼の言を有する者は、彼の沈默の中にも尙ほ學ぶべき所を見出し得べし。吾人は此の唯一の教師なる耶蘇基督の弟子たらんが爲に、實に萬事を忍耐す。一たび彼を離れては如何にしてか吾人は能く生活し得べき。豫言者輩と雖も、聖靈を通じて彼の弟子となり、おのが教師として彼を仰ぎたりきと。ヂャスチンは曰く、主の口より出でしものは簡潔にして力あり。彼は詭辯者流に非ず、而かもその言や神の力たるなりと。アレキサンドリアに於ける初代の一記者は曰く、正しく教へられて『道』に近づき來れるものにして、誰れか『道』が平易にその弟子等に教へ給へる教訓を、明白に了解せんと欲せざるものあらんやと。又たア

レキサンドリアのクレメントに對しては、基督我が師なりとの思想は、一種のインスピレーションたりし也。彼は曰く、吾人の師傳は『道』にして全人類の木鐸たる、神聖なる耶蘇なり。吾人が今教育を受けつつある基督教的生涯なるものは、要するに道理に合へる動作の連續にして、斷へず『道』の教訓を成就しつつあるものに外ならず。彼の人を教育し給ふや、成熟せる識者には秘義を以てし、普通信徒には善人となり得べき希望を以てし、強項なる頑迷者には肉感に訴ふべき懲罰的訓練を以てすと。

余が爰に引續きて掲載せんとする論文に於て、余はクレメントの大著述の問題となりしよりも、狹意義に基督の教訓を觀察すべし。主が在世中の教訓は、『道』の教育的勢力の特殊なる發現にして、時間に於ても空間に於ても制限あるものなり。然れども、此の制限あればこそ、却て未だ基督教の神秘主義に一身を委ねる能はざる人々を引着するに足るなれ。福音書は、主が人的生活の下にありて教師の任務を果し給ひし事と、主の教訓が人類歴史の中に關係を有する事とを示す。されば、主の教育事業を研究するに、先づその目にて見手にて觸れ得べき方面より始むるは、いと自然の事に非ずや。

一、第一世紀のパレスチナに於て、宗教的教授は決して珍しき事に非ず。學者

なるものは、ユダヤに於てもガリラヤに於てもありふれたる一種の階級にして、彼等は會堂に市場に富人の邸宅にその他到る所に見らるべく、彼等の後には常に多くの門生の從ひ行くありき。ラビなるものの第一の務は、先づ多くの弟子を敎育するにあり、善良なるユダヤ人の第一の務は、先づ適當なる敎師を獲るにありき。使徒ヤコブが基督敎會の會員に書を贈りて、『我が兄弟よ爾曹多く師となるべからず蓋は我等師たるものの罰を受くること尤も重しと知れば也』といひしは、蓋し當時の宗教界の弊風に對して慨する所ありたればなるべし。而かも基督の時代に於て、人民の間にラビの心術やその能力を疑ふものなかりしと見ゆ。彼等は到る所に尊敬を以て迎へられ、會堂に於ては上座に坐し、群集の場所に於ては多くの人の挨拶を受け、宴會の席に於ては最も光榮ある客人の一なりき。（馬太傳第廿三章六節以下）

一群の追從者が主の身邊を圍繞し始むるや、單にその弟子等のみならず、（約翰傳第一章卅八節）（馬可傳第九章五節）一般人民も亦た彼を呼びてラビといへり。（馬可傳第五章卅五節第十章十七節）此の稱號や、單に學者のみに限らず、通俗には凡て公に宗敎を敎ゆるものに與へられたりと見ゆ。（約翰傳第三章廿六節）此の意義に於て基督は此の稱號を受け給へり。（馬可傳第十四章十四節約翰傳第

十三章十三節以下）而して主が之を受け給ひし事は、他の人に比して數層深き意味なかるべからず、如何となれば主は嚴しくその弟子等に此の名稱を受くるを禁じ給ひたればなり。（馬太傳第廿三章八節以下）基督敎會に於ては、敎師たる主の位地や一種無類なり。主の目的は他の學者輩の如く敎師を養成するにあらざりき。使徒時代の敎會は實に神の使命を蒙れる敎師てふ一階級を有せりと雖も、（哥林多前書第十二章廿八節）而かも主が禁じ給へる精神は、書翰に於て處々に見らるるなり。（帖撒羅尼迦前書第四章九節約翰第一書第二章廿七節）『爾曹の師は一人なり爾曹は凡て兄弟なり』との言は、主の超絶せる尊嚴を發揮し主の前には弟子等は凡て平等なることを主張する點に於て、曾てその力を失ひし事なし。

二、耶蘇がラビの列に加はり給へる事は、此のナザレの預言者と當時の宗敎的敎師との間に橫はれる差異を、曾に輕減せざるのみか、却て之を一層明瞭ならしめぬ。人々は此の新ラビと從來見慣れたる敎師との間に、自然に比較を立てざる能はざりき。後者は悉く一定の模型に從つて形成せられ、同一の敎理を敎込まれ、同一の方法に由つて養成せられぬ。彼等は各或るラビの弟子にして、そのラビは又その前代者の足下に薫陶せられたるなり。故にその敎訓は皆な傳

說的にして、たとひ時代を逐ふて發展する所あるにもせよ、そは單に前代が取れる同一の行路に發展するのみにて、唯だその異なる所は益〻枝葉に渉り行くことにあるなり。是等の諸點に於て、新教師は非常なる異彩を放ちぬ。彼に教師の職に就くべき準備を與へたるものは、唯だナザレに於ける彼の家庭生活あるのみ。彼は幼時に會堂附學校の教師より學問の初歩を學びたるべしと雖も、學者として受くべき高等教育は少しも受けざりき。（約翰傳第七章十六節）職務的教育の代りとして、彼は山村に於て獲らるべき經驗、時々のエルサレム行に由りて廣めらるべき見聞、自家の觀察と及び律法詩篇預言者の研究とに由りて蓄へらるべき智識の外、何物をも有せざりき。

而して彼が他を教へ給ふ方法も亦た、彼自身の教育と等しく他の教師と異なれり。品性と人格とに基する人物の異同を判斷するに誤らざる普通人民は、直に彼の教へ方に新機軸あるを發見せり。馬可は語勢を强めて曰く、『人々その教を駭き合へり蓋は學者の如くならず權威を有てる者の如く教へ給へば也』と（馬可傳第一章廿二節）而して馬太は同一の文句を山上の垂訓の末尾に置く。（馬太傳第七章廿八節）想ふに馬可傳の方が寧ろ歷史的事實の眞を傳へたるものにて、こは主がカペナウムの會堂にて始めて安息日に說教し給へる後にありしことな

るべし。會堂に於ける唯一度の説敎は、無敎育なれども而かも敬虔なる聽衆をして、主が普通一般のラビに非ざることを確信せしむるに足りしなり。彼の敎へ方の特色は權威にありき、學問にあらずして眞理の力にありき。爰に一敎師あり。彼が敎を說くや、古人の權威に訴へず、直に自家の權威に訴ふ。説敎の題目は固より律法や預言者より來る普通の敎訓に據りたるならん、而かもその解釋に至ては、全く説敎者自身の見證に據れり。彼はおのが知りし事を言ひ、おのが見し事を證しせしものの如し。(約翰傳第三章十一節) 彼はおのが言を强めんが爲に有名なるラビの語を引用せず、到る所眞理の力によりて人の確信を呼起せり。然かも彼の歲や三十、彼がその同胞に對して說敎するの特權を使用したるは、少くともカペナウムに於てはこれが始めなり。彼が聽衆を醉へるが如くならしめし權威は、赫々たる名聲の魔術に非ずして、神命を受けたる確信より出づる神託の力なりき。誰れか彼れ程に、前人の轍路以外に一歩も踏出し能はざる學者輩の傳說依賴主義を排斥したるものあらんや。

三、此の安息日にカペナウムの會堂にて說かれたる敎訓は、啻にその敎へ方が新しきのみならず、敎訓そのものも新しかりき。(馬可傳第一章廿七節) 主の敎訓は、天才の頭腦より出でたりといふ意味よりすれば、必しも創作には非ず。

彼は此の意味に於てそが創作に非ざるを明言し給へり。曰く『我が敎ゆる所は我が敎に非ず我を遣ししものの敎なり』と。（約翰傳第七章十節）之に加ふるに、その新機軸や相對にして絕對的に非らず。幼少時代より學者輩の多辯なる說法や、當時のユダヤ人の黨派的論難を聞慣れたる宗敎社會に取りては、主の敎訓は實に新機軸なりしならん。耶穌はヒルレルの門弟にもあらず、シャンマイの學徒にもあらず、又たパリサイ人にもサドカイ人にもエッセニ派にも非ざりき。彼は又た國粹黨にもヘロデ黨にも希臘黨にも贊成し給はず。彼の全心を支配し彼の敎訓中に溢れ込める唯一の思想は、『神の國』にてありき。而かも此の思想とても全く新しきものには非ず。その心核は律法や預言者と同じく古きものにて、又た詩篇中に燃ゆる熱火を點せしものなり。主は或る人々が直に嫌疑し始めたる如く、イスラエルの宗敎を革命する爲に來り給はざりし。その學者やパリサイの徒に反對し給ひしは、決して此の國民宗敎を顚覆せんとする野望より出でしに非ず。彼宣はく『我れ律法と預言者を廢つる爲に來れりと意ふ勿れ我が來れるは之を廢てんが爲に非ず成就せんが爲なり』と。（馬太傳第五章十七節）主の敎訓はその根帶を舊約の敎訓に置く。前者は單に後者をその自然正當なる結局まで押詰めたるのみ。彼は直接にモーゼ、エリヤの傳統を承け、彼等は主

に於ておのれ等の完成を見たり。蓋し主は彼等が半ば無意識的に渇仰したる終點にして、彼等の不完全なる教訓を活かし且つ完成したる教師なりし。(馬太傳第十七章三節以下希伯來書第一章一節以下)彼の使命は實に、契約の民の眼前に長く髣髴たりし理想を實現するにありき。斯くて天國の大學者の教訓は、新なると共に古くして(馬太傳第十三章五十二節)、古きものを進歩せしむるも而かも之より分離することなく、之を成就するも而かも之を破壊することなきものなり。

四、神の國若くは天國――實際同意義の語なるが――此の語よりも適切に主の教訓全体を蔽ふに足る者なし。彼の福音は『神國の福音』にして、地上に於ける神政將に始まるべしとの好音を傳ふるものなり。(馬太傳第三章二節)神政てふ觀念は、古よりイスラエルの神政々体の根底に横はり居りて、或はメシヤを期待する希望を鼓吹し、或は預言者の夢想せる黄金時代を彩れり。而かも神國が直に來るべきを宣言する點に於ても、神國の意義を解釋する點に於ても、耶蘇は是迄になき新機軸を示し給へり。馬太に依れば洗禮のヨハネ先づ神國は近けりと呼號せり。然れども、馬可は此の語句を耶蘇に歸し、(馬可傳第一章十五節)且つ馬可も路加も主の先驅者が之を用ゐし事を承認せず。兎にも角にも、

そが明白なる形式を取りて宗教思想の常住的要素となりしは、慥に耶蘇の教訓によれり。又た神國てふ語の說明が主のガリラヤ人民に說き給へる教訓の重要なる部分をなせりと言ふも、決して過言には非ざるべし。主が當時の信仰に最も多く反對し給ひ、否な預言者の教訓に反對するものと思はれ給ひしは、實に此の點にあるなり。預言者輩はメシヤ王國の光景を描くに赫灼たる榮光を以てし、基督以前の默示文學に於ては、尨大なる未來論（エスカトロジー）はその大部分を占めぬ。然れども、主が示し給へる王國に於ては、未來論（エスカトロジー）は遠く後方に退き、その預言的敍事に於てすら、多く從來の趣を脫却せり。かの譬喩なるものは主が人々の前に示さんと欲し給へる如くに、神の支配を示すものと見らるべく、或は之を播種生長收穫に比し、或は之を商人や漁夫や家婦の勞働に比し、（馬太傳第十三章一節以下馬可第四章一節以下）或は之を大家の主人とその一員との關係に比し、（馬太傳第廿五章十四節以下路加傳第十九章十一節以下）或は之を婚莚とそれに關する出來事に比し給へり。（馬太傳第廿二章二節以下第廿五章一節以下馬可傳第二章十九節以下）是等の卑近なる說明が平凡なる生活をなせる人々の心中に天國を教へ込むや、啻に普通一般の經驗に訴ふるのみならず、又たそが外部より人々を支配する如く彼等の內心にも働ける一種の力たることを示す。之と同樣

の思想は譬喩に非ざる敎訓の中にも認めらるべし。曰く、神の國は心の貧しき者に屬す、又た正義の爲に迫害さるゝ者に屬すと。（馬太傳第五章三節十一節）是れ各人の屬すべき位地がそのものの道德的品格によることを示すなり。曰く此の世の富めるもの大なるものとは之れに入ること難し。（馬可傳第十章廿三節以下）曰く、神の國は顯れて來るものに非ず、此に見よ彼に見よと言ふべきものにも非ず、それ神の國は爾曹の衷にあり。（路加傳第十七章廿節以下）曰く、人新に生れて靈的能力を有するに非ざれば、之に入ること能はず又た之を見ること能はず。（約翰傳第三章三節以下）曰く、神の國と神の義とは兩々相並ぶべきものなり。（馬太傳第六章卅三節）斯く天國は眞善美の神的標準にまで人々の生活を引上ぐべき倫理的精神的大槓杆なるなり。

此の敎訓や、新奇は則ち新奇なりと雖も、多くの人に非常の失望を與へたるに相違なし。その外形は極めて通俗なりと雖も、普通人民の趣味に適するものには非ざりし。そは國家の獨立國權の擴張を欲する國民の希望を顧みざりき。そは何等の世俗的利益をも與ふるの風なかりき。そは人間に普通なる諸の情慾を失望せしめたりき。そは嚴しくその範圍を倫理的精神的區域に限りたりき。而かも基督が說き給へる天國の說敎は、普通人民の幾千を引着せり。蓋しその中

に人心の源泉に觸るゝものありて、之を聽ける人々は終極の實在に面接するの思を感じたればなり。之に加ふるに、教師の人物に此の教訓に相應すべきものありき。之に心事の如何に關して他の嫌疑を招くが如き分子なく、自己の利益を求め自己の名譽を揚ぐるが如き痕跡なく、形式的御役目的の窮屈なく、修辭的誇張的の語句なかりし。一語一語、悉く眞實の響ありて能く人心に徹底せり。基督が教へ給へる道德は、平凡なる常套語にも非ざれば、又た死灰の如き哲學にも非らず、却て生氣勃々たる活問題なりき。彼が顯し給へる靈界は人生の周圍を包括し、將に來るべき神國の力は彼の聽衆の上に臨み、（馬太傳第十二章廿八節）彼等は現に神の面前に立つの思をなせり。されば民皆な心を傾けて其教を聽きたるは、決して不思議の事に非ず。（路加傳第十九章四十八節）而かも主の教訓に由りて燃されたる熱信は、一時代に限らるべきに非ず。此の教訓や、何れの時代にも適用さるべき原理原則を含み、而して之を宗教的眞理を發表する最上機關なる、平易有力なる言語にて示せり。主はガリラヤの農民に語るは即ち全世界の民に語る所以なるを知り給へり。此の福音や遂に萬國民に宣べられざる可からず、而して之と共に、基督の傳道中に起れる最小些事と雖も萬世に傳はるべきなり。（馬太傳第廿四章十四節第廿六章十三節）歷史は主の預言の

中れるを證す。記されたる福音は説かれたる福音を擁護して不朽なるページの中に耶蘇基督の聖言を保存するものなり。主の教訓の如きは決して滅ぶべきものに非ず。その不朽なるは、啻にその神出なるが爲のみに非ず、又たそが人心の最深なる渴望に應ずる爲め、且つたとひ意志が喜んで服從せざる時も尚ほ良心をして最上の崇敬を拂はしむべき永遠の眞理を、明白に現すが爲ならずんばあらず。

五、主の教訓中に尚ほ一の分子あり、是れ著しく第四福音書に現はると雖も、而かも共觀福音書も亦た全く看過せざる所なり。耶蘇は啻に天國の福音を宣べ給ひしのみならず、又た自ら神に對し人に對して無類の關係を有することを公言し給へり。共觀福音書の教訓即ちガリラヤ傳道の教訓に於ては、此の關係や通例主の教訓の後方に潛み居れり。主は甘んじて自ら呼んで『人の子』と言ひ給へり。(馬太傳第十一章十九節)而かも時々人の自己を『神の子』と呼ぶを許し給へり。(馬可傳第五章七節馬太傳第十四章卅三節)又た神を『我が父』と呼びて自ら特別の子たるを示し給へり。(馬太傳第十一章廿五節以下第十二章五十節)約翰傳中の教訓に於て、殊にエルサレムに屬する部分に於て、主はおのが天父に對する關係を、或は公に或は私に、多くの場合に於て頗ぶる十分に説き

示し給へり。（約翰傳第五章第八章第十四章より第十七章）吾人は今此の基督論に立入りて、その意義を栓索するを要せず、唯だそが基督の教訓を載せたる凡の記錄に現るることを一言せば則ち足る。ガリラヤに於ては、主の最初の目的は靈界の事實に無頓着なる民衆の良心を覺醒するにありき。即ち使者の人物よりもそが持來れる使命の方が、主の思想を占めその教訓を滿たしたりき。然れども、エルサレムに於て、學者識者の間に於て、歷史的なる宮殿の境內に於ては、主は自己に關して人々の心中に起せる疑問に答ふるを躊躇し給はず。第四福音書中にある此の問題に關する說話の純正を疑ふべき理由一もあることなし。馬太傳第十一章廿五節より卅節までの語句の如きは、たとひ四圍の事情が之れを說くの必要を生ぜざりしとはいへ、ガリラヤ傳道中にも、約翰傳的基督論が旣にその萠芽を有せしことを示す。早晚主は自己の本性を顯現し給はざるべからず。教師とその教訓とは相離るべからず。神國の福音は又た『神の子耶蘇基督の福音』なり。（馬可傳第一章一節）神子のペルソナとその天父に對する關係とを看過せる福音は、決して完全なる福音には非ざるなり。基督論を缺ける基督教は基督がエルサレムに於て否なカペナウムに於て教へ給へる福音を、その儘に示すものには非ざるなり。

六、エルサレムに於てもガリラヤに於ても、主の教訓は半ば公に民衆の前に説かれ、半ば私に弟子の間に說かれたり。この差別や大切なり。如何となれば、私なる教訓と公なる教訓と、その目的に於てその方法に於て異なる所あれば也。主は始め一般民衆に――或は會堂に來れる篤信者に對し、或は湖畔や路傍に集まれる群集に對して――說教し給へり。主の使命は萬民に傳へらるべきものにして、主は始終その熱誠を外部の群集に注ぎ給へり。その公なる教訓に於て、無識者を輕蔑する風（約翰傳第七章四十九節）超然として高尙ぶる痕跡など、少しもあることなし。彼等の無智は主の不忍耐を引起さざるのみか、主は却て無限の同情を發揮して彼等にその最上を與へ給へり。（馬太傳第九章卅六節以下）而かも少數なる一團の弟子は、最初より主が特別の注意を寄せ給ひし所なりき。洗禮約翰は吾人に示すに、如何にして此の『小さき群』が出來しかを以てす。洗禮のヨハネの弟子の一二は、此の新教師に引着けられ、彼の跡を追ふてその宿所にまで行き、彼と共に一夜を過ごし、遂に彼と一生を共にするの決心を起せり。若し主にしてその數を十二に制限し給はざりしならば、或は不便を來たす程多數になりたるやも知れず。（馬可傳第三章十三節以下）是等の撰まれたる弟子等は、重に公なる說教の畢りたる後に、主より特別なる教育を受けぬ。主は外

部のものに譬喩を以て語り給ひし教訓を彼等に說明し給へり。（馬可傳第四章十節以下三十四節）主は『神の國の奥義』を彼等に委ね給へり。而かも彼等はその時に方りて、その特別なる教育を受けたるは、他日時來らば之を全世界に宣傳すべき爲なることを注意せられたり。主の教訓は秘密教に非ず、即ち特別なる階級の所有に非ずして、却て基督教會全體の共有財產たるなり。耳をつけて聽きしことを屋の上に宣布せよとは、即ち此の事なり。（馬太傳第十章廿七節）主が二種の教へ方を區別し給ひしは、單に一時の便宜にして、永遠の事には非ざるなり。

七、基督の教訓が世界に如何なる結果を及ぼせしか、是れ吾人の齊しく知る所なり。然れども、そが直接に之に接觸せる人々に何程の印象を與へたるかは、自然に吾人の心中に起るべき問題なり。ガリラヤ信徒の團体に關する記事が、使徒行傳に唯だ一個所だけあるは、（使徒行傳第九章卅一節）豈に不思議の事に非ずや。されば永久なる感化は別段與へられざりしものの如く見ゆ。且つ吾人は主の聖言によりて、湖邊の重なる諸邑が主の說教に由りて動かされざりし事を見る。（馬太傳第十一章廿節以下）而かもガリラヤに於て主の說教を聽きしものは、悉くガリラヤ人に非ず。ユダヤ人もイドミア人もペリア人も否なヒニシ

ア人までも、その中に見へたると共に、ガリラヤより四方に通ずる幾多の大道は、主の聲名をスリヤ全國に傳播せり。（馬太傳第四章廿四節馬可傳第三章七節以下）個人の生涯に及ぼせる結果や、ガリラヤ傳道の記錄に於て敎會が貴重なる寶藏を傳承せし事は爰に言はず、唯だ初代に於けるパレスチナ敎會の擴張が如何程此の影響に負ふ所ありしやを定むるは、固より不可能の事に屬す。又た基督が十二使徒を敎育し給へる結果を精測することも頗る困難なり。吾人が記錄にて讀む所だけにては、その結果は主の費し給へる歲月と勞力とに報いざるものゝ如し。使徒等は全體として美なる品格若くは堅固なる品格、或は深遠なる識見若くは雄大なる識見を有するが爲に、有名なりし人々とも思はれず。若し吾人にして僞經的使徒行傳を眼中に置かざる時は、十二の中ち二人だけが基督敎の天下に見るべきの印象を殘したるなり。然れども、薰陶されたる一團の人士が與へたる影響感化は、單に記錄に殘りたる彼等の働によりてのみ測らるべきに非ず。使徒行傳が吾人に示す如く、使徒の一團は初代敎會の心核となりて、之に一定の形式と秩序を與へたり。彼等に於て敎會は統一の中心を見出し、彼等よりして敎會は新運動の動力と標準的敎訓とを受けたり。（使徒行傳第二章四十二節第五章十二節以下第六章二節以弗所書第二章廿節彼得後書第三章二節）

而して將來の基督教國の母なるパレスチナ教會が獨立し得るに至るや、彼等は四方に散じて、爰に合同的運動はその終を告げぬ。たとひペテロが東西両洋にて働かず、ヨハネがエペソにて働かざりしとするも、尚ほ主がガリラヤにて彼等を教育し給へる苦辛は、遂に水泡に歸することあらず。此の大教師は之によりて、幼稚なる教會を擁護し、おのが教訓を托すべき苗代を作り、今日吾人にまで傳承せる大系統の基礎を据へ給ひたるなり。

八、若し吾人にして第四福音書が証する所を受容し得るとせば、主はおのが教育事業を以てその死と共に終るべきものと見做し給はざりしなり。彼は賣さるる夜に明言して宣はく、『我なほ爾曹に多く語るべきことあれども今爾曹曉ることを得ず、されど彼即ち眞理の靈の來らん時爾曹を導きて凡の眞理を知らしむべし……………我れ譬喩を以て此事を爾曹に語りしが譬喩を用ゐずして爾曹に語り父に就て明に示す時至らん』と。（約翰傳第十六章十二節以下廿五節以下）而して此の聖約は聖靈の降臨によりて成就せられたり。是れ即ち耶蘇の靈（使徒行傳第十六章七節）基督の靈（羅馬書第八章九節）主の名によりて遣られ（約翰傳第十四章廿六節）教會に於て主の代人たるものなり。斯くて聖靈の教訓は、使徒の書翰に於ても基督教國の經驗に於ても、基督の教訓の繼續にてあるなり。

主は前に譬喩を以て教へ給ひしかど、今や明白なる言語を以て教へ給ふ。主は進歩的に吾人の基督教的意識を明にし給へばこそ、吾人は現代に於ける智識の進歩や人生の複雜より生ずる幾多の問題を解釋し得るの信仰を有するなれ。基督の靈は基督の語り給へる凡のことを教會に憶ひ起さしむ。(約翰傳第十四章廿六節) 彼は基督の屬を受けて之を教會に示す。(約翰傳第十六章十四節) 斯くて聖靈に由りて解釋さるゝ基督の教訓に於て、今吾人の信仰の基礎までも覆へさんとするが如き凡ての問題は、時來らば當に適當なる解釋を見るべきなり。(今泉眞幸君譯)



講演

基督教的經驗に依て解釋せる基督教的信仰

校長　チヤールス、カツバート、ボール

第四回　基督教的經驗によりて解釋せられたる人類の罪及基督の犧牲

古來多くの宗教家、哲學者、罪に就きて諸種の說をなす。

或者は曰く罪とは宇宙本來、人類必然の狀態也即ち形而學上必至なりと又或者は曰ふ罪とは人類進化に必要なる一段階なりと、又或者は曰ふ罪は物質に附屬す、人が罪を犯すは肉体を有するが故なりと。

此の如き說は古來多くの所に於て唱へられたる說なれど、キリスト敎の採らざる所のものなりキリスト敎は宇宙人類の造化にして支配者たる神を以て愛の神正義の神となすが故に此宇宙をも又物質をも本來惡なるものとなす事能はず、又罪惡が人類進化に必要なりとも信ずる能はざるなり。

キリスト敎は罪を以て人の意志に歸す、意志は凡て人格を有する者の皆有するものなり、神は大なる意志を有して世界を支配す、人も又意志を有して或は神の意志に從ひ又之に反對す、人の意志が神に反對したる時之れ罪の生ずる時なり。

凡て罪は三個の關係を有す、第一神との關係、第二自己との關係、第三社會との關係之なり、

（一）前述せる如く罪は神に對しては大なる反逆なり宇宙に存在する道德的大意志に反對するものなり。

（二）自己に對しては其欲情を滿足せんとして却て自ら滅亡に導くものなり、夫れ人は神の意志に從ふべく造られ之に從ふによりて愈發達する

ものなり、然るに若し神に反抗せんとせば自ら己れを侵害するに至るなり。

(三)人は又社會に存在す、吾人の行爲は必他人に影響を及す、故に罪の結果は其人を滅すのみならず又其社會をも害するなり、一人の罪は三四代否萬代にも報はるゝものなり、苦き毒藥をして强ひて他人に飮ましむるが如し、現時に於ても社會の害毒如何に大なるかを思ふ時は覺へず吾人をして戰慄せしむ、キリスト教は箇人の罪及び其悔改を重んずると共に又社會の罪又其改善をも輕んぜざるなり。

然らば如何にして此の如き罪より人を救ふべきか、キリスト以前の宗教は多く罪の大なることを見て失望し全く人生を悲觀視するもの多く、キリスト教は勿論罪の大なることを知る然れども尙此罪は救はれ得べき者たることを信ずるなり。

現今人々は人生に關し多は樂天的觀念を有す、彼等は多く希望に充つ、而して現今此く人々をして此現世を樂しましむるに至りし所以は何ぞ。

第一は科學の進步が生活をして幸福ならしめたるが故ならん、醫術は開け工藝は進步し以て苦痛は減せられ、便利は增さる、魔力として恐れられし電氣は却て人の利用に供せらる、又社會學の進步は社會の改善を計り人類の不平を醫し、又教育の進步は人々に高尙なる趣味を與ふ、智識は憂ひを增すと言ひしは昔の事なり現今は智識によりて大なる快樂を得つゝあり、此の如き社會の傾向は自然に厭世家を少くなすなり。

第二は人間の價値を重んずるに至れることなり、昔は病者老人婦人小兒の如きは棄てゝ顧みざるものとせり然るに現今は其價値一般に認められ彼等も人類として重んぜらるゝに至る從つて慈善の精神仁愛の事業盛んになり漸次人生をして温かき喜しきものとなさんとす、是又人々の人生觀に大なる影響を與へたるものなり。

第三は現今の社會は不完全なるも此社會は尙發達進步の希望あるものにして其達し得らるると思ふべき可能の理想世界は實に高尙なるものなり、今日の現在狀態とは大徑庭の存するものなり、故に現今の社會はタトヘ不完全不足たるも此の如き世界を希望するが故に人は失望せず此社會の爲に盡すことを得るなり。

以上三個の事實は今日多數の人々を勵ますものなり、吾人も此の如き事實によりて人生の住むべき價値ある世界たることを學ぶなり、然れども尙罪に沈む人惡に陷れる社會をば如何にして進步せしむべきか、卽人類の現實態より如何にして其可能態に進め得べきか。

吾人は世界に現れし多くの宗敎を尊敬す如何となれば彼等は或る時代、或る人民に必要なればなり、然れども吾人は現今自己の實驗によりて箇人を救ひ社會を救ふものはキリストなりと信ず、之れ余一人の實驗のみにあらず多くの人々の實驗なり、多數の人々の實驗皆一致すとせば之れ實に信ずべきものとせざるべからず、夫れ救とは人々が實驗するものなり、故に實驗は大なる證明なり。

キリストは實に德の高き師たるのみならず我が救主なり、單に又我れ一人の救主のみならず世界萬民の救主たるなり、キリスト曰く我擧げられなば萬民を引きて我に來らせんと。

見よキリストによりて如何に社會が一變したるかを、又一箇人が彼を信ずることによりて如何に變化するかを、恰かも太陽が草木を活かし、生長せしむるが如く、キリストは人を活かし、人を救ふなり彼の救は時と處と又其男子たると女子たると靑年たると又老人たるとを問はず凡ての者を救ふ力なり。

キリストとは誰ぞ曰く我は「アルハ」なり「オメガ」なり云々とキリストは無限純全たる神の化身なりキリスト斯く自識し給へり、キリスト

教會も又堅く是を信仰す。

キリスト又曰く「我を見し者は父を見しなり」とキリストを知り彼を愛するものは神を知り神を愛するものなり、神を愛するものは神の旨に從ふものなり、神の旨に從ふものは罪を犯さざるものなり夫れ罪とは自我の意志を貫かんとして神の意志にそむくものなればなり。

神は固より反逆を惡み給ふ、然れども其人をば決して惡み給ふことなし、却て甚しく之を愛し給ふ父の其放蕩息子に於けるが如し、キリストは神の化身として清き美しき生涯を送り給へり、是れによりて人の行ふべき道を示し給へり。

キリストの生涯は其美しき道を示し給へるのみならず其比較によりて罪の如何なるものなるかをも明かに示し給へり、即ち如何に世が罪に汚れたるかを明かにし給へり、又之によりて神の愛をも示し給へり。

キリストは罪なき者、誠に美しき清き者、然るに人は汚れ不義なる者なるが故に遂に此のキリストを十字架にかけて殺せり、而かもキリストは彼等を愛し、人類を救はんが爲には其死をさへ避け給はざりき。

人誰か此の如き死に對して必感動せざる者あらん人類は此の如きキリストの死によりて救はるるを得るなり。

第五回　基督教的經驗によりて解釋せられたる神聖と靈魂不滅の觀念

凡て行ふべからざるもの之を罪といひ、行ふべきもの之を聖なる事と名く、即ち宗教は罪に對しては消極的態度を取り、神聖なる事に對しては積極的態度を取る。

キリスト教に於ても此兩方面ありキリストは罪の如何なるもの又如何に恐ろしきものなるかを明かにし給へると共に彼は又神聖なるものは如

何なるものか、神聖なる生命は如何に永續すべきかに就きて最明白なる教を垂れ給ひき。

キリストは實に罪の審判者たると共に世の救主たるなり萬民の罪の爲め一度死せしも甦によりて死に勝ち給へり、之によりて希望と勝利は人類に明かにせられたり。

凡ての宗教皆神聖なる語を有す然れども其意義に至りては諸宗教各特有の思想を有す、キリスト教は他の宗教と異りたる思想に於て神聖なる語を用ゆ。

一、キリスト教は儀式を嚴守することのみを以て神聖なることとなさず、之れ古への宗教と異なる所なり、彼等は或る種の人を神聖なるものとし他を俗人となし、或る一定の場所を聖なる所とし他を聖ならざる所とし、或る物体を神聖視し他を汚れたるものとなす、キリスト教は勿論儀式を有するものなり、又之を重んずるものなり、然れども此は宗教的美の觀念を進歩せしめ人の心を和げ之を益々道德的ならしむるが爲なり、故にキリスト教は單に儀式のみを神聖なりとなすものにあらざるなり、

二、キリスト教は又思想の純正なることのみを以て神聖なる事となさざるなり、彼等は感情を卻け冷靜に眞理を研究することを神聖となし、又此の如き人を神聖なる人となす、キリスト教は之れにも同意すること能ざるなり。

キリスト教の神聖なる意義を解せんと欲せば左の三點より考ふべし、

一、キリストを以て神聖の標準となすこと、キリストは神の品格の化身なり、彼は神と一致調和せるものなり夫れの神意に反するは罪にして彼の意に從ふは之れ聖なることなりキリストは全く神の意志に從ひしものなれば彼れには一點の罪もあらざるなり、キリストは善を行ひしのみならず善其のものの化身なり義を行ひしのみならず義其のものの化身なり、神聖其のものの

化身なり、神其ものの化身なり、彼曰ふ「我を見しものは父を見しなり」と、キリストは此の如く神聖の完全なるものなり故にキリスト教はキリストを以て神聖なる模範標準となす。

二、キリスト教は道德的理性を以て神と共通なるものとなし、是によりて聖なるものと聖ならざるものとを判斷す、人は神に似せられて造られたりとはユダヤ古來の教義なり又全世界に於て信ぜらるべき一大眞理なり、吾人の心にして罪に汚れずんば神の美しき德性は吾人の心に最明かに映ぜらるるなり、吾人は屢々罪に汚さるるが故に往々判斷を誤る、然れども靜かに公平に考ふる時は良心は吾人に最美しき判斷を教ゆ。

三、人の心には神の靈住ひて人をして罪に勝ち神聖なる生命に導く、人は皆道德的理性を有して能く、善惡の區別をなす、然れども其善を知りても行ふと能はざるは人の常なり、ポーロは此の苦しき實驗をなし、而して遂に之に勝つとを得たり、之れ何故か、彼曰く我もはや生けるにあらずキリスト我にありて生くればなりと、キリスト教的哲學思想によれば神は箇別の人を通して働き給ふ、キリスト又吾人の心に活きて働き給ふなり。

神聖なる基督教的生命は左の五者に接觸して其眞相を發揮す、

一、罪。罪とは自我の意志を以て神に謀反するとなり、神聖とは全く之に反し凡て皆神の意志に從順たることなり。

二、自我。(一)個人性を發揮し其職分を完ふすると之れ自我の神聖なる義務なり、神は箇別の人を作り之に各特種の天職を與ふ、故に人は各己れのみなすべき職分あり又なし得べき特權あり、然るに人若し之を怠らは世界は大なる損害を受く、従つて神の意に反する罪惡たるなり、故に人は神聖なる義務として此箇人性を發達し

又之を働かさゞるべからず、(二)自我は全く神に献身すべきものなり、我等は價値なくして購はれたるものなり、神とキリストに全身全靈を献げざるべからず、之れ又神聖なる義務なり、(三)人は神の番頭たるべきものなり、神より受けたる命令を守り、其職分を盡し、受けたる惠を働かし神の番頭として生活すべきなり。

三、神。祈禱は至情より出づ、ユダヤの詩人曰く「人は鹿の溪水を慕ふ如く、神を慕ひ求む」と人が神を求むるは自然の情なり、祈禱は理論にあらず、儀式にあらず神を求むる至情より發表す。昔バアルに事へし者共は、大聲を發して先づ神の眠を醒し而して之に祈願をさゝげし然れどキリスト教の神は此の如き神にあらず、彼は惠と愛に充ち給ふ神なり、我等は己れの利慾の爲に祈禱をなすにあらず、神と交り其慰みと力を得んが爲なり此の祈禱は實に神聖なる生涯の生命なり、何人も聖なる生活をなさんと欲せば此祈禱をなさゞるべからず。

四、社會。(一)キリスト教は箇人を重んずるものなり、佛教及印度教に於ては平等無差別を唱へて箇人の存在を否定するものなり、キリスト教は之に反して箇人其ものが實在する者となし之を重んずるなり。(二)キリスト教は印度教若しくは佛教の如く此現世の生活を以て卑しむべきものとなさず、吾人は各自現社會を重んじ、箇人の幸福、社會改善の爲に力を盡すべきなり即ちキリスト教は現世を全く惡とし住む價値なしとなす厭世思想に反對す。

五、來世。人生死ほど大なる問題なし、禽獸は死につきて深く考へざるものの如し、死は人類特有の疑問なり、死につき古來二種の相反せる思想あり、一はあまりに現世を喜び未來を信ぜず故に死を以て非常に悲しむべきこととなす、他はあまりに現世を重んぜず只未來のみを希望す、

故に死を以て寧ろ喜ぶべきこととなす、然れども此兩者共に誤れる思想なり。

キリスト敎は現世を重んず然れども又未來を信ずるものなり、死は悲しむべき事に相違なし然れども之れ人の終局にあらざれば吾人はあまりに悲しむを要せざるなり。

キリスト敎は人格ある神を信じ又箇人の存在を認む、神と人とは共に實在して其本質を同ふす、故に神永遠に生くれば人も又永遠に生くるなり。

印度にある諸種の宗敎はマックス、ミューラーの曰ひし如く何れも二箇の思想即ち禁慾主義及び輪廻說を有す彼等が唯一の大理想は涅槃に歸することなり、即ち梵天と一致することなり、梵天は人格を有せず故に凡ての情緒を去りて此の無人格の大我に歸せんとす、之れ禁慾主義を取る所以なり、又輪廻とは彼等が人生に對する說明なり、即ち人に禍福と貴賤あるは凡て前世の因果によるものなり人は皆其行爲によりて「カルマ」を積み、之れが因となりて次の生活を生ず、然れども若し人にして全く箇人的性慾を滅し寂滅に歸する事あれば其人は此「カルマ」を滅し全く轉廻以外に脫することを得るなりとなす。

キリスト敎は此の如き思想と大に異なるもの也、キリスト敎は印度敎及佛敎の如く箇人の實在を否定せず、又神の人格をも疑はざるなり、故に神が人格を以て生存する如く、人も箇人性を有して永遠に生存するものとなす、如何となれば人は神と共通の性を有し其本質に於て同じきものあればなり、即ち道德的理性は神人共通の性にして、之れあるものは永遠に生存し得るなり、吾人は希望を有す即ち吾人の德性は益進步し永遠に發達す吾人はキリストによりて罪に勝ち、此神聖なる生命に入り永遠の幸福を受け得べきなり、之れキリスト敎徒が實驗によりて

信じて疑はざる神聖及永遠の生命に對する觀念なり。

第六回　基督教を以て絶對的宗教と做すの理由

余は前日來數回の講演をなしたるが、余の目的は決して基督教を辯護せんとするにはあらず、又他の宗教を攻撃せんとするにもあらざるなり、只吾人が實驗によりて得たる基督の信仰を東洋の諸君に開陳し、公平なる批評を乞はんが爲なり。

日本の學者中には往々宗教の不必要を唱ふる人ありと聞く、然れども公平に人類の性質を研究するもの何人か宗教の人類に必要なることを疑ふ者あらん。

宗教は人類に必要なると共に最も善良なるものを撰ばざるべからず、故に古來宗教の撰定に付烈しき爭論行はれたりき。

今や宗教の戰爭は殆んど跡を收むるに至り、人々は最も公平なる判斷に基き或は學理上より或は實驗上より、其最も高尙なる宗教を求めんとなしつつあり、之近來比較宗教學の進步せし所以なり。

以上の事實により人々は最高最善の宗教即ち絶對的宗教を信ぜんとする傾向あると明かなり。

絶對的宗教の意義

然らば其所謂絶對的宗教とは如何なるものか

（一）準備的にあらざるものなり、或る境遇に於てのみ必要にして他の高尙なる宗教の爲め準備的なる宗教は決して絶對的宗教にあらざるなり、例へばバプテスマのヨハネの宗教の如きは準備的宗教なるが故絶絶對的宗教と云ふと能はず、勿論此の如き宗教も其準備としては甚だ必要なりしものなればかかる宗教を輕蔑すべからざるなり。

(二)　地方的にあらざるものなり、宗教中には其國民其種族に限られたるものあり、是等の宗教は他の國民他の種族には適用せられざる宗教なり、故に一般人類の宗教たる能はざるものなり、從つて此の如き宗教は所謂絶對的宗教にあらず。

(三)　暫時的のものにあらず、絶對的宗教は前述せる如く準備的にあらず、又地方的にあらず、永遠的普偏的のものたらざるべからず、即ち塲所によりて限られ、時間によりて限らるるものにあらざるなり、從つて暫時的のものにあらず。

(四)　「中らずとも遠からず」と云ふが如きものにあらず、絶對的宗教は絶對的眞理の宗教なり、眞理にあらざるも眞理により近きものと云ふが如き比較的のものにあらざるなり。

然らば此の如き所謂絶對的宗教の内容は如何なるべきか

絶對的宗教の資格

(一)　時間を超越せる終極無限の神を有する事、絶對的宗教は必ず絶對的神を中心とせる宗教ならざるべからず、時間に限られ塲所に限らるる神を崇拜する宗教は絶對的宗教たる能はざるなり。

(二)　社會的理想は世界的ならざるべからず、狹隘なる社會的思想を有する宗教は決して絶對的宗教たる能はざるなり、即ち絶對的宗教は廣く箇人の價値を認め其幸福を求むる世界的理想を有するものたらざるべからず。

(三)　實在を伴ふものたらざるべからず、宗教は單に感情的のみのものにあらず又大に合理的のものたらざるべからず、然らざれば智識の進歩は忽ちに舊來の信仰を拂ひ去るなり、故に絶對的宗教は實在を基礎とし、空想的迷信的にあらざるものならざるべからず。

絶對的宗教の存在を可能なりと信ずる理由

以上は絶對的宗教を單に抽象的に論述せり人或は曰はん「此の如き宗教は實際世界に存在すべきものにあらず」と、絶對的宗教は果して世界に存在すべからざるものか、

吾人は絶對的宗教を以てあり得べきものと信ずるものなり其理由二あり。

（一）人類の統一的なることが眞實なること、人類の統一は近來殆んど何人も疑はざる所なり、然れども今尚往々之に反するが如き言論をなすものあり三十年來印度に住する某歐洲人は印度人と歐洲人とは到底一致することを能はざるものなりと曰へり固より印度人と歐洲人は理性及感情の發達を異にするものなり故に其間に甚しき差違の存することは當然の事なり、然れども彼等の理性は全く別種の者にはあらざるなり、凡て人類は言語、風俗歷史を異にする故に多少其性情を異にす然れども尚彼等は皆人類として普遍的性質を有す、之れ現今心理學者の最も明白に證明する所なり、若し此の如く人類を統一的なりとせば人類間に統一的宗教の存し得べきことは當然のことなり。

（二）宗教的情感の普遍なること、宗教は人類普遍の至情より出づ、人は各自皆靈性を有す、其靈性は決して物質のみを以て滿足せざるものなり、彼は實に絶對的無限の神を慕ふものなり、此の宗教的感情は人類普遍たるなり從つて同一普遍的宗教は存在し得べき理なり。

絶對的宗教の眞僞を判定する方法

現今世界には多くの宗教存在す其の內には自ら稱して絶對的宗教なりと稱するものもあるべし、然れども果して其の宗教が絶對的宗教なりや否やを判定するには左の四項目によりて之を研究すべし。

一、起源の適當なること、凡て宗教は人爲を以て造らるべき者にあらず、眞の宗教は生るるものなり、强ひて人を信せしめんとしたる宗教は眞

正の宗教にあらざるなり、絕對的宗教の起源は最も高尙なる至情に出づるものならざるべからず。

二、哲學的方法の廣遠なる事、其教理淺薄にして其理全く論理的ならざるものは決して絕對的宗教にはあらざるなり。

三、道德力の强固なること、世には迷信の力によりて道德に進ましめんとする宗教あり、然れども此の如き者の力は强固ならざるなり、道德力の堅固ならざる宗教は決して絕對的宗教たる能はざるものなり。

四、希望に充ち滿つる事、其宗教中に希望の存せざる宗教は決して絕對的宗教たる能はざるなり過去の鏈につながれて將來の希望なき宗教は永遠の宗教にあらざるなり。

今吾人の信ずるキリスト教は果して是等四個條の試驗に及第し得るや否。

先づ基督教の歷史を觀るに此の宗教は最も微弱なる國ユダヤに生じたる宗教なり、宗祖基督は槽の內に生み落され、十字架上に殺されたり、爾來今日まで或は兵力を以て或は批評によりて烈しき迫害に出遇ひたり、然るに斯教は漸次各地に傳はり各種異れる人民にも滿足を與へ、文明の基礎となり道義の生命となり、遂に今日に至れり若し基督教が非眞理の宗教ならば二千年の昔に已に滅亡したりし者なり、如何となれば其時已に大なる迫害ありて一時全く撲滅せられんとしたればなり然るに能く其攻擊に堪へ今日に至りしを見れば、基督教は決して眞理を有せざる宗教にはあらざるなり。

以上キリスト教の歷史を見るに其起源に於て其哲學に於て、其道德に於て、其希望に於て、確かに絕對的宗教たり得るだけの資格を有する也。

キリスト教と東西兩洋の關係

世には基督教を以て西洋の宗教と做(みな)すものあり誠に誤れることの甚しきものなり、基督教は西洋

の宗教にあらずして東洋の宗教なり、然れども基督教は長く西洋にありて生長發達せり、故に其形式に於て甚だ西洋的の點も多からん、然れども衣服は身体にあらざるが如く儀式形式は決して基督教の精髓にはあらざるなり、余は西洋の基督教を以て東洋の諸君に强ひんとするにあらず、夫れ西洋人に東洋の宗教を强ひて信ぜしむること能はず、此の如く東洋人に又西洋の宗教を强ひて信ぜしむること能はざるなり、故に余は決して西洋の宗教を强ひんとせず諸君の公平なる判斷に訴へて基督教の心髓を諸君に紹介せんとせしなり。

西洋人の氣力と東洋人の見識は實に基督教の發達に於て最大なる必要存す則ち斯教の眞理を明かにするには東洋思想家の力を俟つこと大なる也。

（完）

雜錄

懺悔者に對する基督の態度

牧師　セオドル、エル、カイラー

新約聖書に於ける多くの個人的挿話の中にても、吾人をして其の記事を讀むに非常の苦痛を催ふさしめ、而も其の記事に依りて與へらるる敎訓の極めて實際的に、極めて有益なるはペテロの墮落と悔悟とに關する說話に若くは莫し。

蓋しシモン、ペテロは情に激し易く躁急の人物なれば、良く吾人をして眷戀の情に堪へざらしむる底の人物にあらずと雖も、彼が忽ち墮落し忽ち悔悟し、其の一起一仆の常ならざるは、吾人の深長なる研究に値すと謂ふべく、彼は悔悟せる基督敎徒に對する基督の態度を知るに、最も顯著なる適例なりと謂ふべし。

基督が敵に捕はれんとするの夜、ペテロは大言を吐き以て基督に對する彼の忠誠を誓ふて曰

く、「主よ我れ獄にまでも死にまでも爾と共に往かんと心を定めたり（路二十二〇三十三）、皆なんぢに就て礙くとも我は終に礙かじ（太二十六〇三十三）」と、蓋し未だ外彼を壓するの兇暴なく内、彼を魅するの惡魔なき時なれば、彼は眞率に斯く語りしならん。然れども恐ろしき夜は次第に更け往き、ユダが悔恨に堪へずして斷巖絶壁に身を投じて死せし後ち、ペテロは祭司長の下庭の火に燠まりながら茫然として佇みける。若し眼を放てば法庭は咫尺の間に聳立し、獄卒が叱咤肉薄の態、嘲弄的審判の苦痛を忍べる耶蘇の顏は、歷然として彼の双眸に映じ來らん。

折しも饒舌の婢ありて彼を誰何して、「汝も彼の黨なる乎」と謂ひしかば、ペテロは愕然として曰く、「我は然らず」と。他の婢も彼を熟視して傍の者に、「此の人も彼の黨なり」と謂ひしかば、ペテロは再び肯はずして曰く、「我は然らず」と。然るに頃ありて彼の傍に立る者も、亦た怪訝の色を浮べて、「吾は汝が彼と倶に園に在りしを看ざりし乎」と訝りしかば、ペテロ再三虛言を搆へて、遂に「我は其の人を知らず」と誓へる途端、二次の鷄鳴は曉天に響きて聞ゆ、その時顧みて彼を看給ひし所のイエスの眼は恰も矢の如く彼の胸を刺し腸を斷つ。按ずるに此はペテロの生涯に於ける慘絶悲絶の瞬間にして、此の瞬間に於て彼が長く救主の忠僕なる乎、或は背教者なる乎、或は悔改者たる乎は決せしならん。ペテロの信仰は強く曲れる信仰なりしと雖も、決して破れたる信仰には非ざりしならん、曲れる木も春を迎ふれば、遂に其の亭々たる直立の狀に復せん。鷄鳴が彼の耳底に徹するや否や、基督の譴責的眼光が彼の神魂を貫くや否や、忽ち彼は深く自己の罪惡を悔恨し、其の塲を逃れ人を避けて慟哭すると多時。顧ふに斯の如き悔悟の涙は、決して丈夫の恥づる所にあらざるは

勿論、こは眞個に悔悟せる心情の、熱切なる悲哀の表象たる也。基督は數刻前彼に告げて曰く、「爾の信仰絶へざる樣我れ爾の爲めに祈れり(路二十二〇三十二)」と、實に背敎者に對する基督の代訴的祈禱は、猶豫なく直に其の應驗を看るに到る、ペテロは試錬に逢遇して砂礫を失ひしが故に、今や堅固なる花崗石とはなりぬ。曩に罪人の巨魁たるペテロは、今や回復せられたる悔悟者とはなりぬ、而して此の恐るべき敎訓は、諸の基督敎徒の規箴として、世の終に至るまで長く反覆せられん。

吾人は諸の基督敎徒に對して、這般の敎訓の極めて適切なる事を感ずる也。故に予は彼の倨傲にして自家信仰の薄弱なる事を夢にも浮べざる者、若くは嘗て彼が墮落せし事を全く忘却せる者等を看れば、哀憐の情禁ずること能はざる也。我儕は此の敎訓を讀みて知る、悔悟せる基督敎徒に對する基督の態度の、如何に親切にして愛情に富めるかを。吾人は彼の祭司長の庭に於て、自己の孱弱なる事を暴露せるペテロに對し、基督の憐憫の情の如何に美はしく流露せるかを知る。「彼は我儕のつくられし狀を知り、我儕の塵なることを念ひたまへばなり(詩百〇三十四)」。

基督の復活の日に、彼が墓畔の婦人に語りし所の言葉は左の如し、曰く「速に往きて其の弟子とペテロに彼は死より甦れりと告げよ(可十六〇七)」と。讀者は須らく此の「ペテロに」との語に無限の意義の存する事を知るべし。則ち「其の弟子とペテロにとて其の十一弟子の間に於ても、特にペテロのみの名を擧げて其の復活を通知せしは、敢てペテロが其の團体の代表者たるが故に非ずして、寧ろ彼が憂心煢々として自ら深く慚愧せるを憐み給ひしが故也。故に耶蘇は直にペテロと會せん事を欲し、彼は諸の弟子と會せし時には、唯だ彼等に「平和」を告げしのみと雖も、更にペテロに會せし時には「赦免」を

告げ給ひしなれ。彼の復活せる救主の主要なる職分の一は、眞個の悔改者の涙を拭ふにありとは、古來人口に膾炙せる說ぞかし。實に救主の慈愛の洪大にして深長なる、山海を以て之を喩ふること能はざるならん。愛する兄弟姉妹よ、我儕は刻薄無道なる工業主の奴隸に非ずして、罪人たる我儕を愛撫し、彼に背ける我儕を擁護し、憐憫の情に富める救主の僕たる事を感謝すべし。若し此の論文を讀める者の中に、たまく背教的基督信徒ありて、爲めに其の過去の罪惡を喚起せられ、恥辱の感を以て刺さるる事あらば、宜しく彼をして「ペテロに」てふ文字に代ふるに、彼れ自身の名を記載せしめ、以て赦罪の權ある救主の足下に、悔悟の念を懷きて復歸せしむべし。

遮莫れ、眞個の悔悟は單に自己の罪惡を懺悔するのみにては足らざるべし。諸の背教的基督教徒、若くは心靈的衰頽に墮落せるものは、速に基督の道に復歸せざるべからざる也。ペテロが墮落せざる以前、基督は彼に告げて曰く、「爾ち歸らん時その兄弟を堅せよ（路二十二〇三二）」と。基督は如何なる事を指せしか乎。復歸とは何ぞ乎。蓋し復歸とは單に基督に歸る事、又は神的生涯の健全なる活動に歸る事に外ならざる也。眞正の基督教徒は、仮令ひ心靈的衰頽の渦中に沈溺するも、全く其信仰を失ふことなく、彼は仮令ひ健全の人たらざるも、若くは神聖の人ならざるも、若くは幸福の人たらざるも、決して活動の人たらざる事なかるべし。彼のペテロが基督の許に復歸せし所の途は、二個の點に於ては諸の罪人の最初の改心の途と異なる事なけん。則ち其の一は罪の悔悟にして、其の他は基督に對する活動的信仰、若くは新らしき從順なりと謂ふべし。

耶穌基督は戶をを啓けて悔悟せる背教者を待ち給ふ。心靈的脈搏の孱弱なる者、又は大罪に陷

りしものに對する基督の誘引の聲は左の如し、曰く「汝ぢ何處より墮しかを憶ひ悔改めて初の工を行へ(默二〇五)」と。我が諸敎會の中にても一千有餘の人々は、確に基督の許に復活せざる可らざる者ならん。我が友よ、若し汝の心情が冷淡に、義務の念慮が薄弱に、祈禱が懺悔を以て充され、世俗心が主に對する汝の愛を腐蝕せし時には、深く戒心して誘惑に遠ざかるべし。古き「希望」を棄て最も高き希望を求むべし。若しペテロが罪を犯せしならば、後は深く其の罪を悔恨し、而して渾身の勇氣を皷して主の爲めに働き、彼の燦然たる冠冕を獲るにあらざれば、決して其の英雄的殉敎的の奮戰を廢せざるならん。我が友よ、深く穿ちて基督に於ける新らしき、勁き生命の泉を汲むべし。若し曾て基督が眷戀の情を湛へて「ペテロに」と言ひ給ひしならば、汝も其の悔悟の卷物に汝の名を錄する事を得、而して「ペテロと我に」と謂ふ事を得ん。

我儕の主の活動と休息

博士 ロボルトソン、ニコル

「イエス行途の疲勞にて井の傍に坐し玉へり」。

彼は疲るるまで働きて、復た働かんが爲め、快く休息し玉へり。時は正に亭午に近くして、主は其勤勞の爲め疲れ果て玉ひしなり。是れ豈に信者が疲れ果つるまで働くべき好模範にはあらずや。蓋し此世は求むるの世なり。世の人が勢力と富とを求むるが如く、彼は人の心靈を求め玉ひ、之が爲めには辛勞疲倦をも厭ひ玉はざりき。日々に重なる心臓の皷動、東奔西走の徒步の旅、何れ一として主の元氣を消耗せざるはなし。彼は求めらるれば則ち與へ、己が父に近きを測るに、其過せし時の長短と、其費せし生命の多寡とを以てし玉へり。日々其十字架を負ひ玉ひしは言迄もなく、將さに來らんとする悲慘

の最後を遂め料りつつ働き玉へるが故に、其疲勞の特に酷しきを思へ。主はエルサレムに行きて起るべきことを知りながら、其靈に於ては、行かずては叶はじと思ひ定め玉ひぬ。彼は遲疑せずして其足を運び、石多き路を踏みしめて、終に十字架に上り玉へり。人の靈を慕ふこと渴くが如く、天の故鄕を懷ふの念湧くが如し。之を醫するの途は單だ死あるのみ。主は死して其望を遂げ玉ひけり。

扨て今彼は休み玉へり。柔和に、熱心に、忍びて愛に滿ち、彼を求むる心なき者にだに見出されんとて井の側に坐し玉へり。彼は疲れ玉へど絕へせぬ平和に滿ち玉へり。井の側に坐し玉へる主は、自ら愛と憐、命と力の井なりき。彼は天より授かりたる天職即ち靈魂の救拯を忘れ玉はざりき。世に麗はしくして氣品高き性質ありとせば、神倦み、躰疲れたる時にすら犧牲をなし、人を助くるの餘裕あるに過ぎたるはあらじ。大牧羊者は其迷へる羊の許に來り、之を導きて羊牢に入れ玉へり。餓渴倦勞も頓に忘れ玉ひぬ。自ら貧くして一人の靈富まされ、自ら弱くて彼女強くされたれば足れりとなり。主は其尤も深遠雄大なる語もて自己を注ぎ出し玉へり。熱火の辨を聞かんとて集れる大聽衆といふにあらずして、疎んぜられたるサマリヤの賤の女に徐ろに說き玉へるのみ。彼女敎を信じたれば、主は之を此上なき報となし玉へり。此くて四邊の荒蕪は頓に薔薇の如くに笑みぬ。アヽ、人は心身の倦怠を覺ゆる時、さま〴〵に口を藉きて、訪ひ來る人を避けんと試るなるに、主は我れ我葡萄園に爲さざりしことを、尙いかにせば多く爲し得べきやと絕へず問はせ玉ひけり。

活動にも、休息にも、是れぞ吾人の模範なりける。基督敎徒は今や概ね、自らキリストと倶ならんとせば、其苦を與にせざるべからずと悟れり。徐ろに然しながら確かに敎會は、基督敎徒の生

涯は犠牲的ならざるべからずと感じ、聖化と困苦とは相離しがたく、早晩キリストと共に恐るべきヨルダンに行きて、彼の洗禮を受けざるを得ずと認め來れり。彼等は又自己の有する時間はキリストの時間なりと知り、其醒覺の時を彼に献げだる己上は、其睡眠の時も彼に犠牲にすべしと悟る。されど悟りつつも、尚ほ襲ひ來るは左の疑問なりけり。「いかで此かることあるべきや。此かる難關を我れいかにして通過せんや。他に之に當る人の無ければ、我が之を爲すは務なりとは知るも、アヽ、是れ我力に餘るの難業ならずや」。此かる苦悶の間の、脆き我唇より漏れ出で勝ちなるぞ是非なけれ。

然れど吾人は答へて、弟子は其師の如く、僕は其主人の如くならば足れりと言はんとす。主は人の要する丈けの力を與へ玉ふべし。恐くは彼も其れ丈けの力を有ち玉ひしのみならん。彼の業と力とは相匹敵したり。若し我業にして我力と均しからずば、其は天職にあらざらん。主は我儕が負ひ得ぬほどの十字架を授け玉はじ。屢々我に十字架を負はせ玉へど、我れ主の下に在れば、休息あり。信仰深き某の人言へることあり。信者は初め、自己よりしてキリストに事を爲せど、後にはキリストよりしてキリスト及キリストの者に事を爲すに至ると。我荷は餘りに重しと呟くは、自己よりしてキリストに事を爲せばなり。キリストよりキリストに事を爲さば、其荷は必ず輕からん。必しも常に輕しといはねど、生涯の中には氣を沮ばぬが大捷利と思はることども屢々あるにあらずや。

左れば苟くも人の爲め盡さんとならば、神愛の源より飲まざるべからず。此くせずては大凡そ事は失敗に歸す。ジョーヂ、エリヨットの小説ロモラに失敗の二生涯を描き出せり。テトは柔軟なる性質、表面の優雅の不完全なることを示すものなり。彼は秀でたる才能、柔和なる性質

を有し、善を欲し、眞實の遜謙を具へ、何人にも苦を與へず、万人を喜ばせたしとの念を抱きたり。己れ已上の人を敬することを知り、天姿の秀麗をも具へたり。高士の徹光ありて、衷心の悔改にも志なきにあらず。ただ本分よりも快樂を貪るといふ彼の一點の私慾は此くまでの美質を殺了するものなりき。人情より親切を行ふこともあれど、己の慾を抑ふるといふことは爲し能はざりき。其妻ロモラは彼よりも高尚なりき。されど愛を缺けり。彼女は犧牲を行ひ得べし。本分と憐憫の念よりしては、燒かるゝ爲に其身を献ぐべしと雖も、其献身愛なきを奈何せん。彼女に憐の情はあらん、而かも其が最下なり。基督教徒の克己利慾は憐憫よりにあらずして、愛よりするなり。神より出でて復た返り行かぬ愛は、飛んで人の靈を離れ去ることなし。此聖後の火我心に燃へ、之を煽ひで焔となさんには、キリストと倶に牧羊の業に從事し、主に事へてよく働き、よく休み得ん。求めなば主は此愛を與へ玉ふべし。欺かれ、傷けられながらも、斥けられ、腸を斷ちながらも、凛として苦しき旅路を辿るを辞せぬ其愛を。左るに我等の職事と愛、休息と勞働との斷續常なきは憾めし。思ふに他日神は我等の夢みつゝある天のエルサレムに導きて、我等の足らぬを足らはせ玉ふべし。此れのみぞ我等の賴みなれ。さはさりながら此の世に在る其うちは、「イエスの名を斷へず明かに其眼の前に置き、其蜜を吸ひ、其碧玉を視、其樂を聞き、其香を嗅ぐものは福なる哉」。

ポーロの羅馬に於ける二年間

博士 ジョージ、エフ、グリーン

題、使徒行傳二十七章卅、卅一

此二節に、使徒の歴史の二ヶ年の箇古なる記錄は寓す。冒頭先づかのコニベアー、ホウソンが指點する、使徒のロマ生涯の此時期に於ける著

しき對照に注意せよ。一方に於ては富有、榮華、「ネロ崇拜」運盡きし帝國、朽ちなんとする文明、衰へたる宗教、他方に於ては貧窮、投獄、新生の信仰、其統治世と倶にいよ〳〵盛へ行べき王、此二者正に相對照せり。吾人は今より進むで此の二年間が吾人に表示する特質を觀察せん」

成遂たる豫言、應驗ありし祈禱。

主はパウロが改宗の當時、彼が主の名を帝王の前に齎らすべしとのたまへり。此の豫言は彼がアグリッパの前に道を說きし時半ば成り、其の后ロマの陣營　、及びカイザルの家の者にキリストを宣へし時、尙更に成遂たり。彼は其の第三傳道旅行の途すがら、コリントに於てロマに行きたしとの願を言表せしが、彼の祈禱は（吾人は彼に於ては祈禱と希望とは相離れし事なしと信ず）今や終に應へられぬ。然れど彼が多分豫期せしところとたがふこと如何ばかりぞや。

囹圄は變りて殿の如し。

ロマに於けるパウロの借家は實際上囚獄たりしが、囚獄たると共に敎會とはなりぬ。予は屢々「囚獄殿」即ち說敎、讚美、祈禱にて照らされたる繫留所につきて一書を著はし得べしと思ふ。ペテロ、ヨハネが投ぜられしエルサレムの獄は此れなり。パウロ、シラスが夜半讚美を歌ひしピリピの獄も是れなり。サヴォナロラが殉敎せんとて曳き出されしフローレンスの獄も然り。「天路歷程」が生れ出でしベッドフォードの獄も亦た此れなり。之と均しく吾人も艱難、疾病、死別といふが如き牢獄を用ひて盛に、讚むべき福音を宣布し得べし。アドルフ、モノッドは病のため室を出で能はざるに至るや、其病床よりして友人隣人に道を說きしと傳ふ。余は不治の病に罹りたる後信者となれる某醫士が、死する迄怠らずして其患者に肉躰の健康を授くると共に必ず靈の生命を與へんと務めたる傷心的の事實を記臆す。神の僕として吾人は自己を欲

制する患難痛苦を御すべし、之に御せらる可らず。

心靈的大胆。

彼の最後の徳は大胆なり。是れパウロがネロの宮殿の影に立ち、殉教の暗影嚴かに襲ひ至る時從容として道を說きし樣を描き出せる語にあらずや。吾人說敎者は彼と等しく大胆勇敢なりや否や。アメリカ說敎壇に臆病の分子ありと誹る聲ぞ聞ゆなる。是れ果して眞か。吾人は前方の腰掛けに坐する人を恐るるか。予は今日米國の說敎者を全躰とし考へんに、道德上の勇氣欠けたりとは信ぜず。然れども福音の役者もし阿世の怯者とならむ曉には願くは神吾國と世界とを助け給へかし。キリストの道を友人、親戚に宣べ、殊に營利輕薄の今の世にキリストを己の行爲に現はすに當り、キリスト敎の說敎者が勇氣を用ゆるの地は餘るばかりに是れあり。

非常の磁力ある人格は最上の目的に献げられたり。

パウロは吾人が個人的磁力と稱するものを稟有せる少數の偉人の一人たりしは明かなり。一家の中に蟄居し、警固を附せられ、不人望なる宗敎の宣敎者なるに、彼を索め來る朋友隣人引きも切らず、彼に接して心靈の交際をなす。是れ豈磁力的說敎者に非ずして何ぞや。抑も此の磁力の元素は何ぞと尋ぬるに、健康、熱心、濃情は正に是れなり。此れ皆人に感染し易き性德にして、之を具ふるものは他を牽引するの力あり。而してパウロは總て之を有したり。彼は肉体の健康を有せざりしかも知らねど、其は彼の心意上の健全を以て補たれて餘ありたり。之に加ふるに人と神とに對する熱心を以てす。彼は「神醉狂」の人なりき。此かる元素は如何なる福音宣傳者をも磁力的ならしむるのみならず。抑もまた修養し得べき者にして、眞に献げられたる生涯の粹なり。ニウヨークの故バブコック博士、

故フイリツプス、ブルツクスの如き皆此の元素を具へたるの人なりき。他語を以て云へば、此種の人は人を愛し、之に助を與へんがため無限の勞苦に服して甘んずる者なり。彼等の讃嘆者が磁力を有すと稱するは、這邊の消息に非ざるはなし。願くは神吾人にも此の磁力を與へ給へかし。

個人に對する個人の働の實物教授。

此の二年間パウロの傳道は、說教壇若くは演說臺よりに非ずして「彼の許へ來りし人々に」接することにありき。換言せば、キリストを紹介し、或は此の一人、又は彼の一人に生命の道を說き、多くとも一小群の聽衆に天國を傳ふるに外ならざりき。使徒パウロが正式の說教よりも、個人の交際によりて改宗者を得ざりしやは疑問なるべし。彼の正式の說教は固よりなかるべからず、然れ共個人傳道も亦た捨つべからさる者なりき。此の目立たぬ方法を用ゆれば、聖別されたる平信徒も教役者と手を相携へ得べし。故ハワード、クロスビー嘗て曰へることあり「君はニユー、ヨーク市が基督教化する時を知るや。余は之を知れり。市の教會員一々皆自己を傳道者と考ふる時は之れなり」と。

福音傳播に斷へず從事せる事。

「全く二ケ年間」。疑もなく失望落膽の時もありたらん。然れど彼はキリストの定め給ひし務を行ふを避ける事なし。說教者は「善を行ふに倦むこと勿れ」といふ自己の誡を躬行せしなり。此二年間彼は「固く立ちて動かず、常に勵みて業を務めたり」。吾人說教者も絕えず動かずして務め行ひ、月を閱し、年を經て目標に向て進み、以て成効ある生涯を送る樣勵むべき事にこそ。

名士の愛誦せる聖語(二一)

米國大統領ルースベルト氏は、秘書官に依て吾

人の要求に答へ給ひぬ、その秘書官の書に曰く、「大統領は汝等の質問に答ふる事を喜び給ひ、彼は愛誦せる聖語の一として、（汝等、道を行ふ者となるべし、徒これを聞くのみにして自己を欺く者となる勿れ、雅一〇二二）てふ聖句を撰び、之を汝に送るべしと予に命じ給ひき」と。大政治家グラッドストン氏の愛誦せる聖語は、（爾は平康にやすきをもて志し、賽二六〇三）てふ聖句にして、此の聖語は恰も「平康」の泉の如く、日毎に彼の精神を潤澤せしめけん、彼は常に此の聖句を寢室の壁間に掲げしと謂ふ。ヅルハムの監督は書を寄せて曰く、「予は（此故に彼は己に賴て神に就る者の爲に懇求んとて恒に生れば彼等を全く救ひ得るなり、來七〇二五）てふ聖語を愛誦す」と。アデリナ、ペチー、シダーストロム男爵夫人は答へて曰く、「予の愛誦せるは（爾死に至るまで忠信なれ然ば我生命の冕を爾に賜はん、默二〇十）てふ聖語なり」と。將軍サー、エバーリン、ウード氏は書を寄せて曰く、「予は曾て愛誦せる聖語に就き人の問に答へて、（我が救の力なる主の神よ、爾は戰の日に我が首を蔽ひ給へり、詩百四十〇七）てふ聖語のみを擧げしことありける、然れども予は更に、（凡て汝の手に堪ゆる事は力を盡して之を爲せ、傳九〇一）てふ聖語を撰びて之に加へんと欲す」と。猶太人よりしてラビの首長と尊稱せられし所の、牧師ハーマン、アドラー博士の愛誦せるは、「賽二十六〇三（爾は平康にやすきをもて心志しかたき者を守り給ふ、彼は爾に依賴めばなり）、詩七十三〇二十六（我が身と我心とはおとろふ、されど神は我が心の磐、我が永遠の嗣業なり」との聖語なりと傳ふ。英國著名の小說家にして戲曲家たる、ホール、ケエイン氏は答へて曰く、「予の愛誦せるは（爾斯の如く爲て義者を惡者と倶に殺すが如きは是あるまじき事なり、又義者と惡者を均等するが如きもあるまじき事

なり、天下を鞫く者は公義を行ふ可にあらずや、創十八〇二十五）てふ聖語なり」と。倫敦の執事長シインクラー博士は書を寄せて曰く、「予は希伯來書の一章一節乃至三節を愛誦して措かざる也、何となれば此等の章句は神の顯現の歷史と教理とを極めて壯大に、複雜に描寫して遺す所なければ也」と。名高き探險家にして生物學者たるエフ、シイ、セリヨス氏は記して曰く、「常に予の生涯を支配し、予をして愛誦措く能はざらしむる所のものは、（凡そ人に爲られんと欲ことは爾曹また人にも其の如く爲よ、太七〇十二）てふ聖語ぞかし、實に此は予が理會し能ふ所の唯一の宗教たる也、何となれば如何に高大幽玄なる宗教的教訓と雖も、自ら理解すること能はざれば決して之を遵奉すること能はさるべし」と。

英國會衆派の名士たる牧師ゼー、シー、ローシャー博士は書を寄せて曰く、「予が愛誦せる聖語は凡そ左の如し、（我は途なり生命なり人もし我に由ざれば父の所に往こと能ず、約十四〇六）、（我は福音を恥とせず此福音はユダヤ人を始めギリシャ人すべて信ずる者を救はんとの神の大能たれば也、羅一〇十六）、（基督の愛われらを勉せり、哥后五〇十四）、（われ既に善戰を戰ひ既に走るべき途程を盡し已に信仰の道を守れり、提后四〇七）」。

英國ウエスレー派の牧師にして文士たる、エム、ジー、ピイヤス氏は答へて曰く、「予が愛誦せる聖語を擧げて答へよとの汝の要求は、予に採りては實に至難の業たる也、顧ふに詩篇百三章の如きは最も予が反覆熟讀せし所ならん、會て予は一人の遠戚が許を訪づれ、其の書架を眺めける折しも、予が祖先の一人なるロバート、ピイヤス、一千七百十一年てふ文字の痕微かなる一巻の古聖書を發見せしかば、急ぎ手に把て繙き看しに、焉んぞ知らん古人の愛誦せし所の章句の、予が現に愛誦せる章句と應に同一ならんとは、

予は我父が予と倶に詩篇百三章を愛誦せし事を知る、予は書籍の屢ば繙き讀まれし所は、其の他の部分よりも自然に展び易き事を知るが故に、端なくも古人の愛誦せし章句を知らんと欲し、卒然その古聖書を把りて机上に置きしに、其の自然に開きし所は應に是れ詩篇百三章」と。文豪サー、ヘンリー、アーヴィングは記して曰く「常に予の愛誦せるは（それ信仰と望と愛と此三の者は常に在り此うち尤も大なる者は愛なり、哥前十三〇十三）てふ聖語なり」と。英國著名の聖書學者なる牧師ケエニー氏は書を寄せて曰く「多數の愛誦せる聖語の間よりして、僅かに其の二三を抜萃する事は頗る至難の業なれども、予は自己の愛誦せる二句を擧げて其の責を塞がん、（エホバは我が牧者なり、我れ乏しき事あらじ、詩二十三〇一）、實にエホバは我が主宰者、指揮者又は保護者たる也、我が父の家には第宅多く、而して其の途は彼の弟子に依りて準備せられける、（或は世界或は生或は死或は今のもの或は後のもの是みな爾曹の屬也、爾曹はキリストの屬キリストは神の屬也、哥前三〇二二、二三）、按ずるに基督敎的敎師の任務は、イスラエルの人民又は敬虔なる社會が創めて語りし所の章句が、如何に全く個人に適合するやを示す事にあらざる乎、（眞理は爾曹に自由を得さすべし、約八〇二十二）、實に基督の訓へしところの眞理が、我儕に自由を與ふる事は疑ふべからざる也、然しながら基督は如何にして我儕に眞理を敎へし乎、彼は彼等に實体の感覺を與ふる事に依りて我儕に眞理を敎へける、眞理とは何ぞ乎、彼が我儕に敎へしところの眞理は實体也、不變也、彼は我儕に實体と不變と確實との感覺を與へける、彼の詭辯を弄して漸く辯証する事を得るが如きは、決して基督の眞理に屬すること能はざる也、如何となれば彼は自ら視し事の外は敢て語らざる也」と。欽定詩人アルフレッ

ド、オースチン氏は、自己の愛誦せる聖語を記して曰く、「神光あれと言たまひければ光ありき創一〇三」と。蘇國エジンボロー聖ジョージ教會の牧師アレキサンダー、ホワイト博士は答へて曰く予の愛誦せるは羅馬書三章十九節乃至二十六節の聖語なり」と。

ジョン、ラスキンは自己の愛誦せる聖語を記して曰く、「余は我が母の遺せる最も古く、歳月を經て黄色を呈し、屈折自在なる予の聖書を繙く毎に、常に回想追憶の念に促がされ、双眼の涙を掩ふ能はざるは、烈王紀略上の七章、申命記の八章にして、其の二章は手垢の爲めに殊に汚れ、處々に涙痕點々として殆ど讀むに堪へざらしむ、而して我が母の愛誦せる聖語にして、予の幼時母の膝下に、殆ど一字一句熱誠を以て教誨せられ、予をして今日あるに到らしめしは、右の兩章に挿ある枝栞に、亡き母の手跡にて左の如く記せる所也、則ち出埃及記十五章、二十章、撒母耳後書一章十七節以下、烈王記略上八章、詩篇八章、廿三章、百章、百一章、百三章、百十二章、百十九章、百卅九章、箴言二章、三章、八章、十二章、以賽亞書十八章、馬太傳五章、六章、七章、使徒行傳二十六章、哥林多前書十三章、十五章、雅各書四章、默示錄五章、六章以上の諸章は予の教育の基礎たりしと同時に、予の生涯を通じて艱難の時にも、懷疑の時にも、不幸の時にも、危險の時にも、常に予をして自ら強く堅く、主に對する信念を維持せしめし所たるべし」と。彼の奇跡の無稽を論じて英國々教會を逐はれ、ユニテリヤン協會に加はりし所の牧師エス、エイ、ブルーク氏は左の三句を擧げて答へける、曰く「（狂風を靜めて浪を穩かになし給へり、詩百七〇二九）、（我が汝等を愛する如く汝等も亦互に愛すべし、約十五〇十二）、（そは神の我儕に賜へる靈は臆する靈に非ず能と愛と謹の靈なれば也、提后一〇七）」と。著名なる

電氣學者ニコラ、テスラ氏は曰く、「創世紀一章は極めて壯嚴にして、吾人を啓發すると頗る多し」と。英國著名の文士にして杜國戰爭の勇士リッダー、ハッガード氏は曰く、「予の愛誦せるは(爾曹忍耐と其の生命を全うせよ、路二十一〇十九)てふ聖語なり」と。牧師ヒユウ、プライス、ヒユーズ氏は書を寄せて曰く、「舊約聖書に於ける予の愛誦せる章句は(我こそ我れ自己の故に依りて汝の咎を消し汝の罪を心に臆めざるなれ、賽四十三〇二五)てふ聖句也、予は此の(我れ自己の故に)てふ語の意味を殊に強む、何となれば此は神が我儕の罪咎を赦し給ふは、我儕の努力若くは功績に因るに非ずして、彼れ自己の故に因る事を宣言せしもの、要するに諸の罪人を救濟する事は、全く神の性質の止む能はざる所にして、罪人の墮落を默視する事は、至愛なる神の感覺の許さざる所なりと謂ふべし、之を切言せば神の不變不朽の愛は、彼を促して諸の罪人を救濟するにあらざれば休せざる也、次に新約聖書に於ける予の愛誦せる章句は極めて多し、故に其の中の一二句のみを擧げる事は頗る困難なりと雖も、予は其の一として約翰傳六章三十七節の後半を擧げん、(我に就る者は我かならず之を棄ず)、實に神の慈悲に縋りしものに對する奬勵の句は、舊約聖書よりも新約聖書に於て看ると頗る多し」と。詩人エドヴィン、アーノルドは自己の愛誦せる聖語を記して曰く、「恒に祈禱して沮喪すまじき爲に(路十八〇一)」と、故ムーデー氏の一生の標語は、以賽亞一章七節、「主エホバわれを助け給はん、この故に我れ恥るとなかるべし、我わが顏を石のごとくして恥しめらるるとなきを知る、(賽五十〇七)」。故ムーデーの侶にして著名の唱歌者なるサンキー氏は書を寄せて曰く、「予の常に愛誦せるは(我を信ずる者は永生あり、約六〇四七)、(エホバに贖ひ救はれしもの歌ひつつ歸てシォンに來り、

その首に永遠の歡喜を頂き樂と悅とを得ん、而して悲哀と嘆息とは逃さるべし、賽三十五〇十）等の聖句なり」と。ハーバート大學敎授エリオット、ノートン氏は答へて曰く、「予の愛誦せるは（われ新誡を爾曹に與ふ我なんぢらを愛する如く爾曹も相愛すべし、約十三〇三四）、（愛は律法を完全す、羅十三〇十）等の聖語なり」と。故スポルジョン氏の愛誦せる聖語は、彼得前書二章七節の前半にして其の語に曰く、「この石、信ずる爾曹には貴き物となり、彼前二〇七」と。英國著名の小說家アイ、サングウィル氏は答へて曰く、「予の愛誦せるは（凡そ事包客おほよそ事信じ凡そ事望み凡そ事忍ぶなり、哥前十三〇七）てふ聖語なり」と。キユバの新大統領エスッラダ氏は書を寄せて曰く、「聖語に關する予の撰擇の第一は金則にして、其の次はサマリヤの女に對する基督の、（婦よ我を信ぜよ唯に此山のみに非ず亦エルサレムのみに非ずして爾曹父を拜すべき時きたらん云々、約四〇二一、二三）てふ言葉、若くは（爾曹のうち罪なき者まづ彼を石にて擊べし、約八〇七）なりと雖も、予は之に加へて山上の說敎の大部分を擧げざる可らず」と。マンチエスターの監督は答へて曰く、「予は愛誦せる書、若くは章を有すれども、愛誦せる句を有せず」と。其他諸種の理由を以て應答せざりし者も少なからざる也。



福音叢誌第八拾五號目次

論說

說教

雜錄

FUKUIN SŌSHI.

NUMBER 85.

JUNE, 1903.

CONTENTS.

論説

世界は心靈的なり乎

前大學總長　ジョン、バスカム

世界活動の眞意は心靈なりや、如何ん。或は答へて、そは天の啓示明々白々問ふまでもなしといはん。然れど天啓の光明は人生歴史の意味を闡明してこそ、其効もあるなれ。我得たる光明は其何れより來るにもせよ、歴史の事實を以て之を訂補証明せずては不可なり。天啓すら人間世界の實驗と相適應せずば、時に疑惑の雲に蔽はれん。我れ悟らんと希ひ、我に人生實在の念を深からしむるものは、過去、現在、未來を通じて我を動かしつゝある千變万化の事物遭遇に外ならず。此事物遭遇を通じて神は尤も直接に、親密に我に語り玉ふ。天啓なりや否やを定むるは、其が果して事實と合するや否やを見るに在り。左るに神學者が、天啓とは思想の足跡の如く神が或る言語を人に授け、人は其足跡を嗅ぎ行きて、甘く大眞理に有りつき、以て氣樂に之を賞翫し得るものの如く考へ

たるぞ是非なき。若し人生の現象もて天啓を說明し、天啓もて人生を解釋したらんには、彼等は人性墮落、救拯、贖罪、神の義等につきて、彼れほどの誤には陷らざりしならん。

世界は心靈的なりやといふ研究を爲すに方り、吾人は心靈的なる語の意味を明にすべし。心靈的とは、愛情が肉慾、肉情に結局勝つ有樣をいふ、再言せば人間相互の間に愛の關係行はれ、此愛が其よりも劣等なる一切の情慾を支配し、以て此情慾にも適し、又之を守らば終には完全なる平和をも來すべき一大倫理法に近かしむることを、心靈的とは稱ふるなり。蓋し視るべき此世界に、此視へざる深奧の倫理法伏在して、之を皷舞運轉すといふ信仰こそ、轉た人をして神の存在を感せしめ、又心靈法に統御さるる靈界ありとの念を禁むる能はざらしむるものにぞある。世界は心靈的なりといふは、此心靈的元素の大權を認むるに外ならず。

心靈的といふは其意味茲に止まらず。心靈的元素は其劣等の分子を破壞して支配せず、之を變形し、之を使用して其支配權を行ふものなり。人の肉情、肉慾は人生初期の生活にして、此は成熟時期の生涯に對する準備、條件に外ならず。高等なる情念必ず來りて之を統制し自ら其をして相等の地位に控へ行かしむ。

世界が此意味に於て心靈的にして、自ら高潔、超絶の空氣を造りて其大氣中に成長發達することは、蓋し其証數へがたし。此く心靈的に世界を觀ずるは、正に進化說と相調和す。人間界を心靈的進步の立場より觀るほど、進化の前途を遼遠ならしむるものはあらじ。物質的の者として人を考へなば、最早此上に進步の餘地はなし。其筋肉、神經の發達は其極點に達したりとも謂ふべく、野蠻人の方文明人に比して夐かに外界の刺擊に堪ふるの力優れり。左れば文明人は戰鬪產業の器械を發明して之を用ひざれば優勝の位置を占めがたき有樣なり。即ち是れ人は既に單純なる物質的存在者たる範圍を脫して智力的即ち社會的生活に入れるものなり。知るべし自然淘汰は單に個人を完成するを以て足れりとせず、社會をも併せて完成せざるべからざることとなり居ることを。

文明は發達を意味し、發達は愈々特化せしむ。特化は個々獨立を難からしめ、人々互に相依賴して初めて强固となり得るに至る。組織系統の念は文明といふ思想と相離るべからずして此思想一たび入れば、社會は必ず之に支配さる。完全なる市民と、完全なる人間といふ事は同一のこととなるなり。然り而して是れ豈に心靈生活の發達を指すものにあらずや。心靈生涯とは人々相互の親密な

る關係を言ふに外ならず。もし文明とは個人を社會的發達の中に導入することをいふとせば、かく調和せる社會的關係にいよ〳〵進み行くを心靈的といはずして何と稱ふべき。

此く觀ずれば人々相互の調和といふ無限の進路は吾人の眼前に現はれ來るべし。其進路の複雜有力なるは今之を想像だも爲し能はぬほど大なり。

『天國』とは此言ひ難き狀態を表するに恰好の語にぞある。されば吾人眞實に進化論者ならんには、此心靈界こそ、限りなく進み行く勢力の到達すべき世界なりと認めざるを得ざるべし。

人間世界の發達に家族が重要なる地位を占むることも、世界の心靈性を表示するものなり。幾年の間も子女が父母に賴つて立つことを見て、此は只親が子を養育するの機會を與ふるまでのものなりと考ふる人もあれど、其は未だ盡さぬ議論にして、此れも亦た心靈的成長の基礎とはなるなり。子女は長の年月兩親より養育の恩を被ふるうち、自ら相愛の情を發展せざるを得ず。夫婦の相賴るは青春妙齡の時よりも、寄る年波と共にいよ〳〵切なり。子女相互の間には、不斷の親密、協力、共通の利害などよりして相結び、兩親は老ひて其子女に養はる。よし家族の根底は物質的なりとするも、其が心靈的に進み行くものなる

ことは拒みがたし。惟ふに物質生活が進みて心靈生涯に達する例証を求めなば家族ほど適切なるはあらざるべし。家族は人類進化の歴史の縮圖とも謂ふべきものなれば、吾人が諸國民の家族といふも、『天に在ます吾等の父よ』といふも共に意味深きことなりかし。

貧富兩者の關係につきて古來二種の説相爭へり。古へ廣く行はれたる説は、富者は貧者を憐み助くべしといふ慈善主義なりき。然るにやがて優勝劣敗の此世に罪人、弱者を保護するは、進歩淘汰の自然の法則に反すてふ冷刻なる説勢力を得來り、端なくも物質心靈の兩法相衝突することとなりぬ。然らば世界の判斷は其何れに勝を與へしやといふに、謀の拙ならずして眞に有効なる慈善は善きことなりといふに歸したり。

社會の勢力は畢竟結合に在り、而して眞の結合は同情に基す。威力は一時人を强ひ結ぶのみ。人の互に集合するは、『人各己の爲め』といふ念の上に立たずして、全体の幸福の爲めといふ情に根ざす。弱者に同情なきものは强者にも同情なかるべし。此る人は利益の爲一時相合することはこれあるべきも、利益去れば吳越も啻ならぬ間柄とならん。罪人、弱者、不幸者を救はんとて働らくといふことほど、心靈生活の結合力を現はすものはあらずして、又之ほど人間進歩

の爲め有力なる動作は稀なり。慈善を盛にするは却て社會に慈善の必要を無くし、社會の成員相反目して其一致協同を弱くするといふが如き不幸なからしむるものにして、慈悲の効力を拒むは自殺の道なりと悟らずや。

肉躰を離れて、今より智性上のことに說き及ぼさんに、是れ亦其中に心靈的萠芽の存するを見るべし。智性と肉性との轉移線は極めて徐々にして、肉情より漸次に精化して靈情に達す。蓋し愛は頗る複雜なる性質のものにして、或は之を劣等の者と見做す者もあれば、又之を理性の光に浸されたる高尙の情と認むるもあり。小說家は今日も尙ほ愛を以て盲目的の衝動と描き出すが習なれど、其人間の實驗に反するを奈何せん。そも人間重要の行爲に、自由の力を用うる倫理的動作のなきはあらじ。同じ物に對し、同じ人に對して或は怒り或は喜び、或は憐憫の情を起し、或は輕蔑の念を催すは如何ん。同一のものを觀ながら或は厭ひ、或は同情の念湧くは何の故ぞ。人の心意機械的に働かぬ証ならずや。且つ世は習慣と良心との戰爭及び調和によりて進むにあらずや。習慣に反抗する良心は自由のものにして倫理的の力なるは明なり。人世の救濟に盡力して其苦艱に精通するの仁人は飽食暖衣の懦夫よりも神の恩惠を切に感ずることあるべし。世に盲目の物力と人の心意力とありて相爭ひつゝあることを認めずば、

人は宿命說の淵に沈む外あるべからず。されど若し此事實だに認めなば、世界は活動反動をなしつつ益々前進しつつあるものなることを信ぜざるを得ざるべし。

智性を單に觀念、思想を組織する能力として考ふるに、此處にも亦た自由の活動を爲すことを認め得べし。吾人は物質的の事物の形狀大小などを觀察して、心中に種々の觀念を蓄へ得べし。されど此物質界のみに心を傾注するは自ら心意の倦怠を來さざるを得ず。茲に於て乎人は息苦しき下界を脫して羽化登仙し、悠々として思辨冥想の世界に自適せんことを欲するに至る。哲學は實際上失敗したるところ少からねど、其人生を廓大し、訓錬し、高尙にしたるの効は到底之を沒すべからず。人が智性上此自由高上の傾向あるは、其倫理性を現はすものにあらずや。

物質生命の基礎に二あり、本能と習慣となり。二者ともに日常の動作を正則安全ならしむるものなれど、其適應の度には大差あり。本能とは、變化極りなき狀態の下に在りて物質的刺擊によりて意識的に若くは無意識的に適當なる努力を爲す直接の動作をいふ。左れば此は物質的作用を常に支配する躰制の刺擊と密接なる關係を有す。然るに習慣とは、刺擊と動作との連結を、繰返したる動

作にて作り成せしものにして、過去に於る自由の撰擇に基くものなり。撰擇よりして本能風のもの幾何となく作り出され、隨て此二者何れも意識界に明現せざれども、本能の方は夐かに暗黑の裡に包まる。或は本能を選擇の結果なりと證明せんと試むる人あれど、此は到底成りがたき業なり。本能は直接、斷乎たる行爲に導けど、其方法たる一定して限られたり。智力の作用の發現前の地を占むるものにして、智力を容るべき餘地を有せず。其長所を採りて之を思考に比するに、固より誤謬などに陷り易き思考に優る万々なるところありとす。習慣は之に反して、自由生活が制定したる或活動形式を、肉躰が甘受する樣をいふ。此くて自由生活は定り了せる些事に心を惹かされずして、新規なる行爲に意を用ゆるを得。本能は確かなれど融通の道なし。習慣も確實なれど、進暢擴充の餘地を有す。智力の作用の結果にして、又智力活動を進歩せしむるものなり。本能は肉性の機械にして習慣は靈生の機械なり。習慣に智力靈能の作用さへ加へなば、改造發達の餘裕を具へ、品性の鑄型として之に信賴し得べし。さながら濕りたる泥土の如し。造形家の造りたる旣成の形を保存して、しかも未成の形を施すべき餘地を存す。是れ豈にいよ〳〵高尙なる實驗に進み行くべき性質にあらずや。思ふにかく心靈的能力が自由によりて肉性と相結び、習慣

之を保護し、其習慣は又訂正改善され得るといふことは即ち進化が執るべき路を示すものと謂はざるべからず。かかれば嘗に心靈生活なるもの實現され得るのみならず、一たび心靈生活に達するや、此生活は肉性生活を捉へ、之を用ひて自ら强ふし、自ら富まさずといふことなし。

右の如く吾人の心性肉性の關係は、いよ〳〵高尙なる活動に進み行く徵あることなるが、吾人が進んで社會現象を硏究するに及びて、此傾向いよ〳〵明白とはなるなり。政府の起原は幾分か血族姻戚などいふ溫和の感情を元素とせるものなるべけれど、頓て腕力を基礎とするに至る。此は止を得ざる結果なるのみならず、之が爲め秩序を生じ、正義に近き或者すら産生す。腕力は國家の基礎なりといふ說は大に眞理を有するものにして、其簡單にして廣く行はれ、秩序を生じたるなどの長所あれば、此說にして純然たる正論ならんには、他說を壓倒し了せしならん。然るにかくして成立せる國家の下に幾もなくして心靈的關係の發生し來り、初めは腕力の暴威を柔らげ、終には腕力制度を滅するに至るこそ不思議なれ。奴隷など稱して彼此區分を嚴にしたる社會階級の別は腕力にて維持さるべけれど、其各階級仲間のうち即ち上等社會相互の間又は奴隷同士の間には自ら親愛友誼の情起り來りて、其關係を心靈的にせざることなし。

列國のことを觀るも亦然り。初めは國と國との紛議は戰爭によつて決するに定まりしが、其時とても一國内には腕力のみを基礎とせざる立法の原則行はれたり。やがて國際上の紛爭にも此種の原則を適用するに至り、此くて腕力の範圍は狹まりぬ。譬へば大幹巨枝の喬木發生して成長し行くうち、其側に蔓の生じ來れるが如し。木いよ〳〵成長すれば、いよ〳〵蔓の葉を以て之を蔽ひ、其武骨なる枝幹を内に包み了る。蔓も木と共に其地に發生すべき性質のものにして、決して要なきもの闖入したるにはあらず。キリストが惡に抗する勿れと敎へ玉ひしは、殺風景に發達し來りし社會に對して調子外れに聞ゆれど、結局かの一時社會を結合する性質の者に比しては、一層深遠なる眞理を說きたるものにして、一たび人間社會の調和此點まで達せば、正に其終局、至完の域に入りたるものとはなるなり。

かの不屈不撓幾度となく爆發し來る社會主義といふものは、全く腕力を排斥し、人間相互の關係心靈的なる理想的社會を主張するに外ならず。其謬は、之を機械的のものとし、漸次に成るべきことを一時に成さんとするに在れど、其有力なるは、其心靈的理想を掲ぐるに在りとす。

世界に民主々義の成長するを觀るに、亦た全く右の心靈發達の樣に似たり。民

主々義は啻に腕力を排斥するのみならず、大に過去の智惠實驗の權威さへ制限し、人人は自己の生活を發達せんが爲、既存の智惠、實驗を以て足れりとせず、之を一層發達進歩せしむるの權ありと主張す。人は民主々義の利を思ひて其弊を忘れ、如何なる利益も成長發達の爲めには性として惜む所なし。思ふに民主主義の此く大胆不敵なるところは、正に其心靈的なる所より發し來る。此く心靈的思想の絶へず發生し來ること、其勢力のいよ〳〵增加することは、動植物界に新種の生ずると同じく事實にして、其前途の有望なることと輕々に看過すべきものにあらず。

社會生活の全面に透徹するかの經濟と稱する作用にも心靈的傾向形はる。經濟とは全く獨立せる生活の形式にして、自家特有の動機法則にて說明し、運轉し得べしと主張せしものもありしが、奈何せん、經濟力のみにて社會は立行くものにあらざることと明白となれるを。倫理法及倫理念にして生產作用を鼓舞せずんば、紛爭無力の狀態に社會を沈淪せしめずといふことなし。資本家、製造者は成るべく勞働者の賃銀を低くせんと努め、勞働者は勉强を欠きて生產力減却す。人情上然るべきことなり。然るに資本家は此くまで明白の理を解せず、眼前錙銖の利を爭ひて、十年の鴻益を考へず。經濟的の活動は實に此の如きもの

にして、此弊を濟ふものは惟り倫理力あるのみ。倫理の念は經濟界を盛大ならしむるなり。

人は勞働者の貧窮を見て、免れがたき經濟法の致すところと思へど、其は誤りなり。進歩の希望を起すべき動機を殺せば、進歩は死す、動機と進歩とは相生死すればなり。勞働者に繁盛を與へよ、さらば繁盛の刺擊は自ら來るべし。凡そ勞働を窮乏に陷れば其生產力最高點に達し、之に豐富を與へなば生產力衰滅すといふほど、分らぬ議論はなし。働くものの效を認めて豐かに報ゆることは、廣く生產の力を增す所以なり。左れば心靈的刺擊は生產力の必須條件にして、其發端にも、發達にも欠くべからざるを知るべし。

競爭とは同情の念を蔑如したる假戰の如きものにして、戰爭と同じく不都合の者なり。生產物を互に相破壞して何の益かある。國內より戰爭といふ者を放逐したる吾人は、經濟界に此戰爭を寬恕すべき譯なし。今や競爭が世を支配し居るを見れば、いかに世が心靈的に幼稚なるかを悟るべし。固より正當に富を求めて主動反動あるは可なれども、經濟的戰爭を爲す現今の經濟界は情慾を以て常識を沒したりと謂ふべし。理性をして働かしめよ、左らば私慾利己の主義は露の如く消へん。經濟界の擾亂を救ふものは唯だ一倫理の念あるのみ、即ち心

靈的快樂を樂んで生活する情念あるのみ。

歴史を經濟の立塲より論じて、政治學も倫理學も生産の形式の變化に伴ひて成長せりと說くものあるが、大ひに理あり。眞理に反したる事件よりして反つて眞理の發展し來るといふことこれあればなり。生産方法の變化は社會的及政治的關係の變化を來す機會となりしこと少なからざるべし。

諸製造家相互の關係も亦倫理問題を喚起し、其解釋に適當すべき說を生じつゝあり。製造的利益の發達及衝突といふ殺風景にして俗極まる材料を、市民法及倫理法が捉へ來つて、之を一個の社會的關係に組織するところ、實に驚歎に禁へざるものあり。最後にして最良なる産物は心靈的のものならざるはなし。

此外社會の習慣にして天來の光明を漏すものあり、輿論は倫理の情念を一層充分に表示するものとならんとて改善されつゝあるなど、皆心靈的活動の徵と見るべし。世に一種の論者ありて、倫理法とは一般人間の福祉に向つて進み行く實驗を歸納したるものにして、個人が道義の念を有して世に處するは、恰も技師が其額に燭を點じて、己の爲めに旣に設けある道を辿り行くが如しと說くものあり。倫理上の眞理現はれ來るや社會は直に之を認め、之を基として高尙なる位置に進む樣構造され居るは明かにして、倫理法が此く人の行爲に貫徹し、

其勢力日に月に强大になり行くは、隱れもなき事實なり。不完全ながらも、面目とか名譽とかいひて一の標準を立て、以て階級、團体、仲間を組織するも其一例なり。而して一たび此倫理の標準一社會に認めらるるや、其會員は之を奉ずることとなり、友愛の行はるる範圍こそ狹けれ、ともかく倫理法を承認するは眞なり。團体あるところには倫理法必ずなきはあらず。

一個人の品性若くは社會の幸福につき理想の狀を描くは人の常なるが、其材料は必ず心靈界より供給するものなり。或は人の眼を悅ばしめ、或は奮然起たざるを得ざる程に人を動かす心像は、一として心靈界より得來らざるものなく、理想は吾人の世界には通常のものなり。詩歌及壯烈の行爲には理想滿ち、物質界の事實よりも有力なる心靈界の創想によらずんば、勇壯、熱烈の生涯なるものあることなし。

警語、箴言、旌旗は此心靈的感情を表する機械たるに過ぎず。吾人は此等のものが、いかに有力にして屢々高尙なるかを熟知せり。例へば「至高のものに對して最上のことを爲せ」といふ警語を解し、之を守るものは、旣に義人烈士の班に列したるものといふべし。

古今宗教の種類頗る多く、玉石相混淆するものありながら、其歷史に感化を揮ふ所以のものは、一として此心靈力の大なるによらずんばあらず。吾人が宗教といふ岩石を碎きて殊に撰擇の勞を執るを辭せざるは、此金粉を得たしと思へばなり。而して淘汰し去るところ莫大なるにも關らず、其餘すところの寶玉の豐富なるは、實に吾人の驚くところなり。

例へば『惡に勝たる勿れ、善を以て惡に勝つべし』といふ誡を以て言はんに、此は正に腕力に反對し、全然新規なる法則を立つるものにして、恰かも巍然として濱邊に立ち、一方には陸地の近きを報じ、他方には寄せ來る情波慾浪を防ぐ大岩の如し。惡を以て惡に報ひなば爭の止むときはなかるべし、善を以て惡に報ひてこそ平和の港も近き來るなれ。此る主義の言明せられ、了解せられ、多少守られんには、そは東雲の空白み初めたるものにして、白晝の來ること拒むべくもあらず。宗教は先づ心靈界の存在を說き、進んで終に仁愛の法が物心兩界を支配、結合し、而して此法は人格的の神に存すと敎ふるに至る。知るべし宗敎の進步は心靈力の進步に外ならざるを。

靈界ありとの念は人心至奧のものなれば、平素宗敎の事に心を用ひぬ人、一旦超物界の存在を示すべき事件に遭ふときは、思想行爲共に度を失し、狼狽措く

仰の爲め潔まり、進みたる信仰を起し來るものなり。懷疑は此かる際其人を喰ひ止め能はずして、彼は反つて不信ところを知らず。

已上吾人は日常普通の事實に基きて、世界の心靈的なることを證せんとはしたり。天啓は此等の事實を了解するを助くるが故に天啓なり。心靈生活の萠芽に滿つる此世界と、心靈力の存在を明示する天啓とを併せ見て、吾人は初めて泰然として世に處し得べし。斯てこそ信仰と觀察とは相調和したりと見るべけれ。心靈が物質を貫徹すといふことを充分曉り得んには、奇跡の議論は要なきこととなるべし。万物は自然にして、又超自然なり。自然的超自然の運動宇宙に透徹して、事足るとせば、何を苦しんで奇跡などいふものを求むるや。奇跡と緣なき物界に奇跡が入りたりとて、何の力もなかるべく、又本來心靈的なる超自然界に來りては何の啓示ともならざるべし。

人の身体の運動を機械的のものと認め、之に外より時々闖入して斷片的の行爲をなすを指して自由といはば、大に誤れり。人に自由ありといはば、そは一切の肉体の職能を捉へて之を心靈的の目的に献ずることなるべし。我手足を伸べて、我に自由ありといふは意味なきことにして、其は痲痺して居ぬといふまでのことなり。其四肢五躰の健全なることを明証されたりとして、さて其手足の動

く所以の理由を解明せずては足らざるべし。自由とは一切の能力と共に働き、一切の能力の下に働く人格的能力の自由を指すものたらざるべからず。人が平素物を思考するといふは、心靈力が自由に作用するものと考ふべきものにして、心靈は思考によりて道理の世界に參し、又道理に從ふ。此說明は奧義なりと謂ふ人もあるべし。さあれ奧義なりとも之をもて幾多の事物を說明し得ば、之を採用するも可ならずや。

宗教に奇跡を求むるの切なるは此心靈力の欠けたるを感ずるに基く。此力だに確信せば、奇跡を望むことは止みなん。充分滿足なる力とは心靈力に外ならず。物靈兩界は互に相補充して吾人を圍み、吾人に共通の觀察の立場を供す。靈界の眞理は物界に行きて之が證明を得、物界は靈界の深遠なる眞理に維持せらる。『汝等眞理を知らん、眞理は汝等に自由を得さすべし』とは此事にして、希望を抱かしめ、能力を發展せしむるものは、此自由なりかし。

已上吾人は日常の事物より世界の心靈なることを證せんと力めたり。轉じて實在其者の根底を探索するも、同一の結論に達するの外あらず。物質を解剖せば元子となる。元子とは覺官以上のものにして、心裡に描ける一個の假定物のみ。生命とは伸縮自在の一能力にして、物質的基礎を欠く。遺傳とは定義しがたき

ものにして、說明すべき充分の原因なし。人の意識は有理的、心靈的の作用にして、知覺しがたき想念界に知覺しがたき思想の上騰せるものとしも謂ひ得べし。(小林彦五郎君講譯)

第四福音書の年代に關する暗示

教授　チャーレス、ダブルユウ、リシエル

予は今ジャスチン、マーター。オリジェン。アサ子シアスの著書と聖書中のパウロの書簡及ヨハ子の文書とを比較し、其基督観の進步の順序を繹ね、以て第四福音書の著作年代を推測せんとす。

先づジャスチンより始めんに、彼はパウロ派の人といふよりもヨハ子派に屬するものと謂ひ得べし。成程其基督說は大体パウロと同一なるも、パウロのよりも一層廣濶なるを忘るべからず。彼が繰返し〳〵イエスの超自然的投胎を說くが如し。且つや彼は現今の聖書中ヨハ子の書のみに發見さるる語、例へばロゴスの思想、獨生まれたるロゴス若くは子といふが如きを使用するは其說の証明

さなし得べし。ジャスチンの特説は奇跡的投胎、ロゴス説、生れたる、獨り生れたるロゴスといふ思想なりと謂ひ得べく、もし奇跡的投胎を除かば、彼の特點はヨハ子の説の特徴にあらずして何ぞや。

子が父に屬從するとも、子の生前存在も、パウロ、ヨハ子、ジャスチンの齊しく説くところにして、パウロはヨハ子より明かに、ジャスチンはパウロよりも明かなるの差あるのみ。されば一見ジャスチンの源の何れなるかを定めがたく思はるれど、彼の屬從説も前世説も共に子に關するものとせずして、ロゴスに關するものとして述べたるを見れば、此も亦たヨハ子より出づと推論する方穩當なるが如し。ジャスチンが、神は人に己れを啓示して人と交り得ず、『天上の天に』永へに在すといふ説はパウロも（提摩太前書六〇十六）、ヨハ子も（約翰傳一〇十八）共に之を教ふ。もし提摩太書をパウロの作とせば、ヨハ子よりも明白に此説を唱ふれど、此のみにて、ヨハ子の感化が全体上ジャスチンに大なることを拒むはかたし。

或はパウロの基督説は仲保の説にして、ジャスチンは希臘哲學に於ける一種の仲保説たるロゴス説を唱へて、パウロの仲保説を敷衍するまでなりと論ずる人もあれど、パウロがヨハ子よりも仲保説を一層明白に教へたりとは頓に承認し

がたし。パウロは歷史上のキリストを仲保者となし、ヨハネはロゴスの仲保を說く。しかしてジャスチンはロゴスの仲保說を切言するを以て觀れば、此も亦たヨハネ的の思想なり。且つや希臘哲學に於けるロゴスは實体的の意味に於て仲保者なれども、パウロもヨハネもキリストの仲保を職能的のこととなす。而してジャスチンはロゴスを實体といはずして、神に劣らぬ第二の神といふを以て見れば、彼がロゴスを職能的の仲保者と觀るを知るべし。故にジャスチンは希臘哲學をも、パウロをも祖述せずして、ヨハネに從ふと論結せざるを得ず。生れたるロゴスといふジャスチンの說に於て、ヨハネよりもパウロに近く見ゆる一點あり。ヨハネは『獨生』といふ語を用ふれど、ジャスチンは之を只三度用ふるのみ。パウロは之に反して『長子』といふ語を用ふることとなるが、ジャスチンはロゴスの生れたることを說くには、尤も屢々之を用ふ。さて此語のパウロに出づることと論なしと雖も、其思想に至りては全くヨハネを追ふことは注意すべきことなり。パウロは此語を三度（羅馬書三〇二八。哥羅西書一〇十五、十八）用ひたれど、皆歷史上のキリストを人間の首として敎ふるときにして、キリストを神の子として示すに用ひたることなし。然るにジャスチンは神の子といふ意味の外に用ひたることなくして、ヨハネの『獨生』と同意なりしが如

し。

かくパウロ、ヨハ子の語を用ひながら、ヨハ子の意味にのみ之を使ふを見れば、ジャスチンはパウロよりもヨハ子の説を奉ぜし人にして、パウロの書簡と同じく、第四福音書を熟知せしこと明かなるが如し。彼は多分共觀福音書を知りしものにて、之を教義の證明に用ひざりしも、キリスト教徒の倫理を證せんとて用ひたり。再言せば彼は共觀福音書、パウロ及ヨハ子傳の神學及基督觀を熟知したるものなりとす。

或は論ずるものあり。ジャスチンとヨハ子の基督觀の同一なるは、殆ど同時代に各相獨立して考へ出し、偶々同一の結果に達したるまでのものなりと。是れ困難多き論なり。何となれば是れ兩人が希臘哲學を借り來りて基督教を説明せんと思ひ附き、しかも殆ど同時に同一の語句を採用したりといふ大臆測にてさへあるに、單にロゴスなる語のみならず、ロゴスが生れたりといふ思想まで同一なりと説くものとなるべければなり、ロゴスの説とロゴス生るといふ説とは論理上必然の關係なきに、何故此く二人とも此兩思想を聯絡せしか。

第四福音書記者がロゴス及獨生といふ命辭を少くとも異教哲學より採用せしといふことは拒むの要なきことにして、彼が同書を草せし一目的は或は此等の命

辭の眞の意味を知らしめんとするに在りしやも知るべからず。然るにジャスチンに至りては、其命辭は何處より得たるにせよ、其思想に至りては、舊約書より得たる旨幾度も之を言明し、生れたるロゴスといふことはただキリスト敎徒にのみ熟知されたる說にして、異敎者に對しては新規の論なりとの意を以て其讀者に語るは注意すべきことなり。且つ彼が希臘哲學と基督敎の符合點を列擧するに方りロゴス說も、生れたるロゴスといふ說も、ロゴスは神なりとの說も、一も之を其中に含めたることなし。

敎授ペーン曰く、『ジャスチンはロゴスといふ思想をプラト及ストイック哲學に負ふとを直接に言明す』と。此說に該當すべき唯一の塲所は、ジャスチンが、プラトはチミアス中に『ロゴスに第二の地位を與ふ』といひ、而してプラトは其言辭中十字架のことをば、民數紀二十一章四より九迄の語より得來れりと說くところあるのみ。然れども此れジャスチンがプラトに負ふところありと告白せりといふよりも、プラトがモーゼに負ふところありと論ずるものといふべく、民數紀の銅蛇と十字架とを聯結して云云するは、やがてジャスチンが第四福音書を知れるを暗示するものにあらずや（約三〇十五）。プラト哲學につき彼が此く引證するところはただ二個の思想を示す、即ちロゴスなるものありといふこ

と、及ロゴスは服屬すといふことにして、生れたりとも獨生したりとも毫頭言はず。さればジャスチンの語の意味は、希臘哲學は基督教と衝突せずといふに止まれり。

スパーマチコス『生命を與ふるロゴス』といふ思想は多分ストイック説より得たるものなるべけれど、其意味全く一變せり。ストイック論者の『生命を與ふるロゴス』とは善行の原理なれど、ジャスチンに取りては、此は正當なる思考の元則なり。且つストイック派のものは、神はロゴスを通じての外世界に接觸し能はずと説けど、ヨハ子もジャスチンも神は直接に世界に接すと敎ふ（約三〇十六、十六〇二七、十七〇六）。ジャスチン『モーゼは神の鼓吹、感化によりて銅を取り云云』。但しジャチンは此點に於て自家撞着を免れず。彼が説ける『生命を與ふるロゴス』は寧ろヨハ子に類し（約一〇四、之に生命あり、此生命は人の光なり）、ストイック説に似るところ薄し。

ヨハ子及ジャスチンの説はファイロ（フィロ）より採れりとの論も亦た勢力少なし。此論の主張者自らの白狀を聞けば、尤も明瞭ならん。シユミーデル曰く『ファイロのロゴスは肉を取ること能はず』と。ハーナックもいふ、ヨハ子のロゴスとファイロのロゴスが似たりとは名稱までのことなりと。

蓋しロゴス等の語は當時廣く世に用ひられたるものにして、學識ある基督敎徒即ちジャスチン又は第四福音書記者の如き人が之を採用せしは、毫も怪むに足らぬことなり。ただ之を用ふるに方り、全く別の意味を之に附せしを忘るべからず。今日クリスチャン、サイエンチストと稱する基督敎徒が、唯心哲學の語を用ふるからとて之を唯心哲學より出たる敎派なりといはば不當にあらずや。否此等敎徒は自ら唯心哲學の思想を導入しつつありと認め居れど、ジャスチン等は全く異敎の敎義以外の意味に其語を用ひつつありと信ぜしなり。ジャスチンは其用語の源につきて一言も語らず。彼が其敎義の基くところを語るを見るに、一として基督敎を指さざるはなし。『吾人はキリストは神の長子なることを敎へられたり。而して吾人は已にキリストはロゴスにして、人類は之を分ち享け居るものなりと言明せり』（第一護敎論四六）。第二護敎論に彼は曰く『吾人の敎義は人間の敎示よりも大なるが如し』と。彼は幾回となく、自說はキリストの敎へ玉ひしものなりと主張し、ロゴス說も、ロゴスの生れたりといふ說も、其一部分なりと述ぶるものの如し。

此く論じ來れば、ジャスチンとヨハネとが共に或る共通の基督說に基きて立論したりと觀るか、又は何れか一方が他方の說を採りたりと考ふるかの外はあら

じ。兩人より以前の書とては獨りイグチシアス（イグナチウス）の書簡あるのみ。然るに該書中に後世の挿入文字ありと觀るも（是れ眞らし）、はた觀ざるも、ともかく第四福音書の語を借り來りたることは明白にして疑を容れず。故にジャスチンがヨハネに基くにあらずんば、ヨハネがジャスチンに據れるものと考ふるの外なく、而してジャスチンがヨハネに負ふものなることは、以下の理由によりて信じ得べし。

（一）ヨハネもジャスチンも護敎の目的を以て草したるには相違なけれど、其辯護の有樣頗る相異れり。ヨハネはキリストの人格につき一個の意見を確立せんとて筆を執り、自己の權威を信じ、諄々として未だ大ひに反對の聲を擧げざる時代に語るの風あり。ジャスチンに至りては然らず。彼は激烈なる反對者を前にして說くものの如く、或は論議し、或は反駁し、或は對手の意を撫めんと試むるなど、論戰甚だ力むるの樣あり。甲は共觀福音書の草せられたる基督敎會初代の空氣を呼吸し、乙は基督敎反對の氣焰揚り來りたる護敎論者時代の遭遇を想見せしむるものあり。

（二）ロゴスの生前存在に就て觀るも同一の結論に達せざるを得ず。ヨハネはロゴスの生前存在につきても、其職能につきても、僅かに暗示するに過ぎず。ジ

ヤスチンに至りては明々白々一點の疑なきこととして之を主張し、且つ之を詳説す。此かる發達を爲すまでには多少の年月を要するものなり。

(三) 且つジャスチンが筆を執りし時に及びては、生れたる子若くはロゴスといふ教義の論理上の結果は、基督教の反對家に隨分認められて駁撃さるるまでになり、ジャスチンは隨分其極端の結果まで、之を承認して議論したり。此も亦たジャスチンの方第四福音書より後なることを証するものにあらずや。

(イ) 若し子生れたりとせば、父は『生める者』たらざるべからず。されば父なる神、子を生めりといふことは彼の説くところなり。此はヨハ子にも希臘哲學にも絶へてなきところにして、ジャスチンのヨハ子の後に出てたる証據なり。

(ロ) 父は生れたりやとの疑問起りて、ジャスチンは繰返し〳〵『生れざる』といふ語を父に用ひて之を拒めり。『生れざる』といふ語は希臘哲學にても神に通用せしが、此は、自ら万物を生じて自らは生せしめられざるとの意なりき。基督信者は此意味に加へて、生れたる神即ちロゴスと別たんとて、『生れざる』とは稱へたり。

(ハ) ジャスチンの時に及びては、ロゴスは神より生れたるが故に神たらざるべからずといふ結論に達したり。第一護教論に曰く『子は神より初めて生れたる

ロゴスにして即ち神なり』と。思想變遷の順路は明かなり。ヨハ子は曰く『神なるロゴスは父より生れたり』と。ジャスチン曰く、『彼は父より生れたるが故に神なり』と。約翰傳一〇十八の語を『獨生の神』と見るも可なり。『生れたる神』の意にして、神より生れたるが故に神たりとの意にあらざればなり。

(四)ジャスチン及び彼と同一の説を抱きし人々が達せし結論は、正當なる意味に於て、二神ありといふことにてありき。一は生れず、苦を受けず、固有の名なく、永へに天上の天に在りて、何人も視ること能はず、又人と親しく交ることなきもの。他は生れ、万物の造主に從ひ、己を人に現はすものなり。此第二の神は万物の造主と意志に於て同じけれど、數の上より(ジャスチンの語を用ふ)言へば、[illegible]別に存在す。基督敎徒は此神を父と預言者の靈と共に拜む者なるが、其は正當の事なり。彼は世々代々の前に存在し、眞に神なり。父の意志を行ひしものなれども、自ら神なり。是れジャスチンのツライフォ問答中の語なるが、此はロゴス眞に神なりとの敎義の論理上含むところを認め、よし二神説に陷るばかりの際まで行くも辭せざる人の言にあらざるはなし。之に反してヨハ子は成程ロゴスは神なりと明かに敎ふるは事實ながら、此敎義に二神説の意味あるを認めたる跡はなし。

もし第四福音書の基督説が、ジャスチンより數十年前基督教徒にも、其反對者にも解せられ居たりとせば、以上の現象は自然のことゝなるなり。進んでジャスチンがオリジェン（オリゲン）に對する關係及び此兩人がアサナシアスに於ける關係を究めなば、此結論は一層堅確となるべし。

オリジェンが基督論に於て、ジアスチンの直系に屬するは、其ロゴスの思想、ロゴスの生れたること、獨り生れたることを中心とするを以て知るべし。今オリジェンとジャスチンとを比較するに、甲が乙より進み居ること數點に於て明かに見ゆ。

（イ）ジャスチンの三位一体説は萠芽の如きものなるが、オリジェンには此説充分に敷衍せらる。

（ロ）オリジェンはジャスチンが困難を感じたることなき點即ちロゴスの生れたることゝ、眞實の神たることとを調和するの必要を感じ、ロゴス若し神より出でて、眞に神ならば、其產出は永遠ならざるべからずてふ所謂永遠產出の説を唱ふるに至りぬ。

（ハ）彼は神の獨生子は性質上子なりとの意をジャスチンよりも强く主張したり。

（ニ）ジャスチンは父と子との別を明白に立てたれど、オリジェンは其互に相同じ

き點を擧ぐるに力めぬ。彼はジャスチンの切論せし子の屬從といふことを云云することを稀にして、神性に屬するものは父と子との共有するところなりといふことを明言して憚らず。

(五) 且つ又ロゴスの生前存在の說に於ても、オリジェンの方ジャスチンより進步せり。ジャスチンは此說を以て(イ)ロゴスの神性を證し、又(ロ)希臘人が眞理を認めたるはロゴスの力による者なるを證せんとしたれど、オリジェンは之に一步を進めたり、否寧ろ彼はジャスチンと說を異にしたり。ジャスチンはロゴスは人の器量によりて其中に宿るの度を異にすと說きしが、オリジェンは人の價値如何によりて其度を同ふせずと論じぬ。左れば彼が生前存在を云云するは、其がロゴス降生の敎理に大關係あるが爲にして、キリストは全然純潔なる價値あるものなりしゆへ、ロゴスは完全に其中に宿れりといふが、彼の主張なりき。是れ豈にジャスチンが敎義上ヨハ子とオリジェンとの間に介することを證するものならずや。

さて又アサ子シアスの書を研究するに、彼も亦たヨハ子、ジャスチン及オリジェンと共に、生れたる、而して獨り生れたるロゴスといふ說を執れども、ジャスチンが此說より繽繹し來りし諸點に心を留めずして、永遠產出といふオリジェン

の教義」に尤も重を置くを認む。且つ當時產出といふ教義よりして、種々の議論を惹起したることをも知る。殊にウーシャ（性又は質）の論戰尤も盛なりき。しかるに此はヨハ子の夢想だもせざるところ、ジャスチンの殆んど論ぜざるところなり。オリジェンは子の生るる爲め父の分裂することなきを証せんとて、父の肉體なきことを詳論せしが、アサ子シアスに至りては、本質の分裂といふ問題に尤も力を用ふるを見るなり。

知るべし、發達の順序分明なることを。第一にヨハ子、次にジャスチン、オリジェン、アサ子シアス、是れなり。

尙一事實ありて、今日の四福音書が大躰ジャスチンの文書に先んずる年代に於て彼此殆んど同一なることを証す。ジャスチンは獨生ロゴス若くは神の子の教義と共に處女出產のことを切に主張し、且つ兩教義とも長く世に知られ、隨分反對せられ、隨て之を辯護せざるを得ざる者となりたるが如く、彼は全力を擧げて之を辨証せり。かの馬太及路加の福音書に、後世イエスの出產、幼時の譚話を附加したりとか、約翰傳は後世の僞作なりとか、獨生ロゴスの說は後世の產物なりとかいふ論は、全くジャスチンの文書の語調と衝突するものにして、右の事實教義はジャスチン以前の古きものと認めずば說明しがたきことゝなるべ

し。且つ獨生ロゴス及處女出產の敎理が後世馬太、路加、約翰の福音書に挿入されたりとの說とて說明し能はぬ數點あり。(イ) 馬太、路加のみに挿入されて、馬可（明かに最古の福音書）にはしかされざること。(ロ) 共觀福音書に獨生ロゴスの跟跡だになきこと。(ハ) 約翰傳に處女出產の紀事なきこと是れなり。然るに若し福音書の順序を馬可、馬太、路加、約翰と觀、處女出產の敎義の說かれし前に馬可傳草せられ、約翰傳は處女出產の紀事を載せたる馬太、路加の後幾くもなく、再言せば、此敎義が廣く議論の種とならぬ前に草せられたりと假定せば、以上の現象はよく說明し得ることとなるべし。

尙一の事實あり。獨生ロゴスといふ敎義を新說なりとて爭ひたる古文書毫も之れなきことと是れなり。ジヤスチン時代にキリストを人より生れたる人と認めたる敎徒ありしに、彼等は獨生ロゴス說を使徒相傳ならずとて駁したることなし。一七〇年アロギ派とて正に此說を拒みしもの起りしが、彼等は第四福音書をセリンサス（ケリントス）の作なりと唱へて、ともかく其古書なることを許したり。ヨハ子傳の古文書たる確証の一と謂ふべし。

論者頻りに、ジヤスチンが共觀福音書より引用しながら、第四福音書より拔萃するところ稀なりとて喋々すれども、ジヤスチンは敎義を証明せんとて共觀福

音書を引きたることなし。異教徒又はユダヤ人に基督教の文書を引証したりとて効力なければなり。左れば教理を確定せん爲めには、彼は舊約書を引くか又は希臘思想と基督教思想の調和に訴ふることをせり。彼が共觀福音書を引用するは、主としてイエスの倫理上の教訓を示さんとするときに在り。福音書の眞相を知るものは、約翰傳が此目的に適するものにあらざるを悟るべし。然れども教理上の事につきて彼が福音書を用ひたる場合には、彼は共觀福音書も第四福音書も共に之を使用したり。其獨生ロゴス説は乙より採り、其奇跡的生産は甲より得たりと見るは正當にあらずや。

論者又曰く、第四福音書はジャスチンの知るところなりしならんが、其神智主義の福音書たるが爲め用ひざりしならんと。若し神智説の異端福音書たらば、ジャスチンは何故其至要の教理の一を其中より採りしや。況んや論者の説は、紀元一五〇年又は一六〇年にジャスチンが全然否定したる文書を、一八〇年又は一九〇年アイリニアス（イレチウス）が特に基督教の要書として認めたりといふ不可思議の言たるをや。

難者曰はん、思想の進歩轉移は時に急速なることあり。第四福音書よりジャスチンの基督説に至る間の年月短かかりしやも知るべからずと。成程此は有り得

べきことなり。然れども今吾人は單に思想の進歩をのみ基礎として此問題を論ずるにあらず。ジャスチンの時に於て、基督教徒も其反對者も共に獨生ロゴスといふ教義を使徒時代よりの教と認め、之を熟知せしことは、ジャスチンの書を讀まば明白にして、反對者も之を知悉し、熱心に之を駁するまでになり居たるなり。此等の事實は此思想發達の甚だ速かならざるを示すものにして、少くとも其一部分はジャスチンより久しき前に發生し居りたるものと見做さざるを得ず。以上の論もし正確ならば第四福音書の年代は第一世紀の末以後に置くべきものにあらざるなり。（小林彦五郎君譯）

説教

人が自己と和ぎ得る基督教的方法

故　総長　ジョン、ケーアド

我が肢体に他の法ありて我が心の法と戰ひ我を擒にして我が肢体の中に居る罪の法に從はするを悟れり。噫われ困苦める人なる哉この死の体より我を救

はん者は誰ぞや、是れ我儕の主イエスキリストなるが故に神に感謝す。（羅馬書第七章廿三節――廿五節）

余が爰に引用せる使徒保羅の言は、吾人に示すに、精神的生活に於て最もありふれたる實驗、即ち義務と性欲とが吾人の心中に相衝突して、心靈は罪惡の束縛を感ずれども之を脫却するの力なく、眞我は理想の招集に應ぜんと欲すれども誘惑と惡習に打勝つ能はざる狀態を以てす。吾人が單に性欲にのみ驅られて生活し、別段深く考ふることもなく俗的生活に滿足し、何等の高尙なる志望や要求の爲にも擾されざる間は、精神上に於ける不安の念、束縛の感、無力の嘆は全く吾人の經驗に上り來らず。何となれば、吾人の內界に於てもその外界に於けると同じく、自己が無力の感を吾人に起さしむるは、戰鬪に敗北の味を嘗むる時にあればなり。流に從て泳ぎ風に追はれて漕がば、水力風力を感ずること少しと雖も、一たび流に逆ひ風に反して、始めて之に抵抗するの困難を覺ゆ。國民の精神久しく壓制の下に慣れて之に反抗するの氣力なき時は、却て悲酸なる束縛の境遇を痛むこと少しと雖も、自由の精神一たび勃興し、覊絆を脫却するの計畫爰に企てられ、而かもそが屢挫折するに至れば、その苦がき經驗によりておのが頭上に加はれる威壓を感ずること益强し。その如く、吾人の生活を

して性欲の流に沿ひ情慾の颪のまに〳〵漂はしめよ、俗的野心や劣等なる利害の感をして高尚なる志望を排除せしめよ、吾人は遂に下等なる慾情の靜にして而かも强き勢力を悟る能はざるべき也。

之に反して、義務の命令良心の聲一たび吾人の耳朶に響き、自らおのが墮落の甚しきを悟り、肉情的生活の如何に耻づべきかを感じ、道念爰にその權利を主張するに至りて、吾人は始めて自己を支配する勢力の强大なるを覺知するなり。

此の題詞に示されたる狀態を見よ、此の戰爭は對等の戰爭に非ずして、一方は極めて强く一方は極めて弱きものなり。下等なる肉慾にもせよ、安逸を貪り快樂に耽ることにもせよ、金錢を愛し名譽を愛し權勢を愛することにもせよ、兎に角一方には性欲の力あり、他方には冷酷嚴正なる義務の念あり。前者は吾人に呈するに嬌姿艶態を以てし、後者は吾人に向くるに冷眼澁顏を以てす。之に加ふるに、敵は久しく主權を掌握し居たる利を有す。從來の惡習を征服せんと試むる者は、皆な此の利の如何に大にして、之を除却せんとする理性の如何に鈍きかを知る。若し意志にして單に、正義と快樂、高尚なる性情と下等なる慾情との間に立てる公平なる審判者たらんには、此の戰爭は對等の戰爭にして、その結果はたとひ前者の勝利とならざる迄も、少くともその勝敗豫知すべ

からざる位となるべし。然れども、事實に於ては則ち然らず。性欲は久しく主權を掌握し來れるが爲に、先取權を要求するものなり。故に干戈一たび相交るや、意志は決して公平なる審判者たる能はず。不正不義なる行爲は深く意志の中心を押領して、之をして新來の客なる義務の念に反抗せしむ。されば斯かる境遇にありては――一方に肉情あり自然の性欲あり從來の惡習あり、他方に吾人が尊ぶも而かも愛する能はざる嚴格なる律法ある場合にありては――正善を追求する努力が失敗挫折して、空しく腑甲斐なきを嘆ずるに終るは、必しも不思議の事には非ざるなり。

最後に考ふべきは、此の戰爭をして對等ならしめ、若くば義務の方に氣勢を添ふべきものが、吾人の自由にならぬ事なりとす。愛、深且つ大なる愛は、理性と良心とを援けて之をして戰勝者たらしめ得べきものなれども、哀哉、罪惡を脱し正義を求めんと試みたる幾多の人士が經驗したる如く、律法の嚴格を和らげ義務の重荷を輕からしむべき愛は、意志の自由になるものに非ず。實に吾人は、おのが敬遠する律法や、若くばおのが恐怖する有力者に、餘儀なく表面的形式的の服從をなすこともやあらん。後悔の念、奴隷的恐怖、利己的打算は、屢人をして表面的に道德家たらしむ。人はおのが永遠の運命を左右し得べしと

信ずる全能力と和らがんが爲に、道德の要求に屈從して、或は刑罰を受け或は犧牲を供へ、或は一生の間難行苦行に身を委したることもありき。然れども、義務を變じて歡樂となし得る愛は、吾人の思ふ儘に出で來らず。若し正義の律法の中に、若くば之を發布し厲行する勢力の中に、我が心情に觸れてその同情と隨喜とを喚起すべきものなく、又た此の高尙なる感情にして、他の刺激なくては我が心中に湧起することなしとせば、吾人は到底我が意志の力によりて之を生じ能はざる也。

斯の如きは是れ、內心的戰爭の眞相なり。各個人の場合に於てそが如何に成行くかは、實に重大なる問題に屬す。如何となれば、精神的存在物としての吾人の全運命は、一に此の戰爭の結果如何に係ればなり。他語を以て此の意義を言はんに、我は我が生命を放棄し去るべきか。我は我が中にある凡そ高尙なる者善美なるものをして、劣等なるもの粗野なるものに屈服せしむべきか。人性の中ち無限に連り永遠に亘る者をして、一時的なるもの朽壞すべき者の餌食たらしむべきか。時間空間に限らるる世俗的快樂をして、發展極なき智識幸福品格を驅除せしむべきか。吾人の前に描かるる道德的完全精神的圓滿の理想を以て、暫時物質の雲間を洩れ來る幻影に過ぎずとして、之れに達せんとする努力を以

て全く徒勞の業と見做すべきか。斯くも高尙なる理想を觀じ得る能力を有しながら、之を追求せんとする奮躍をして、下等なる慾望の下に鎭壓されしむべきか。天にも地にも果して、高尙なる我を援けて卑賤なる我を掃蕩するの力なきか。此の苦悶この失望この哀求こそ、使徒保羅の痛嘆なる『われ困苦める人なる哉この死の体より我を救はん者は誰ぞや』の言中に顯るゝものなれ。而して今吾人をして保羅が此の問に答へたる所――猶豫なく踴躍せん許に答へたる所――を見せしめよ。曰く、『是れ我儕の主イエス、キリストなるが故に神に感謝す』と。借問す、此の言は果して何事をか意味する。此の不平等なる戰爭に於て、心の法の爲め高尙なる我の爲に戰ふものに、基督教は果して何等の助をか與ふる。

第一、基督教は正に此の戰爭の不平等を撤去し得る新動機を與ふ。愛――深且つ大なる愛は、豈に基督教が荏弱なる意志を援けんが爲に招集する新鋭に非ずや。斯教は義務の念を變じて、基督に對する愛となすものなり。斯教は決して合理的標準として正義道德の想念を廢棄するとなし、否な益この想念を廣くし高くして、却て之れが實現を一層困難ならしむ。而かも他方に於ては、斯教の感化を蒙むるものに借すに、道德的努力を援くる偉大の勢力たる、熱誠、元氣、

喜樂を以てす。耶蘇基督の人格と生涯とに於て、道德的想念は目に見るべきの形体を取れり。眞理、善美、純潔、正義などは、抽象的觀念としてに非ず、吾人が個人的に隨喜し尊崇し愛慕し得べきものの生ける品格として、吾人の前に顯るるなり。

吾人の中ち誰れか、この世に合理的規律の上に超絶せる個人的愛情の力ありて、克己の辛勞を輕減し犧牲の苦痛を變じて歡樂となすことあるを認めざる者あらんや、又た誰れか、聰慧なる利害の打算よりなすに非ず、嚴格なる義務の要求よりなすに非ず、寧ろ愛の源泉より湧出する新インスピレーションよりなす行爲の、一層愉快なることを知らざる者あらんや。世には日々苦しき生活をなしながらも、おのが心裡に秘密なる愛の動機を藏するが爲に、その辛苦を厭はざるもの多し。疾病我が愛する者の身に迫るや、母たり妻たるものに日夜看護の勞を取るの力を與ふる者は何ぞや、是れその胸中に燃ゆる愛情の火あるが爲に非ずや。國家多難の日に方りて、幾多の志士仁人をして邦家の爲にその身命を抛たしむる者は何ぞや、是れその胸中に迸しる愛國の血あるが爲に非ずや。斯の如く、基督教道德に於ても、道義の律法は少しもその嚴格を失はざると共に、又た人をして喜んで之に適從せしむべき引着力を有す。基督教は不動なる道義

律の權威に合致する代りに、我儘なる意志の命令に屈從するを强ゆるものに非ず、而かも斯敎は、此の權威に加ふるに、吾人の心底に觸れてその同情同感を惹起し得べきものより出づる、優しく而かも强き力を以てするものなり。

尙ほ一言すべきことあり。基督敎は啻に道義の律法と吾人が愛し得る者とを同一視するのみならず、又た之と吾人を愛する者とを同一視す。たとひ吾人は抽象的律法を愛し得べしとするも、律法は吾人を愛し得るものに非ず。その性質や非人格的にして、動かし難く枉げ難し。憐むことを知らざる代りに、又た怒ることを知らず。之に逆ふ者あるも悲むことなく、之に從ふ者あるも賞することなし。吾人は時に義務や律法を擬人視することあるも、要するにそは單に詩的想像に過ぎざるなり。

吾人は義務の命令を哲學的に解剖して、之によりて人格的神の存在を論証し得べし。然れども、律法そのものは人格を有するものに非ず。之に吾人の哀求に答ふべき笑顏なく、吾人の叫聲に傾くべき耳なく、吾人に同情を表すべき心情なく、吾人に平和を與ふべき赦罪なし。然れども、律法のなし能はざる所を基督はなし給ふ。基督の生涯が吾人の心意と生涯に對して偉大なる力を有する所以は、彼に於て永遠の眞理と正義とが生ける形体を取りて、人格的なる愛情と

赦罪を以て吾人の上に臨めばなり。吾人は嚴正不動なる非人格的律法より移りて、爰に吾人の荏弱を知り吾人の罪過を責めながらも、尙ほ吾人を愛憐し赦免し得る者に權化せる、絕對的純全を見出すなり。

請ふ、道德的に人を活かすべき力が、如何に此の基督敎的信仰の中にあるかを見よ。絕對的純全者が罪に沈める心靈を愛すてふ事は、最も深く吾人の眞我に訴へ、且つ吾人をして精神的復活を遂げしめ得る秘訣なり。凡ての經驗は吾人に告ぐるに、純潔なる愛が墮落者を引上ぐる偉大なる力たることを以てす。何物も精神的希望を復活し道德的努力を呼返す能はざる時に、愛と赦罪とが之をなし得て餘りあること、それ幾度ぞや。人間の眼には道德的回復到底望なき時に於てすら、精神的生命の餘燼尙ほ殘れるあらば、愛は之を煽ぎて能く炎々たる活火たらしむべし。世には幾多の男女ありて、その道德性は痲痺し、社會一般に見棄てられたるが爲に、自己も亦た自暴自棄に陷り、忠告も敎誨もその心に徹する能はず、脅迫も刑罰もその心を飄へす能はざる時にも、潔く且つ優しきものの同情一たび彼等の心緒に觸れ、且つ彼等をして斯かる人すら彼等を見棄てざる以上は、彼等も未だ以て失望すべきに非ざることを悟らしむるにより て、彼等の胸裡に混々たる復活の泉を湧出せしめ得るなり。

されば、自暴自棄の罪人に對し、若くば苦戰難鬪の道德家に對して、基督がその在世中に與へ給へる力、その後幾百代の間その福音が與へたる力は、實に彼を通じて永遠の律法と正義が吾人に語るに、非難叱責の聲を以てせず、愛憐と赦免の聲を以てするに由る。吾人此の聲に耳を傾くるや否や、我が心靈を麻痺せしむる罪惡の感はその手を放ち、我が衷にある道念は爰に新活力を得るに至る。是に於てか、既往の失敗と悲酸とは、恐しき夢の如くに過ぎ去り、懷疑の雲霧は消へ失せて、極めて神聖純潔なるものにも愛せらるべき性質の尙ほ我が衷にあるを信ずるの信仰起る。吾人は最早、道德的荏弱と不完全とを認めながらも、嚴正なる律法の下に畏縮することなく、却て律法と愛――吾人が尊崇する正義と渴望する慈悲――とが完全に一致調和せる者の懷に投ず。沮喪せる元氣、挫折せる決心の代りに、新勢力を感ずるの意識日々に我が衷に生長す。此の力に關して保羅は他の處に述べて、『基督の愛我儕を勵せり。是れ我儕をして自己が爲めに生きず、自己を愛し自己に代りて死に給ひし者の爲めに生きしめんため也』と曰ひ、又た彼は此の力を意識したる結果、感謝の歡呼を出して、『是れ我儕の主イエス、キリストなるが故に神に感謝す』と曰へり。

第二、單に基督教は吾人に供するに基督に對する愛てふ新動機を以てすといふ

のみにては、未だ此の題詞の意義を言ひ盡したるに非ず。之に加ふるに、此の文言の前後にも顯はれ、又た保羅の他の書翰にも屢散見する一思想あり。何ぞや、吾人の道德的戰鬪に於て基督の實在吾人を助くといふ事、即ち是なり。吾人の目に見るべき形体にては此の世界を去り給ふに方り、主は『見よ、我は世の末まで常に爾曹と偕にあるなり』と宣ひ、保羅は『若し基督爾曹に居らば肉体は罪に緣りて死し靈魂は義に緣りて生きん、若し耶蘇を甦らしし者の靈爾曹に住まば基督を甦らしし者は其の爾曹に住む所の靈を以て爾曹が死ぬべき身体をも活かすべし』と言へり。又た同一の思想は屢彼の書中に顯る。曰く、『我が生けるは我れ生けるに非ず基督我に在て生けるなり』、曰く、『我に在つて生けるは基督なり』、曰く、『基督爾曹の衷に住み給はん事を』、曰く、『爾曹に在る基督は榮光の望なり』と。彼の意蓋し、吾人は自己が荏弱なるの故を以て、罪惡との戰爭より遁逃するを要せず、理想的生涯を追求する努力に於て失望落膽するに及ばず、何となれば、吾人の愛し且つ信ずる主は常に吾人と偕に在り給ふて、我を助け我を勵まし我の力に添ふるにその無限力を以てすればなり、といふにあらん。

さらば、基督我が中に住み給ふとの思想は、果して何事をか意味する。吾人は

單に一種の譬喩として之を說き去るべきか。是れ善人の精神は社會に於ける不朽の遺物なりとか、高貴なる人格の生涯には人類の精神的生命に末長く貢献するものありとかいふ意なるか。人類社會に於ける最大要素は、現存する當代人士の働にあらず、寧ろその深遠なる著者によりその高貴なる生涯によりて、過去の聖賢傑士が吾人に及ぼす蓄積的永存的感化にあり。且つ狹き個人的經驗の範圍に於ても、余は憶に、吾人が肉体に於て最早見る能はざる人物の神聖不朽なる感化を負ひつつあるを知る。吾人は時々我が親愛する者に就て言ふことあり、曰く、彼れ我と偕に在りし時、我は彼を愛し彼を敬し彼の敎訓を受け彼の友情に浴せり、而して今や死は彼の我に對する感化を減せざるのみか、却て新しき力と神聖とを增しつつありと。蓋し吾人は、生前に於けるよりも死後に於て、一層明にその人の品格を印せられ、一層強くその人の感化を受くればなり。彼の生涯は、爰に理想化せられ神聖視せられ、實感に訴ふるよりも寧ろ想像に訴ふる圓滿的完全を以て、實在が生ずるよりも寧ろ記憶が生ずる微妙の感情を以て、吾人の前に復へり來る。死は斯かる生涯の印象を吾人の想像中に潔めて、之を美化し靈化し神聖化して永く吾人の有となすもの也。

以上の意義に於ても無論、基督が常に吾人と偕に在り給ふ事は事實なり。單に

その傳說的感化によりてのみ量るも、此の世に未だ基督の生涯の如きはあらじ。他の生涯にして、主の生涯の如くに、死に打勝ちたるはなく、萬世に亘つて生けるはなく、個人及社會の道德的生命の上に否な人類全体の精神的生命の上に不死の勢力を及ぼすはなし。又た他の生涯にして、世の勢力や下等の慾情や卑劣なる動機と戰ふ吾人の眞我に對して、主の生涯の如くに偉大の感化を與ふるはなし。是れ固より不思議の事に非ず。何となれば、吾人の前に基督の生涯が示す理想は、全く私心を脫し俗情を離れたる生涯、極めて質樸に極めて純潔なる生涯、富貴利達の引力に高く超絕せる生涯、神と人と眞理とに對する熱心が如何なる危機に際しても撓まざる生涯が與ふる理想なればなり。斯かる生涯に同情するは、外部より觀れば貧賤困苦の生涯に同情することなれども、而かも內部より之を觀る時は、精神美の光赫灼として輝き、靈的幸福の泉混々として流れ、壯麗豐富比類なき生涯に同情することとなりとす。

然れども、保羅の觀じたる所によれば、基督吾人の裡に住み給ふてふ事は、單に主の生涯の不朽なる感化とその福音の神聖なる傳說とを意味するのみには非ず。斯くの如く說明し去るは、實際基督が常に各個人の靈魂と觸接し交通し給ふ事を、一片の譬喩と化し了るものなり。若し余が引用せる如き文句にして、

譬喩以上に一歩を進めて、何時にても捕捉し得らるべき基督の實在、數千年後の吾人が主の肉顏を見その肉聲を聞ける人々よりも尙ほ深く親炙し得べき基督の實在を指すに非ずんば、此等の文句は畢竟誇張の言たるを免れざるべし。世人は屢、基督教の信仰と希望を、歷史的証據の强弱、古文書の眞僞、基督傳を搆成する材料の如何によりて、起ちもし仆れもするものの如く言ふ。而かも余は、此等の古記錄が大体に於て苛酷なる批評の試驗を通過し得たるを信ずると同時に、又た基督に於ける吾人の信仰が、歷史的証據よりも一層堅固なる基礎の上に立ち、常に生ける基督の靈の存在と動作を認むる內心的實驗に基くことを信ずるなり。而して此の基督の靈や、一たび肉体を取りて吾人の間に宿り、今も尙ほ（吾人にして自己が心を開きて之を受容れだにせば）吾人の裡に活動して、我等を贖ひ我等を潔め我等を高くする愛の靈たるなり。

如何にして吾人は、萬有の生命が尙ほ此の世界を去らざるを知るか。吾人は年々歲々、春來れば草木の萠芽復活し、夏至ればその枝葉繁茂し、秋に入ればその果實成熟するを見て之を知る。如何にして吾人は、古代に於ける大詩人の名著を讀み大畵伯の傑作を見る時に、彼等にインスピレーションを與へたる精神が、遠き昔にのみ屬せずして今も尙ほ吾人の間にあるを知るか。吾人は此等の

名著傑作に接してその精神を感じ得るが故に之を知る。斯かる天才の不朽なる作物が吾人の心中に攪醒する内部の感應により、そが吾人に觸れて喚發する思想感情渇仰によりて、吾人は我が胸裡にも活動しつつある精神――即ち一時的感興にあらで斷へず人間の思想及生活に存する力――が彼等の心中にありしことを信ずるなり。若し然らずんば、此等の作品は吾人に對して無意味なる白紙たるを免れざるべし。

之と同様に、而かも數層高尚なる範圍に於て、吾人は基督の裡にありてその人的生活をして永遠の光と愛とを放たしめたる靈が、未だ曾て此の世を離れ去りたることなく、今後も決して離れ去ることなきを知る。吾人は基督を携へ來らんが爲に高く天に上るを要せず、過去の朦朧たる姿を復現せんが爲に遠く昔に遡るを要せざるなり。基督は現に今吾人に近く在まして、吾人の道徳的識見の光となり、吾人の精神的生命の泉となり給ふ。若し吾人にして主の實在を認むる能はずば、障害の原因は我にありて彼にあらざるなり。靈眼昧くして天光を見る能はず、靈耳聾して天聲を聞く能はざることもあらん。而かも主は吾人を距ること遠からず、我が心冷淡頑冥にして之を覺知せざる時も尚ほ、主の實在は吾人を圍繞しつつあるなり。されば、我が道徳的蒙――精神的遲鈍の外、何

物も主の靈が吾人の靈に浸入し彌漫するを妨げざるなり。

若し諸君にして、吾人の靈と基督の靈とが斷へず接觸し交通しつゝあるの証據を問ふものあらば、余は之に答へて、そは基督を愛し基督の爲に斯生を送れる各個人の實驗にありといふべし。吾人が萬物の復活を見て世界の生命力が單に遠き昔の春にのみ限られざるを知り、天才の傑作我心に感應するを覺へて、美の靈が獨り古人の中にのみ宿らざりしを知る如く、基督信徒各自の心中に活ける實驗の中に、吾人は一たび人の形貌を取りて此の世に降りし靈、人を助け人を赦し人を贖ひ人を崇むる靈が、單に歷史上の事實たるのみならず、又た現在の活力たるの實証を認むるなり。基督の裡に住みし無限なる愛と善との理想が信徒各自の直覺に現はされ、その光榮ある美を以て彼等の心を捕へ、その强大なる力を以て彼等の道念を高むる時に、吾人は最早そが存在の歷史的証據を要せず、そが時間に限らるることなく、隨處に隨時に吾人の中にあるものなるを知り且つ信ずるなり。

又た吾人が基督にある神の救贖的愛心の示現に接して、碎けたる心に赦罪の恩命を聞く時、人力が到底脱却し能はざる罪惡の桎梏情慾の羈絆が、神の力に觸れて一朝に破滅する時、高貴なる生涯の理想が吾人の眞我に訴へて、その眠れ

る渇仰と元氣とを振起する時、吾人の心靈誘惑と戰ふに際して、見へざる同情の力によりて強くせられ引上げらるゝ時、人間が感じ得べき最も美はしき喜悅、自己に勝ち自己を棄て他人の爲に自己を犧牲とするの快樂が心中に貫徹する時、熱信なる聖者の傳中に見るが如き高潔なる感情の境に入りて、神に祈り神と交る時、天が一層近くに見へ、地に屬する利害や志望を忘れ、卑劣なる慾情願望を棄て、而して神と一心同体たる幸福の中に將に顯れんとする榮光の曙光を捕ふる時、――吾人は斯かる時機に際し、斯かる經驗の中に、見ゆべき者の帕子の後に、愛に滿ち恩惠に滿ち生命に滿てる善の精神の存するありて、吾人を吾人以上に引上げておのが永遠の生命に與からしむることを目擊し、吾人の中に住み吾人と偕に生くる基督の實在とインスピレーションとが、保羅をして『是れ我儕の主イエス、キリストなるが故に神に感謝す』てふ頌讃的感謝を吐かしめたる所以を悟る也。（今泉眞幸君譯）

小羊と獸との戰

大博士　ロボルトソン、ニコル

彼等羔と戰はん而して羔之に勝つなり(默示錄十七章十四節)

聖書の中最も深秘なる卷はと問はば、常に默示錄なりと答へらるるは不思議なる事なり。固より煩雜なる誇學的の解釋を加へらるるは此の書の厭ふ所なれども、神の言の勝利と淚にて充ち、我等の主とサタンとの激戰の間に處して我等を指導すべき敎訓に富めるもの此の一書に比すべきものあらず。基督敎會の歷史には殉敎者の名籍あるとともに、背敎變節の徒の名籍あり。大なる石は天使の手によりて墳墓の戶より取り除かれたる生命と勝利の物語あるに併せて、失敗と失望と死の物語をも遺したり。此の戰爭は羔と獸との戰として寫さる。獸とあるは動物的の猛獰なる肉欲的なる心情の反逆なりと解することを得べし。然れども主として人と獸を區別する性質は以上の點にあらずして、寧ろ動物は神と直接の關係なく又此れあり得ざる一事なり。縱令之を馴致して狂暴ならざらしむるとも動物は依然として動物たるを失はず。社會的改良を行ひて人に衣食の道を與へ、飮酒不道德をして甚しからざらしめたりとて、達すべき目的は猶遼遠なり。其の神に遠き一事に於ては滿足せる唯物主義も反逆なる不信仰と相距ること遠からず。基督敎の說敎者の濟ひ難きを見出だすは後者より寧ろ前者にあり。此れは何ほ多くの人の記憶することなるが、現世主義が一時猛烈な

る勢にて傳道せられし時代ありき。大都の講堂に於て聖書は嘲られ、神と基督は否定せられ、基督教は其の本質に於て基礎なく其の結果亦た有害なるものとして罵倒し去られたり。今日此等の講堂は概して閉鎖せられ、予の記臆誤まらずば其の中の或る者は倫敦のウェスレー派メソヂスト傳道會社の事業に使用されつつあり。我等をして神に感謝せしめよ、これ實に基督の勝利なり。然れども此の如き現象が或時は基督に降服したるにあらずして精神上の大問題に冷淡になりたるが爲なることあり。當時現世主義を主張せし人々の中には隨分宗教の問題に注意したる人あり、人生の運命につきて思を勞したる人ありしことを忘るべからず。彼等は屢々正義の勇士となり自由の使徒となり、艱難を堪へ犧牲を甘じて其の誠實を說明せり。今や此等の人々も跡を絕ちぬ。而して人民の間に理想の幻光は沈銷して人は高尙なる事物に注意せず、昔の如く正義の爲に燃ゆる夢想なく、聖書にも救主にも未來世界にも何等の感覺無き人多き時代となりぬ。

（二）

近頃出版せられたる『深淵より（フロム、ゼ、アビス）』と題する一小冊子は筆力あり且心を傷むべき書なるがヂョン、スミスと云へる模型的の勞働者の生活を寫したるものなり。

此の書の著者は思へらく警察の力と「ピーボヂー館」の如き設備により遠からぬ時代に於て、今日狂暴不軌の民も從順なるものとなり、無心に快活に嫉妬大望欲求に心を動されずして生れ又死する時來るべしと、ヂョン、スミスは蓋し五十万人の現狀を代表せる人物なり。彼はカムバー、ウエルの四室の家に住ひ妻と五人の小兒と一人の寄食者あり。一週間の中六日は朝夙く煉瓦積みの仕事に出で行き、夜は家に歸りて晩餐を食し煙草を喫し或は酒店に行きて其日の新聞を聽く、日曜日は晩く起き晝飯を終へてベックハムライに散歩を試み夕は其友と蒼龍館（ブリウーヅレゴン）にて日を暮らすなり。就るべき仕事あり給料の支拂規則正しき間は彼は不平の聲を揚げず。知識的の興味とては些も之を有せず。講演を聽かず、新聞を讀めども之が爲に心を動かされず。仕事に利益あれば默して滿足し然らざれば默して怒れり。教會に對しては頑然たり。宗教を用るにあらず其の有する信仰は唯萬物を寛容する神を信ずるのみ。其の生活は平凡なり、行儀よくして可なり有德なり。然れども彼も亦一の永遠より他の永遠として、悲劇的の意義多き此の世界を旅行してある靈なるに此の人世の意義には無感覺なり。此の大都に於て是の類の人幾十万人ありと聞く。彼等の患は幸福なきにあらず、却て是の如くして幸福なるにあり。心靈的需要渇望の喪失、空低き生涯、心情良

心の冷却に對して羔は其の戰を試むるなり。

（二）

『彼等羔と戰はん而して羔之に勝つなり』。これ卽ち我等の事業なり、心靈の覺醒これ我等の事業なり。如何にして此の事を成すべきか。如何にして熟眠せる人を目醒まさしめんか。人生の目的は良く食ひ良く飲み良く眠り、出來得る丈け少き勞働を爲して且つ困苦せざるにありと思ふまでに此の鴉片劑を服したる人の目を如何にして醒まし得べきか。これは精神の張りたる狂暴、不逞、反逆の徒を敎ふるよりも遙に困難なり。若し夫れ上品なる生活を送るに難からしむる社會の狀態に就きては我等も亦力を盡して之を掃清するを勉むべし。又倫敦市中に於て強き境遇の勢力ありて福音の力を以ても之を打破し難く、この渦中に入れば人は罪を犯して滅びざるを得ざらしむるものあるか。又幾千の小兒は殆ど生れ落ちてより不德惡行の中に沈み落ちたることあるか。果して然らば我等は力を盡して此等を改むるの途を講ぜざるべからず。エモルソンが謂はれたる悲哀の山と呼べる所のものを取り去らんとする慈悲心に皷吹せられたる人々に同情を表し犧牲を共にせざる敎會は主の心を失ひたるものなり。然れども社會問題の最後の解決に就きては余は未だ一個の定見を立つること能はず。神の聖意

が天に成る如く地に成らん時社會の狀態は如何になるべきか。予の知る能はざる所なり。社會の改造に關して雄辯有力なる議論を讀みたれども、余は此の點に於て惑へることは依然たり。經濟學者、哲學者、政治家は其の目的に達する爲に幾多の苦心を經るを要すべく、基督教の思想家も亦彼等に遲れを取らず此の問題の講究を勉むべき也。庶幾は早く目的に到着せんことを。諸君は傳道の經綸に於て夙に社會事業に盡すべき責任を認識せられたり。諸君は貧民の全生活に注意すべき召命を受けたること、基督教の傳道者には俗なりと云ふべき事あらざること、苟くも世界に生れ出でたる人は滿足と歡喜に與るべき權利を有することは諸君の夙に着目せらるる所にして諸君は抽象的の命題として此等の意見を持せらるるにあらずして聖き情熱を以て然かせらるるを知る。然れどもクリスチャンとしては猶ほ更に進まざるべからず。倫敦に於て四室ある家に住める程度の民を如何にすべきかの問題は未だ解釋せられざるなり。ヂョン、スミスの問題は依然として留存せり。縱令其の生活の程度を異にせる東部の民と西部の民を混じて其の特權と機會を均一ならしむるも問題の解釋せられざることは依然たり。人は是の如くして唯物主義より濟はれ得べきものにあらず。然して我等の最も切望することは唯物主義より濟はるることにあらずや。余は再び

始に復りて云はんとす、我等は靈魂を覺醒せしめざるべからず。貧は人の靈魂を殺すべきか、否々之を信ずると勿れ。聖書は富人の不德の記事に富めども貧民の不德につきては言ふ所多からず。新約書は貧民中の貧民に對しても云ふなり『今は救ひの日なり』と。何物か此の特權を奪ふとを得んや。凡そ倫敦の如何なる隅にせよ愛と悔恨と悲哀の情に襲はれざる處なく、此等のものに感觸する時人の靈魂は暫時覺醒すれども否や復た眠りに落つるなり。愛は猶も人の心に燃えて青春妙齡の男女の目より輝くなり。此處に一種の變貌あり。縱し其の期は短くとも現實にして永く忘れ難し。この變貌即ち理想を信ずる念を回復するの時は、漂泊と罪惡と荒暴の幾年を經ると雖も猶ほ全く死なざるべし。良心は時々目を開きて、斯くなせばよかりしにと思ひ、我ながら心の曲れるに驚きて再び癒えんことを求む。或は又愛情の緣絕ゆる恨事あり。すべて此等の時基督は碎けたる魂の裂け目より最も易く入り給ふ。如何に卷かれ包まれ葬られ忘れらるるとも靈魂は猶ほ存す。蓋は此の靈魂を見るなり。彼れ見るが故に我等も之を見んと欲するなり。諸君の多分記憶せらるべき一の昔譚あり。救主其の弟子を伴ひて途を行きし時死せる犬の途上に横はるに逢へり。弟子等は忌ま忌ましさの情を包み得ざりしに、救主は云へり『此犬の齒の如何に白きかを見よ』

と。基督は最とも落ちぶれたる者の內にも猶ほ人を潔むる美の痕跡、心靈と生命の萠孽を見出だしたり。

(三)

『羔之に勝つなり』。抑も如何なる思想が羔と聯關せるか。彼は如何にして人を喚び醒ますか。如何にして死人を蘇生せしめ、惡鬼を逐ひ出だすか。其の答として我等は彼の知識と愛と力と犧牲につきて讀むなり。羔の兵卒たるものは幾分か此等の諸件を再現する所なかるべからず。

先づ我等は彼の智識につきて讀まんとす。一人の强き天使大なる聲を出だして『誰か此の卷物を開き封印を解くに堪ふるや』と宣ぶるを聞き、ヨハネは天にも地にも此の卷物を開き見るに堪ふるものなきが故に痛く泣けり。然るに向に殺されたる羔進みて寶坐に座するものの右の手より卷物を取れり。其の時彼等新しき歌をうたひて曰く『爾は此の卷物を取り其の封印を解くに堪ふる者なり。そは爾嘗て殺され其の血を以て諸國諸音諸民諸族の中より我等を贖ひて神に歸せしめたり』と。此れ即ち我等が使命を有すとの意なり。我等は無智にて惑ひ誤ること多し。然れども『我が汝等に傳へし所は主より授けられたるなり』との言を佩ぶるなり。之によりて我等は一の使命を有するものとなり、斷えず起

り來る精神上の疑問に對し基督に依りて答を爲し得るなり。基督を信ずる者にあらずば之に答ふることは能はず。マーク、ルウサーフォルドはヅルーレイ、レーンの裏街に於て傳道を始めんとの志を立てたる一友人の事を語りて曰く『余は其の友人の志に同情を表し、さて其の處にて何を語らんとするかを問ひぬ。然して余はまた彼に語りぬ。余は一日聖保羅の大會堂に出席し、會堂には聽衆充滿し余は講壇に立ちて、是の如き建物にて三四千人の聽衆に思想を述ぶるの機會を得たることを眼前に描き出だして感服なりしが、忽ち又何を語るべきかに思ひ至れば余の說敎は「親しき友よ余は諸君に優りて知る所あらず如かず與に倶に此處を去らんには」と云ふ外なきことを感じたり』。然れども羔は我等をして卷物を開きて其の封印を解かしむる故に我等は恐るることなく躊躇することなく確信の響を以て語るを得べし。如何なる疑問が問はるるとも、如何なる知識が求めらるるとも、心情と良心は語ることを得る也。我が心情は二十年の昔世を去りし幼兒を忘れ得ざる也。天地の間愛兒を喪ふの不幸を償ふべきものは何ぞや。我等は永く眠りたる者の如何になりしかに就きて全く無知なるにあらず。今日高等の敎養ある人物が、大陽の輝きつつあるに小き蠟燭を點ずるに汲々たるは哀むべき事なり。我等は蠟燭を點ずる必要なく靑天白日の中にあり、亡

き幼兒は耶蘇の手に抱かれて安らかなるを知る。これ基督の我等に語りたる所にして、我等の繰り返すべき所なり。我等は又良心の疑問に應答し得るなり。其の疑問は過去に於て人は何を爲したるやの苦しき問にあらずして、今何を爲し得べきの問なり。我等は救はるゝ爲に何を爲すべきかを知れり。生涯を破碎したる狂妄の時を過去より割き、習慣の鎖を斷ちて胸の上の重負を取り去るの道を告ぐることを得るなり。一人の宣教師今や死なんとせる貧しき少女に語りて『御身は基督が御身に何を云ひ給ふかを知るか。基督は汝の罪赦さると云ひ給ふなり』と云ひしに、其の少女は勇み立ちて叫ぶやう『基督は然か云ひ給ふべきか、さらば基督の御許に私を連れ行き給はれ』と。我等は失敗せる失望せる餓えたる汚れたる生涯に、新しき發端を有せる新しき生活の消息を傳ふるとを得るなり。我等は此等の事を知る以上は之を語らざるを得ず。此等は如何なる時事問題よりも一層興味あり一層人の心を開く力あり。新聞紙は當世の所謂活人物の記事にて充ち人の好奇心を動かさんと力む。然れども玆に或る新聞紙に、人に忘れられて最も靜謙なる生活を送りたる人が死ねりとて其の人につきて確實なる記事を載するとあらば、我等は一切の時事問題を擲ちて其の記事を手にせんのみ。固より超自然的啓示あらずんば、教會は倒れんのみ。世界革新

の事業は之を科學や學校や政治家に委ねて可なり。然れども既に見たる事なり聞きたる事ある以上は之を語らざるを得ず。

羔は愛の別名なり。羔の愛は我等の愛の源泉なり。基督の愛は罪之を疲らす能はず、年月之を變ずる能はず、萬事を救ひ萬事に光榮を付し、失望と死すらも之を變へて天に入るの門と爲す。諸君が巨多の聽衆に說教するも、小き兒童を敎ふるも裏街の貧婦を訪ふも、要する所は愛なり。天使の舌を假りて說教するも愛無くば諸君を益せざるべし。唯基督の燃やす愛あらば、諸君が日々出會ふ所の忘恩、離敗、退却に堪ふることを得べけん。死せる胸に埋もれたる生命の泉の封却を解く前に諸君は其人の友たることを明にするを要す。余は一人の婦人の事を讀めり、其人は瘂を病める少女の病床の側に坐して之を看護せり、曰く『我は病める者の友なることを證せん爲に之を爲せり。病者之を信じて其後は萬事好都合に行けり』と。實際の感化を與ふるものは個人的關係なり。或る神秘家が『愛は分量に應じて返報せらる』と云ひしは眞なり。然れども愛するに足るべき事の亡くなりし時に愛するは困難にあらずや。然り、然れども何處にか愛すべきものを餘さざることなし。或る大なる文學者が一人の子が其の父を救ひたる哀れ深き一話を記したり。その老父は放蕩無頼にして罪の地獄に沈むと深

く、其子さへも今は望を失ひて之を忌み嫌ふ心起りぬ。一夜彼は泥醉して打ち臥したる父の側に坐して、如何にして再び是の如き樣なる父を愛する時あるべきかと獨り自ら疑へり。然るに偶々父の胸の邊を見れば其の衣の破れたる處を覺束なき針もて綴り合しあり。之を見て父も猶恥を隱す心を餘せるかと思ひし時此の一小事忽ち落ち果てにし親愛の潮を喚び回して心に溢るるばかりの感動きたりと云ふ。然り留針の一刺觸猶ほ赤心の血を引き出だす也。ルウサーフォルドは云へり、生活を飾るの願ひは誰しも有する所にして、墮落し果てたる人さへも其の室に花を生け爐棚に物を飾らざるは稀なれども、ヅルーレイ、レーンの陋巷に住める人間の中には此の情さへも跡を失ひ人生の盥は全く味を拔かれたるものさへありと。噫これ實に恐ろしき事なり。然れども我等は猶我等の背後に在る大愛に返ることを得る也。

いざ救主の愛を廣く展べよ
救主の愛は又我等の愛を燃やさん

殺されたる羔は又力を受くべきもの也。羔の愛は力強き愛なり。我等の愛は力弱き愛なり。最も強き愛も猶ほ弱く、最も親しき者より苦痛と罪と運命を去るの力なし。『我が子アブサロムよ我は汝に代りて死にたらんものを』との親心の

叫は幾百年を經て今日にまで徹するなり。我等は愛して其愛人を救ふ力なし。然れども羔に於ては力は是れ愛なり。我等は獨り此の戰を戰へるにあらずして我等の後には天に貯へある力あり恩惠あり。

羔は寶座の上に坐せり。彼は犧牲によりて寶坐に達したり。昇りし者は先づ地の下に降りしものにあらずや。我等も亦諸君の尊敬せらるるチョン、ウエスレーの如く、世の貴しと思ふ物を捨てて卑く降りて活ける宗敎を遺さざるべからず。近代の一思想家は云へり『犧牲が義務なりとの事を証明し得る人あらざるべし』と。然りこれ決して証明すべき事にあらず。犧牲は愛の特種なり又愛の自衛なり。犧牲大なれば勝利も亦大なり。力と喜悅も亦大なり。其の美妙、嚴肅、不思議にして其の人自身怪むばかりなる歡喜は夜の花の如く暗黑と困苦の中より香を放つなり。基督敎會の歴史は、鉄窓の裡にも斷頭臺の上にも收獲の日の歡喜あることを証明するに非ずや。諸君の捧ぐべき犧牲は大なる艱難よりも或は却て日々基督と基督が爲に死ねる人々の爲に所好と意志を犧牲にすることに存せん。犧牲のある所苦痛あるべく又苦痛なかるべからず。此れ幾くもなく終らん、然れども苦痛のある間さへ諸君は他の基督敎者の知るを得ざる基督との交りに入るを得ん。是の如き洗禮により、杯を飮むことにより、新しき基督

を發見せん、新しき基督を發見することは即ち又新しき力、敎會に發見せらるるなり。

余はビウ、ブライス、ヒウス君の長逝につき一言せずして已む能はず。彼はウエスレー派メソヂスト敎會が其力を集中せる傳道の大事業の代表者として英國と世界の前に立てり。余は彼の記憶に供けられたる尊敬愛情の辭の上に多く加ふること能はず。彼の猛烈にして且濃に又熱心なる精神は多くの人を奮起せしめて倫敦に於ける基督敎的生活の標準を高からしめ、今も猶我等の間に活動して其雄辯人を鼓吹しつつある如きは我等の知れる所なり。晩年の疲勞旣に過ぎて幸福なる安息に入りたる今に於て我等は益々良く彼を知り得るを覺ふ。今日の所謂先輩が悲むべくも之を得るを要する一大特質を彼は具有したり。彼は充ち滿ちたる信仰を抱きたり、神の光榮の希望を有したり。之が爲に我等は一層深く彼を愛したり。彼は時にには失望したり、然れども、惡の勢力は如何に跋扈するも羔は終に勝を收むることを信じたり。他人は外面の暗黑のみを見る時に於ても彼は光明の脈絡、光明の原野を望みたり。彼は確に神を信じたり、此信仰は恥を來らせざりき。我等をして我等の背後にある、基督によりて現れたる神の力と愛に於て確乎たらしめよ。『爾は勞を加へず育てざる此の一夜に生じて一

夜に亡びし瓢を惜めり。ましてや十二万餘の右左を辨へざる者と許多の家畜とある此の大なる市都府を惜まざらんや』。（柏井園君譯）

此の說教は倫敦のウエスレー派メソヂスト傳道會社の年會席上にて爲したる說教なり



雜　録

靈魂不滅說

牧師　アール、ゼー、キャンブベル

人もし死ば亦た生くべき乎（約百記十四〇十四）、我れ生れば爾曹も生ん（約翰傳十四〇十九）

舊約聖書に於ける靈魂不滅の疑問は、遂に新約聖書に於て其の解釋を得し也。古來、靈魂不滅に關して疑問を發せしもの何ぞ限らん、然れども此の章又は此の書に於て看るが如く、極めて明快適切に言明せられしことは、蓋し稀なりと謂ふべし。則ち舊約聖書に於て少しく曖昧に附せられ、若くは遲疑的語調を以て答へられし所の疑問は、新約聖書に於て遂に確乎たる定說となりし也。基督教は我儕に不死、不老の生命の存在を敎ゆ。我儕は基督の權威に依て始めて生命、靈魂不滅を得るに到りし也。基督は靈魂不滅を證據して曰く、「我れ生くれば爾曹も生ん」（約十四〇十九）「我は復生なり生命なり我を信ずる者は死るとも生べし、凡そ生きて我を信ずる者は永遠に死ることなし」（約十一〇二五、二六）と、是れ靈魂不滅に對する我儕の約束也、我儕の保証也。

（一）　靈魂不滅の希望

予は曾て人類社會の利害、又は觀察が日々に俗化せる所以を擧げて、是れ現時の人々が古昔の人々よりも、靈魂不滅に對する希望に乏しき証據也、と唱導せる人の言を聞きし事ありける。顧ふに汝等の中には、彼の大學者にして歷史家、又は思想家たるレッキー氏の言を熟知せる人々あらん、予は彼の名著「歐羅巴に於ける合理說の起原及發達」を一讀せん事を汝等に勸む、彼は人類が其の利害の勢力に驅られ、漸を逐ふて俗化しつつある所以を吾人に告ぐ。吾人は滔々たる現時の講壇が、靈魂不滅の問題に關して、

空しく沈默せる所以に鑒み、深く學ぶ所あらざる可らざる也。彼の往古の說敎家は常に侃諤の辯を鼓して、人間の行爲の恐るべき應報に就て演述せしと雖も、現時の說敎家は來世の審判、天國の慶福、若くは遺傳の恐怖等の思考より起りし所の、制裁に就ては演述することを極めて少なし、是れ予が深く慨する所にして、旣に牧師の職にをる者、又は先輩の人々も予と同一の感慨を催し、深く鑒戒する所あらんと欲するものの如し。則ち講壇が單に勸善懲惡的に流れし時は、常に道德が其の勢力を喪失せし時なる事は、歷史上の事實に徵して歷々證することを得べし。彼の節慾の如きは吾人の道德的行爲に至大の關係ありと雖も、或る世紀に於ける良心の最高の發達は、單に節慾的敎訓の命令の結果にあらずして、寧ろ人類の永遠的市民――永遠的運命――てふ觀念より起りし所の、怖るべき制裁の權威に從順たりしが爲め也。

次に予は智識上に於て現今は古昔よりも、靈魂不滅の事實に對して、確乎たる智識を有するもの極めて稀なりとの言を聞く、恐らくは其は稍や眞を得たる所の批評ならん乎。然れども此は靈魂不滅の事實が人間の思考に値せざるに非ずして、寧ろ輓近科學の法式に依て與へられし所の、心意の新なる習慣の罪なる可し。彼の科學に通達せざる世の多くの青年は、科學の法式に依て得たる判斷には、唯々として服從するも、人間が苦辛して得たる觀察、又は經驗を經て達したる結論に對しては、何等の價値をも認めざるが如し。尙ほ之を切言せば、汝等は歸納的法式に據るに非ざれば、何物をも證據することを能はずと思惟すと雖も、之よりも尙ほ優りて有力なる、他の證據の存する事を知らざる也。予は本論に入るに先だち乞ふ少しく之を說かん、我儕は歸納的法式に據りて得たる證據よりも、更に有力なる他の證據の存在せる事を知らざる可らざる

也。而も汝等の認めて最大の證據と思惟する所の、其の謂ゆる歸納的法式を以てするも、尙ほ一物をも絕對的に證據することを能はざる所以をも知らざる可らざる也。例へば汝等が孜々として勞作せる日常の事物、汝等が自己を犧牲として奮鬪せる對象、若くは汝等が至誠と元氣とを傾盡して經營せる目的は、單に汝等の歸納的證據の結果に非ずして、寧ろ神感の結果たる也。人生に於ける最上の事物は、皆悉く汝の理性に適合せしもの耳にあらずして、寧ろ汝が最高の事物と感じ、最高の事物と認知し、最高の事物と觀念せし所のものなる可し。

次に予は現今は靈魂不滅に對する希望の、全く消滅の時代なりとの言を聞く、蓋し此は靈魂不滅に對する現代の希望が、過去よりも比較的に薄弱なりとの意味なるべし。予は曾て墳墓の彼方に於ける人格的存在を望まざる人々に邂逅せしとありける。顧ふに彼等が這般の感情と狀態とに陷りしは、蓋し數個の原因に依て然るならん。而して其の原因の一は確かに心意の倦厭なる可し。按ずるに人生の秘密の感覺の爾く大なる事、幻影の感覺の爾く怖ろしき事、高雅なる行爲の結果の爾く小なる事等は、世人をして數ば來世に就て失望せしめ、而も預期なく希望なくして、漫然その大死の境に臨ましむる所以ならん。

來世に對して這般の膚淺なる思想を抱けるもの、豈に二三者のみに限らん乎。顧ふに彼等は現時多數の意見を代表せる者なる可し。予は曾て一市人の來世に就て語れるを聞きしに、彼れ一友に告げて曰く「予は汝が語らんと欲する所の凡てを知る、予は曾て汝の如く日曜學校へ往き、又は教會の爲めに働き、人間の永遠的運命に就ては、略ぼ汝と說を同ふせしことありと雖も、今に至りて之を考ふるに人間の永遠的運命の存在の如きは、一片の空談にあらざれば痴人の迷

信なる可し、若し這般の運命ありと假定するも、予は決して之を求めざる可く、這般の運命は予に對して無用なる可し、予は勞苦して纔に一生を過せしもの、予の理想は單に數言を以て之を盡すことを得ん、則ち予の希望は五人の愛兒をして各自滿足ならしめ、而して速かに死の來らん事に外ならざる也、予は毫も他界に對して俟望する所なし」と。患難は世人をして數ば斯る狀態に陷らしむ。予は暗憺たる夜色が速かに彼等を掩ふて、其の諸の心痛と悲哀とを墳墓の沈默の裡に誘ひ去る所の、夕の來るを悅ぶ人々の少なからざる事を知る。

尙ほ其の他に何物を以てするも、容易に其の緊要と意義とに比することを能はざる、靈魂不滅の興味ありて存する也。多數の人々は只管に生きん事を是れ望む。彼の世を厭ふて死せん事を欲する人々と雖も、若し彼等の確信する所が眞にして、果して惡ならざる事を確むるならば、彼等は直に其の觀察と希望と感情と願望とを變化するに到らん。世には愛する者に死別し、爲めに人生の無味を嘆ずる人あるを看る。茲に於てか知る、今や汝等の興味の多くは、他界に依て繋がるる事を。若し死が汝等の家庭を訪ふ事あらば、汝等は之を以て未だ曾て經驗せざる所の、最も殘酷なる災難と感ずるならん。然りと雖も若し汝が其の死者と再會する事ありと知らば、汝等は靈魂不滅に就て切に憂ふること莫く、愛は決して其の愛する者を喪はざる事を考へて、更に無限の愉快を感ずるに到らん。

(二) 靈魂不滅の信仰の基礎

「人もし死ば亦た生くべき乎」との約百(ヨブ)の疑問は、古來人間が常に發する所の疑問ぞかし。予は這般の疑問に對しては、其の答辯に躊躇せざる可し。則ち彼は決して死する事なしとの、單純なる理由を以て之に答ふるに足らん。吾人は斯く答ふる所の最高の權威(オーソリチー)を有する也。則ち不

死の生命は耶蘇基督に依て與へられ、死と陰府との鍵を有する所の宇宙の主宰者は、人間を救はんが爲めに世に降りし所の耶蘇基督にして、人間の運命は耶蘇基督の生命に堅く繫がるるが故に、我儕は耶蘇基督に隷屬し、彼を以て萬事の樞紐と爲し、自己は勿論、自己の愛する者に對する希望をも、皆悉く彼に向ふて輻湊せしめざる可らざる也。果して然らば我儕の希望と預期とは、耶蘇基督に對する我儕の親近に依て完ふせらる可し。「我れ生くれば爾曹も生くべし」。今朝予は時刻の移る事に頓着なく、敢て汝等に警告する所あらんと欲する也。そは何ぞやと謂ふに、來るべき宗教上の根本的復興は、神學の方面より來らずして、寧ろ科學の方面より來ると是れ。蓋し神學は空理空論に近く、經驗が先づ前に來りて、神學は漸く其の後に從ふて來る而已。予は宗教の大事實の復興が、從來宗教の敵たりし所の科學の方面より來れる時は、則ち其の時こそ宗教上の黎明なる事を堅く信じて疑はざる也。殊に其の時に到らば、我儕の智識は我儕の經驗と相調和し、我儕の最高なる大望（アスピレーション）は、我儕の生涯の事實の中に、其の滿足を發見するに到らん。

現今は科學の大家にして、而かも宗教に同情を表する名士の、世に稀ならざるを看る。彼のバーミングハム大學の總長サー、オリバー、ロッジ氏の如きは其の一人に數ふる事を得ん。彼は曾て世界魂 "World-Soul" の假題に就き、自己の意見を發表せし事ありけるが、其の大体は吾人の意見と趨舍を相同ふせるが如し。予は此頃ろ故エフ、ダブリユウ、エイチ、マイヤ氏の新著「人格及死后の生存」の第二卷を讀みしに、其の一節に曰く、

基督教は確乎たる事實の上に、其の基礎を置くが故に、夫等の事實は其の開祖の超人間的の品性、並に死に對する彼の勝利、人

間の眞個の市民權の存する所の、心靈界の存在と感化とを證據して、一點の曖昧なし。

次に其の二節に曰く、

予は敢て斷言せん、此の新證據の結果に依て、此の世紀の諸の識者は、遂に基督の復活を信ずるならんと雖も、若し彼等にして此の新證據を忘るるならば、此の世紀の諸の識者は、遂に之を信ずること能はざるに到らん。

此の記事の第二節は少しく妥當を欠くの嫌あれども、第一節は予の全く信じて疑はざる所也。

次に實驗の基礎の方面、又は科學の宗教に對する友情的興味の方面よりして、我儕は絶大なる二個の思想を得る也。則ち其の一は世界は心靈的なりとの思想也。予は夫に依て果して何を意味する乎。予は曖昧なる名稱を使用し、又は之を放棄するの必要なし。何となれば世界は物質にも心意にも非ずして、兩者よりも偉大なる或る者なれば也。若し我儕が萬有の意義、而も其の究意の意義を悟ることを得ば、我儕は萬有が道德上に直接の關係を有する事、他者に對する我儕の關係、又は萬物の靈に對する我儕の關係を發見する事を得ん。若し萬物が心靈にして、萬物が靈魂なりしならば、彼のサー、オリバー、ロッジ其の人の魂魄は、我儕が容易に棄却し、又は分離すると能はざる底の、倫理的緣故を有する乎、果して然らば其の理由如何。我儕は基督信徒の經驗に照して、容易に之に答ふる事を得べし、則ち耶蘇基督は萬物の主にして、世界の魂魄なる事は、彼がガリラヤの山邊、又はエルサレムの高樓に於て、親しく語りし所也。「我れ生れば爾曹も生ん」。

第二は事物の全き計畫に於ける、究意的實体は人格なりとの思想也。則ち汝等人間は萬有の首也、萬有それ自身也。耶蘇基督が數ば語り給ひしが如く、諸の靈魂は無限の價値を有するが故

に、汝等は這般の理由に依て永遠的運命の價値を有する也。吾がパーカー博士の語に曰く「人間は靈魂にして、彼は肉体を有す」と。實に肉体は靈魂の言語に過ぎざる也。言語は其の性質として半ば顯はれ、半ば靈魂の內に潛む。況んや生命は制限の中に住し、生命は關係に依て價値を有する事を忘るゝ勿れ。汝は孤立して最上の生涯、若くは最高の生涯を營むと能はざる可し。何となれば生活に意義を與ふる者は愛なれば也。若し人間の品性に幾分にでも神の愛を加味せしならば、其の品性は忽ち燦爛たる光彩を發し、其他の然らざる者は愚昧、卑陋、醜穢にして比するに足らざるならん。世界に於ける聖者の證據は、萬事に處して神と俱に生活する所の生涯也、蓋し神と俱に生活すと謂ふと雖も、彼の食ふ事や飲む事や眠る事を指すに非ずして、聖靈に依れる正義や平和や喜樂をこそ謂ふなれ。「永生とは唯獨の眞神なる爾と其の遣ししイエス、キリストを知る是れ也」（約十七〇三）。基督が來世に就て語り給ひし事は、極めて稀なりと雖も、彼が稀に語り給ひし所の諸の言葉が、洵に適功にして半點の疑をも插むと能はざる所以に、深く注意すべし。曰く「我が父の家には第宅おほし」（約十四〇二）。茲に謂ゆる「第宅」“A Mansion,, てふ言葉は、現今にては巨大なる事物を指すと雖も、ゼームス王の聖書飜譯の時代には然らざりし也。「第宅」“A Mansion,, とは「住居」“A Remainsion,, 即ち住居する場所、又は駐留する場所てふ意味を保つ。「我が父の家庭には休息する場所おほし、若し然らずば我れ預て爾曹に之を告ぐべき也、我れ爾曹の爲めに所を備に往く」（約十四〇二）。世には靈魂不滅に就き、毫も疑を挿めざる所の、一流の人ある事を看る、彼こそは實に聖者也、神に近き人也、天國の保証者也。汝等は彼の蘇格蘭土の老婆の譚を記臆せるならん、主に對する彼女の愛は極め

て濃に、彼女の善心は極めて確なりしと雖も、牧師は彼女を試錬せんが爲めに、「然しながらジエンニー女よ、若し汝の死后に主が汝を陰府に墮すことありと想像せば如何」と尋ねしときに、彼女は悠然として温和の顔色に微笑を湛へつ、「諾、若し基督が妾を陰府に墮さしめ給ふとも、妾に於ては何かあらん、然れども妾をして陰府に墮さしめ給ふが如き事あらば、彼こそ妾よりも喪ふところ寧ろ多からん」と語りしとぞ。實に善良(グードネス)は神に對して祝福を要請するの權利を有する也。善良は靈魂不滅に對する辯証論なりと謂ふ可き也。聖者たれ、然らば汝は煉瓦や膠泥や、石や石灰や、海や空の此の世界よりも、尙ほ遙かに生活すべき價値ある世界を發見せん。之を切言せば汝が神と倶に生活せば、そは汝が永生の約束たる也「我れ生くれば爾曹も生ん」。耶蘇の權威に於ては生命は永久に一個にして、死は連續的生命の一幕たるに過ぎざる也。宇宙の靈たる耶蘇は、汝等を司配するの權を持し給ふ。而して死が來れる時には、彼は其のものの人格を喚起する所の使者たる也。「愛する者よ我儕いま神の子たり後いかん未だ露れず」、或はそは「其の現れん時には必ず神に肖んことを知るそは我儕その眞狀を見るべければ也」(約壹書三〇二)。

人格の不滅は其の生涯を愉快、叉は善良ならしめし所の諸の關係の不滅、即ち記臆や、思想や、感情や、願望や、愛情の不滅を意味する也。人ありて曰く「我儕は死人と再會する事あり乎」と、然矣、汝は彼等と再會する事を得ん、彼等は耶蘇の腕に抱かれて安全なれば、汝等は看へざる所に於て凡て彼等と邂逅する事を得べし。顧ふに或る人の一生を襲ふ所の禍難の阨、世人の師表と仰げる偉人の死の如きは、人々をして最高の市民たらしめんがための神の召ならん。世には死が人生の意義を奪ひ去りしが如く、失

望落胆せる人々敢て些少ならざるが如し。然れども夫等の事を感ずる勿れ、汝等の愛情をして最上の事物に輸すべし。基督をして汝等の保護人たらしめ、而して毫も彼に就て疑念を挿む勿れ。彼の天國に往きし所の汝等の小兒は、汝等よりも智者にして、彼は遂に汝等の教師たらん。死者は決して我儕を忘れざる也、若し彼の音聲が墳墓より響かば、彼は聲を擧げて勝利者にして王たる耶蘇は、諸の心靈的一致の約束、又は保証者なる事を叫ぶならん。實に彼を信任する事、彼に諸を托する事、彼の目前に在るが如く生活する事、彼に報恩の禮を爲す事は、夫れと同時に我儕を高むる事たる也。實に彼は死の淵を掩ふ所の黃金の橋とこそ謂ふべけれ。

予は曾て一小册子を繙き、其の中に吾人の信仰を堅固ならしむる所の、一の美麗なる適例の掲げられし事を讀みける。誠に其の梗概を語らんに、或る所に一小女ありて每夜臥床に就くの前、彼女は父に向ひて「左様なら、お寢み遊ばせ、亦た明朝お眼に掛ります」“Good-night; I shall see you again in the morning.” との挨拶を述ぶるを以て例としつ、然るに一朝死の輝ける天使が來りて、彼女を天國へと呼び迎へし時、彼女は父を病床に招き寄せ、其の細き腕を父の頸に捲き、呼吸も苦しげに囁きて曰く、「左様なら、お父さま、妾は明朝またお眼に掛ります」“Good-night; dear father; I shall see you in the morning.” と。彼女は無心の兒童が最高の事物に就き常に眞實なるが如く、極めて眞實なりし也。「悲哀は夜と共に消へ失せ、喜悦は晨と共に來らん」。

現今の催眠術

（高等批評を諷刺す）

監督　チヤドヰック

トン／＼戸を叩くものがあるので、主人なる教

授は『御入り』と言ふと、入つて來たのは身体の小作りな一個の婦人。服裝などは極めて質素である、然かしそれも貧乏の爲ではなく、當人の好から出ると思はれた。彼女は兼て案内知つて居るかの樣にスベリ込んだが、挨拶もせずに腰を掛けた。

私は多少變に思はざるを得なかつた。それは彼女が此の室內に多數の人が居るのを知らず顏に席に着いた爲でもなく、又た彼女の眼中に何物も見へない樣に思はれた爲でもない。全く彼女の眼が我等以外の何物かを非常に熱中して見つめて居るからである。

心理學者に言はせると、斯ういふ代物が催眠術をかけるに最上の相手だそうな。さて彼女は暫くすると、忽然目の醒めた人の樣に、今迄見つめて居つた方から振向ひて敎授の顏を見た。先程から時機の來るのを待つて居つた敎授は言つた。『モー始めても宜いか』。すると彼女は極めて微な身振で承知の意を表した。そこで敎授が彼女の頭の上で二三度手を振廻すと、彼女の眼は閉ぢ、その体は徐に椅子の中へハマリ込んだ。

『今何處に居る』と敎授は問ふた。彼女は低語した『今シドニーに居ります。此の市は大きな市で、宮殿もあれば公園もある。それに此處は當時世界の中心で、時は正に紀元後四千年である』。二三人は呌んだ『旨くかかつたぞ』。然かし敎授は少し苦笑しながら問を進めた『誰れか名の高い人が見へないか』。少し聲を張上げて答へた『見へますとも。今四十恰好の顏の蒼い体の瘠せた人が、立派な建物の廊下に入つて來ました。此處は世界で最も大きい大學校です。書生は皆な丁寧に會釋をしてその後について行きます』。敎授は問ふた『御前はその名を聞いたことがあるか』。彼女は答へた『ありますとも、スミスといふ人です』。二三の人は又た笑つた。そして敎授は手を擧げて『御前もついて行け』と命

じた。
『ヤア實に立派な廣い講堂だこと。熱心な聽講者は堂に溢れて居ます。サア先生は講壇に上られました、今手を擧げて話し始めらるる所です。此の講堂はドウいふ建て方か知らぬが、極く低い聲でも堂中に滿ち渡つて而かも少しも反響がない。サア御聽きなさい。諸君……』不思議ではありませんか、モー眠むさうな女の聲でなくて、力のある男の聲に變つた。これからが今より二千九十八年後にある講義なんだ。
『諸君、私共は英國に關する古い物語の研究に再び取り掛ります。私は前週に、ナポレオンの死後久しからずして、ホエートレーといふ鋭利なる記者が、彼が果して歴史上の人物であるか但しは神話の主人公であるかといふ疑問を起したといふ事實を申上げました。此の批評家は教會の大監督であつたとも書いてあれば、又た有名な論理學の著者だともいつてあります。何だか一寸見ると矛盾する樣にも思はれます。（譯者按ずるにホエートレーなる人は英國教會の大監督にして、書を著して、耶蘇が架空の人物ならばナポレオンも然りとて其論証をした人であると思ふ）我々は彼れ程に懷疑の底に落ちて行くに及びません。大凡確かな所で滿足しなければなりません。兎に角此の恐るべき軍人を中心として種々の神話が結晶したのです、彼を當時の歐洲に於ける新運動即ち革命の化身にしようとしたのです。此の傾向はカーライルが彼に與へた『民衆政治の武裝せる軍人』といふ語句の中にも見へます、その癖彼は一生涯の間佛國の民衆政治を蹈付けましたけれども。彼に關する神話の一即ち半嶋戰爭の神話に關して、私は段々その起源を諸君に説明致しませう。
『然かし、私はその前に是非言つて置くことがあります。外でありません、ヰクトリア時代に屬すと稱せらるる文學が、その實皆な一時代のものでなくて、長い歳月の間に渉つて居るものである、その上後世の人の手が大に原形を破壞

して居るといふことであります。』（その時に我等はシドニーの大學に於ける聽衆のザハ〱する音や喝采する聲を聞き取ることが出來た。先生は落付き拂つてヅン〱進んだ。）

『私は吾人の貴重なる寶物の一である、過去の遺物を斯ういふ風に取扱ふに付ては、どれだけの責任があるかといふことは十分に承知して居ます。然かし私は二つの事を確信致します。第一、是等の文學の起源に關する説などがどうなろうと、その文學の精神は依然として變らぬことです。第二、眞理はそれに關する説よりも數層大切であつて、眞理は自ら眞理たることを証明することです。されば、私は先づ十分の確信を以て言語上の証據に訴へます。

一例としてマコーレー卿が書いたとしてある歴史を取りませう、そうして同名異人が二人あつたことを記憶しなければなりません。一人は慈善家でヰルバーフォースの仲間であつて、人民の日常生活に對して非常の同情を持つて居つた人です。他の一人は彼の息子だと言はれますが、較帝國主義の臭味を帶びた政治家です。彼の演説は英國の光榮を叫んで居ります。今彼の歴史を聞いて御覽なさい。或る章と或る章とは、その事柄に於ても、その崇拜さるる人に於ても、引用せる文句の出處に於ても、殊に大切なるは使用さるる語彙に於ても、全く違つて居ます。甲の章にて幾十度となく現はれて居る語が、乙の章には一度も見へない。一方では、統計、農事、商業、貨幣、内治の改良、法律の改正、その他ヂエフレース、ソーマース、モンテーン、ニウトンの名などが見へる。そうして前にも申した通り、一人のマコーレーは慈善家であつたそうです。然かし他の方では、戰爭、包圍、城堡、分捕、進軍、退却、それにフランス、ホランドオーストリア、サースフィルドとショームベルグ、マールボローとルクセンバーグ、ヂエ

ーム、ルーヰス、ヰリアム、法皇などの名が見へます。而して前にも申した通り、他のマコーレーは帝國主義の臭味を帶びた政治家でした。その事柄に於ても語彙に於ても丸で違つたものが――JとEとが違ふよりも甚しい――（譯者云、Jとは舊約書中のエホバ古典にてEはエロヒム古典なり）石を入れた車と煉瓦を積んで車と一所へブチマケた樣に錯綜して居る。此の中で私は疑もなく同名異人の二人あることを認むるのです。それに舊約書中のQとRの如きものが多少見へる。私は此の中に、七監督吟味の條下にて、マッキントンの歷史に見ゆると同一の文句を發見致しました。想ふに、兩人とも事實の目擊者たるハリファックスから引用したものらしい。それで私の近日出版する書では、此の部分にHの記號を附けて置きました。それに又たどちらのマコーレーも僅に書くとが出來ぬ文句があります。奴隷癈止家なる父も又た之に賛成なる子も、迚も奴隷癈止を描ける第一章中の文字を書くことが出來ません。此處には、著者の時代に盛に行はれたる勇しい奴隷癈止運動のことには一言も觸れてない、これで見ると奴隷癈止はチューードル朝の時代で全く濟んだ樣に思はれる。コー書いてあります『奴隷及び之に伴ふ諸種の弊害は急にその跡を絕てり。この變化は腕力や法律に由りて來りたるに非ず。道德上の原因は靜寂に、先づノルマン人とサクソン人との墻壁を撤去し、次に自由民と奴隷との區別を破却し了れり。』この通りです。

次にヲルヅヲルスの例を擧げませう。高尚な『靈魂不死の歌』と拙劣な『致の歌』との差を考へて御覽さい。殊に『致』といふ文字を注意なさい。そうして監督にして讃美歌作者なる別人のヲルヅヲルスがあつたといふ傳說があるですが、之には深長な意味がないでせうか。又た彼の詩集の中には、丸で彼に同情のない人の手に由つて改竄された痕跡があります。たとへば、彼は或

る詩の中に、雲雀の事を『高翔すれども漫歩せぬ賢哲に似たり』といひて、又た直に『空中の旅客なり』といひます。然かし漫歩せぬ旅客はありますまい。彼の如き天才がこんな事をいふ筈はありません。

テニソンの流麗なる詩体と、ブラウニングの粗豪なる詩体とが、英文學史の別時代に屬することは、到底疑はれません。個人的性情が違ふからだといふ人もありませう。それも宜しい。然かしその差の非常なることと迚も同時代のものと見ることは出來ない。然かし私はそれを言ひますまい。私はモット深い理由を有つて居る。それは啻に詩歌の方面にのみ限つたことでない、散文の方面にも一層明白な現象がある。同時代に屬するとしてあるけれども、ラスキンの流麗とカーライルの粗豪とは同日の話ではありません。ラスキンとテニスンは一時代に屬し。カーライルとブラウニングは他の時代に屬するのです。エリオットとメレデスの比較もその通りです。且つカーライル文章の粗野でチュートン的なると、デスレリーの小説の浮華でフランス風なるとは、迚も同時代の感化の結果とは見做されません。又たこの小説は政治家なるデスレリーの作とは思はれません。彼の演説は仲々直截で針があつて男らしい。又た同じヰクトリア時代の文學者にランドルといふ詩人があるが、キーツの生るる一年前、シェレーが三歳、バイロンが十歳の時に傑作の詩巻を出版し、而してキーツの死後四十三年、シェレーの死後四十一年、バイロンの死後三十九年に又た傑作の詩巻を出版し、ジョンソンと時を齊ふすること九年、スヰンバーンと時を齊ふすること廿七年であつたとしてあります。（譯者云、ランドルは實際一七七五年に生れ一八六四年に死す享年九十歲）諸君、斯んな事は到底信ぜられません。此の通り、同じくヰクトリア時代の文學と稱せられても、その實一時代のものでなく丸で違つ

た時期に屬するものであるといふ事を承知した後に、一寸の時間ではあるけれども、始に御約束した所謂『半嶋戰爭の歷史』に付て、聊私の卑見を述べませう。

譯者云、これより講演者は、半嶋戰爭（ナポレオンが西班牙半嶋を我物にせんとて出軍し、英軍がウェリントンの下に之を妨害せし戰爭）が、眞實の歷史に非ずして寓意ある物語なることを論ずれども、當時の歷史に通ぜざるものには、解し難く且つ興味なし。故に此の部分を省略す。

斯くて講演者が、半嶋戰爭の歷史が到底信せられぬ事實を以て滿たさるる事、然かし此の物語が唯だ架空の作話ではなく、深き意味のある寓意譚なること、佛國は過激なる革命を代表し、西班牙は頑固なる保守を代表し、英國は温和なる漸進主義を代表するので、此の三國が相干涉し戰爭し勝敗することを描いて、つまり三個の主義が相接觸し衝突し消長する所以を示したることを述べ、而して之には幾らも証據があると、一々証據を擧げて滔々と演述し了つた後は、暫しシンとして居つたが、その中に遠くの方で拍手する音、聽衆の解散する響を聞く樣な思がした。それと同時に我等は一齊に例の婦人の席に目をつけたが、不思議なるかな、彼女は最早その席に居らなんだ。

茶菓も出たけれど、我等は一同に席を立つて、徐に退散した。私の道連れとなつた人は、天才のある大膽な批評家で、普通『進步的』と呼ばるるエンサイクロペデアの著者であつた。そうしてその進步的と呼ばるる理由は、是迄人々が信仰し來つたことを否定するからである。（譯者云、こは高等批評家の手になれる聖書のエンサイクロペデアを暗に指せるならん）暫くの間二人とも無言で步いて居つたが、やがてその先生が口を開いた『私の思ふ所を申せば、あの婦人は自分が催眠術にかかつて居る樣に我々に思はせ

て、その實我々を催眠術にかけたのだ。そうして彼女の言つたことに、何も取り留めたことはない。實につまらん話じや。吾輩も若しやつて見る積なら、あれよりもヅット旨く說を立てて見せる』。私は極く眞面目に答へた『そうでせうとも、貴君の事なら』。そうして何の譯やら、その先生は私が反對でもしたかの樣に苦笑した。

私の考では、我々は丸で欺されたのだ。我々の主人なる敎授は、科學的批評法に對して自由な意見を有して居る人である。偶然の暗合もあればあるものだ、その晩の新聞を見ると四月一日の日附であつた。(四月一日は人々相互に戯に欺き合ふ日なりと稱せらる)

名士の愛誦せる聖語(三)

英國聯合浸禮敎會の會長にしてバプテスト雜誌の主筆たる、牧師クリッフォード曰く、「予は撰擇すること能はざる底の、多くの愛誦せる聖語を有すれども、先づ第一は哥林多後書五章十九節、(神、キリストに在て世を己と和がしめ其罪を之に負せず且つ和がしむる言を我儕に委たまへり)との聖句也、此の句は一方には神の顯現の哲學に關する最上の記事なると共に、他方には神と人との和解の宗敎を描寫して毫も餘蘊なし、第二は羅馬書八章廿八節、(凡の事は神の旨に依て召れたる神を愛する者の爲に悉く働きて益を爲すを我儕は知れり)との聖句也、予は之に加ふるに詩の三十一篇十九節、(汝を怖るる者の爲めに貯へ、汝に依賴む者の爲めに人の子の前にて施し玉へる汝の慈愛は大なるかな)との聖句を以てせんと欲す、何となれば此は予の樂天主義の源泉なれば也、蓋し予は以上の聖語に優りて尙ほ約翰傳三章十六節、(それ神はその生たまへる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信ずる者に亡ること無くして永生を受しめんが爲なり)との耶蘇の大敎訓を愛誦し

て措かざる也」。

倫敦シチー、テンプルの故牧師パーカーの後繼者にして英國屈指の青年說敎者なる、牧師アール、ゼー、キャンプベル曰く、「特に予に聖き聯想を與ふる所のものは、以賽亞書四十一章十節、（怖るゝ勿れ我れ汝と共に在り驚く勿れ我れ汝の神なり、我れ汝を强くせん誠に汝を助けん誠に我が義しき右手汝を支へん）との聖語也」。

ローチエスターの副監牧師ホールは、彼のファーラー博士と同じく、約翰壹書四章八節（神は則ち愛なれば也）との聖句を愛誦すと謂ふ。

牧師エス、ケー、ホッキング曰く、「予の愛誦せる聖語は左の如し、以賽亞四十三章二節（汝ぢ水中を過る時は我れ共にあらん河の中を過る時は水なんぢの上に溢れじ、汝ぢ火中を往くとき焚るゝことなく火焰も亦た燃つかじ）、約翰傳十四章一節、廿七節（汝等心に憂ること勿れ神を信じ亦われを信ずべし、我れ平安を汝等に遺す我が平安を汝等に予ふ我が予ふる所は世の予る所の如きに非ず汝等心に憂る勿れ又懼るゝ勿れ）」。

著名の閨秀小說家マックスウエル夫人曰く、「僅かに愛誦せる聖語の一句のみを擧ぐる事は頗る難し、何となれば聖書は偉大なる思想、繪の如く詩の如き華麗なる想像、幷に人生の荊棘に踏み迷へる人々への希望、慰籍の言を以て滿たさるれば也、然れども妾は强て其の中の二三を撰ばん、曰く以賽亞廿五章四節（そは汝ぢ弱きものの保砦となり乏しき者の難の時の保砦となり雨風の吹き來りて垣を撲つ如く暴なる者の荒きたる時の避所となり熱を避くる蔭となり給へり）、約翰一書一章五節（神は光なり少の暗處なし）、同二章十五節（この世あるひは此世にある物を愛する勿れ）これ也」。

牧師ゼー、モンロウ、ギブソン曰く、「數ば予の心に往來せし所の聖語は、哥林多后書十二章

九節（我が恩なんぢに足り、蓋は我が能は弱に於て全なれば也、この故に寧ろ欣びて自己の弱に誇らん）との聖句也、此の前節は日々の糧にして、後節は異常なる時の慰籍たる也、次に他人を慰籍せんが爲めに、予が數ば使用せし所は、以賽亞五十章十節（汝等の中ヱホバを畏れ其の僕の聲を聞く者は誰ぞや暗を歩みて光を得ざるともヱホバの名をたのみ己れの神にたよれ）との聖語也」。

名聲高き著述家並に慈善家にして近代の女傑たるヱフ、ピー、コッブ女史曰く「愛誦せる聖語を擧げよとの汝の依囑に對して、妾は躊躇する事なく米迦六章八節を撰ばんと欲する也、曰く（人よ彼さきに善事の何なるを汝に告たりヱホバの汝に要めたまふ事は唯だ正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神と共に歩む事ならずや）、之と殆ど同一の思想は以賽亞一章十一節乃至十七節に、預言者イザヤの深長にして華麗なる雄辯を以て吐露せらるるを看る、蓋し諸の宗教と倫理とは米迦の此の一句の中に描寫せられて些の遺憾なし、實に此の一句の如きは彼等が義務又は慈善に對して與へし所の完全なる定義、或は彼等が犧牲又は聖禮の如き祭禮的、妖術的儀式に依れる神力の祭司的崇拜を以て、眞個の敬神と思惟せる贖罪的思想の發達なりと謂ふべし、尙ほ之を切言せば彼等は奴隸的宗教より孝子的宗教に、超自然的勢力の諂諛より超人間的善德の崇敬に、進歩せし所の過渡の時期を畫せし者也」。

牧師フリーマンテル曰く「最も多く予を益せし所の聖語は、約翰壹書三章二節、三節（愛する者よ我儕いま神の子たり後いかん未だ露れず其現れん時には必ず神に肖んことを知るそは我儕その眞狀を見るべければ也、凡そ神に由る此望を懷く者は其潔が如く自己を潔くす）との聖句也」。

牧師ジョン、ワットソン博士、雅號アイヤン、マクラレン曰く、「予は汝の清囑に報ゆること能はざるを悲む、何となれば予は此の一句のみを特に愛誦すと云ふが如き、特殊なる聖語を有せざれば也」。

著名なる閨秀小説家サラ、ヅードニー女史曰く、「妾の最も多く愛誦せしは、羅馬書六章廿三節（罪の價は死なり神の賜は我儕の主イエス、キリストに於て賜はる永生なり」との聖句にして、妾は特に此の聖語の後半を撰んで、我が愛する亡き母の墓碑に鏤刻しつ、次に數ば妾に光明を與ふるは約翰傳十七章にして、深く妾を感動せしめけるは希伯來書十一章也」。

牧師ゼームス、ストカー曰く、「予の愛誦せるは提摩太后書一章十二節、（蓋われ我が信ずる者を知り且つ我が彼に託したる者を彼らの日に至るまで守ることを爲し得るを信ずれば也）との聖句也、予は此の一句が極めて單純に、極めて完全に福音を説明せるが故に之を好む、實に信仰の目的は意見にあらずして、我が信ずる者は人格者たらざる可らざる也、次に我が彼に託したる者とは、由來、彼が我に託したる者と解釋すべし、即ち我が靈魂又は人格的利害は勿論、我が職務も事業も皆悉く彼が我儕に託せし者なれば、我儕は凡て此等の者を彼の手に返却せざる可らざる也、尙ほ之を換言せば彼の兒童が自己の注意の下に置くこと能はざる底の、大にして高價なる物を慈母の手に託するが如く、我儕は彼が我儕に託せし物の、一として貴重ならざるもの無き事を感ずるが故に、凡て之を安然なる彼の手に託せざる可らざる也」。

英國政界の名士ブラッセイ公は、躬ら愛誦せる聖語、又は愛吟せる讃美歌を輯め、題して「日用抄」と呼べる冊子を寄せられければ、今その中の二三を抄錄して左に掲げん、曰く馬可傳十二章三十節三十一節、曰く耶利米亞書九章廿四

節、曰く路加傳六章三十五節三十六節、曰く以賽亞書四十章三十一節、六十三章九節、曰く默示錄七章十四節乃至十七節。

博士マックス、ノルドゥ曰く、「聖書は予が髫齔の頃よりの好伴侶也、而して其の効驗は我が一生を通じて千殊萬態なりしと雖も、予は決して之を讀むことを怠らざりし也、彼の約百記や、傳道の書や、詩篇は予の最も愛讀せし所、殊に詩の九十篇は人生の羸弱を描寫して實に巧妙を極む、予は多數の人々が詩篇を愛讀し、數ば之を引用せる事を看て、此等の聖語のいよいよ尊きを知る」。

大監督ギボンの愛誦せるは、哥林多前書十三章一節(假令われ諸の人の言および天使の言を語るとも若し愛なくば鳴銅や響鈸の如し)との聖語也。

詩人サー、エドウィン、アーノルドの愛誦せるは、路加傳十八章一節(人の恒に祈禱して沮喪すまじき爲に)との聖語也。

牧師ジー、シー、ローリーマー曰く、「予の愛誦せるは約翰傳十四章、詩の二十三篇也」。

大說敎家故スポルジョンの後繼者たる牧師アーサー、チー、ピヤソンは愛誦せる聖語を記して答ふる代りに、一枚の銀行紙幣を封入して送りしかば、把て之を披きしに其の劵面には、腓立比書四章十九節(夫れ我が神は己の富に從ひてキリスト、イエスに依り榮光を以て汝等の乏きところを補ひ給はん)との聖語の彫刻せらるるを看つ。

共勵會の創立者フランシス、イー、クラーク曰く、「予は諸の青年が約翰傳十四章、十五章を學ばん事を勸む、何となれば此の兩章には基督の心に於ける最も深き事柄を記載しあるが故に、之を反覆熟讀して更に默想を凝せば、汝の心靈上に稗益を與ふること僅少ならざる可し」。



福音叢誌第八拾六號目次

論説

説教

雜録

FUKUIN SŌSHI.

NUMBER 86.

JULY, 1903.

CONTENTS.

福音叢誌第八拾六號　明治三十六年七月十日

論説

基督の教訓（二）

神學博士　エチ、ビー、スヰート

さて吾人が尙一歩を進めて、詳細に主の教訓を研究せんとするに方り、その方法一にして足らず。四福音書を個別に取りて、そが証する所を順次に論究し得べし、是れルドルフ、スティアが六十年以前に試みし所なり。又たヴェントに倣ひて、主の教訓全体を統一的組織的に看取し得べし。然れども、此の論文に於ては、斯る簡短なる研究に最も適當すと思はるる方法を用ゆるの外なし。余は先づ福音記者が用ゐたる重なる材源を一々攻究し、次にその結果を比較し構成せんと思ふなり。

第一に余は、吾人が有する最始の福音書の大體と、他の共觀福音書の記事的部分の大半を形成する古傳より始むべし。（譯者云、最始の福音書とは馬可傳を指し他の共觀福音書とは馬太傳路加傳を指すなり）

馬可の古傳には、長き説話なく重要なる譬喩なし。主が説教し給へることは屢

記さると雖も、（馬可傳第一章十四節廿一節卅八節、第二章十三節、第四章一節卅三節、第六章二節六節、第七章十四節、第十一章十八節、第十二章一節卅五節卅八節）而かも主の教訓の記さるゝ者は、大抵一時の片言若くは短かき説話たるに過ぎず。稍長き者は、播種者の譬（第四章三節より九節）農夫の譬（第十二章一節より十一節）及び第十三章にある默示的教訓なり。斯く此の古傳に主の教訓の少きは、『使徒馬可は使徒彼得の説教を筆記せり』てふイレニアスの言に符合す。疑もなく此の最初の説教家は、重に主の行とその簡短なる言のみを傳へて、而して主の説教を傳ふることは、之を他の教師に任せたることならん。

然れども、『彼得の説教錄』に見出さるべき主の教訓は、その數少くその言短きが爲にその價値を失ふべくもあらず。此の使徒は疑もなく、おのが記憶に最も深き印象を與へたる、若くはおのが最も重要なりと思惟せる主の言を、説教の材料として用ゐたることならん。故に馬可の古傳は十分に主の教訓全體を代表すべきものにして、若し吾人にしてその意義を把握したらんには、既に他の材源に保存さるゝ一層豐富なる主の教訓を了解するの鍵を得たるなり。

一、此の見解は、第二福音書に耶蘇の言として記さるゝ最初の言によりて証せ

らる。(馬可傳第一章十五節) 是れ恰も主のガリラヤ傳道の總題目とも見るべきものにして、最も簡短なる形式に於てその使命と要求とを喝破するものなり。『期は滿てり神の國は近けり』とは、主が說き給へる福音の精髓にして、『爾曹悔改めて福音を信ぜよ』とは、此の使命に基ける二重の要求なり。此の使命とこの要求とは、主の傳道中に一度ならず二度ならず幾回となく人々が耳にせる所なるべし。たとひその衣裝に種々の形式あり、その敷衍に長短の度あるも、要するに皆な主の思想を距ること遠からず、凡の主の教訓の表面に現はれざる迄も、その裏面に現はるるものなりとす。

二、神の國——地上に於ける人類生活に對する神の支配——が、耶蘇の人格とその働とに實現し始むるや、そは幾多の大障害に遭遇せざるを得ざりき。就中その尤なるものは人類の罪惡なり。是れ馬可の古傳が主の言として記せる次の言、即ち主が自身に關して述べ給へる所に徵して明なり。(第二章十節) 主がカペナウムにて學者輩に告げ給へる『人の子は地にて罪を赦すの權威を有す』てふ言は、主の働の劈頭に於て、主が由て以てその敵手を倒し給ふべき力を示す者なり。主は解放——人類が過去に於て惡因緣を結べる罪惡の破棄、彼等をして新なる生涯を始めしむべき自由を與ふる解放——を宣傳し給へり。學者輩と雖も、神

が罪を赦し給ひ得べき事を承認せり。然れども、神の慈悲中に藏るる赦罪と、實際吾人の上に行はるる赦罪との間には、天壤の差あり。神國の憲法は即時赦免の福音を以て始まる。學者輩は正當にも此の權威を神の大權に屬する者と判斷せり。（第二章七節）主が此の權威を主張し給へるも亦た、輕薄なる樂天的精神より出でたるに非ず、十分にその意義を認識したる上の事なり。主がおのが癒さんと試める疾病の根本的勢力を認め給へるとは、『是等の惡念は內より即ち人の心より出づ』てふ主の言によりて明なり。（第七章廿一節）耶蘇の言によれば、罪は淺薄なる惡に非ずして、枝廣く根深き惡なるなり。而かも主は之を知りながらも、罪より罪人を解放するの力あることを要求し給へり。肉體的醫療の奇跡は、罪惡赦免の力に比すれば實に容易なり。主が『爾の罪赦されたり』と宣ひし時は、ラザロに『出でよ』と命じ給ひし時に比すれば、一層難き言を發し給へるなり。然かも主は此の難き言を口にするの權力あるを自覺し、且つ之を最も早き機會に於て明言し給へり。斯かる權力が地上に實現せられ實行せらるるは、正に神國が人類間に建設さるべき第一條件にてあるなり。

三、神國建設の途に當れる他の障害物あり。主は罪惡に對すると同樣の決心を以て之に當り給へり。就中その尤なるものは、外部の義務を重んじて却て律法

の肝要なる方面を輕視するパリサイ的猶太敎なりき。主の福音に對する此の系統の反對は、三個の問題に關して馬可の古傳に現はる。即ち斷食の問題（第二章十九節以下）安息日の問題（第二章廿七節以下第三章四節）潔禮の問題（第七章六節以下）是なり。第一と第三の規則は、單にラビの傳說に依るものなれば、主は之に束縛さるることを全く排斥し給へり。第二の規則は舊約の律法に要求さるるものなれば、主は之を受容し給ひたれど、而かも之を學者輩の敎訓中に占めたるよりも、數層精神的なる位地に引上げ給へり。『安息日は人の爲に設けられたる者にして人は安息日の爲に設けられたる者に非ず』てふ原理は、此の制度を神の賜と見做すと雖も、學者輩は之を專制的律法の一と見做せり。然れども、安息日を以て神の賜と見做せばとて、主は之を破棄するの餘地を與へ給はざりし。主が此の原理より演繹し給へるは、各イスラエル人は之を守るも棄つるも自由なりとの事に非ず、人の子は之を守るの法を制定し得ることなりき。斷食と潔めの禮に關しては、主は異なる道を取り給へり。（約翰傳第二章六節）律法によれば斷食は贖罪日の外に命ぜられず、月曜木曜每に實行さるる斷食は、若し外觀の爲ならば却て弊害あるものと見做され（路加傳第十八章十二節）然らずば宗敎的義務として人々の良心の上に課すべきものと見做されたた

り。之に加ふるに、新郎と偕に在る弟子等に取りては、こは全く無用の長物たりしなり。主は寸斷されたる猶太敎の衣服を補綴する爲に來り給はず、又た古式舊慣の酒嚢に新酒を盛る爲に來り給はず。（馬可傳第二章廿一節以下）ラビ等の設けたる潔めの禮に付ては、主は一層冷酷なりき。この禮は學者等も告白したる如く全く傳說たるに相違なきのみならず、（第七章五節）又た內部の宗敎的生命を傷ひ神國の大原理に反する僞善を奬勵す。又たその弊害や、その及ぼす所決して狹小に非ず、且つ善き敎に容易く化せらるべきに非ず。此の組織や麴酵の如くに働きて（第八章十五節以下）猶太の全社會に貫通し、最も烈しき叱責によるの外は之を驅除し能はざるものなり。

神國の福音は尙他に一の不可思議なる障害物を有す。かの『憑かる』てふ語に關して如何なる註釋あるやは姑く置き、主が人間以上の惡しき勢力を認め且つ之と戰ひ給へる者の如く馬可の古傳に見ゆるは、明白なり。ベルゼブルと共謀するものとして主を攻擊せるエルサレムの學者等に對して、主が答へ給ひたる所によれば、主は此の力の實在を認め給へるものの如し。主は自己を强者の家に入りて彼を縛しその家財を奪ふものに喩へ給へり。（第三章廿七節）他語を以て言へば、惡鬼を逐出すことは、吾人が如何に此種の奇跡を解釋するにも拘ら

ず、兎に角人性に對して暴威を振廻はし居れども、元來人間に因緣なく從て絕緣され得べき、かの强敵を征服し給ふ主の企圖を表するものなり。

四、是迄の主の敎訓は神國の進步を障害するものに關せり。今や進んで神國てふ想念の內容に及ばん。此の點に於て譬喩は用ゐらるることとなりぬ。如何となれば、神國の秘義（第四章十一節）即ちその動き方やその働く勢に關する奧義は、聰からざる多數人の悟り得ざる所なればなり。馬可の古傳は僅に斯かる譬喩の三個を存するのみ。（第四章三節以下、廿六節以下、卅一節以下）而して是等は皆な植物の生長を借りて、精神的發達を說明したるものなり。第一の譬は、神國が個人に對して及ぼす感化の度を定むるは、その者の性格に由ることを說明し、第二は精神的生長の自然なることと不思議なることとを指示し、第三は微微たる小團體が遂に堂々たる大敎會に至るべきことを預言す。大帝國否な全世界の改信は、萬の種子の中ち最も小なるものより生長し、後ち天空の鳥を宿す程の枝を有する樹木の中に暗示せらる。現世界に於ける基督敎會の全事業を代表する、此の三個の譬喩を取れ。吾人は我が眼前に正しく神政の歷史書――そが人間の無頓着や淺薄や罪惡と戰ふ樣、誠實に之を受くるものに由りて知らず識らず同化さるる樣、そが最後に勝利を獲る樣――を見るに非ずや。天空の鳥

が種子を啄まんとする覊束なき始より、彼等が來てその枝の下に宿るに至る日までの、長き歷史の各時期は、歷々として吾人の雙眸の間に現はる。

五、主の敎訓に於ける一新時期は、ガリラヤ傳道將に終を告げんとする頃に來れり。是迄に十二弟子に主は親炙するの機會を得たり。親密なる交情は、彼等が主と偕になせる二度の長旅行にて養成せられたり。一はピニシアを通りてデカポリスに至れるもの、他はヨルダンの水源ヘルモンの山麓に至れるもの。（第七章廿四節より卅一節、第八章廿七節、第九章卅節）此の二旅行は傳道旅行に非ずして、一は之によりて身體の休息退隱若くはその安全を獲んが爲なるべしと雖も、一は疑もなく使徒等を敎育訓練する機會として用ゐられたるなり。而して主が變貌によりて使徒中の使徒におのが榮光を示し給ひたるは、實に此の第二旅行の終に起れり。然れども、此の事件の起るに先だち、主はおのがメシヤたることをペテロの口より告白せしめ、次でおのが苦難を受くべきことを預言し給へり。

之より以後、十字架は主の敎訓の中心となりぬ。主は之によりて一新題目を見出し給ひしものの如し。而して如何に此の題目が最初の題目――神國の降臨――と調和せらるべきかてふ疑問は、弟子等の心中に浮び來りぬ。基督苦難を受

十字架の苦難を明に示したる幾回の預言も、(第八章卅四節、第九章卅一節、第十章卅三節)弟子等をしてそが將に來らんとする事實なることを信せしむるに由なく、そは不穩なる而かも想像に及ばざる憂懼として彼等の前に横りぬ。(第九章卅二節)而かも預言は主の十字架の教を盡したるに非ず。主の磔死は弟子の磔死を含めり。(羅馬書第六章六節)而して主は直に之れが準備を弟子等になさしめ給へり。此種の教訓の最も早きものは、カイザリヤ、ピリピの諸村を通じて主に從ひ奉れる衆人も之を聞けり。そのペテロを叱責し給へる後ち間もなく、『主は衆人とその弟子とを共に召びて彼等に曰けるは、若し我に從はんと欲ふ者は自己を棄てその十字架を負ひて我に從へ』と。(第八章卅四節)『自己を棄つ』『十字架を負ふ』は、爾來基督教徒間の常套語なりと雖も、而かもその眞意や輕々に之を用ゆるものに解さるべくも非ず。基督の意味にて自己を棄つる弟子は、主の中に自己を沒し去るなり。斯くて使徒保羅の言へる如く、もはや彼れ生けるに非ず基督彼に在て生けるなり。(加拉太書第二章廿節)主の十字架を取るものは、啻に主の負ひ給へる重荷を負ふのみに非ず、又た主の死に與かり主と偕に死せざるべからず、即ち罪に死して神に生きざるべからず。(羅馬書第六章六

節以下）
衆人に對しては、斯かる言は却て主に從ふの妨害となり、輕々しく弟子となりしものを放ち去るの用となりしに過ぎざりしならん。然れども、使徒等に對しては、こは彼等に示すにおのが懷抱し來れる使命の眞相を以てせり。之より以後、自己を棄てて十字架を負ふに適するよう十二弟子を陶冶するは、主の肝要なる務となりぬ。見よ。カペナウムに歸へれる後、主は嚴しく弟子等の個人的野心を叱責し給へり。（第九章卅三節以下）生命に入らんと欲する者、陰府の火を逃れんと欲する者は、若し躓石とならばその手その足その目を棄つべきことを警告し給へり。（第九章四十三節以下）メシヤ王國に於ける榮譽の地位は、基督の杯を飲み基督のバプテズマを受くる者のみに與へらるべしと敎へ給へり。（第十章卅八節）又た同一の大敎訓は、主が小兒を以て神國に入るものの表號となし、（第十章十四節）物質的富有を以て全能力に非ずば撤し能はざる難關とをし給へる聖言の中にも現るるなり。（第十章廿三節）
六、主は自棄の外に信仰の必要を弟子等に印し給へり。最初の傳道に於て、信仰は悔改と並び稱せられ、（第一章十五節）又た主の奇跡力が人間の上に加はるべき必要條件とせられたり。（第二章五節、第五章卅四節卅六節、第六章五節、

第九章廿三節、第十章五十二節）然れども、十二使徒に對しては、主は特別の熱心を以て祈禱を奬勵し給へり。彼等は始より福音を信じたり、而かも尙ほその信仰が消失すべく見ゆる時もありき。而して主は常に彼等を呼返して、この基督教的生活の第一義に就かしめ給へり。（第四章四十節）殊に主が信仰の必要を要求し給ひしは、祈禱に關してなりき。弟子等が汚れたる鬼を逐出す能はざりしは、祈禱の不足による。（第九章廿九節）且つ馬太傳の記す所によれば、祈禱をして結果なからしむる無信仰による。（馬太傳第十七章廿節）最後に先だつ數日、主は此の問題を再び提へて、殆んど無限なる力を信仰より出づる祈禱に歸し給へり。曰く『凡そ祈禱の時その求むる所のものは必ず得べしと信ぜば必ず得べし』と。（第十一章廿三節以下）且つ信仰によりては山もその處を移すべしと宣へり。是等の言によりて、主は人の精神的生命の中心に一種の無限力を植へ給へり。一方に於て利己的大望の原動力を除去し給ふと同時に、他方に於て世界に打勝つべき力の秘密を授け給へり。

七、舞臺一轉してガリラヤ、ペリヤよりエルサレムに移るや、吾人は全く異なれる空氣中に入るを覺ゆ。從て主の教訓も亦た異なる調子を帶びざるを得ず。此處に於ける聽衆は、ガリラヤに於けるものと全く種類を異にす。宮殿の庭に

於ても、湖畔に於けると同じく、群集は主の身邊を圍繞せり。然れども、その中にはガリラャにて見るを得ざる諸分子――サイロピニシャの市民、世界各國に散在せる猶太人中より來れる參拜者、バレスチナの田舍より出でたる農民――のあるあり。この群集の後には、時々假面的服從をもて或は陷穽的難題をもて進み出づる、七十人議會の議員あり。彼等の中には、單にパリサイ人たる宰や學者あるのみならず、今や耶蘇を陷れんが爲に彼等と提携せるサドカイ人もあるなり。彼等の質問に對する主の答辯は、群集に對する敎訓の斷片と共に保存せられて、吾人に洩すにその當時に起れる諸種の問題に對する主の態度を以てす。吾人は之によりて、宮殿の庭を用ゆる方法に關し、羅馬政府に對する猶太人の義務に關し、サドカイ人が復活の敎理を信せざる事に關し、律法の中に命せらるる諸種の義務の比較的價値に關する、主の意見を知り得るなり。（第十一章十七節、第十二章十五節以下、廿四節以下、廿九節以下）且つ主の答辯は、單に當時の敵手を沈默せしめたるのみならず、又た今日の思想生活を導くに足るべき大原理を敎ゆるなり。而かも尙一層重要なるは、主が自身に關して述べ給へる僅少の文句なりとす。主はおのが有する權威の天より出でしものなるを示し給へり。（第十一章廿九節以下）自己を葡萄園主の愛する獨子に擬し、（第十

二章六節）又た隅の首石となるべき石に擬し給へり、（第十二章十節）基督はダビデの裔たる同時に又た彼の主たるべき事に注意し給へり。（第十二章卅五節）遂に祭司の長に問はるるや、明に自己が『頌むべきものの子』なること、『天の雲に乘りて來るべき人の子』てふダニエルの預言を成就すべきものなることを答へ給へり。（第十四章六十二節）

八、問答辯難の日の終りに起れる、未來に關する大說話は、（第十三章）種々の點に於て比類なきものなり。是れ馬可傳に於ける唯一の長說話なるのみならず、又た世の終局に關する唯一の說話たるなり。此の個所を除けば、主の他の敎訓は不思議にも未來的分子を含むことなく、大抵現在の義務に關し地の事眼前の事に關す。然るに此處にて是迄の沈默は全く破られぬ。馬可傳によれば、使徒等は唯だ都城とその宮殿の滅亡に就てのみ問ひたるに、主は自ら進んでそれ以上の事を答へ給へり。現今の批評家にして、此の說話の或る部分（即ち七節八節、十四節より廿節、廿四節より廿七節、卅節卅一節）を以て、初代基督敎の默示文學の一部が挿入せしものと主張する輩少からず。此の說を維持する証據として、彼等は是等の部分が他の部分に關係なきことを指摘す。而かも此の說を採用すればとて、そは單に此の說話が原形の儘に保存されざりしことか、但

しはそが悉く同時に述べられざりしことを証するに過ぎず。たとひ以上の語句を除去するも、將來の教會歴史に起るべき特別なる光景の示現は尚ほ殘るなり。此の點に於て、第十三章は第一章より第十二章に至る迄の教訓と全く趣を異にす。

然らば則ち、此の異同を說明するに足るべき理由は何ぞや。主の傳道とその地的生涯の終局は正に近けり。二ヶ月の後に主の後繼者たるべき新團體は起るべく、而して『季の世』（約翰第一書第二章十八節）は始まるべし。故に若しありとすれば、今は將來に起るべき出來事を預言し、且つ之に對する希望を鼓吹するに適當の機會なりとす。然るに、舊約書より借り來れる形容句――殘暴なる憎むべきもの、日は暗く月は光を失ひ星は天より墮つ、人の子雲の中に現はれ來る――を除く時は、全體の說話の謹嚴なる、他の默示文學の荒誕なるに比するに、復た同日の談に非ず。主は弟子等の好奇心に驅られて、都城滅亡の日や現世終局の時を定め給はざりき。主の言は、主が當代の人々尙ほ生ける中に歸へり給ふべしとの信仰を証するに足らず。又た悠長なる推算を容るべき記號的文字を擧ぐることなく、約翰默示錄に見るが如き不可測の時期に訴ふることなし。實に主は『その日その時』を知らずと宣へり。（第十三章卅二節）主が與へ給へ

る示現の目的や飽迄も實際的なり。曰く『人に欺かれざるやう愼めよ…………爾曹戰と戰の風聲を聞くとき懼るる勿れ…………爾曹自ら愼めよ…………目を醒まし祈禱せよ…………我れ怠らずして守れと爾曹に告ぐるは即ち凡ての人に告ぐるなり』と。（五節、七節、九節、廿三節、卅三節、卅五節、卅七節）以上の思想は、此の大說話全體を通じて響く所の調子にして、實に主の趣旨を明示するに足る。蓋し主はその行程の末期に瀕して、弟子等の將來に一條の光明を與へんと欲し給ひたるなり。吾人の判斷する所にては、若し主の教訓にして斯かる狹義の未來的默示を示すものに非ずとせば、そは重要なる事項を欠く者と謂はざるべからず。之に加ふるに、未來的默示が正に來るべき時に來れるは、慥に主の傳道の全企圖に合するものなり。主の教訓は孰れも、そが起るべき適當の場合に起るを常とす。未來に關する說話が傳道の末期に起りし事、豈に最も自然に非ずとせんや。

九、十一の弟子と將來の教會に對する、甦れる主の最後の命令は、單に馬太傳にのみ保存せらる。（馬太傳第廿八章十八節以下）然れども、そは馬可傳原本の結末にもありたるやも知れず、且つそは第二福音書の教訓に對する適當の結尾たるなり。ガリラヤ傳道の始に於ける如く、主は此處にも『權威』の調を帶び

給へり。而かも主が今要求し給へる權威は普汎的にして、天の中の事をも地の上の事をも含む。（馬可傳第二章十節を比較せよ）主は前に自ら弟子を造りて彼等を敎へ給ひし如く、今や萬國民を弟子とし之を敎ゆることを使徒と敎會とに委ね給へり。然れども、彼等が造れる弟子は、主のものにして彼等のものたるべからず。敎會の使命は、彼等が敎ゆる所は、單に彼等が主の口より受けたる所ならざるべからず。敎會の使命は、主の聖言中にそのインスピレーションを見出すべく、見へざる主の實在の中にその力を得べき筈にして、是れ主が世の終まで守るべく約束し給ひし所たるなり。

馬可傳中にある主の聖言は固より、主の敎訓を秩序的綜合的に示すを目的として、撰擇され若くは配列されたるに非ず。而かも吾人は、その中に一種の秩序あり綜合あり趣旨ありて、實際ガリラヤ及エルサレムに於ける主の敎訓の大脈絡を優に代表し居るを見る。彼等は一定の特色を明白に表出し居るが故に、余は爰に簡短にその二三に關して一言せんと欲す。

（甲）吾人は先づその敎訓の內部的なるに驚く。心裡即ち個人の道德的生活の中心こそ、主が正に働き給ふべき世界なれ。悔改、信仰、損己、服從、犧牲は神國に於ける生活の條件なり。神國の種子は、そが善き地に宿れる時にのみ生長

を遂げ成果を全ふす。外物はその富たり地位たり儀禮たり自然物たるに拘らず、却て靈魂が神に近くの躓石となることあり。凡ての罪は內より來る。故に潔めの働は內より始まらざるべからず。贈物の價値は、その賣買値段に由るものにあらで、そが代表する所の精神的努力に比例するものなり。

(乙)然れども、主の敎訓は斯く內部的なると同時に、又た極めて實際的なり。外物は靈を離れては何等の價値なきものなればとて、之を無頓着視するが如き弊害は、主の敎訓中に見るべからず。主は結婚に關し離婚に關して明白なる敎訓を垂れ給へり。主は貪慾の証據たるべき商賣を宮殿より掃蕩し給ひ、祈禱の家を變じて盜賊の巢となすを拒絕し給へり。主は敎會に於ける永久の儀式として晚餐禮を設け給へり。主の敎訓は道德的精神的眞理の大本に亘ると同時に、そが含まるる所には些細なる小事に迄も及べり。或る聖言は『凡ての食物を潔くせり』。(馬可傳第七章十九節)或るものは凡ての嬰兒と童兒とを祝福せり。十二使徒に對する主の命令は、飮食衣服等に關する些事にも亘れり。ヤイロの娘死より甦れる時、主は之に食物を與へよと命じ給へり。若し人の爲め神國の爲めならば、何物もそが些事なるが故に外物なるが故に看過されざるなり。

(丙)の敎訓は、一時の事情の下に與へられたれども、輕率なる讀者と雖も看過

傳道の始に方りて既に『人の子は地にて罪を赦すの權威を有す』『安息日は人の爲に設けらる』『心の內より惡しき思は出づるなり』等の言は、遠くガリラヤ及び猶太教の狹範圍外に逸出す。播種者の譬は、田園に耕せる單純なる農民間に說かれたるものにて、多くの田舍牧師の知る如く、今日の英國に於ける農民にも尙ほ適するなり。而かも神の言が人心中に働く種々の運命を描ける畵景は、實に全人類に與へられたる遺產なり。馬可傳中の敎訓一として、深遠なる意義を有せざるはなく、常に吾人の周圍にある各種の人物に適合せざるはなし。

（丁）主の教訓は單純にして氣取る所なしと雖も、又た古來の文學中に比類なき權威の調を帶ぶ。たとひ主は第二福音書中に嚴格なる『我れ誠に爾曹に告げん』てふ語を屢用ゐ給はずと雖も、（第三章廿八節、第八章十二節）書中の言悉く、人をして確信を生ぜしめ、少くとも人をして注意を起さしむ。『神の國は近けり』を以て始まりし日より、『天の中ち地の上の凡ての權威を我に賜へり』と宣し給へる最後まで、一言として躊躇逡巡の調を洩したるはなし。主はおのが神權に對して常に一樣なる絕對的確信と絕對的意識とを有し給ふ。主の片言隻句の中にも權威あり、而してそは最も著しく使徒馬可の手に成れる單純なる記錄中に

現はるるなり。（今泉眞幸君譯）

基督教と猶太教

神學博士　エー、エフ、カークパトリック

（一）

舊約書は『單に預言を包有するのみにあらずして、徹頭徹尾預言なり』とは名言と謂ふべし。舊約書は希望あり、進化ある宗教の啓示の記錄なり。幾多の艱難、失敗、失望を閲しながらも、依然として一の目的、成遂、終局に眼を注ぐ。其範圍、領域は宇宙と共に廣し、そは創世の記事を以て始まり、宇宙創造者の心意目的に於て『よしとし玉ふ』世界を默想せんことを吾人に敎ふればなり。舊約的精神の粹を萃めたる詩篇は、天地の主に宇宙万物の讃美を獻じて其篇を結びて曰く『生命あるもの皆主を讃めよ』と。然り而して全篇の最終の書は、希望忍耐の目標として『諸の日の終』を指して以て筆を收めたり（但以理書十二〇十三）。

然れど進步は斷續なき能はず。人は造物主の至上意志に背きたり。罪は世に入

れり、而して世界の歴史は贖罪即ち訓錬と痛苦を通しての救贖の歴史たらざるべからざることとなれり。神は世界の諸國民に『自ら証せずして止み玉はず』とはいへ、其中より特にイスラエル人を選み出し、之を自己の啓示の特別委員となし、世界の極に至るまで其救拯を齎らすべき前驅とはなし玉へり。徐々に神は立法家、預言者、詩篇記者、賢人の教示を通して其品性意志を知らしめ、一歩一歩と主は無政府、背教、流離、迫害を通して選民を訓錬し、保存し玉ひぬ。然るに舊約の終は來り、段落の幕の引かるるとき、榮光ある希望は成遂されず、燦然たる約束は實現されずして、一見いかにも失敗と見做さざるを得ず。預言者は叫べり、「我れ汝を異邦人の光として與へん、是れ汝地の極に我救拯とならん爲めなり』『起きよ、照せよ、汝の光は來れり、主の榮光汝の上に昇れり』(以賽亞書四二〇六。四九〇六。六十〇一)と。嗚呼、イスラエルの宗教は未だ其の國境の外に出でず、イスラエル國民は半ば散りて流離顛沛し、半ば異教大帝國の一邦として僅かに微賤の存在を保ち居れるに、以上の如き雄偉なる約束は空語とは聞へずや。

（二）

舊約書は預言なり。若し孤立しなば壯大なる失敗なり。然れども基督教と猶太

教とは何れも之を成遂し、其教示を發展し、イスラエルの世界に對する天職を全ふせしむと主張す。基督教の辨証論者は今日基督教の眞理たる証據として、往時の如く或る特別なる預言の枝條毫末迄成遂したることを說くことなく、舊約全體の傾向調子に訴へて論証を爲すべし。左れば今日基督教と猶太教の爭點は、特別なる預言の解釋に在らずして、全新約書と舊約書との關係、即ち新約書が記する一個の神の啓示と、舊約書が錄する一個の神の啓示との關係如何といふに存す。かくて使徒時代に於けると同じく、『イエスはキリストなりや、彼は眞に神の子なりや』といふが中心の疑問なり。吾人に取りては、基督教の要求主張は明白にして疑ひがたけれど、猶太教も亦た獨り猶太教のみ純潔高尙なる一神教を保持し、イスラエルの神は全世界の神たるべしといふ信仰を微塵も動かさずして今日に至れりとは主張するなる。故に請ふ吾人は今より(一)基督教の主張と(二)近世猶太教の說とを考究せん。

(一)若し新約書の記錄にして信じ得べくんば、言にも行にも、イエスは自らメシヤを以て任じ、イスラエルの古法に對して權威の地位に立つと謂へり。彼の公生涯の發端と終局に於て二度彼は殿を淨め、之を以て『汝等が求むる主俄に

殿に來らん』といふ馬拉基の預言を成就するものとは爲せり。彼が凱旋的にエルサレムに入るや、撒加利亞の預言せし王として公けに己を發表したるなり。彼は其弟子に自己のメシャなることを語りたることは稀なりと雖も、彼等が其教を聞き、其行を察しゆくうち、不知不識彼はイスラエルの希望を成遂するものなりとの確信深まり來りて、やがて此く成長し行ける信仰發して公然たる告白となるや、彼は神より授かりたる卓見として之を歡迎したりき（馬太十六〇十三以下）。

彼は又モーセ法を解釋するの權威ありと自任せり。文字の裏面に伏する精神、個々別々の教訓の基礎となれる根本の元則を示して、其法文に新生命、新勢力を注入するの權ありと信ぜり。彼は當時の宗教教師が抱ける如き律法の權威説の表に超然し、其制定中或者は發布當時の須臾の必要に應じたるまでのものにして、永久之を守るの義務なしと斷ぜり。彼は舊約の解釋として當時行はれたる宗教思想の不完全、虛僞、誤謬なることを論じぬ。復活の後彼は其弟子に聖書を説明して、受苦的メシャといふことは舊約の教示に反せざることを示したり。始めよりして使徒等は、イエスが舊約を成就するキリストなりと主張したりき。聖ペテロ及聖ヨハネはイエスが預言者の預言に應じて、其身に王たる資格と、

苦を受くる僕との性質を兼ね具へたることを示さんと力め、彼の自任は復活によりて確証されりと論じぬ（徒二章、四章）。聖パウロは自己の傳道は舊約と相連續せることを説きて曰く、『我は神の佑を得て今日まで甦ることなく、小さきものにも大なる者にも証を爲せり。我いふところは預言者及モーセが將來必ず成らんといひしところに非るはなし』（徒廿六〇二二、二三）と。彼の書簡には舊約の氣浸潤したりともいふべく、其語調自然に舊約的なり。彼が直接に援萃引用して論説するよりも寧ろ議論の精神として自定するところは、基督教はイスラエルに授けられたる約束の相續者なりといふとなり。今後イスラエルは基督教會といふ大統一の中に沒せられ、猶太人も異邦人も一となり、人種階級の別なかるべし。キリスト、イエスに於て万人は皆一なり。モーセ法は一時的豫備的のものにして、組識としては已に其用を果したり。舊啓示に存せる永久の意味あるものを吸收、擴充、靈化、証定したる新時代は始まれり。此新時代は新事實に基きて起れりとはいへ、實に永への昔より唯一の神の目的に於て定め玉へるものにして、舊時代の繼續、完成なり。是れ其論旨なり。

見地を異にしながらも、希伯來書記者は之と同一の説を唱へ、舊約の犧牲法及び祭司制度の意味はキリストに於て成就せりと、パレスタインの信者に教へた

り。

予は此上言ふを要せず。吾人基督教徒に取りては『種々の法を以て』舊約がイエスに進み來りつつありたることを、種々の區分を爲し、新約書が徹頭徹尾主張すといふこと、及イエスは其教示に於ても、其人格及事業に於ても、律法と預言者と詩篇とを成就し、自ら神の智慧及語にてありたりといふことは、明々白々餘りに平凡の事實なればなり。彼は舊約の一時的、國民的、物質的元素を捨て、其國民的制限的のものを變じて世界的膨脹的のものとし、以て舊約に存する一切の恒久眞理を吸收廓大するの原則を基督教會に受けたり。一切の光線はイエスに燒點を有し、千代万世人類を照さんとて、新なる純白と熾熱とを以て輝かんとて集れるに似たり。

然りと雖も基督教が舊約の正當なる成就、相續者なりと論ずればとて、神が人類に對する施設經營の詳細が一々明白に預知されたりといふにも非ず。律法と預言者が人をして受肉降生の事を預期せしむる迄に至れりとも說かざる也。古代預言者によりて人に語りたる神が、其子に於て語るといふとは、世界の歷史に於て先例なきことなりき、成程過去を回顧して人は過去が此大事件に對して準備しつつありたることを認め、其が過ぎし昔の歷史を說明統一することを悟り得べ

し。左れど此成遂事件は預言の豫め語り得る範圍以上の者にして、全く人世に新勢力を導入したる者と謂はざる可らず。洵に是れ人類の再創造なりけり。

(二)然るに猶太教も亦自ら舊約の正當なる相續者、眞正の成遂なることを主張するの熱心基督教に讓らず。然らば猶太教とは何ぞや。近世の最も博學なる猶太人の一人は此問題を以て、『神の世界は果して何ぞや』といふと同じく說明しがたき者と爲せり。彼は云へり、『猶太教とは猶太人といふ限りなき單位より成れる大なる無限なり。而して此單位猶太人は全世界に散在したり、今も散在し居れり。彼等は善惡ともに限りなき感化の下に來れり。果して然らば猶太教と稱する無限につきて、いかで精確なる定義を下し得んや』(シェヒター)と。若しシェヒター博士にして猶太教に定義を下すを辭せんには、予の如きもの如何でしかせんことを敢てせんや。然れども今日二派の猶太教ありて、何れも眞正猶太教の精神を代表すと主張す。各派自身の內に又多少の差異を含み居ること勿論なれど、ともかく此兩派が大體二種の相異なれる、否一見相矛盾せる傾向を代表するは疑なきことにして、改革猶太教派の人は其正統派の同宗信徒と相異れる、否予が考ふるところに據れば、相衝突せる心理的態度を執れること明かなり。請ふ今此二派の猶太教の二陳述を掲げん。一は猶太思想及文書に精

通し、又同情を有する基督教徒なる學者の言を引き、一は猶太人の言を借ることとすべし。

ダルマン博士曰く『猶太教は舊約の宗教を去ること遠し。猶太正統教は基督教紀元後のタルモッド傳記に基くものなれば、幾多の點に於て基督教よりも若年なり。改革猶太教とは猶太教の最も改良したる形式たり。若しくはしかなりと主張するものなり。歐洲中世の宗教哲學及びタルモッド教を、宗教進化の歴史に於ける幼少時代と認め、進化の局は終に改革猶太教に結ばれたりと考ふるものなり。正統派がラビの傳記を以て舊約書を判斷するが如く、改革派は自宗固有の宗教思想を舊約の教に代用す』と。

請ふ今猶太人記者より正統及改革猶太教の比較を聞け（博士フィリップソン）。『ラビ的猶太教は「律法」なり。律法に成文、口傳の二種あり。モーセの五書に存する成文法及びシュルカン、アルク（「通覽表」の意、即ち第十六世紀にジョセフ、カロが編纂したるラビの律法、慣例の提要なり）に制定されたる口傳法に命ずるものは、何れも之を守るの義務あり。儀式法は道德法と同一の權力を有す。之に反して改革派は、宗教道德の普遍の教訓と、特別なる場所と時との境遇狀態より起れる法度とは大差あり。儀式法は永久に守るの義務なし』と說く。

ラビ的猶太敎はパレスタインに住居せずば守りがたき律法は癈せられたるにあらずして、一時中止され居るなりと言ふ。其思想の主眼は國民的なり。左ればダビデの家の執權者の下に猶太人がパレスタインに回復されんと、殿の再建されんこと、犧牲的禮拜の復興を祈る。改革猶太敎は『猶太人とはただ宗敎的團體のことにして、國民的存在はロマ人が殿を燒きてエルサレムを滅したるとき絕へたり、猶太人が全世界に散在せるときより、猶太敎の世界的使命は始まれり』と說く。扨又『ラビ的猶太敎は人格的メシヤの來るを信じ、改革派は世界に平和充ち、人には仁愛の行はるる時代の來るを俟つ。一個の猶太人メシヤたらずして、猶太人全體がメシヤなり、イスラエルは世界人民のメシヤなりといふなり』。また割禮は猶太敎に入るに必須の條件にあらずして、猶太敎特殊の信仰箇條を信せば、夫にて該敎の門に入るを得べしと說く。

（三）

以上述る如く、正統猶太敎の態度は極めて嚴重なる保守主義にして、英國在留の猶太人多數の態度は是れなり。但し歐洲大陸在住の同宗者に比すれば、幾分か寛大なるところあるに似たり。されば『外國より來る猶太人にして英國に於ける猶太敎職の食卓に載せたる肉を食ふを辭するもの寡からず』。英國一致希伯

來教會の公用祈禱書は依然として、第十二世紀にマイモニデースが編したる十二箇條の信條を載せたり。此箇條中律法の古來變化なきこと及び變ずべからざることを信じ、メシャの來臨、死者の復活を信ずる旨を告白す。イスラエルの聖地に還へされんこと、殿の再建され、犧牲的禮拜の復古せんことを祈るの祈禱は數へがたし。

之に反して改革猶太教の態度は批評的折衷主義にして、近世の思想、西洋の文明に指導さるるのみならず、基督教の感化さへ受けたり。該派の人は嘗にラビ教を棄却するに遲疑せざるのみならず、モーセ五書の儀式法につきて說くところ、信仰深き基督教徒の多數は、之を不敬瀆神と考ふるなるべし。『幾世紀の間猶太教に纒綿せる儀式信仰を選擇取捨する』の權ありとは、該派の主張するところにして、正統猶太教は猶太教が世界に對する天職と信ずることを成遂するの力なしと考ふ。改革派は歎じて曰く、『猶太教の純粹なる教義が幾多の東洋的にして狹隘なる、而して迷信に基ける儀禮に蔽はれて窒息する間は、外界を感化し、活きたる神の證者とならんこと思も寄らず』と。又曰く、『今の世にラビ的猶太教の教理に人を改宗せしめんと望むがごときは、出來得べからざる空頼みと知らずや』と。そも猶太教の統一力は、『モーセ法を無暗に理想化して持ち

上ぐるに在りしが、今やモーセの五書は實際の歷史的價値に打算され、容赦なく批評の刄にかけられて、其統一を破られ、其超自然の光輝もまた消へ行きたれば、猶太敎の統一は徐ろに崩れ去りつつあり』。されば猶太敎は其斷片的に、而かも時に相矛盾せる敎義の結合力たる『律法の愛』を失ひつつありと謂ふべし。改革派は猶太敎が世界に對する天職を全ふせんには、該敎の儀式信仰に欠くべからずと考へられたるものを多く棄て、猶太人が神的、永遠的のものと信ずる多くの律法を兒戲らしく、馬鹿氣たるものとして擲ち、彼等が讒謗迫害の裡に、其榮光慰藉として愛重するやう敎へられたる希望を妄想として顧みずしてこそ、其望あれと考ふ。是れ豈に彼等が律法の大誤釋者、大誹謗家と誣ふる聖ポーロの態度に比して、貞かに敬虔の念少なきものにあらずや。

（四）

基督敎の舊約書に對する態度に至りては、正統派の猶太敎とも、改革派の猶太敎とも大に異れり。基督敎は『舊き事物は過ぎ去り』、否、新啓示の爲め變貌して『新になりたり』と説けど、舊事物をさして兒戲とか、妄誕とか、鄙敎迷信の遺物とか言ふこと更になく、一層高尙なる秩序、一層廣大なる眞理に對して神の定め玉へる豫備制度なりと敎ふ。今日ラビ的猶太敎は猶太人多數の信仰す

るところなるが、かの改革派が猶太教の世界に對する天職を全ふするに於て、ラビ教の無力なるを認め、律法を愛する念に代りて統一解釋の元則となるべきものを發見し、之によりて一時的、豫備的、國民的のものと永遠的、恒久的、普遍的のものとを區別せんことを欲するは、恰も基督教と同一の態度にして、基督教徒に取りては同情を禁じがたき事實なりとす。改革派は、モンテフィオリが言へる如く、完全、濶大にして人の理性心靈を滿足せしめ、一個人が神に對し、社會に對する關係を充分言明解釋するに足る主要整備の教義を欠けることを切に感ず。同氏はイエスの福音書中の或る語と、舊約書及初代のラビの文書に發見さるる至高の宗教々理とを合して、此かる濶大なる教理を製造し得べしといへど、左ることの叶ふべくもあらず。統一、調和、解釋の原理及勢力は或る折衷の教理に在らずして、イエス、キリストの人格に存すると悟らずや。彼に於て過去と未來とは統一し、一切の人類は統一し、個人と社會とは統一し、視るべき世界と視へざる世界は統一し、人と神とは統一するなりけり。

(五)

然り、イエス、キリストに於て。然れど古と同じく其が障碍とはなるなり。イエスが神の子なりとよ！其思想がそも褻瀆なり。十字架に死せるメシヤとよ！

此概念ばかりにても人を礙かすに足る。腐敗せる多神教、神經なき不可知說、靈なき無神敎に反して、强固、純粹なる心靈的一神教を保持するは猶太敎に托されたる使命にして、万種の信仰、半信、不信を以て混沌たる此第二十世紀に於けるほど、此使命証言の切要なるはあらじ。而して猶太人中文明の擴張をキリストの來臨と見做すものの寡からねど、彼等も尙此使命丈けは維持せんと欲すなり。

然しながら果して此使命は、舊啓示に基きて之を敷衍する新啓示を存し得ざらしむべきか。神と人との合一によりて人の運命の啓示――人が悟り得る限りに於て神の本性の啓示――犧牲の至上行爲によりて人類の爲めになせる生命及挽回の啓示――此かる啓示と該使命とは必ずしも衝突すべきものなるか。舊約書には此かる事件の有り得べきことを暗示するものありて、豫め多少推側し得らるべきは勿論、一旦其事件の實際に現はれたる已上は、受肉降生と神子受苦とは神の同一經綸の部分たることを充分示すべきものはあらざるか。

(イ)人は素と神の像に肖せて造られざりしか。エンマヌエルといふ名は、神が或る恒久なる方法に於て其人民のうちに宿るべきことを暗示せずや。豫言者のメシヤ的王は神の稱號を帶びざるか。曰く、奇しき謀畧者、曰く、大能の神、

曰く、永遠の父、曰く、平和の君。然り、實に大能の神とまでいふなり。是れ果して如何に解すべき。實にオレリが言へりし如く、『此かる語句を以て觀れば、神の子の降生といふが如き奇跡にあらざれば到底舊約を自家撞着より濟ふことを能はず、……舊約時代に於てさへも神の靈は、新約に於て到達したる目標に向つて意識的に奮進しつつありしことを悟るべし』。

(ロ)律法も預言者も共に痛苦と死とによれる贖罪といふ深遠の原理を敎ふ。かの舊約の犧牲組織は、基督敎の見地より言はば、畢竟イスラエルの心に罪の咎と憎むべきこととを銘刻せんとするに在り。いか樣に解釋するとも、以賽亞書第五十三章は代表的受苦の救贖力を意味深く說明したるものと認めざるを得ずされば新約全書が犧牲も預言もキリストの死を指し示し、キリストの死によりて成就されたりと說くは、强ち道理なしとは謂ひがたからん。

(六)

猶太人に向つて、イエスを神の子なりと信ぜよといひ、カルヴアリーの十字架にかかりし人をメシヤなりと信ぜよといふは、非常にして容易ならね要求なりき、今も然り。人は問ふべし。イエスと親しく交り、友人として彼と步み、彼と語り、彼の飢へ叉疲るるを觀、彼のゲツセマネに苦み、十字架に死するを眺

めたる古代の猶太人と、十八世紀間其信仰を忠實に純粹に保存し、一點の疑を之に挿まず、之を固持して以て今日に至り、さて奥義秘密を嫌ふ唯物主義の今の世に生活する近世の猶太人と、孰れかキリストの要求を容るゝに難きかと。使徒時代の猶太人はイエスの自任を証定するに、新たにして何人も知れる事實として復活といふ証據を有せしが、第二十世紀の猶太人は世界教として基督教傳播の歴史的証據をもてり。

ともかくかの聖ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、パウロをして、イエスの神また主なること、之に祈を献ぐべきものなると、又『教會存在の基礎、心靈的恩惠の源にして、万事の攝理に父と共に與れる者』と確信せしむるまでに至るには、眞に強大なる証據を要することにあらずや。然り而して彼等は實に此の如く信じたるなり。昇天后二十五年を經るや經ずやに草せられたる書簡の一に於て、聖パウロは子に父と同一の神性を附し、しかも『其を殊更ら新規の説とせずして、基督教全體の教理の一部分として當然のことの如く』説けり。使徒がイエスにつきて語り、イエスに談しかくるさま、もし彼等がイエスを神と認め、神と等しと信じ、父と區別はありながら、人間の言語思想もて語り又た測りがたき秘密に於て、父と一なる神の子として、眞の意味に於て神なりと見倣したりとせ

ずば、之を不敬瀆神と考ふるの外なし。若しイエス自身に此く敎へ、又神が其敎示事業に捺印して保証し玉ひし復活といふ事實の証定あるにあらずんば、此等の一神敎者なる猶太人をして、いかで此くも容易ならぬ結論に達せしむることを得んや。

（七）

キリストの人格及事業に關する基督敎の敎理を信ぜよと猶太人に求むるは、一方ならぬ要求なり。左れど予は思ふ、基督敎が多分猶太敎を誤解すると同じく、猶太敎は、其尤も進歩せるものすらも、基督敎を誤解するものにして、もし該敎にして基督敎を眞面目に公平なる心を以て研究せんには、幾多の障碍は除かるべしと。基督敎徒は疑ひもなく幾分か責むべきところあり、そは彼等は自黨の信仰を自ら誤説し、かくて其敵手に非難の口實を與へたればなり。

（イ）然れども猶太神學者の最も博學にして自由思想に富める一人が、基督敎は多神敎なりとの意を漏らす説を唱ふるは（予にして誤解せぬ限り）頗る驚くべきことなり。シエヒター博士曰く、『イスラエル人たるものは單純なる愛によりて其神と充分交ることを得たれば、かの所謂神の自ら己を卑下するといふことを借るの要を感せず。蓋し此事は、いかほど辨解したりとて、到底純然たる多神

教たるを免るべからず』と。博士は必ず知らるべし、基督教の神學は三神教といふが如き者に陥らぬ樣、古來戰々競々として之を排したることを。之と同時に基督教の神學は三位一體のパーソンスを神性のアスペクツ（方面）と考ふるを以て滿足せざりき。固より人間の言語が無限者を充分に表白すとも謂はざれば、異端の誤説に對して受肉降生及三位一體を護衛する信經が、此二個の深遠なる秘義を說明するとも思はず。左れど基督教神學は固く信ず、三位一體說のみ惟り能く新約全書の語を滿足せしめ、而してよし道理に超絶するとするも、此說は道理と相調和するものなりと。

（ロ）サイモン曰く『パウロが神の正義の要求と神の恩惠の要求とを調和するの必要ありといひて、神に人間の情慾を附するまでに至りたるは、退歩と稱せざるを得ず』と。是れ淺膚なる贖罪思想のみ。疑もなく一派の神學者は新約全書の教示を此く奇怪に誤表さるるも是非なき說を唱へたり。左れど改革猶太教は、人間が要する贖罪の深き意味に於て、キリストの死が成遂する救贖の眞理を認むるに、危險なるまで欠くるところあるが如し。該教は罪の恐るべきことにつきても深き感なきものの如く、又玆に一の大犧牲行爲ありて、其行爲は罪を罰し、兼ねて神の愛を宣べ、神罪を赦すも罪に冷淡なりと解せられず、且つ又無

上の犧牲獻身を以て人心を限りなく牽引することとなるといふ如き犧牲行爲の必要、人類に切なりとも認めざるが如し。『人が自ら己を罪人と認むる信仰は憂欝なるには相違なきも』健全なる結果を生ずべければ、此かる箇條さへ信ずるを可とすとはシエヒターの言なるが、吾人基督教徒に取りては、此かる言辭は輕薄にして赤誠欠け、頗る聞き惡き心地す。罪の念は人間の進歩に欠くべからざる成分なるに、猶太教が之に乏しきは其自ら認むるところなり。而して此罪の念の深ければこそ、十字架の犧牲に現はれたる愛を感ずるの切なればこそ、基督教は罪人に彼れが如く柔和温順に、仆れたるものを起し、迷へるものを回復せんとの努力にしかく熱心なるなれ。モーセ法の犧牲は猶太教に幾分なりとも贖罪の要を敎ふべきに、改革猶太教は利末法の犧牲を寧ろ迷信の殘喘と見做して、神が其人民及全世界を敎育せんとて用ひ玉へる一時的の、しかし意味深き制度と認めざるぞ、憾なる。

(八)扨又基督教は、猶太教が屢々考ふるやう見ゆる如く、不道理なる獨斷教理を妄信する者にあらずして、イエス、キリストといふ人格に忠事し、生き且つ死せるキリストを信じて其生死に與かり、キリストの人格が信徒の實驗に再現さるるを望むことに外ならず。基督教は勢力の原理なり、義と聖とを成し、廣

義に於ける救拯を得せしむる實力なり。

(二)論者はいふ猶太教の基督教に反對する他の理由は、基督教が『終局』の教を以て自任するに在りと。かくて難ずらく『宗教に終局などいふ者のあるべき筈なし』と。論者の言理あり。然れど基督教は何の意味に於て『終局』なりと自任するか。慥かに、其教の意味は固定せる或信條告白に盡きて、すこしも人類日進月歩の必要とともに膨脹し、之に適應するの活力なしとの意にはあらざるなり。成程キリストはかの『來るべき者』にして、吾人は『他に待つところなし』。左れど吾人は彼を中心としたる啓示は成長發達するものにして、世の終に至るまで、各人、各國民及各時代の須要に應じつつ、愈々其意味を擴充するものなりと信ず。

(八)

猶太教と基督教との諍議に於て歴史の判斷は果して如何ん。基督教は世の爲め成すところ多けれど、猶太教は果を結ぶこと極めて少なきにあらずや。猶太教は依然として一民族の宗教たるに過ぎざれど、基督教は全世界に弘まれるにあらずや。基督の誕生前后を以て世紀を別つは强がち無道理の所業にはあらじ。イエス、キリストよりして新世紀の起りたりといふことは歴史上爭ひがたき事

實にあらずや。然らば其原因は何ぞ。蓋しイエス、キリストの人格につきては如何に見解を異にするにせよ、彼と共に『權威ある新しき教の』世に現はれて、其が世界の局面を一變せしことは餘りに明かなり。基督教の歴史には失敗もありたり、罪惡も伴ひたり。罪惡の中には古への神の民に對する罪もありしのみならず、今も尙ほ然り。洵に是れ開化せる歐洲の恥辱として公言すべきことなり、ただ今日猶太人を迫害するものは、國家にして教會にあらざるの差あるのみ。然り基督教には此かる短所なしといはず。然れども之れあるにも係らず、基督教は膨脹し、進歩し、萬民に弘まりたるは事實なり。キリストなくんば世は果して如何に成行しならん。假りにキリスト世に出でずとして、猶太教は能く世界を改良し得たらんと信ずるや如何に。舊約は世界的宗教を豫言し、基督教は之を實現したれど、猶太教は頑として國民的、特別的のものとして存せるにあらずや。正統派猶太教が猶太教の世界に對する天職を全ふし能はずとは該教徒の自ら白狀するところなり。然らば近世の進歩に步を讓り、猶太教固有の教義慣例を放棄して、二三の基督教思想を配劑したる所謂改革猶太教は、果して此使命を全ふし得べきか。否。該教は基督教の活力を欠けり、そは基督教の活力はキリストに對する獻身奉事に存すればなり。

（九）

然らば猶太敎は何の前途をも有せざるか。該敎辯護者の一人は曰く、『神の目的を測ることは實に難し。然れども予は猶太人種の宗敎的天職は基督敎の產出を以て終れりとは信じ得ず』（モンテフィオリ）と。予は赤心より彼の語を反響せんとす。舊約書及新約書の研究者が深き感謝を負ふサンデー博士は曰く、『猶太人は神の經綸に於て尙ほ果すべき目的を有す。「基督敎に對する主要の證論は何ぞや」といふ問に答へて、「猶太人なり」といひしことは有名なる話なるが、此は轉た吾人をして、かの現世に覊旅の生涯を送り、吾人の信仰上現在と親密の關係をたもつ一種の過去に對する恒久の證人として生きながらふる、不思議なる民族の綿々不斷の存在を想起せしめざるを得ず。彼等が固守する傳說により、其一家特得の證據を以て保存する舊約聖書により、其渴仰によりて、彼等は其排斥する基督敎の眞理たることを、眼のあたり證するものなり』と。然れども予は彼等が基礎を据えし救拯の道に對し、單に外部の證人として世の終迄存すべしとの信仰を以て滿足すること能はず。予は聖パウロと同じく、『異邦人の數滿つるときは凡てのイスラエルは救はるべし』（羅馬書十一〇廿五、廿六）と望むものにして、『もし彼等の墮落は世界の富となり、其滅亡は異邦人の富となり

たらんには、まして彼等の滿るに於てをや』（羅馬書十一〇十二）とは予の賛成する思想なり。思ふにイスラエルは果して神の救を世界の極まで齎すべきメシア國民たるを得べきか。然り、彼等にしてただ主に從ひ、其贖主として彼を容れんには、此くなり得べし。此は出來べからず、信ずべからざるとなりといはんか、さらば吾人は答へて、キリストが降世せし一年前、キリストの降生といふことは出來得べからず、信じ得べからずと思はれたるに過ぎて難きことはなしといはん。かの神の子にして人の子たり、父の啓示者、人類の代表者、世界の贖主、永生の担保及授與者たるキリストによりてのみ、イスラエルの使命は果さるべし。猶太教は『イエスの神たること又は彼の體が葬られし墓より復活せしこと』を信せずとも、基督教の長所を吸收し得べしと信せんかなれど、其は基督教の活力を占有する所以の道にあらず。猶太教の思想、理想が廻轉する中心は教理（ドグマ）なりとは該教者の唱ふるところなるが、基督教の中心は思想をも理想をも概括する一個の人格なり。一たび神と人とを合一して永遠に至る活る主なり。そも此活ける主こそは其靈を通して、其教會と人の心裡とに働き、絶えず父を人に啓示し、世界に其國を立て、かくて時の充つると共に終局の目的は示現せられ、神が凡てのものに滿つるとき迄に至るぞかし。（小林彦五郎君譯）

説教

洒々落々たり基督の心

神學博士　ロバートソン、ニコル

然らずば我れ預て爾曹に之を告ぐべき也（約十四〇二）

吾人常に怪しむ、何故基督この時この言を語られたるかと。蓋し是等の言は、本文一節の初めに連絡するも、將後半に結合するも、滿足に解釋し得ざるなり。博士マーカス、ドッヅの註によれば、『如是の場所なく、且つ之を準備する必要もなきやうな事なれば、基督は必ず之れを弟子達に語るべかりしなり。何故となれば、主弟子を離れて去る目的は、彼等の爲に處を備ふるに外ならねばなり』とあり。鋭敏なる觀察力ある一記者ジョン、ケル博士の註には、『弟子その心に何か苦悶するところありしを、是等の語は、これを恬むる爲に語られしなり、主曰く、汝等にして謬見を抱きおるならんには、我れは、必ず之れを矯正するの必要あり』とあり。兩者いづれも如何がなれども、大抵の說明は右二樣の條路を來往するものと知るべし。

吾人思ふ、是等の言は基督一笑を洩らしつつ語られたるものなるべきかと。『若し然らずば、我れ預て汝等に之を告ぐべきなり。汝等は今や我が途を知りぬ。われ是れまでは切りに汝等の望む所を阻礙し、横斷せんと試みつつありしなり。汝等が切りに望む所、信ずる所、夢想する所の如くには、事の成らざるを我れ汝等に告げしと夫れ幾度ぞや。果せるかな、汝等今終に正覺を得たり。汝等父の家には第宅多しと知れり。他の人々が去れるにも係らず、汝等のみは堅く其信仰に止まれり。我れは初めより右の事を知れり。然ればこそ我れは今漸やくにして汝等が知るに至りし事と相反せる事を絶えて語りしことあらず。これ眞實にして確乎たる希望なり。これ汝等の知れるよりも遙かに眞にして、遙かに美はしきものなり。若し然らずば、われ預て汝等に之を告ぐべきなり。然れど斯は眞なり。汝等今こそ思ふままにして可なり。死を恐るる勿れ、死の向ふには失望なければなり』。

吾人は此の如くに解す、之れを正しとすれば、此一句は主耶蘇基督の終生洒々落々たりし心ばへを完全に表示したるものと謂はざるべからず。基督は徹頭徹尾眞實なり。一微の包むところ無し。主は我が途は濶達平易、勝利は六ケ敷きことも無く即座に得らるべしと揚言して、我が歸依者を求めざりし也。わが宣

教の當初よりして、門は狹く路は嶮なるを明らかに其弟子に警告したり。王が他の王と開戰するに先ち、まづ坐して其敵すべきや否やを籌り。城郭を築く者が、其費用萬端、この事の竣るまで支るを得るや否やを計り考ふるが如く、主は其旗下に集らんとする者に、費の足るや否やを先づ第一に計るべき事を具さに勸めたり。主は、基督教徒生涯とは如何に多くを求めらるるものなるやと知らざるうちに、大早計にも之れに飛入るの非を呉々も注意したり。之れが爲に爲すべき犧牲を餘りに安價に踏むことの如何に不幸を招くべきかを語れり。其航路は一旦開始したる以上は、如何なる大犧牲をなしても持久せねばならぬ航路なり。從て無雜作に其航海を始むべきにあらざるなり。人は厭になる恐れのある事業に手を着くべからざるなり。唯に不定浮遊の感情によらずして、理性の指導する感情をして指導せしむべきなり。吾人は、吾人と握手せんと欲して來るものに對して、その前途に遭遇する危險及び困難を陰蔽しおくべからざるなり。

（一）

これに就き基督の二三の語を追想せしめよ。基督は其の事業の劈頭に於て、『我が爲に人汝等を詬り、又迫害し、詐りて各樣の惡言を曰はん其時は汝等福なり』

と語り、進みつつある基督の後に從はんとする者に、危險の此く存することを明かに警告したり。又曰く『狐は穴あり、天空の鳥は巣あり、然れど人の子は枕するところなし』と。主は喜ばしき婚姻の席に列座する者に對ひ、新郎かれらの間より取り去られて泣き悲しむの日臨むべきことを告げたり。主は此世の最親最愛の血縁に劒を加へんために來れるよしを語れり。弟子達は、主が既に自身の近親に所謂この劒を加へたるを目撃したり。曰く『我が母は誰ぞ、我が兄弟は誰ぞ、すべて天に在す我が父の旨を行ふ者は是れ我が兄弟、わが姉妹、わが母なり』と。主は弟子たちが、主の名の爲に世より惛まるべきことを告げぬ。主は前途望あるものを反て排斥し、自身の小團體に此世の勢力と富とを加ふるに足るべしと想はるるものを悉く納れざりき。富有なる一靑年を去らしめたる時、弟子『然らば何人か救に與るを得べき』と怪しみ反問せしも道理至極と見ゆ。又主は期來れるを以て、己れ久しからずしてエルサレムにて死ぬべきことを弟子に告げたり。民の長老、祭司長、及び學者より、多くの屈辱を蒙らされて虐殺されんとするなり。弟子たちは、所謂『王國』なるものは、赫々たる戰捷の餘光のうちにユダヤ人のうちに成るものと考へたるとなるが、其は考違なりき。彼等以爲、此王國の成らん時、己等は主の玉座の左右に侍するを得

べけんと。然るに主告げて曰く、此の如きは苦き杯を飮み、火のバプテスマを受けずんば能はずと。基督の最後は孤寥屈辱を極めたる十字架なりき。弟子たる者も亦其跡を踐みて十字架を負はざるべからざりしなり。空中の樓閣は、順次倒れて頽れぬ。然れども天に屬ける彼等の希望は活きて存れり。新しきエルサレムは夢にはあらざりき。若し夢ならんには、弟子達の望むところ、期する所の空しきを、基督幾度か苦々しき語を以て明かに警告したりし如くに、是れも亦必ず其弟子達に預て告ぐべきなり。弟子今や正解を得たり。主曰く『わが父の家には第宅おほし、我れ汝等の爲に所を備へに往くなり』と。

(二)

基督は弟子の希望を驅て天に向はしめたり。主は彼等が此世に在る暫時の間は、その遭遇甚だ苦しかるべき事を語りたれども、亦確く且つ明白にして眞理を陰蔽することなく、弟子に語れり。即ち此世にありて患難を受くれども亦大なる安慰あり、豐かなる賞與あるべきことを告げたる事是れなり。ペテロが『我等一切を捨てて汝に從へり』と言へる時、基督の答に『誠に汝等に告げん、我と福音の爲に家宅、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は兒女、或は田地を舍る者は、この世にて百倍を受けざる者なし。即ち家宅、兄弟、姉

妹、母、兒女、田地を迫害と共に受け、また後の世には永生を受けん』とあり。是れ受賞に關する基督の敎の要約にして、吾人須らく其意味を知らざるべからず。來世受賞の事は、別段困難を生ずべき思想上の問題とも見えず。然れども基督の此言たる、これ一半は『この世にて』の事なり。然り、これ基督の意味なり。これ一切を基督と其福音の爲に舍てたるものに約束せられし基督の語なるなり。

百倍の愛と曰ふ。如何にして此事あらん。曰ふ勿れ、血緣の裂かるる時、兄弟妻子の取り去らるる時、心は飢て悲極まり、何ど能く憂死せざるを得るかと。知らずや、屬世の愛の過ぎ去らん時は、これ天につける愛の水門の開放せられし時にあらずや。

耶蘇の愛は如何なるものとや、

主を愛するものならねば知らぬなり。

聖徒の達したるところ、その獲たる所は、窮悲の死にあらずして、活ける愛なり。之れ眞にして信ずべき事實なりとす。屬世の愛情愛念の如何に切なりしにもせよ、又今日如何に窮乏するにもせよ、吾人にして若し無限活如の眞愛、思慮に過ぎたる基督の愛、わが衷に流れ入らんやうにさへ、心滿開しゐたらば、

吾人は眞に百倍富る者となり得らるるなり。基督の此言たる、固より吾人が聖徒の親交によりて、愛を予へらるべきことをも無論併せて敎へられたるには相違なしとするも、假令吾人にして是を得る能はず、友の交りに關する限りに於て、我れ孤獨一人のまま遺さるるにしても、吾人は甚だ富有者たるを得る也。屬世の愛少なく、この少きものも歲月と共に愈々少くなりて終に全く消滅するやうな一生涯を送る人々ありて、其數も敢て少なくはあらぬ也。次に百倍の土地とは如何にや。土地なり其他物質的の或るものを所有すとは如何なる次第なるや。吾人の所有すべきは唯用あるものに過ぎず。役にたつに於て所有物は始めて價値を生ずるなり。玆に巨萬の富者あり、一大圖書館を購ふ。而して是れに雇用したる圖書取締人は、極めて薄給なり。富者にありては、圖書館は家具の一部、粧飾の一部なり。然るに雇はれたる薄給の圖書館掛は、日比窃かに智識研學の念切にして、書架に在る萬卷の書、一々其友となり、その師となれり。ミルトンを出しては其朝の如き新鮮の空氣を吸ひ、或はセクスピーヤを取りて好むままに研究す。大詩人、大預言者、及び人類の大慰籍者が、書中より語るところ、皆各その使命ありて是れを讀者に妙通す。今この兩者にありて、圖書館實際の所有主は何れぞや。圖書館取締人は、巨萬の富豪よりも更らに幾倍大なる圖書

に至れば、これ我有ならずとするも、我れ其緑滴る色の美を樂しみ、景の風致を賞翫し得らるるの故を以て、これを我が所有と曰ふ不可あるなし。我れ心樂しみ欣然として其間を逍遙す。此山、此川、誰れの有たるを敢て問はざるなり。ジェームス、スミーサムの左の如き語あり。『我れ英國の生籬を眺めて甚だ幸福を感ず、花鳥、草木、山陵、溪流に對すれば、心恍惚として我が樂盡くる所を知らず。唯わが難きを感ずるは屋後の小園を賞美するにあり。その銅色の椎樹、陰々たる槐樹、小なる荊棘、蜿蜒たる蔓草、これらは我れ其名を人より告げられしこと、幾百度なるかを知らずと雖ども、一々これを記臆もし得ざるなり』。如何に窮乏する身になればとて、裏面の意味より言へば、吾人は百倍の愛、百倍の地を所有するを得べきなり。かくの通りの窮乏は、時として迫害と伴ふは避くべからざることなり。然れども吾人が神と握手しおるを自覺すると共に、世人をして神との我が此一致を承認せしむる爲には、何等かの試驗なかるべからず。されば畢竟、世人をして吾人が語るところの眞實なるを知らしむるものは、清貧を厭はず道に順ふにあり。

茲に殊に擧げざるべからざる一の點あり。忠信の應報は猶豫なくして直ちに行はるるものとして、基督の語られしこと也。迫害及び受賞は相伴ふものなり。その基督は衷心惻々として憂愁を包むに堪えず、是等の偉大なる數章に於て、その心破裂したれども、平和その深淵より混々として波の迸り出さるる如く流れいづるを見るまでに、基督の心には、底の底まで平和安慰充てり。一時間も經ぬうちに、ゲッセマネの園に入り、一日ならぬにカルバリーに上らんとす。されど基督は無限の平和を有し、且つ凡て基督を信ずるものの爲に此平和を與へて無窮に遺さんとす。主は、主が天の家に歸ることと、弟子たちが主の居る所に往くこととの間に介まる其時日のあひだに、大なる平和あるを告ぐ。固より是れ多難多艱の時期なるべきも、平和は終に勝ち、臨むべき苦難ある爲に、平和は少しも擾乱せらるる事なかるべし。苦を受くといふは、即ち基督の受苦と親しき交に入ること也。此くの如くにして、最も遠き者も、反て最も近きに引寄らる。一の小さき墓石が如何に近く、家族を之れに引き寄するかは、常に見る人生の事實なり。基督を知るとは、その受苦と親しき交に入りて知ること也。如是の人は百難を毫も意とさせず、羊腸の嶮路尙ほ平地を行くが如くならん。武器を祝捷の名譽のうちに下ろす前途の盛運を洞見するものは、苦戰苦闘の最中、如何

程の犠牲もなすべし。時には此大難に堪えたる餘慶として、頭に白髪の冠を予へらるる事あり。時としては此くの如きもの其人に授けられざることもあり。世間尋常の戰勝は、吾人敢て榮とせざるものなり。公衆の報ゆる名譽も言ふに足らず。忠信といふも、世の忠信には多くの不實を交へ。愛といふも、世俗の愛は推移し易し。吾人の心を向くべきものにあらざるなり。迫害と平和とは相伴ふ。兩者相俟て兩者の充分なる眞意を解し得る也。

他の處に於る如く、此處にも基督は他界の生涯に重きを置けり。『惡魔が其輩僚と偕に汝等を此世の外に逐ひ出すとも、尙ほ汝等の入るべき室多し』とのルーテルの言は、此句の最良の解譯なるべし。吾人はテニソン及びライトフットが、新約の敎理は、他界生涯の敎理也と言へるを以て至言となすものなり。信仰の道程には、花の咲き出る如くに祝福滿てり。忠信といひ、愛といひ、吾人これによりて神を榮むると共に、神を樂しむを得るなり。新約の希望は、此世の外に在り、時間の外にあり。善ひかなバンヤンが、『子よ、乳と蜜は、此荒野の外に在り』と言へること。

（三）

然らば吾人は、基督が最も重じたるは、量にあらず質なることを知るべき也。

パンと魚の爲に基督に從へる群集の如き、或は危機に際して出奔する傭人のごときは、決して基督が集めんとする者に非らざるなり。是の如き人物は結局、主の教會を弱くし、その生命を萎微せしめ、熱望及び勇氣を阻害し、公然の恥辱を教會に蒙らすものなり。主は唯少數者を世に遺せしばかりなり。然れども此少數者こそは、『世の屈伏馴致し得ざる聖化せし小團體なり』。基督は常に其弟子を試み、吟味し、取捨し、探しつつあるなり。暴風烈雨のうちに毅然として立ち、且つ立つを得る人物を基督は常に求めつつあるなり。宗教のレバイバルは、常に少數者より起れり。教會の歴史には多くの教訓充てり。費用萬端を計る少數者、斷乎として危險を凌ぐ大猛心ある少數者、世俗の妄心を屈服したる少數者、茲に基督を中心として結合したり。その結果如何。例へばオクスフォルド運動の如き其一なり。之れ其進路に少なからざる弊害を伴ひしものなるも、其後背には、純正なる確信を有したる宗教運動なり。其主領者は、この世の教會に於て、最高の目的を標置し居たる者なり。而して其一人として貧に死生せざりしものなしと謂ふも可なり。彼等は自家の信仰の爲に全然の犧牲をなしたれども、その心には積み重ねたるばかりに豐かに得たりしものありしかば、若言敢て一だに其唇頭より洩れざりし也。一面の天空、如何にも暗澹たりしが、

僅かに開裂するところあり。この開裂次第に擴がりて終に黑雲を拂ひ去りて靑天白日となせり。心を一にし、目的を一にし、顧慮恐怖するところ無き一心熱衷の人物は、久しからずして其周圍に群衆を吸ひ寄す。熱火の中心彌々に擴らば、累々たる土塊も終に之れに化せられて火となる也。

（四）

吾人は是等の語により、益々基督に信賴すべきを學び、その約束と共に、その無言の沈默をも信ずべきを學ぶべき也。此世に在る間、基督は、天につきては餘り多く語るところなかりき。最後の時に至りてすらも、主は其弟子に新しき國は斯樣々々なりと一々精細に告げはせざりしなり。ただ彼等に基督を信ぜんことを求めたる以外に、多く何事もなし給はざりしなり。弟子たちが基督の言行に照らされて終に起したる信仰は、『父の家には第宅おほし』といふ事にぞある。基督は此信仰を確ふし、且つ之れに添ふるに『われ汝等の爲めに所を備へに往く』とさへの多福なる言を以てせり。宛かも『わが父の家には、多くの第宅あり、然れども何ほ我れは汝等の爲に備をなさんとて往くなり』と言はんが如し。第宅は未だ整はず、我が愛にて觸れ、以て最後の完成をなさざるべからずとの意なるに似たり。吾人は是の言の意味を明らかに味ふを得。見よ。客來

ありと知らば、主婦は備をするなり。室あり、家具ありとて是れにては充分ならず。心こまかき主婦は之れ以外に尚ほ其れぞれ客の爲に細かき所までに氣を配りて用意する也。自ら心に語りて曰く、この花は之れ來客の甚だ好むところの花なり。此書は之れ來客の甚だ愛するところの書なり。かくの如き些細の心やりに、歡迎の意を殘り落もなく行屆かすなり。多くの事はなし能はずとするも、此の如き主婦の心やりは、來客の心に愉快を禁せざらしむるものにあらずや。基督は此の如く、ペテロの爲に備へ、ヨハネの爲に備へ、トマスの爲に備へ給ふなり。主は人々の嗜好を知り、趣味を知りて之を忘れ給はず。主は其民の爲に、世の開闢より、世の終るまで準備し給ふなり。人々は、その花、その書を我が爲に基督が、わざ〳〵備へたるを、後の世に到りて見るとならん。『父の家には第宅おほし』との信仰は、夢にあらず。夢ならば愈々養ひ育つべき夢なり。諸ての事は、眞に基督に在りて悉く成就すべし。吾人が幸福を見出すべきところは、基督の愛の外に何處にか在らん。基督が吾人に予へ給ふところは、愛の賜の如く尊きものなり。何事にも明白なる題詞を冀ふ勿れ。基督の約束を信ずるに止らず、亦その無言の沈默のうちに我が信仰を確立せしめよ。基督の言は金なりと云ふか、基督の沈默も亦金なり。

されば『基督の詬辱を負ひて營外に出で』、主の許に至らしめよ。エジプトの財寶よりも、基督の爲に受る詬辱を寶貴と思ふべし。わが一切を愛に捧げ、全世界を失ふも甘んじて是を其拂ふべき價たらしめよ。我が信仰の刺激に從ひ、充分心して費を計り、其價を拂はしめよ。我が信仰の刺激に從ふは、理性に從ふなり。高められ、淨められたる脫俗の理性に從ふ事なり。『事を行すに當りて、理性を失はざる人は、何も失はざる人なり』とは、レッシングの大なる語なり。

（山縣雄杜二君聯譯）

相互の洗禮

神學博士　ヂョセフ、パーカー

我は汝より洗禮を受くべき者なるに汝反て
我に來るか―馬太三〇十四

苟くも共に善良にして誠實なる人ならんには、相互に洗禮を施し又施こさるる必要あり。之を稱して相互の洗禮と云ふも蓋し不當にあらざるべし。余にして

洗禮を施す力あらば、諸君は來りて之を受けざる可らず。諸君亦此力を有すれば余は往きて之を受けん（譯者、此處に洗禮と云へるは單に洗禮の儀式を云へるにあらず、汎く靈なる感化を受くることを云ふ）。是の如き共通の聖典ありて、人は初めて人心の一體を實覺し、豊潤なる全情の果を味ふことを得るなり。耶蘇基督は凡ての歴史より洗禮を受けたり。凡て彼に從ふ者に洗禮を施すべき基督なれば斯くあるべき筈なり。先づ以前に出でし善き人より洗禮を受けずば如何にして以後の世界に語ることを得んや。縱令一國一地方一團體に語ることを得るとても、萬世萬代の人に其れ〴〵の母語を用ひて語ることは難かりしならん。耶蘇は博言家の巨擘なり。他の人は僅に數個國の語を解するに過ぎざれども、耶蘇はあらゆる國語に通じ、自在に之を用ひて人の心に語り得れば也。これ何によりて然るや、神が幾百年の間人間の歴史を洗ひ之を潔めたるすべての大河小河細流の涓滴皆彼の上に注がれたり。彼以外の洗禮は各其の不十分なるを感せざるを得ず。ヨハネは曰へり、我は洗禮を受くべき者なるにと。眞の洗禮は皆然るにあらずや、一段高等なる壯麗なる禮典の必要を示すにあらずや。我等は一の洗禮を經て次の洗禮に進み一の聖典より次の聖典に導かれ、猶且つ「我受くべき者あり」と云ふべき者を餘したり。然らずして洗禮の後諸君ただ小奇

麗に現狀に滿足すれば、其の洗禮は諸君の爲に何等の益を爲さざりしと云はざるべからず。『最早之にて足れり、我は唯坐して夢み沈思し目醒めて我が隣人を批評せんのみ』と云ふ如きものならば、諸君は其の實未だ洗禮を受けざるものなり。之に反して『我は之より日一日益々洗禮を受けて終に白衣を着けたる群に加はりて黃金の街に立つまではやまじ』と云ふの精神あらば、予は知る諸君は正しき人により正しき道によりて洗禮を施されたることを。

優れりと思はれたる人が劣れりと思はれたる人に就きて祝福を求む、想像の眼に浮ぶれば何等の美しき光景なるぞ。耶蘇は親ら洗禮を受くる必要なかりき。洗禮は悔改の洗禮なり。然るに耶蘇は罪を犯さず其の口に詐りなく、この點より云へば洗はれ潔めらるるの必要なかりき。彼は別なる又一層大なる意味を以て洗禮を受けたるなり。茲に高き者低き者より祝福を求めつつあり。我等も能くこの謙卑（コンデセンション）の聖き術を學ばしめば、優勢（スウペリオリチイ）より高貴（スウブリマシイ）に進むことを得るなり。「富」は「貧」の許に行きて『汝の冷水を以て我に洗禮を施せ、汝すごき傳道者よ』と云ひ得るなり。「貧」は應へて云はん『我は汝より洗禮を受くべきものならずや、我は曾て汝の富と汝の繁榮と汝の華麗を聞けり。汝の王位と汝の王冠と汝の王笏を聞けり。我こそ汝の暖なる廣き恩澤の河に行きて汝より洗禮を受くべしと

思ひ居りしに』と。富は云ふやう『否我々も汝より洗禮を施こさるるを要するなり、忍耐、安定、滿足てふ三位一體の名によりて我に洗禮を施せ。我は動もすれば高慢にして己の力と富と境遇を恃み易し。清められ謙遜にせられ高雅にせられ、私心を脫して引き上げらるるために、汝より洗禮を受けずんばあるべからず。我をして汝のヨルダン河に就かしめよ、其の洗禮によりて我は多くのことを學ぶことを得ん』と。「健康」も亦「艱苦」に行きて洗禮を受くることを得べし。我等は苦まざる中は未だ眞正の健康を得ざるものなり。艶やかに照り輝ける「健康」は顏色憔粹せる「艱苦」に行きて我に洗禮を授けよと云はんに、艱苦は必ず之を辞せん、然れども健康は押しかへして云ふならん『我は我が敎育を完成する爲に汝の許に來るを要するなり。我は艱苦に觸接して一層強健になり得べし。煩悶の刺を感ずる時に我は今よりもよく祈り超自然的神的なるものに一層十分に依賴することを得ん。我は既に人生の榮華に飽きたり、我は輕快なる歌を歌ひ盡しぬ、歌唄の場を踐み終わり、今艱苦の洗禮を受けて忍耐によりて清められ謙遜にせられ高雅にせらるるを好む。願はくは我に洗禮を授けよ』と。

ヨハ子の問は如何に哀れを含めるぞ、彼の調子は驚くべく變りたり。彼は粗剛

猛烈なる言を以て世を叱咤し、當時の僞善者を焚き盡すべき地獄を作り其穴を深く掘り惜氣なく硫黄を投げ入れたり。かく憤怒燃ゆるが如き顏を回して耶穌の來るを見し瞬間ヨハネは新しき人となりぬ、其の聲の粗き調子は全く取り去られて『汝却て我に來るか』と云へり。無限の距離より來る噫如何に不思議なる謙卑なるよ。『汝却て我に來るか』世界は是の如くにして引き上げらるる也。我等が世を捉へ得る道は、我等を譽れなきものとなして世の中心に沈むるとにあり。諸君は市場の中央に會堂を建てざるべからず、苦痛の病院の中に証を立てざるべからず。人間の力を後日の痕跡を脱せんために神らしき謙卑の實証を示さざるべからず。

基督は第一着に人の意表に出でて世を驚かすを常とす。彼の世に降りしや、天使は之を知りて喜びの歌をうたひたれども、人間の中出でて之を迎ふる者あらざりき。イエスの誕生の場處、其の人民の間に出入する氣風、稅吏罪人の身の上に趣味を有したると、神の權威を以て當時の宗教家を叱責したること皆人の意表に出でたり。基督は唯所謂宗教なる者に滿足すること能はざりき。基督は敎法師や學者と稱する字書きを責めて曰く、汝は徒に多くの文字を書くのみにて其の精神を看過せり。汝は宗教に耽りて敬虔の念を養ふ時を有せず。汝の宗

教は形式なり、外衣なり、生命にあらず、力にあらず、細心温情なる恩惠にあらず、已ぬるかな』。と彼は決して評判良きことを求めずして、稅吏や罪人とともに飲食し、『彼は罪人の家に客となれり』と噂せられたり。基督は人間のあらゆる狀態と元素と感化力より洗禮を受けんとす。其の前に戶あるか、彼は之を開きて室內にあるものを見んとして內に入るなり。如何なる室も神の子の爲に教堂となれり。

基督は斯く第一着に人を驚かすのみならず、次に又人を驚喜せしむるなり。人をして『汝反て我に來るか』と叫ばしむ。何たる愛の奇跡なるよ。想像すらく人の子は星宿の上に立ちて全宇宙に宣言し天上に其の聲を轟すならん、而してこの見すぼらしき住家、荒野の茅屋には步を枉げらるることなからんと。『汝反て我に來るか』とは基督の來り給ひし代々の叫びにあらずや。我は罪人の首なり、汝は計畫を誤りしにあらずや、汝の入り給ふべき所は別に在るにあらずや。我が家は罪の家、恥の家、弱點の家にして、蒼の空を仰ぐべき窓さへもあらざるに、汝反て我に來るかと。『彼の血は汚れたる者を潔からしむ、彼の血は我を救ふ力なり』とは驚きと感謝に充ちたる敬虔の叫びなり。

基督の發達は是の如し。彼は探求の使命により愛の目的によりて全世界を包み

たり。彼は歴史の或る一二の卷の裡に自己を發見せしのみならず、あらゆる所に自己を見出したり。解し難き文章に會へば、我はこの深秘の鑰なり謎の答解なりと云へり。復活して後ち二人の弟子に向ひて、モーセをはじめ總て預言者の言を説明したりとなり。又アブラハムは我が日を見て喜びたりと云へり。知るべし基督は全歴史、全經驗、全需用を代表したりしを。斯く舊約書の全體を吸収して後彼は舊新約の中間に立てる、組剛なる近世のエリヤ其人なる洗禮者の許に就きて洗禮を受けんとするなり曰く苟も神の批准を受け神の經綸より出でたる者は我が上に影響せずに已むべからず。我は世界を治めたる神の攝理の全體を代表せざるべからずと。然る後更に歩を進めて云ふなり、今汝は我を信せざるべからず、我はモーセをはじめイスラエルの預言者と詩人を經て來りたり、我は洗禮者の經營をも經て來れり、今我は神の子なり汝等我を信せざるべからずと。天より聲ありて曰く『此は我が愛子なり』と。モーセもエリヤもヨハネも彼の背後に立てるなり、彼獨り世の救主なり。

然れども基督も亦暫時にして世を去らんとす、誰か彼に繼ぐものぞ。彼は云へり我訓慰者(なぐさむるもの)を送らん彼永久に汝等と偕に在るべしと、かくて我等はモーセ、預言者、洗禮者とはただ遠く歴史的に關係せるのみ、我等は又肉體によりて基督を

知らず、我等は今や聖靈の政治の中にあり、宇宙に充滿せる聖靈とともにあり。神の攝理の發展是の如し、一より多數に、多數よりヨハ子と云へる一人に、ヨハ子より耶蘇に、耶蘇より聖靈に、これ即ち歷史の三位一體なり、凡て混沌たる有樣を變じて光の如く麗しき神殿に變ずる三位一體の神なり。

我等は如何なる點に立てるや。基督教の教師たる者の困難此處に在り。凡て教を學ぶ者肩を駢べ步を揃へて進むにあらず。說教にも立ち遲るる人あり大なる祈禱に追ひ付き得ざる人あり。或る者の翼はまだ弱く數步翔りて復た倒る。須く先づ如何なる立場に在るかを省みざるべからず。我等はモーセの處にあるか、可なり、汝は正しき道にあり、モーセは神より遣されたる教師なればなり。我等は預言者の處に在るか、可なり、預言者は光の小兒なり、彼等の語る所は音樂なり、之を聽くべし。我等又詩篇の處に在るか、然らば神の國より遠からず、詩篇は歡喜の天杯よりこぼれたる音樂なれば。我等は又洗禮者ヨハ子とともに在るか、之も亦可なり、この教師は其の調子猛烈にして其の修行は嚴刻なり制慾的なり、然れども彼も亦正しき道に在り。汝又耶蘇と偕に在るか、然らば汝の立てる處は火を以て燒かるる山に非ずしてシオン山の上にあり其の最高峰にあるなり。我等又聖靈とともに在るか、あらゆる天來の感化に向て開け、凡て

の窓は天に開かれ、凡ての希望は天の山々を指せる處に在るか、我等は又父と子と聖靈の賓客となるか、我等の次の歩は天に向へるなり。さりとて猶ほ舊約書の時代にある人に對して無禮なるなかれ、猶ほヨルダン河に在る人を輕ずること勿れ。彼等は汝に遲るること遠しと雖も、正しき道にあれば必ず到達する日あらん。

我等は何により洗禮を施されしか。我等は水なくとも可なり。諸君は今其席を去らずして即坐に洗禮を受け得るなり。火の洗禮を受けざる者は未だ洗禮を受けたりと云ふを得ず。諸君が神聖なる熱心に充つる時、諸君か自己を虛しくする時、自己の利害を思はざる時、行きて世界を救ふの志動く時、諸君が火の洗禮を受けたる證據なり。凡ての洗禮は更に以上の洗禮を指せり。我等が火の洗禮を受くるに至らば、我等は初めて歷史の經營を全くせりと云ふべし。洗禮の水其の額に氷る如き洗禮を受けたりとて、洗禮を受けたりと云ふこと勿れ。（柏井園君翻譯）

雑録

甦れる基督第一の語

『大英週報』所載

復活せる主の最初の語は、マリヤに語られたるものにて、『われに觸る勿れ』といへる語なるが、基督は愛を己に表はすことを拒み、若くは抑へ止めたるが如きは、この前後に絶て無き事とす。マグダラのマリヤは、嘗て基督の未だ釘うたれざる足を涙にて洗ひ、おのが髪毛をもて拭ひしものなり。このマリヤと基督とは、この時相分袂してより、日茲に久しく、その期間基督の側にありては死あり、他界の經驗あり、再來あり、復活ありて相順序し、マリヤの側にありては疑惑あり、煩悶あり、悲痛ありて以て此時に迨び、今復た兩者相見えたる也。

大なる四十日間、基督は他の婦をして、主の足を抱きて拜するを許したまへり。一人のアポストロが、觸りて其然るや否やを知らんとせし時に、基督は是れを許し給へる程に寛大なりき。然るに今マリヤには、汝われに觸る勿れと、觸らんとするを禁ぜしが、これには深き意味のあることと勿論なり。但し其理由たる一見甚だ解し難きに似たり。

基督が『我に觸る勿れ』と言ひしは、固より同じ愛の心よりなり。尚ほ之れに添へて『我いまだ我父に昇らざればなり』と仰せられけり。これによりて見れば、主昇天なされなば、最早マリヤが今表はさんとしたる如き愛を表はす機會なきに至るといふが如きものにあらずと示せるなり『我に觸る勿れ』と聞けば、心惑ひ聞く者をして轉た孤寥に堪へざらしむ。されど後半の文字を添へて沈思默考するに至ては、此語の意義髣髴として漏洩し來り、基督と、又此世かの世にある主を愛するもの等に對する干係につきて甚だ多福なる教訓に滿てるを知るに至らん。

『我に觸る勿れ、我いまだ我父に昇らざればなり』。然らばマリヤは他日、異りたる工合に基督に觸ることを得るなり。我に觸る勿れと止められたるは、マリヤが畢竟此世的の想念を脱却せず、主の偕に在したまふとは、形の上のことなり。我れ直かに手にて觸るるにあらざれば確かならずと想ひ込み居たるが故なり。基督の姿見えずなるや、マリヤは非常に落膽せり。再び主を見るや、如何にして言語を交へ、わが愛を表するを得るやとの考も、唯だ物質的の連想に止まりし而已。但しマリヤの想ひしとほりなりせば、マリヤの信仰は水泡の消ゆるごとくに消え失せしならん。何となれば基督が此暗黒なる時間の岸邊に留り給ふは久しくもあらざりしが故なり。主は去らんとす。然れども其去るとは、マリヤが希望の絶頂にありて夢想しゐたるよりも、一層近く、一層親み深く、一層愛み密に、己れをマリヤに與ふることとなりしなり。主の語の內容の美と力とは玆に存す。主この世を去りて後にては、主に觸り、主を抱き、主を留むるに、遙か勝れたる方法あらんとす。主は天の天に歸らんとす。されど地を去るにあらず。主は世の終までも常に我儕と偕にあらんとす。主に觸り、主を抱き、我儕より主を去らしむるを得ざらしむるものは、信仰と愛なり。心靈界の活動は自由にして、更らに妨となる幕なし。そのもの最早取去られ、交通自由自在なり。基督の姿一たび現れて復た見えずなれるに因り、地の光を解釋する天の光を得たり。物質的より、時間的より、人間的の範圍より、主を愛する心高めらるべくありし也。基督は、果して是れを此くの如く高め給へるなり。

我儕の主と、死にたる聖徒とを比較しては、其間一々等しきものとは言ひ難し。主は人の如くならず、死に克てるものなり。主は黑鐵の門を毀ちて、聖徒の行くべき途を開けり。主にあり

て眠りたるものの初穗として復活し給へり。聖徒は、その召されし日に、主と共にパラダイスに在り。然れども彼等の躰は、世に遺りて朽ち果てぬ。ラッパは未だ響かざるなり。彼等の靈魂は、主なる基督の懷に在りて其聖き保護の中に置かる。我儕は主基督と親交する如くに是等世を去れる諸の聖徒と親交するを得ず。我儕基督とは最も親しく相語るを得、宛かも生者相互に日々物語りて交るを得るが如し。自個だに欲するなれば、基督は朝な朝な吾人を醒覺して新き使命を傳へ、吾人も亦わが心念を存分に吐露し、われ確かに主の保護のうちに在りとの信仰を堅むるを得るなり。但し、これと同樣には吾人、死者と親交するを得ざるなり。然れども聖靈の敎ゆるところにより、吾人は基督に就て考ふる通りに、又死せる聖徒に就て考ふる事を序々と學ぶに至り、靈の世界、及び其王とし首とし基督を信ずる益々高く、益々堅くなるに從て、吾人が死者に對する愛も亦一變し、淨化し、高めらるるなり。

「イン、メモリヤム」を一讀すれば、吾人能く此間の消息を知るを得べし。テニソンの此不朽の名詩は、首尾相應じ、喪を守る我が心靈的經驗を記せるものなり。始めには心迷ひ、心乱れ、悲歎やる瀨なき新しき經驗を述べて筆を起し、その心、始めには、宛かもマリヤの冀ひし事を其まま冀へり。一たび閉ぢたる唇より友の聲を聞かんとし、見えなくなりし手にて友に觸られんことを希へり。思ひは過去にのみ往來して、唇とか、眼とか、明日の會ふ瀨などとのことより以上に昇らず。只管過去の事ばかりに溯り、再び見、再び聞き、再び觸るといふ意味にて、復た手を握りつつ相交遊し得んことを願へり。わが切りに戀ひこがるる者を知り且つ愛するの動作、これ以外に無しとなせり。形骸を離れて、別に其者の靈魂の存すといふ事を考へ能はざる

なり。假令存すとしても、喜怒哀樂の情ある人間の靈魂といふにはあらずして、寧ろ氣味惡く想はしむる幽靈なり。靈魂につきて如是の感情の存する間は、死骸は、靈魂よりも愛すべきものとなさるるなり。靈にて觸るといふ高意を解し、五官の奴隷たる境遇より脫却し、死すべきものに向ひし愛情が、死なざるものに向はざる間は、慰籍の來らんやうも無く、又わが心の淨化も望むべからざるなり。抑も愛といふものは、その愛する者が、形骸を具備して存せざるやうになりても、依然として尙ほ繼續し、現世に於ても、來世に於ても、活くるものなりとの事實を了解するにあらざれば、吾人は到底靈の自由を得る能はざるなり。現世に在る吾人にして、此理を悟る時には、逝きし靈魂が、氣味惡くも無ければ、又漠然模糊たるものにもあらずなり、深く愛すべきものとなり來るなり。かくして愛せられもし、又愛しもせらるべきものなるを知るに至り、過去の無き日は悲しきよりも、寧ろ嬉しく覺え、生命のうちに死あるにあらずして、死のうちに生命ありと大悟するに至るなり。觸らんとし、見んとする、物質的なる思想及び願望が、漸やく微弱になり、終に消滅して一層高きものに一變するまでには、幾多の月日を要することとならん、悟道は幾多の苦惱煩悶を經て始めて得らるべきものなればなり。甦れる基督に我が心を觸られたる人にして、能く此境に臻るを得。此勝利を得れば、憂愁苦悶は、一掃跡無きに至らん。吾人の信仰も亦一變するなり。

人は死者に對して有する悲歎を、一見人情に反するが如くに拭ひ去ることも出來、また悲歎の爲に全く打ち破られもするなり。愛にして活きて存せずんば、吾人は敗れしなり。愛も悲歎と共に枕を併べて死し、又は新印象が既存の舊印象を押し流すに於ては、吾人は時間に制せられたる眞箇憫むべき時間の奴隸なり。忘るるは、

亡ぶるなり。後に殘る打勝てる愛は、悲を刺殺して、悲のうちに存せし力を我れに汲取す。愛にして存すとも、若し堪難き悲歎悔恨として活きて存し、他の興味の成長發達を妨げ、死兒の齡を數ふるが如き腑甲斐なきことをなし居ては、吾人は全く敗られしものと謂ふべし。過去に執着するものは、一層幽高の事物に躍飛するを得ず。佛朗西の一記者曰く、「逝きし者を戀しく思ふ情は、歲月の如何ほど推移するも異りなし。ただ其感化力は日に日に減少し、日に日に我を遠ざかり行きて、元に還る。洪水退き去りて原野を殘せるが如くに宛かも吾儕を殘し去るなり。多少肥沃せられたるは疑もなけれども其以前と同じく陸地なり、水にあらず。殘る月日のあひだ我れは依然たる我にして、異れる他のものにあらず」と。愛する者に死に別れし當座の悲が、變じて、悲、死、或は時間に對する愛の勝利となるまでは、勝利は獲られたりと稱し難し。蓋し此進境に達するは、幾多の鍛錬を經過したる後と知るべし。人として悲哀苦悶に遭過せぬ譯にはゆかぬべし。人の信仰とても常に間斷なく靈の親交を保つほどに強くなることも容易なるまじ。然りながら、萬物蕭條の嚴寒のうちより、極めて徐々と極めて苦しく生れ來る百華乱發の春光は、始めには尙ほ多少の悲風淋漓の痕跡を包みしかども、終に平和及び喜樂に達したるなり。吾人が世界及び宇宙を以て、生者死者を其中に包括する、神人兩性質を帶びたる不朽なる愛の家と考ふるに至るは、餘程の鍛錬を經たる後なり。然れども進境茲に達すれば、過去は愈々光を放ち來り、愛も力も、一旦これらを有したる我が手より何者も奪掠し得ぬ所有となるなり。

事は之れに盡きたりとなすか。否、吾人は復活の最後の希望を有して、再會の約束を有す。これの未來なくんば、未來は暗黑なり。これらの約

束は、餘りに美はしくして捨つるに忍びず。吾人は五官の媒介に因らで、相交りつつ滿足せざるべからず。幻により、使言により、形の顯現により、科學的証明により、吾人は死者を我が所有となすを得ざるなり。夫れ吾人の生涯を淨化する深く切なる思想の時(死者に接する時)に於て、我が靈、基督と直交するに至りては、損失は、活ける愛に一轉するなり。煩悶は鎭靜し、感覺に訴へんとする淺慮も生ぜず、過去を忍ぶ女々しき情念の押流されたる時に及で、始めて顏の光、音聲、手の壓ゆる力は、返へり來るなり。さながら預言の如く返へり來るなり。基督、死より甦れる故に、その民も亦同じく甦るなり。此世は、貴き種子蒔かれてあり。基督に合躰せられたる躰まかれてあるなり。十二月の夕陽により殘されたる墓上には、鐵と黃金の日脚あり。黑き日の脚と、光明の日の脚とあり。地は基督の有なり。その意味は吾人が往々解するよりも幽邃なり。甦れる基督は、その實を一瞥し給ふとき、主が曩きに碎かれたる百骨は、喜をなし。谷々は穀物におほはれて笑ひ歌ふべし。

福音は積極的宣言也

『大英週報』所載

自個の生存する時代の特質を餘りに積極的に指稱するは害こそあれ、益なき業なり。宛かも身みづから之れに生涯するものなるにより、全體を評するにしても、將た其一部分を評するにしても、兎角公平を失するの危險なしとせず。建築に於ける如く、眞理の上に於ても、完全にして且つ均整を得るといふことは、極く緊要なるとなりとす。これに反して、自身の生存する時代を消極的に論ずるは、これを積極的になす場合よりも遙かに危險少なく、現今の如き時代に於て特に然りとなす。蓋し現時代は、確信自覺な

き時代と謂ふとも、吾人は其誤れるを見ず。是れ各方面に於て匿れも無き事實也。之れを哲學界に見よ。實在論、及び智識論の諸問題に就き、其分解の點に於ては巧妙至極にして、而かも其總合の點に於て極めて不健全なる、エフ、エチ、ブレードレイの名を連想すれば即ち足れり。情興の世界を見よ。リッチャード、ストロウスは近世に於る最も標本的の者ならん。その音樂は、人心の奥底に潜伏する者を表現するまでに熱誠なり。精錬なり。その感興の力驚くべきものあり。然れども其發聲に至ては到底古人と比すべくもあらず。更らに詩文界を見よ。ワーズワース、若くはバイロンにあらはれたる人生および自然界の觀察は眞實明白にして、吾人これと殆んど想を交ゆるを得べきまでに活如たり。然れども是の如きは、これをスチーブン、フヒリップスの美言佳句に求めんとして求むるを得ざるなり。更らに一轉して活動の世界を見るも、吾人は同一の特色を此處にも見るを得べし。この特色の最も顯著なる政治界の事は暫らく措て問はず、これを外にして吾人は社會的運動の殆んど諸ての部類に之れを指摘するを得るなり。世間善業を行さんと眞底の心より望むものすらも、その最良法を知らざるばかりに躊躇して敢て斷行せざるなり。皆明白にして斷々乎たる命令の語を得る能はざる也。世界が最も必要なるものとして俟てるは、預言的指導也。自個の行すべき正しき事の何たるを知るの度、さらに一歩の進境を見ば、正しき事を行ふもの世間さらに多かるべきなり。善良の事業にして、今日着手を躊躇せらるる所以のものは、無論半は人性自然の怠慢心と、劣等なる利己の誘惑に因るものなるべきが、半は又善良なる人々の心に於てすらも、自知確信の缺如たるに因れり。思想に於ても、行爲に於ても、現今の時代は、積極的宣言を欠けり。天下吾人に警告するに眞個

偉大なることを以てするもの無し。但し如上の現象は、基督敎の傳道と甚だ密なる干係を有す。夫れ基督敎は絕大なる宣言なり。是故に徹頭徹尾積極的宣言なき時代に處し、福音を傳唱せんとする者にありては、容易に犯し入らんとする危險と、特に盡すべき責任の存するを承認すべき也。

抑も現今の如き時勢に於る重なる危險は何ぞ。基督敎は一般の公認するところとなり、又た或る意味に於ては、其所說切りに奬勵せられおるにも係らず、實際その感化を受けんとし、若くは之れを確信せんとする精神が世に存せざる事なり。怪男兒ボルテヤの現れたる時代の如きは、彼れ切りと基督敎に反對して或ものを熱心に主張したりしなり。然れども現今にありては進で之れを斷行するもの無きなり。敎會は公けの場所と認められ、人亦宗敎上の議論、殊に基督敎に關して是非の論を鬪はさざるにあらず。されど、つまり世間は熱心に信ぜんともせず、また熱心に否定せんともせざるなり。かくの如き時代に當りて敎會に臨むべき危險といふは他なし、敎會が世間の此種の半知己を得て容易に滿足し、基督敎は着々進歩しつつありと想像して放任しおくこと也。

基督敎は是の如くして滿足すべきものなるや否や。斷乎たる確信大知を喚起するを得ずんば、斷然否定せらるるの勝れるに如かず。信じもせられず、さりとて否定もせられずあるよりは、寧ろ其何れかを欲す。基督と其敎訓に對し、之を信ぜずんば、寧ろ進で之を否定せよ。故に基督敎をして半知己に滿足する危險より免かれしめんと欲せば、人心を奮激して之れを信ぜしむるか、否定せしむるかに在り。福音は單に議論に非ず。原理に非らず。思辨に非らず。その偉大なりと稱する點は、その積極的宣言に存す。絕對者の存在及びその性質を論ずること、豈に

難事ならんや。難きは、失望者に「神、君を愛す」と、實を籠めて告ぐる事なり。贖罪教義を立說する、固より容易なり。然れども臨終の人に、其罪赦されたりと耳に口寄せて語ることは豈に容易ならんや。容易なりと感ずるは不信の輩たるを自白するものに過ぎず。靈魂不滅說を考證するは面白きことなり。死にたる愛人の傍に、悲哀極まつて無言のまゝ兀座する人に對て、來世の希望と信仰を告ぐるは、豈に此の如き容易なるものならんや。是れ死の如何なるものなるかを知れるものが、語らんとして我が唇、覺えず震ふほど嚴肅なる事實なり。然り、基督敎を傳へんとする者は、凡て是等の事を告げざるべからず。基督敎の說敎者と稱するは、是等の事を多言多辨し得る人との謂ひにあらず、この事實を單純に、充分に、滿足に、熱奬斷言し得る者の謂ひ也。基督敎を興味ある問題の一となすのみにして止まらば何の詮あらん、更らに一步を進めて、之を一の積極的宣言として確信せざるべからず。殊に現今の時代の如き、消極的時勢に於て之を必要とす。此種の積極的宣言の或るものを、如何にして人々の心に通ずるを得るやとの事は、目下基督敎の傳道者が、心を一新して三省すべき問題なり。ここに參考までに記すべきもの三あり。

(1) 凡そ基督敎の傳道者たる者は、己れが宗敎の事に就ては唯に眞底より興味を有つといふばかりならず、基督敎の眞理を識り、且つ信ずるものなりといふことを、世人の心に貫徹せしめざるべからず。かくなすを得ば、人の一生を動かすを得べし。然らば之れを達するの途如何ん。誰人の目的にても大望心にても之を獨殊のものたらしむる献身的精神の深淺により、わが事業を影響することの多大なる金錢上社會上の利得に對する干係により、傳道事業以外の正當なる事業の吸求力に對する干係により、自己の執る

所の傳道事業が、職業の一にあらずして、わが唯一の天職なる事を表はすによりて達せらるる而已、此最後のものに就ては、傳道者たるもの、正當なる事業より必ずしも絕つを要せず、又絕つべきにもあらざるべし。唯我れは、文學、科學、乃至政治等に關し、基督敎の使言よりも更らに多くの興味を有し、更らに之れを重要視するものと思ひおるといふ考を夢め人に起さしむべからざる也。傳道者の事業の成功と失敗とは、その事業に於る積極的宣言の消長と伴ふ。他の事業に於る堂々たる成効も、傳道事業の不成効を補ふに足らざるなり。傳道事業は、人間の思慮分別すべきものを示すものなり。從て是れ確乎たる自覺大知を人に與へんとするの事業なり。かくの如きものなれば、述ぶる當人が其述ぶる所の事に就て眞箇確實なる自覺誠心なくして、如何でか人を感應せしむるを得んや。博士ヱー、ビー、ダビッドソン嘗て曰へらく、牧師が司牧する敎會管轄區に在る所以の最大目的は、勉强にもあらず、訪問にもあらず、說敎にもあらず、「敎會にて語れる事が實なり」との事に、身自から說明となるに在りと。

(2)　次に現時代に對する說敎は、基督敎の積極的宣言を單刀直入に主張するものならざるべからず。博士ダビッドソンが適切に述べたる如く、敎會に於て語らるべきものは「實」なるものならざるべからずといふを第一とし、次に、敎會にて語らるべきものは、大陳述を中心となしたるものならざるべからず。現今の說敎の多くは、宗敎の圍ひの外の事なり。基督敎と例へば美術、文學、若くは社會學との間に橫はれるものなり、夫れ基督敎は一の眞理にあらず、唯一の眞理なり。故に一切の眞理に觸るるものなりとす。凡そ人文に關するとにして、インカーネーションの宗敎に無關係なるもの、一もなしと謂ふも可なり。然れども單刀直入に切り入りて信ぜざる

を得ざらしめ、人を一變する信仰は、基督教の中心に屬す。固より現今に於て、或る種の思想家のうちには、兎も角健全なる點に重きを置きて之れを主張するの傾向なきにあらず。然れども是等は畢竟するに人々の思想問題に過ぎざるなり。或はサクラメントを守るの方法と云ひ、或は禁酒論と云ひ、或は世間の遊戲に加はるの是非と云ひ、是等は案外にも基督教の陳述に於て稀に見るごとき語勢と明快を以て、說教者の口より聞くところなり。然りながら是等の如きは沫餘の問題に過ぎず。基督教の說教者は、神と人、罪と救、生命と靈魂不滅に關する根本的眞理を以て、世人の心を振盪するを目的となさざるべからず。斯く爲さんと欲せば、是等の問題に單刀直入して之れを說教の根本的要素となすにあらざれば能はざる也。基督教說教者は、福音の陳述、例へば神人類を愛す、基督人類を救ふ、死は人間の最後にあらずといふが如きを、常に其主題となして高く標置せざるべからず。苟にも是等の大問題を敬而遠ざくるが如きことあるべからず。吾人は或る隨意なる句節の巧妙艶麗なる獨創的の說教を聽かんよりも、聖書の或る大眞理を、單純にても啓示したるものを聞かんと欲す。一二の簡單なる句の外、最早聞き取ることの叶はぬ臨終者の病床に侍するの時、われ之れに告ぐる單純にして而かも滿足至極なる言を有するや否やと、自問自答して滿足を得たる後に、始めて敎役者となるも亦敢て晩からざるなり。此の如き人は、所謂基督教の說教なるものは、根本より、積極的宣言なりと知るべく、假令いかに健全の分子その中に存するとも、若し信仰の道の主要なる事實および眞理これに欠けたらば、既に其用を誤れるものなるを知るべき也。諸て是等の事は、明快に、包まず、熱心籠めて、反覆丁寧に主張せらるべきなり。

(3) かく論じ來れば、おのづから第三點に移ら

ざるを得ず。或は此點は既に論じたるうちに含まれおるものと謂ふべきか。兎も角一言すれば、現今の如き確信なき時勢に對ては、說教者たるもの、須らく確信大悟せしむるといふ一定の大方針を立てゝ教會の講壇に臨まざるべからずといふ事なり。わが爲さんとするところの事を、明白に我が面前に標置するものにあらざれば、人何をか此世に爲し得ん。傳道者の事業は、目的ある事業なり。目的とは他なし、人の心に自覺を生ぜしめ、信ずるに至らしめ、意志を一變せしめ、末日の審判の事實と、基督にある神の恩惠を悟らしむるに在り。基督教の講壇に立つもの、苟にも此の大目的を等閑にするが如きことあらば、社會をして自覺大知せしむること、到底望むべくもあらず。今は故人となれる大說教者ムーデーの如き人の說教の力は、主として其目的の明亮なると、この目的の爲に確乎不拔なりしにあり。

以上論じたるところは、基督教の眞理を現今の時代に印象せんと試むる者の注意すべき條項ならん。固より之れ容易の業にあらず。容易なりと感ずるものあらば、これ自ら慢して輕々に事を行ふの輩なり。これ根底に於て欠損あるの輩なり。祈禱なくして事を行ふの輩なり。一言にして言はば之れ神なきの徒なり。世間豈に神の事業を行ふに神なしに行ふほどの惡質の滑稽あらんや。これに反して其事業の高貴至極にして至難の業たるを感じ、殊に現今の如き時代に處して其然るを知るものあらば、即ち是れ預言者及びアポストロに權威と成効を與へたる信仰の道を了解したる者、且つ之れを確認せんと心切に冀ふの人々なり。更らにダビッドソンの言を引かんか、「むかし、我れに立脚地を予へよ、然らば我れ世界を動かさんと曰へる哲學者ありき。知らずや、聖書は吾人に立脚地を予ふ、即ち神なり」と。吾人は筆を擱くに先ち、假令一

言なりとも言はで止むを得ず。この神こそは、吾人をして其說く所を强むる力なり。さらに又この傳道の事業を完成するに欠くべからざる忍耐の由て來るところ也。單刀直入にして愛に富める言論は、とかく近代の說敎に見るを得ざるものなり。傳道は單刀直入ならざるべからず。抑も又忍耐を兼ねざるべからず。吾人の立脚地は神なり。而して神の立脚地は何處ぞ。聲あり曰く、『見よ、我れ戶の外にありて叩く』と。

靈魂不滅の確信

『アウトルック』投書

最も大切なる考案を後廻にして、先づ此の信仰に對して擧証の義務は何の說をとる人に在りやを示さば、正當の結論に達する途掃ともならんか。二說相競ふ。一は曰く、心意は肉體の作用なりと。他は曰く、肉體は心意の機關なりと。兩說何れが正當なりやを判定するには、心意の成遂せる事實に訴へざるべからず。神經感覺よりして秩序整然たる思想界を組成し、星辰を測量、解剖し、世界の大魔力を利用し、技藝、文學、宗敎を創作するは心意の作用なり。此に由てみれば、肉體は心意の機關に外ならず。果して然らば、擧証の義務は機關の目的やがて機關使用者(心意)の目的なりと唱ふる人に存す。

數理証據に基ける確信と道理ある蓋然証據に基く確信とは互に相異なり。是は固より認むべき重大の區別なり。万有の引力法につける吾人の智識は前者に屬し、吾人の云爲行動に於ける判斷は(非常の塲合に於てのものも)後者に屬す。

かかる塲合に於て吾人が要求する最上のことはそが爭ひがたき眞理なりや否やといふにあらずして、道理らしき否やといふに在り。尙記憶すべきは、道理に合する日常の生活のみならず、精密なる科學に於ても、信仰は實に其根據となる

といふこと是れなり、即ち自然界の欺かざることを信じ、心意中に存する知覺的及合理的能力を信ずる信仰は此に外ならず。

靈魂不滅に對する「哲學的」證據を要求するものは、いかに歷史的證據の强ければとて、證據として之に滿足せず。彼等は墓の彼岸に生命の存續することを信ずる根據を、此世界の現象中に求めんとはなす。然り而して此根據は實に之を現世界に發見し得べし。世界に一種の生命ありて、理性の滅却せざる限り、道理上肉躰の死と共に滅すべしと思はれ得ざるもの之れあり。

蓋し此の世界に二種の生命ありて、其發達の方法互に相反するを視れば、其彼此分別あること明かなり。本題を論ずるに此點を認むるは死活の決するところなり。甲は動物生命にして、優勝劣敗の下に此世界を收容所有せんと勵みて、自ら發達するものなり。乙は道德上の生命にして、此世界の後に生き殘らんが爲に此世界を犧牲として以て自ら發達するものなり。歷史は果敢なき浮世の榮華快樂を顧みずして、永へなりと認めたる善を求むる幾多の人を示す。道德宗敎の進步の歷史とは、道德性が此肉性の切なる要求に抗して捷利を得たる記錄に外ならず。

左れば議論の燒點は、此く戰ひ勝ちし勢力は果して妄想より出づるや否やといふに在り。

傳へ云ふ。フレデリック大王はキリスト敎の眞理たる明證を已の牧師に問ひ、而かも時間を省かん爲め、尤も簡單にと要求しぬ。牧師直に答へて曰く「陛下よ、猶太人なり」と。靈魂不滅の簡單明確なる證據を要むる人あらば、予は單に「殉敎者」なりと答へんとす。

かの榮光ある殉敎者の隊が、寧ろ其生命を失ふも、其德を賭し背んぜざるを見るや、人は自ら問はざるを得ず。「彼の德は果して其呼吸より長く存するや」と。

予は答へて然りと曰はんとす。而して其證據は

哲學科學の共に重んずる公理、即ち自然は欺かずといふ道理に存す。もし自然を信じ得ずば、宇宙に信ずべきもの一もなけん。

さて生命の根本的本能は自家保存にあり。吾人は肉躰を溺らさんと脅かす潮流の中に在りて實に此本能に信頼す。而して良心を汚さんと脅かす艱難辛苦の裡にも此本能は同じく信用し得べし。肉躰良心何れにせよ、自家保存の本能は人の得らるべき或る善を指し示し、奮勵努力は之を得るに必要なりと敎ふ。此必要を附して善の到達を人に約するは甲乙共に均し。左れば其一を指して忘想と謂ふの理由あらず。道德生命の本能が良心を潔く保んとて、肉躰と離別して顧みざるは、破船に遭ひたる船客が岸に游ぎ着かんとて、其財嚢を拋つて生命を濟ふ動物生命の本能と、少くとも同じく眞實なるものにあらずや。されば吾人は、眞勇を具へたる殉敎者は、其肉躰を失ふとも其德を有つべきことを信せざるを得ず。然れど彼もし德と相離れ存すべからざる生命其者を有つにあらずんば、いかで德なるものを有し得んや。此實際の生命なくば、德とは空名に過ぎずして、實在せざる或物の記憶に止まらん。果して然らんか、尤も高尙なる生命の樣式は尤も空虛なりと謂はざるべからず。動物本能は殉敎者の肉體を焰の中より救はんとして敗北し、道德的本能は其德を垢汚より濟はんとて勝利を得たり。然るにもし甲は乙よりも一層確實なる善を指し示すといはば、人性の至剛至聖なるもの、終に合理の說明を得ざることとなるにあらずや。

此論を全く承認せざる人と雖も、少くとも其說の道理多きを感ぜざるを得まじ。數學を外にしては蓋然の證據にて問題を決するが世の常なり。學術は敎授チンダルと共に、宇宙化氣（エーテル）なるものを假定し、光の作用を正當に證明せんと欲せば、此假定を信認せざるを得ずと

いふ。然り而して此論法たる豈に吾人の靈魂不死論と何の異るところあらんや。

是によりて觀れば現世に於て旣に一種の生命の樣式若くは段階ありて、之を道理に照し見るに、浮世の有爲轉變の運命を免るるものなることは確かなり。之を疑ふ人は少くとも、之を證定する事實の研究を怠るものと謂はざるを得ず。

以上の議論は畢竟緒言のみ。靈魂不滅の確信の基くところは別にこれあり。ローマのシセロ嘗て一事實を指點せしことあり。蓋然證據によりて此問題を決する人に取りては有力の言なり。彼は曰く、來生ありとの豫想は尤も高尙なる心靈に尤も深く根すと。來生の最上確信は道德宗敎の生涯を送るよりして來る。是れ其唯一、充分の證據なり。疑惑の雲を拂ひ得ぬ人も他人より此信仰を借り來ることは叶はず。由來心裡に存する確信は他人に傳へがたきものなればなり。彼は此信仰を產出するキリストの如き生命を自ら心に修めざるべからず。イエスに從ひて神的生涯を修養する人々には、キリストと同じく、かかる生涯を送るよりして來生の確證其人に供せらるべし。かかる人はキリストと共に「予は予が何れより來り、何れへ行くを知る」といふを得べし。かかる生涯を送れる人の碑文として、キリストとなりにし、物質の力は、形をかへて、きえ失せぬ、と錄し得るものは、唯だ盲目の唯物說あるのみ。此かる生涯が征伏し了したる現世は、到底此生涯を亡ぼし得べからずして、其前方に認めて奮進せる彼岸の世界こそ、眞に其故鄕なるべけれ。

聖書の研究

神學博士　ジー、エフ、ペンテコスト

エヅラは心をこめてエホバの律法を求め之を行ひてイスラエルの中に法度と例規とを敎へ

たりき（以士喇書七章十節）

舊約時代の祭司又は預言者として、一代に名聲を博せし所のエヅラが、能く其の改革の大業を成就せしは、彼が神の言を深く研究せしが故也。彼が神の言を熱心に「求め」、之を躬ら「行ひ」、且つ之を國民に「敎へ」し事は、是れ彼が勢力の源泉、成効の秘訣たりし也。然るに世間には聖書に據りて人々を敎ゆる事を以て古風なりと思惟し、世俗の書籍に對すると同じく、僅に說敎の中に聖書の一二句を引照、挿入するに過ぎざる者多きが如し、是れ現今の講壇に勢力なき所以に非ずや。乞ふ以士喇書七章十節を援て少しく之を論せん。

（一）「ヱホバの律法」　ヱホバの律法とは舊約聖書の前部、即ちエヅラの時代までに傳はりし所の舊約聖書の一部分を指せるならん。實に聖書は神が我儕に與へし所の啓示、又は律法なるが故に苟くも敎役者たる我儕は、彼のダビデが神の律法を靜に考へしが如く、大に熱誠を凝して之が研究に從事せざる可らざる也。果して然らば、聖書の中よりして說敎の材料を獲ると頗る饒多ならん。知るべし聖書を基礎とせる說敎には、句々靈あり力あるべしと雖も、世俗の書籍を參酌して僅に製作したる說敎には、一點の精神なく生氣なき事を。顧ふに若し耶蘇基督が此の日本に來り給ひしならば、彼は此の日本譯の聖書を基礎として、其の說敎を爲し給ふならん乎。

（二）「心をこめてヱホバの律法を求む」　エヅラは世人の如く聖書の研究を輕忽に附すると莫く、常に熱心を以て之を研究せし也。按ずるに我儕の中には聖書の研究を怠る者、又は時に應じて不規則に之を研究する者、若くは義務心に驅られて漸く之を研究せる者等は非ざる乎。若し說敎者にして聖書の研究を怠るならば、例令その說敎は勢を逐ふて琅々口に上り來るの態あ

りと雖も、其の多くは無意義の語を臚列せしのみにして、深く聽者の心靈に觸着する事あらざるべし。曾て米國に一人のヴァイォリン師來りて諸所に其の技を演せしに、頗る巧妙にして大に聽者を感動せしめける。然るに彼は這般の大技量を有すと雖も、須臾も其の技を輕忽に附すると莫く、一回の演奏に出るには常に六時間餘の稽古を積み、其の練習の爲めに慘憺たる經營を凝せりと傳ふ。彼れ人に語りて曰く「予その稽古を怠ること一日なれは、予の五指は硬くなりて自由に樂器を彈ずるに難く、更に之を怠ること二三日なれば、其の調子は大に亂れて同好者の譏を免ること能はざる可く、尙ほ更に之を怠ること數日なれば、終に一般聽者の厭惡を招くに至らん」と。豈に音樂者のみならん乎、說教者も亦た斯の如し。說敎者にして聖書の硏究を怠ること一日なれば、彼は靈魂に觸着するの語を吐くこと能はざるべく、更に之を怠ること二三日なれば、其の語る所ろ多く平凡無奇に流れ、爲めに同輩の譏を免ること能はざるべく、尙ほ更に之を怠ること數日なれば終に一般聽者の回避を招くに至らん。故に我儕はエヅラの如く精神を凝して聖書を研究し、混々として盡きざる聖書の源泉よりして、說敎の材料と思想とを掬せざる可らざる也。

（三）「斯る人はエホバの法を喜び日も夜も之を思ふ」　此の詩篇一章二節の言は、エヅラの心事を說明する恰好の註釋なりと謂ふべし。我儕は聖書を讀むに義務の念慮に驅られ、或は漫然その意の向ふに任せて、不規則に之を亂讀すること莫く、彼のエヅラに傚ふて之を愛慕し、日夜之を思念せざる可らざる也。殊に本節の「思ふ」とは英語のメヂテート、即ち默想すとの意なる事に注意すべし。恰も彼の牛羊の族が食物を反芻するが如く、若し我儕が聖書を讀みて直に之を嚥下する事なく、尙ほ其の意味を反芻せしなら

んには、屢ば之を咀嚼せる間に、絶無の甘美を味ふに至らん。淸敎徒の語に曰く、「神の言には無限の光あり」と。聖書は實に無限の寶庫なれば、之を研究すると愈々深ければ、其の興味も亦た益々深かるべし。諸君は彼の採金術に二種の別ある事を知らん、即ち一は金礦附近の河流を浚渫して、其の金砂を淘汰するの術、他は鐵槌を以て金鑛を深く穿ち、巖石の中に金塊を求むるの術也。」而して前者は其の勞少なきが故に得る所亦た少なく、後者は其の勞多きが故に得る所亦頗る多し。若し我儕が前者の採金術に傚ふて、僅に聖書の字句を卒讀して其の皮相を汲むのみなれば、其の益する所極めて少なからん、反之、若し我儕が後者の採金術に傚ふて、深く聖書を硏究して其の蘊奥を窮むれば、其の益する所亦た頗る大ならん。

(四)「エホバの律法を求めて之を行ふ」 基督敎は思辯の宗敎に非ずして實行の宗敎也。基督の語に曰く、「之に依りて行ひしものは巖の上に家を建てたる者に喩ふべし」と。畢竟するに聖書研究の要は、單に之を愛讀するのみに非ずして、之を實踐躬行する事にある也。說敎者が講壇に起ちて神の言を喋々すと雖も、若し之に伴ふに實行を以てするにあらざれば、其の千百の言論は空しく徒勞に歸すべし、若し我儕がエヅラの如く神の言を親ら躬行するに至らば、其の勝利は期して俟つべき也。聖書に曰く「我は世の光也、世の鹽也」と。則ち神の言が我儕の行を通じて、世を潔むるの鹽、暗を照らすの光たる也。

(五)「心」 エヅラは神の言を研究するに、「心」即ち良心と感情とを以てせし也。然るに方今世間には、彼の地質學者が死物として地層を研究するが如く、一片の愛情を輸することなく、頗る冷淡なる心情を以て聖書を研究せんと欲する者ある也。蓋し一般の學術を研究するが如き

方式に依りて、神の言を研究せんと欲するは不倫も太甚しき者と謂ふべし。何となれば神の言は學理的、分拆的に研究すべきものに非ざれば也。彼の科學の泰斗ハックスレーが「事物を研究するに恐怖心を懷く勿れ」と謂ひしは、咽喉以下の事物の研究に對しての訓戒にして、咽喉以上の事物の研究に對しての訓戒には非ざるべし。要するに地層若くは昆虫を研究するには、ハックスレーの言或は可ならんも、神の言を研究するに就ては決して然らざる也。若し人ありて昆虫を試驗するが如くに、人間の愛情を試驗せんと企圖する者あらば如何、諸君は必ず噴飯絕倒して其の痴愚を笑はん。是れ他なし愛情は之を化學的に分拆すべきものにあらざれば也。曾て英國の化學者ファラデー氏は多數の兒童を集め其の面前に於て「慈母の涙」の分拆を試みし事あり、則ち一日彼は試驗管に數滴の母の涙を注ぎ容れ、之を酒精ランプに載せて蒸溜せしめ、然る後ち衆童を顧み一揖して曰く「諸子、予が試驗の結果に依れば、慈母の涙は二三滴の水と少量の鹽なるのみ」と、之を聽ける兒童は無心の顏面に怪訝の色を浮べながら「先生、我母の豐頰を流るる彼の涙が、果して水と鹽との混合物ならば、予は屢ば彼女を泣かしむるも可ならん哉」と。蓋し假令慈母の涙は鹽水に過ぎずと雖も、其の中には無限の愛情を含める也。顯ふに這般の比喩は移して以て彼の聖書を學理的に分拆して、得々たる人士の愚に適用する事を得ん乎。聖書は神の愛の記錄也、若し化學者の試驗に依れば、基督の十字架の寶血は血球と白球との化合に過ぎざるならん、然れども其の十字架の贖罪には、神の絕大なる愛情ありて存する也。若し敬慕愛戀の心情なくんば、例令聖書を讀むこと千百遍なるも、遂に其の眞意を窮むること能はざる可し。我儕は滿心の愛情を傾盡し感恩の情を發揮して聖書を研究せざる可らざる也

福音叢誌第八拾七號目次

説教

雜錄

FUKUIN SŌSHI.

NUMBER 87.

AUGUST, 1903.

CONTENTS.

福音叢誌第八拾七號　明治三十六年八月十日

説教

信仰に由りて義とせらるとは何の意ぞ

故　總長　ジョン、ケアド

人の義とせらるゝは律法に由るに非ず唯だ耶蘇基督に由ることを知るが故に、我儕も律法の行に由らず基督を信ずるに由りて義とせられんが爲に耶蘇基督を信ず、そは律法の行に由りて義とせらるゝものなければ也（加拉太書第二章第十六節）

吾人が屢耳にするが如く、現代の思想は既に十六十七世紀の信條や告白の見地を距ること遠く、就中信仰に由りて義とせらるる事、基督の義のみ獨り功德ある事、基督を信ずるに由りて靈魂が直に救はるる事の如き諸教理は、最早現代人士の心を繫ぐに足らずなりぬ。從來是等の諸教理は、單に聖書の權威を楯として多くの人に受容せられ、且つ理性を壓伏して之に屈從せしむるは、宗教の骨髓なる自己を棄つるてふ事の一部分とまで見做されたり。然れども、吾人は

今や理性即ち科學的信仰と宗教即ち神學的信仰とを全然區別して、一方にて拒絶するものを他方にて受容する能はざるなり。吾人の宗教的信仰若し吾人の生活上に實際的感化を及ぼさんとならば、是非共科學や哲學や道德に於て否な人智全體に於て決定されたる主義思想に一致する所なかるべからず、少くとも之に反對の傾向を示すべからず。天啓の眞理は、智識上道德上の難題に光明を與ふべきものにして、之に一層の困難を加ふべきものに非ず、信仰を助くべきものにして、之を重荷と感ぜしむべきものに非ざるなり。

諸君即ち問はん、吾人若し卿が前に揭げたる諸教理を理會せんとせば、彼等は果して道德の根本原理とも稱すべきものと衝突する如く見ゆることなきか。精神的性質道德的價値が甲の人より乙の人に移るてふ教理に對して、吾人は果して何等かの眞意義を附し得べきか。個人性が精神的存在物の中心なる事、吾人がおのが行爲に對して責任を負ふべき事などは、豈に吾人の道德的生活の根本的確信に非ずや。吾人相互の關係如何に密なりとはいへ、吾人各自は他人が代つて盡す能はざる義務を有するに非ずや。吾人は他人の有を讓受けて富むを得べきも、他人の善によりて自ら善人たるを得べきか。甲者の義を乙者に歸するは、方形の性質を圓形に歸するが如き矛盾に非ざるか。人間の法廷にては甲者

乙者に代り得べし、而かも一方には不明他方には詐僞の議を免れざるなり。然るに、吾人は全智なる裁判官を人を誤りて見る如き不明者と見做し、若くば吾人を判斷するに吾人の品格行爲に由らず吾人と異れる義人の品格行爲に由る如きものと見做し得べきか、基督を信ずる事が如何なる事を意味するにもせよ、そは矢張基督と吾人との間に差別を置くものならざるべからず。如何となれば何物も甲の靈と乙の靈との區別を撤去し能はざれば也。

若し基督にして最高完全なる人的理想たらば、此の理想を信ずる信仰が吾人を益するの道は、たとひ吾人が到底達し能はざるにもせよ、而かも漸次に近づき得べき模範を吾人の前に置くことなり。然れども、吾人が純潔高貴なる理想を信ずればとて、一躍して凡ての道德的進步が通過すべき長途——不斷の訓練と長日月の忍耐とによりて漸く惡しき性情傾向を矯正し圓滿なる道德的品格を建設する行程——を飛越し得べきか。吾人は一朝に智識ある人となり得ざる如く、一夕に善人となり得ざるべし。吾人は無智者が魔術に由て卽時に凡ての智識學問に達するを想像し得る如く、罪人が直に純潔完全の域に入るを想像し得ざるに非ず。然かも事實は如何なる天成の才能も敎育修養に代る能はざるを證す。その如く道德の進步も同樣の法則に從ふべきものには非ざるか。吾人が學問智

識に至るよりも尙一層平坦砥の如き大道は、果して吾人と聖善との間にあるものにや。吾人は最初の一歩を以て道德的行路の全體を蔽ひ得べきか。一言すれば、人は自ら義たるの外他の方法によりて義とせらるるを得べきか、彼は單に他人の義を信ずる瞬間に全く義となるを得べきか。

以上の如きは、吾人が信仰に由つて義とせられ、基督の功德がその信徒に及ぶてふ敎理に對して普通呈出さるる所の反對なり。是等の反對は、此の敎理が神學組織に現るる如き頑固不靈の形式に對しては適中すべしと雖も、而かも余がその眞意義として信ずる所に對しては何等の痛痒を與ふることなし。行爲に由らず信仰に由つて義とせらるるとは、之を正解する時は、空しき一個の神學的條目に非ず、又た如何に受容し難くとも、如何に吾人の實驗と同情とに因緣なくとも、唯だ天啓たるの故を以て吾人の理性をして之に叩頭せしむべきものに非ず。之に反して、そは深く吾人の精神的性質及必要に應じ、敬虔なる靈性が悉く深遠なる同情を以て受容し得べき敎理たるなり。請ふ余をして簡短にそが然る所以を說明せしめよ。

人の品格の源泉は、外部より觀らるべきものに非ず。外部に顯るる行爲は、內部の精神力を量るに不十分なる標準なり、否な屢人を誤謬に陷るる標準なり。

人が有限なる生涯の狹範圍にて行ふ所の事は、到底精神の潛勢力を十分に發揮するに足らず。靈魂の眞相及實力に關して、外觀者は屢誤れる判斷を下し易く、僅に不十分なる部分的觀測をなし得るに過ぎず。獨り靈光一たび到れば人心の底までも讀み、眞にその人の過去を了解すると共に、その未來までも洞察する眼にのみ、行爲に由らず却てその源泉たるべき主義と無盡力とに由て人生を觀測する眼にのみ、斯かる眼にのみこそ、人の眞正なる性質と品格とは赤裸々に顯るるなれ。斯く神學上の術語を吾人日常の言語に飜譯したる原理に由りて、吾人は爰に行爲に由らず信仰に由つて義とせらるてふ事の意義を解し得るなり。此の原理を汎言すれば是なり、曰く、人間精神の眞正なる批判は、外部の行爲に由らずそが追求する理想に由ると。之を宗教に應用すれば是なり、曰く、基督教生活の神的標準は、外部の行爲にあらずその理想たる基督に對する熱心にありと。

此の普汎的原理は、吾人之を理會すること容易なり。行狀が品格の如何を定むる事、吾人が人を判斷するに彼の行ふ所を以てすべき事は、疑もなく眞實なり。彼が告白する信條も、彼が發露する道德的情操も、彼が有する敬虔熱信も、以て彼の眞實なる品格を測定するに足らず。是等は屢吾人をして誤謬に陥らしむ。

正統なる信條は唯だ一片の空文に過ぎざることもあらん。高尚なる志望も、優美なる情操も、溢るる許りの熱誠も、品格の深さと眞面目とを測るべき表號に非ず。誤なき試驗法は須らく實際的ならざるべからず。行爲卽ち生活の公明なるか利己的なるかに由りて、吾人はその源泉なる精神の高尚なるか野卑なるかを知る。されば理性の判斷にては、輿論の法廷にては、人が義とせられ若くは惡しとせらるるは、道德的行爲卽ち律法の行に由るなり。

然れども他の一方に於ては、斯かる批判法が多くの點に於て如何に不十分なるかを知るは、決して難事に非ず。それ行爲は思想若くば精神が發露する形式なり。而かもこはその本來の性質に於て既に不完全なる形式なり。此の表現的媒介は元來貧乏なるが故に、內心の富を十分に發露するに足らず。智的活動の範圍に於てすら、吾人は直に思想と行爲、主義と實行との間に懸隔あるを見る。たとへば、文學美術その他の智的活動に於て、おのが作物に對して最も不滿足なるものが、否な之に對する最も冷酷なる批評家が、最も傑出せる詩人畫家著述者演說家たる所以は何ぞや。一の美理想今や美術家の想像に浮べり。而して彼は形狀や色彩や筆舌の媒介によりて之を發揮せんと試む。而かも彼がその結果を見る時に、その畫を觀その詩を讀み若くばその演說を回想する時に、多數

人の賞賛を博するに於て成功したるその作物も、彼には屡奥深き不滿足を與ふることあり。その理由や他なし。想念は表出を距ること甚だ遠く、心裡に宿れる理想は、彼が實現せんと試める形式よりも遙に崇高偉大なればなり。自惚と滿足は凡人にあり得べきも偉人にはあり得べからず。一種の不滿足は慥に天才の特徵なり。

之と同じく、一層高尚なる技術、即ち聖善純潔なる理想を實行に發現する術に於ても、おのが行爲に對して最も不滿足を感じ、おのが義務を盡したる時にも尙ほ『無益なる僕』たるを感ずるものが、最も善良神聖なる人なることは、正しく之と同理に非ずや。何等の道德的理想なきもの、若くば低き理想を有するものは、容易く自己に滿足す。世には、たとひ積極的に惡人にあらずとも、全く高尙なる品性を欠き、社會的禮讓と便宜的道德の水平以上に出づることなくして、而かも十分に滿足しつつある幾千の人士あり。彼等は良心の刺擊を受くることなく、おのが失敗を耻づることなく、平凡なる心の海は精神的不穩の小波に由つて騷がさるることなし。然れども、吾人は如何にして、最も聖なる人士の傳記に見ゆる『道德界の矛盾』、即ち彼等が書遺せるものが最も甚しく自己を卑下せる文辭に富むことを說明し得るか。使徒保羅が自己を指して『罪人の首

長』と言へる時、彼が『我れ善を爲さんと欲する時、惡の我に在るを覺ゆ』といふが如き言――基督敎界の使徒たり豪傑たるものの口よりも、寧ろ痛く後悔せる重罪人の口に相應しき言――を發する時、吾人は斯かる文辭を以て單に針小棒大の言と見做すべきか。否な、此の誇張らしき卑己的文辭を說明するの道他なし。我が心中に輝き初むる無限の善理想に照さるる時は、他人の眼には欠點なしと見ゆる行爲も、甚だ疵瑕多きものとなるなり。耶蘇基督を知り且つ之を愛するに至りて、無限に神聖善美なる理想、道德的光明赫灼たる肖像は、保羅の心中に入り來れり。彼は猛烈なる確信を以て之を把持し、熾盛なる熱誠を以て之を渴仰し、是非共おのが身に之を實現せんと力めぬ。而かも彼の最上なる實行も、その目標を外づるること遠し。彼はおのが行爲によりて、到底神の前に義とせらるること能はざるなり。

尙ほ外部の行爲が品格を批判するに不十分なる標準たるを證するものあり。人の精神が行爲に發する度合は、重にその人の境遇及び機會の如何に依る。物質界に於けると同じく、精神界にも潛勢力なるものあり。此の潛勢力や、機會なき爲に開發せざることあり、境遇の惡しき爲に壓伏さるることもあるなり。肉體上の力に就てすら、吾人はおのが眼に觸るる行動のみによりて、その體內に

藏るる力の幾何あるかを判斷し能はざるなり。吾人の體內には自己も他人も氣付かざる未發の力ありて、適當なる機會一たび到れば爰に即ち開發す。非常なる場合に際して、義務若くば危險の衝動を受くる時は、是迄になき力の出づるものなり。たとへば、柔弱に育てられ風にも堪へぬ婦人にして、おのが愛兒の叫聲を聞くや否や、炎々たる煙焔を侵して屋內に飛込み、迅速堅固なる足蹈を以てその愛するものを戶外に連出すことあり。追手に迫らるる戰場の落武者や逃走せる罪人にして、非常なる力量を振廻すことあり。斯くの如く、道德力の發展も大に吾人の外部的生活の如何に關す。吾人の生活は多く波瀾なき生活にして、日常ありふれたる軌道を往來するのみにて、之に勇しき道德をも痛しき失敗をも現はすの餘地あるなし。吾人基督教徒の勇氣は、殉教者の運命に遭遇することによりて現れず。吾人が基督に對する熱誠は、主の爲に富や名譽や生命を棄つることによりて現れず。故に單に吾人が是迄行ひし所今行ふ所によりてのみ吾人を判斷するものは、如何ぞ是等の場合起る時に之に應ずるの力あることを知り得んや。

此の問題に關する某記者は、印度に爆發せる騷擾中に起りし出來事を擧げて曰く、余は曾て圍城の中にありし人の經驗を聞きたるが、彼はその時始めておの

が是迄十分に知り居ると思ひし人々の眞性質を發見せることを言へり。或るものは此の試驗石に觸れて失敗し、日常の交際に於て非難なかりし人も、氣の毒なる臆病、見苦しき狼狽、さもしき利己心を現せり。之に反して他のものは、落付ける忍耐、私心なき奉公、鷹揚なる勇氣を示したるが、想ふに此の危機に遭遇せざりしならば、世界は永久之を知るに由なかりしならんと。又た試に吾人の時代と基督教會史中の他の時代とを比較せよ。勇しく試錬に堪へたる人々の多くは、想ふに日常の生活に於ては人の注目を惹くに足らざる男女なりしならん。若し基督教主義を現すべき特別なる塲合の來るなかりせば、外部の生活は遂に內部の勢力を葬り去りたることならん。然れども、時は至りぬ。而して二者——一方には死、苛責、十字架、野獸の齒牙あり、他方には一言おのが信仰を否認して身命を全ふする望あり——その一を取るの必要に迫られぬ。而かもその返答は、屢使徒保羅の返答『我は我が主耶蘇基督を知るを以て凡の物を損と意へり』と同一轍に出でぬ。斯の如く、多くの謙遜なる信徒の心中には、隱れたる英雄的精神の潛めるありて、若し必要の迫るあらば、主の爲に如何なる事をも辭せざるべし。然れども、平凡なる家族的社會的道德以外に、溫和親切無私の行爲以外に、彼等の信仰が現るべき餘地なきなり。唯だ隱れたるに見

給ふ者のみ之を知り得るなり。

最後に考ふべきは、外部の行爲が基督敎的生命の無限なる進歩を測る標準に非ざることなり。行爲や事業は有限にして、智力殊に道德力は無限無盡なり。著述家若くば美術家の心は、彼が産出せる作物よりも遙に大なり。幾多の詩歌や繪畫を産出せる後も、その流れ出でたる天才の源泉は尙ほ依然として存在し、それよりも數層大なる作物は尙ほ將來の裡に藏れあるなり。人間の短生涯に天才が成し得るものに就ても、若し單に壯時の作物のみを見て之を判斷するならば、如何んぞ彼の眞價を定め得べき。殊に道德的精神的進歩に就ては、此の原理は尙更ら然るなり。或る意味に於ては、吾人の智的發達に一定の制限あることは事實なり。勤勉と辛勞とは能く多くの事をなし得べきも、而かも吾人の智的志望が如何に大なればとて、吾人の極度の努力も到底飛越す能はざる制限のあるあり。吾人の智力が解明し能はざる難問題あり、吾人の推理が踏み込み能はざる奧妙なる研究あり。故に吾人は第一流の腦中より出づる思想及び發見を解し得る第二流を以て甘んせざるべからず。大詩人大學者大美術家の名聲を追求するは、吾人の多數に取りて愚の至りなるべし。

然れども、智的發達と道德的發達との間には、一大徑庭の存するあり。道德界

精神界には、吾人に開かれざる難關なく、吾人が攀ぢ得ざる墻壁なく、凡そ神の肖像を印せられたる靈は、いと低き者もいと高きものと同樣に、神的生活の無限なる道程に上り得るなり。道德的精神的發達の法則は是なり、曰く『それ有てる者は尙ほ與へらる』と。誰れか道德的進步の前途に制限を置き得るものあらんや。吾人が一努力をなす每に、自己に對し世に對して一勝利を得る每に、吾人は一層の努力一層の勝利へと進むなり。靈的完全の標準は、吾人が進むと共に進む。アルプスの峻嶺を攀づるものは、眼前に見ゆる一峰を以て直にその絕頂となせども、之に上れば更に一峰の聳ゆるありて、山又た山殆んど際涯なきを見る。靈界に於けるも亦た斯の如し。靈界の道程一步を進むる每に、我が眼界は廣くなり我が希望は高めらる。靈界の峻嶺一段を上る每に、無限なる理想の絕頂は妙なる榮光に浴しつつ吾人の前に現はる。故に最上の人間が成せる最上の功果も、未だ以て吾人の靈魂に固有なる無盡の富を測るに足らざるなり。」

さて余をして使徒保羅が義とせらるべき條件として擧げたるものに就て一言せしめよ。彼れ敎へて曰く、吾人が神の前に如何に見ゆるかは、吾人が今爲す所又は是迄爲せし所に由つて定まらず、却て我が靈魂の中に一種の主義精神目的理想の宿れるや否や――一言にていへば、基督敎の骨髓なる、自己を棄てて神

的理想に合致することの有無――に由つて定まると。行爲の上に此の理想を實現せんとする吾人の企圖は、不十分不完全にして憐むべきの至りなるべく、最上なる信徒が遂げ得たる最上の實行も、漸次に此の理想に接近し行くものに過ぎずと雖も、而かも彼等が到達せんと欲する境涯、彼等の赫々たる將來は、既に此の中に含まれ居るなり。神的理想が住める靈の中には、基督に對する熱誠が最高唯一の動機たる靈の中には、吾人に對する神の判斷を定むべきもの、吾人をして神の前に如何に見へしむるかを定むるものあつて存す。卑賤なる現在の生活、そが幾多の失敗未熟薄志弱行――是等は高貴なる精神を包める襤褸たるに過ぎず――の裡面にありて、全智者の眼に見ゆるものは、神の子の姿、基督に肖たる聖潔、羔の血にて白く洗はれたる衣服を着くる靈魂の榮光に外ならざるなり。

我が聽衆諸君の中ち或るものには、余が是迄述べ來れる思想は、誇張の風を帶ぶるが如く見ゆるならん。然れども、若し誇張ありとせば、そは余の誇張に非ずして、使徒保羅の教理に固有なる誇張なり。而して余が述べたる所が、針小棒大の言に非ずして眞實嚴正の言なることを示すに足るべき、二個の眞理あるなり。

第一、凡そ人の品格を構成するものは、その人の主義即ち動機にあり。こは明白なる眞理にして、人を判斷するに單に行爲のみを以てせず又たその動機を以てすべしとは、道德界の通論なり。吾人が既に見たる如く、行爲は境遇により て妨碍せられ變形せられ、若くば僅に精神の一部分を示すに過ぎざれば、吾人は之に由りて屢輕率なる皮相なる若くば誤れる判斷に陷るなり。眞正唯一の試驗石は、行爲の由て生ずる動機性精神にあり。若し一個人の行爲全体に貫通する一の動機あらば、彼の生涯に特別の色彩と調子とを與ふる一の主義あらば、吾人は之に由りて彼の過去を說明し得るのみならず、又た彼の將來を預言し得るなり。若し吾人にして此の主義動機を知り得べくば、その人の本性を洞察し得べけんなり。

使徒保羅の服中には一種の主義理想ありて、彼は之を稱して『基督を信ずる信仰』と言へり。而して彼の所謂基督を信ずるとは、基督てふ人物とその傳記の歷史的事實を信ずることなるか、基督の働に關する神學的教理を信ずることなるか、但しは完全なる人類の模範として基督を認むることなるか。否な、若し是れだけならば、基督の生涯は、人の深き天性に觸れざりしならん、その切なる哀求を呼起さざりしならん、その限なき希望を覺醒せざりしならん。此の生

涯が人を甦生せしむる秘密、そが人性の奥深き處に訴へて、その靈性に異常なる革命的勢力を加ふる所以は、そが人間に神的性質――即ち不朽と莊嚴と高貴の要素あることを示すに由る、そが人間の靈に眞善美の靈と契合する所あるを示すに由る、そが各人の靈魂を招きて神の生命と幸福とに與からしむるに由る。罪惡の意識と慾望の重荷の下に苦悶し、苦しき過去の記憶や恐しき將來の心配の爲に呻吟せる靈魂の中に、基督の生涯は希望と慰籍とに滿てる聲、覺醒せる人の心裡に響き渡る聲を以て來るなり。曰く『是れ汝等が眞正なる生活に非ず。汝等を痲痺せしむる私慾の眠より起きよ。汝等の目を蔽ふておのが榮光ある運命を見る能はざらしむる、肉的生活の空しき夢より醒めよ。不朽なる汝等の特權を把持せよ。汝等は神の子、天の嗣業を承くべきものに非ずや。永遠なる愛の手は汝等を抱かんが爲に延ばさる。汝等の眞正なる安息と家郷とは、永久父の懷にあるなり』と。而して信仰の眼を以て基督の顏を見たるものには、不思議なる一新生命、地より出でざる一大精神は入り來りて、彼等の中なる聖靈は基督の靈と共に、彼等も亦た神の子なることを證するなり。

第二、此の信仰てふ主義の中に、將來の發達と完全とが悉く含まれ居るなり。基督教は吾人に完全と幸福とを與ふる勝手の約束に非ず。基督教徒が希望する

天國は、敬虔なる想像家の眼中に映ずる幻像に非ず。又た之に對する吾人の蹺望は、知れざるものを漠然追求するに非ず。福音は單に開けたる靈眼に天上の理想を示すのみにあらず、又た各人に命じて『之を求めよ、おのが前に置かれたる望を獲よ、他日完全の域に立つべきなり、否な神の眼前には既に立ちつつあるなり』といふ。若し之なくんば、福音は吾人に取りて福音には非ざるなり。不治奴隷に向つて自由の歌を歌へよ、是れ彼の不幸を嘲けるに等しからずや。不治病者をして健康恢復の夢を見せしめよ、是れ彼の悲に一層の悲を加ふるものに非ずや。おのが罪惡と此世の思煩とに壓せられ、惡しき習慣と我儘なる性情とに痲痺されたる人に、完全圓滿の天國を語れ、是れ彼をして益不完全無能力の感を深からしむるものに非ずや。

然れども、基督教の力は、實に吾人をして惡に勝ち善に進みて能く光榮ある理想の實現を全ふせしむるにある也。現在此處に、その可能性は吾人の中に潜み居るなり。若し吾人にして神に對し自己に對して忠實ならば、何物か能く吾人の希望を妨げ得べき。地平線上に閃く最初の微光を見て、赫々たる白晝の光輝を預言し、冬期の眠より醒めたる草木の微動を感じて、黄雲滿目の收穫をトするは、決して勝手氣儘なる想像に非ず。畫工の手に成れる大傑作に於てすら、

最後に來るべき完全美は、既に最初の運筆中に含まれ居るなり。斯くの如く、凡ての心を見給ふ神の眼中に於て、靈的生命の最初の產聲、基督に對する純忠熱誠の最初の鼓動が、基督と偕に神の中に藏れある完全美の前兆なることは、決して架空の妄想に非ざるなり。『後ち如何ん未だ顯れず』『目未だ見ず耳未だ聞かず心未だ知らざるものを、神は彼を愛するものの爲に備へ給へり』。熱信なる聖徒等も、その靈眼極めて高き時には、將に顯れんとする榮光の片影を認め得るなり。斯かる時に、彼等は凡ての罪も悲も全く除れたる將來、凡ての惡と不完全とが永久に消へ失せたる世界を憧憬し得るなり。斯かる時に、彼等は一層の熱を以て燃ゆる愛、少しの汚點をも止めざる聖潔、此世の思煩を全く脫せる平和、長へに盡くることなき喜悅を思ひ浮べ得るなり。然かも是等の希望は悉く實現さるべきものなりといふも、決して誇張の言には非ず。之を一言以て蔽ふべきものあり。何ぞや、吾人は他日おのが崇拜するものに肖かりて、彼の義を纏ひ彼の姿に化すべきなり。吾人後ち如何になるべきか、吾人之を知らず。唯だ『その顯れん時には必ず神に肖んことを知る、そは吾人その眞狀を見るべければ也』(今泉眞幸君譯)

如何に信ずるも可なる乎

神學博士　アール、エフ、ホルトン

（約五〇二四）

如何なる信仰を抱くも不可なき乎。世には不可なしと考ふる人寡からず。其意にいふ、苟くも人の生涯にして善良なる限りは、其持する意見が正統なるも、異端なるも、其人が天主教徒なるも、プロテスタントなるも、國教徒なるも、自由教會員なるも、將た又た基督教徒たるも、回々教徒なるも、佛教徒なるも、毫も之を問ふを要せずと。蓋し此説たる、其中に眞理の寓する爲め一見正論の如く思はるれど、又其中に誤謬の存するものなれば、却々に危險極まるものなり。若し此説にして、大体の意見を同ふするものは些細の點に説を異にするが爲め、相乖離すべからずとの意なるか、又は吾人の抽象的の宗教思想を實際の生活に施行せざるべからずとの意なるか、或は又現今の時勢、事情に全く適せざる教義思想を斷然排棄せよと主張するものならんには、其は言迄もなく至等の論なり。然れども信仰如何は之を問ふを要せずとの説にして、半眞理を全眞理の如く見做し、或一種の信念が差したる價値なき爲め、凡ての眞理に價値な

しと斷ずるか、又は或信仰箇條が毫も生涯に關係なきのみならず、中には有害の影響を及ぼせしを見て、直に信仰と生涯とは一切相關せずと速定し、かくて信仰は何にても可なりと結論するに至らば、其は危險至極のことと謂はざるべからず。

若し吾人眞實熱心に此問題を研究せば、吾人の信仰如何は無關係ならぬのみか、吾人の信ずることによりて、實に其の生涯の形づくらるるを觀るべし。人の善たり、惡たり、又は善惡何れにも附かぬといふは、畢意其の所信如何を唯一の原因とまで認むべしと悟らん。人の思想は人自身なり。船を驅る帆なり。信條如何は問ふを須ひず、問ふべきは其生涯なりとの普通説は到底立ちがたし。そは信條が生涯を作るにて、人の信ずる如く人は成り行くものなればなり。人にして宗教的なるか、非宗教的なるか、基督教徒的なるか、非基督教徒的なるか、善なるか、惡なるか、其何れなるにせよ、此くなるは其抱く信仰如何によれり。人の信仰の根本的變化は其人自身の根本的變化なり。人の信ずる如く、其人は成るか又は成り行きつつあるぞかし。

假りに人自ら心臟弱しと信ずるとせよ。其人の心臟は極めて健全なるものにてありしやも知らねど、數週を經行くうち、何時しか其人は步行遲緩にして、運

勤努力を厭ふの風を成し來り、數ヶ月を過ぐれば、終に純然たる心臓病患者となり果つべし。又譬へば茲に人ありて、切に自己は不人望なりと感じ、疑心暗鬼を生じ、衆人皆己を嫌ひ疑ふこと甚しと思ひ詰めたりとせよ。事正に之に反して、人は實際彼を親愛せるに、只だ彼の神經質なるより此く考へ込みたるまでのものならんも、さて一旦此く迷ひ信じたるが爲め、其擧動言語一々人の意を損し、數ヶ月を經て後彼は實に不人望の人となり、曾て誤り想像せし如く、今は眞に人より疑はれ憎まるる身と成り行くべし。余は今、日常普通に有り勝ちなる此等の例を擧げたるは、終に進んで一層高尙なる世界にも此例あることを證せんとすればなり。余は先づ宗教上の抽象的思想が人の言行に關係を有することを示し、次に其言行が實際其信ずるところによりて形づくらるる樣の如何を、二三の實例もて示すこととすべし。

第一　抽象的信仰が言行に及ぼす影響

（一）先づ最上、最抽象の思想を例に取ることとして、宇宙の統治に關する人の信仰が生涯に及ぼす感化を考へ見ん。苟くも此世に生活する以上、人は必ず宇宙の起原、支配につきて何か一個の信仰なきはあらず。其思想は極めて單純粗糙なることもあらん、或は眞なるとも、僞なることもあらん。しかし一個の信

仰なき人とてはあるべからず。而して其信仰こそ、彼の一言一行、一分一時を感化支配するものなれ。概して言はば、宇宙の支配目的につきての解説は結局唯四あるのみ。曰く無神說、曰く凡神說、曰く自然神教（ディエズム）、曰く基督教是れなり。いかにも抽象的に聞ゆれど、世に此四說中何れかを抱かぬ人はなし。而して其抱く說のままに其生涯が陶冶され、其人は自ら己れが有する意見の示現とはなり居るなり。

假りに人の宇宙觀を無神說なりと定めん。是れ宇宙に人間よりも高尙にして偉大なる力なしと考ふる者にして、再言せば自分に優れる高尙偉大なる力を認めず、實際上自己を己れの神と立つることとなるべし。人には何者が崇拜したしとの言ひがたき奇異なる傾向あるものにして、崇拜する已上は勿論己れの知れる限りの最高者を崇拜すべければ、固より其人は自己を拜するの外あるべからず。彼は此れ已上の崇拜の目的物を有せず。此れ以下の者を拜するは己れを恥かしむる譯なれば、彼は到底己れを崇拜せざるを得ざることとはなるなり。勿論彼は己れを拜する爲め敎會に行くにはあらず、ただ胸裡の聖殿に詣でて、自己といふ唯一の神に燒香するのみ。此宇宙にありて最高の者は人なりとの說を抱きながら、其說が其人の品性に迅速の影響を及ぼさぬといふことあるべき筈なし。

余は今此點を細説することなかるべしと雖も、轉た我英國の大思考家ジョン、ロックが、秩序整然たる國家の中には無神論者の存在を許さずといへりしを想起せずんばあらず。此語固より不寛容の嫌あるのみならず、迚も行はるべきことならねど、決して道理無しとは言ひがたし。何となれば苟くも無神説を抱くの人は、勢ひ自己崇拜家たるべければなり。彼は他に拜むべきものを有せざればなり。

第二の解説たる凡神説に至りては、世に此かる名稱の下に自己の宇宙觀を有することなき人もあるべく、足下は凡神論者なりと告けなば驚かるる人もあらん。此説たる、かの印度の大宗教に表はれたるものにもせよ、又はスピノザの幽遠なる哲學に形を取りし者にもせよ、人の生涯品性に感化を及ぼす樣は無神説と異ることなし。此事たる、いかにも案外なれど、其實証は歷々たり。凡神説は神と宇宙とを同一視す。神は唯一の實體にして、物質と心意とは此唯一實體の偶性に過ぎず。凡神説に據れば、人は自己に於ても他人に於ても、何處にても神に接すといふなり。神が凡てなりとの説の奇異なる結果は、神と人の區別も失せ、隨て善惡の別も消へ行くとなり。何となれば神は何物にも存し、何處にも在りといふ説なれば、神は不潔なる者にも、清潔なる者にも等しく近く在ま

すべく、尤も醜穢不淨の行爲にも、最も高尙淸潔なる渴仰にも、共に等しく親密離るべからざる生命として存すべければなり。凡神說の人生觀には、神は人性の劣等なる側面に一層親近なりとの意さへ漏さる。そは吾人が道德と稱する者は何ぞといふに、吾人の優性と劣性との相爭鬪する樣をいふなれど、凡神說には優性劣性の別なければ、隨て兩者の爭といふこともあらじ。有力にして實際人の言行を司り行くものは卽ち神の生命なれば、人の肉慾に神は存し、之を逞ふするが神の働きとはなるなり。かくて神は凡てなりといふ高尙なる見解を起點とせる凡神說が、實際上には淫佚放縱を神として祭るに終ることそ恐ろしけれ。人は尤も其肉情を肆にし、劣慾に耽りつゝあるとき、尤も神に心醉せることなり、天父を禮拜するの道は玆に存すと考へらるゝに至る。故に印度の宗敎には驚歎すべき深遠なる凡神々學の存しながら、其殿堂にては淫猥視るに堪へざるの行を以て神を禮拜するを發見すべし。是れ印度に漫遊せるもの又は印度の紀事を讀むものゝ容易すく確定し得るところなるが、此かる證據を眼前に有する上は、余が上に述べたることの僞ならざるを知るべし。若し人ヴェダ敎の思想を抱き、凡神說は正論なりと信せんか、是れ思想の下り阪に就きたる者にして、下り下りて終には不道德不品行をも聖別神化せずては休みがたきに至る

べし。印度の宗敎家は完全なる論理的組織を有し、其大なる凡神敎は鼻を掩ふばかりの敗德に終り、而して國は衰へ、民は仆れぬ。癈頽せる印度は癈頽せる神思想の結果のみ。

（二）國民の宗敎に於ける神の思想が其國民の品性に反映するを考へ視よ。余は今暫く殘りの二說即ち自然神敎と基督敎とにつきて論述するを中止せんとす、そは終りに至りて信仰が生涯に及ぼす具體的の例證を擧ぐるに方りて之を陳ぶる方便利なればなり。さて吾人は今思想が生活に影響することを考ふるに際し、以上の抽象思想が單に個人に感化を及ぼすのみならずして、國民にも、否人種にも容易ならぬ結果を生ずることを硏究せばやと思ふなり。假りに世界の宗敎を概觀し、其中に進步成長の段階を發見すとせば、無神的にして凡神的なる佛敎の宇宙觀は、自然神說を持するマホメット敎に劣ること多く、自然神說的マホメット敎は又た神を父とし、神子人に內存（インマネント）すと說く基督敎に劣ること頗る遠しと謂ひ得べき歟。

予が上に論じたることにして眞ならんには、神に關する前述の諸說は之を奉ずる國民及人種に著しき影響を及ぼせるを觀るべし。奇なることには、之を例證するは誠に明白簡單のことなり。請ふ支那、土耳其及英國を視よ。

支那は正に無神説たる佛教の宇宙觀を實現するものなり。支那は遲鈍、粗野、殘忍、智性的なれど進化的にはあらず。文化したりと雖も絕へず朽ち行きつつあり。是れ實に宇宙に神なく、神に代へて祖先の靈を祀り、民俗の迷信より湧き出したる幾多の鬼神に奉ふるの結果なり。

次に土耳其を視よ。土耳其人は沈重、質朴、謹嚴なれど宿命的にして、無情、冷刻、狂信なり。此かる性情あるが爲め、彼等に正義なく、明察なし。宗教は高尙なれども心靈性を欠き、宗教生活は屢々道德に合すれど、未だ曾て神的なりしことなし。是れ豈に回々教の信條が土耳其帝國に有りのままに現れたるものにあらずや。上は皇帝より下平民に至るまで、抽象的の神の觀念は實際生活に遺憾なく現し出されたり。

扨又英國を看よ。余は英國の短所缺點を出來得べき丈け誇張するを辭せず。英國人は彼自身及其仇敵をして思ふ存分に其過失を白狀指摘せしめよ。然れども予は信ず、英國は自由、正義、仁惠にして進步的なりと稱するを妨げずと。予は今反對論に答ふるの遑なし。人は時として自國に過失なきに、好んで其罪を鳴さんと欲することあるものなり。然しながら余が今英國につきて言ひしことの眞實なるを知らんと欲せば之を土耳其に比べなば、思ひ半ばに過ぎん。英國

の中心に堅固なる核仁あり。予は其一層大ならんことを望めど、ともかく實際容易ならざる大さを有する核仁なり、即ち其言語行爲に於て基督の如くなる婦人、男子、小兒の團體是れなり。基督敎の神の觀念は英國に來れり、而して吾人の見る如き變化は來りしなり。未だ全く英國を基督敎化したりとは言はねど、土耳其に優ること夐かにして、支那に比ぶれば霄壤の差のみにあらずと謂ふも不可なからん。蓋し我國に行はるる基督敎の神の思想こそ、英國と支那との間に此差違を生せしむるものなれ。もし支那にして吾人の神の觀念を有し、吾人にして、支那のを抱きしならんには、吾人は支那にして、支那人は英國人たりしならん。

此等の國民を成せしもの若し神の思想なりしこと此くも照々たりとせば、誰か信仰の如何は關する處にあらずと言ひ得るものぞ。否、正に之に反して、吾人に死活の關係あるものは思想なり、吾人の信ずるところこそ、個人をも、國民をも、人種をも陶冶形成する大作因なりと言ふこそ正當ならめ。

第二　信仰が言行に及ぼす感化の具體的例證

（一）請ふ神我を視給ふてふ信仰が生涯に及ぼす影響を考へ看よ。

予は既に此く漠然抽象のことを云云するを止めて、國民生活などいふ廣き問題に

餘り心を勞せぬ人の爲め二三の實例を採りて語らんと約したり。今假りにかの『神よ汝は我を見給ふ』といふ聖書の語を引き、其語の中に存する主意を究むることゝせんか。かゝりに人實に神は己を觀給ふのみならず、己を洞察し給ひ、遠くよりして己の思想を知り、苟くも脣に上りし片言隻語悉く神に聞へざるなしと信ずると定めん。假りに神は惡を見るに忍びざるほどに聖き眼を有し、聖潔なると同時に正義にして、其判斷秋毫の誤なしと信ずるとせん。假りに之を其人の眞實なる信仰となし、日々此信仰に基きて世を渡るべきものと定めんに、さて其人は果して此信仰のありやなしやは、我に取りて差したる問題にあらずと言ひ得べき乎。

銳(と)き眼もて　暗夜(やみよ)視(み)透(すか)す
大御神　わがひめわざも
みまへには　かくしをほせず

僅かに先週の事なりき、一婦人は余に告げていへり。幼時不圖虛言を吐きけるに、父は右の語を引きて眞に神は人を視給ふよし懇に告げ給ひぬ。此くて我は寢處に就きながらも、小供心に我上に神の銳き眼己を視張れる心地せられ、爾來心中の秘密を視透し給ふ神といふ見證者の前に在りとして世を渡れりと、か

く語りぬ。之に反して支那人は神を欺き得べしと信ず。彼は其子の衣服の裏に、此子は已にコレラ病に罹りたるものなりと大書し置かば、神は此文字を視て、此子既にコレラを濟ましたるものと思ひ、再び該病にかからしむることなしと信ずるなり。有識の支那人と雖も神を騙りて術中に陥れ得べしと考ふ。左れば支那人の生涯を見るに、詐僞騙譎を以て織り成せりとも謂つべき樣なるぞ、憂てけれ。

然れど吾人は神を欺き得べしと信ぜず。吾人は衣服に文字を書して彼を騙かんと試むるの無益なるを知る。吾人は殊勝なる面持して日曜日に宗教の儀式に列する丈けの徒らなることを悟る。吾人は悉く之を知れり。基督教徒として吾人の信ずるところは、吾人が視透かさるるといふことなり、我思想は悉く了解さるるといふことなり。今晩此教會に於て吾人の考へつつあることを視察する秘奥、親密の見証者ありといふことなり。諸子の心意の水面に立つ思想の細波は悉く視られ且つ知らるるなり。而して此く信ずることが、毫も諸子の生涯に關係なかるべきか。否實に其が毎日毎時諸子を感化しつつあるぞかし。夜間床上に横はりて靜に物思ふときも然り。何人も足下を視ざるとき足下を動かすものは、神我を視給ふ故我清かるべしとの思想なり。此信仰あればこそ、我情緒にも、

我願望にも神の嘉し給はぬものあるべからずと心がくるなれ。我は大なる『監督者』の眼の下に日々忠勤を挺んでざるべからず。人は外を視、神は內を視給ふ。我心がくべきは外を視る人にあらずして、內を視すかし給ふ神にあり。人の信仰は區別を生ぜずとは何の意ぞや。信仰は大差別を來すものと知らずや。余は人間を信せぬといふ如き厭世家にては更々あらねども、時には人間を賴みがたき場合に遭ふことなきにあらず。此かる時しも、絕對に信用を置き得べき人は誰ぞといふに、そは神の輝ける面前に生活することを學び、此くて其生涯を修めたる人に外ならず。

(二) 更に人生を感化する他の一信仰を考へ見んか。ブラウニング嘗て『人は永遠を有す』といひしが、此信仰こそ實に其物なれ。

假りに我れ七十年古來稀なる短き浮世の生涯を終ると共に、死して永へに空しく亡び、他人も亦た我と同く脆き運命を具へ、北邙一杯の土と消へて跡なきものなりと定めよ。此かる信仰の人生を減化するところは如何ん。かくては人情を盡すにも、事業を擧るにも、共に永遠長久の計なんどいふ者生ずべき動機なからん。死の影何時も人を襲ひて之を萎縮せしむればなり。四邊の人悉く束の間の玉緒をつなぎ居るばかりの者と思はば、左までにもなき我生命ながら、其

れさへ、有ん限りを盡して人に献げんとの熱情も起るべからず。されば看よ、いかに此信仰が人の生活を感化するかを。

之に反して、人もし己れが不滅なりと信じ、四邊の人も不滅なりと信じ、現世に爲せることは未來世に於ても關係ありと信じ、我生涯は永遠に於ける圓の中心より引かれたる弧なりと信ずとせよ。其自己の生活に影響するの著しきは言迄もなく、他人に對する思念の變化も大ならざるを得ざるべし。諸子はかの牛津大學の秀才たりしコールリッヂの孫ハーバートの美談を記憶せらるるならん。彼は三十歳の青年として早世せしが、其臨終前十八ヶ月に醫士が回復の望なしと彼に宣告するや、彼は直に答へて曰へり、『さらば明日よりサンスクリットを始めざるべからず』と。見るべし、死之に臨みて秋毫も必乱れず、自ら『永遠』を有するを悟りて、死其力を失ひたる人の言動には、一種の氣品高くして犯すべからざるもののあるを。我云爲行動は固より此思想に支配さるべく、他人の値定めも之を標準とせぬことは叶はじ。人を動物と考へて之に處するの道當を得べき筈なく、之を永世不滅の靈と思ひてこそ、正當の待遇を施し得べきなれ。」一

余が今日よりも年若くありし若干年の昔のことなるが、當時『條件的不滅説』、即ちキリストに於ける生命といふ説行はれて、余も其簡單有力なるに感じて太

く心を動かせしことありき。此說たる、人は本來不滅なるにはあらねども、イエス、キリストを信ずるが爲に不滅となるといふにあり。余はエドワード、ホワイト氏が此大論說を辯護せんとて草せし偉書に對して感謝の念なきこと能はざるのみならず、其議論の主意に熱心堅固なる思想なしとも思はず。然れども余は記憶す、余は該說を數ヶ月間ともかくも抱持したる後、直ちに復た之を我心より抉り出して斷然足下に蹂躪せしことを。其理由は單純なりき。此說たる、余をして四邊の人を不滅の靈として視ること能はざらしめ、知らず識らず個人の價値を低ふするを感じたればなり。余は此說を採れる爲め、彼等の中のキリストを信せざるものは禽獸の如く滅ぶべしと信じ、彼等の心に訴ふべき恐怖もなければ未來もなきに至るを感じたればなり。此かる心狀一たび余を襲ひ來るや、余は倒れたる者を起し、視へざる靈の生涯に人を挽き回へさんとの熱心自ら減じ行くを覺へたり。余は條件的不滅說が論破されたるが爲にも、其論據の薄弱なるが爲めにもこれを棄てず、其が我思想の上に及ぼす影響の由々しき爲め之を擲ちて足下に蹂躪したるなり。余は一日たりとも我同胞人類が不滅の靈ならずと信ずると能はず。余は諸子の不滅なることを信じ、不滅者として諸子に語る。嗟諸子は死に能はぬ者にてあるが故に、諸子の信仰如何は限りなく大

切のことゝはなるなり。

（三）最后に余は豫ねて斷り置きし今一個の具體的例證を擧げんとす。余は諸子に宇宙の解說に無神、凡神、自然神說及基督教の四種あることを語りしが、今より其後の二說が人の品性言行に及ぼす影響如何につきて述るところあるべし。

（イ）自然神教の品性に及ぼす影響。

自然神教說を懷く人ほど言行の重要を主張するものはあらず。そも信仰は如何樣にてもよし、生涯こそ大事なれといひて、自ら善良高尚なる云爲行動をなさんと奮勵するが彼等の本色なり。

扨自然神說に據るときは、神は其本質上人間と異れる大存在者にして、人に超然し、人に隔絕せるものなれば、人が神性を受け得べしとか、神降りて人と爲り得べしなどいふことは、自然神教者が不敬瀆神の至りとなして斥くるところなり。或意味に於て人は神の子なりと謂ひ得ぬにあらねど、兩者の根性互に相疎別するものにして、永へに相合することは叶はず。蓋し過去に於て幾多の宗教は此思想を有せしのみならず、今日も尙ほ此種の觀念を抱くもの少なからざることとなるが、此れも亦た人の品性に彰明なる影響を及ぼすものなり。人をし

て本分を盡すに忠ならしめ、一思一行悉く絶對至聖の神の照鑒に供せらるとの念を旺にするは此信念なり。啻に彼をして本分の念を强からしむるのみならず、其公共生活をも高尙卓偉ならしむ。『大監督者』の下に己が責任を盡すことなれば、彼は自ら有益なる公民たるべし。彼は改革者として、政治家として、記者として名を揚ぐることもあるべし。否彼は其崇拜する不可知、不可測の偉大者を誠意より畏敬することもあらん。余を以て高尙なる自然神敎の產出する品性を蔑如するものと誤解することこと勿れ。此かる品性は高尙なり、人的なり、そは神的に觸着されたればなり。

左れど此信條の結果を仔細に觀察せば、善良ならんと力むる其うちには一種自力功績の念を釀し、思念己れに及ばざるのみならず、修德の誠己れに較べ能はぬ世の人を觀れば、我れは彼に優れりとの念知らず識らず其人を侵し來るを免れず。見るべし神と人との疎隔は轉た人と人との間を遠ざけ來るを。此種の信仰を抱ける人は動もすれば冷淡に陷るの傾あり。情火低く燃へ、光は熱に代り、善行は愛情と同居せぬが常なり。

（ロ）基督敎の神の思想が品性に及ぼす影響。

自然神敎は舊約の宗敎なり、左ればこれに基ける品性は吾人にとりて一種言ひが

たき美妙を有す。吾人は固より之を輕視せず、吾人は之を失ふことを欲せざるなり。然れども請ふ余が此説につきて陳説したるところ尙ほ諸子の記憶に新たなる其うちに、基督敎の神の觀念より生じ來れる品性を提げ來つて之と比較せよ。

假りに諸子、神は人と密接に相關係し、人は神に於て造られたる者にして、神の永遠の子が人となり得るのみならず、そは實に自然にして必要なりと信じ、神は啻に謙りて人間の生涯を送るべきのみならず、人間の死を甞むるさへ怪しむべきことにあらずと信ずるとせよ。又假りに神の此く人に接近し給へるがため、神の性情は人に示され、此くて諸子は朦朧として神の性格を探らずして、さながら肖像畵を視るが如く明々白地に之を認め得たりとせよ。假りに此く認め得たる神が諸子に接近し來り、諸子は彼に觸れ、彼の中に在り得るほどとなりたりと定めよ。假りに此神が諸子に明らさまに說明され、諸子の神の思想は今や抽象空漠のものにあらずして、妙絕單純なる人格となりたりとせよ。假りに神はキリストに於て、謙遜は萬德の冕なることを示し（我は心柔和にして謙るものなり）、己れの利を全く忘るるよりして一切の善は來ると敎へ、義とは人が自ら義と考へず、己れに何の績もなしと感じ、我が義にあらずして、我に在

る神の義こそ眞の義なりといふ玄妙の思想のみ心に存するに在りと示し給へりと信ずとせよ。假りに諸子はキリストは神の眞像にして、神の榮光の知識の光りなりといふ新約全書の思想を眞理なりと切に感じたりとせよ。假りに人間たるキリストによりて視るべからざる神に接したるとき非常の喜悦と感激とに溢れたりとせよ。假りに諸子の罪は抽象の議論によらず、死を背むまでの愛情によりて赦されたるを覺れりとせよ。假りに諸子は理論によらず、靈の實驗によりて神に容れられたりとせよ。かくて假りに基督教的なる此神の思想が諸子に對して暖かなる、熱血ある、個人的なる事實となりて、諸子の心裡に於ける神の靈となり、諸子の面前に在るキリストとなり、遠く存する神となりたりとせよ。諸子は其品性に此信仰の及ぼす感化が如何なるかを知らん。諸子は果してかのブラウニングの『サウロ』を詠みし其中の美しき一節の意を解するや否や。ダビデは其怏々として樂しまざる君の爲め、心もとなく音樂を奏でつつも、つくづく狂へる主人の身の上を思ひ廻しぬ。かくて何時しか彼が此失意に沈める大王に注ぎし切なき愛情よりして一大思想は湧き出でぬ。彼はサウロ王を救ふべき贖主の人の形を探りて世に臨むべしと考へざるを得ざるまでに及びぬ。かくて彼は言へり。

わが願ぎまつるは　强に寓る　弱なり。
われ切にもとむ　もろき我肉　神と相結べと。
嗟、これを求めて　われこれを得ぬ。サウロよ。
汝を迎ふる其顏は　わが姿にも　似通ひなん。
汝が愛し愛されつ　すべき人は　我に等しき者ならん。
我手のごとき　其聖手は　汝が爲め。
新しき生命の門を　開くべし。
視よ、キリストの立つを見ずや。

もし人吾人が基督敎的と稱する神の啓示の威嚴、榮光、柔和、元氣を眞に感得知了したらんには、基督敎品性の一切の美德、即ち十字架の下に行くも辭せざる謙遜、天上の高きに達する渇仰、人に對する温和、人類に及ぼす愛、救濟の切なる望み、十字架の受苦は、凡て是れ吾人の神の思想の結果にあらざるなきを悟るべし。ただ此神の思想を信ぜよ、さらば思想の生活に及ぼす偉大なる陶冶力は、汝を基督敎徒と成し果てずては休まじ。されど此思想なくして此生活は來らずと知れ。主曰く、『誠に實に汝等に告ん、我を遣ししものを信ずるものは永生を有てり』と。其意豈に之に外ならんや。蓋しキリストに於て示現され

たるが如くに神を考へなば、自ら(みづか)キリストの像に合し、かくて勢ひ基督教的の人となるべければなり。(小林彦五郎君譯)

千古の問題

神學博士　ロバート、スチュアルト、マックアーサ

爾曹基督に就て如何におもふや（太廿二〇四十二）

世界漫遊家が、其觀光の途上、わが眼に映じたる自然界の風致、人工の美を極言賞揚したる誇大の言に添ひしもの、吾人これを西班牙グラナダの「アルハムブラ」、日本內海、および印度アグラの壯嚴なる「タジマハル」の三者に於て見るを得たり。美術界の名工が各獨得の妙を發揮せる三個の名作、吾人これをラフハエルの「基督の變貌」、カノバの「悔悟のマグダラ」、及び「怪物スフヒンクス」に於て見るを得たり。文界不朽の傑作、吾人これをシェクスピヤの「ハムレット」、ミルトンの「パラダイス、ロスト」、及びテニソンの「イン、メモリヤム」に於て見るを得たり。壯大偉麗、嶄然頭角を歷史の水平に拔く三個の人物、吾人これを律法を與へたるモーセ、使徒パウロ、及び宗教改革者ルーテルに於

て見るを得たり。

然り、然れども、自然界、美術界、若くは人間界に於ける是等のものは、決して理想とは稱すべからず。特に理想の人物は未だ發見せられざるなり。天下を跋渉し、見聞海濶なるハムボルトの日記に、『この世が主のために献げたる最美の果は、人間なり』といふ一節あり。この最美の果は、即ち理想的人物なることは、この言の中に含まるるも、ハムボルトは嘗て斯の人を見いだしたりと敢て言はざる也。理想的人間は、單に人間たるもののうちに未だ見出すを得ざるなり。歴史上、最貴至高の大人物も、黑點なき日輪たるを得ず。一人として清淨無垢の聖境に進達したるものあらず。吾れ理想を人類に求めて其最高の標本より失望しながら、一轉して耶蘇基督を觀るに、彼れに於て理想は始めて現實になり、夢幻は眞實となり、望は果を結べる事を見るを得たり。エズドレーロン平野東北の一端より、秀然として青空に聳ゆるものはテーボル山にあらずや。耶蘇基督の無垢壯嚴の姿は、かくの如くに歴史上最高の人間が達し得たる水平より超然群を抜けり。アルプス山の王なるモンド、ブランクは、その水晶の丸天井を空に高く、地中海を拔くこと一萬五千七百八十一呎。千古の雪を冠り、翠空と接吻するアルプス連山の上に更らに飛びぬけて巍然たり。耶蘇基督の音

容も亦かくの如し。ヒマラヤ山脈は、地球上最大最高の巨脈なり。米國ニウヨウクより、シカゴに至りて、復たニウヨウクに歸る距離に比すべきほどの長さを以て歴史的平野を横斷し。壯美なるマッターホルンを其山麓より扛ちあげて、これをジャングフローに重ねんも、いまだヒマラヤの輝ける高さには及ぶべくもあらず。人類の歴史上、その道徳的壯嚴最も極に達したる人々の長き一列に、いま若し耶蘇基督を對比するに當りては、比較は更らに是れよりも甚しきものあらん。耶蘇基督は、人間の珠寶なり。人類の榮冠なり。歴史の產出したる至高の標本、神が此世に予へたる神性十全の啓示、神の榮の輝、神の質の像なり。耶蘇基督は、啻に人間以上のみにあらず、聖徒、諸天使、天使長を凌駕して、その榮光これ等のものの到底及ぶべきにあらざるなり。人もし耶蘇基督を凝視するに於ては、心陶然として語塞がり、『見よ是れ其人なり』と絕叫し、同時に叉拜跪して『見よ是れ神なり』と叫ばざるを得ざらしめん。

吾人は今『爾曹基督に就て如何におもふや』といふ千古の大疑問に論じ至らんとす。パリサイ宗徒との論諍に於て、我儕の主は、一時全く防禦的なりき。サドカイ宗徒及びパリサイ宗徒の輩は、基督に質問の矢を發して論戰を挑めり。基督は是に答へてサドカイ宗徒を默せしめ、而してパリサイ宗徒は彼等の當惑

したるに、少なからず滿足したり。いまや基督の答辨の迅速機警なるに因り、パリサイ宗徒は、サドカイ宗徒と同一の當惑に陷るの順番となりぬ。古來基督の如き巧妙なる論者あらず。思想の瞬轉、言論の明快、精神の高潔に於て古今第一流なり。

さて吾人の前に在る此場合に於て、基督は防禦的態度より一轉して、進擊的態度を取り、メシヤに關するパリサイ及びサドカイ宗徒の思想の謬れるを悟らしめんとせり。彼輩が、心靈界のメシヤなりと曰ふ基督の主張を論難せりしにより、基督は、メシヤを現世の王者なりと信ずる彼輩の思想は、彼輩が無上に尊重する聖書中の預言と相矛盾せる事を示めせり。彼等は基督の迅速機警なる答により、如何に重ねて是れを反駁せんか、殆んど其端緒をだに得る能はざるに至り、呆然として言無し。聖書に記して、『誰れ一言これに答ふること能はず、此日より又問ふもの無かりき』といふもの是れなり。

（一）基督に對する世間種々の觀察

(1)　基督に就て、一定の思想を確有せざるもの、敎外の人々の間には勿論の事なり、敎內に於てすらも、尙ほ且つ存する事は、蓋し否定すべからざる狀態なり。充分の修養あり學識あり、或は身基督敎を奉ずる男女にして、基督の性格

及び品性に關して、確乎たる定見を有せざる者の存するは、殆んど信じ得られざる事ならん。然れども是れ事實なり。余は單刀直入に問はんとす、諸君は『基督に就て如何におもふや』と。人類に發せられたる質問にして、これよりも廣くこれよりも深く、これよりも高きものはあるまじ。これ萬世の質問なり。溯れば是れアブラハムの思想に入りし質問なり。モーセの答を求められたる質問なり。琴を把りて千古不朽の歌を吟唱したるダビデの幽邃壯玄の想を動かせし質問なり。

余嘗て、わが友チャーレス、エス、ロビンソン博士の學室に在りて此句に就て論せしことあり。當時博士は余に語るに左の一事を以てしたり。博士一日上流にある事務員に向ひ、『君は基督に就て如何に思ひたまふか』と質問したりしに、其人包むところ無く、『われは耶蘇基督に就て、前後いまだ考へたることなしと思ふ』と答へたり。博士尙ほ問ふに基督降誕の時日を以てせしに、其人は、一千八百四十三年と答へたれば、博士は今一度推しかへし問へり、『それは紀元前なるや、紀元後なるや』と。その時その人は殆んど當惑の顏して無言のままなりきと。此人は幾年の間、往復書翰の日付けをなしおる人なり。然るに耶蘇基督の降誕日を此くの如くに記臆し、この非凡の一大人物に就て、いまだ確乎た

る認識なしと、包まず自白したるなり。

想ふに如是告白は、甚だ其人の面目を辱めたるものと謂はざるべからず。今の世、この國にありて、かかる告白をなすといふは、その人が、社會的に劣等にして、知識上には空虚、道德上には缺乏あることを意味するものならずんばあらず。尋常普通の智識あるものにして、耶蘇基督の性格に關し、確認を有せずとは、驚き入りたる失態なり。基督の降誕日は、人類に新時代を與へたるものなり。書信の日付けをなし、帳簿或は日記に筆とるものは、誰れとして基督の降誕を追念せざるものあらんや。基督の言行は、世界の文學、美術、建築、乃至音樂を形成しつつあるものなり。基督の精神は、萬古不朽の名畵を世に與へ。基督の手は、美術館に飾らるる無價の名作を刻ましめたりと謂ふも不可あるなし。基督は、バッハ、或はハンデル、或はハイドン、或はモツァート、或はベートベン、或はメンデルスゾーンの如き者流の、最も高玄なる樂堂に聖氣を充たせるものなり。基督は人類創出以來の最大活力なり。基督に關して確認なき輩は、智識及び道念に於て、憐むべき者にして又非難を免かるべからざるものなりとす。此の如き人物は、その生涯する舞臺の何處なるにせよ、決して尊敬すべき人物にあらざる也。

(2) この會衆中には、耶蘇基督を以て、少なくとも歴史上の偉大人物と承認せぬ者は、よもやあらざるべし。孰れも耶蘇基督が、ベツレヘムに生れ、ナザレに成長し、エルサレムにて十字架に釘られたるを知るべし。皆いづれも基督の此世の事蹟の外容に於ては、その知るところ正しと謂ふべし。然しながら、基督の非凡なる生涯、及び基督の救贖的献身の靈意にいたりては、知るところ頗る乏しきやの觀あり。

此種の人々が基督の驚くべき生涯の歴史的成分を見ることとは、尙ほ釋迦、ゾロアストル、乃至モハメットの其れ等に就て考ふるところと異らず。唯歴史的人物たる一事を外にしては、それ以上基督の此世に於ける生涯は、その人自身の品性發達上に秋毫の力だに無きなり。此種の人々は、基督が此の如き生涯を此世になせる理由は、又吾人をして各自その材能に應じ、事情に適ひて其れぞれ此世に、再び基督の生涯をなさしめんためなるを見落せるもの也。此種の人々は、吾儕が神の子供とならんが爲に、基督は人の子となれるを見落せる者なり。此種の人々は、基督が神の父たる事と、人間の兄弟同胞たる事とを啓示せるは、吾人をして其一方を美はしく經驗せしめ、更らに他の一方を常に吾人の行爲上に示すべき爲めなるを知らず。單に歴史上の基督は、古傳の諸英雄以上の力を、

吾人の實際的行爲の上に及ぼすものに非ず。されば此種の人々は、神の基督を有せざる者たるのみに止らず、併せて又歷史的基督をも有せざる者と言ふとも不可ある無し。何となれば、歷史的基督が、吾人個々干係の救主に飜譯せられて、その無比の摸範に因り、その非凡の性格に因り、その心靈的高潔に因り、吾人日常の言行及び思念を全く支配するに至らずんば、稱すべき價値を具へたる歷史的基督、實際吾人に無きものなればなり。

(3)　或人々は基督に對して、管夢幻的なり、詩歌的なり、感情的なり。此種の人々は、基督の感嘆すべき生涯によりて、只管わが心を沈醉され、神人なる基督に對する思想、凡て詩的なり。此種の人々は、かの男らしきチャーマースが、高尙なる嗜噓を弄して、『子守の子煩惱』と稱したる如き言語を以て基督の事を喃々す。此種の人々は有名なるフランスの神學者、東洋學者、光彩陸離たる文章家レナンが、『しをらしきガリラヤ人』と稱したるが如くに、神の基督を目せんとす。

然れども是の如き形容詞は、全く基督には不當なるものなり。基督にして人間以上ならざれば、人間以下のものならざるべからず。基督にして吾人最高の敬崇を表するに足らざるものなりせば、吾人の最も峻酷なる筆誅を加ふべき者な

らん。一言にしていはば、基督にして神ならずば、基督は眞の人にもあらざるなり。

唯物說を稱して、『糞土の福音』と罵倒し去れるは、カーラヰルなり。吾人如上の美はしけれども愚鈍なる感情說を稱して、「噴出の福音」と曰はんとす。神人として基督の足下に跪き、之れを禮拜すればこそ、始めて基督の求むる通りの名譽尊敬を基督に表し得るなれ。かくあればこそ基督を頌し歌ふべき爲に、詩歌を聖別して之れを使用し得るなれ。かくあればこそ基督を畫くために、美術を聖別して之れを使用し得るなれ。かくあればこそ壯大なる論理を聖別使用して、基督の主張及び要求を天下人類の心に貫徹せしめんと試むるなれ。

(十) 或は基督を以て、人間の理想たることを承認せんとする者、若くは一歩更らに進で熱心これを承認する者少なからず。此種の人々は、本來人間が神の如くに創造せられたりといふことを以て、人間至榮の名譽となし。又神が人となりしといふを以て感謝すべき神の謙卑となす。基督は眞に人類の理想なり。正しき心ある男女が、摸範とすべき大なる摸範、完全なる標本、高尚なる原形なり。人類の樹は、十全の美花を唯基督に於て開けり。

こは言ふまでも無きことながら、基督神性の事實を否定して、如何んぞ基督の

人性の完全を證立するを得んや。吾人は文學および人生の學生として、基督なる耶蘇を説明せざるべからざる責任あり。吾人はソクラテス及びプラト、ダビデ及びイザヤ、パウロ及びルーテル、ワシントン及びグラッドストン、リンコルン及びマッキンレーを評價せんと勉む。然らば基督に對して正當の説明をなすも、亦吾人の免かるべからざる責任なり。

或は曰ふ、基督は善人なりきと。然れども之れを神となさず。此種の人々は、わが口を以て、わが言語に矛盾ありと云ひ、わが推論に非論理的のものありと自由するものにあらずして何ぞや。耶蘇基督にして神ならずんば、亦善人にもあらざるなり。耶蘇は恕すべからざる主我論者、快癒の望なき發狂者なるか。然らずんば、神の基督なり。永へに萬福なる神、一切萬福の支配者なり。基督自ら神と主張す、故に神ならずんば、如何にして善人ならんや。基督の生涯の水流は、高き水平を以て人類の間を流れ、歴史及び天啓のあらゆる潮流の孰れよりも高き水平を以て混々晝夜を分たず流れおるなり。この水流の斯く高く流るる所以を如何にして説明すべきや。水は其水源地より高く昇らずといふに非ずや。然らば其源頭、單に人間たらば、その水流の達し得たる超人間的の高さを如何にして解すべきや。耶蘇基督の、神にして處女より生れたりといふ福音

書の記事を承認するにあらざるよりは、基督の生涯は、解すべからざる疑問なり。

若し吾人にして耶蘇基督の尋常普通ならざる由來を否認するに於ては、吾人は亦基督の尋常普通ならざる生涯を自然に説明し得べからざるに至らん。他の普通人類の生涯の始められたる如くならず始められたる基督の生涯は、其連續に於ても、普通人類のと相違するは當然の事のみ。性來懷疑的なる人物は、基督の非尋常の降誕を否認して基督の非尋常なる生涯の説明を試むるよりも、寧ろ基督の非尋常なる降誕の事實を容認する方が、易からんか。基督降誕の非尋常は、自然基督の生涯の非尋常なるべきを預期さするなり。基督の生涯は、如何なる遺傳説を以てしても、説明し得ず。基督の家族が、基督の生前如何ほど零落したりとて、基督の血に王統の血連續せることは何ぞ疑ふべき。然れども遺傳法則を律として、基督の形體上の求引力、心力上の優勝、道德上の高潔は、説明出來ぬなり。境遇論も基督の非尋常なる事蹟及び品性を説明するを得ず。質朴なる百性風情の家族のうちに、如何にして基督の如き容易ならざる人格を發達し得たりしや。教育論も適用し得ざるなり。基督は、學校といふ字義の示すとほりの學校に入りしこと無し。固より邑のユダヤ教會堂にて學びたることはあ

らん。然れども基督が其周圍の偏狹なる傳説及び迷信以上に超然たるは如何ん。彼れは其當時のユダヤの大ラビ、或はギリシャ及びローマ、若くは想像思辨花の如き東洋の哲學者の足下に敎を聽きたることは多分あらざりしならん。パレスチナ國外に足を蹈み出したる事も恐らくあらざりしならん。而かも斯の基督が、如何にして其生國、および其當時の固陋なる宗派主義、及び小局主義に超然たるを得たりしか。かくの如き基督が、如何にして、いつの時代を問はず其時代の人物たるを得たるか。如何にして基督は、當今の社會上、宗敎上の最も進歩したる思想家すらも、尙ほ未だ其一端を了解し得たるのみに過ぎずして、時事問題の解決として充分これが適用を敢て試みざるほどの、進歩したる眞理を、一朝山上垂訓に於て垂示し得たるか。この山上垂訓は、單に人たるものの思想の、未だ曾て達し得ざりしところのものなり。然るに基督が其弟子に語れる最後の告示に至ては、この倫理的眞理よりも、其神秘的意義に於て遙かに高かし。弟子になせる基督最後の告示は、基督の神性、及び其絕對の神たる事の否むべからざる特標を有す。濟々たる世の批評家よ。吾人は文學及び人生の一問題として、基督なる耶蘇を説明せんことを卿等に要む。『爾曹基督に就て如何におもふや』。

（二）基督に對する偉人物の觀察。

博士ガイキーは其著「基督傳」中に、ユダヤ人が基督の言行に對して盛んに賞賛をなし。回々教徒も耶蘇にメシャたる至高の稱號を與へ。多方面なるシェクスピヤが謙りて耶蘇に尊敬を表し。其他ガリレオ、ケプラー、ベーコン、ニッ トン、及びミルトンの如き人材が、基督の名を諸ての名の最上に置ける事實に、讀者の注意を求めたり。仝博士は更らに又、ジャン、ポウル、リヒテル、即ち其國人が「千古無雙」と稱したる此一人物が、「基督の生涯は大中の至聖、聖中の至大、その釘れたる雙手を以て諸帝國を其根底より扛げ、幾世紀の水流を其溝路より一轉し、今尙ほ世を支配す」と語れる事に吾人の注意を促したり。基督を目し、神智の形象なりと稱せるは、アベン、エヅラ及びデカルトの門弟なる大哲學者スピノザなり。基督を以て神人の合体したるものなりと稱せるものは、シェリング及びヘーゲルなり。『予は四福音書を以て、全く眞正のものとして尊重す。何となれば四福音書中より、幽邃高玄なる光明反照し來ればなり。この光明たるや、地上に現れたる神のみ顯はし得る種類の神の光にして、耶蘇基督の性格より發するものなり』と言ひたるは、第十八世紀の最も光彩ある一人物、ゼルマン詩仙中の君主と、誰れも承認するゲーテなり。

ジャン、ジャク、ルーソーよ。汝の智能の光明を傾け、汝の性格の獨得を盡し、汝の文章の熱情を一注して、『爾、基督に就て如何におもふや』。來れ、汝も亦來りて證者の列に加はれ。吾人をして彼れが如何に言ふかを聽かしめよ。彼れ曰く、『福音書に比較すれば、哲學者の書は、如何に見すぼらしきよ。高貴神秘にして、而かも又かくの如く單純なる書物が、ただ人の作なりと言ひ得るか。福音記者の物語るところの生涯をなせる者、そのもの自身、人以上ならざるを得ざるか。…………然り、ソクラテスの死にして若し聖人の死なりといふを得ば、基督の死生は、神の死生なり』と。

萬卷の書を讀み、壯大なる思想を有ち、僞善を惡むこと蛇蝎の如く、眞理を愛すること渴者の水を愛するがごとく、且つ覇氣稜々たる汝トマス、カーライルよ。汝の一切を傾倒して、汝が基督につきて思ふ所を語れ。彼れ曰く、『ナザレの耶蘇は、吾人の有する最も神聖なる形表なり。人間思想の未だ達せざる高きに在り』と。

學得ある雄辨の説敎家にして又著述家たる博士チャンニングを呼び、吾人をして彼れが基督に就て如何に言ふかを聽かしめよ。彼れ曰く、『耶蘇基督の品性は、人間の條徑を以てしては、到底解し得べからざるもの也』と。

有名なるゼルマンの思想家、該博なる學者、絶美の天才と稱すべきヘルデル、『爾、基督に就て如何におもふや』。ヘルデルの答こそ美はしきの極みなれ。曰く、『耶蘇基督は最も高尙なる、最も完全の意味に於て、人類の理想の實現されたるものなり』と。

軍神の最も大なる子、巨人のごとく天下を横行濶步し、黑烟を以て赫々たる日中の光明を暗黑にし、市街を一擧砲火に委ねて、如漆の暗夜を白晝のごとくなしたる汝ナポレオンよ。『爾、基督に就て如何におもふや』。吾人をして材幹稀有の此一人物が、耶蘇基督に就て語る所を聽かしめよ。彼れ曰く、『予は多少人間を解し得たり。予汝に告げん。諸て是等（古英雄を指して）は人なり。予も亦人なり。耶蘇基督の如きは今古未曾有、彼れは人以上なり。アレキサンドル、シーザー、シャーレマン、及び余は大帝國を建設したり。然るもの吾儕の材幹力量が建設したる帝國は、如何なる者の上に依立するや。兵力なり。獨り耶蘇基督は、其帝國を愛の上に建設したり。今日と雖ども、幾億の人、なほ甘じて彼れの爲めに打死すべし』と。

以上の証言をば、今日の基督反對者の言論と比較するに於ては、今日の反對論の如きは、智識上の材能、及び、道德上の價値その重きを致すべき証明の法庭

より、一束にして掃き出し去るべき斗屑の小言のみ。

（三）神たり人たる犠牲として基督を論す。

基督の理想的人性を正しく解すれば、亦基督の神性の眞實なることを解すべし。但し吾人は此際、毛髪を裂くが如き小面倒なる神學論を試むるの要あらず。假令神の全能と人間の自由とに關し、若くは古今の異端説の何主義とかに關して有する吾人の智識につきて、教會々議の試驗を首尾よく及第したればとて、人或は心靈的には死人たることあるべし。よし又長々と信經を諳らんじたりとて、心は墨の如く、生涯は賤劣極まるものたることあるべし。死せる正統信者よりも、活ける異端者は愛すべきなり。信經は我が生涯に力なし。耶蘇基督は、我儕一切衆生の罪業に代りて犠牲となり、我儕個々の主および救主として識認さるべきものなり。贖罪は神學の中樞、十字架は宇宙の中心なり。これ歴史上の凡ての大事件が回轉したる樞軸なり。神學者の如く、歴史家も、哲學者も、カルバリーの山こそ、わが讀書室を建築すべき處なれ。

耶蘇基督は聖書の中心なり。耶蘇基督は創世記に於る『シロ』なり。出埃及記に於る『我れ有りといふ者』なり。民數紀略に於る『一箇の星』及び『一條の枝』なり。申命記に於る『岩』なり。約書亞記に於る『主の軍勢の長』なり。

約百紀に於る『救者』なり。耶蘇基督はダビデの所謂『主』なり、『牧者』なり。雅歌に於る『愛する者』なり。以賽亞書に於る『奇妙、また議士、また大能の神、とこしへの父、平和の君』とある者是れなり。耶利米亞記に、『ヱホバ我儕の義』と稱せられ。但以理書に、『メッシヤたる君』と稱せられ。撒加利亞書に、『枝』と稱せられ。哈基書に、『萬國の願ふ所の者』と稱せられ。馬拉基書に、『契約の使者』、又『義の日輪』と稱せられ。默示錄に、『アルハ及びオメガ』、また『曙の明星』と稱せられたるもの是れなり。

若し夫れ剛膽なる施洗者を喚び起して其證言を聽かんか、彼れ曰く、『世の罪を任ふ神の羔を觀よ』と。愛の聖徒、傳福音者ヨハネよ。人かれに向て『爾、基督に就て如何におもふや』と問はんか、彼まさに答ふべし、曰く、『彼れは葡萄樹なり、途なり、眞理なり、生命なり、光なり、道なり、道は即ち神なり』と。我れパウロを喚び起して『爾、基督に就て如何におもふや』と問はんか、彼れ曰ふ、『主は人の見ることを得ざる神の狀』。『福あるところの獨一の權威ある者、諸の王の王、主の主』と。一たびは證者たり、次に否認者となり、又次に痛悔者となり、最後に勇敢なる殉教者となれる使徒ペテロを喚び起さんか、彼れの立つるところの證はいかん。彼れ曰く、『汝は基督、活ける神の子なり』と。一

且は疑雲に包まれたりしも、常に其所信に忠なるトマスよ、我れ汝を喚び起さん。汝が基督の足下に跪伏してなしたる証は何ぞ。彼れ曰ふ、『わが主、わが神よ』と。不朽なる冶工、天路の歴程者ジョン、バンヤン、われ汝を喚ぶ。贖はれたる愛の物語は汝が基督につきて語るところの証言にあらずや。われスポルジョンを喚ぶ。汝の凡ての説教集、汝の榮ある生涯、汝の不倦なる敎務が証したるところは、『耶蘇基督は千萬人類の最たるもの、尤も愛すべき唯一のもの』なりといふ一事にあらずや。

ゼルマンの聖書批評の大家デヴィテ、我れ汝を喚ぶ。彼れ曰く、『われは十字架に釘けられたる耶蘇基督の名の外に救なきを知る』と。好學の士マッキントッシ、我れ汝を喚ぶ。待者は汝の最後を看護せり。『耶蘇は愛なり、耶蘇は愛なり、常に變らず』といへる汝の臨終の微かなる言を聞きをとさざらんと皆體を屈めて、汝の口に耳を寄せたり。トップレヂー、我ら汝が『千代へし巖よ、われをかくしね』と歌ひいづるを聽かん。チャールス、ウェスレーよ、われら汝と偕に『基督よ、わが求むるものは主の外あらず』と歌はん。ロンドンにありて千載の芳名を献身に傳へ、その勝利の將さに終らんとせるころ、吾人はジョセフ、バーカーが、『予は婦人の愛にも勝りたる聖き優しき愛を悉くし、祭壇の焔のご

とく熱き心を以て、ナザレ及びカルバリーの彼れに伴へり』と言へるを聽けり。吾人は茲に聖中の至聖者、眞の神よりの眞の神なる、神の基督を喚ぶ。基督は自から如何に言ふか。曰く、『われはアブラハムの在らざりし先より在る者なり』。又曰く『われと父とは一なり』。又曰く『われを見しものは、父を見しものなり』と。

此處に集れる兄弟姉姉よ。我れ今基督の榮ある名を以て、その嚴然たる言を其儘、諸君に問はんとす。『爾曹、基督に就て如何におもふや』。吾人いつかは皆その臺前に立ざるべからざる主基督の名を以て、今われ諸君が、耶蘇基督の足下に跪き、痛悔歸信したる心より『わが主、わが神よ』と、トマスと同じ此信仰と愛の告白をなさんことを勸む。(山縣雄杜二君譯)

人を見よ、神を見よ

神學博士　ロポルトソン、ニコル

人多く基督を直視することを好まずして之を避く、これ其の患なり。ストップフ

オルド、ブルークは詩人ボルンスが多くの文學者の如く神の子を面のあたり視ることと否みたることを說けり。今日の懷疑思想は主として耶蘇基督の生涯と教訓を知ることの淺きより來る。最も緊要なる事は我等が、「インスチチユーツ」（カルビンの書）の基督にあらず、又「基督の摸範（イミテーション）」の基督にあらず、又近世の基督傳の基督にもあらずして、福音書の基督を精究するの事なり。基督一生の精神を人の思想に貫徹せしめんが爲に、我等は其の全情は人間的にして其の高潔なるは神的なる此の無二の性格を明にするを急務とす。

（一）我等は先づ公平なる福音書の讀者に向ひて、基督の性格の不思議にして且獨創的なる一事を訴へんと欲す。先づ基督教會の外に立てる人の立證を聽かしめよ。ルウソーは云へり『福音書の事實に據れる痕跡はかくも大に且著るしく又摸し難く、若し之をして人の發明に成らしめば其の發明者は主人公よりも一層奇偉なる人物ならざるべからず』と、又曰く『ソクラテスの生と死が聖人の生死ならば、耶蘇の生と死は神のそれなり』と。デヨン、スチユアルト、ミルの言は斯る事につきては重を置くに足る者なるが、彼も亦基督の性格の獨創的なることを以て歷史的に眞實なるを論說して曰く『耶蘇の弟子の中又其の歸依者の中誰か耶蘇の言として記せられたる言を發明し、福音書に現れたる如き生涯

と品格を想出し得るものぞ。ガリラヤの漁夫之を爲す力なく保羅之を爲す能はざることは明確なり』。又曰く『近代の人心に偉大健全なる握力を有する者は、猶太人の神、自然界の神にあらずして人となりたる神なり』と、我等は、彼が父の業を爲すべきものなりとの一念の明け初めしより三十歳に至るまでの長く靜なる半生を說かざるべし。我等は又凡ての讀者を感ぜしむる事實即ち其の忍耐と熱心と甘美と强毅と深き謙遜と無比なる自守と尊崇信依を求むる要求を今更敍述せざるべし。但此等の外に意を留むるに足る二の點あり。先づ福音書の記者は此の驚くべき人物を人生の實務の間に描きたるとに注意せしめよ。即ち彼が或は崇拜せられ或は讒られ、或は勝ち或は苦み、或は奇跡を行ひ或は冷き水を求むる等種々の境遇に處して如何に振舞ひしやを書き留めたるが、記者は現實にして有り得べき人物の姿を描き得て失敗せざりき。且つ彼等は能く活ける人格を讀者の眼に髣髴たらしむるを得たり。この二點は文學上に於て最も困難なりとする所にして、全くその困難に克ち得たる人無しと云ふも過言にあらず。文學上に現れたる理想的人間の面目は多くは朦朧にして、ギヂビーブの言を思ひ出さしむ（譯者云ふ、これはテニソンの詩句なるべし）。

友よ、少しも過失なしと云はるる人は却てこれ全身過失なる人なり。

我が愛せられたき人は地に觸れたるものにもあらざるべからず。
低く懸かれる太陽こそ能く彩を染め得るなれ。

ジョルヂエリオットは其の最晩の小說「ダニエル、デロンダ」に於て其の主人公をイスラエルの救主に肖せて理想的人物とせんと試みたれども、其の人物は有り得べきだけ薄弱にして光彩に乏しくハットンが「道德上の霧」と評したるものとなれり。聖者の傳記も之を書くことは困難なり。其の神靈の境に近き餘り個人的積極的なる分子を弱くする傾きあればなり。たゞ聖者にして自ら筆を執りて其の生涯と實驗を記したる者は例外に屬す。又理想的人物の描寫にして聊か滿足するに堪ゆる者は實際生活に就きて摸寫したるものに限ることは文學上の定則にして、「アダムビード」のヂナ、モリスの如き其の一例なり。是に於てか、福音書の品格の奇異、獨創、精細、新鮮、現實なるは實物の描寫なるを證するに足れりとす。

(二) 次に歴史の和合に注意せしめよ。批評家は曰く、福音書は今まで空中に浮びたる斷片を拾集して成りたるものにして多くは歴史的にあらずして小說的なり、其の書かれし時代の意識を反映せしものにして、耶蘇に關する事實に據りし者にあらずと。果して批評家の云ふ如くならばこれ實に莫大なる奇跡にし

て、文學研究者の認むる文學の法則を蹂躙せる者なり。苟くも文學の何たるを知り又人生の何たるを知る文學批評家は此等の淺狹なる論者を審判するを得べけん。

我等をしてその議論を証明すべき二個の實例を文學上に求めしめよ。啻に一個の基督教者たるのみならず又卓越したる文學者たる一人の辯証家は路加傳にある、基督が復活して復エマオに行きし二人の弟子に現れたる記事に就きて、此の福音書の記者が、復活したる神てふ崇高なる觀念を把持し得たる點を指示したり。福音書の記者は大胆にこの復活せる者の細き行爲を叙記し、其の神聖なる唇に適はしき言を書き留めたり。沙翁さへもかかる高大なる想像の境を辿るときには往々失落の處あるを免れず「ハムレツト」の中にある幽靈の言の比較的不出來なるを見て之を知るべしとは、この辯証家の論ずる所なり。サー、ウオーター、スコツトが「修道院（モナステリイ）」と題する物語の序に於て、小說の中に超自然的の道具立てを用ゆる時缺脫を免れざることを云へるは人の良く知れる所なり。ゲーテの「フアウスト」の中の美しき復活祭（イースートル）の一節に於て、弟子は其の師が天に昇りて彼等のみ地に殘りて苦まざるべからざることを悲めることを記しあり。然るに福音書によれば弟子は基督の死に逢ふて悲しみ、其の復活の消息を開く

も餘り良過ぎることとなりとて信じ難かりしが一度其の眞實なるを知るに及び、喜悅と得意にて充ちたりき。其の調和と其の壯麗を以て世界を眩したる此の一條の物語は凡人の手によりて搆成され得べきものなるか。批評家の云ふ如き巷説と斷片が集まりてこの大結果を生み出だすことは如何にしてあり得べきや。この建物は如何なる石材より組み立てらるるか我等は語るを得ざれども、唯一つ確實なる事は、此の中に眞實の歷史を有するのみならず、此の家は手を以て作られざる家なることなり。

（三）　次に擧ぐべき點は基督の物語を一貫して現れたる神と人との和合にあり。福音書に於て基督は靈界の沙翁としてニウトンとしてモッアルトとして描かれず、神として描かれあり。然るに其の面目は最も人らしく最も謙遜にして、神性と人性、高貴と謙虚と並び行けり。人生の荊棘にて傷つけられ其の塵に汚れたる足を洗ひ、然かも神より來り神に行くことを知りて此事を爲せりとあり。彼は『すべて疲れたる者又重きを負へる者は我に來れ、我汝等を休ません』と曰ひて其手をのべて疲れたる世を招けり。然れども彼親ら旅路に疲れて井の傍に座し一杯の水を乞ふを甘じたり。之を思へば基督の奇跡も亦避け難かりしと明ならん、何となれば彼は罪惡の爲に人間の生涯に生じ來れる不秩序を整頓す

る爲に來りたればなり。斯くて世界の人は此の地上を新にしたる彼を望み見れば、柔なる神の聖意が神の子の人性に宿りて着々虚しき心の聖殿に近づくことを解し得べし。充分に福音書の物語を解得する時心に燃え出づる熱烈なる愛情は、我等の心と至て密なる交に入らざる心に對してのみ發し得可き種類のものなり。

（四）斯の如き簡短なる論述に於てはただ要點を擧ぐるに過ぎざるが、心をこめて福音書を讀む者は其の物語の始より、主の生涯が死に向ひて進行せるに注意せざるを得ざるべし。世界の大なる文學に於て不磨の價値ある文章は多く、人が永遠世界よりの招きを聞きて（人生の響最も騷がしき時此の招きを聞くことなく）遂に之に應ずる時の筆を寫せる一節なるが、基督の短生涯は其の最も早き、瞬間より死の影を點せられたり、然かも其の死は他の同胞の死とは類を同じくせず。彼の一生はルナンの描ける如く稗史的（アイヂリック）ならず、然か思へば始より全然其の意味を誤解するなり。其の色彩は徹頭徹尾犧牲的の色彩なり、基督は單に摸範たらんためにあらずして世界を引き上ぐる者救ふ者たらんために來れり。彼の一生の行路終に近く時、悲哀の深みより溢れ出づる悲哀なりしが、これ決して人知れぬ悔恨其の胸を裂きしにあらず。彼の聖き一生を通じて狂乱の

瞬間は絶えて之なく、過去の年月より抜き去らんことを祈りたる部分あること
なし。敵とは戰ひたることあれども、其の胸裡に道德上の悲劇を感せしことあ
らず。されば彼の悲哀は彼自身の爲にあらずして全く我等の爲なりき、其の重
負は即ち全情の重負なりき。彼は單に我等の悲哀、我等の暗黑を拭ひ去るにあ
らず、我等を罪より救はんが爲に來り、吾等を救はんが爲に其の精力を絞られ
たり。我等の罪惡の重負は終生彼の肩に懸かれり。一生の終に近くに隨ひてこ
の負擔は益々明にせられ、其胸中の秘密は益々十分に呈露せられたり、然れど
も歷史は始より一貫せる歷史なり。

（五）次に彼の罪無きことに關する福音書の證言につきて一言せざるを得ざる
は自然の順序なり。この歷史が事實の歷史にあらずんば如何にして之を作るを
得んや。如何にして罪無き人を想像することを得べき。理想を描くことさへ、
我等の理想と稱するに滿足する所を描くさへ、最大なる天才にも容易ならざる
ことなれば、況して罪無き人を描くことは單に事實に據れりと云ふのみにては
十分ならず、事實以上の或るものを要す、其は何ぞや曰くインスピレーション
なり。基督の弟子等は狹き室にて彼と起居を全じくし、偕に小き舟に乘り、偕
に粗薄なる食を分ち、偕に道を步みしとなれば、少にても彼に私欲あり躁急な

る所あり虚僞あらば必ず之を觀破し得たるなるべく、又彼か至て賢く純潔に且つ眞實なりとも之を誤解することあるべき筈なり。然るに彼等は基督の榮は神の獨子の榮なることを疑はず、罪無き人の面目を傳ふることに成功せり。其の筆端少しも誤らず、他の手足を助くるにあらずば焉ぞ能く是の如くなるを得んや。基督は山の上の說敎を語りしのみならず又其の通りに生活したるなり。弟子の証言よりも更に重大なるは基督自身の證言なり。彼は猶太人的の良心を以て生れ、律法によりて罪の知識を敎へられたり。彼は他人の罪を知ると銳利にしてパリサイを責むるに道德上の識見の缺けるを以てせしかども、自ら罪を意識せりと見へず。彼は十字架の上にて『父よ、彼等を赦し給へ』と祈りたれども、『父よ我を赦し給へ』と祈りしことなかりき。一言に云へば彼は罪の意識を有せざりしなり。彼の敵も又友も齊しく彼の罪なきを立証せるが、之よりも有力なるは彼自身の立證なり。彼は從容として云へり『汝等の中誰か我を罪に定むる者あるか』と。基督にして果して無罪なること明ならばこれ既に歷史的に奇跡の領分に入りたるなり。道德上の奇跡は物質上の奇跡よりも更に不思議なり。ブルッスが云へる如く『罪無き基督は海の上を歩みたる基督と同して大なる奇跡なり』と。

熱心なる研究者にしてこの點に疑惑を挾む人は、幾分か四福音書に通ずるまでは凡て他の書籍を架上に置くを可とす。若し誠實に又忍耐して講究するならば、我等は信ず、其人は遂に此の歴史は眞實の歴史にして、基督は唯一の救主たることを解するに至らん。玆に記憶すべきことは、如何なる事に於ても幻覺力（ヴイッシオン）は其人を量る尺寸なり。或人有名なる批評家に云ひけるは『予の見る所を云へば、予は決して沙翁に感服すること能はず』と。批評家の答は至て簡短なり、曰く『予は彼に感服す』と。宗教の領分に於ては謙遜と苦心と渇望と精神の煩悶と純潔なる志は洞察力に欠くべからざる條件なり。朧なりとも基督を實覺することは永遠の門戸を開くの道なり。『我は其目を布にて掩ひ覺束なく歩む人を見たり。其の布は少しづつ解かれて其の全く落つる時其の人は太陽の前にあるを見出だしたり』。

深き下にも深みあり。
高き上にも高きあり。
我等の聞くは未だ聞くにあらず。
我等の見るは未だ見るにあらず。

（柏井園君譯）

雑　録

個人事業を有力ならしむる二三の要件

神學博士　デビッド、グレッグ

是れ如何にもして彼等數人を救はん爲なり
（哥前九〇廿二）

自證は、吾人基督敎徒の此世に於る使命なり。基督敎徒といふ名、旣に此事を示す。そは基督敎徒といふは、社會にありて、己れ一個の基督となり、且つ基督の爲に或る事をなす者の謂ひなればなり。我れ救を蒙れりといふは、亦他を救はん爲に外ならず。磁石は、磁氣を通ずる爲めにこそ磁氣を通せられたるなれ。わが行されたる通りに其れ丈け多く亦他人に爲すを以て吾人の使命とす。我れ我が友に因りて基督に到るを得たる通りに、我れ亦基督を知らざる我が友を基督に導かざるべからず。我れ亦わが救の物語を我が友に語らざるべからず。基督敎を後世に傳燈し、神の精神を吹入れて社會を一洗し、萬人の目前に十字架を立て、開きたる聖書を人の手に置き、亡びの途にある者を救囘し、商業、風俗、技藝、快樂、遊戲を諸て基督化し、ナザレの耶蘇を地上一切の制度及び政治に化身せしめ、敎會をして十字架に釘られたる者の傳へたる眞理に忠信ならしめ、敎理に於ても、生涯に於ても、神聖純潔にして、專心人々の救を期し、靈火に滿ちて、基督を萬人に傳證するは、吾人すべて基督敎徒たる者の使命にして、亦神の大目的なり。

實にや是れ、神の大目的なりと雖ども、一方吾人にありては、己れ自身の使命を完ふし、自身の事業を爲さざるべからざる也。神は吾人と共に働きたまふと曰ふと雖ども、我れの代りに、若くは我が爲すを怠れるものを、神爲し給ふにはあらず。神はパンと魚を增加し給ふべし。され

ばとて是れを頒ち與ふることはせぬなり。これを爲すべきものは弟子なり、蓋し爲し得ればなり。神はラザロを甦らし給ふべし。然れども石を墓より轉ばし去ることはせぬなり。これを爲すべき者はラザロの知人朋友なり、蓋は爲し得ればなり。神は唯神のみ行ひ得る事業として人類を救贖し、之れが爲に大なる價を拂ひ給ふべし。然れども此救贖の恩賜を我が同胞に授奉するは人々の任なり。之れ教徒各自の能くすべきものなればなり。自身に救に與れる者、誰れか此任務を免かれんや。

吾人は基督の爲に、着々此世に切り入りつつあるか。誠心誠意事を爲しつつ、果して己れ滿足すべき程なるや。己れ「熱火の聖徒」なるか。悲ひかな、我信仰の事業に偽爲多く、わが事業を基督に獻ぐるに僞善多し。吾人がレバイバルを熱求する祈禱も形式なり。教會にして若し神が予へんと約せし條件を奉じだにせば、何時にてもあれ、直ちにレバイバルあるべきなり。輓近『失信者』に關して種々の議論を聞く。多人數が教會より失信するは如何なる理由ぞとは、吾人が屢々耳にするところの質問なり。吾輩をして、吾輩の見地より是れが答をなさしめよ。多人數が教會より失信したるにあらず。教會が彼等より失信したる也。墮落したるものに對して冷淡になりたるは、教會なり。教會は彼等を扶け起さんとする眞實誠意の同情なき『兄』(路十五〇廿八)に滿つ。是等の人々は彼等の罪を責め、彼等の無情忘恩を罵れども、彼れの救に關しては我が口を噤めり。彼等より教會を移し去れるものは是等の人々なり。而かも人々が教會より失信せりとなして彼等を非難し詆譏するなり。吾人の見るところによれば、教會に屬する者も、亦悔改の必要あり。神の救の恩に對して、吾人の不忠實なりしを悔改めざるべからず、教會先づ其本分を盡さば、社會も亦我が分

を盡して教會に來るべし。

吾人が基督の爲めに盡くす『個人事業を有力ならしむる二三の要件』なる題を揭げたる理由は、基督に對し、且つ未信者に對して、吾人各自の責任を全ふせんとする上に、一助ともならんかとの微意に出づ。

（一）按ずるに、基督教徒をして、其事業を成効せしむる第一の要件は『歩を發す』る事是れ也。

始めよ！ これ神の第一の命令にして、宛かも時勢に適したる一語なり。人或は曰はん、これ言ふほどのことにもあらずと。然れども吾人は曰ふ、大に然らずと。これ最も多數の基督教徒が必要とすべきもの、且つ其最も多く必要とするところの者なり。吾人は他人の靈魂の救はるる爲に未だ懸命の熱心を以て此事を始めざるなり。始める、歩を發するといふ事は、大低の人には、至極困難なることなり。救の物語を、始めて人に告ぐ。人を始めて是れに招く。一生懸命始めて人の心に衝き入り、人をして始めて耶蘇基督と面々相對せしむ。凡そ此の如き事豈に容易ならんや。先方の氣に觸れて是れを怒らしむる事ども無きや、などといふ臆病心と、偏見と、杞憂と、恐怖とに克たずんば、爲し得ざる事業なり。

實際、始めて基督の爲に人の靈魂を救はんと試みんとする塲合、人々は如何に多く自ら我れと我が心に問ふとならん。予は彼の人に語る最良の人物なるか、彼の人と語るに予は憚らず直言直語し得るか、神は予が彼の人に語らんことを望み給ふか、彼の人は予を如何に迎へんか、など自問果てしもあらず。始むる、豈に易からんや。然りながら基督教徒たるもの、先づ我が責任を爲すべきなり。神乃ち偕ならん。聖靈は吾人の行ふところの不足を補ひ、又誤謬なきやうに護り給はん。我れは先づ行ふべし。効果を

收むる者は神なり。

ヘルコマーとは有名なる英國の肖像畫家なり。『ヘルコマーに老父あり、共に壯麗なるブッシーの宮殿に住す。父はまだ年壯なりしころより塑像を事とす。年老ひては其作の缺多かるべきを氣遣ひ、老朽技能を失へりと、寢に着く時、いつも憂心忡々たり。天才豐潤なる其一子、これを知り、一夜窃かに父の業室に入り、工具を把りて、技術のなし得る限りの美を我が父の拙作に加へたり。翌朝老人階を下り來り、我が作を見、莞爾として曰く、己が手未だ老ひず、見よ、わが作これを語るにあらずやと』。これウィルバフォースの語れる一逸事なるが、神の靈、吾人の事業を補足するも亦かくの如けん。されば神を信じて、先づ着手せよ。よし神の補足し給ふことあらずとも、吾人は當然その事業を爲すべきものなり。

ニウヨウクの一紳士、一讀せよとて我れに『一日の時間表』と題したる一小册子を呉れたることあり。此小册子は宛かも時宜に適したる例證を供す。書中の女主人公は、富有なる當世の若婦人なり。基督敎を信ずるものなるが、一日聖書を讀で、申命記（十一〇廿一）の『汝らの日は地に於て天の日の如くならん』といふ一句に至り、嘆じて曰く、我れ曾つて未だ此る日を有せずと。於是彼女は、天より日々の時間割を己れに與へられ、課業を其れぞれ割當てられんことを神に望むに至たれり。彼女は基督敎徒の事業を行ふて、世に有用の人たらんと欲したれども、如何に是れを爲すべきかを知らざりしより心、此に出でしなり。時に彼女の心中より聲ありて曰く『先づ始めよ、あとの事は神宜きになし給ふべし』と。彼女即ち『われ爲さん』と答ふ。その時宛かも貧家の一少女、要事ありて彼女の父に面晤せんとして來るに會す。偶々父不在なりしかば、彼女出でて之れと語る餘儀な

き場合となりぬ。彼女は神より與へられたる機會と思ひつつ少女を引見し、少女の要件を知り、合力及び同情を求むるままに、なし與へたり。蓋し此の婦人は此少女により、わが責任を盡し、基督の爲に事を爲し始めたるものなり。而して其の結果はといふに、此一時間の事業は、發達して嚴然たる形を成し、虚弱者救濟の一組織となり、次で海濱保養院となり、幾百千の者の心を樂ましめて其健康を恢復し、結局莫大の人々を基督に歸信せしむるに至りぬ。加之、彼女自身の宗教心も甚しく開發せられ、他の献身者と交際を廣くして、彼等の經驗及び希望に因りて、わが心を富ましぬ。この婦人は其會へる病める教職によりても助けられたり。この教職は、この婦人が常づね『寢臺の教區』と稱したるところに在りて、依然主に忠實に仕奉せりしなり。彼れは該婦人に教ゆるに、常に目に見えぬ大なる者に頼りて事を果すべきことを以てしぬ。聖書は彼女にとりて今や新しき書物となれり。以前には僅かに救の福音書たるに止まりしものが、今や併せて指導の福音書となりぬ。新しき力は、聖き光を以て其毎章を照らし、日比求めたりし我が生涯の時間表を、此中に見出すの喜悦に遭へり。眞に此婦人の一生は、終に一言一行神に献身したるものとなり。一事一業、悉く神の國の建設に貢献する者にあらざる無きに至れり。彼女は始めたり、餘事は神の爲し給ふところなり。故に着手は先決問題なり。諸君は始めたるや否や。

(二)　次に論ぜんと欲する要點は、活ける基督教徒との親交により、吾人の受くる刺激および助勢これ也。

基督教徒をして、心靈的事業を成さしむるに必要なる資料を供給すといふ事は、吾人が基督教會と親交を保つべき利益の一なり。教會は、經驗、信仰、智識、熱情の共同財産なり。誰れも

勝手に之れより武器を引出すを得べし。神の殿に於て、基督教徒は互に親交し、互に愛の交換をなす。與へて又受け、受けて又與ふ。教會は此る交換の所なり。

茲にソロモンの殿の位置につき、至極面白き傳説あり。殿の建立されたる場所は、始めはヘブル人なる二人の兄弟の共有地なりき。その一人は妻子あり、一人は獨身なり。地は田圃にして麥を植えたり。收獲の夕、麥はそれぞれ束ねられて未だ圃にあり。兄わが妻に語て曰く、吾が弟は重きを負ふに堪えざるべし、日も亦暑し。われ行きて彼れの知らざるうちに、吾が麥束を彼れの處に置き、明日わがものらしく彼れの分をも荷ひ入れて、彼れの勞を省かんと。弟も亦同樣なる慈悲心を起し、心に自ら語るらく、吾が兄は家族あり、吾れは有せず、吾れ往きて吾が麥束を兄の分の傍に置かんと。翌日二人は其麥束が少しも減せず其儘なるを見て怪訝に堪えず。此ること幾夜か續きたりしかば、二人とも窃かに見張をなして此不思議を解釋せんと考へたり。料らざりき、當夜二人とも先方の麥束を抱きつゝ、愛の交換をなさんとして、各その途にて相會せんとは。ソロモンの殿の建てられたる地は、此る愛すべき連想を有す。人々が聖徒の親交をなすべき神の殿は、兄弟互に供物を交換し、互に賜を授受すべき場所たるべきを教ゆる爲に、此物語はユダヤのラビが一の譬喩談として好で語るところのものなり。

人は互に影響するものなるが故に、互に相受くるを得るものなり。吾人は互に相求め、互に相非難し、互に相憂ひ、互に相勵まし、互に相教育し、互に相説明するもの也。敢て故らに爲すにあらず、唯僅かに相對したるばかりにて無意識のうちに此くなすなり。日常普通千百の事、皆これが例証を供せざる無し。例へば美容の佳人は、我が前に來る婦人の美醜を無言無識の間

に説明す。長身の人は、その前に來る短軀の人の短かさを説明す。敢えて故らに爲すにあらず。短軀の人も亦これを知る。其知るや、或は巨身なる者の一人居る部屋に入るを堅く拒絶するほど明白なることあり。短身者は、或る惡むべき比較なくして、わが體軀の短かきながらに、何とか艶をつけんと冀ふものなり。此の如く吾人は常に審判くなり。唯面々相對したるばかりにて互に無言無識の説明をなすなり。この故に希望靑春の如く、絶えず活動する有力なる基督教徒の在るは、基督の爲に、基督教事業の進歩の爲に、最大なる力の一なりとす。此の如き人物は同職者中の鼓吹力なり。此の如き人物が、人を教育するの多きは、計り知るべからざるほどなり。吾人は此の如き人物との親交を常に必要とす。

(三)　個人傳道の要件として今一つの事は、高潔なる基督教徒の品性これ也。此は以上掲げたるものよりも遙かに有力なるものと知るべし。」諸君は懷疑論者の反對に答へんとして、聖書より縱横に引照をなすを得べし。然れども其背後に確實なる基督教徒の品性なくんば、反て聖書の價を毀損し、その鋭利なる言を反て無力なるものとなすべし。力を與ふるものは書物の背後に在る人間なり。説教をして力あらしむるものは説教の背後に在る説教者にあり。

スポルジョン嘗て孤兒教養の熱誠家ジョージ、ミュラーの説教を聞く。而して曰く、我れ久振りにて靈魂の饗應を受けたりと。問ふ者あり、君はミュラーの説教が偉大なりしといふかと。スポルジョン答へて曰く「否、彼れの説教は至極單純なるものなり。我れを動かし、我れを刺貫きたるものは、説教のうちにあるジョージ、ミュラーの性格なり、わが虚空に流れ入りて我れを養ひし者は、彼れの心靈的勢力なり。他人にして彼れの説教をなしたりとて、我れは何の

益も受けざりしならん。然るに我を非常に感動せしめ、益することの多かりし所以のものは、一言一句ミュラーの生涯より發したるが故のみ。說教の背後にミュラーありしが故のみ」と。善ひかな、スポルジョンの言、人格是れ萬事萬能なり。

神が人をして、神の爲に事業をなさしめんと之れを招き給ふや、先づ其人の信仰、愛、及び純潔の如何に就て自省せしむ。此世にある吾儕の心に、神宿り給ふを見るに於て、神は吾儕が天に在る日、亦神を信ずる者なるを知りたまふ也。心靈的宗敎最大の證明は、神聖純潔なる宗敎性格なり。基督に献ぐる最良の役務は、己れ基督の如くなる事なり。品性は即ち仕奉なり。之れ誰れも反對し得ざる議論なりとす。

此世に於て基督の爲に事を爲すに當り、基督敎徒と稱す者は、先づ我が身により基督が如何に代表され居るやを第一に自省せざるべからず。若し吾人にして、世間に對し、基督を最も善く我が品性に於て代表せずんば、基督は到底他人より賞賛されまじく、また決して受けいれらるることあるまじきなり。

茲に甲乙二人あり、話ありとて往來に立止まりぬ。宛かも其時、錢貰ひの興業オルガン、襤褸を裂くが如き音調を以て樂譜を奏し始めたり。惡聲殆んど聞くに堪えず。乙曰く、歩を移して他に往かん。甲なる一人いはく、樂譜は不足なし。君は知り給はざるに似たり。乙曰く、無論知らず、また知らんとも考へず。之れを好きには、到底なり得まじ。甲曰く、何故にや。かの樂譜の作者は、大なるハンデルなるを知らずや。これ『見よ、凱旋の英雄來る』の曲なり。乙曰く、さらばハンデルとかは、如何にも惡作をなす男かな。甲これを聞き、厲言一聲して曰く、予はハンデルが此の如く淩辱さるるを忍ぶ能はず。君予に伴ひて必ずハンデル紀念日に來

り、故人の名曲が、まさにあるべき音調を耳にせよ。

數ヶ月の後、ハンデル崇拜者は、乙をハンデル紀念祭に伴へり。而して整然たる律呂を聽き、七重のハレルヤを耳にし、心ために恍惚として醉へるがごとくなりし乙は、乃ち問ふて曰く、これ何の曲ぞ。嗚呼何ぞ料らんや、之れハンデルが『見よ、凱旋の英雄來る』の曲ならんとは。

世に基督敎徒と稱するもの幾干なるを知らず。然れども濁調を發して緩急度を失し、ハンデルの大作をも、あたら体無しになし了る粗雜(やくざ)オルガンより、大家の妙曲、その極致を發露して遺憾なきオーケストラに至るまで、その間種々樂器に相違ある如く、幾萬幾億の基督敎徒、みな同じきものにあらず。吾人は誰れにありても、基督が最も善く代表されんことを冀はざるべからず。美はしき品性を有するものにして、始めて基督を善く代表すべきなり。六かしく思ふべけれども、なし難きことにはあらざるなり。

吾人の所説にして眞ならば、各自の實際問題は是れなり。曰く、基督に仕へんとして、如何なる品性を吾れは基督に献げつつあるかと。如何ほど我れに在りて基督が、人目に見へおるか。如何ほど聖書の言に力を與へつつあるか。如何ほど個々の成聖の爲に盡しつつあるか。わが心に、罪は寬容されおらずや。若し默過されてだにあらば、我が基督の力は全く殺がれおるものと知るべし。わが心は至聖所として維持されおらざるべからず。愼むべし、内なるものは、善惡いつかは外に現るるなり。吾人は常に淸き手の人、淸き心の人たるべきなり。かく言ふを以て、其求めらるることの餘りに高きを失望する勿れ。聖靈の內助により、吾人は能く此くの如くなるを得べし。いと微小なる基督敎徒たりとも、その心に在りて外にあらはるる基督は、天下最大なる聖人の心に在る基督と、敢て毫も異

らざるを得べし。茅屋の焼けたる軒にかゝる一點の水滴が、上なる日光を捕へて吐き出す小虹は、天空に懸る壯麗無比なる巨虹と、その色と美の排列に於て、毫も異るところなきを知らずや。

基督教徒の個人事業を有力ならしむる爲め、正善の品性を有せざるべからずといふは、一言にして盡さば、われを全く神に服從さす事なり。神の生命を充たせ、神の聖靈によりて指導され得るやうに、我れを全く神に從はしむる事なり。於是神は其人を用ゆべく、用ゐて救の事業を經營したまふべし。されば己を全く神に從はしめたる男女の教會は、心靈的教會と稱すべく、人を救に導く教會なりと謂ふべし。

契約の子孫の義務

神學博士　ジー、エフ、ペンテコスト

夫れ爾曹は預言者の子孫なり、且つ神が我儕の先祖等に立て給ひし契約を承繼ぐものなり(中略)神すでに其僕イエスを立て、爾曹各人を其惡より引反して福を獲させんが爲に、先づ爾曹に彼を遣せり。

使徒行傳第三章廿五六節

こはペテロがユダヤ人に向つてなせる説教の結尾なるが、此の説教に於て彼は彼等をして、長き時代に亘れる神の聖旨を成就し給ひし、その獨子を磔殺せる罪惡を自覺せしめんとはしたるなり、即ち神が一民族として彼等の上に降し給へる眷顧愛憐の歴史を回想せしめ、之によりて彼等の神に對する義務責任を喚起せしめんとはしたるなり。

ユダヤ民族は世界の諸民族の中にて一種特別の民族にして、神は幾度となく彼等に自身を顯現し給ひて、その祐導その保護その親切その限なき愛憐を示し給へり。預言者は預言者に繼で起

り、以て神の聖旨を彼等に傳へたり。顯現は顯現に繼で與へられ、以て神の愛憐と能力とを彼等に示したり。而して此の充ち滿てる顯現が、彼等に取りて平凡普通の事となり了りて、又た深き感謝の念を起すべき事柄たらざるに至れる時は來れり。實に彼等をして謙遜ならしむべき舊の恩寵は、彼等が正當に享有すべき特權の如くに思はるるに至りて、その態度は爰に傲慢の態度となり、斯くて神の恩寵は彼等によりて認識されざるに至れり。

保羅が羅馬教會に書を贈るや、此の事を基礎として論じぬ。その趣旨に曰く、人々に與へらるる益は必しも彼等の爲に眞の益とならず、如何となれば、此の益や方便にして、そが目的を成就するに於て始めて眞の益となるものなればなり。さらば猶太人は如何なる益をか有す。是れ固より多し、而かもその最なるものは、神の聖旨が彼等に示現されたる事なりとす。故に神が人の爲に謀り給ふ事は、必しもその者の救はるる事を含まず。救は單に神の聖旨企圖を知ることにあらで、之を我身に實用することにあり。この一般眞理は今日に於て最も大切なり、而してこは心靈的ならざる事柄にも認識さるる眞理なりとす。

爰に一人ありとせよ。彼が發展すべき機會の大なるだけ、彼の影響すべき範圍の廣きだけ、之を善用して之を濫用すべからざる彼の責任やそれだけ大なるなり。不潔と墮落の中より生れ出でたるものは、教育あり機會ありながら惡に赴くもの程、自身にも將た又たその中間にも恥辱には非ざるなり。而かも余は種々の人々と接觸したる長き經驗に於て、世にはおのれ常に敬虔なる境遇や基督教的模範に圍まれたるが故に、たとひ靈的生活を遂げんと努力せずとも、自然に斯かる好機會を有せざる人々よりも勝るべきことを信ずる輩多きを見るなり。彼等のこの信

仰は果して道理あるもの安全なるものなるか。保羅はしか思はざりし。彼は神の律法の精神が把握され實行されざる以上は、儀文は何等の益なきことを明言せり。機會ありて之を用ゐざるは、一個の罪責たるを免れず。基督は絶叫して宣はく『噫禍なる哉コラジンよ、噫禍なる哉ベツサイダよ、爾曹の中に行し異能を若しツロとシドンに行しならば、彼等は早く麻を衣灰を蒙りて悔改めしなるべし』と。機會を空しく看過するは、彼等に於ける如く我等に於ても、一個の罪責一個の恥辱たるなり。

或は問ふものあらん、斯かる境遇に與からず斯かる教訓を受けざる方、却て自身に取りて幸ならずやと。否な否な。是等の機會境遇は諸君に對する神の恩賜なり。諸君は之に由るに非ずば、決して諸君が當に到達すべき目的に到達する能はざればなり。唯だ記憶せよ、基督の審判は『多く與へらるる所には多く求めらる』てふ論理に基くものなるを。爾曹は預言者の子孫なり、又た契約の子孫なり。この特權の價値や測り難し。而かも之と共に、最上のものを追求し最善のものを實現すべき義務責任も亦た大なり。此の恩賜を利用せず之を足下に蹂躙して顧みず、爲に叱責を受け審判を蒙るが如きは、何たる情なきことぞや。

他國民の實狀を知るに從つて、余は自身が米國人たることと、此國の政治的組織道德的境遇の中に薫育されしことを喜ぶなり。我等米國人は他國民にもまして大に自任自重すべき筈なり。神の恩寵は斯くも著しく我等の中に現はれたり。我がアングロサクソンの血液、我が新教的信仰は、我等の間に最善最美の生命を發展せざるべからず。我等は果して之を完ふし得るや否や。

前週間の祈禱題中に言へることあり、曰く『四教會の長老等の子弟輩が基督信徒たり得るよう

に祈れ』と。余は殆んどそが何の意なるやを知るに苦しむ。契約の子孫、預言者の子孫、何故に彼等は悉く基督信徒たらざるか、斯教の教訓を受け斯教の模範を見ながら、如何にして彼等は邪道に蹈み迷ふか。嗚呼、此の問題や實に深遠なり。何故に機會が常に利用されざるにや。何故に親切が多く濫用さるるにや。斯の如きは今に始まりたることに非ず。何時彼等はおのれを愛するものに復歸して、之に忠實なる恭順を表すべきや。今は局外者が教會に入り來るに頓挫を來せる時なりと見ゆ。是れ神が昔日の如く今日も尙ほ、その民を特に眷顧し給ふには非ざるか、神の大御心が到る所萬人に悔改を促しながらも、先づ諸君を尋ね諸君を招き給ふには非ざるか。オヽ、預言者の子孫よ、契約の子孫よ、神に復歸せよ、而して爾曹が來りて取らんことを待てるその特權を獲よ。

然れども、人或は謂はん、余は神を信ぜざるも尙ほ、長年月の間滿足なる生涯を送り來れり。今更新に基督信徒たるを欲せず。余は今の儘にて差支なく暮しつつあれば、特に余が生涯に變化を與ふるの意なしと。オヽ靈魂よ、何時迄汝は斯く推し行くにや。たとひ汝の肉情が一時的の者にて滿足したりとて、汝の勇氣汝の剛情は果して獨り神の正しき審判に抵抗し得べきか。最後に神の前に立つ時、汝は汝が今余に答ふる如く神に答ふるの勇を揮ひ得べきか。記憶せよ、神の子を磔殺せるユダヤ人が立てる後に、基督を無視し從て神の愛を無視せる汝も亦た立つべき者なるを。彼等が二千年前になせる此事を、汝は今日是認しつつあるなり。

之に關する驚くべき不思議は他に非ず。神が幾世紀の久しき準備に準備を加へ、最後に人の形狀を取りてその愛を顯彰し給ひたるに、彼等が遂に之を排斥したることなりとす。『彼れ己の國に來りしにその民之を接けざりき』。如何に彼等

は彼を接けしぞ。彼の贖を排斥する汝等が今日彼を接くる如くに、彼等は彼を接けたるなり。汝等は預言者の子孫に非ずや、契約の子孫に非ずや。さらば汝等は尚一度來りて耳を傾けよ。ペテロは——若し出來得べくば、此の反抗的性情を回復せんとて——ユダヤ人の不信の罪を無知に歸せり。然り慥に其に相違なし。慥にサタンは當時も今日も同じく、凡て罪を犯しつゝある者の眼に帕子を投げ掛けて、彼等をして神が其民に對して有する永遠の愛情を見る能はざらしむ。彼等は神のものなりし。汝等も亦た神のものなり。何物も神の愛が汝等の上に流るゝを妨くるはなし。此の愛や基督の心中に無限の鼓動を生じ、基督の唇上に幾多の波瀾を起しぬ。そは基督を驅つて死に至らしめぬ。そは基督を墓中より甦らしめぬ。そは基督を榮光の中に引上げ、而して之をおのが有として接くる者の義とせられんが爲に永久生くるなり。

そは何をか意味する。そは之を受くる者に對する新生命を意味す。そは單に是迄此の地界に住みし人々が、突然琴あり歌あり白衣ある劇場的天界に移住することのみに非ず、尚數層深き意味を有す。そは罪を愛する諸君を取りて新生命に入れ、此處にて諸君をして罪を憎みて聖潔を愛することを學ばしむるなり。諸君は純潔と正しき思考と高尚なる蹺望を薫することゝならん。そは即ち之を意味するなり。そは諸君の周圍に於てのみならず、諸君の內部にも神の性質とその榮光とを形成す。預言者の子孫よ、契約の子孫よ、諸君が當に屬すべきものに復歸せよ。彼は久しく約束と嗣業とを揭げて人類を待ちたる如く、今も尚ほ諸君を待ちつゝあるなり。

東洋に於ける食事上の風習

神學博士　ジェー、チー、グレーシー

東洋に行はるゝ大接待の一例として、耶蘇の奇

跡の一を擧ぐるは、少しく異常に思はるるならん。然れども、約翰傳第六章一節より十四節に至る光景は――パンを分配して多人數を養ひ給ひし奇跡は――歴然目に睹る如き光景にして、吾人の研究を價するものなり。此の間に當然吾人の疑問を引起すべくして、而かも餘り人々の疑問とならざるものあり。何故に耶蘇は空腹を感じたる群集に食を供するを以て、おのが義務と感じ給ひたるか。吾人は普通之を主の廣大なる愛心に歸して、更にその自然的原因たる社會の狀態を顧みざるを常とす。主に隨從せる群民は少しも主の接待を受くることを預期せざりしか、將た又た主が當然エラキ人々に通例なる接待を與ふべきことを預期したりしか。請ふエヰング牧師の言を聞け、

余は記憶す。一夜テダルの高原にて、種々の群民が諸方より會長の天幕に集合し來るを見たり。彼等は直接彼に對して何等の要求する所なく、彼の所有も此の多數人に供するに餘あるにあらねど、彼等を空しく送り還すが如きは、毛頭彼の念頭に浮び出づべくもあらざりき。蓋し斯かる行爲に出づるは、おのが名聲に大恥辱を印するものなればなり。

エ氏は斯かる接待が耶蘇にも相應なりしことを信ずるに躊躇せず。主は塲合相應の事を行し給へるなり。弟子等も主が接待を言ひ出し給へるに驚きたるに非ず、唯だ彼等の所有の少きことと、群民を飽しむる程の食物を獲べき市邑の遠きことを答へしのみ。東洋人が客を饗應するや、彼等をして十分飽かしむるを禮とす。故に『少しづつ』客に分配するが如きは禮に非ず。若し客にしておのが前に置かれたるものを殘さず食ひ盡す時は、主人は十分供せざりしものとして、自ら非常の恥辱を感ずるを常とす。耶蘇が客として群民を接待し給ふに方り、各人が滿腹して食物の殘餘十二の筐に滿ちし程、十分に與へ給

ひし事實は、此の見解に一層の力を添ふるものなり。主も亦たその後、彼等が此の時に食ひて『飽き』しが故に自己に隨從すと言ひ給へり。馬可も『飽けり』の語を用ゆ。（第六章）又た馬太傳第十四章二十節路加傳第九章十七節を見よ。四福音書とも皆な此の事實を明言す。

吾輩は序に一言せん。主が弟子等に命じて、少しも殘せざるよう殘餘の屑を拾集せしめ給ひしは東洋諸國に行はるる一種の經濟法を敎へ給へるものなり。千八百九十三年十一月モロッコ發の某宣敎師の書に、或る日街頭にて一のアラビヤ人が、食事の爲に與へたるパンの一片を溝に投じたるの故を以て、痛く一のユダヤ人を懲罰するを見たることを載す。同宣敎師は又た、モロッコのアラビヤ人が凡て穀粒（その如何なる形狀を取るに拘らず）を尊重するの事實を報せり。パンの小さき屑もし地上に落つる時は、アラビヤ人は之を拾ひ上げ、之に接吻し、尊敬の表號として之をおのが額にあて、而して後に之を塀の上若くは飛鳥の見易き所に置く。彼等は云ふ、人は神の賜を足下に蹈むべからずと。パンに對する此の尊敬は、凡ての階級——主人にも奴隷にも小供にも——見出さるるなり。

『筐』とは何物なりしか、之を確むるに由なし。想ふに牧羊者が食物を容れて頸に懸くる所の囊なりしならん。旅人は通例斯かる旅囊即ち辨當囊を携ふ。然れども、筐は葡萄園にて葡萄を斂るにも用ゐられ、從て修辭學的に財產を意味するものとなれり。モーゼはイスラエル人に向つて『汝の筐汝の所有』といへり。凡ての野菜及び菓物も、たとへば橄欖の如きは、筐に斂められたりき。又た魚筐もありて、或るものは保羅を入れて屋外に縋下ろせし程大なりき。是等は多分繩にて造られたるならん。普通パレスチナやエヂプトにて用ゆる筐は、樹枝を以て造られたり。此の奇跡の記事と、四千人を養ひ給ひし

記事とに於て、二個の異なれる希臘語は筐に對して用ゐらる。而かも二者の間に大小若くは材料の差あるや否やは明ならざるなり。又此の筐を携帶する一の理由は、彼等が儀式上潔きパンを獲る能はざる所に行く時、食物の不自由を免れんが爲なりき。サマリヤ通行の際などはその一例なるべし。

約翰傳第六章九節によれば、パンは大麥のパンなりしに拘らず、四福音書とも群民が飽き足りしことを明言するは、不思議の事實なり。こは此の記事をして一層力あらしむ。元來大麥は優等の食物に非ず、又た人を飽き足らしむべき者とは思はれざりし、且つそは馬及び驢馬の食と見做されたりき。タルマッドに左の如き問答あり。甲者『此處に豊なる大麥の收獲あり』乙者『行て之を馬及び驢馬に告げよ』。免職されたる羅馬の兵士は、規則上大麥のパンのみを食ふべきものなりし。ヘブル人の間にては、姦淫罪を犯せる婦人は不名譽の表號として、大麥のパンを捧ぐべき筈なりき。(普通のものは小麥のパンを捧ぐ)是れ彼女の行爲を獸類の行爲と見做したるが爲なり。

此の記事に關して尙ほ言ふべき事あり。爰に『小さき魚二つ』とあり。こは此の記事に時と土地とに關する色彩を與へて、そが眞實の歷史的事實なるを証するに力あるものなり。當時ユダヤにて、魚を大小に區別するは普通のことなりし。ペテロは大なる魚に滿てる網を引きしが、主は『小さき魚』を彼等に與へて食せしめ給へり。(約翰傳廿一章九節以下)此の語は『オプサリオン』といひて、乾かされ鹽せられ頭ぐるみ食せらるる魚の總稱にして、和蘭の鹽鯡の如きものなり。タルマッドは又此等の小魚が料理されずに食せらるべきことを許し、且つ衞生的食品として之を用ゆることを勸む。斯くて主に大なる生魚を造るの奇跡を行ふの必要なく、又た若し大魚なら

ば料理の必要を主張する儀禮を重んずる人々を躓かすに及ばざりし。且つ此の小魚は土地の自然と風習に適當す。如何となれば、こはガリラヤ湖に多く產して、幾百萬尾が捕へられ乾かされ鹽せられて、漁村人民の食膳に上りたるものなればなり。

三大聖書辭彙の中に於ける『耶蘇』の項に關して

神學博士　ジェームス、ストーカー

譯者云、最近二三年に於て絕好なるビブリカル、エンサイクロペデア（聖書大辭彙）が續々編纂され出版されたるが、蘇國の博士ストーカー氏は『聖書世界』雜誌に寄書して、三大辭彙中に於ける『耶蘇』に關する批評を公にせり。今ホミレチック、レビウにその大要を揭げあれば、之を譯出することとなしぬ。ストーカー氏が基督傳基督論に就て優に一家をなせることは、既に吾人の熟知する所なり。

第一はチェニー教授編纂の辭彙中にあるブルース博士の文なり。ス氏之に關して曰く、

『ブルース博士の文は全体に消極的調子を帶ぶるの故を以て、博士の友人間に一種の恐慌を引起しぬ。殊に博士はその出版以前に永眠したるが爲に、此の文が遺言の如き姿を以て世に現れたれば彼等に一層の苦痛を與へぬ』ス氏は勿論是等友人の說に全然賛成するものに非ざるを明言せる後ち、曰く『然れども、博士の耶蘇を描寫せるは重にその人間的方面のみにして、彼が人間以上の權威を要求し給ひし言句を引照すること極めて少きは、打消すべからざる事實なり。……此の文に於て最も失望すべき點は、その調子の冷淡なるにあり………』

『此の文は簡にして而かも力ある材源論を以て始まる。此處に著者はおのが二個材源說を取る

ものなるを示し、殊に著者の持說なる馬可傳の重んずべきを繰返せり。それより極狹なる範圍以外に逸出せざるの方針を守りて、共觀福音書に共通なる部分のみを採用すべきことを明言す。故に彼は三書に共通ならざるの故を以て、耶蘇の嬰兒時代兒童時代を一足飛に通過し、奇跡的誕生に關しては一句も言ふ所なし。(斯の如き方法は十分の理由なきものと思はる)而して彼は主の公生涯を四大綱目の下に叙述せり。第一、一般公衆の間に於ける說敎的役務、第二、弟子の間に於ける敎育的役務、第三、醫癒的役務、第四、預言的若くは應急的役務、即ち是なり』スト氏は論結して曰く『之に耶蘇が神に對する關係に就き、耶蘇の死に含まるる意義に就き、殆んど一言も費す所なし。馬太傳第十一章廿五節の大文句は引照されたれども、ヴェントやカイムに見る程の活氣を見ず。ブルース博士は曰く、初代の基督敎徒が耶蘇に就て問ひし所は、第一主は何を敎へ給ひしか、第二主は何を行ひ給ひしか、第三主は何を苦しみ給ひしかにありきと。然れども、當初より人々の心が知らんと欲せし所は、主は何者なりしか、主は何の目的を以て斯世に來り給ひしかにありき。而して疑もなく、基督敎會が發生し永續したる所以は、全く永遠の愛が世の罪を除去せんが爲に、形体を取りて耶蘇となれりとの信仰にありたるなり。』

第二はヘスチングス聖書大辭彙の第二卷にあるサンデー博士の文にして、同辭彙中最も光彩ある項目の一として世の賞讃を博したるものなり。著者は材源論に關して粗なるの外、此題目に就きて十分に叙述せり。彼は耶蘇傳の全方面に言ひ及ぼせり。聖書に對する彼の位地に關してスト氏は曰く、

『サンデー敎授は頑固なるインスピレーション說に束縛さるるものに非ず。故に屢々おのが引用しつつある文句の、不完全なること又は誤れ

ることを承認す。而かも現代批評の一大弊害ともいふべき、聖書の文句を勝手に取捨し、或はその缺點を指摘して喜ぶの風を、少しも示すことなし。彼は聖書に對して多大なる尊敬の念を抱き、その眞實を証し得べき時には非常の滿足を表し、些細の點と雖も之を棄つる時には躊躇逡巡の態度を示す。デリッチ博士が嘗て自國の宗教文學を分類したる如く、信仰的なると不信仰的なるとを區別する一大深淵は、正に此處に存す。我國の神學的著書の中にも、僅に此の區別あるなり』而して獨逸より英國に傳來せる合理的批評に就きて、ス氏は此の名文の短所もその批評的方面にありと謂へり。

第三は獨逸にて出版されたるハウク氏の『プロテスタント神學及教會用の辭彙』中にある、ツオクレル博士の文なり。ス氏は之に關して曰く、『若しブルース博士の文の長所が耶蘇の倫理的教訓を叙述する所にあり、サンデー教授の文の長所が耶蘇傳に關する現代の議論を網羅する所にありとせば、ツオクレル博士の文の長所は、參考となるべき文學を掲げたるにあり。之にて吾人は基督傳全體に就きてもその一部分に就きても、如何なる書を讀むべきかを知り得るなり。而して是れ辭彙の用をなすに最も適當なるものなり。博士は又た基督傳に關する文學の歷史を與へぬ。上は初代より下は昨今に至るまで。詩形にて神的歷史を語りし古代詩人の努力より、現今の無神論者や社會主義者の牽强附會に至るまで。蓋し大陸にては是等の徒が自家の主張を宣傳せんが爲に、斯かる不敬濫用を敢てするものあればなり。之に由りて觀れば、久しきに亘る基督傳の發展中、吾人は目下その批評的科學的研究の時期に際し居るなり。此の時期はシユライエルマヘルやハーゼの著書を以て始まり、而して凡ての著者は二大流派をなす。曰く積極派、曰く消極派、是なり』。

博士は以上二派に於ける諸種の意見を示し、基督傳全體に關する諸說の歷史を掲げ、尙ほその中の要點に關する議論の諸方面を紹介せり。而して第三者たる博士自身の神學意見に關してはス氏曰く、『三大辭彙の論文中、獨逸のものが最も保守的なるは、實に奇妙なる事實なり。獨逸の學界中にも極端なる批評說が少しも切込み能はざる大部分あること、及び英米兩國に行はるる神學的爭論に於て、吾人が極端說の本山と思ひ居るその國より防禦の武具を拉し得べきこととは、必しも近頃世に現れたる此の最大辭彙の新版によりてのみ知れたるに非ざるなり。材源に關する批評の歷史を十分に與ふると同時に、博士自身は四福音書に將た又た同一福音書中の各部に、歷史的價値の差あることを承認せざるなり』。

博士は殊に强く、主の肉体的復活の問題を論じ、又た『現在吾人の有する福音書中よりその基礎たりし使徒的材源を再び構成せんとする』基督傳に關する焦眉の問題を提供せり。博士は最も强く斯かる構成の可能なる事に關する自家の意見を發表せり。レッシュの如き記者等が使徒的材源を構成するに力めたる熱心に就て、ス氏は論結して曰く、

『然れども、吾人は使徒的材源を再び構成せんとすることが、屢全く異なれる動機より出づることを忘るべからず。即ち超自然的分子を全く除去するか、又は出來る丈け之を減少せんと欲する動機より出づること、是なり。此の點よりして、保羅の證言は近き將來に於て益重要なる位地を占むるに至らん。如何となれば、耶蘇の死と福音書著述との間に横はれる空間は、全くの白紙に非ずして第一流の歷史的文書に滿たされ居りて、主の神性を信ずる信仰が一般に普及し一般に承認されしは、全く自身に關する耶蘇自身の證言の反影としてのみ說明さるべければな

り』。

吾人はハウク氏の大辞彙が英語に飜譯されんことを希望す。耶蘇に關して三記者が發表したる説は、彼等及び三大辞彙の異なれる意見を明にするに足るものなり。

